

柳田遺跡

—ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1994・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

巻頭カラー 1



調査 I 区 完掘状況

巻頭カラー 2



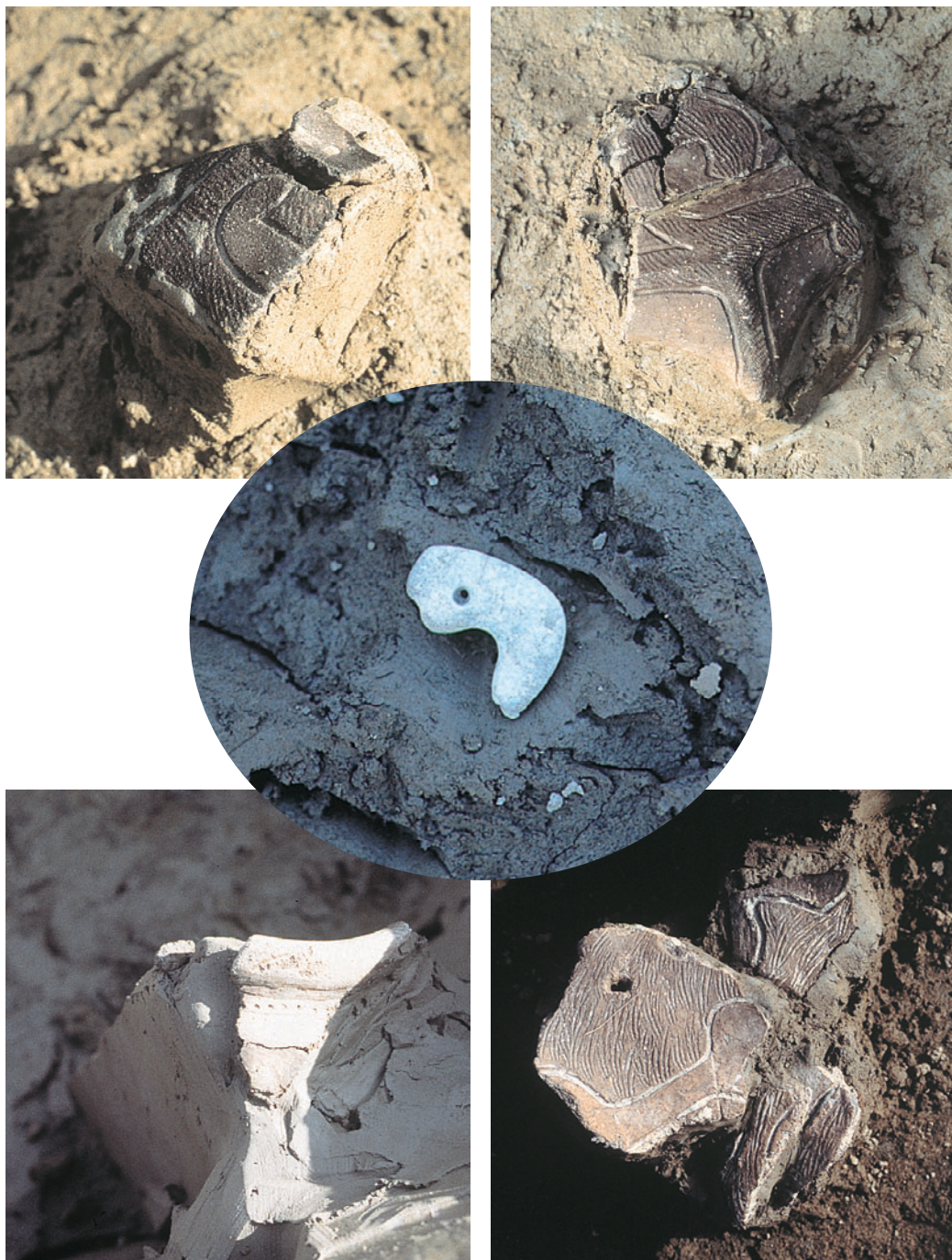
調査 I 区 遺物出土状況

巻頭カラー 3



調査 I 区・II 区 遺物出土状況

巻頭カラー 4



調査Ⅲ区・ⅢJ区 遺物出土状況

序

高知市は、高知県の県都として発展してきましたが、過去へ遡れば江戸時代には土佐藩の城下町として、さらに、中世、戦国時代には、本山氏や長宗我部氏の支配下にあつて、浦戸湾を海運の根拠地として栄えていたものと考えられます。市域では、現在でも道路建設、宅地造成等の各種開発が盛んに行われており、県下でも最も開発が進められています。柳田遺跡が所在する高知市西部の朝倉地区も、当遺跡発見の契機となった国道バイパス土佐道路の建設以降、商業施設や宅地開発が急速に増加しています。

柳田遺跡は土佐道路建設に際して昭和56年に発見されましたが、その後は新たな確認がなく、周辺が開発される中で水田として残されていました。しかし、開発の波は柳田遺跡にも押し寄せ、今回の発掘調査を実施することとなりました。調査の結果、弥生時代の遺跡と考えられていた柳田遺跡は、縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡であり、また、低湿地の遺跡であるところから、多量の木製品の出土があり、貴重な成果を得ることができました。

調査にあたっては、夏から冬へと半年の間に発掘作業員として参加していただいた方々をはじめとし、ご協力をいただいた事業者である株式会社フジ、高知県教育委員会、高知市教育委員会並びに調査指導をいただいた皆様に感謝する次第です。

そして、調査結果をまとめたこの報告書が、今後の考古学研究の一助となり、埋蔵文化財保護を推進する助けとなれば幸いです。

1994年3月

財団法人 高知県文化財団

埋蔵文化財センター

所長 原 雅 彦

報告書要約

1. 遺跡名 柳田遺跡 遺跡番号 010020 遺跡地図番号 No.9-183 No.10-40
2. 所在地 高知県高知市朝倉甲字柳田151-3他
3. 立地 沖積低地 標高約7m
4. 種類 縄文時代後期・晩期 弥生時代前期～中期 後期末～古墳時代前期 散布地
5. 調査主体 財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
6. 調査契機 ショッピングセンター建設による緊急発掘調査
7. 調査期間 試掘調査 平成4年4月14日～5月6日
本調査 平成4年8月3日～12月28日
8. 調査面積 試掘調査 255 m²
本調査 4,555 m²
9. 検出遺構 縄文後期 焼土・炭化物集中部
縄文晩期 土坑・溝
弥生前期～中期 土坑・溝
弥生後期～古墳前期 流路跡
出土遺物 縄文後期・晩期 縄文土器・磨製石斧・勾玉・石鏃等
弥生前期～中期 弥生土器・石鏃・石斧・石包丁・石錐等
弥生後期～古墳前期 弥生土器・土師器・須恵器・木器

10. 内容要約

柳田遺跡の発掘調査では縄文後期・晩期、弥生前期～中期、弥生後期末～古墳前期の各時期の遺構、遺物が検出された。現地は湿田であることから低湿地性の遺跡として古墳時代の木器を中心に良好な状況で遺物の出土が見られた。縄文後期・晩期では包含層が確認され、当該時期における低湿地での遺跡立地が判明した。弥生前期～中期についても再び生活圏として使用されており、竪穴住居跡は確認されていないが、焼土・炭化物・灰層の見られる土坑等が検出され、多量の土器が出土している。弥生後期末～古墳前期においては流路跡が検出され、琴柱、梯子、横槌、縦杵等の木器や建築材が出土し、馬骨等の獣骨も見られる。また、土師器では小型丸底壺、小型器台、甕等が流路中からまとまって出土しており、祭祀の存在が考えられる。

縄文、弥生、古墳の各時代について、今まで不明であった高知市西部の状況を確認できる良好な資料が出土しており、柳田遺跡周辺部における居住域の存在が想定され、特に古墳時代においては流路上流部における集落の確認が重要な課題である。

例 言

1. 本書は、ショッピングセンター建設に伴う柳田遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会及び高知市教育委員会との調整により、事業者である株式会社フジの委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査の期間は平成4年8月3日～12月28日であり、整理作業は現地調査終了後から平成5年度にかけて実施された。
4. 調査区はⅠ区～Ⅵ区の6区であり、発掘調査面積は予備調査も含め4,555㎡であった。
5. 調査区の設定にあたっては任意のグリッドによったが、最終的には公共座標第Ⅳ系の座標に取り付けている。
6. 発掘調査は、平成4年4～5月に遺跡の範囲等を確認するための試掘調査を高知市教育委員会の委託を受け、本調査は株式会社フジの委託を受け行われた。
7. 発掘調査にあたっての調査体制は、現地調査に埋蔵文化財センター調査第2係長森田尚宏・調査員吉成承三・同藤方正治の3名で開始されたが、木器等の予想以上の出土により、後半には調査員松村信博の応援を得て4名が担当した。また調査補助員は武吉眞裕である。
8. 総務は、業務課長山崎浩及び主幹三浦康寛が担当した。
9. 報告書の執筆は、調査区及び時期により分担し、各執筆分担は目次に示した。また、編集は執筆者の協議により、これをまとめた。
10. 遺物の鑑定等にあたっては、次の方々のご協力を頂いた。記して感謝する次第である。
馬骨の鑑定－鹿児島大学獣医学部 西中川駿教授
樹種鑑定－京都科学
また、菊地直樹（高知大学生）には、骨類等の自然遺物の調査について協力を得た。記して感謝する。

11. 現地調査にあたって、発掘作業に携わって頂いた発掘作業員は次のとおりである。猛暑の8月から年末までの間の協力を感謝する。また、作業員の一部については高知市シルバー人材センターからの派遣による。

清岡伴浩・小松木義・島井博志・岡田稔夫・今村重臣・井上郁雄・成岡慶章
小松秀彰・畑中繁雄・島津忠利・吉岡重俊・森本徳雄・森本清好・池田久利
古田三郎・谷岡正章・青屋義教・多田精介・川田俊作・小松栄一・窪添早男
芝村和天・戎井龍史・菊地直樹・大川司・石川功・尾崎薫・桑尾驍・中川涉
寺村治・横田喬・山本一美・中田鶴千代・永田美津子・溝渕明美・島井周子
島井澄子・森岡亜依子・上村和華・川崎富士子・松本照子・小松好・中川富子
井上利美・越地夏子・島津儂仔加・松本ひろこ・小串英子・北村時美・森本千代子
岡本律子・戸田雪枝・古田周子・青屋力

12. 整理作業にあたっては、次の整理作業員に携わって頂いた。記して感謝する。

福留美佳・中村容子・向井知佳・森岡亜依子・松山真澄・岩貞泰代・菊地直樹
山中美代子・宮地佐枝・浜田雅代・宮本幸子・戎井龍史・松木富子・山本裕美子
入野千代子・内村富紀・岡宗真紀・川井由香・楠瀬憲子・久万公子・小松経子
中西純子・前田玲子・元吉ゆみ子・矢野雅

13. また、発掘調査と整理作業については、埋蔵文化財センターの調査員及び整理作業員の方々に協力を得た。記して感謝する。

14. 遺物実測図については、原則として土器は1/3及び1/4に、石器は1/1及び1/2に、木器は1/4を基本としたが、一部の遺物はこの限りではない。

15. 各調査区のセクション図については長大な土層が多いため、縦横の縮尺比率を変倍としている。

16. 調査における調査略号は92-1K Yとして、遺物注記もこれに準じている。

本文目次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯（森田）	1
第2節 調査の経過（森田）	3
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境（藤方）	5
第2節 歴史的環境（藤方）	7
第Ⅲ章 調査方法	
第1節 試掘調査（森田）	11
第2節 本調査（森田）	15
第Ⅳ章 調査成果	
第1節 I区（吉成）	19
第2節 II区	
〔1〕 IIJ区（松村）	47
〔2〕 II区（藤方）	63
第3節 III区	
〔1〕 IIIJ区（藤方）	145
〔2〕 III区（藤方）	163
第4節 IV区（吉成）	187
第5節 V区（吉成）	200
第6節 VI区（吉成）	217
第Ⅴ章 まとめ（森田）	226
付 編 出土馬骨について（西中川駿）	231

挿 図 目 次

Fig.1 柳田遺跡位置図	1	Fig.36 調査ⅡJ区出土縄文土器実測図 (3)	59
Fig.2 高知平野東部の地形分類図	6	Fig.37 調査ⅡJ区出土縄文土器実測図 (4)	60
Fig.3 周辺遺跡位置図	8	Fig.38 調査Ⅱ区全体図	63
Fig.4 試掘トレンチセクション柱状図・設定図	12	Fig.39 調査Ⅱ区西壁セクション図	64
Fig.5 TR-C 遺物出土状態	13	Fig.40 調査Ⅱ区遺構平面図1	68
Fig.6 試掘トレンチ出土遺物	14	Fig.41 調査Ⅱ区遺構平面図2	69
Fig.7 予備調査トレンチ・本調査区設定図	15	Fig.42 調査Ⅱ区遺構平面図3	70
Fig.8 調査区グリッド設定図	17	Fig.43 調査Ⅱ区遺構平面図4	71
Fig.9 調査Ⅰ区全体図	19	Fig.44 調査Ⅱ区遺構平面図5	73
Fig.10 調査Ⅰ区下層南北トレンチセクション図 (東壁)	20	Fig.45 調査Ⅱ区遺構平面図6	74
Fig.11 調査Ⅰ区SR101西壁セクション及び東西バンク (Gライン) セクション図	22	Fig.46 調査Ⅱ区遺構平面図7	75
Fig.12 調査Ⅰ区E-3グリッド周辺上層 (4層) 木製品出土状況図	24	Fig.47 調査Ⅱ区遺構平面図8	76
Fig.13 調査Ⅰ区E-3グリッド須恵器甕エレベーション	25	Fig.48 調査Ⅱ区遺構平面図9	77
Fig.14 調査Ⅰ区SR101床面SD1・SD2及び杭列遺構図	26	Fig.49 調査Ⅱ区遺構平面図10	78
Fig.15 調査Ⅰ区SR101出土彩紋土器	27	Fig.50 調査Ⅱ区遺構平面図11	79
Fig.16 調査Ⅰ区壺1 (弥生時代前期末～中期初)・甕1 (No.14)	32	Fig.51 調査Ⅱ区遺構平面図12	80
Fig.17 調査Ⅰ区壺2 (弥生時代後期末～古墳時代初頭)	33	Fig.52 調査Ⅱ区遺構平面図13	81
Fig.18 調査Ⅰ区甕2 (弥生時代後期末～古墳時代初頭)	34	Fig.53 調査Ⅱ区遺構平面図14	82
Fig.19 調査Ⅰ区甕・底部	35	Fig.54 調査Ⅱ区遺構平面図15	83
Fig.20 調査Ⅰ区甌・鉢・高坏	36	Fig.55 調査Ⅱ区遺構平面図16	84
Fig.21 調査Ⅰ区須恵器壺	37	Fig.56 調査Ⅱ区遺構平面図17	85
Fig.22 調査Ⅰ区竪杵・横槌・臼	38	Fig.57 調査Ⅱ区遺構平面図18	86
Fig.23 調査Ⅰ区横槌・台状木器・鍬	39	Fig.58 調査Ⅱ区遺構平面図19	87
Fig.24 調査Ⅰ区琴柱・部材	40	Fig.59 調査Ⅱ区遺構平面図20	88
Fig.25 調査Ⅰ区梯子・槽・鍬	41	Fig.60 調査Ⅱ区出土遺物実測図1	89
Fig.26 調査Ⅱ区全体のグリッドとⅡJ区位置図	47	Fig.61 調査Ⅱ区出土遺物実測図2	90
Fig.27 調査ⅡJ区東西端セクション (南北方向)	48	Fig.62 調査Ⅱ区出土遺物実測図3	91
Fig.28 調査ⅡJ区北端セクション (東西方向)	49	Fig.63 調査Ⅱ区出土遺物実測図4	92
Fig.29 調査ⅡJ区SR208遺物出土状況平面図及び完掘状況平面・エレベーション図	50	Fig.64 調査Ⅱ区出土遺物実測図5	93
Fig.30 調査ⅡJ区P1平面・断面図	51	Fig.65 調査Ⅱ区出土遺物実測図6	94
Fig.31 調査ⅡJ区SX1平面図	51	Fig.66 調査Ⅱ区出土遺物実測図7	95
Fig.32 調査ⅡJ区包含層 (J-I～Ⅱ層) 流木・縄文土器出土状況	52	Fig.67 調査Ⅱ区出土遺物実測図8	96
Fig.33 調査ⅡJ区縄文土器出土地点	53	Fig.68 調査Ⅱ区出土遺物実測図9	97
Fig.34 調査ⅡJ区出土縄文土器実測図 (1)	57	Fig.69 調査Ⅱ区出土遺物実測図10	98
Fig.35 調査ⅡJ区出土縄文土器実測図 (2)	58	Fig.70 調査Ⅱ区出土遺物実測図11	99
		Fig.71 調査Ⅱ区出土遺物実測図12	100
		Fig.72 調査Ⅱ区出土遺物実測図13	101
		Fig.73 調査Ⅱ区出土遺物実測図14	102
		Fig.74 調査Ⅱ区出土遺物実測図15	103
		Fig.75 調査Ⅱ区出土遺物実測図16	104
		Fig.76 調査Ⅱ区出土遺物実測図17	105
		Fig.77 調査Ⅱ区出土遺物実測図18	106
		Fig.78 調査Ⅱ区包含層遺物分布図	108
		Fig.79 調査Ⅱ区出土遺物実測図19	110
		Fig.80 調査Ⅱ区出土遺物実測図20	111
		Fig.81 調査Ⅱ区出土遺物実測図21	112

Fig.82 調査Ⅱ区出土遺物実測図22	113	Fig.114 調査Ⅲ区出土遺物実測図3	170
Fig.83 調査Ⅱ区出土遺物実測図23	114	Fig.115 調査Ⅲ区包含層遺物分布図	171
Fig.84 調査Ⅱ区出土遺物実測図24	115	Fig.116 調査Ⅲ区出土遺物実測図4	172
Fig.85 調査Ⅱ区SR2出土状況図1	116	Fig.117 調査Ⅲ区出土遺物実測図5	173
Fig.86 調査Ⅱ区SR2出土状況図2	118	Fig.118 調査Ⅲ区出土遺物実測図6	174
Fig.87 調査Ⅱ区出土遺物実測図25	120	Fig.119 調査Ⅲ区出土遺物実測図7	175
Fig.88 調査Ⅱ区出土遺物実測図26	121	Fig.120 調査Ⅲ区出土遺物実測図8	176
Fig.89 調査Ⅱ区出土遺物実測図27	122	Fig.121 調査Ⅲ区出土遺物実測図9	177
Fig.90 調査Ⅱ区出土遺物実測図28	123	Fig.122 調査Ⅲ区出土遺物実測図10	178
Fig.91 調査Ⅱ区出土遺物実測図29	124	Fig.123 調査Ⅳ区全体図	187
Fig.92 調査Ⅱ区出土遺物実測図30	125	Fig.124 調査Ⅳ区東壁セクション・SR401東壁・西壁セクション図	188
Fig.93 調査Ⅱ区出土遺物実測図31	126	Fig.125 調査Ⅳ区南部包含層遺物出土状況図190	190
Fig.94 調査Ⅱ区出土遺物実測図32	127	Fig.126 調査Ⅳ区SK1・SD1遺物出土状況図	192
Fig.95 調査ⅢJ区全体図	145	Fig.127 調査Ⅳ区壺（弥生時代前期末～中期初頭）	195
Fig.96 調査Ⅲ区全体図	146	Fig.128 調査Ⅳ区甕（弥生時代前期末～中期初頭）	196
Fig.97 調査ⅢJ区・Ⅲ区東壁セクション図	148	Fig.129 調査Ⅳ区壺・鉢（弥生時代前期末～中期初頭）・SR401出土遺物	197
Fig.98 調査ⅢJ区出土遺物分布図1	151	Fig.130 調査Ⅴ区全体図	200
Fig.99 調査ⅢJ区出土遺物実測図1	153	Fig.131 調査Ⅴ区東壁セクション・A・Bトレンチ（東壁）セクション	201
Fig.100 調査ⅢJ区出土遺物実測図2	154	Fig.132 調査Ⅴ区南部遺物出土状況図	204
Fig.101 調査ⅢJ区出土遺物実測図3	155	Fig.133 調査Ⅴ区SR501出土木器	205
Fig.102 調査ⅢJ区出土遺物実測図4	156	Fig.134 調査Ⅴ区壺	208
Fig.103 調査ⅢJ区出土遺物実測図5	157	Fig.135 調査Ⅴ区甕	209
Fig.104 調査ⅢJ区出土遺物実測図6	158	Fig.136 調査Ⅴ区甕・底部・土製支脚	210
Fig.105 調査ⅢJ区出土遺物実測図7	159	Fig.137 調査Ⅴ区小形器種・鉢・高坏	210
Fig.106 調査ⅢJ区出土遺物分布図2	160	Fig.138 調査Ⅵ区全体図	218
Fig.107 調査ⅢJ区出土遺物実測図8	161	Fig.139 調査Ⅵ区セクション図	219
Fig.108 調査ⅢJ区出土遺物実測図9	162	Fig.140 調査Ⅵ区SR601出土遺物1	222
Fig.109 調査Ⅲ区南壁・中央ベルトセクション図	164	Fig.141 調査Ⅵ区SR601出土遺物2	223
Fig.110 調査Ⅲ区出土遺物実測図1	165	Fig.142 柳田遺跡遺構・流路全体図	230
Fig.111 調査Ⅲ区出土遺物実測図2	166		
Fig.112 調査Ⅲ区出土遺物遺構平面図	168		
Fig.113 調査Ⅲ区遺構セクション図・エレベーション図	169		

表 目 次

Tab.1 調査Ⅰ区遺物観察表1～5	42	Tab.6 調査Ⅲ区遺構計測表	179
Tab.2 調査ⅡJ区縄文土器分類表	54	Tab.7 調査ⅢJ区・Ⅲ区遺物観察表1～7	180
Tab.3 調査ⅡJ区遺物（縄文土器）観察表1～2	61	Tab.8 調査Ⅳ区遺物観察表1～2	198
Tab.4 調査Ⅱ区遺構計測表1～4	128	Tab.9 調査Ⅴ区遺物観察表1～5	212
Tab.5 調査Ⅱ区遺物観察表1～13	123	Tab.10 調査Ⅵ区遺物観察表1～2	224

写真図版目次

- 巻頭カラー1 調査Ⅰ区完掘状況
- 巻頭カラー2 調査Ⅰ区遺物出土状況
- 巻頭カラー3 調査Ⅰ区・Ⅱ区遺物出土状況
- 巻頭カラー4 調査Ⅲ区・ⅢJ区遺物出土状況
- PL1 調査Ⅰ区全景（北より）
調査Ⅰ区SR101H-9グリッド土器出土状況（南より）
- PL2 調査Ⅱ区調査状況
調査Ⅱ区西壁
- PL3 調査Ⅲ区東壁北部
調査Ⅲ区東壁南部
- PL4 調査Ⅵ区SR601完掘状況（西より）
調査Ⅵ区SR601木器出土状況（西より）
- PL5 調査Ⅰ区SR101遺物出土状況
- PL6 調査ⅡJ区遺物出土状況他
- PL7 調査Ⅱ区遺物出土状況他1
- PL8 調査Ⅱ区遺物出土状況他2
- PL9 調査Ⅱ区遺物出土状況他3
- PL10 調査ⅢJ区遺物出土状況他
- PL11 調査Ⅲ区遺物出土状況他
- PL12 調査Ⅳ区遺物出土状況他
- PL13 調査Ⅴ区遺物出土状況他
- PL14 調査Ⅵ区遺物出土状況他
- PL15 調査Ⅰ区SR101出土遺物1
- PL16 調査Ⅰ区SR101出土遺物2
- PL17 調査Ⅰ区（SR101）Ⅴ区出土木製品
- PL18 調査ⅡJ区出土遺物（縄文晩期）
- PL19 調査Ⅱ区出土遺物1
- PL20 調査Ⅱ区出土遺物2
- PL21 調査Ⅱ区出土遺物3
- PL22 調査Ⅴ区SR501出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

柳田遺跡は、1981(昭和56)年に高知市の西部、朝倉地区において発見された遺跡である。遺跡の名称は発見地の字名により柳田遺跡と命名され、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録された。遺跡発見の経緯は、国道56号線のバイパスとして計画された土佐道路建設に伴う水路整備工事中の発見であり、柳田遺跡発見以前には、周辺の水田部分における周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかった。現地は標高約7mほどの水田地帯であり、特に土佐道路周辺の水田は相当の湿田であった。人家等は山裾部に散在するのみであり、遺跡の周辺部はすべて湿田地帯であった。

遺跡は、水路工事の掘削中に地表下約2mから発見されており、厚さ約10cmの遺物包含層が確認されている。発見された遺物には、弥生時代前期後半の大篠式の壺、甕等の土器片30点とともに太形蛤刃石斧2点がみられ、土器片の摩耗もほとんどなく、他の時期の遺物の混入もないことから、二次堆積や流れ込みではなく、純粋な弥生時代前期の遺物包含層と考えられた。しかし、工事中の発見でもあることから遺物出土地点は限られており、この時点における柳田遺跡の範囲は、遺物の出土地点のみであり、遺跡の広がりや全体的な内容については、当然ながら不明であった。しかしながら、高知市内においては唯一の弥生時代前期の遺跡であることからして、高知平野の弥生文化、さらには県下の弥生文化研究における重要な遺跡として確認されていた。(註1)

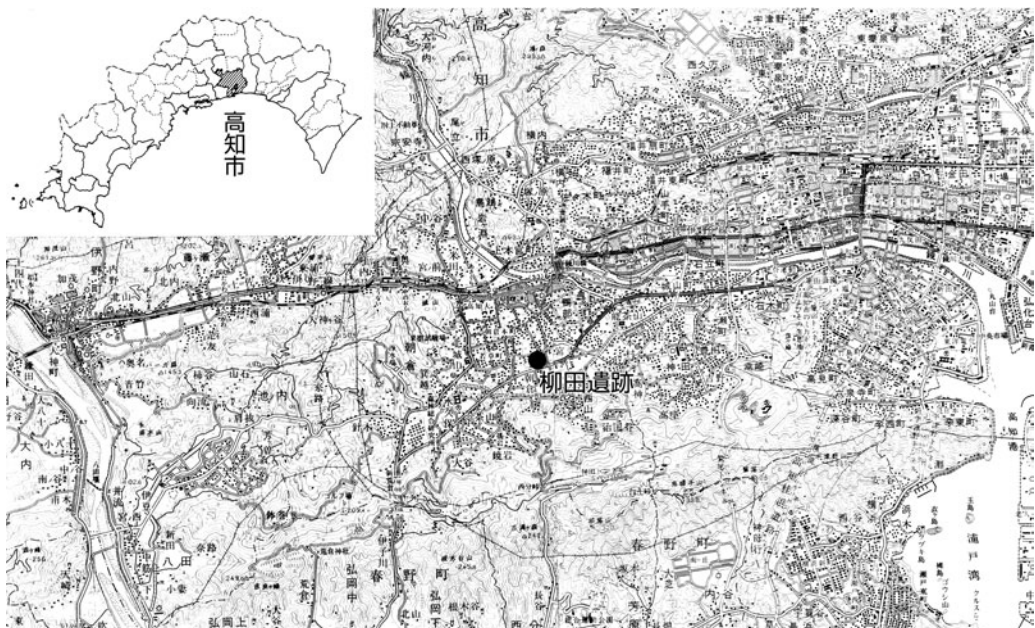


Fig.1 柳田遺跡位置図

柳田遺跡発見の後は、完成した土佐道路を中心として周辺部の開発が進み、遺跡発見当初の水田が広がる風景は急速に変化していった。柳田遺跡付近においても、土佐道路に面して店舗等の建設が進められていたが、当遺跡が工事中の発見であり出土地点のみを遺跡の範囲として周知していたことから周辺地域の状況が確認されず、また遺物包含層が地表下約2mと深いことと相まって、これらの開発による遺跡所在の有無、その影響についての確認は極めて困難な状況であった。

しかしながら、1991(平成3)年になると、柳田遺跡の所在地である水田の開発計画が具体化し、進められることとなった。開発計画は、株式会社フジによる大型のショッピングセンター「フジグラン高知」の建設であり、その開発面積は建物本体及び周辺施設・駐車場等を含めると約16,000㎡に及ぶものであった。開発対象地は、南北を土佐道路と北の市道との間約100m、東西は遺跡の所在地を東限として市道から西へ約160mの範囲であり、これまでの土佐道路周辺の開発では最大規模の計画であった。この計画に基づく事業者からの開発申請にあたって、高知市教育委員会に遺跡の所在についての照会が行われ、当該計画地内に柳田遺跡が存在することが確認されたが、先にも述べたようにこの時点においても柳田遺跡の範囲等については十分な情報がなく、その取り扱いについての協議が必要となった。これを受けて、原因者である株式会社フジと高知市教育委員会並びに高知県教育委員会の三者により1992(平成4)年3月13日に協議が行われた。この結果、開発対象範囲における柳田遺跡の広がり及び遺構、遺物の遺存状況をまず確認することにより、開発計画との調整を図ることとなった。そのための確認調査については、埋蔵文化財保護の立場から国庫補助事業として高知市教育委員会が調査主体となって行うこととなり、現地の調査は高知市の委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施することとなった。

確認調査は1992(平成4)年の4～5月にかけて行われた。調査の結果、弥生時代前期～中期の遺物包含層及び土坑と弥生時代後期末～古墳時代の流路等が検出され、遺構、遺物も開発予定範囲に及ぶ広範囲な広がりを持つことが確認された。この結果を受けて、再度協議が行われ、遺構、遺物の分布密度の高い部分について、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。この本調査については、県教育委員会の指導のもとに原因者である(株)フジの委託を受け、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施された。

註1 遺跡発見時の出土遺物については、出原恵三により「高知市柳田遺跡について」土佐史談第171号(昭和61年)で報告されている。土佐道路の本体工事自体では遺物出土は確認されておらず、付帯工事である用水整備工事での遺物出土であるが、調査中の聞き取りでは道路本体の掘削土の中にも土器片が混在していたとの情報があり、遺跡は土佐道路を含めた範囲に広がっていると考えられた。

第2節 調査の経過

柳田遺跡の調査は、先述のとおり遺跡の範囲等の確認調査から開始された。調査は高知市教育委員会が主体となり、(財)高知県文化財埋蔵文化財センターが委託を受け実施された。

調査実施にあたっては、4月時点で現地に立ち入り可能な2ヶ所の範囲を対象とし、幅4mのトレンチにより着手した。最終的には、東側部分にA～C、西側部分にD～Fの7ヶ所のトレンチを設定することとなり、調査結果としては、Bトレンチ及びE2・Fトレンチにおいて古墳時代の流路、Cトレンチでは弥生時代前～中期の包含層を確認し、開発対象範囲の東南部に良好な弥生時代の遺物包含層、西北部から東南部にかけては古墳時代の流路が確認された。

試掘調査の結果を受けて、県教育委員会及び高知市教育委員会の間で今後の取り扱いについて調整が行われた。やはり柳田遺跡は高知平野における良好且つ重要な遺跡と考えられ、ショッピングセンター建設によって破壊される部分があるならば、工事に先立つ発掘調査の必要性が確認された。このような状況の中で、まず株式会社フジとの間で柳田遺跡の取り扱いと緊急発掘調査に関して協議がもたれた。協議の結果、柳田遺跡の記録保存のための緊急発掘調査の実施については原因者負担も含め基本的な合意を得たが、調査範囲及び期間そして調査経費については、さらに協議を進め、最終的には1992(平成4)年7月1日付けで株式会社フジと(財)高知県文化財団の間において埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結され、以後、発掘調査作業に着手した。

当初の調査計画では、7月から10月にかけての現地調査を行った後に整理作業に着手し、報告書の作成・刊行は1993(平成5)年8月を予定していたが、実際に発掘調査が進行するにつれ、弥生時代の遺物包含層の範囲が広がり、さらに当初は想定していなかった縄文時代後期と晩期の遺構、遺物も検出され、古墳時代の流路からは多量の木製品の出土もあり、現地の発掘調査が最終的に終了したのは12月28日であった。また、調査中においても未契約の土地が残っており、この部分についても契約締結後の12月段階において調査が行われ、当初計画からすれば大幅な計画変更を余儀なくされた。

発掘調査はⅠ区から着手し、以降部分的に並行しながらⅡ区～Ⅵ区の調査が行われたが、各調査区を設定する前段階として、試掘調査では状況が判明しなかった部分について予備調査を行うこととなった。予備調査はⅠ区の北側及びⅢ区部分、Ⅴ区の西側部分に幅4mのトレンチを設定し行った結果、Ⅰ区北側及びⅤ区西側部分では遺構、遺物が確認されなかったため調査対象外とし、Ⅲ区部分を本調査範囲とした。



Ⅱ区の調査状況



現地説明会の状況

I区では古墳時代の流路が検出され、琴柱、梯子等の多数の木器が出土したが、最下層では弥生前期の遺物も確認されている。I区の調査終了後、排土処理のためI区の埋め戻しを行いII区の調査が開始された。II区では北半部にI区から続く古墳時代の流路が検出され、やはり多量の木製品とともに馬骨等もまとめて出土した。南半部では弥生前期から中期にかけての遺物包含層の調査が行われ、

特に調査区の南壁周辺では、埋土が炭化物や焼土、灰層が互層となった土坑が集中的に検出され、埋土中には骨片なども含まれていた。また、II区の調査区西壁において弥生前期の包含層の下から突帯文土器が出土したことから下層の調査を行ったところ、縄文晩期の包含層が検出され、晩期の調査範囲をIIJ区として調査が行われた。III区では予備調査の結果、縄文後期の遺物包含層が確認された北側部分をIIIJ区として調査が行われ、南側部分についてはIII区としてII区に続く流路の調査が行われた。またIII区では南端部において縄文後期及び晩期の遺物も部分的ではあるが出土している。IV区は、II区の東端部において弥生前期の包含層が落ち込みつつ東へ延びていることから、その範囲の延長を確認するために設定された調査区であり、南半部において弥生包含層の調査が行われると同時に北半部ではI区から続く流路が確認されている。V区は試掘調査によって古墳時代の流路が確認された調査区であり、流路堆積中から土師器等がまとめて出土している。VI区は予備調査のトレンチを北部と南部において部分的に拡張した調査区であり、VI区の北部分では古墳時代の流路上面において木器が出土しているが、南部分ではV区と同様に流路堆積中から土師器等の出土が見られた。

以上のように調査経過としては遺物の出土量の多さと調査期間に追われた感があり、部分的な調査区の連続となったが、全体的な状況から見れば、縄文時代後期の包含層の広がりにはIIIJ区を中心としてIII区の南にも一部広がっていることが確認された。次に縄文時代晩期についてはII区南半部の下層とIII区南半部の一部に包含層が検出された。次に弥生時代前期後半から中期初頭にかけてはII区の南半部からIV区南半部に確認されており、良好な土坑群が伴っている。古墳時代では流路が各調査において確認され、基本的には北西より南東方向へ蛇行する流路の一部と考えられ、木製品をはじめとして土師器、須恵器の出土により当該時期の集落が周辺部に存在する可能性が高いと考えられた。

調査期間中には、広報・普及活動の一環として、I区の調査で出土した木器等について埋め戻し前の9月21日に記者発表を行い、11月19日には調査全体の記者発表、11月22日には現地説明会を行った。現地説明会には約300名の参加者があり、高知市における弥生時代遺跡の本格的調査の内容に深い関心が寄せられ、高知市長による遺跡視察も行われた。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

柳田遺跡の位置する高知平野(ここでは狭義の高知平野)は、北部の小坂峠から鴻ノ森を結ぶ小起伏山系と南部の宇津野山から根木谷山を通る小起伏山系によって挟まれた、東西に延びる地溝状盆地である。現在の高知平野は沖積層によって広く覆われているが、基盤地質は東西に延びる秩父帯中帯と南帯に属する地層であり、中帯と南帯は神原谷・岩改構造線に、南帯とその南の四万十帯北帯とは、仏像構造線によって隔されている。更新世は地質的に変化の激しい時期であり、これは人類の発生と進化に深く関わっている。また気候上の変化も著しく、ギュンツ・ミンデル・リス・ヴェルム等の水期と間水期、そして幾つかの亜水期や亜間水期を経験した時期でもある。この最終氷期における気温の冷涼化は海水面の低下を招き、河川による下刻作用を増大させた。最終氷期最盛期の海水面は現海水面より約140m下に在ったとされており、現在の大陸棚の縁辺に当時の汀線は位置したものと考えられている。高知平野が現在形成されている部分においても旧鏡川や旧国分川などによる深い谷が存在する。これは更新世に形成された愛宕面・追手筋面・下知面(沖積層基底礫層)が存在し、これらの上に沖積層が不整合に載ることから明かであり、遺跡域では標高-5~-10mにこれらの面が存在する。

約18,000年前とされる最終氷期の最盛期から序々に海水面は上昇するが、一様ではなく幾度かの海進と海退を繰り返している。このなかで深く刻まれた谷はやがて溺れ谷となって行く。約6,400年前(縄文早期末~前期)には海水面の上昇は最大となる。(縄文海進と呼ばれるこの時期は現在の海水面より2~4m高いものと考えられている。)海水面は後にやや低下し小さな変動を繰り返して現在に至る。このなかで弥生中・後期においてはそれまでの相対的な海面低下を伴う比較的安定した気候から、温暖化に伴う海面の上昇と河川堆積の活発化が窺える。

鏡川は北部の山間部を源に発し西進のち南下するが、高知平野に注ぎ込む直前(高知市尾立付近では)には壮年谷の様相を呈している。柳田遺跡域の北には鏡川の形成する扇状地が広がっているが、この扇状地は典型的な半円状の形態は示さず、やや東へ突出する。扇状地部分は現在河道を堤防によって固定されており東側扇側部を流れているが、かつては河道を幾度か変更して網状に発達した旧河道を遺していったものと考えられる。柳田遺跡域では明確な扇状地地形を留めず、自然堤防帯としての様相を呈している。また、最近までこの地域が水田として利用されていたものの湿田が多く排水も困難な状態であったとされることから、扇状地西部を通過した流路が、南側の山系によってその進路を阻まれ、東行する流れの通り道であったものと考えられる。加えて、ここは西の丘陵部に端を発する神田川や南からの小河川が、浦戸湾方向に流れる為の河道でもあり、これらの流れは前述した鏡川扇状地の東側張り出し部に形成された微高地によって全面を遮られた時期もあったであろう。

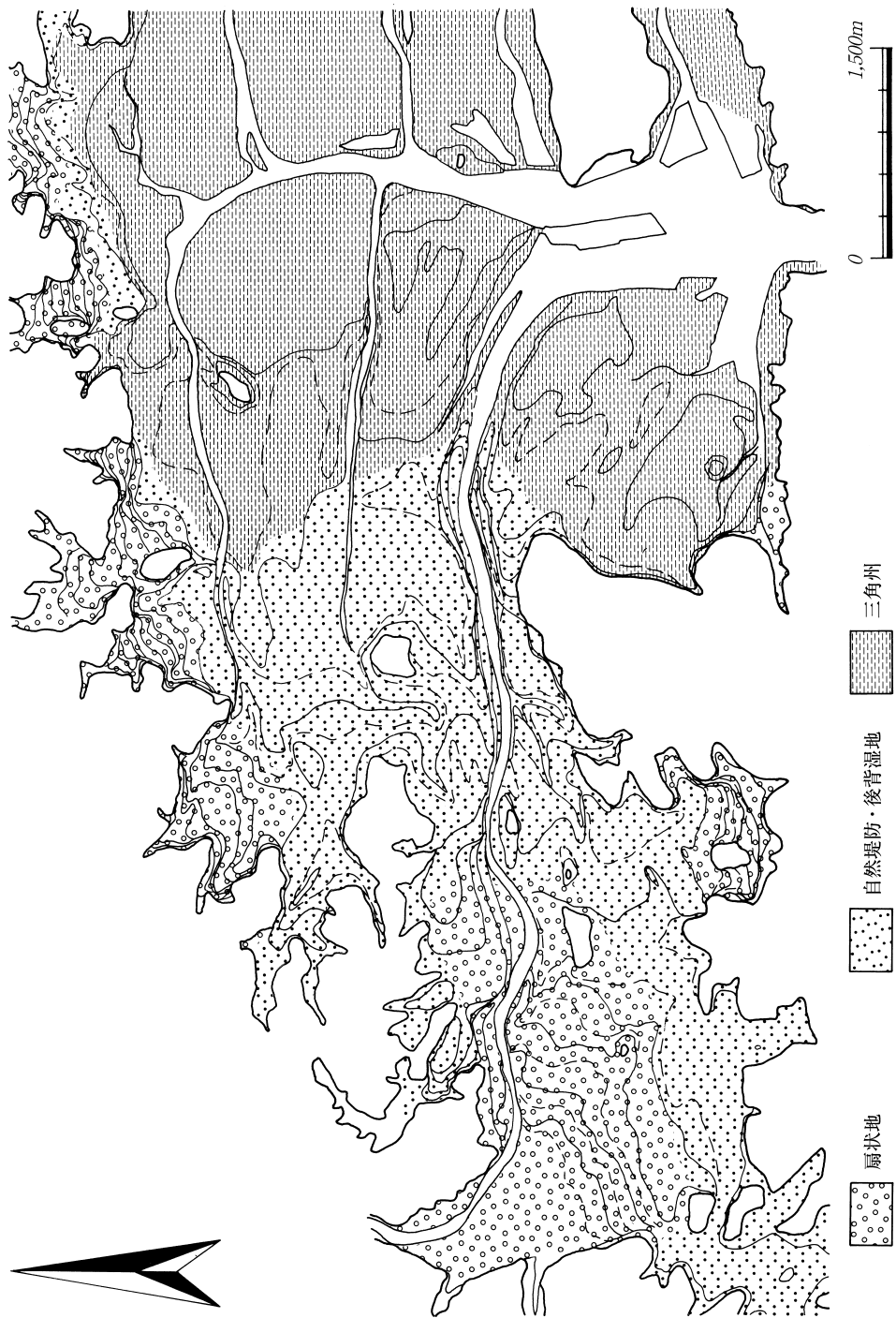


Fig. 2 高知平野東部の地形分類図 (S : 1/50000)

参考文献

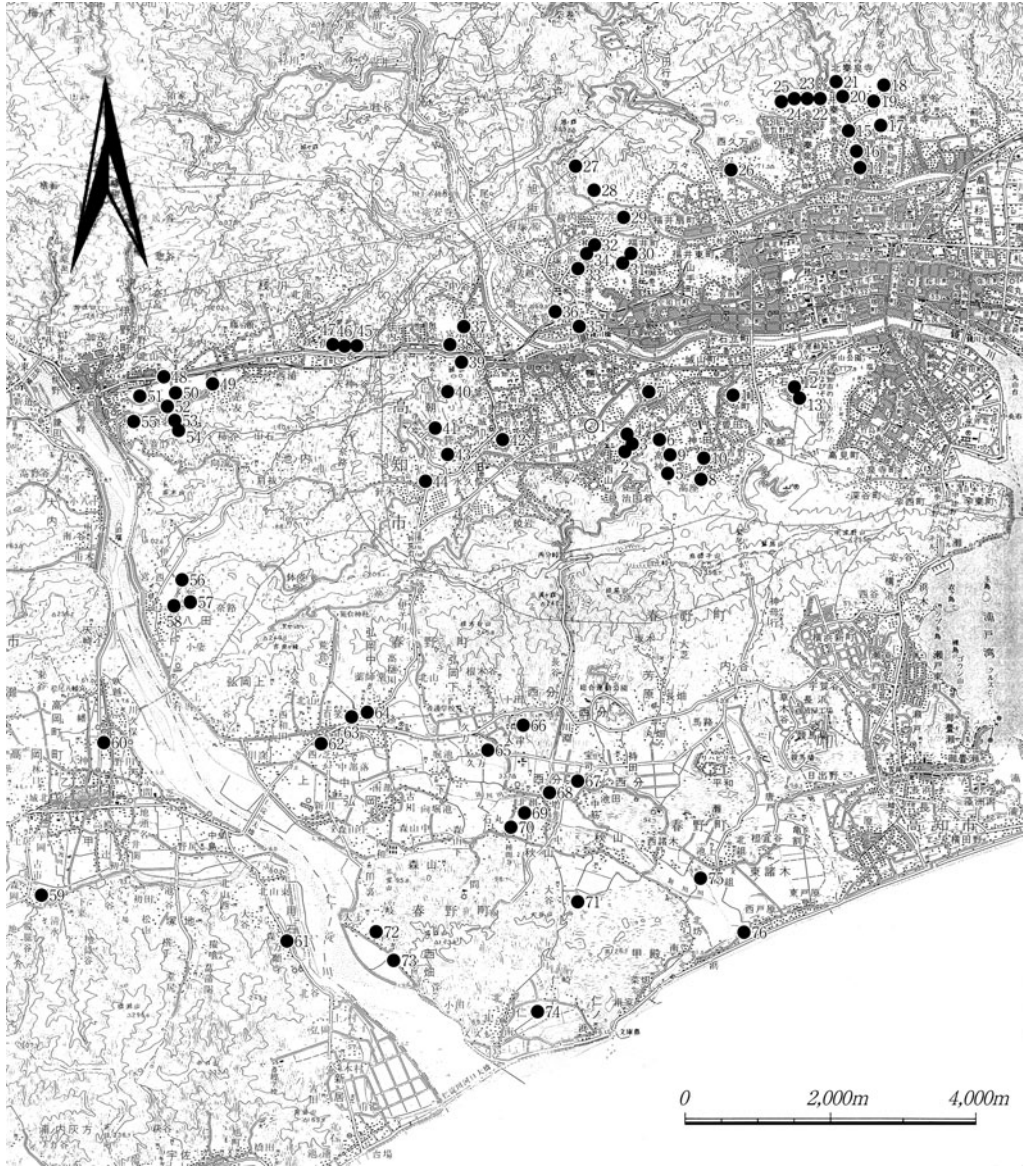
- 『高知県地盤図』1992年 西和彦 他 高知県建築設計基準協会
 「石津川流域平野の地形環境分析 小阪遺跡の地形環境と土地利用」 『小阪遺跡』1992年 高橋学 (財)大阪文化財センター 大阪府教育委員会
 『河川工学』1992年 大矢雅彦 他 鹿島出版会
 『日本の扇状地』1988年 斎藤享治 古今書院
 『新版 自然環境の生い立ち 第四紀と現在』1993年 梅津正倫 他 朝倉書店
 『沖積平野』1989年 井関弘太郎 東京大学出版会

第2節 歴史的環境

縄文時代の遺跡としては柳田遺跡(1)の北東方に正蓮寺不動堂前遺跡が存在する。ここからは中期初頭の舟元Ⅰ式土器や礫石錘、後・晩期の条痕文土器や磨研土器が出土している。西方に存在する仁淀川水系には、上黒岩岩陰遺跡、不動ヶ岩洞穴遺跡、城ノ台洞穴遺跡など縄文草創期、早期の遺跡が上・中流域に所存在している。この下流域左岸には縄文前期土器が見つかった伊野町塔の内地区や盗田地区、後期土器や定角式石斧が見つかった大デキ遺跡(50)が支流宇治川沿いに、またバーガ森北斜面には奥名遺跡(53)が存在し、後期初頭の中津式土器が出土した野田遺跡(60)は右岸に存在する。仁淀川旧河道の自然堤防上に立地する西分増井遺跡(67)では、後期中葉から後葉にかけての集落の一部と考えられる土坑9基と柱穴19個が検出されている。出土遺物の特徴は、土器としての縄文地土器と石器としての石鏃の多さにある。仁淀川右岸に存在する倉岡遺跡(59)では、縄文晩期の滋賀里Ⅲb式土器、滋賀里Ⅳ式土器とそれぞれ併行関係にある倉岡Ⅰ式土器及びⅡ式土器が出土している。この倉岡Ⅱ式土器は口縁端部と口縁下の凸帯に刻み目を施した晩期後半の土器であるが、ここでは夜白Ⅰ式の浅鉢形土器を伴って出土している。

弥生時代における仁淀川下流域の母村的集落として発達するのは、旧河道の自然堤防上に存在する山根遺跡(69)である。調査の結果ここでは縄文終末そして弥生初頭の凸帯紋土器の時期から幾たびか洪水を受けながらも後期前半まで集落として存続したものと考えられている。前期末にこの遺跡から分村した集落には後田遺跡(63)、野田遺跡(60)、柳田遺跡(1)などがあると考えられているが、これらの多くは中期初頭には姿を消すものと考えられている。山根遺跡に隣接して存在する西分増井遺跡(67)では、前期後半の竪穴住居3棟と土坑16基が検出されている。銅製品の出土は岩瀧の鼻遺跡(56)から朝鮮製の瀬戸内的な二次加工を施した細形銅剣が、天神溝田遺跡(55)では中細銅剣と中広銅戈が出土している。また、フケ遺跡(72)と波介万法寺遺跡から中広形銅矛が出土している。

柳田遺跡の北西方には朝倉城山遺跡(40)が存在する。ここは標高100mに位置する高地性集落であり、竪穴住居址2棟が発見されている。出土遺物は磨製石斧、石包丁、打製石鏃、石錘、叩石、磨製石剣であり、中期中葉から後期前半の遺跡である。高地性集落としては近接する中期末の赤鬼山遺跡(37)、中期後半の甫岐山遺跡(61)やバーガ森北斜面遺跡(54)など



NO. 1	遺 跡 名	NO. 20	遺 跡 名	NO. 39	遺 跡 名	NO. 58	遺 跡 名
2	柳田遺跡	21	日の岡古墳	40	野中婉屋遺跡	59	新田遺跡
3	船岡山古墳	22	吉弘古墳	41	朝倉城山遺跡	60	倉岡遺跡
4	船岡山遺跡	23	泰泉寺新屋敷古墳	42	朝倉城山第2遺跡	61	野田遺跡
5	鷺泊端付近遺跡	24	宇津野遺跡	43	鶴來集遺跡	62	雨岐山遺跡
6	ケシカ端遺跡	25	宇津野1号墳	44	行宮森遺跡	63	西ノ芝遺跡
7	シルタニ遺跡	26	宇津野2号墳	45	勘平山古墳	64	後田遺跡
8	鴨部遺跡	27	初月遺跡	46	校川1号墳	65	王子遺跡
9	高座古墳	28	舟ヶ谷遺跡	47	校川2号墳	66	久万遺跡
10	高神遺跡	29	中の谷遺跡	48	校川3号墳	67	ヒヨ谷遺跡
11	神田遺跡	30	福井古墳	49	北山前遺跡	68	西分増井遺跡
12	久寿崎の丸遺跡	31	かろーと口遺跡	50	サジキ遺跡	69	馬場末遺跡
13	小石木古墳	32	高知学園裏遺跡	51	大テギ遺跡	70	山根遺跡
14	小石木遺跡	33	横内遺跡	52	高海老遺跡	71	和田遺跡
15	愛宕不動堂前古墳	34	塚ノ原1号墳	53	塔の向遺跡	72	大谷遺跡
16	泰小学校工庭前古墳	35	塚ノ原2号墳	54	奥名遺跡	73	フケ遺跡
17	愛宕神社裏古墳	36	杓田遺跡	55	バーガ森北斜面遺跡	74	西畑遺跡
18	土居の前古墳	37	赤本宮遺跡	56	天神溝田遺跡	75	仁ノ遺跡
19	淋谷古墳	38	赤鬼山遺跡	57	岩瀧ノ鼻遺跡	76	南裏遺跡
	北泰泉寺遺跡		朝倉古墳		観音ノ平遺跡		西戸原遺跡

Fig. 3 周辺遺跡位置図

がある。この中でバーガ森北斜面遺跡の調査では、検出遺構として堅穴住居3棟があり、出土遺物としては土器の他に石包丁、叩石、打製石鏃、鉄刀子、投弾などがある。

後期から古墳時代初めにかけては竹ノ内遺跡、塔の向遺跡（52）、西分増井遺跡（67）、馬場末遺跡（68）などが存在する。竹ノ内遺跡では後期の土坑墓、後期末の貯蔵穴、古墳初頭の堅穴住居址が検出されている。塔の向遺跡は後期を通じて展開を見せる遺跡である。西分増井遺跡では方形周溝墓が検出されている。この周溝は幅50cm～70cmの西方に開く「コ」の字形を呈するものであり、主体部は1.6m×0.9mの隅丸方形を呈するものである。馬場末遺跡では遺構は確認されていないが、多量の古式土師器が出土している。これらの土器の中には小型丸底土器や小型器台、また布留式甕が含まれており、祭祀的な性格の強いものである。

鏡川水系や仁淀川水系分布する古墳の多くは古墳時代後期のものであり、群集墳として存在する場合にも2～3基で在る場合が多い。北部山麓に存在するものには秦泉寺古墳群（14～18・20～22・24・25）、塚ノ原古墳群（33・34）、枝川古墳群（45～47）などである。これらの築造は6世紀中葉から7世紀前半までと考えられており、横穴式石室を確認できるものが多い。柳田遺跡の西方には土佐の三大古墳の一つである朝倉古墳（38）が存在している。この墳丘は円墳であり両袖の横穴式石室を持つもので、出土遺物は須恵器、馬具、鉄鏃である。また、朝倉坂本古墳は出土遺物として須恵器の坏、蓋、蓋坏、直口壺や馬具が存在し、6世紀中葉から後半のものと考えられている。

7世紀以降この地域の様子を窺う資料は少ないが、白鳳期に建立されたと考えられる寺院に秦泉寺廃寺と大寺廃寺がある。前者の調査では寺域を区画する大溝が検出されており、出土遺物として有稜線素弁八葉蓮花紋を持つ鍔瓦がある。後者出土の鍔瓦にはこの文様の退化型式がみられる。

奈良時代に遺跡周辺には土佐郡の朝倉郷や鴨部郷等が見られる。また条里制の遺構は朝倉地区、弘岡地区で良く遺されている。

延喜式内社は土佐国に大社1、小社20が存在したとされているが、このうち朝倉鴨部地区には郡頭神社、朝倉神社が存在している、また伊野町には天石門別安国玉主天神社が存在している。

平安時代には大高坂城を舞台として南朝方の大高坂松王丸と北朝方の津野、三宮、堅田氏の争いの場となる。

中世戦国期において土佐は七守護の台頭で分割統治されていた。この中で高岡郡蓮池城を本拠地とする大平氏や吾川郡吉良城を本拠地とする吉良氏などは文化への関心も厚く、吉良宣経により周防山口から招かれた南村梅軒は後に南学の祖とされている。

柳田遺跡域の西方に在る城山には四国中央部嶺北地方を拠点とする本山氏が高知平野支配の拠点として築いた朝倉城が存在するが、永禄五年（1562年）朝倉から鴨部で展開された朝倉合戦で長宗我部氏と対峙し、翌永禄六年城を焼いて退去する。この後、長宗我部元親による土佐の統一（1574年）、四国制覇（1585年）と続き秀吉による四国征討によってこの地方の戦国期

は終わりを告げることになる。

参考文献

『西分増井遺跡埋蔵文化財調査報告書』1990年 春野町教育委員会

『吉良城跡 保存整備構想』1987年 春野町教育委員会

『高知県の歴史』1991年 山本 大 吉川弘文館

『日本の古代遺跡 39 高知』1989年 岡本健児 保育社

『日本地名事典 39 高知県』1986年 角川書店

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 試掘調査

試掘調査については先述のとおり、点として周知されていた柳田遺跡の範囲及び遺構・遺物の状況を確認するために高知市からの委託を受けて行われ、開発計画との調整の基礎資料を得ることが目的とされた。調査期間は1992（平成4）年4月14日～5月6日であり、調査面積は各トレンチの合計255㎡であった。試掘調査着手時に立ち入り可能な場所は2ヶ所であり、すでに盛土と舗装が行われていた東側部分をA区とし、水田であった西側部分をB区として、順次試掘調査を行っていった。調査区はA・B区に幅3mのトレンチを各々3本設定し、合計6本のトレンチであり、トレンチの名称はA区よりTR-A～TR-Fとしたが、TR-Eについては畦畔にかかるためTR-E1とTR-E2の2ヶ所に分け、TR-Dについては一部延長した。調査はTR-Aから着手し、TR-C、TR-B、TR-F、TR-E2、TR-E1、TR-Dの順序により、調査を終了したトレンチは順次埋め戻しながら行った。以下に各トレンチの調査状況を述べる。

TR-A（3×8.5m/25.5㎡）

TR-AはA区北部のトレンチであり、地表下4.7mまで掘り下げたが遺構、遺物は検出されなかった。層序は盛土及び旧表土の下に厚く堆積した茶褐色～青灰色のシルト層が見られ、最下層に細砂層が確認され、河川堆積の状況を示していると考えられた。

TR-B（3×17m/51㎡）

TR-BはA区中央部のトレンチであり、地表下5.4mまで掘り下げを行ったが3～4mの間に流路堆積と考えられる青灰色～暗灰色のシルトと砂利、砂の互層が確認され、流木及び板材片等が出土した。流木を取り上げたところ下層の砂利層から土師器片等の出土があり、木製品を含む古墳時代の流路の存在が確認された。

TR-C（3×20m/60㎡）

TR-CはA区南部のトレンチであり、柳田遺跡発見の契機となった用水路工事地点に近く、弥生時代の遺物包含層の存在が想定された。トレンチは地表下2.7mまで掘り下げたが、2～2.7mの間に見られる黒灰色と黒青灰色のシルト層から遺物の出土が確認された。出土遺物は弥生前期末から中期にかけての土器片及び石鏃、石包丁等であり、黒青灰色シルト下面ではピットと土坑及び炭化物・灰の集中範囲が検出されており、炭化物範囲からは骨片等も出土している。TR-Cの状況からすれば遺物包含層と遺構の広がりと考えられた。

TR-D（3×5m・1.5×9m/28.5㎡）

TR-Dは西側のB区北部のトレンチであり、地表下2.9mまで掘り下げを行った。表土下には茶褐色～暗青灰色のシルトの堆積が見られ、最下層は青灰色の砂利層であることから流路堆積と考えられたので幅1.5mの小トレンチを9m南へ延長したが、遺物は確認されなかった。

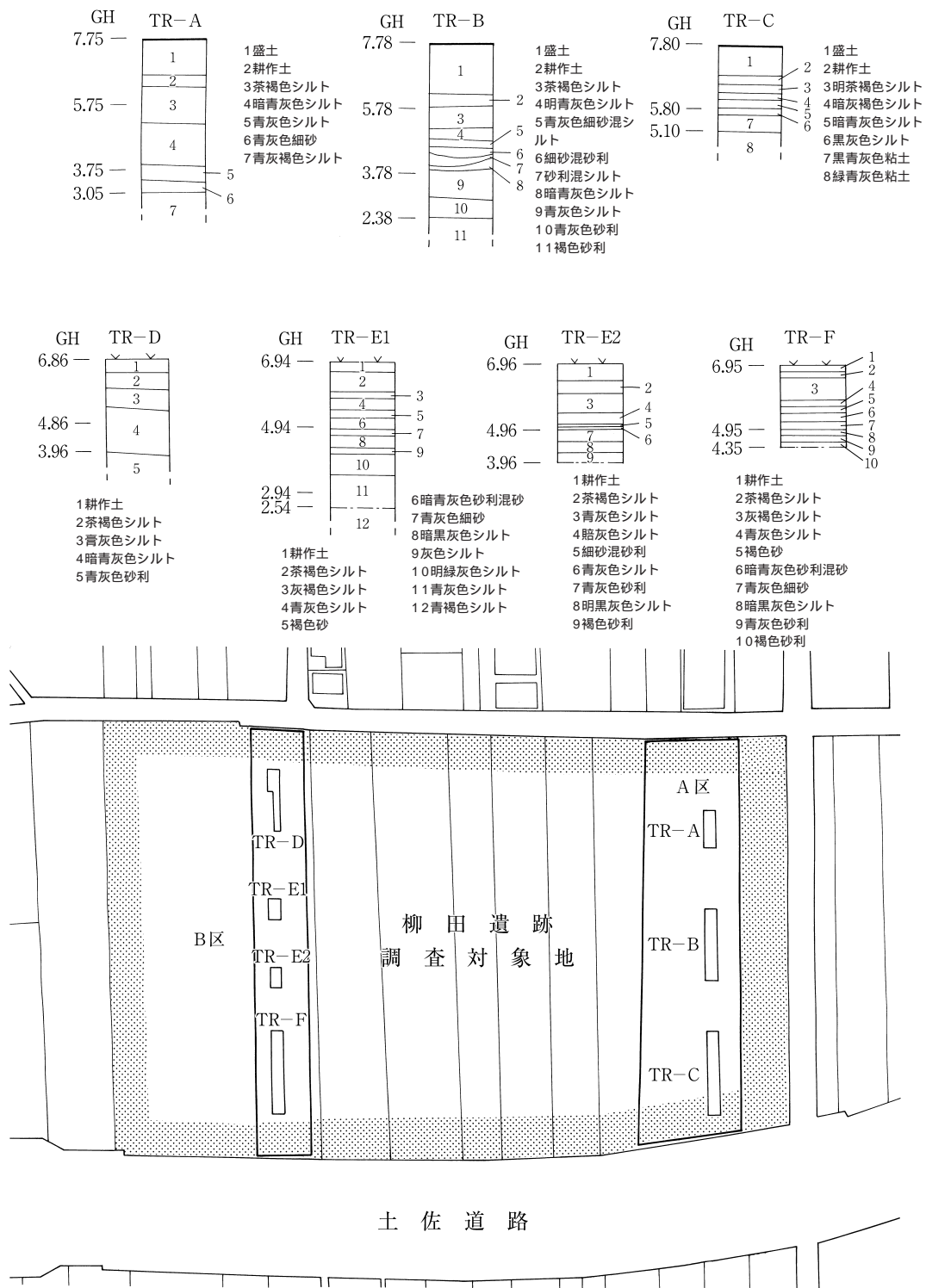


Fig. 4 試掘トレンチセクション柱状図・設定図 (S=1/1,500)

TR-E1 (3×5m/15㎡)

TR-E1はB区中央部のトレンチであり、地表下4.4mまで掘り下げを行った。表土下には褐色～青灰色のシルト層が連続的に見られ、砂層や砂利層は確認できず、流路等の堆積範囲外と考えられた。また、遺物の出土もほとんどなく、遺構、遺物の分布範囲からも外れている部分であると思われる。

TR-E2 (3×5m/15㎡)

TR-E2はB区中央部、TR-E1の南に設定したトレンチである。地表下約3mまで掘り下げた結果、地表下約2m青灰色の砂利及びシルト層から遺物の出土が確認された。中でも青灰色砂利層からの出土遺物には土師器高坏、椀、搬入品と思われる甕口縁部等が見られ、古墳時代の流路堆積の一部にあたると考えられた。遺物の出土状況からすればかなり大形の破片も多く、流路堆積ではあるが良好な状況を示しており、TR-Fについて多くの遺物が出土している。

TR-F (3×20m/60㎡)

TR-FはB区南部の調査区であり、地表下2.6mまで掘り下げを行った。TR-FにおいてもTR-E2と同様に地表下約1.5～2mの間の青灰色砂層及び砂利層から遺物の出土が確認された。砂利・砂層ともにTR-E2で検出された流路堆積土とほぼ同様の土層であり、遺物出土状況も類似するものであった。出土遺物には小型丸底壺、小型器台、土製支脚、高坏、甕等が見られ、甕などはほぼ完形品が出土している。小型丸底壺や小型器台の存在からは古墳時代の祭祀の可能性も考えられ、その他の遺物の出土状況も良好なことから、TR-E2を含めた範囲に古墳時代の流路が存在しており、祭祀跡も含めて周辺部における集落の存在が考えられる。

以上の各トレンチの調査の結果、弥生時代前期～中期の遺物包含層と土坑を中心とする遺構群の存在と古墳時代の流路の存在が判明した。弥生遺物包含層はTR-Cを含め調査対象地の南東部を中心とする範囲と推定された。包含層及び遺構面は現地地表下2～2.7mとかなり深く、粘土層を基盤としている。出土遺物は土器及び石器であったが、焼土・炭化物の分布範囲も見られ、焼骨片も出土することから、本調査においては木器や自然遺物が出土する可能も考えられた。古墳時代ではTR-B及びTR-E2・TR-Fにおいて流路が確認され、トレンチの位置等から



● 土器 ▲ 石鏃 ■ 石包丁

Fig. 5 TR-C 遺物出土状態

見て、2条の流路の存在が推定され、現地の状況から北西から南東部へ流れる流路ではないかと考えられた。出土遺物には小型丸底壺や小型器台も見られ、祭祀の可能性も存在しており、また、流木等の出土からは木器の存在が考えられた。

試掘調査の結果により広範囲にわたる遺跡の存在が明らかとなったため、開発業者である株式会社と協議が行われ、本調査が実施されることとなった。

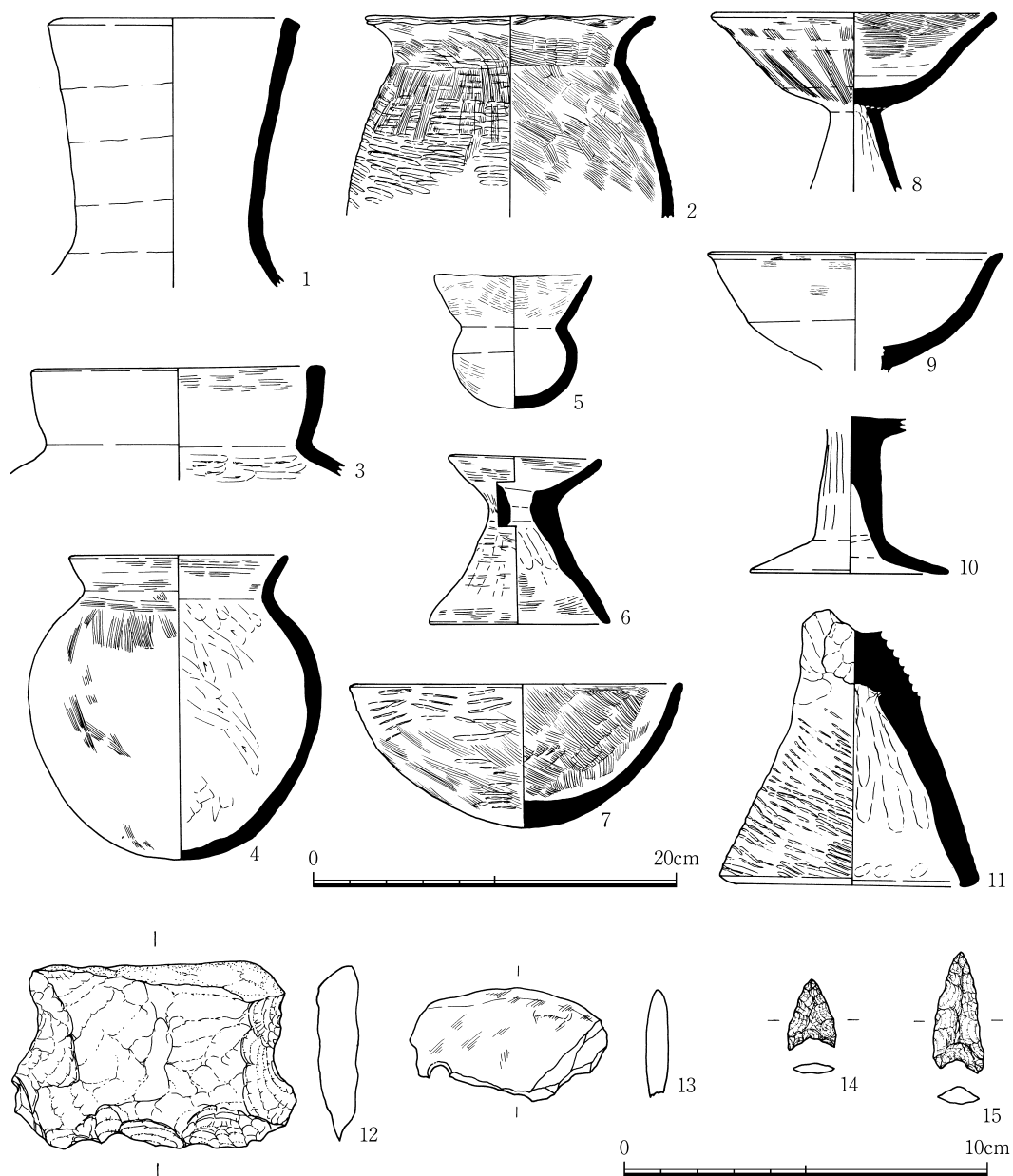


Fig. 6 試掘トレンチ出土遺物 1・12~15(TR-C出土) 3・7・8(TR-E2出土) 2・4~6・9~11(TR-F出土)

第2節 本調査

本調査については、4～5月に実施された試掘調査の結果を基に協議が行われたが、対象面積が広く、かつ試掘調査範囲の狭さ、また遺物包含層・遺構の深さから遺跡の遺存状況について十分な情報を得ることができず、発掘調査自体非常に困難な状況が考えられたが、協議を進める中で、最終的には7月に委託契約を締結し、8月から現地調査が開始された。

1) 調査の方法

調査の方法としては、全体的には調査対象地が約16,000㎡と広範囲であり、調査期間及び調査経費に限界があるため、必要部分のみを集中的に調査を行うことを基本計画とした。本調査を行うにあたり、試掘調査の結果では遺構、遺物の分布範囲の把握が不十分であったことから、予備調査としてトレンチ調査を先行して行い、遺構、遺物が確認された部分について拡張し、調査を進めることとした。予備調査は調査の進行に応じてトレンチによる調査を行い、遺構、遺物の確認できる部分を調査区として設定した。調査区は調査順によりⅠ区からⅥ区までとなり、東半部にⅠ区からⅣ区、西半部にⅤ区とⅥ区を設定したが、西半部のⅤ区・Ⅵ区部分については立ち入りができず、後半に調査を行うこととして、東半部から調査に着手することとなった。

次に各調査区のグリッド設定及び面積等について述べる。各調査区におけるグリッドの設定は、Ⅰ区・Ⅱ区(ⅡJ区を含む)Ⅲ区が現地に合わせた任意の同一のグリッドであり、南北方向

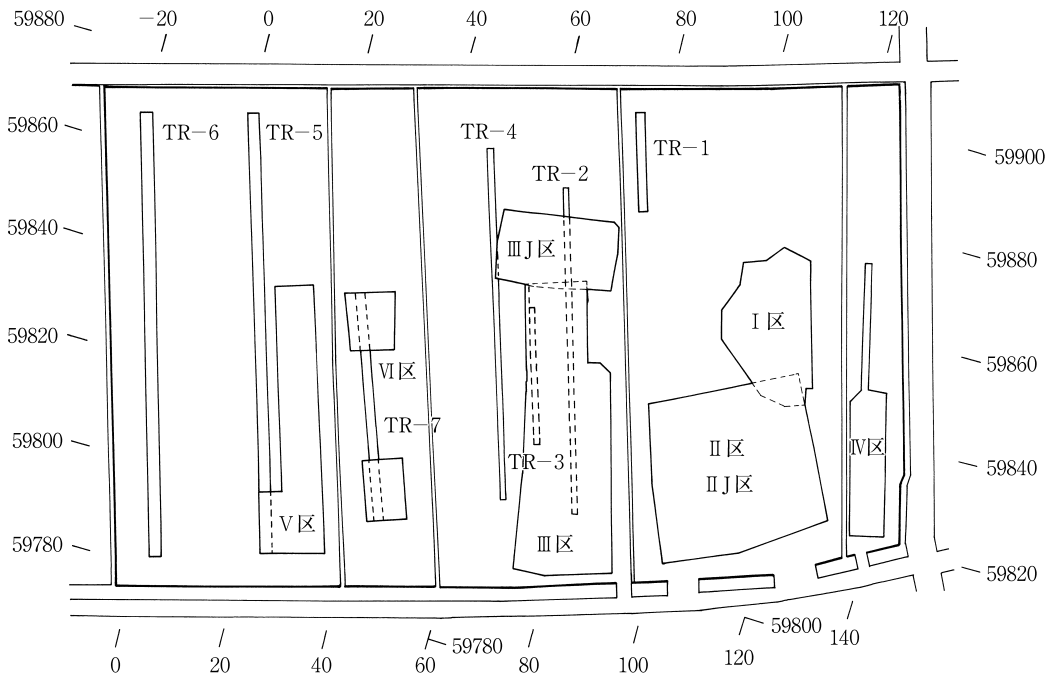


Fig. 7 予備調査トレンチ・本調査区設定図 (S=1/1,500)

を北からA～S、東西方向は東から1～17とした。ⅢJ区・Ⅳ区はそれぞれに任意のグリッドとし、ⅢJ区では南北方向を北から-1～3、東西方向を東からa'～f、Ⅳ区では南北方向に南からa～o、東西方向は東から0～3とした。Ⅴ区・Ⅵ区は任意の同一グリッドとし、南北方向を南から1～15、東西方向を東からvからdとした。最終的には公共座標代Ⅳ系に取り付け、Ⅰ区～Ⅲ区とⅤ・Ⅵ区のグリッドは座標北に対し西へ16°、ⅢJ区では西へ7°、Ⅳ区では西へ19°の角度となっている。

調査面積は予備調査も含め4,555㎡であり、各調査区の面積は次のとおりである。

Ⅰ区-430㎡、Ⅱ区-1,218㎡、ⅢJ区-348㎡、Ⅲ区-977㎡、Ⅳ区-250㎡、Ⅴ区-491㎡、
Ⅵ区A-98㎡、Ⅵ区B-110㎡、予備調査 TR-1 (2×20m-40㎡)、TR-2 (1.2×65m-78㎡)
TR-3 (1.2×25m-30㎡)、TR-4 (1.2×70m-84㎡)、TR-5 (2.5×86m-215㎡)
TR-6 (2.5×88m-220㎡)、TR-7 (1.5×44m-66㎡)

2) 調査の状況

最初に設定されたⅠ区は、試掘調査で古墳時代の流路が検出された部分であるが、建物の浄化槽設置部分であり、大きく掘削する計画であったため、調査開始の8月3日から着手した。また、流路の範囲を確認するため予備調査としてTR-1を北西部に設定した。結果的には砂利及び砂層の堆積が確認され、流路の一部とも考えられたが、明瞭なプランはセクションでも確認できず、遺構、遺物も検出されないため、西方への拡張は行わなかった。Ⅰ区では、流路からの土師器、木器等の出土が中心であったが、流路底部では弥生前期の彩文土器等も出土しており、弥生前期段階から存在していたものと考えられる。また、木器では琴柱、梯子、横槌、鋏等が検出され、県内では初めての本格的な古墳時代の木器の出土となった。

次にⅠ区の調査と並行して、南にⅡ区を設定したが、Ⅱ区は試掘調査において弥生前期～中期の包含層と土坑等が検出された地点である。掘削排土の仮置きの関係から、東半部の掘削から開始され、遺物、遺構を検出しながら掘り下げていった。途中、調査区の北東部でⅠ区との重複部分があり、Ⅰ・Ⅱ区の一連の流路堆積を確認することができた。西半部についてはⅠ区調査終了後、包含層上面まで掘り下げ、東半部と調査面をそろえて全体的に調査が進められた。遺構は北半部にⅠ区で検出された流路の南側肩部が検出された。流路埋土の上～中層には植物層が堆積しており、やはり木製品の出土が見られ、土師器、馬骨等も出土している。南半部では弥生前期～中期の土坑、ピットが検出され、彩文土器等の遺物も出土している。また、南端部付近では良好な土坑が検出されており、埋土中には焼土、灰・炭化物層が見られ、魚骨等も出土している。さらにⅡ区の中央部では縄文晩期の土器片が確認されたため、下層への掘り下げを行った。その結果、晩期の包含層が確認され、溝状遺構とともに深鉢等が出土し、調査期間最終日まで調査が続けられた。

Ⅰ・Ⅱ区の調査に並行し、Ⅲ区の調査に着手した。Ⅲ区では試掘調査時に現地立ち入りができなかったため、予備調査としてTR-2～TR-4の3本のトレンチを設定し、遺構、遺物の確認を行った。その結果、北部において縄文後期～晩期土器が出土し、ⅢJ区として調査を行うこと

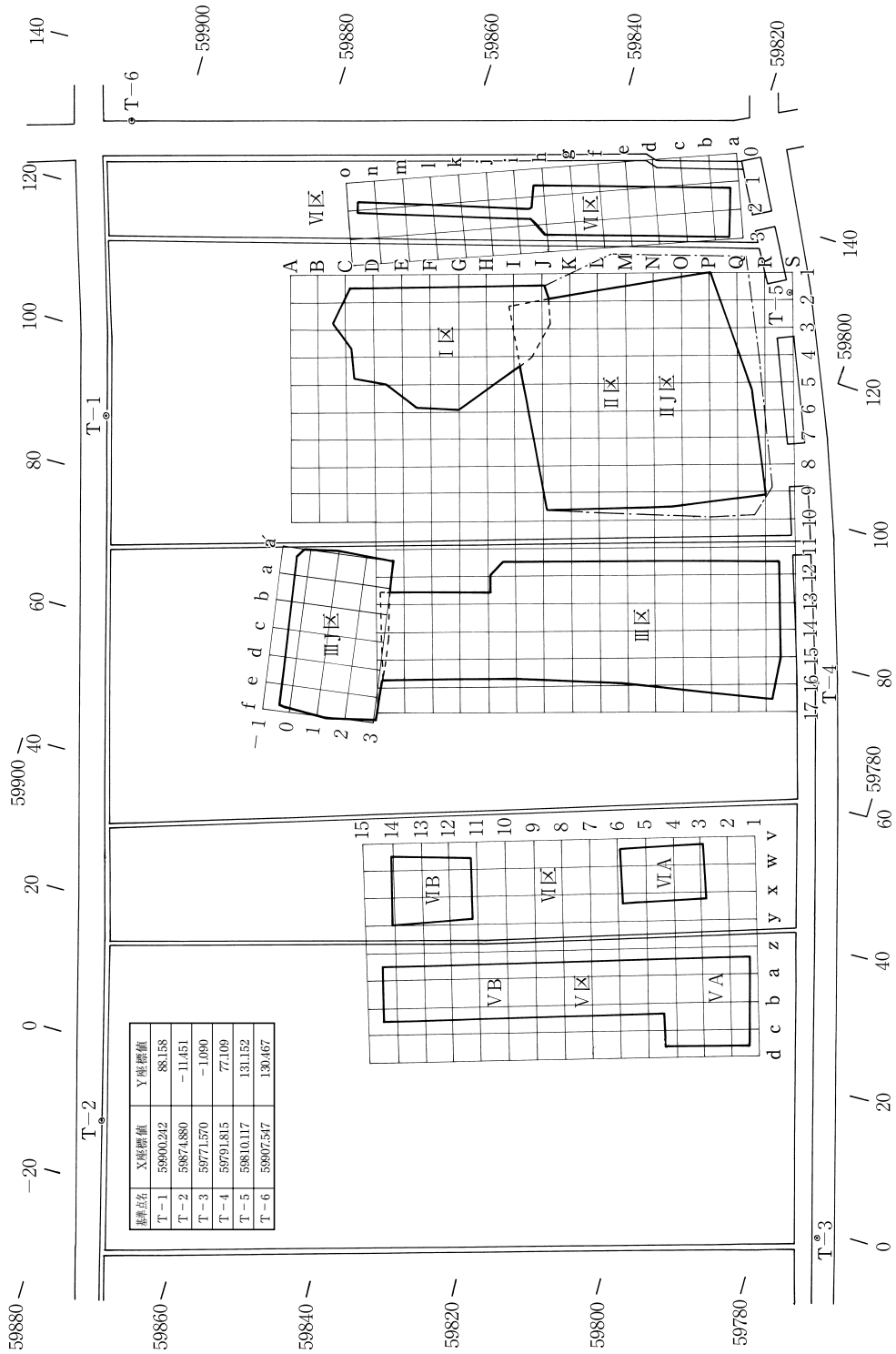


Fig. 8 調査区グリッド設定図 (S=1/1000)

となった。ⅢJ区では上層部に縄文晩期の包含層が、下層部には縄文後期の包含層が存在したが、遺構はほとんど検出されなかった。ⅢJ区の南においても予備調査で遺構、遺物が確認されたため、Ⅲ区としてトレンチを拡張し調査が行われた。Ⅲ区の北端部はⅢJ区に接続し、やはり縄文後期と晩期の遺物が出土している。中央部においてはⅡ区に続く流路が確認されたが、木器等の遺物出土量は少なかった。南端部においてもⅡ区から続く弥生前期～中期の包含層と土坑群が検出され、下層からは若干ではあるが縄文後期の遺物の出土が見られた。

I・Ⅱ区の東側には弥生前期～中期の包含層の存在が当然考えられたため、Ⅳ区として調査区を設定した。Ⅳ区は弥生包含層を検出するためにまず南半部を掘り下げ、小規模な土坑及び溝を検出し、彩文土器を含む土器群が出土した。南半部の調査を終了した後、北半部をトレンチにより確認した。その結果、I・Ⅱ区から続く流路堆積を検出し、流路は北東方向へ延びると考えられた。

Ⅳ区の調査終了後、西半部のⅤ区の調査に着手した。Ⅴ区においては試掘調査により古墳時代の流路堆積と考えられる砂利層から土師器の出土を見ており、予備調査としてTR-5・TR-6の2本の南北トレンチを設定して調査を進めた。西端に設定したTR-6においては、南端部に砂利と砂層が確認され、流路堆積の一部と考えられたが、遺物の出土はほとんど確認できなかったため拡張することなく終了した。東部のTR-5においては、中央部から南半部に流路堆積が見られ、特に南端部付近で多くの遺物が出土したため、Ⅴ区として調査区を設定した。Ⅴ区では南端部をⅤ区Aとし、北半部をⅤ区Bとして調査を進めたが、流路堆積の砂利層中から土師器甕、椀、高坏、小型丸底壺等が南端部付近を中心に出土しており、ほぼ完形のものも多いことから河川祭祀等の可能性も考えられた。

調査も終盤となった12月段階でⅥ区の位置する用地にも立ち入りが可能となり、急遽、予備調査としてTR-7を設定し、確認が行われた。TR-7はⅤ区の調査状況から見て、北半部には遺構、遺物が検出される可能性が極めて低いと考えられたため、中央部から南にトレンチが設定された。調査の結果、トレンチ北部において流路の植物堆積層が検出され、また、南端部では噴砂と思われる堆積と縄文晩期と見られる土器片の出土があり、南部をⅥ区A、北部をⅥ区Bとして拡張し、調査区を設定した。Ⅵ区Aでは予想に反し遺構、遺物はほとんど確認されず調査を終了したが、Ⅵ区Bでは流路堆積中から木器、獣骨、土師器等が出土し、流路としては、Ⅴ区の南部から北へ大きく蛇行し、Ⅵ区Bへ流れた後、Ⅲ区以東へ蛇行しながら続くものと考えられた。

以上のようにⅠ区からⅥ区における調査の方法と状況について述べたが、木器等の出土、包含層の深さ、調査期間、経費等の条件により、十分な調査が行われたとは言い難い点もあるが、最終的に12月28日をもって現地調査を終了した。

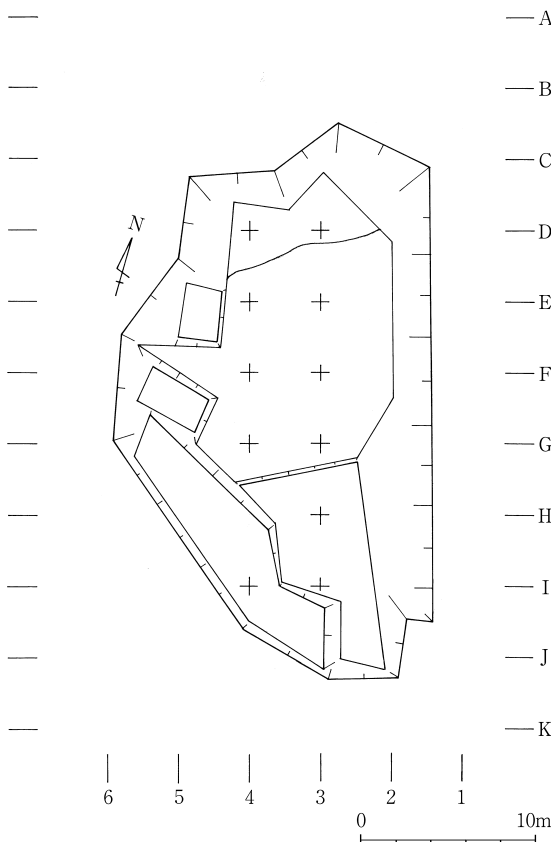
第IV章 調査の成果

第1節 I区

(1) 調査区の概要

調査対象地の東部に位置し、現地表面標高は7.6~7.7mを測る。現況は、アスファルト舗装された敷地であり、1.0~1.2mの盛土によって整地されている。南東端部はII区と接し、調査面積は430㎡を測る。調査区は4mのグリッド調査区に区切り、南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を使用した。グリッドの方向はN-16°-Wであり、Nは、IV系座標北を指す。遺物の取り上げ等は、グリッドごとに行い、北に向って右上の番号を使用した。

調査は、盛土を除去した後、包含層の上面まで重機により掘削を行い、遺物包含層及び遺構については人力による調査を行った。当初、E-3グリッドにトレンチ状の調査区を設定し調査を行った結果、地表下2.1m、標高5.5mで植物遺存体を多く含んだ自然流路を確認した。ここからは、流木に混じり、木器、須恵器が出土し、流路範囲を確定するため調査区を拡張した。I区では流路の方向は明確でないが、南部の調査区であるII区で検出されたSR201の続きであると考えられ、溜り状のプランを呈する。流路は、調査区東壁での断面をみると、東側IV区



の方向に流れ、SR401に繋がる。調査区の北部(E・Dライン)で標高が高くなっており、南部から流れ込み、北部の高まりにあたり東に流向を変える。このため、E-3グリッド周辺の湾曲部に植物遺存体、木器等が溜り、流路埋積最終段階の堆積が顕著である。下層の堆積は砂利層と粘土層の互層を呈しており、出土遺物からみて弥生時代末から古墳時代にかけて洪水的な運搬力の高い状況の後に、河道変更が生じたものと考えられる。また、流路床面(E-3・E-2グリッド)では、等高線に平行して溝・杭列が検出され、弥生時代前期末~中期初頭にかけての土器が出土している。I区においては、自然流路のみの検出であったが、当遺跡を構成する流路の最終段階を検討する上で重要な調査区である。

Fig. 9 調査I区全体図 (S:1/200)

第1節 I区

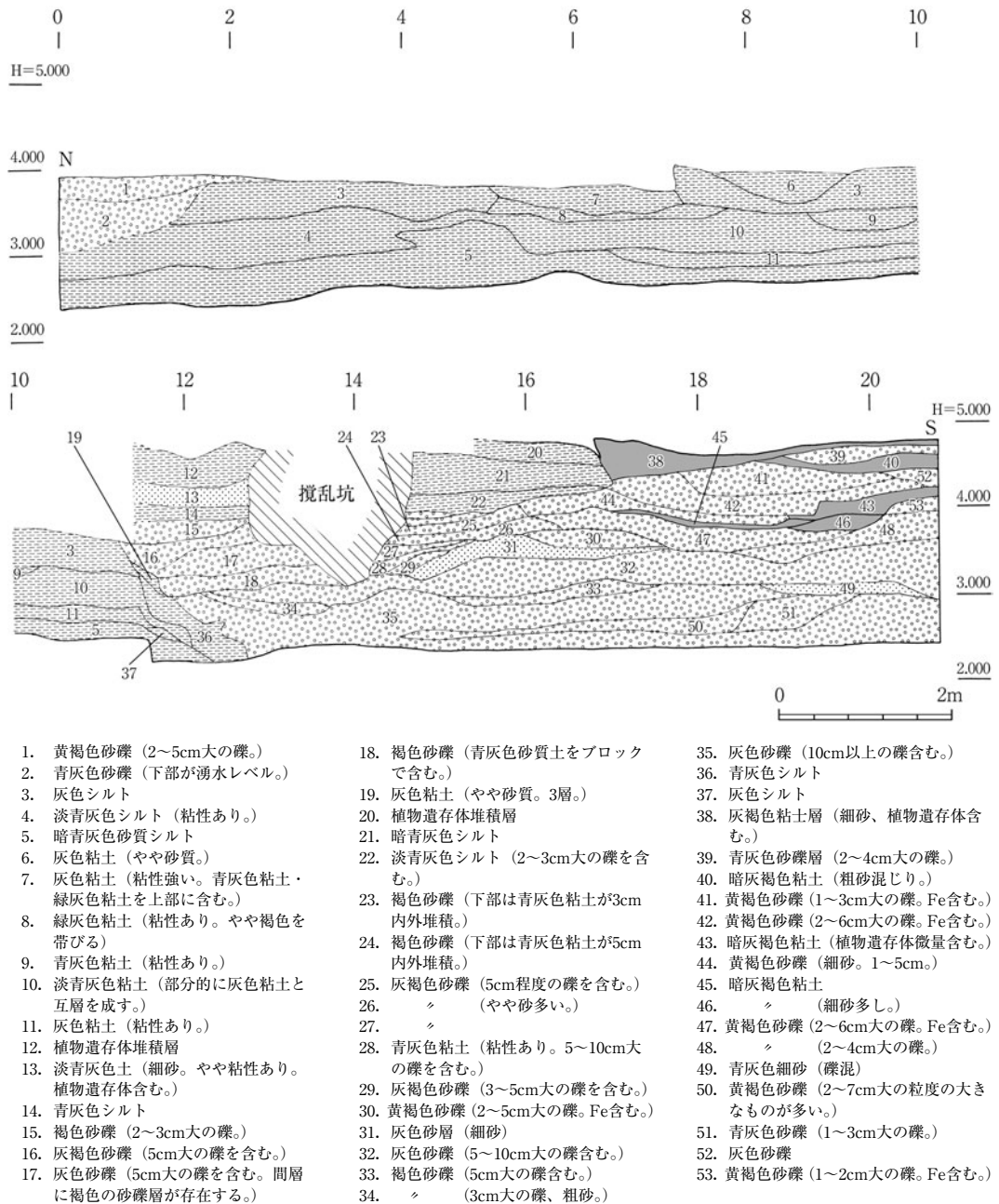


Fig.10 調査I区 下層南北トレンチセクション図 (東壁) (S:1/80)

当初、SR101の遺物の取り上げは、後述する層序を基準として行った。V・VI・VII層は植物遺存体堆積層であり、流路最終堆積層である。後述するII区のSR201を含めて他調査区でもこの堆積層をP層とし、流路のキー層とした。VIII・IX層は基本的に砂り層であり、弥生時代~古墳時代にかけての遺物を包含する。他調査区の流路でも基本的な堆積に変わりはなく、G層として遺物の取り上げを行った。

SR101基本層序

I層：整地土	V層：暗褐色粘土（細砂混じる。植物遺存体層）	} P層（4層対応）
II層：淡黄灰色粘土層	VI層：暗灰褐色粘土（細砂混じる。）	
III層：灰色粘土層	VII層：暗灰褐色シルト（細砂混じる。遺物包含層）	
IV層：青灰色砂層	VIII層：砂利層（遺物包含層）	
	IX層：砂利層	} G層（7・8・9層対応）
	X層：青灰色粘土層（地山）	

以下に、I区での基本的な堆積について述べる。

(2) I区の層序 (Fig.10・11)

I区で検出した自然流路SR101の埋積最終段階のセクション、及び調査区内での下層流路堆積のセクション図を図示することにする。

調査地点は全体的に1.0～1.2mの盛土によって整地されており、1層は、整地層として記述する。1層下は厚さ1.0m前後の淡黄灰色粘土の旧耕作土である。淡黄色を呈する水田の床土と思われる層が灰色粘土と互層になっており、近世以後の耕作土であると考えられ、ここでは一括して2層として取りあげる。3層以下が遺物包含層として捉えることが可能であり、分層を行った。3層は灰色粘土層であり、平均的な見方をすれば細砂を含むシルト質である。この層は、地点によっては細砂のみで構成されている。以下に述べる4層の堆積とともに流路埋積の最終段階の層として捉えることができる。4層は暗灰褐色粘性シルトであり、植物遺存体を多く含む。流木・木器を包含しており、流路の平面プラン検出のキー層になる。特に蛇行する屈曲部(F-3グリッド)においての堆積が著しく流路最深部にむけて40～80cmの堆積が認められる。F-3グリッド部位での西壁では植物遺存体を多く含む層が厚さ2cm前後の砂層に挟まれるかたちで水平に堆積が認められ(4①層・4②層)、1時期にパックされた状態であることが窺える。IV層は、各調査区で検出された流路の蛇行部に集中して堆積が認められたことから、P層として遺物の取り上げを行った。5層は暗灰褐色粘土層であり、地点によっては7層の灰色砂礫層がブロック状に混じる。F-3グリッド部位等地形が高くなる傾斜面においては5層下に青灰色粘土(6層)の堆積がみられ、SR101の段階の地山的堆積を示す。5層以下は粘性シルトと砂利状の砂礫の互層堆積であり、7層・8層・9層はG層として遺物の取り上げを行った。これらの層からは、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代後期末～古墳時代前葉の遺物が出土した。また、G-3グリッド南部に設定した南壁セクションをみると、4層が上端幅4mを測り、ややレンズ状を呈した状態で堆積が認められるが、この面では南東方向(I-2)～北西方向(F-4)への流路の方向が確認でき、SR201からの続きであることが看取できる。

以上が、I区で検出されたSR101の堆積である。I区全般の様相は、流路最終段階の堆積を示すものであるが、部分的にそれ以前の流路の堆積状況を見ることにする。I区では流路の方向が明確ではないが、調査区の東壁と西壁の一部にSR101のレンズ状の堆積が認められるため、SR101調査終了後、調査区東壁側に南北のトレンチを設定し、断面観察を行った。グリッドで表示すればD-2～J-2グリッドにあたる。

下層堆積 (Fig.10)

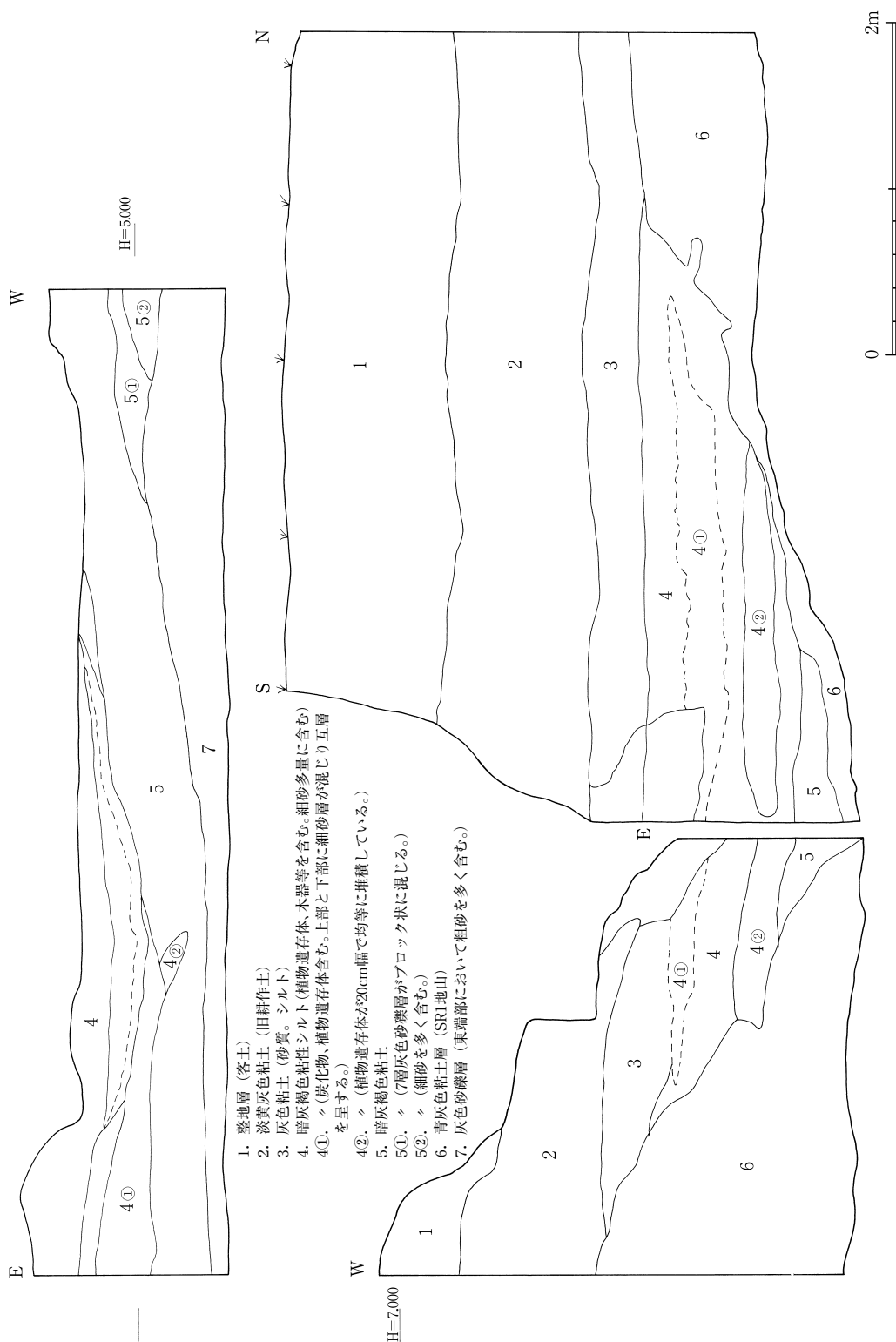


Fig.11 調査I区 SR101西壁セクション及び東西バンク (Gライン) セクション図 (S: 1/40)

設定したトレンチは南北20.8mであり、標高2.5m前後まで堆積確認を行った。調査区北端部では、1・2層の砂利層が北側に落ち込む。このD-2グリッド杭の地点はSR101の北側の肩部を形成する高まりの頂部にあたり、このラインを境に北側に地形は傾斜するものと考えられる。2層は青灰色を呈する砂礫層であり、下部の標高3.0m前後で湧水がみられる。3～11層及び19・36・37層は粘土からシルト質であり、SR101の6層に対応し、地山的な堆積を示す。これらの堆積層は、G-2グリッドから南に大きく傾斜する。この上層に、ややレンズ状に堆積が認められ、SR101の最終段階の植物遺存体堆積層が認められる。12～14層・20～21層が植物遺存体を含む層であり、前述したSR101の4層に対応し、P層になる。16～18層・23～32層までが砂利層であり、細砂層と互層に堆積している。これらは遺物包含層であり、SR101の7～9層に対応し、G層である。さらに、38～48層も流路最終段階の堆積層として考えられ、上層部の38・40層、間層に砂利層を挟み43・46層に植物遺存体が含まれる。以下、47・48層の鉄分を含み黄褐色を呈する固くしまった礫層にも遺物が包含されている。50・51層以下には遺物は認められず無遺物層である。このJ-2グリッドはⅡ区との調査区境にあたり、SR201との対応も検討しなければならない。

以上、層序の概要を述べたが、Ⅰ区で確認されたSR101は1時期のものでなく、大きく3回の洪水堆積があったものと考えられる。調査区北端のD-2グリッドの頂部を境に、G-2グリッドラインまでなだらかな傾斜が続き、G-2グリッドを境に地形が南に落ち込む。堆積の順番としては北側の地形の高まり部分から南に向かって埋没して行き、最終段階にJ-2グリッド周辺が埋没し、廃棄されたものと考えられる。このようにⅠ区では、キー層となるP層・G層の堆積から流路の最終段階を示す状況が看取でき、柳田遺跡全体を流れる流路の廃棄される時期を知るために有機的な成果を得ることができた。次に後述する項で遺物の出土状況及び出土遺物について詳細に触れたい。

(3) SR101

Ⅰ区で検出された自然流路である。調査区南部から流れ込むⅡ区のSR201に対応するものと考えられ、F-4・E-4グリッド周辺で蛇行し、溜り状を呈しながら東方に流れる。流路検出面は標高4.8～5.5mであり、最終埋積段階の規模は、幅5～8m、深さ1.5～1.8mを測る。その段階以前の流路堆積も認められるがここでは遺物を包含する層までをSR101の対象とし記述を行う。現在は、標高3.0m前後で湧水がみられ、流木、木製品等植物遺存体の残存状況は良好である。

まず、Ⅰ区で当初に検出されたE-3グリッド周辺の上層部の状況をみてみる。この地点での流路検出面(P層)は標高5.5mを測り、上層には灰色を呈するシルト層及び細砂層(3層)が堆積していた。この堆積層は30～40cmを測り、遺物を包含する。3層を除去した段階でP層を検出したが、Ⅰ区の中ではE-3グリッド周辺での堆積が厚く、砂層との互層を呈しながら、40～80cmの堆積が認められた。ここでは自然木の流木、木器が数多く出土しているがこれらの中で全長の長いものについては、長軸が流路の流れに沿うような状況で検出された。木器で

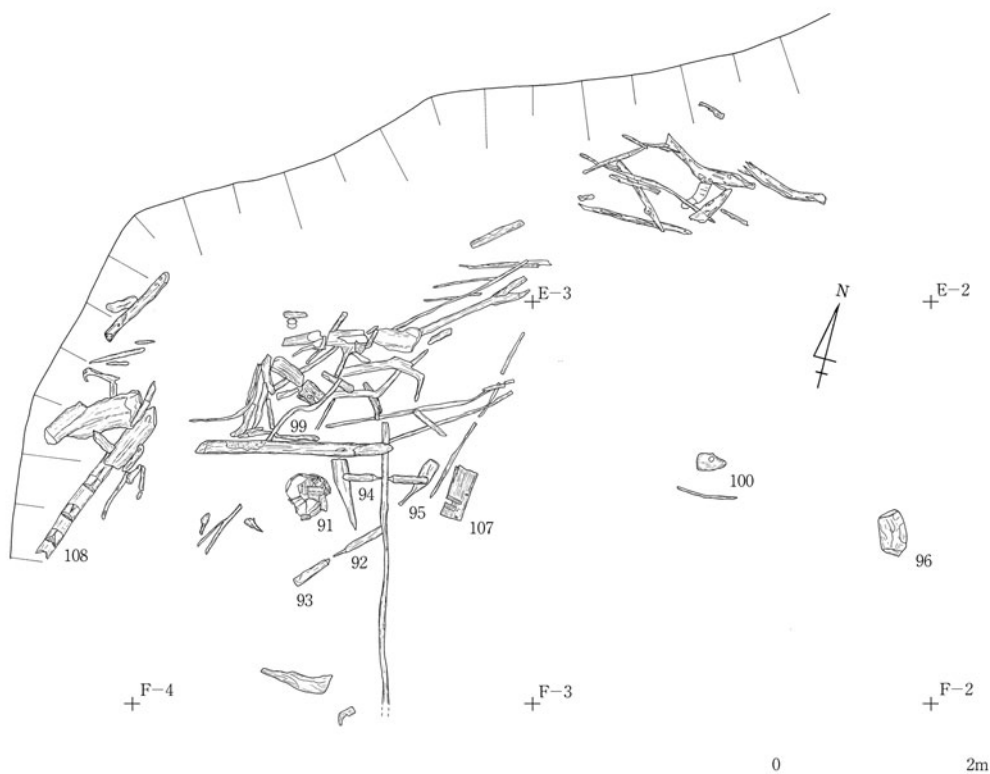


Fig.12 調査I区 E-3グリッド周辺上層（4層）木製品出土状況図

は、農耕具である鋤や鋤、生産具である横槌、縦杵、臼、高床式建物に伴う梯子などがまとまって出土している。また、グリッド中央部においては、建築部材を井下田状に組んだような状況が認められ、その中央部で完形の須恵器壺が出土している。I区で出土した遺物の中で須恵器はこの1点のみであり、この時期以降の段階の遺物は認められない。E-2・E-3グリッドはテラス状を呈しており、西側5ライン及び北側のDラインに向って地形が高くなる。ここでの地山的堆積層である6層上面の標高は4.6mを測り、P層の堆積を掘り下げると6層を検出する。西壁断面ではレンズ状の堆積が認められ、I区西方Ⅲ区からの流れの時期も想定できるが、4①・②層のように植物遺体を含むP層が水平堆積を示していることから、傾斜が緩やかな流路の溜りになる部分であると考えられる。

須恵器壺(Fig.13)は口縁部が上向き、据え置かれた状態で出土した。検出レベルは4.4mで、壺底部のレベルは、3.8mである。内部には、細砂と植物の葉がまとまって混入していた。周囲を囲むように丸太材(全長3.92m・全幅24cm)、挟りの入った角材(全長2.7m・幅10cm)など建築部材が出土しており、周囲に建物があった可能性が高いが、流路路面では、建物の痕跡を示すピットや竪穴状の掘り方は検出されなかった。

4層を除去すると、砂利層(7・8・9層)が堆積しているが、この層からは、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器を中心とする遺物が出土した。特に、旧層名をⅧ層(7・8・9層)とした砂利層中に多く含まれていた。完形の土器は、E-2・E-3グリッド、南部ではG-2

～H-2グリッドにかけて出土がみられた。E-2・E-3グリッドでは、小型丸底鉢、高坏などが出土しており、祭祀が行われた可能性も考えられる。

南部のH3グリッド周辺では、Ⅷ層下の鉄分を多く含み、固くしまった黄褐色砂礫であるⅨ層上面において甕・高坏・

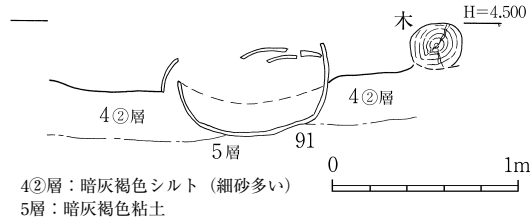


Fig.13 調査I区 E-3グリッド須恵器壺エレベーション

鉢が一定の間隔でサークル状に並んだ状態で検出されている。旧Ⅷ層である7・8・9層は、Fラインから南部にかけて厚く堆積しており、50～60cmの厚みを測る。F-4・F-3グリッドでは、この層を除去し、標高3.7m前後で、SR101の床面と考えられる6層を確認し、この面で杭列・溝状遺構 (Fig.14) を検出した。

杭列1は確認長29.0mで、杭間の距離は60～70cmを測る。杭の太さは直径3～5cm大のものが多く、方向は、N-42°-Eである。杭列2は、確認長28.8mで、杭間の距離は5～7cmを測る。杭の太さは3～6cm大のものが多く、方向はN-48°-Eである。杭2と杭3の間に幅15cmの矢板状の板杭が認められる。方向は杭列1・2ともにほぼ並行しており、杭列幅は15～28cmを測る。杭列3は、確認長1.32m、杭間の距離は30～60cmを測る。杭の太さは、4～6cm大であり、方向は、N-46°-Eである。杭列3も杭列1・2とほぼ並行しており、杭列2との列幅は0.8～1.0mを測る。

また、溝状の落ち込みが2条確認されている。SD1は、杭列1・2の東延長方向で検出され、方向は、N-70°-Eで、確認長3.55m、上端幅は0.45～1.40mを測る。深さは10.5～16.5cmを測り、浅い。埋土は、8層の砂利層であり、太形蛤刃石斧・叩き石が出土した。

SD2は、SD1の南で検出され、方向はN-86°-Eで、確認長3.15m、上端幅0.6～0.9mを測る。深さは6.7～15.9cmを測り、SD1同様に浅い。埋土は8層の砂利層であり、床面で石包丁が出土している。これらの溝は、I区のSR101の等高線に並行しており、流路の河道の一部である可能性もあるが、前述した杭列とともに、検出面が1時期生活面として存在していた可能性も考えられる。

また、これらの検出面において彩紋土器も出土している。出土地点はF-3グリッドであり、SR101床面の6層上面である。検出レベルは、No.1が3.852m、及びNo.2は3.705mである。

No.1は旧Ⅸ層(9層)からの出土であり、F-3グリッドとG-2グリッドで出土したものが接合した。壺の胴部片であり、外面に山形文状の文様が赤色・黒色交互に塗彩され施される。胴部上位に3条、中位やや上方に4条以上のヘラ描き沈線が巡る。また、胴部上位に2条の垂下する微隆起帯状の粘土帯が貼付され、横位に細かい刻みが施されている。調整は外面ハケ調整の後、密なヘラミガキが施され、頸部下端に、縦位のハケの痕跡が認められる。内面は、指頭圧痕が顕著に残る。胴部残存高は8.1cm、残存率は1/2である。器面全体の色調は淡褐色であり、塗彩部分は黒褐色、朱赤を呈する。胎土は砂粒をほとんど含まず、混和材として、直径2～4

第1節 I区

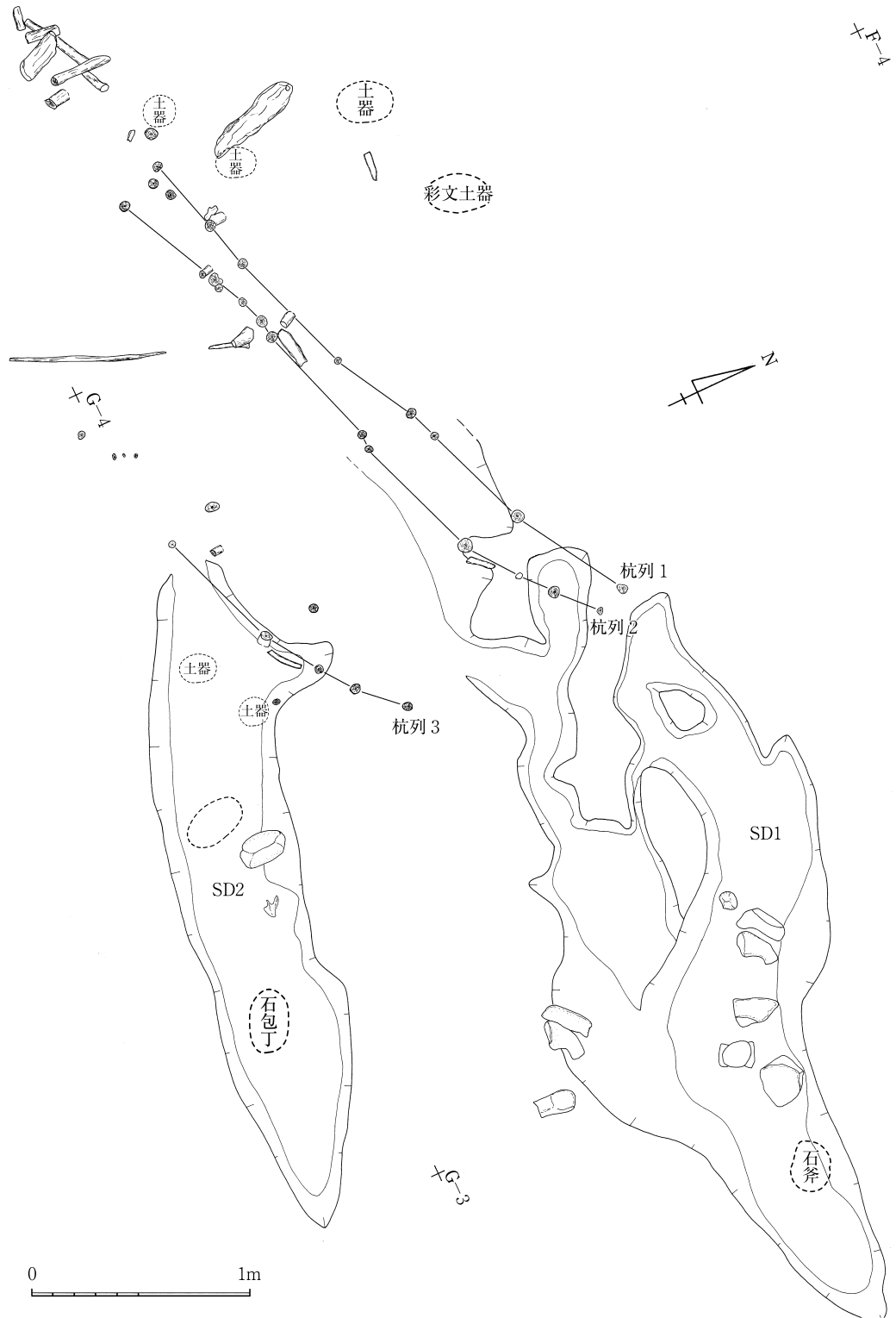


Fig.14 調査I区 SR101床面SD1・SD2及び杭列遺構図

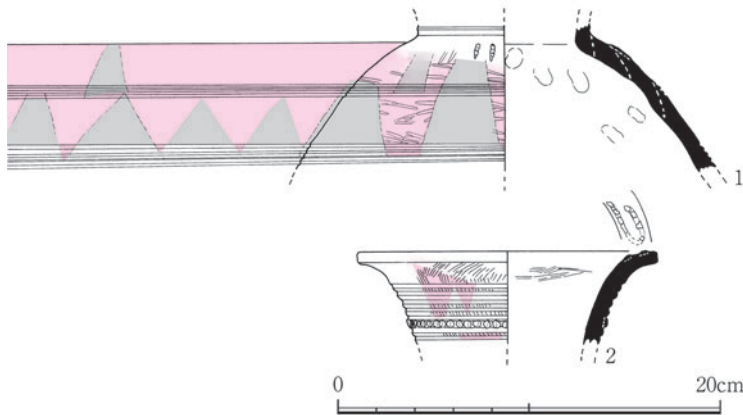


Fig.15 調査I区 SR101出土彩紋土器

mm大の花崗岩礫を含む。

No.2は調査区南東端のH-1グリッドの旧IX層(9層)から出土した壺の口縁部片であり、外面頸部に赤色塗彩が認められる。頸部外面には、7条以上の沈線が施され、上から5条と6条の間に断面三角形の刻目突帯が貼付される。塗彩は外面全体に施されていたものと思われるが、口縁部の一部、及び沈線に残存している。口縁部は大きく外反し、端部はナデにより面を成す。口縁部内面には、3mm前後の細く扁平な粘土帯が楕円状に貼付され、刻みが施される。外面の調整はハケが施され、頸部は縦位、口縁部は斜位のハケ目が残る。内面は口縁部の一部にハケ目残り、頸部はナデが施される。口径15.6cmを測る。胎土には直径3～5mm大のチャートが微量認められる。

(4) S R 101出土遺物

S R 101からは多量の土器、木器などが出土している。木器は4層を中心に出土しており、土器は7・8・9層のG層から多く出土がみられた。9層は前述したように弥生時代前期末葉～中期初頭の土器群がみられ、7・8層では弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての遺物群が集中して出土している。これらの堆積層は、調査区内において部分的な堆積のものもあるが、出土遺物からみれば流路が埋積してゆく変遷の傾向を窺うことができる。出土遺物については、流路内において可能な限り層位的に取り上げを行ったが、堆積層が部分的な箇所もあり、一括性は乏しい。ここでは、出土遺物を器種ごとに並べ、述べて行く。遺物についての特徴、胎土等詳細は、観察表を参照されたい。

壺1 (Fig.16No.3～13)

ここでは、弥生時代前期末～中期初頭にかけての壺を挙げた。3はF-3グリッド8層から出土した胴部片であり、ヘラガキ沈線が施され、刻目突帯が貼付される。4はG-2グリッド9層出土であり、胴部にヘラガキ沈線が施される。3・4ともに、胴部の最大径が下位にくる。5・6は口縁部片であり、G-2グリッドからの出土である。5は広口壺の口縁部片であり、口縁部内外面にハケ状工具による圧痕文が施される。6は長頸広口壺であり、ヘラガキ沈線、断面

三角形の刻目突帯が施され、口縁部には円孔が2個認められる。7も長頸壺であり、頸部にヘラガキ沈線が施される。8～10は広口壺の口縁部片である。8は直立気味の頸部にヘラガキ沈線と刻目突帯が施される。口縁部は粘土帯が貼付され、端部に刻目が施される。9も端部に刻みが施され、頸部は無文、ハケ目が一部縦位に残り、胴部上位に1条沈線が認められる。10・11は口縁部片であり、口縁端部は面を成すが、刻みは施されず口縁下端から頸部に沈線が施される。12・13は胴部片である。12は沈線間に山形文、13は流水文が施される。

甕1 (Fig.16No.14)

14は甕であり、頸部外面に断面三角形の突帯が縦位に4条貼付され、口縁部から下位に弧状に2条の突帯が貼付される。

壺2 (Fig.17No.15～25・Fig.18No.26)

ここでは、弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての壺を挙げた。15・16はH-1グリッド8層中において一括出土しており、球形の胴部を持つ。16の底部は丸底を呈する。胴部上位に「回」の字状及び、台形状線を描き、縦位及び斜位に4本の線で区画状にした線刻が並んで施される。17・18は広口壺である。17はラッパ状に開き、頸部外面は縦位にヘラミガキが施される。18の口縁部は欠損するが、胴部外面にタタキ目が残る。19は広口壺であり、口縁部はナデにより水平な面を成し、内側にやや突出する。20・21は直口壺の頸部であり、粘土帯が貼付され、20は列点状の圧痕文、21は斜格子状の文様が施される。22・25も直口壺であり、口縁部内外面は密なヘラミガキが施される。胎土は淡褐色を呈し、搬入品である。24も直口壺であり、ヘラは使用されず、ハケ調整である。26は壺である。球形状に張る胴部から口縁部は間延びしながら立ち上がり、外反する。胴部に横位のタタキ目が残る。

甕2 (Fig.18No.27～42・Fig.19No.43～45)

27～41は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の甕である。27は、胴部最大径が上位にあり、内面の下位はヘラケズリ上位から口縁部にかけては指頭により縦位のナデが施されている。

28は胴部中位に最大径を持つ長胴形の甕であり、内面は頸部までヘラケズリが施される。29は球形に近い胴部であり、内面胴部中位までヘラケズリが施される。28・29ともに外面にタタキ目残り、ハケ調整は認められない。30は上胴部に最大径があり、口縁部はくの字に外反する。壺24と甕27・29・30・45はH-1グリッド9層上面でサークル状に一定の間隔を置きながら一括出土した。31は、胴部中位から下半のタタキ目は縦位のハケにより消されている。内面は細かい単位で斜位にハケ調整が施される。内面胴部と口縁部の境に粘土貼付痕が認められ、やや段を残す。32の口縁は緩やかに外反しながら延びる。33はくの字に強く外反する。34は胴部外面にタタキ目、口縁部はハケ調整が施される。35の口縁は緩やかに外反しながら延びる。内面口縁部と頸部の境目の稜が顕著である。36は口縁部をタタキだし、緩やかに外反する。37は胴部上位、頸部と口縁部の境に粘土帯接合部が認められ、内面に稜が顕著である。38の内面にも口縁部と頸部の境に稜が顕著であり、口縁部内面は横位のナデにより平らになる。39～42の口縁端部は面を成す。全体的に内外面ともにハケ調整が施され、外面はタタキ目がほとんど認められない。43は、丸底の底部から胴部は球形を呈し、口縁部は外反する。外面器面調整は

細かい単位のハケ調整が全体に密に施される。胴部下半から口縁部にかけて煤が付着する。44はやや長胴を呈する。45はH-1グリッド一括出土の甕であり、器形的には27に類似する。底部から胴部下半、胴部と口縁部の境に粘土接合痕が認められ指頭圧痕が顕著である。分割成形である。

底部片 (Fig.19No.46~59)

46~48は長胴砲弾形の甕の底部である。僅かに平底を残す。49は平底の分厚い底部から内湾する。50は甕の底部であり、安定感のある平底である。51は壺の底部であり、円盤状の底部から段を持って内湾する。52・53も壺の底部であり、平底から段を持ち内湾する。内面は横位のヘラズリが認められる。54は鉢の底部片であり、平底の底部からやや段を持ち、斜上方に立ち上がる。H-1グリッド一括出土遺物である。55・58は弥生中期前半の壺・甕の底部片である。55は壺底部片であり、外面に指頭圧痕が残る。56の器壁は薄く、胎土は灰褐色を呈する甕である。59の底部外面には、周縁部にヘラ状工具による沈線が1条巡る。

甑 (Fig.20No.60~65)

丸底を呈するタイプ60・62平底気味のタイプ61尖底状のタイプ63・64がある。62の底部外面はラセン状のタタキ目が認められる。61の底部外面にはタタキ目が残り、タタキにより、平底に成形したものと思われる。65は弥生中期前半の壺の底部片であると考えられ、焼成後の穿孔が認められ、甑として転用されたものと考えられる。

小型器種 (Fig.20NO.66~73)

66~68は小型丸底鉢である。66は甕の器形であり、口縁部は外反する。H-1グリッド8層からの出土である。67は有段部を持つ丸底鉢である。口縁部内外面は密なヘラミガキが施される。68は丸底から内湾し、口縁部は短く外反する。内面胴部と口縁部境に段を有し、稜を成す。やや扁平気味な器形であり、外底部にタタキ目が一部残る。69は平底の鉢である。外面に縦位の亀裂が入る。70は手捏ね成形であり、上面からみると不整楕円形を呈する。口縁部は短く直立する。H-1グリッド9層上面からの出土である。71は椀状の器形であり、円盤状の底部から体部は内湾する。外面に縦位の亀裂が入る。72は皿状を呈する。内面は細かい単位のヘラミガキが施される。73は小型器台と考えられる。受け部に一方向に突起が付く。柱状部外面の一部に赤彩が施される。H-1グリッド8層からの出土であり、66及び70とセットと考えられる。

鉢 (Fig.20No.74~82)

完形の鉢は、E-1・E-2グリッドでまとまって出土している。丸底から内湾するタイプ74~76、平底タイプ77、やや尖り気味の丸底から内湾するタイプ78~81、高台状の台が付くタイプ81・82がある。74の口縁部は強いヨコナデにより、外傾する面を成す。75は底部から口縁部にかけてラセン状のタタキ目が残る。76は口縁端部が水平な面を成す。77は平底から内湾気味に斜上方に開き、口縁端部は外傾する面を成す。78の内面は螺旋状のハケ調整が施される。77・78ともにE-1グリッド9層上面において一括出土した。79の口縁部は尖り気味に仕上げる。80の内面は放射状にハケ調整が施される。外面はナデ、縦位に亀裂が認められる。81の口縁部は短く外反する。82はF-2グリッド4層からの出土である。高台状の底部を有するが欠

損している。外底部脇に高台部を成形する際の指頭による圧痕が顕著である。

高坏 (Fig.20No.83~90)

坏部では、椀状を呈するタイプ83・84、腰折れタイプ85がある。85は内面に密なヘラミガキが施される。腰折れ部を境に分割して成形される。86~90は脚部である。86はH2グリッド8層から出土した。充実した柱状部から裾部はラップ状に開く。88の脚部内面には絞り目が残る。90はH-1グリッド8層から出土しており、中空の脚部内面には絞り目が残る。

須恵器壺 (Fig.21No.91)

91はE-3グリッド4層出土の須恵器壺である。I区では、須恵器の出土はこの1点のみである。丸底から外上方に膨らみ、胴部上位に最大径を測る。口縁端部は面を成し、凹線状の沈線が2条巡り、直下に断面三角形の突帯が巡る。

以上、出土遺物を見てきたが、遺物の時期の中心は弥生時代末~古墳時代前半にかけてであり、特に、H-1グリッド、E-1・E-2グリッドの流路の蛇行部に集中して出土がみられる。内容も小型器台、小型丸底壺・甕・鉢・高坏などがセットと考えられ、先述のグリッド地点において祭祀的行為が行われていた可能性が指摘できる。

木器 (Fig.22~25No.92~112)

木器は、S R 101の4層からの出土である。グリッドではE-3・E-4で集中して出土がみられる。92~94は堅杵である。92は一方の身部が欠損する。残存長50.7cmを測り、身部は土圧により扁平になっているが、直径5.1~7.8cmを測る。握り部は2.9cmを測る。敲打面は金属工具により球面状に作るが摩滅が著しい。握りの部分も金属器で細く削った痕跡が認められる。樹種はツバキである。93は出土状況から92とセットと考えられる。握り部は欠損する。残存長は41.2cm、身部の直径は6.2~8.3cmを測る。樹種はツバキである。94もE-4グリッドで出土している。握り部の一部が欠損するがほぼ完形である。全長73.4cm、身部の直径は5.3~8.0cmを測る。握り部は直径1.8~3.6cmを測る。土圧により扁平になる。敲打部は両端とも使用されており、加工痕は認められない。握り部は、金属器によるケズリが認められる。樹種はサカキである。95は横槌である。敲打部と握り部の境はバットのよう滑らかに連続的である。全長61.4cm、敲打部直径8.0~10.5cm、握り部の直径は2.8~3.3cmを測る。樹種はツバキである。96は木臼である。木口を円形に刳り貫き、断面逆台形状を呈する。全長41.3cm、全幅23.5cm、全厚11.5cmを測る。凹み部は直径21.2~24.5cmのほぼ円形で、深さ9.2cmを測る。樹種はクリである。97は横槌である。全長30.4cm（敲打部16.9cm、柄部13.5cm）、全幅は敲打部9.9~11.6cm、柄部2.3~2.7cm、柄端部直径は4.9~5.3cmを測る。柄端部は太く、1条の沈線が巡る。敲打部の一側面は扁平であり、楕円形を呈する。樹種はツバキである。98は台状木器である。97の横槌とセットで出土していることから、碇・藁打ち用の台として使用されたものと思われる。平行四辺形状を呈し、全長33.4cm、全幅21.5cm、全厚10.1cmを測る。樹種はエノキである。99は、直柄鋏先である。全長22.3cm、全幅17.8cm、全厚2.6cmを測る。上端部は、突起状に肥厚し、2.5cmを測る。着柄部は方形であり、孔径2.9×3.3cmを測る。着柄角度は60°前後であり、上端部の突起状の形態から泥除け具の可能性もある。樹種はアカガシ亜属である。

100は形態的には広鋏と思われるが、一側片が欠落している。また、着柄の角度が刃部に対して平行に穿孔がみられるため、広鋏から泥除け具としての転用として考えられる。全長29.2cm、全幅16.4cm、全厚1.2cmであり、着柄部の孔径は2.9cm前後を測り、角度は30°～40°である。101～103は織機具の部材であると思われる。101は、長方形の板材であり、10個の方形穴が並ぶ。全長59.4cm、全幅4.0cm、全厚0.8cmを測る。方形穴の孔径は一辺1.2cmを測り、方形穴間は6.0cmである。102は断面楕円状を呈し、中央部がやや肥厚する。102の形状は101と同じであり、現存部で13個の方形穴が並ぶ。現存長54.7cm、全幅3.8cm、全厚0.9cmを測る。方形穴の孔径は一辺0.7～1cmを測り、方形穴間は4.4cmである。一側片は面取りされ薄くなる。101・102とも樹種は杉である。103はⅥ区SR601P層出土である。断面菱形の身の両端に柄状の突起を作り出したものである。突起部は一端がやや細くなり、断面方形から台形状を呈する。全長39.2cm、突起部は2.2～2.7cmを測る。身全幅は3.4cmを測り、突起部幅は0.8～0.9cmである。樹種はヒノキである。104は琴柱である。上辺に絃受けのU字溝を作り、斜辺及び底辺は弧状に削り込む。底辺3.7cm、上辺1.2cm、高さ2.1cm、底辺厚1.1cmを測る。樹種はヒノキであると思われる。105は板状の部材である。一端は欠損しており、溝状の柄穴が認められる。現長58.8cm、全幅9.4cm、全厚2.2cmを測り、柄穴部分は断面方形を呈し、幅2.8～3.0cmを測る。樹種はブナ科スタジイである。106は長方形の板材の一辺を斜めにカットし、片方よりに方形の柄穴が穿孔される。全長57.6cm、全幅10.7cm、全厚2.4cmを測る。方形孔径は0.9×1.0cmである。全面に鉋状の工具による削痕が認められる。柄穴がある反対側の側片はV字状に切り込みがみられ、組み合わせ部材であると考えられる。樹種はヒノキである。107は一側片に偏った位置に、断面方形の溝状の柄穴があり、この部分から弧状に削り込む。このため柄穴部分は隆起し、両側は板状に薄くなる。一端を欠損しており、現残存長で55.0cm、全幅23.4cm、全厚は柄穴部分で2.7cm、身部は0.4～0.8cmを測る。また、柄穴部から一側片に向かって弧状に削り込むが、この側片側が剥離しており、身部と剥離側に補修孔合計8個が設けられ、桜皮で繋ぎ補修している。樹種はコウヤマキである。108は梯子である。全長199.9cmを測り、全幅12.8cm全厚は、身部で3.6～4.8cm、段部踏み面部で7.4cmを測る。上端部は先端を丸め、裏面に肥厚する突起状の部位を持つ。段部は5段であり、踏み面は4.2～6.3cmを測る。基部は二又であり、内湾するように削り、先端は尖る。樹種はミズキである。109は長方形盤もしくは槽の断片であると思われる。横木取りで、断面形は逆台形状を呈し、全長48.3cm、現存幅は13.2cm、全厚は底部で1.3cm、側面は2.8～3.0cmを測る。樹種はスギである。110・111は、ナスビ形膝柄鋏の基部であると考えられる。110は基部側面を斜めに面取りし、断面形は台形を呈する。全長15.7cm、全幅は基部先端で2.2cm、笠部になると思われるところで8.7cmを測り、全厚は1.2cmである。樹種は、ブナ科アカガシ亜属である。111は、現存長15.0cm、全幅は基部先端で3.8cm、笠部の一端は欠いているが現存している部分で8.65cm、全厚は1.1cmを測る。樹種は、ブナ科アカガシ亜属である。112は、鳥形状木器である。全長20.7cm、全幅7.1cm、全厚1.3cmを測る。樹種はスギである。

これらの木器は、古墳時代初頭～前半のものと考えられる。

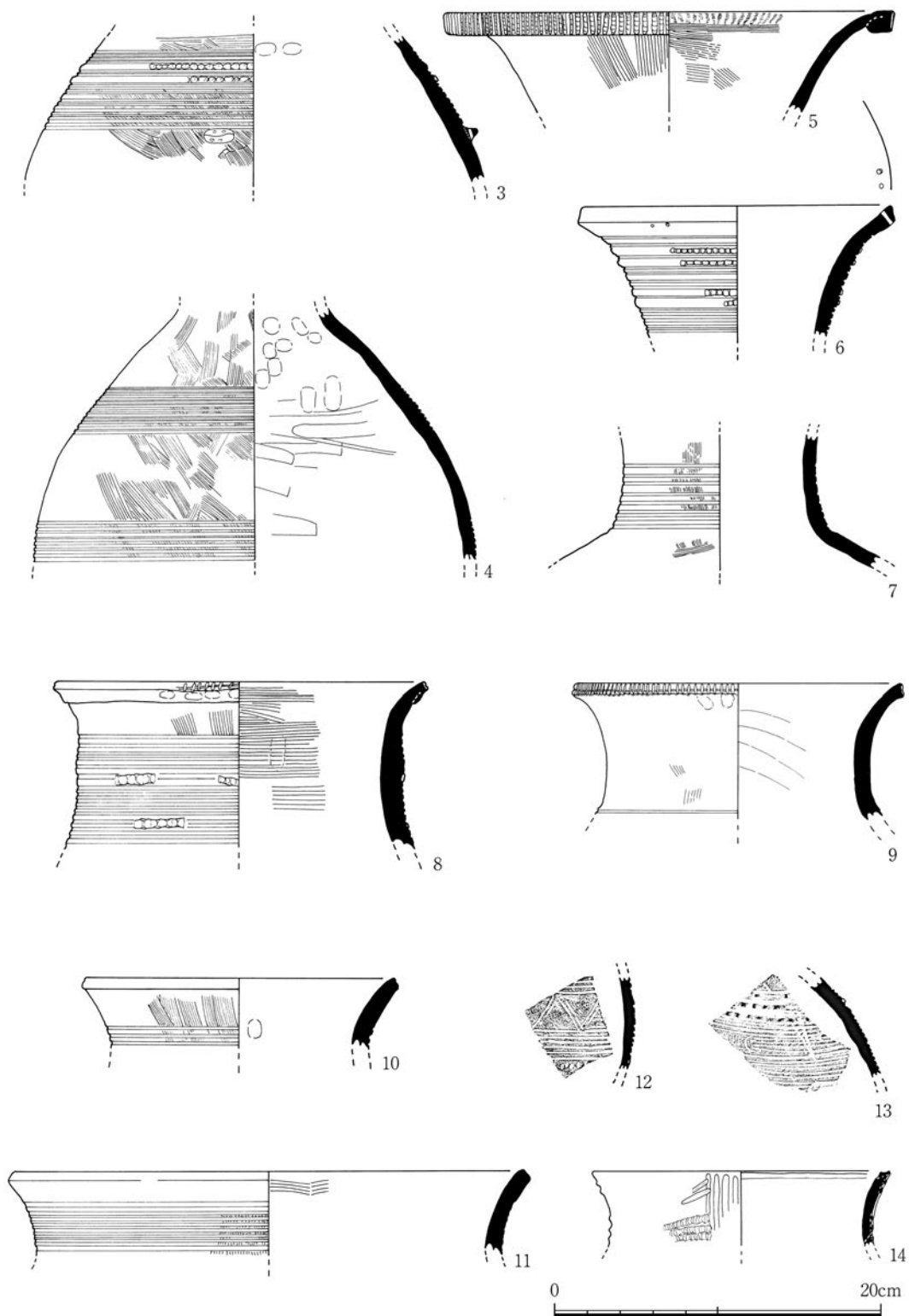


Fig.16 調査I区 壺1 (弥生時代前期末~中期初)・甕1 (NO.14)

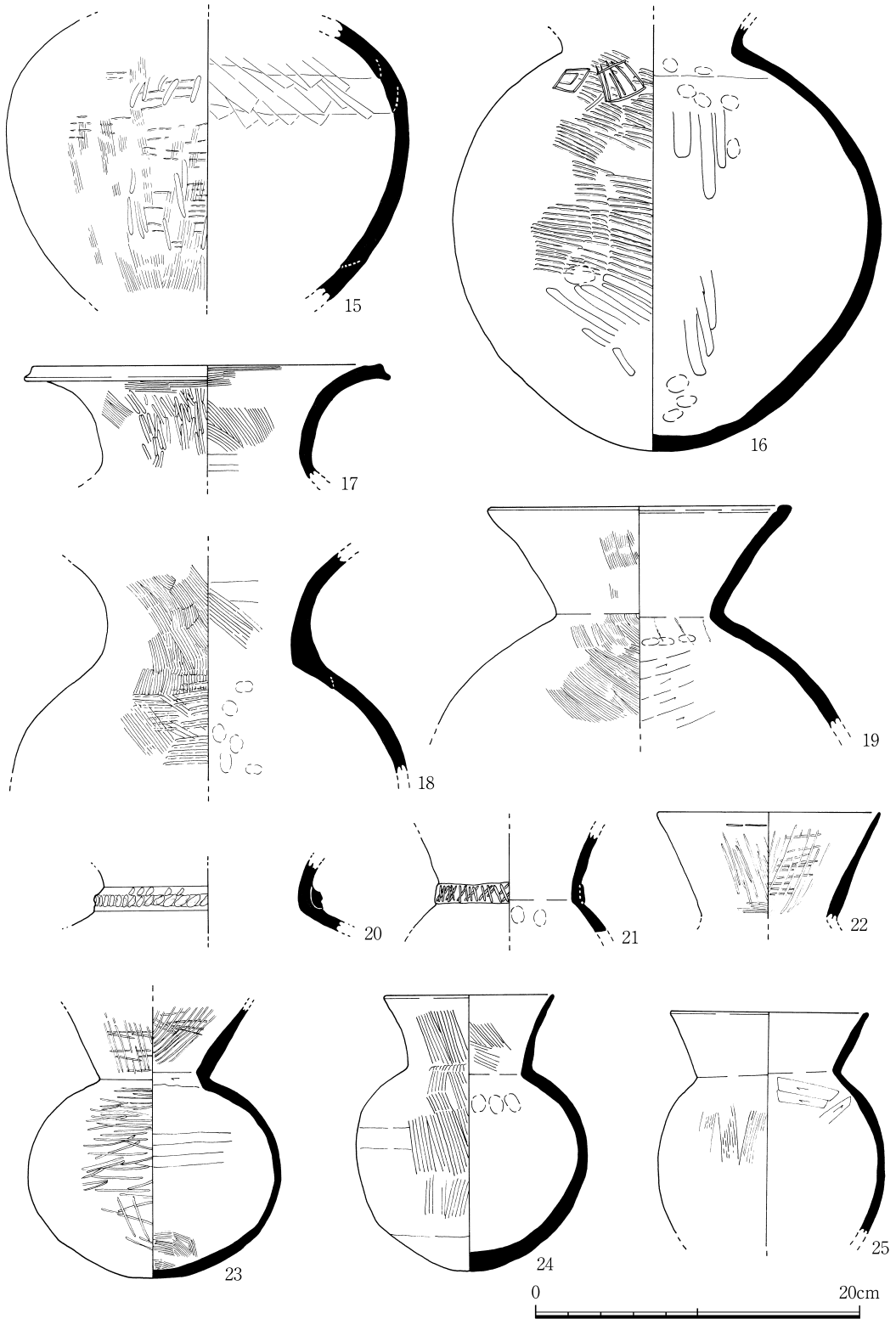


Fig.17 調査I区 壺2 (弥生時代後期末～古墳時代初頭)

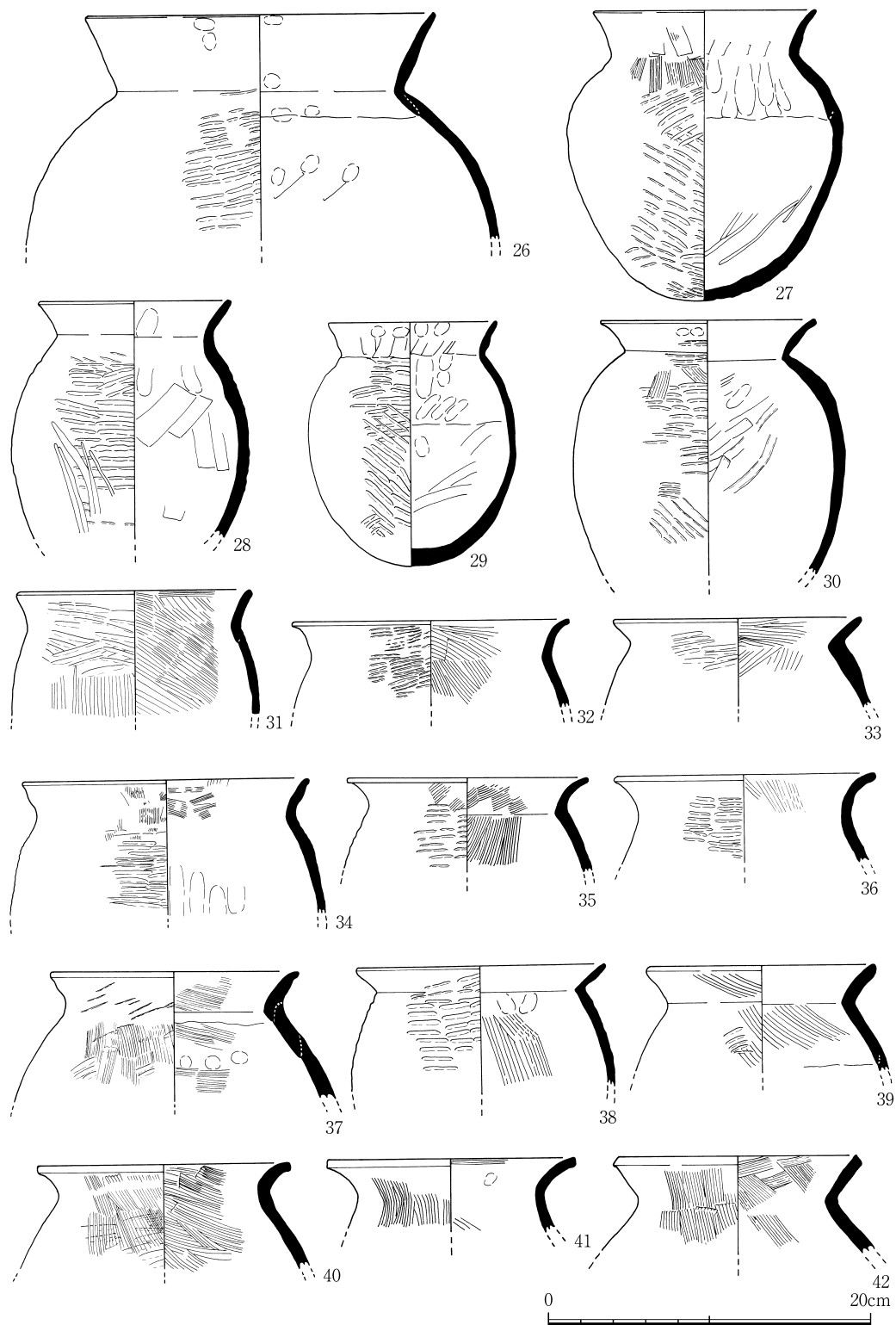


Fig.18 調査I区 甕2 (弥生時代後期末～古墳時代初頭)

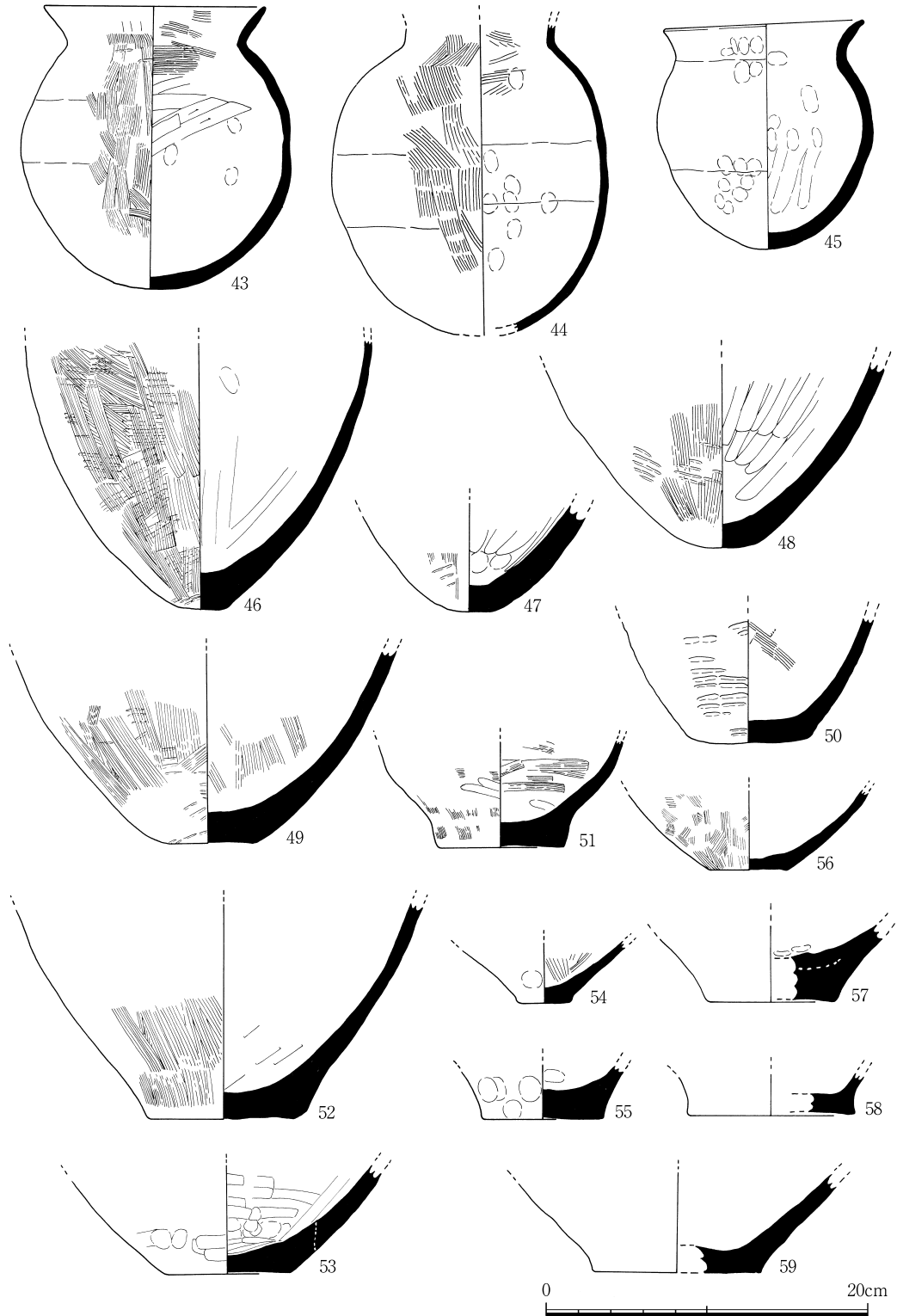


Fig.19 調査I区 甕・底部

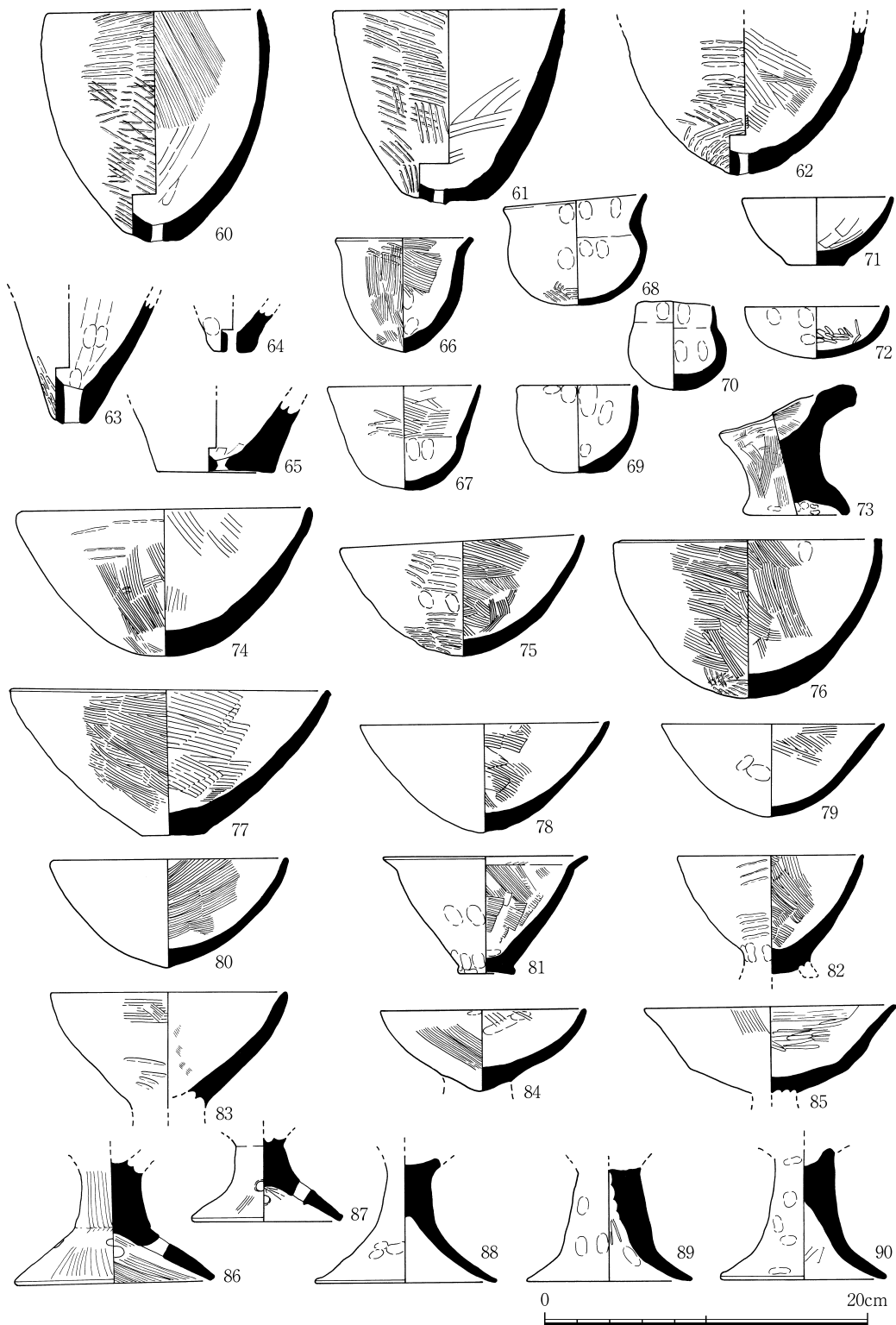


Fig.20 調査I区 甌・鉢・高坏

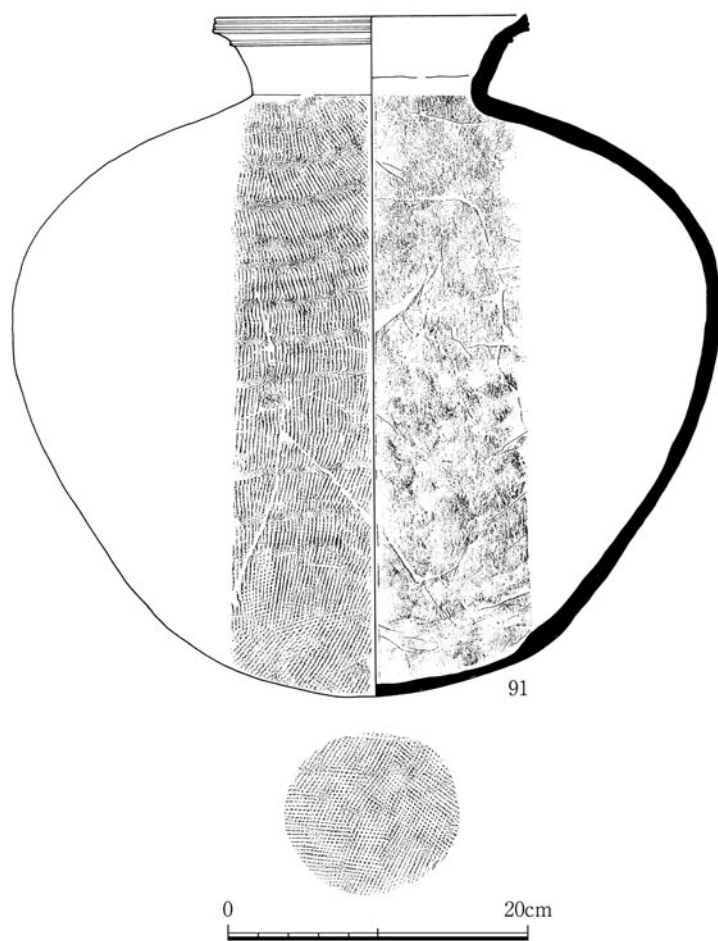


Fig.21 調査I区 須恵器壺

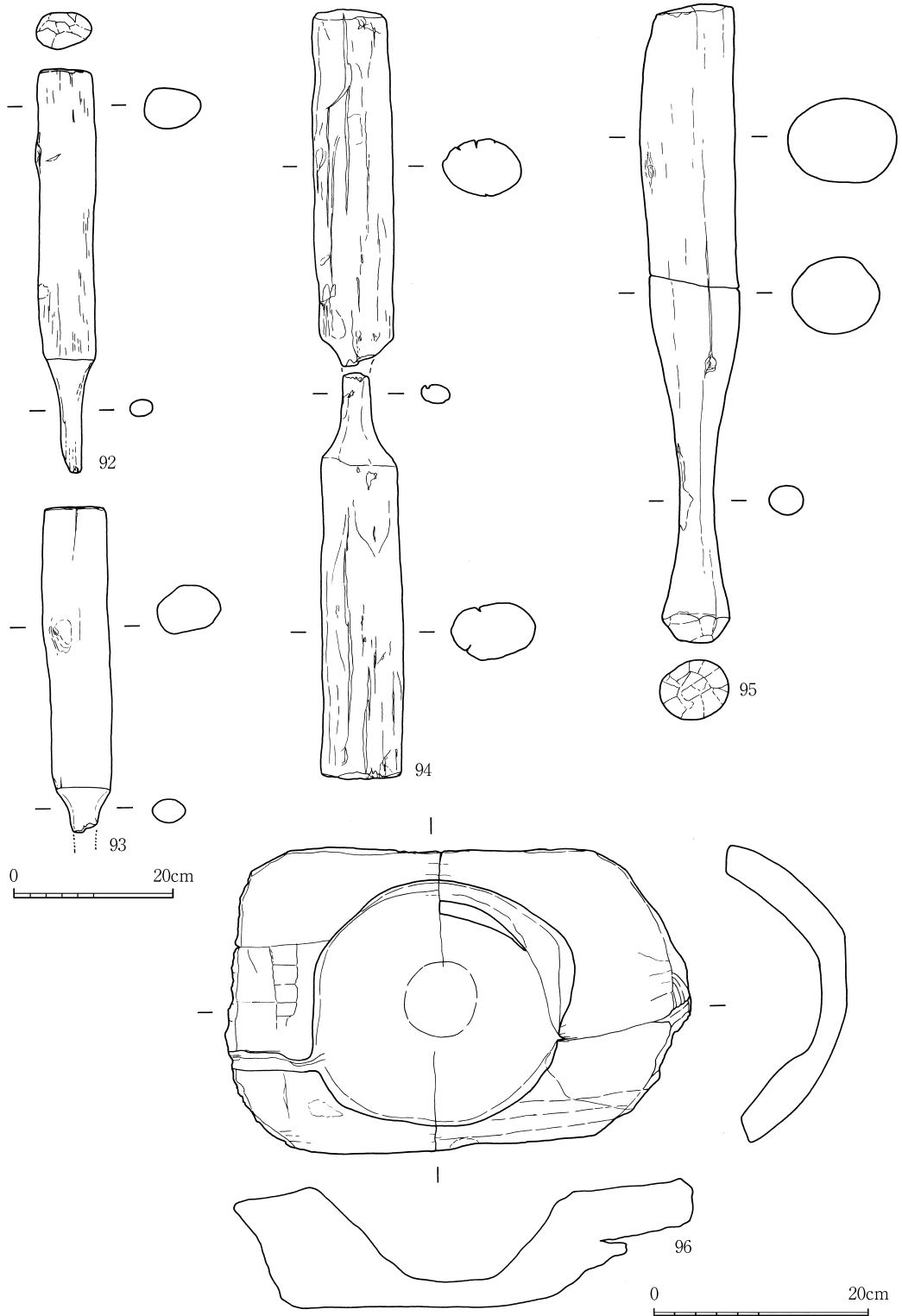


Fig.22 調査I区 堅杵・横槌・臼

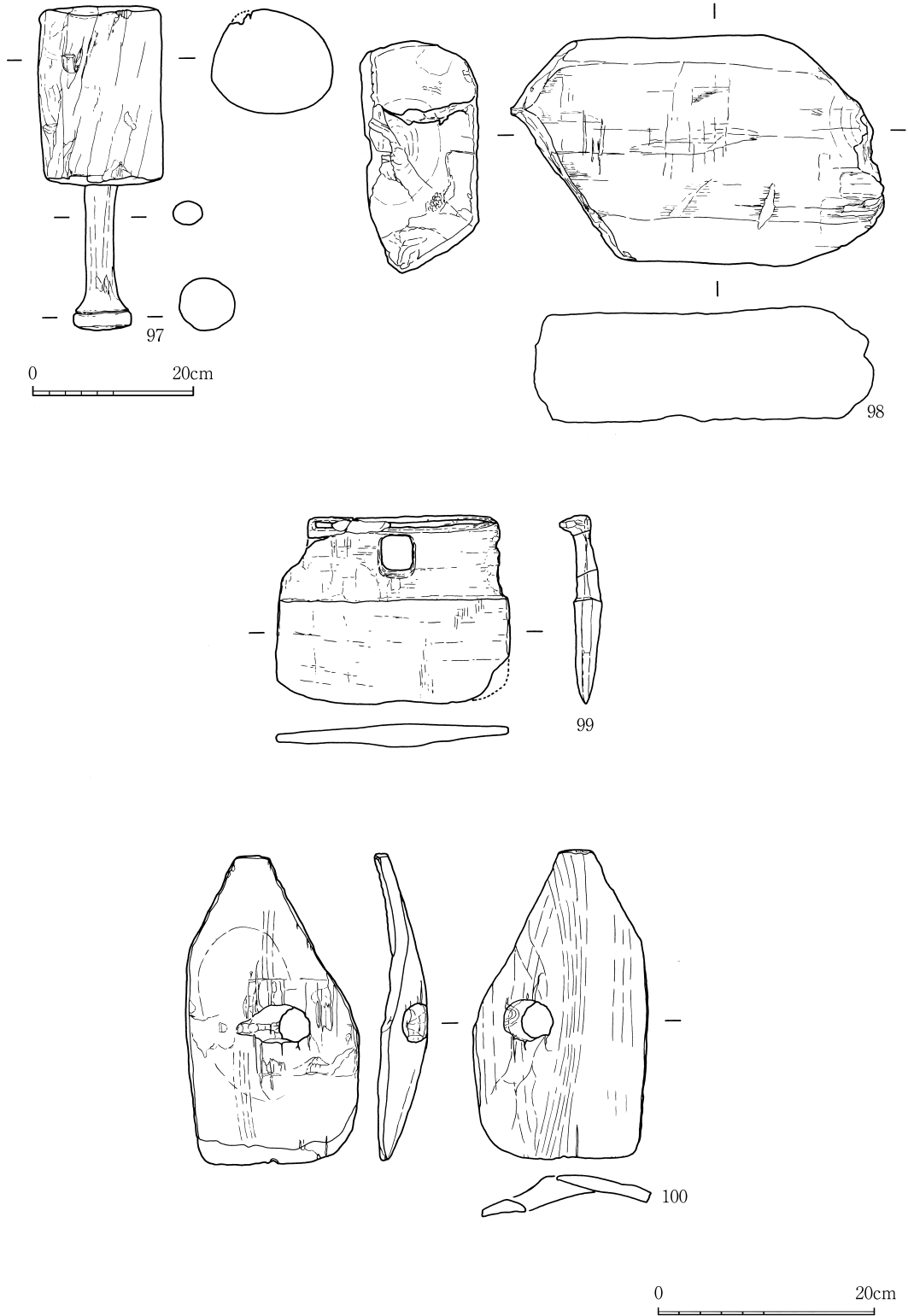


Fig.23 調査I区 横槌・台状木器・鋏

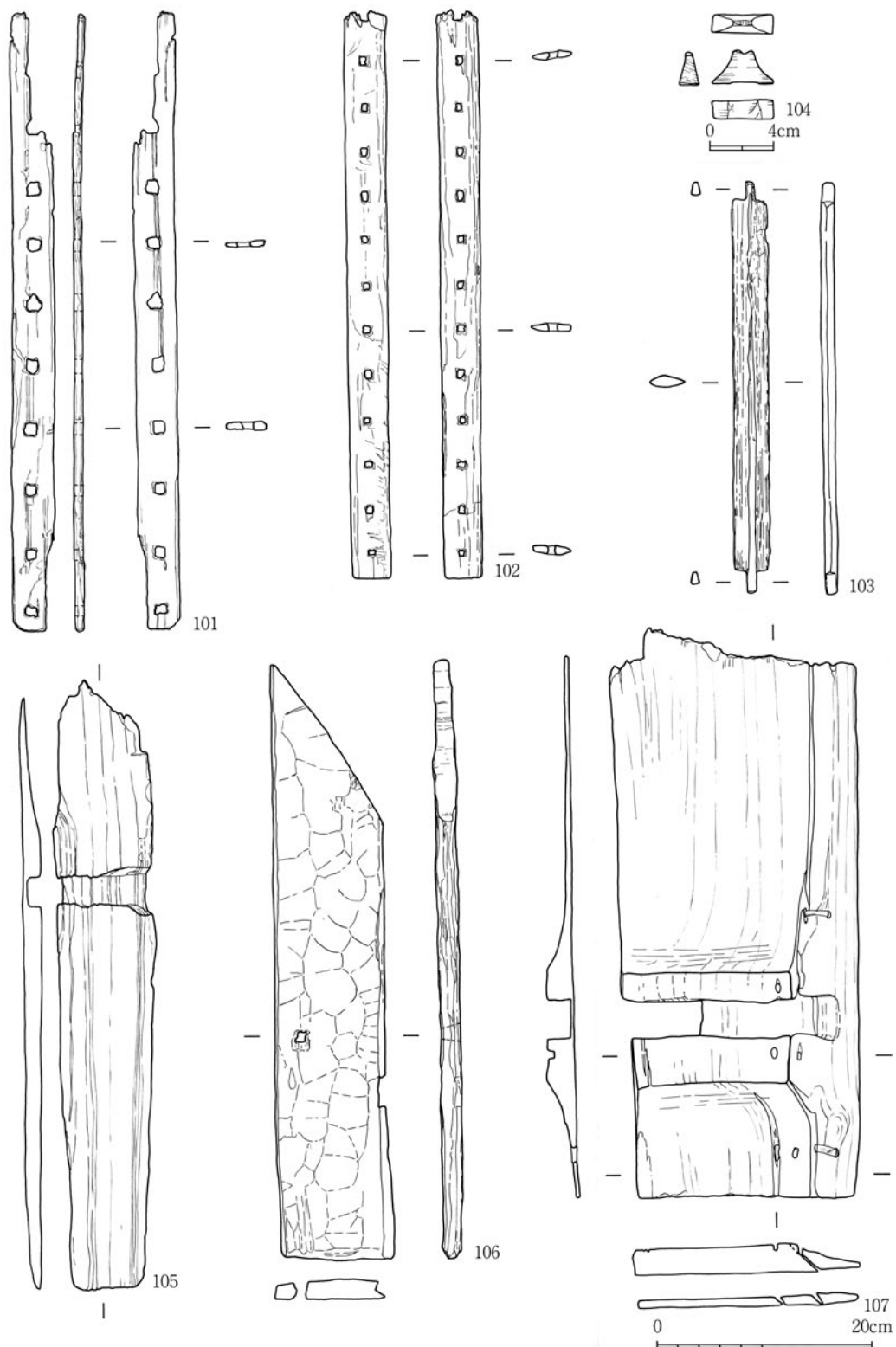


Fig.24 調査I区 琴柱・部材



Fig.25 調査I区 梯子・槽・鋏

Tab.1 調査I区遺物観察表1

Fig. No.	遺物 No.	出土地点 (グリッド)	層位	器種	法 量				特徴 (形態・文様・成形・調整)	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
16	3	SR1-F3	8層	壺		(9.1)	(29.0)		肩部に17条のヘラ描き沈線が施され、上位に2条の刻み目突帯が貼付される。下位には断面三角形の瘤状突起が貼付され、直径2mm大の円孔が2個縦位に施される。外面ハケ調整。内面胴部は横位のハケ状工具によるナデ。	2mm大の砂粒。5mm大の石英を含む。浅黄色。
16	4	SR1-G2	9層	壺		(15.7)	(27.6)		肩部に12条、胴部の現存している部位に7条、幅2～3mm大のヘラ描き沈線が施される。外面ハケ調整。内面胴部は横位のハケ状工具によるナデ肩部から上部は指頭によるナデ。	0.5～2mm大の砂粒。4mm大のチャート礫含む。にぶい橙色。
16	5	SR1-G2	4層	壺	28.0	(6.3)			口縁部は外反する。端部は粘土帯を貼付し面を成す。外面口縁端部には荒いハケ状工具により縦位に刻みを施す。内面口縁部も同一の原体の工具により縦位の刻みを施す。外面頸部に縦位のハケ。内面は横位のハケ。	0.5mm大の砂粒3～5mm大のチャート含む。にぶい橙
16	6	SR1-G2	8層	壺	19.2	(8.2)			口縁部は外反し、端部は面を成す。外面口縁下部から頸部にかけてヘラ描き沈線が施され、2条単位で扁平刻目突帯が施される。内外面ナデ。口縁部に円孔が2個認められる。	0.5mm大の砂粒3～5mm大のチャート含む。にぶい橙
16	7	SR1-H1	8層	壺 (頸部)		(8.2)			頸部に8条のヘラ描き沈線。外面ハケ調整。	0.5～2mm大の砂粒。3mm大のチャート礫含む。にぶい橙色。
16	8	SR1-E1	8層	広口壺	23.0	(10.4)			直立気味の底部から口縁部は外反する。口縁部は貼付で、端部に縦位の刻みが施される。頸部に14条の沈線が施され、扁平な刻み目突帯が貼付される。外面ハケ口縁部横位のナデ調整。内面横位のハケ。	3～5mm大のチャート・石英含む。
16	9	SR1-G1	4層	甕	20.0	(7.0)			口唇部に横位の沈線が、1条巡り、縦位の細かい刻目が施される。外面頸部にハケ目残る。内面はヘラ状工具によるナデ。	0.5mm大の砂粒。チャート・石英・白雲母片含む。にぶい黄橙色。
16	10	SR1-G1	9層直上	広口壺	19.4	(4.3)			口縁部は外反し、端部は面を成すが強いヨコナデにより上方に突出する。外面にヘラ描き沈線が3条施される。外面縦位のハケ。	2mm大のチャート含む。
16	11	SR1-G1	9層直上	広口壺	32.0	(5.3)			口縁部は外反し、端部は面を成す。外面にヘラ描き沈線が7条施される。外面縦位のハケ口縁内面に横位のハケ調整。外面にタール附着。	2mm大の石英多く含む
16	12	SR1-G2	9層	壺 (胴部)		(5.7)			外面上位に3条以上、下位に5条のヘラガキ沈線が施され、間に双線による山形文が施される。外面ハケ調整。	0.5～2mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
16	13	SR1-F1	9層	壺 (胴部)		(5.5)			外面上位にヘラ描き沈線と刻目突帯が施され、下位には直線文末端扇形文がヘラにより施される。外面ハケ調整後ナデ。	0.5～4mm大の砂粒。浅黄橙色。上位の文様帯は赤橙色を呈する。
16	14	SR1-H2	8層	甕	18.4	(4.7)			口縁部は大きく外反し、端部内面に微隆起帯状の突帯を貼付。外面断面三角形条の突帯が縦方向に4条以上貼付される。弧状に2条の突帯を貼付し、その下に3条の刻目突帯が配する。内外面ナデ。	
17	15	SR1-H1	8層	壺 (胴部)		(17.5)	(25.3)		胴部は球形を呈する。外面タタキ成形後、縦位の細かいハケ調整。内面胴部下半は横位、上半は斜位のヘラ削り。線刻土器と一括出土	0.5～1mm大の砂粒。石英・チャート含む。
17	16	SR1-H1	8層	壺 (線刻土器)		(26.6)	26.9		底部は丸底で胴部は球形を呈する。胴部上位に幅1.5～2mmの幅でヘラ状工具により「回」の字状及び、方形を描き縦位に4本の線で区画状にした線刻が並んで施される。外面タタキ成形。胴部下半ナデ。内面は指頭によるナデ。	1～3mm大の砂粒。浅黄橙色。
17	17	SR1-H1	8層	壺	22.0	(7.1)			口縁部はラッパ状に開く。口縁端部はナデにより下端が横に突出する。外面頸部ヘラミガキ。口縁部はナデ。内面頸部ハケ。下半はヘラ削り。口縁部の一部にヘラミガキ。	0.5～4mm大の砂粒。浅黄橙色。

Tab. 1 調査I区遺物観察表2

Fig. No.	遺物 No.	出土地点 (グリッド)	層位	器種	法 量				特徴 (形態・文様・成形・調整)	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
17	18	SR1-F2	9層	広口壺		(13.7)	24.8		内湾する胴部から頸部は直立気味に立ち上がり外方に開く。外面胴部にタタキ目。頸部は縦位のハケ調整。内面胴部はナデ、頸部はハケ調整。	0.5~2mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
17	19	SR1-I1	8層直上	広口直口壺	18.8	(13.9)			球形に張る胴部から口縁部はくの字に外反し直線的に延びる。口縁端部はナデにより水平な面を成し、やや内側に突出する。	1~2mm大のチャート・石英含む。
17	20	SR1-I3	8層	壺 (頸部)		(4.0)			頸部に指頭による刻みを持つ粘土帯を貼付。ナデ。	0.5~3mm大の砂粒。チャート・石英含む。
17	21	SR1-I2	9層	長頸広口壺		(6.2)			頸部に斜格子状の刻みが施された突帯が巡る。ナデ。	0.5mm大の砂粒。2mm大の石英・チャート少量含む精選された胎土。灰白色。
17	22	SR1-E1	8層	直口壺	13.9	(6.7)			口縁部は、斜上外方に直線的に延びる。端部は尖り気味に仕上げる。内外面ともに密なヘラミガキ。	細砂粒。精選された胎土。にぶい橙色。
17	23	SR1-H2	8層	直口壺		(17.0)	15.9		球形を呈する胴部から口縁部はくの字に外反し、直線的に延びる。外面全体及び口縁部内面は密なヘラミガキ。胴部内面は横位のヘラケズリが施され、内底部は単位の細かいハケ調整。	細砂粒。精選された胎土。にぶい橙色。
17	24	SR1-H1	9層	直口壺	10.6	17.2	14.6		球形を呈する胴部から口縁部はくの字に外反し、直線的に延びる。体部下半の一部にタタキ目残る。外面縦位のハケ内面口縁部は斜位のハケ。	0.5~1mm大の砂粒。2~5mm大のチャート・石英多く含む。にぶい橙色。
17	25	SR1-E2	4層	直口壺	12.3	(14.0)	14.7		球形を呈する胴部から口縁部はくの字に外反し、直線的に延びる。外面は縦位のハケ内面胴部はヘラケズリ口縁部はヨコナデ。胴部中位から下半に煤付着。	0.5~1mm大の砂粒。明黄褐色
18	26	SR1-E1	4層	甕	22.0	(14.3)			内湾する胴部から口縁部は外反し、斜上方に延びる。外面胴部はタタキ。口縁部は内外面ナデ。内面胴部は、接合部より下位はヘラケズリ。	0.5~1mm大の砂粒。石英含む。浅黄橙色。
18	27	SR1-H1	9層	甕	14.0	18.3	17.4		球形に近い胴部を有し、口縁部は間延びしながら外反する。外底部から上胴部にかけて全体的にタタキ目残る。口縁部下位から上はハケ調整。内面胴部下半はヘラケズリ。上胴部に粘土帯貼付痕が認められ、指頭によるナデが認められる。口縁部は横位のハケ状工具による調整。底部から上胴部にかけて煤付着。	1mm大の均一な砂粒。石英含む。にぶい黄橙色。
18	28	SR1-I2	9層	甕	11.9	(15.0)	15.1		長胴形の胴部から口縁部は外反する。外面胴部はタタキ。内面ヘラケズリ。外面全体に煤付着。	1mm大の均一な砂粒。にぶい橙色。
18	29	SR1-H1	9層	甕	10.6	15.3	13.3		丸底からやや間延びしながら立ち上がり、口縁部は短く外反。外面タタキ。内面は胴部中位までヘラケズリ。上位から口縁部はナデ。外面口縁部下位に粘土貼付痕。	1mm大の均一な砂粒。
18	30	SR1-H1	9層	甕	13.5	(16.0)			上胴部に最大径。口縁部はくの字に短く外反する。外面はタタキ目が残る。ハケ調整。内面胴部はヘラケズリ。口縁部はナデ調整。上胴部から口縁部にかけて煤付着。	1mm大の均一な砂粒。石英含む。橙色。
18	31	SR1-G2	8層	甕	14.4	7.8			内湾する胴部から口縁部は外反する。外面上胴部から口縁にかけ荒い原体のタタキ目残る。内面斜位のハケ調整。口縁端部は横方向のハケ。	石英多く含む0.1~3mm大の砂粒。
18	32	SR1-E2	4層	甕	17.6	(14.3)			胴部からラップ状に短く外反する。口縁部叩き出し。外面タタキ。内面ハケ調整。	1~4mm大のチャート含む。にぶい黄褐色。
18	33	SR1-H2	8層	甕	15.6	(5.6)			くの字に外反。外面口縁部までタタキ目残る。内面はハケ調整。	0.1~2mm大の砂粒。石英多く含む。灰オリーブ色
18	34	SR1-H2	8層	甕	18.0	(8.5)			外反する。胴部上位は横位のタタキ。口縁部は内外面ともにハケ。内面は縦位のナデ。	5mm大のチャート含む。橙色。
18	35	SR1-I3	8層	甕	15.2	(6.0)			口縁部は大きく外反する。外面胴部タタキ。口縁部ハケ。内面ハケ。	2~5mm大のチャート・石英含む。褐色

Tab.1 調査I区遺物観察表3

Fig. No.	遺物 No.	出土地点 (グリッド)	層位	器種	法 量				特徴 (形態・文様・成形・調整)	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
18	36	SR1-H2	8層	甕	16.2	(5.6)			外反。口縁部叩き出し。外面タタキ。内面斜位のハケ。	1~3mm大のチャート・石英含む。
18	37	SR1-G2	8層	甕	15.6	(8.1)			くの字に外反。外面口縁部までタタキ目残る。頸部までハケ調整。内面はハケ調整。内面頸部に接合痕。	0.5~2mm大の砂粒。灰白色。
18	38	SR1-H2	8層	甕	15.7	(7.9)	16.6		くの字に強く外反。外面タタキ。内面頸部までハケ。口縁部内面はナデ。外面頸部から口縁部にかけて煤附着。	1~2mm大の砂粒。
18	39	SR1-E1	8層	甕	14.2	(6.6)			くの字に外反。外面ハケ内面上胴部に粘土帯接合痕ハケ。口縁部はナデ。	1mm大の均一な砂粒。チャート・石英含む。にぶい黄橙色。
18	40	SR1-H2	8層	甕	16.0	(6.7)			口縁部は大きく外反する。外面胴部タタキ。口縁部ハケ。内面ハケ。外面煤附着。	0.5~3mm大の砂粒。
18	41	SR1-H2	8層	甕	15.6	(4.7)			口縁部は大きく外反する。内外面ハケ。口縁部はヨコナデ。	1~3mm大のチャート・石英含む。
18	42	SR1-H2	8層	甕	15.0	(6.2)			くの字に外反。端部は面を成す。内外面ハケ調整。	2mm大のチャート・石英混じる。
19	43	SR1-H2	8層	甕	14.0	17.8	17.0		球形に近い胴部を有し、口縁部は短く外反する。胴部外面は細かい単位ハケ調整。内面はヘラケズリ。口縁部内面は外面ハケと同じ工具により、横位のハケ調整。胴部下半から口縁部にかけて煤附着。搬入品?	0.5~1mm大の砂粒。石英含む。
19	44	SR1-D1	4層	甕		(19.4)	17.6		丸底の底部から、胴部は内湾し、やや間延びしながら立ち上がる。外面ハケ調整。内面ハケ・ナデ。	1mm大の均一な砂粒。にぶい橙色。
19	45	SR1-H1	9層	甕	12.6	14.3			丸底から内湾し、口縁部は外反する。内外面ナデ。体部下半はヘラケズリ。上胴部に煤附着。	1~2mm大の石英含む。浅黄橙色。
19	46	SR1-E1	8層	甕		(16.8)	3.4		僅かに残る平底から長胴砲弾形に延びる。胴部外面はタタキ目残る。縦方向のハケ調整。内面はヘラケズリ。	0.5~3.5mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
19	47	SR1-H2	8層	甕 (底部)		(6.8)	3.0		僅かに残る底部から内湾気味に立ち上がる。外面タタキ後ハケ。内面ナデ。内底部に指頭圧痕残る。	荒い胎土。5mm大の石英・チャート含む。灰白色。
19	48	SR1-E1	8層	甕		(11.6)			尖底状の底部。外面胴部下位にわずかにタタキ目残る。内面は底部から縦位の連続するナデ。	3~5mm大のチャート・石英含む。
19	49	SR1-E1	8層	壺 (底部)		(7.0)	5.6		ベタ底から内湾しながら外方に開く。外面タタキ後ハケ。内面ハケ。	3~5mm大のチャート・石英含む。にぶい橙色。
19	50	SR1-H1	7層	甕 (底部)		(7.7)	7.0		ベタ底から内湾気味に上方に立ち上がる。外面横位のタタキ。外底部はタタキ成形後ナデ。内面はハケ調整。	3mm大のチャート含む。灰黄色。
19	51	SR1-G2	8層	壺 (底部)		(6.7)	9.9		ベタ底から段を持ち、内湾する。外面ハケ調整後ヘラミガキ。内面底部はナデ、胴部は横位のハケが施される。	1~2mm大の砂粒。3mm大のチャート含む。にぶい橙色。
19	52	SR1-E1	8層	壺 (底部)		(13.6)	9.2		ベタ底からやや段を持ち、内湾する。外面ハケ。内面ヘラケズリ。	3~5mm大のチャート・石英含む。灰黄色。
19	53	SR1-H2	8層	壺 (底部)		(6.7)	8.0		ベタ底から外方に開く。内外面ともナデ。指頭圧痕残る。	2~5mm大のチャート含む。浅黄色。
19	54	SR1-H1	9層	鉢 (底部)		(3.8)	3.2		ベタ底から外方に開く。外面ナデ。内面は放射状のハケ調整。	2mm大の石英・チャート含む。橙色。
19	55	SR1-H1	9層	壺 (底部)		(3.4)	7.6		平底。内外面ともナデ。指頭圧痕残る。	3~5mm大のチャート・石英含む。にぶい黄橙色。
19	56	SR1-H2	8層	壺 (底部)		(6.8)	5.0		ベタ底から外方に開く。外面細かいハケ調整。内面ナデ。	2~3mm大のチャート含む。にぶい橙色。

Tab.1 調査I区遺物観察表4

Fig. No.	遺物 No.	出土地点 (グリッド)	層位	器種	法 量				特徴 (形態・文様・成形・調整)	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
19	57	SR1-G2	4層	壺 (底部)		(4.8)		8.0	ベタ底から外方に開く。ナデ。	1mm大の石英含む。灰褐色。
19	58	SR1-G2	4層	甕 (底部)		(2.6)		10.4	ベタ底からやや段を持ち、外方に開く。ナデ。	0.5~1mm大の石英含む。灰褐色。
19	59	SR1-H1	7層	壺 (底部)		(6.3)		10.6	平底から大きく外方に開く。内外面ともナデ。外底部周縁にヘラ状工具による沈線が巡る。	3~5mm大のチャート・石英含む。灰黄色。
20	60	SR1-G2	7層	甕	13.6	14.5			丸底から内湾して立ち上がり、口縁部は尖る。直径8mmの円孔。焼成前穿孔。内外面ともナデ。	2~4mm大のチャート・石英含む。橙色。
20	61	SR1-F2	8層	甕	14.6	12.1		5.2	平底から内湾気味に立ち上がり、口縁部は上向き尖る。直径9mmの円孔。焼成前穿孔。タタキ成形。外底部はナデによりタタキ目は残らない。内面は横位のヘラケズリ。	2~5mm大のチャート・石英含む。にぶい橙色。
20	62	SR1-G2	6層直上	甕		(9.2)			丸底から内湾して立ち上がる。直径6mmの円孔。焼成前穿孔。外底部はラセン状のタタキ。内面は細かい単位のハケ調整。	2~5mm大の石英含む。橙色。
20	63	SR1-G1	8層	甕		(7.6)		2.2	尖底状の底部。直径1cmの円孔。焼成前穿孔。外面底部周辺にタタキ目残る。内面は指頭によるナデ。	0.5mm大の均一な砂粒。石英含む。にぶい橙色。
20	64	SR1-H2	8層	甕		(2.7)		2.4	尖底状の底部。直径7mmの円孔。焼成前穿孔。ナデ。	2mm大の石英含む。にぶい黄橙色。
20	65	SR1-H2	8層	甕		(4.5)		7.4	直径5mmの円孔。焼成後穿孔。ナデ。	2mm大のチャート・石英多く含む。褐色。
20	66	SR1-H1	8層	小型丸底鉢	8.5	7.2			尖り気味の丸底から内湾し、口縁部は短く外反。外面タタキ後、縦位のハケ内面体部上半横位のハケ。	0.1~3mm大の砂粒。にぶい橙色。
20	67	SR1-H2	7層	小型有段鉢	9.6	6.5			丸底から内湾し、口縁部は外方に直立気味に開く。内面胴部と口縁部境目に段を有し、接合部は指頭圧痕が認められる。口縁部ヘラ削り。底部外面は横位のケズリで丸底に仕上げる。	1mm前後の砂粒。褐灰色。
20	68	SR1-E2	7層	小型丸底鉢	8.9	6.9			丸底から内湾し、口縁部は短く外反する。口縁部内面に指頭圧痕が残る。底部外面タタキ目残る。ナデ調整。外面約1/2焼成不良により赤褐色を呈する。	0.5~2mm大の砂粒。灰黄褐色。
20	69	SR1-I2	4層	小型鉢	7.1	5.5		3.5	平底の底部から内湾し、口縁部は直立気味に仕上げる。口縁部内外面に指頭圧痕が顕著。横位のナデ。胎土に起因し、外面に縦方向の亀裂が認められる。	0.1~3mm大の砂粒多く含む。にぶい黄橙色。
20	70	SR1-H1	9層	手捏土器	4.7	5.6			丸底の底部から内湾し、口縁部は直立する。上面からみると不整楕円形を呈する。手捏ね。口縁部と胴部境目に接合痕が認められる。	1mm前後の砂粒。にぶい黄褐色
20	71	SR1-H2	8層	小型鉢	9.4	4.9		3.6	平底の底部からやや段を持ちながら内湾する。外面底部周縁に縦位のヘラナデ。内面は体部下半にヘラケズリ。外面に縦位の亀裂が認められる。	0.1~2mm大の砂粒含む。
20	72	SR1-E2	8層	小型鉢	9.1	3.3			丸底の底部から内湾して短く立ち上がり、皿状を呈する。外面は指頭によるナデ調整。内面は単位の細かいヘラミガキが密に施される。	0.5~1.5mm大の砂粒。灰黄褐色。
20	73	SR1-H1	8層	器台		8.2		6.7	「ハ」の字状に開く裾部から充実の柱状部が斜位に延び、受け部は一方に突起が付く。外面裾部は指頭圧痕が顕著であり、柱状部及び受け部内面はハケ調整。突起部側、柱状部外面に赤彩が認められる。	浅黄褐色
20	74	SR1-E1	4層	鉢	18.3	9.2			丸底から内湾して立ち上がり、口縁部は外傾する面を成す。外面はタタキ成形の後、縦位のハケ。内面は底部から体部中位にかけてヘラケズリ。口縁部はつよいヨコナデ。	0.5~3mm大の砂粒。にぶい橙色。

Tab.1 調査I区遺物観察表5

Fig. No.	遺物 No.	出土地点 (グリッド)	層位	器種	法 量				特徴 (形態・文様・成形・調整)	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
20	75	SR1-G2・H2	8層	鉢	15.3	7.5			丸底から内湾し、端部は面を成す。外面は底部から口縁部にかけてラセン状のタタキ成形。外面体部上方はナデ調整。内面は底部から体部上位にかけて放射状に単位の細かいハケ。	1~4mm大の砂粒。橙色。
20	76	SR1-E1	8層	鉢	16.0	9.9			底部から内湾し、口縁端部は水平な面を成す。外面はタタキ成形後、ハケ調整。底部は荒い原体のタタキ目が残る。内面底部は指頭によるナデ体部下半から口縁部は縦方向を基調とするハケ。	0.5~4mm大の砂粒。橙色。
20	77	SR1-G2	7層	鉢	19.9	9.2		3.9	平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は面を成す。外面は7条単位の細かいハケ調整。内面は単位の粗いハケ調整が横位に施される。	
20	78	SR1-E1	9層	鉢	15.8	6.8			丸底から内湾して立ち上がり、口縁端部は面を成す。外面はナデ。内面はラセン状のハケ調整が施される。	0.5~3mm大の砂粒。橙色。
20	79	SR1-I2	9層	鉢	14.0	5.8			丸底から内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面ナデ調整。内面はハケ調整後、底部から体部中位にかけてナデ調整。	0.2~3mm大の砂粒。赤橙色。
20	80	SR1-I3	9層	鉢	14.8	6.9			尖り気味の底部から内湾して立ち上がる。内面は細かい単位のハケ調整が放射状に施される。	にぶい黄橙色。
20	81	SR1-D1	9層	鉢	13.0	7.4		3.4	高台状の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は強く外反する。外面ナデ調整。内面は丁寧なハケ調整。外底部に指頭圧痕が残る。	0.5~2mm大の砂粒多く含む。淡黄色
20	82	SR1-F2	4層	台付鉢	11.8	(7.4)			高台状の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに内曲。高台状の底部を有するが、欠損。高台外面に指頭圧痕顕著。外面は荒い原体のタタキ目が残る。内面は細かい単位のハケ調整。	4mm大の礫を含む。にぶい黄橙色。
20	83	SR1-G2	6層直上	高坏	15.0	(7.3)			椀状の坏部。外面下部にタタキ目残る。口縁部は横位のハケ。内面はハケ調整。	0.1~1mm大の砂粒。にぶい橙色。
20	84	SR1-H2	8層	高坏	13.0	(5.1)			脚部は欠損する。椀状の坏部。内外面ハケ調整後、ナデ。	
20	85	SR1-H1	9層	高坏	15.8	(5.4)			脚部は、欠損する。坏部は腰折れ、口縁部にかけて外反する。内面は横位を基調としたヘラミガキ。腰折れ部を境に分割成形。	0.5~1mm大の均一な砂粒。にぶい黄橙色。
20	86	SR1-H1	8層	高坏		(7.7)		12.4	充実の脚部から裾部はラッパ状に開く。裾部に、直径8mm前後の円孔が4個認められる。内外面とも荒いハケ調整。裾部から脚部にかけてのハケ調整により、境目に工具痕が残りやや段が生じる。裾部内面はラセン状のハケ。	2~4mm大のチャート・石英含む。橙色。
20	87	SR1-E2	6層直上	高坏		(5.2)		9.3	脚部はラッパ状に開き、裾端部は面を成す。裾部に直径8~9mm大の円孔が4個認められる。内外面ともにナデ。脚部内面に絞り目残る。	0.5~1mm大の石英含む。にぶい橙色。
20	88	SR1-E2	6層直上	高坏		(7.9)		11.4	坏部は欠損。充実の脚部からラッパ状に開く。内外面ナデ。脚部内面に絞り目残る。	精緻な砂粒。1~3mm大の石英含む。にぶい黄橙色。
20	89	SR1-I1	4層	高坏		(7.0)		10.2	坏部は欠損し、不明であるが、裾部は折れラッパ状に開く。裾部は横位のナデ。脚部内面は絞り痕が残る。	2~5mm大の石英含む。にぶい黄橙色。
20	90	SR1-H1	8層	高坏		(8.2)		10.2	坏部は欠損し、不明であるが、裾部は折れラッパ状に開く。内外面ナデ。脚部内面に絞り目残る。	精緻な砂粒。1~3mm大の石英含む。にぶい橙色。
21	91	SR1-E3	4層	須恵器壺	20.7	45.4	76.0		丸底から外上方に膨らみ、上胴部に最大径がくる。口縁部は外反し、端部は外側に開き、面を成す。端部に2条凹線状の沈線が巡り、直下に突帯が巡る。外面縦位のタタキ。横位に一定の間隔でナデが施される。内面はナデ。	

第2節 II区

〔1〕IIJ区

1. 調査区と調査経過

調査区の設定

9月中旬、III区において縄文土器の存在が確認され、柳田遺跡が縄文時代まで遡ることが判明した。この時検出されたのは縄文後期前葉から中葉にかけての土器群と少量の晩期の土器である。II区において初めて縄文土器が存在することが明らかになったのは11月28日のことで、当初は条痕の存在により縄文の粗製深鉢と認められたにすぎず、時期の特定はできなかった。

12月初旬、弥生前期末～中期前半の遺構面の下層の粘土層の調査を進める中で、この層中からまとまった量の土器が出土し始めた。ほとんどの土器片に条痕が観察され、口縁に刻目突帯を有する土器も確認される

に至り、これらの土器群を包含層中出土ながらも極めて一括性の高い縄文晩期終末の突帯土器後半に相当する資料であると認定して以後の調査を進めることとなる。調査区はII区だが、縄文土器の検出された地点は一定の範囲に限られる。この地点をII区の中で便宜的にIIJ区と設定した。出土遺物の時期は縄文晩期後半に限定される。

調査経過

縄文晩期(IIJ区)の調査は弥生遺構面の調査と並行して進行した。縄文晩期に関する調査日程は以下のとおり。

- 11.28 II区西端深堀トレンチセクション図作成中に粘土層中から条痕を持つ縄文土器検出。II区で初めて縄文土器を確認する。
- 11.29 セクションの測量作業を続ける。縄文土器確認例増加。
- 11.30～12.01 M-6・7粘土層の調査
- 12.02～03 SR202下層の調査。粘土層・粘砂礫土層・砂礫層を確認する。
- 12.04 粘土層に土器集中部を確認。実測取り上げ。
- 12.05 砂礫層中に植物堆積層を確認。縄文晩期の植物遺体として実測。明瞭な加工痕なし。
- 12.07 縄文晩期流木取り上げ
- 12.08 前夜来の雨のため、IIIII区とも水没状態。II区中央部東西方向セクション測量。

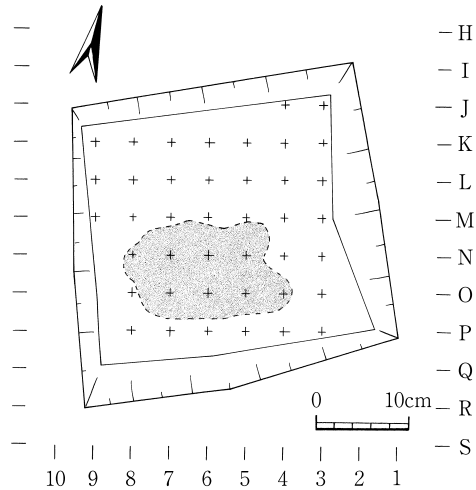


Fig.26 調査II区 全体のグリッドとIIJ区位置図

- 12.09 II区の弥生遺構面の調査が終了したため、遺構面下層の縄文包含層の調査に入る。
- 12.10 引き続き、縄文包含層の掘り下げ作業。土器がまとまって出土する。
- 12.11 包含層掘り下げ作業。粘土層から下層の砂層・粘礫土層へと調査が進む。
- 12.12 最下層の包含層(砂礫・砂利層)の調査中、自然流路SR208を検出する。
- 12.14・15 SR208測量・遺物取り上げ。
- 12.16 SR208測量遺物取り上げ完了。南側に皿上に浅くくぼんだ明灰色粘土の堆積する落ち込み部検出。SR208セクション測量・サンプル採取。
- 12.17 II-J区調査終了。確認トレンチを設定して下層の確認を行うが遺物検出できず。

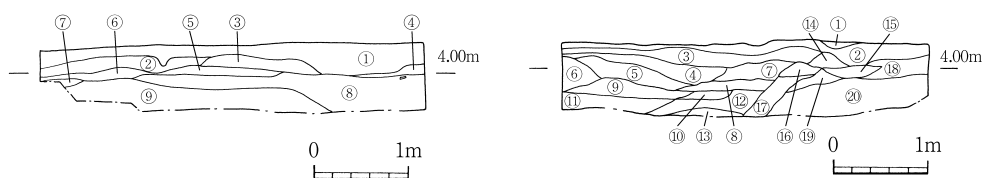
2.基本層序

II J区はII区弥生時代の調査後に確認された調査区であり、Fig.28・29に示す土層堆積状況図も弥生時代の遺構面より下層の堆積の様相を示すものである。粘土～シルト・砂・砂礫が互層となって確認され、それぞれの堆積母材がある程度混ざりあって層を構成していることから、河川に接した湿地であったことが推察される。

縄文晩期の遺物が含まれる包含層は基本的に3つの層に分層することができる。弥生の遺構面の下層全域に分布する灰色粘土層をJ-I層、この粘土層の下層で若干小礫の混じる灰色粘砂質土層をJ-II層、そして包含層最下層の粘土をほとんど含まない砂礫層をJ-III層として調査を進めた。

II J区全域に認められる層はこの3つの層だが、これ以外にも部分的に存在する層がいくつかある。その中で、2つの層からまとまった遺物を確認した。一つはI層と粘土の状況は似通っているが、色調の異なる黄灰色粘土層である。この層はI層と連続性が認められ、I層の堆積する直前に同様の状況で堆積したことが確認できる層であり、この層をI-2層とした。もう一つはI層とII層の間に部分的に確認される黄褐色灰色砂層(S層)である。これら5つの層に分けて遺物を取り上げた。これらの層を上層から下層へ並べると以下のとおりとなる。

J-I層・・・灰色粘土層



II J区 東端セクション

- ① 暗灰色粘土
- ② 暗灰色砂層
- ③ 明灰色シルト
- ④ 暗灰色粘土(砂利混)
- ⑤ 褐灰色細砂
- ⑥ 暗灰色砂層
- ⑦ 暗灰色砂礫層
- ⑧ 灰色砂礫粘土混層
- ⑨ 明灰色砂礫層(砂多し)

II J区 西端セクション

- ① 黄灰色粘土(炭化物含む)
- ② 灰色～黄灰色粘土(J-I層及びJK層に相当。色調は漸移的に変化)
- ③ 黄灰色シルト
- ④ 黄灰色粘礫土(J-II層に相当)
- ⑤ 黄灰色砂礫層(J-III層に相当)
- ⑥ 青灰色砂礫層(J-III層に相当)
- ⑦ 淡黄灰色粘土層
- ⑧ 淡黄灰色粘土層(鉄分を多く含む)
- ⑨ 黄灰色砂礫土層(J-III層に相当)
- ⑩ 灰色砂層
- ⑪ 黄灰色砂礫層(J-III層に相当)
- ⑫ 灰色シルト層
- ⑬ 暗灰褐色シルト層
- ⑭ 青灰色細砂層
- ⑮ 褐色砂礫層
- ⑯ 青灰色砂礫層
- ⑰ 褐色砂層
- ⑱ 黄灰色砂礫層
- ⑲ 灰色砂礫層
- ⑳ 暗灰黄色砂層

Fig.27 調査II J区 東西端セクション(南北方向)

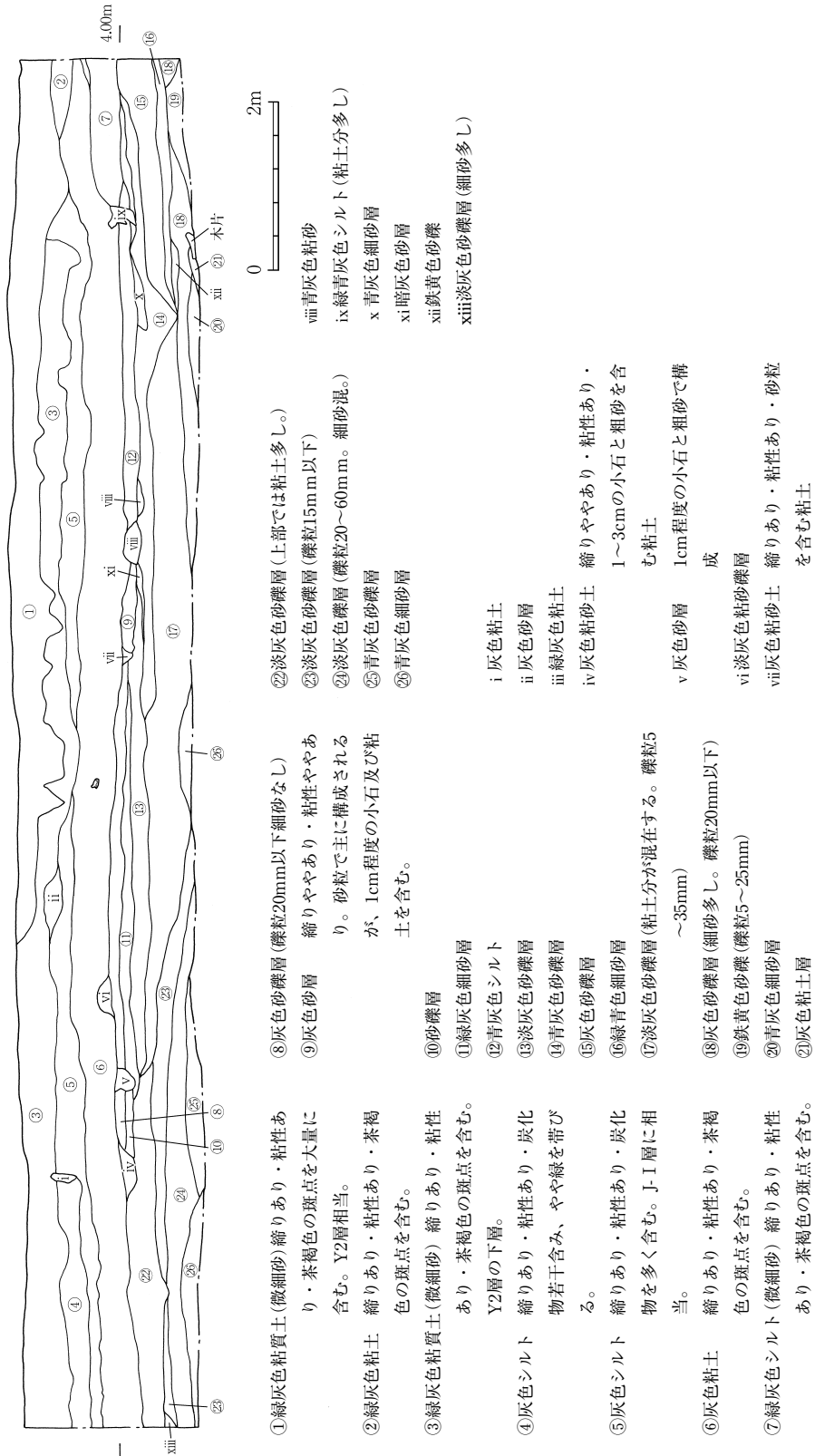


Fig.28 調査IIJ区 北端セクション(東西方向)

第2節 (1) II J区

J-I-2層・・・黄灰色粘土層

J-S層・・・黄褐色砂層

J-II層・・・灰色粘砂土層 (小礫を若干含む)

J-III層・・・灰色砂礫層

これらの遺物包含層以外の層については、Fig.27・28に示したとおりである。

3.遺構・遺物

出土遺物の多くが包含層出土であり、明確な遺構として把握できたのは1基のピットのみである。また、自然流路として調査を進めたSR208であるが、溝として利用されていたケースも考えられ、流路の横で検出された水たまり状の落ち込みとあわせて、人為の可能性も考えられる。

(1) 遺構

①ピット (II J区 P 1)

P1

SR208南側の柱穴で砂地(黄褐色砂層で下層には鉄分の多い赤褐色砂礫層の堆積が認められる。)を掘り込んで杭状の木(加工痕なし)が立った状態で検出された。平面は長軸45cm・短軸

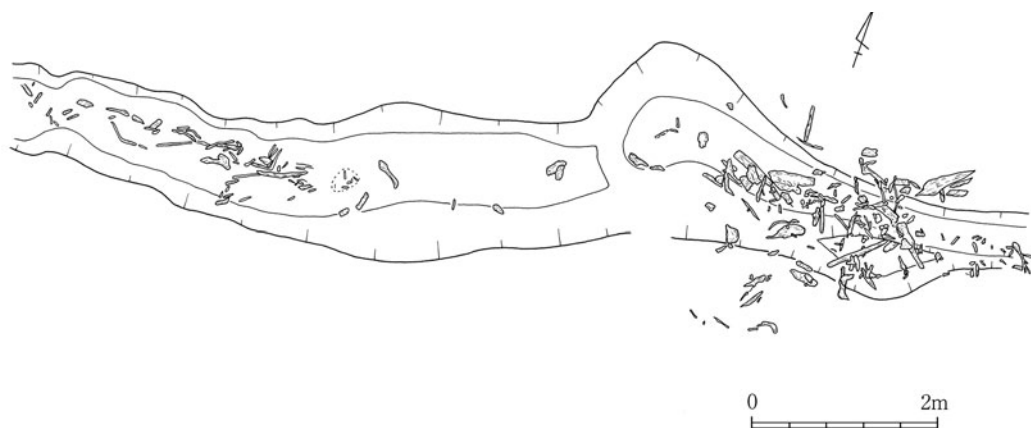
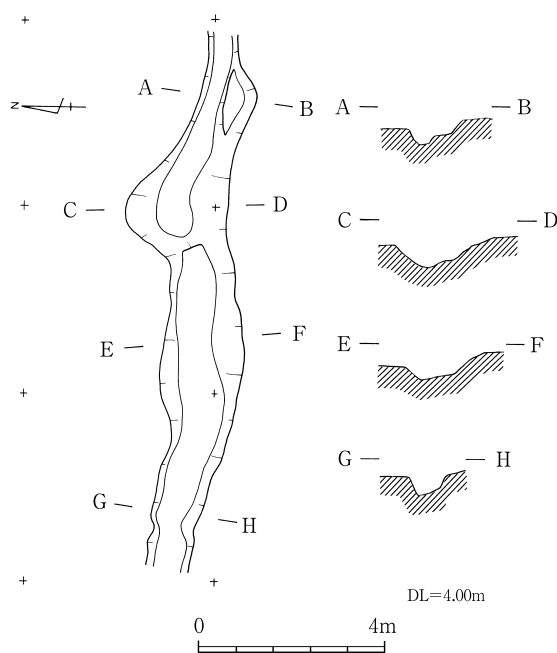


Fig.29 調査II J区 SR208遺物出土状況平面図 (S = 1/40) 及び完掘状況平面・エレベーション図 (S = 1/80)

32cmの楕円形で、検出面からの深さは38cmである。埋土は灰色砂層である。

②自然流路 (SR208)

包含層J-Ⅲ層除去後に検出された自然流路である。検出面は砂礫層除去後の砂層であり、埋土は灰色粘土層で、層中からは250点以上の流木等植物遺体が確認されている。流木の中には、先端が杭状に加工されたものなど、人為の痕跡が確認できる遺物も確認されたものの、大半が加工痕のない自然遺物であった。

流路の規模は、検出面での最大幅で2.64m、最も狭い部分で0.80m、検出面からの深さ0.48m～0.64mの小規模な自然流路である。流路底面は西側から東側に向かって僅かに傾斜しており、検出した範囲においては西→東の方向で流れる東西方向の流路だといえる。検出し得た流路の総延長は約12m。植物遺体以外の土器等時期決定可能な遺物の出土はなく、直上の包含層出土の縄文土器から流路の機能時期が縄文晩期後半以前だといえる程度で、正確な時期比定はできない。

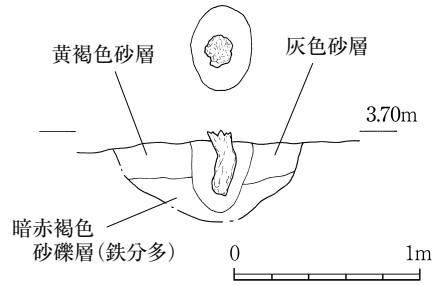


Fig.30 調査ⅡJ区 P1平面・断面図

③性格不明遺構 (ⅡJ区SX1)

SR208の南側、流路に並行して長軸2.92m・短軸1.20mの楕円形の水たまり状の落ち込みが確認されている。この落ち込みは砂層をベースに粘土が流れ込んだ形で形成されており、粘土はさらにSR208方向に4条の小溝を伝って流れ込んでいる。深さは0.12～0.20mで浅い皿状を呈する。検出状況からSR208と同時期に形成された落ち込みだと考えられるが、遺物は含まれていない。自然の営為によって形成された可能性もあるが、はっきりとした平面プランが確認されたことから、性格不明遺構として報告しておく。

(2) 遺物

縄文土器(晩期後半)

出土した縄文土器は全部で1,516点で、I・I-2・S・Ⅱ・Ⅲ層の5層の包含層中からの出土である(Tab.2)。調査区の地形が南側から北側に向かってわずかに傾斜しており、傾斜にそった形で遺物の分布が確認された(Fig.33)。包含層は、SR208と弥生前期末～中期前半の遺構面の間に形成されている。Fig.33からはI・

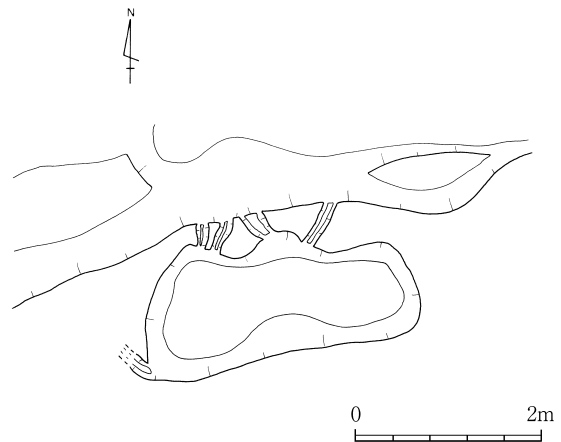


Fig.31 調査ⅡJ区 SX1平面図

第2節 (1) II J区

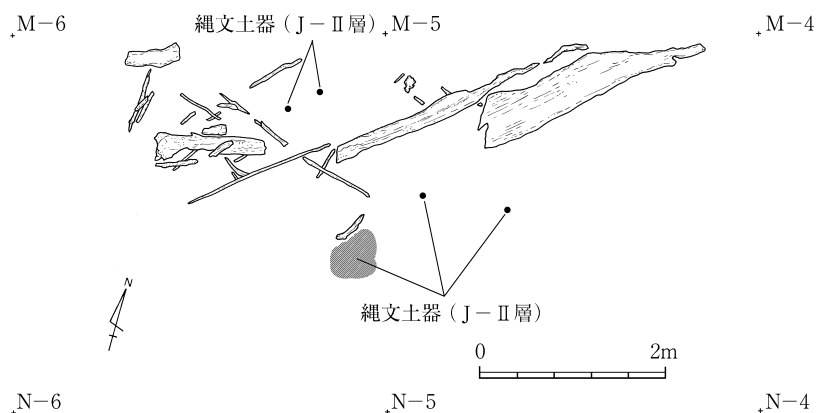


Fig.32 調査IIJ区 包含層(J-I～II層) 流木・縄文土器出土状況

I-2・Sの3層からの土器出土標高が近接し、II・III層の2層からの土器出土標高が近接していることを読み取ることができる。

縄文土器は深鉢のみである。深鉢は大きく3類に分類される。口縁部外面に刻目突帯をもつものを1類、口唇部に刻目を有するものを2類、口唇に刻目がなく全く装飾を施さないものを3類とし、1～3類の各類ごとに施文原体の違い・施文部位の違い・口縁部形状の違いなどで1-A～C類、2-A・B類、3類に細分、口縁形態の判明している土器についてはすべて分類を行った。1類が刻目突帯文土器の深鉢、2・3類が粗製深鉢である。

底部は、平底に近い上げ底気味の底部・上げ底の底部・高台状を呈する極端な上げ底の底部などいくつかのバリエーションがみられるが、総じて上げ底の傾向がある。器面調整は条痕とナデによる。ナデ調整をほとんどほとんど行わず、内外面ともに条痕がはっきりと残る個体も一定量存在する。

1類土器・・・口縁部外面に一条の刻目突帯を有するもの。刻目突帯文土器。柳田遺跡出土の1類土器はすべて「口唇に刻目をもち、口縁部外面に一条の刻目突帯をもつ」という共通項で括られる。刻目はすべてヘラ状原体による。口唇の刻目の施文方向の違いにより、上方より口唇全面に施文するものをA、口唇下端に施文するものをBとした。また、口縁部内面に一条の沈線が認められるものをCとして分類した。刻目突帯を2条もつものは確認できなかった。頸胴部に突帯を持つ個体の破片が認められないことから、1条突帯の可能性が強いが、突帯が確認される破片は口縁部付近の小片ばかりのため断定はできない。

1-A類・・・1～4

1-B類・・・5・6

1-C類・・・7

第2節 (1) II J区

2類土器・・・粗製深鉢のうち口唇部に刻目を施す深鉢を2類とする。口唇部形状には丸みを帯びたもの・面をなすものなどの形態差がみられるが、刻目はすべて口唇上方より全面に施され、口唇下端など異なる施文方向をもつものは認められなかった。

刻目の施文原体の違いにより、ヘラ状原体を使用したものをA、貝殻縁辺を使用したものをBとした。

2-A類・・・8～18・30・31

2-B類・・・19～27・32・36

3類土器・・・粗製深鉢で、口唇部に刻目をもたないものを3類土器とした。口唇部を丸く収めるものと面をなすものがある。器面調整は内外面とも条痕が観察される。条痕は、調整時のまま残されている場合が多いが、条痕の後にナデ調整が加えられるものもある。加飾は全く認められない。

3類・・・28・29・33～35・37～39

縄文土器はすべて包含層出土であり、基本層序の項で示した5層のいずれかからの出土であった。(土器出土層位については、基本層序の項などでJ-I層など層の頭に「J-」を付けたが、ここではこの「J-」を除いて表記する。)

I～IIIの各層出土資料とも調整や胎土(チャートの砂粒を多量に含む)などが似通っており、1類の存在を根拠に縄文晩期後半に位置付けられる資料だと考える。出土状況から、少なくとも2時期(I・I-2・SとII・III)の存在が予想されるが、この2つが近接した時期なのかどうか時期判別の手がかりとなる浅鉢が全く出土しておらず、現時点での細かい時期特定は困難である。I・I-2層・S層の土器については、復元可能個体が地点ごとにまとまって出土し、摩滅もほとんどないことから使用時あるいは廃棄時の原位置付近から出土していると考えられる。

層	土器点数	%	1類	2-A類	2-B類	3類	底部
I	684	45.1	7	11	10	0	3
I-2	276	18.2	0	0	0	2	1
S	95	6.3	0	0	0	1	1
II	168	11.1	0	1	2	1	1
III	293	19.3	0	1	1	3	2
合計	1,516	100	7	13	12	8	8

Tab.2 調査IIJ区 縄文土器層別出土状況

遺物出土最上層のI層には、刻目突帯文や口唇に刻目を持つ土器など1・2類土器だけで、3類土器は認められないのに対して、下層ほど3類土器の割合が高くなる。出土資料点数が少ない状況で、これを層間における時期差とするのは早計だが、包含層各層の間には、下層に口唇部刻目等の加飾のない土器が多いという傾向はある。

明確に時期が決定可能な資料はI層出土の刻目突帯文土器のみである。器壁の厚さ・小ぶりの突帯など形態的な特徴から、縄文晩期終末に位置付けられる資料だと考えられる^{註1}。柳田遺跡出土の刻目突帯文土器には口唇に刻目をもち、外面に1条の刻目突帯をもつという共通の特徴があり、器面調整は条痕による。田村編年前期I（東松木式土器）登場直前の様相を示す土器群である。1類土器(刻目突帯文土器)の中に全体の器形が復元できる資料はなかったが、高知県西南部の2条突帯を持つ入田B式土器のような幅広のしっかりした突帯とは異なっており、刷毛目と条痕という調整の違いはあるものの形態的に弥生前期初頭の東松木式土器の突帯文に類似する。柳田遺跡から10キロ程西の仁淀川下流域、土佐市倉岡遺跡からも2条突帯の刻目突帯文土器が出土しているが、柳田遺跡IIJ区出土の1類土器は1条突帯の刻目突帯文土器だと考えられる。県西部から高知平野西部で分布が確認されている2条突帯と様相の異なる1条突帯を持つ土器が、弥生時代直前の高知平野中央部に出現していた可能性が高い。

粗製深鉢については、口唇部の加飾の有無を基準として2・3類に分類した。小片が多く胴部から口縁部にかけての全体形状の観察がある程度可能な個体は、34-16(2-A類)、35-20(2-B類)、37-34(3類)の3点のみであった。小片が多いこと・出土点数が少ないことを理由に口縁部加飾を基準に分類したが、この分類とは別に粗製深鉢について形態・調整に着目して分類すると、2つのグループに大別できる。

34-16(以下16とする)と35-20(以下20)及び37-34(以下34)の深鉢は口径が各々24.2cm、33.8cm、43.2cmと法量が異なるが、それ以外に口縁形態・調整部位を比較すれば16と20・34との間に大きな差があることがわかる。20・34は頸部で屈曲した後口縁は外反するが、比較的直線的な立ち上がりを示す。(20は緩やかに屈曲し、34は屈曲部が明瞭である)これに対し、16は屈曲した後短く外反する外反の度合いが大きい。器面調整の比較をするとより違いが際立つ。20・34は使用した2枚貝の差により条痕の単位に粗密の差はあるものの、内外面とも全面に条痕を残しナデ調整は認められない。16は胴部外面に条痕(2枚貝)が確認されるものの頸部から口縁部にかけての外面と内面には丁寧なナデ調整が施され、条痕の痕跡が消されている。条痕の調整方向も異なっている。20・34は内外面とも胴部は右下がり、口縁部は水平方向の条痕であるのに対し、16は外面胴部左下がり、頸部以上水平方向の条痕となっている。3点とも一見すると平縁に近い口縁形状だが、16が直線的な口縁であるのに対し、20・34はわずかに波打っている。

20・34と16では土器に対する意識の違いが器形・調整にはっきり現れている。前者(20・34)が器面全体に条痕を残し、頸部で緩やかに屈曲し外上方へ直線的に立ち上がり、口唇の刻目は施さないか貝殻縁辺を使用するのにに対し、後者(16)は条痕の存在は確認できるものの意識的にナデ消し、口縁は頸部で短く屈曲して強く外反、口唇にヘラ状原体による刻目を持つ。

調整・口縁形状・口唇加飾・波状の口縁部とほぼ水平になる口縁部との形態の違いなど、同じ粗製深鉢ながら用途の違いが想定されるほど両者の差は大きいといえる。16の深鉢と20・34の深鉢とは異なる視点から製作された粗製深鉢である。包含層出土資料ゆえに、この違いが時期差なのか、同一時期のバリエーションなのかを決定することはできないものの、出土状況から、3点の深鉢は同一時期の資料だと考えている。

これらの2形態の粗製深鉢の存在は、縄文伝統とその中に生じた何らかの変化を想起させる。20・34が縄文伝統を色濃く受け継ぐ深鉢であるのに対し、16は少なくとも晩期中葉以前には存在しない深鉢だといえる。16タイプの深鉢がどの段階で登場するのか、他地域からの影響はどうなのか、背景にはどのような生活態様の変化があるのかなど追求されるべき課題は多い。^{註2}

柳田遺跡の少量の縄文晩期の資料をもって、高知平野中央部の縄文晩期後半を理解することはできない。高知平野の晩期の様相を示す僅かな手がかりが得られたに過ぎない。柳田遺跡では、続く弥生前期前半の資料は全くなく、次に遺物のまとまった出土が認められるのは、弥生時代前期末のいわゆる「前期末の分村」の時期になってからである。

註

- 1.晩期終末の土器として位置づけ報告したが、晩期終末・東松木式直前の段階ではなく東松木式土器と時間的な併行関係を持つ可能性もある。
- 2.これらの粗製深鉢の検討については、前段階の様相-高知平野の縄文時代の資料の検討や周辺の同時期の資料の検討も含めて行なうべきであり、高知平野の晩期資料の僅少な現段階では適当でないかもしれない。

参考文献

- 1.岡本健児「南四国弥生I期初頭の土器-東松木式土器について」『考古学叢考 下巻』1986年
- 2.出原恵三・角谷和男「8.弥生時代前期小結」『田村遺跡群 第3分冊』高知県教育委員会1986年
- 3.岡本健児「土佐市倉岡出土の土器群」『土佐史談152号』1980年
- 4.岡本健児「土佐入田遺跡調査概報」『考古学雑誌第38巻-5・6号』
- 5.岡本健児「弥生時代」『南国市史上巻』1983年
- 6.『日本における初期弥生文化の成立 横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ』1991年

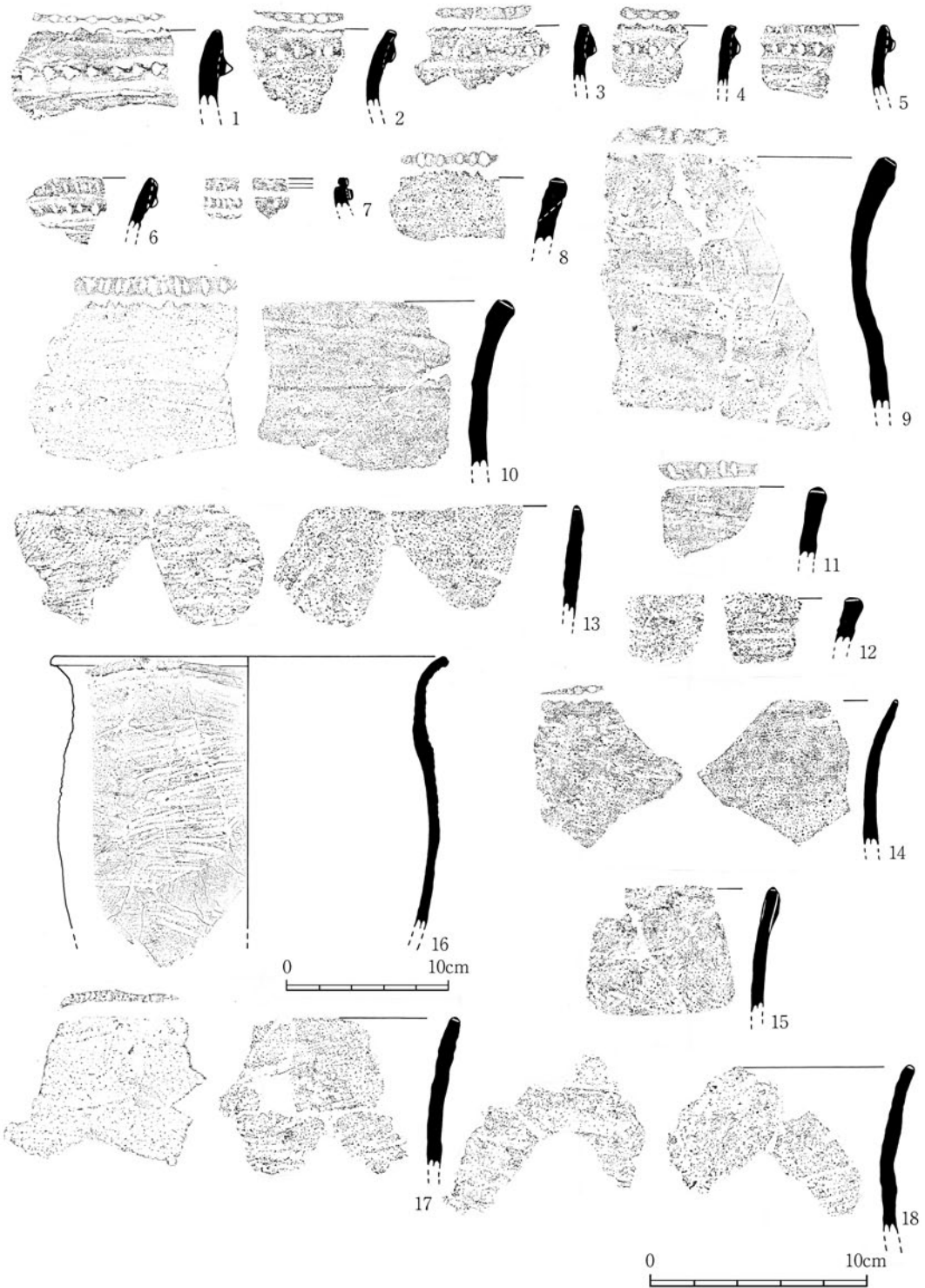


Fig.34 調査ⅡJ区出土 縄文土器実測図 (1) (16のみS=1/4,他はS=1/3)

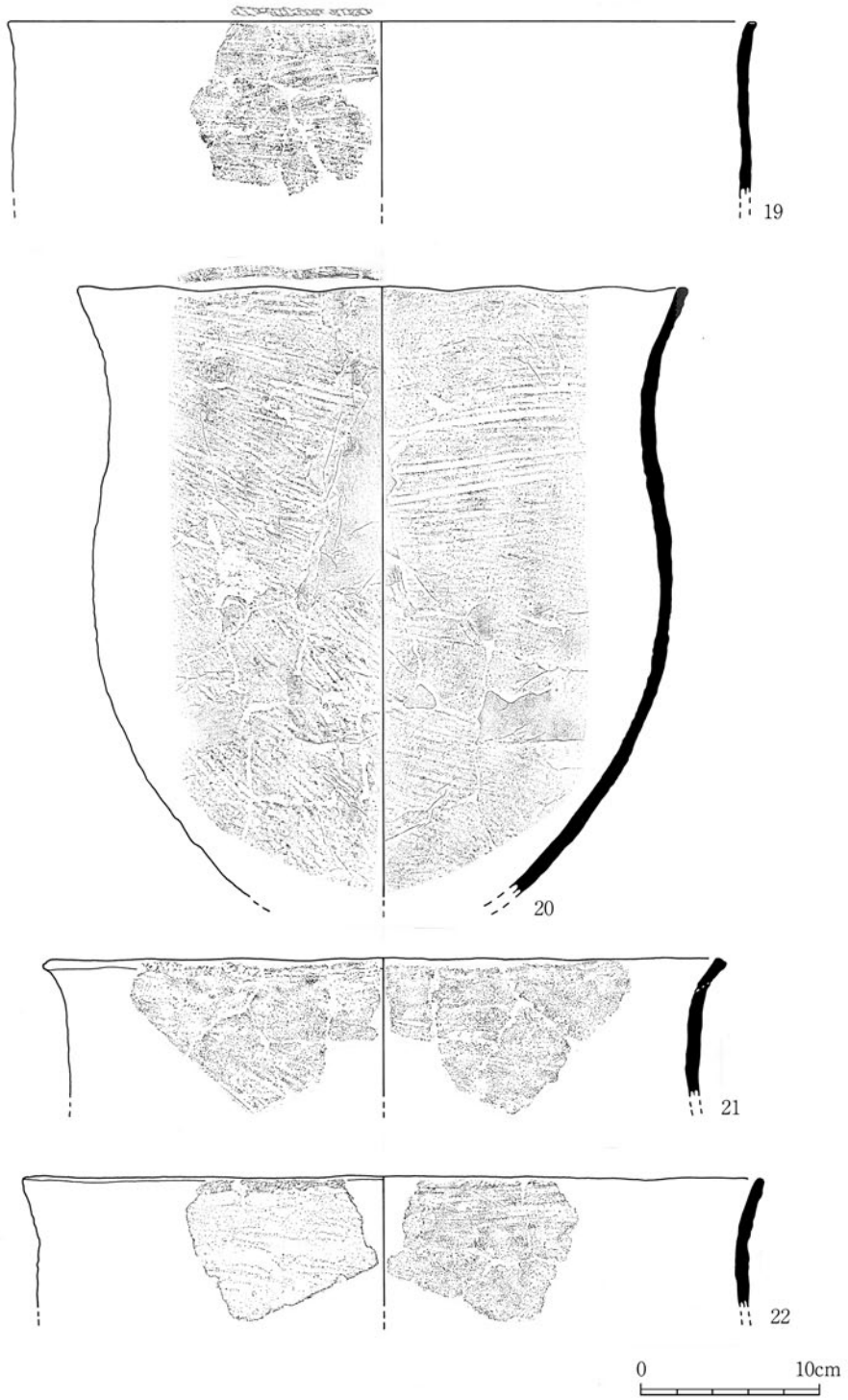


Fig.35 調査IIJ区出土 縄文土器実測図(2) (S=1/4)

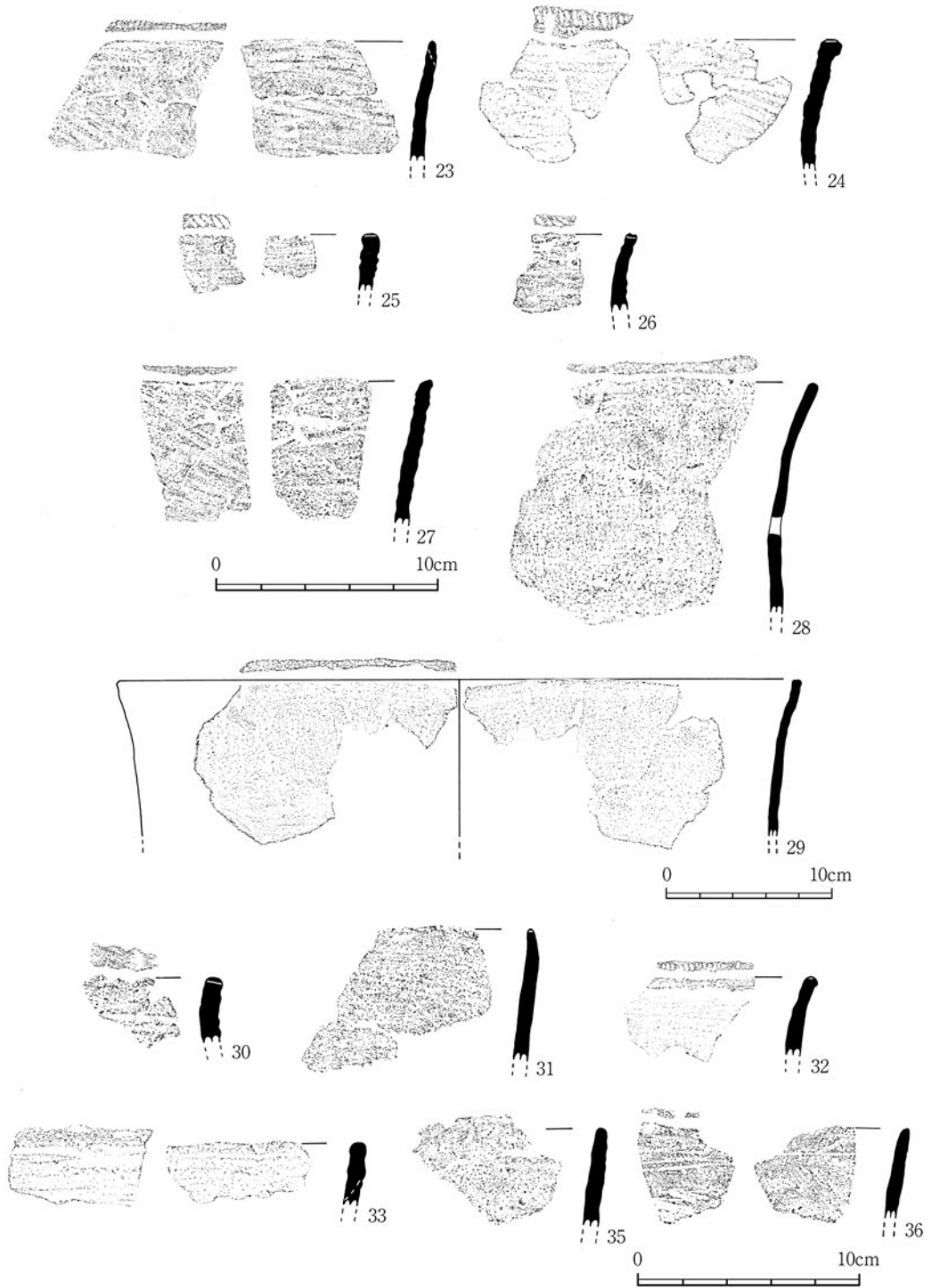


Fig.36 調査ⅡJ区出土 縄文土器実測図 (3) (29のみS=1/4,他はS=1/3)

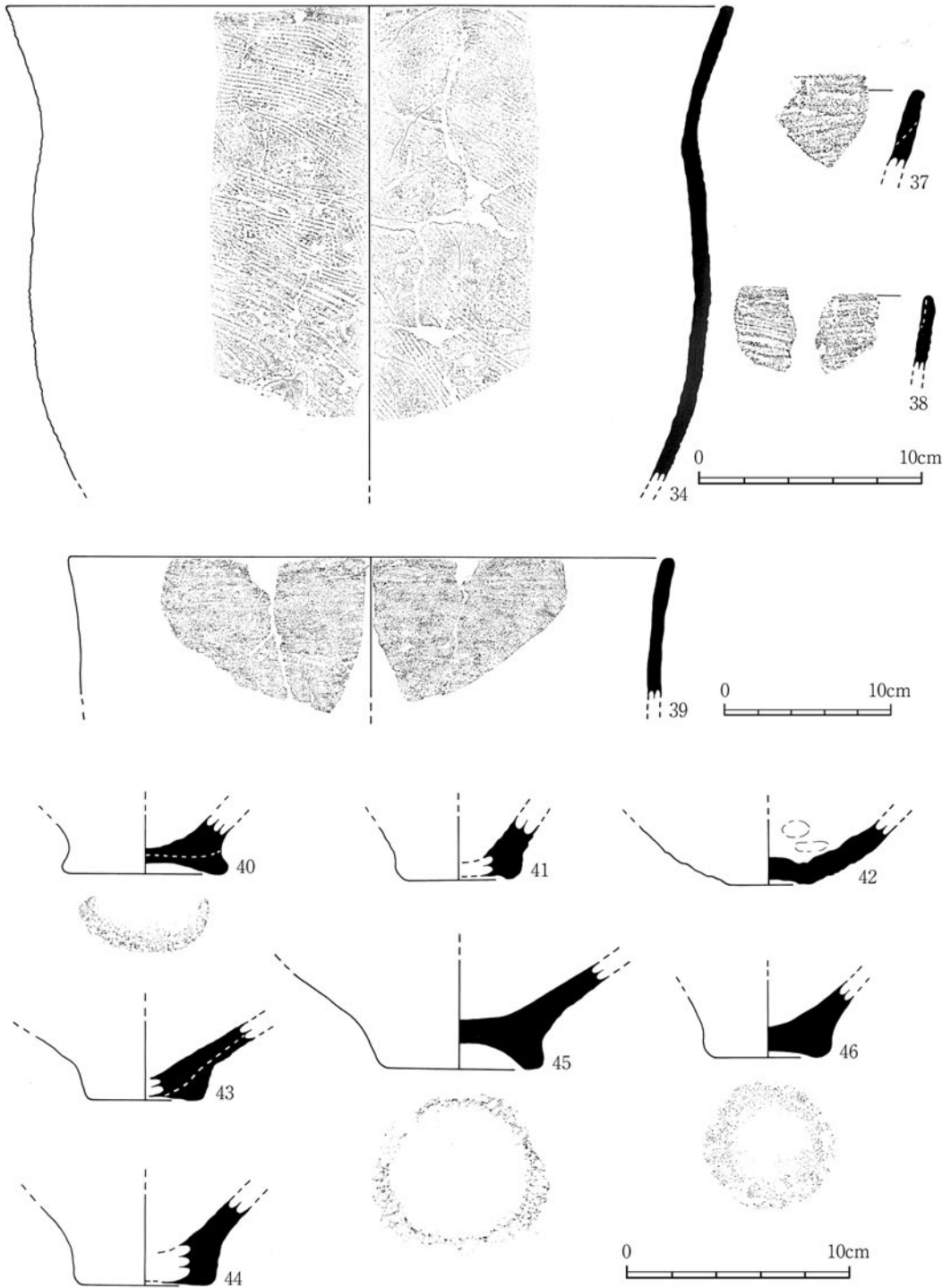


Fig.37 調査IIJ区出土 縄文土器実測図(4) (34・39はS=1/4,他はS=1/3)

Tab.3 調査ⅡJ区遺物(縄文土器)観察表1

Fig. No.	図版番号	出土地点(グリッド)	層位	器種	分類	法量	特徴	調整	胎土・色調
34	1	N-6	I層	深鉢	1-A	-	口唇下外面に刻目突帯。口唇にも刻み目。	内面ナデ 外面ナデ、条痕	砂粒やや多く含み、微細な石英粒多し。内外面にぶい黄褐色。
34	2	N-5	I層	深鉢	1-A	-	口唇下外面に刻目突帯。口唇にも刻み目。	内面ナデ、外面ナデ、条痕	チャートの砂粒多量。内外面ともにぶい黄褐色。
34	3	N-3	I層	深鉢	1-A	-	口唇下外面に刻目突帯。口唇は水平な面を成し、刻み目を有する。	内外面ナデ	チャートの砂粒を多量に含む。
34	4	M-6	I層	深鉢	1-A	-	口唇下外面に刻目突帯。口唇は水平な面を成し、刻み目を有する。	内面ナデ、外面条痕+ナデ	チャートの砂粒を多量に含む。内外面ともにぶい黄褐色。
34	5	N-5	I層	深鉢	1-B	-	口唇下外面に刻目突帯。口唇部外面に刻み目を有する。	内面ナデ、外面条痕+ナデ	砂粒をやや多く含む。
34	6	N-5	I層	深鉢	1-B	-	口唇下外面に刻目突帯。口唇部外面に刻み目を有する。	内面ナデ、外面条痕+ナデ	砂粒をやや多く含む。
34	7	N-5	I層	深鉢	1-C	-	口唇下外面に刻目突帯。口唇は水平な面を成し、刻み目を有する。	内外面ナデ	砂粒を少し含む。
34	8	N-5・6	I層	深鉢	2-A	-	口唇に刻み目を施す。	内外面ナデ	チャートの砂粒を多く含む。
34	9	M-5	I層	深鉢	2-A	-	口縁は緩やかに外反し、口唇に刻み目を施す。	内面ナデ 外面条痕後ナデ	砂粒を多量に含む。
34	10	N-5	I層	深鉢	2-A	-	口縁は外反気味に立ち上がり、口唇に刻み目を施す。	内外面ナデ	チャートの砂粒を多く含む。
34	11	N-6	I層	深鉢	2-A	-	口唇に刻み目を施す。	内外面ナデ	砂粒をやや多く含む。
34	12	N-6	I層	深鉢	2-A	-	口唇に刻み目を施す。	調整不明	砂粒を多量に含む。
34	13	N-5	I層	深鉢	2-A	-	口唇は細く仕上げ、刻み目を施す。	内外面 ナデ(口縁) 条痕(胴部)	—
34	14	M-5	I層	深鉢	2-A	-	外反して立ち上がる口縁。口唇は細く仕上げ、刻み目を施す。	内外面条痕	砂粒を多く含む。
34	15	O-6	I層	深鉢	2-A	-	外反して立ち上がる口縁。口唇は丸く収め、刻み目を施す。口縁にわずかに肥厚する部分がある。	内面ナデ 外面条痕	砂粒を多量に含む。
34	16	M-4	I層	深鉢	2-A-1	口径24.2cm 胴径23.2cm	僅かに膨らみを帯びた胴部から頸部で短く屈曲し外反する口縁に至る。頸部の屈曲は緩やか。口唇にヘラ状原体による刻みをもつ。口縁は水平になった平縁である	内面条痕後ナデ、外面頸部下条痕、口縁外面ナデ、内面・口縁外面に条痕の痕跡ほとんどなし。外面条痕は水平方向	砂粒を多く含む。内外面ともにぶい黄褐色。
34	17	O-6	I層	深鉢	2-A	-	外反して立ち上がる口縁。口唇は丸く収め、刻み目を施す。	内面ナデ 外面条痕	チャート砂粒を含む。
34	18	N-5	I層	深鉢	2-A	-	口唇は丸く収め、刻み目を施す。	内面ナデ、外面口縁下のみナデ、胴部条痕。	砂粒を多量に含む。内外面とも浅黄色。
35	19	N-5	I層	深鉢	2-B	口径(41.2cm)	口唇は水平面を成し、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内外面ナデ	砂粒を多量に含む。
35	20	N-5・6	I層	深鉢	2-B	口径33.8cm 胴径32.0cm	丸みを帯びた胴部から口縁は屈曲せずに非常に緩やかに外反する。口唇に貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。平縁に近いが、僅かに波状を呈している。	内外面とも条痕。条痕の方向は、内面水平方向で、外面右下がり	砂粒を多く含む。内外面とも灰黄褐色。
35	21	N-5	I層	深鉢	2-B	口径(37.0cm)	口縁は外反し、口唇は内傾する面を成す。口唇に貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内面条痕後ナデ、外面頸部下条痕、口縁外面ナデ	砂粒を多量に含む。
35	22	N-5	I層	深鉢	2-B	口径(41.4cm)	口唇は面を成し、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内面条痕後ナデ、外面頸部下条痕、口縁外面ナデ	砂粒をやや多く含む。
36	23	O-6	I層	深鉢	2-B	-	口唇は丸みを帯び、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内面条痕後ナデ、外面頸部下条痕、口縁外面ナデ	砂粒を多量に含む。
36	24	N-5・6	I層	深鉢	2-B	-	口唇は水平面を成し、わずかに外方へ拡張、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内面条痕 外面条痕後ナデ	砂粒を多量に含む。

Tab.3 調査II J区遺物(縄文土器)観察表2

Fig. No.	図版番号	出土地点(グリッド)	層位	器種	分類	法量	特徴	調整	胎土・色調
36	25	N-5・6	I層	深鉢	2-B	-	口唇は水平面を成し、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内外面条痕	砂粒をやや多く含む。
36	26	N-4	I層	深鉢	2-B	-	口唇は水平面を成し、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内面ナデ 外面条痕後ナデ	砂粒をやや多く含む。
36	27	O-8	I層	深鉢	2-B	-	口唇に貝殻縁辺による刻み目。	内外面条痕	砂粒をやや多く含む。
36	28	O-6・7	I-2層	深鉢	3	-	口縁は外反し、口唇は内傾する面を成す。胴部に直径8cmの補修孔を穿つ。	内面調整不明外面条痕	砂粒を多量に含む。
36	29	O-6・7	I-2層	深鉢	3	口径(40.0cm)	口縁は外反し、口唇は水平面を成す。	内面条痕後ナデ 外面条痕	砂粒を多量に含む。
36	30	M-3	II層	深鉢	2-A	-	口唇は丸みを帯びた面を成し刻み目を施す。	内面ナデ、外面条痕	砂粒を多く含む。内外面とも灰黄色。
36	31	M-7	II層	深鉢	2-A	-	口唇は細く仕上げ、刻み目を施す。	内面調整不明外面口縁下のみナデ、胴部条痕。	砂粒を多量に含む。内外面とも灰黄色。
36	32	M-5	II層	深鉢	2-B	-	口唇部は水平面を成し、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内面ナデ、外面条痕	砂粒をやや多く含む。内面にぶい黄橙色。
36	33	M-6	II層	深鉢	3	-	口唇は丸みを帯びた面を成す。	内外面とも条痕。	砂粒を多量に含む。内面灰黄色、外面淡黄色。
36	34	集中B	S層	深鉢	3	口径43.2cm 胴径40.6cm	胴部は僅かに膨らむ。頸部で非常に緩やかに屈曲し、口縁は外上方へ直線的に伸びる。口唇は面をなし、刻目等の加飾は認められない。口縁部は波状である。	内外面とも条痕。条痕の方向は、内面きつい右下がり、胴部は上下方向、外面右下がり、上下方向も残る。	砂粒をやや多く含む。内外面ともぶい褐色。
36	35	N-6	III層	深鉢	3	-	口唇は丸みを帯びた面を成す。	内外面ともナデ	砂粒を多量に含む。内外面とも暗灰黄色。
37	36	M-5	III層	深鉢	2-B	-	口唇は丸く収め、貝殻縁辺を使用した刻み目を施す。	内面ナデ、外面条痕。	砂粒を多量に含む。内外面とも暗灰黄色。
37	37	M-6	III層	深鉢	3	-	口唇は水平面を成す。	内面ナデ、外面口縁下のみナデ、胴部条痕。	砂粒を多量に含む。内外面とも灰黄色。
37	38	M-5	III層	深鉢	3	-	口唇は丸く収める。	内面ナデ、外面口縁下のみナデ、胴部条痕。	—
37	39	N-5・6	III層	深鉢	3	口径(36.4cm)	ほぼ直立した口縁。口唇は丸く収める。		砂粒を多量に含む。内外面とも灰黄色。
37	40	N-8	I層	深鉢	底部	底径7.4cm	上げ底の底部で、底部端が外方に突出している。	内外面ともナデ	砂粒を多く含む。内面 明褐色、外面にぶい黄橙色。
37	41	N-5	I層	深鉢	底部	底径5.6cm	わずかに上げ底気味の底部で、底部端が若干外方に拡張する。	調整不明	砂粒を多量に含む。内面 灰黄色、外面淡黄色。
37	42	M-4	I層	深鉢	底部	底径3.8cm	上げ底気味の底部から、体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面ともナデ	小礫に近い大きさの砂粒を多く含む。内面にぶい黄褐色、外面 暗灰黄色。
37	43	O-6・7	I-2層	深鉢	底部	底径5.3cm	平底の底部。体部は一度くびれた後直線的に外上方へ立ち上がる。	調整不明	砂粒を多量に含む。内面 浅黄色、外面灰黄色。
37	44	N-7	II層	深鉢	底部	底径6.4cm	平底の底部。体部は一度くびれた後直線的に外上方へ立ち上がる。	内外面ともナデ	チャートの砂粒を多く含む。内外面とも浅黄色。
37	45	N-6	S層	深鉢	底部	底径7.2cm	高台状の底部。	外面条痕	チャートの砂粒を多量に含む。内外面とも黄橙色。
37	46	M-5	III層	深鉢	底部	底径5.6cm	わずかに上げ底気味の底部で、底部端が若干外方に拡張する。	調整不明	細砂粒を多量に含む。内外面とも浅黄色。

〔2〕 II区

(1) 調査II区の概要

調査II区は調査I区の南西側に位置し、北東端部を調査I区と接する形で設定された調査区であり、東西方向、南北方向それぞれ約30mの規模を持つ。試掘調査におけるCトレンチは、この調査区の東端に位置する。調査I区と同様、旧耕作土上には1.5~2.0mの盛土が存在しており、掘削はこの盛土を排除した後、包含層の上面まで重機により掘削を行い、遺物包含層及び遺構については人力による精査を行った。

調査区の北半(Nグリッド以北)では上位に植物遺体を多く含んだ流路埋積最終段階の粘性土層が検出され、ここからは流木に混じって須恵器や木器、大型の木製品、馬骨、獣骨等が出土している。下位の砂利層と合わせて洪水的な運搬力の高い状況の後に河道変更が生じ廃棄さ

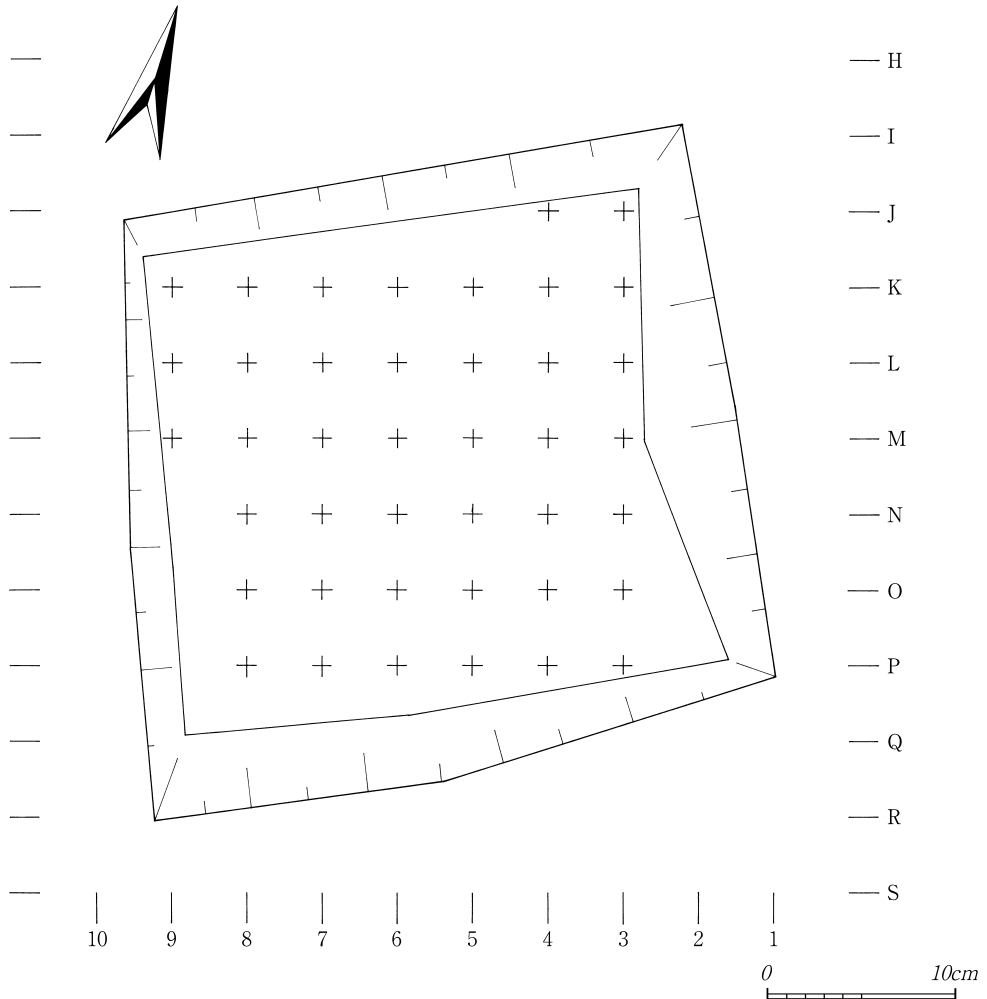


Fig.38 調査II区全体図 (S : 1/400)

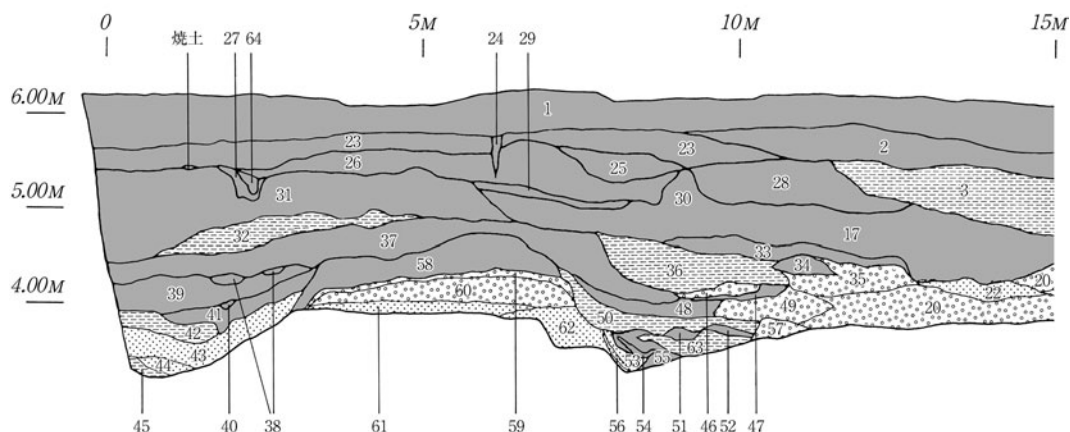


Fig.39 調査II区西壁セクション図 (S:縦1/80.1/120)

れたものと考えられる。この内、少なくとも最終段階の流路は調査区に西方から進入し、緩く曲流して北東に向かっている。この他に、ここでは弥生後期末から古墳時代に掛けての幾つかの流路が存在したものと考えられる。

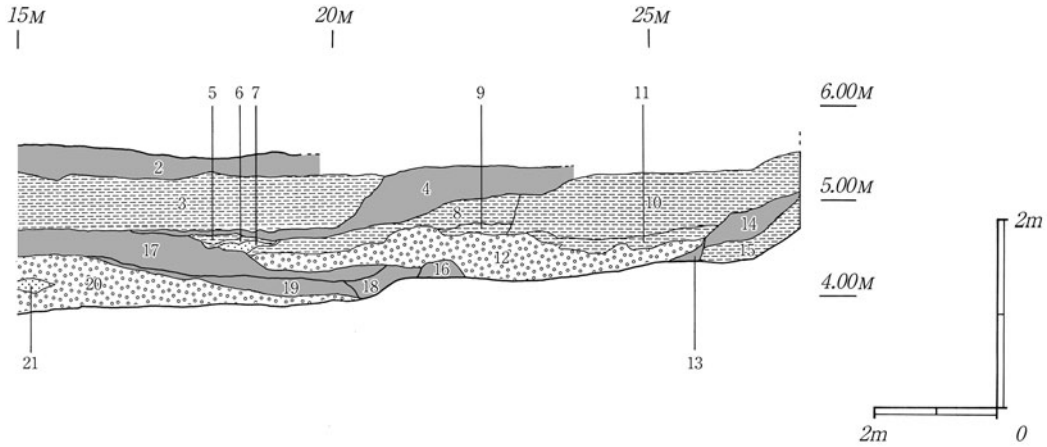
調査区の南半 (Nグリッド以南) を中心にして検出された包含層は、主に弥生前期末から中期中頭の土器を含むものであった。次項で詳述するが包含層は概ね北側に向かって緩く降下しており、遺物出土の中心は標高の高い南側にあり、北に向かって標高が低くなるに従い遺物の包含は希薄となる。また、包含層出土遺物の中には弥生中期から後期・終末期の遺物も見受けられることから、この北側部分には後続する時期の遺物包含層も残存していた可能性がある。検出遺構は土坑・溝状遺構・ピットであり、包含層の除去後、主に標高の高い調査区南端部を中心に発見された。隣接する調査III区及び調査IV区の遺構検出状況と合せると、遺構は調査II・III・IV区の南端部で扇形に分布していることが見てとれる。

調査区内では、弥生遺物包含層及び流路内植物堆積層の何れの層も旧耕作土下約50cmに於てほぼ同じ標高で検出されており、後世に於ける耕作等による影響が上面では及んでいた可能性が考えられる。

調査開始当初は、この弥生時代遺物包含層をY1~Y3層に細分して調査を進めたが、ここでは弥生遺物包含層を総称して“Y層群”として扱う。また、流路内の埋積過程は一様に捉え難いが、各時期の初期堆積層を“G層群”、最終段階である植物遺体等の堆積層を総称して“P層群”として説明を進める。但し、本報告で行うSR201とは各々の層群を纏めて扱ったもので、廃棄直前の流路の影は色濃いが先行する流路堆積層も幾らかその中には含まれている。

(2) 層序 (Fig.39)

調査区西端の西壁南北セクションを図示する。一見して分かる様に上層を除いて恒常的な堆積は捉え難く、流路又は流路に隣接する堆積環境と考えられる。以下では主な堆積層について



No.	層名	内 容	備 考	No.	層名	内 容	備 考
1	赤褐色粘土	鉄分浸透		33	灰色粘土	円礫混	
2	灰褐色粘土	腐植微含		34	灰色粘土		
3	暗灰褐色土	腐植土・植物遺体含	P層	35	砂 礫	細砂利	
4	灰色粘土	炭化物多混 腐植多混		36	暗灰色シルト		縄文晩期土器
5	腐植堆積	細砂混		37	灰褐色粘土		
6	腐植堆積	細砂混		38	灰褐色粘土	炭化物多混	縄文晩期土器
7	青灰色細砂	腐植混		39	青灰色粘土		
8	暗灰褐色土	細砂混 腐植堆積		40	・ ・ ・ 粘土		
9	灰色シルト	腐植多混		41	淡灰色粘土		
10	灰色シルト	炭化物微含		42	灰色シルト	褐色斑点	
11	暗茶灰色土	腐植堆積		43	灰褐色細砂		
12	砂 礫	礫粒5~30cm		44	灰色 砂		
13	暗灰色粘土	礫粒10~20cm		45	灰色シルト	褐色斑点	
14	灰色粘土	炭化物微含		46	青灰色砂礫		
15	暗灰色シルト	炭化物微含		47	灰色粘土		
16	暗灰色粘土	礫粒10~30cm 腐植混		48	灰褐色粘土		
17	明灰色粘土	炭化物微含 細砂微含		49	暗灰色砂礫	細砂利	
18	灰色粘土			50	淡褐色シルト		
19	明灰色粘土	炭化物混 礫粒10~30cm 腐植混		51	灰色粘土		
20	暗灰色砂礫	礫粒10~40cm		52	褐色粘土		
21	灰色 砂			53	灰色粘土		
22	暗灰色細砂			54	茶色粘土		
23	暗灰色粘土		Y層	55	青色砂層	植物遺体	
24	・ ・ ・ 粘土			56	褐色 砂	鉄分多混	
25	灰緑褐色粘土			57	灰色砂礫		
26	青灰色粘土			58	褐色細砂		
27	灰色粘土		柱穴内埋土	59	青灰色砂利		
28	暗灰色粘土			60	砂 ・ 砂利		
29	淡青灰色粘土			61	砂 ・ 砂利		
30	明灰色粘土			62	黒色 砂		
31	灰褐色粘土	Mnを含む		63	濃灰色シルト	細砂	
32	暗灰緑褐色シルト			64	淡灰色粘土		柱痕部分

叙述し、他は層序表を参照されたい。

1) 表土及び旧表土

上位層のうち1層は旧耕作土と考えられる。また、2層は湿地的な環境の下で発達したものと考えられる。

2) P層群

西壁セクションでは3～11層が相当する。先述のようにP層群は主にシルト層によって形成される堆積層であるが、部分的に細砂層を取込んでいる。特にP層南端部の旧河岸に相当する部分では、木の葉や小枝を主とする堆積層と細砂層が互層を成して存在しており、流路の後退過程を示している。植物遺体を多く含み、流木と共に長さ2.4m、幅60cmの板材や長さ約5mの柱材、扉材などの大型木製品、横槌や鋏、杭などの小型の木製品が見られた。また、馬骨を始めとする動物遺体も出土している。土器としては須恵器の甕や坏が見られるが僅少である。この下方にはG層群の堆積を伴っており、大きく見てP層群は一流路の最終充填層と考えられる。

3) G層群

Y層群堆積後、再び流路が北遷し、洪水性の比較的粒径の大きな堆積物をもたらした初期段階の流路堆積層である。西壁セクションでは12層が相当する。上位に向かうに従い砂利の粒径は小振りに成り、植物遺体の堆積層と砂利層が混在する状況が見られる。ここからは杭などのやや小型の木製品や自然木の枝、古墳前期の土師器甕などが出土している。流路内出土遺物として扱った遺物のうち、土器の殆どは本層群から出土している。縄文後期から古墳時代の遺物が存在しており、弥生前期末から中期の土器破片も多く見られたが、主に弥生後期後半から古墳前期のものであり、ほぼ完形で出土するものも存在した。

4) Y層群

Y層群は23層、北側ではそれに繋がる28層、下位の29層などで先述の様に北に向かって緩やかに標高を下げていく。概ね暗青灰色～緑灰色のシルトによって形成されていた。南側に存在したと考えられる流路からもたらされたもので、ここは自然堤防を乗り越え後背湿地側へ降下を始める部分に相当するものであろう。出土遺物は主に弥生前期末から中期初頭の土器と扁平片刃石斧、石包丁、石鋏などの石器・石製品、他に鉄片が見られた。

Y層群下部の堆積状況からは、南端から8m付近に古い小規模な流路が存在し、その後河道の中心が南側に移ったと考えられる。河道の南遷以後、Y層群形成時期まで比較的穏やかな堆積環境が続いていたものであろう。

5) 遺構検出面

31層は各遺構の検出面であり、北へ連なる30層、17層と標高を徐々に下げて行く。西壁セクションでは厚い層厚が示されているが、遺構の検出状況から考えると、細分される可能性がある。遺構として検出されたものの多くは土坑やピットである。上位に存在したものは比較的小規模で浅いくぼみ程度のもので多く、埋土としてやや濃い青灰色粘質土を持ち、遺構の低位には薄い炭化物層が存在していた。また、検出された土坑群の中には、平面形が円形又は不整形円

形を呈し、規模が1mを越えるものも見られ、その多くが埋土として炭化物と焼土の層を3層以上持ち、その間を暗青灰色粘質土が埋める堆積状況を示していた。

(3) 弥生時代

1) 遺構と遺物

先述の様に調査区の南部を中心にして自然堤防上に土坑、溝状遺構、ピットが検出されている。ここでは主な土坑について記述を行い、他は遺構計測表を参照されたい。

SK1 (Fig.41)

調査区の南部 (P-5・6 グリッド) 中央に位置している。南西-北東方向を主軸とする平面形隅丸長方形を呈し、規模は長辺1.44m、短辺0.92mを測る。南西側に深いピット状の落ち込みが存在する。

出土遺物は土器が557点である。この中で図示可能な遺物は土器が47から86である。出土した土器遺物の中で壺の占める割合が高く、図示したものの中で甕と考えられるものは1点(77)のみであった。壺の中にはベンガラを用い赤色塗彩したものも存在した。

47から52は広口形の壺で口頸部に沈線帯を施し、断面台形の刻目突帯を貼付する。中には49の様に沈線を用いて削り出しの突帯風に仕上げ、そこに米粒状の刺突を用いて刻むものも存在する。胴部は卵形を呈し、中位から下位にかけて最大径を持つ前段階からの系譜をひくものが多い。中位から上位にかけて2から4ヶ所の沈線帯が施される。53から66には、口縁部は開くものの頸部の発達が小さいもの(53・55・57・59)、開きは小さく頸部は短いもの(54・56・58・60・62)、直立気味に立ち上がるもの(63~66)が存在する。67から70は壺の胴部から底部。71から76は壺の頸部。78から82は壺の底部。83から86は頸部・胴部の破片であり、沈線帯や刻目突帯を拓影で示す。

SK16 (Fig.42)

調査区の西部 (O・P-8 グリッド) に位置し、自然堤防上の北側に存在する。平面形は不整形円形を呈し、規模は直径1.10~1.20mを測る。自然堤防が北西方向へ下り始めている部分であり、検出標高がやや高いことから、土坑群の中でもやや新しい時期の可能性はある。

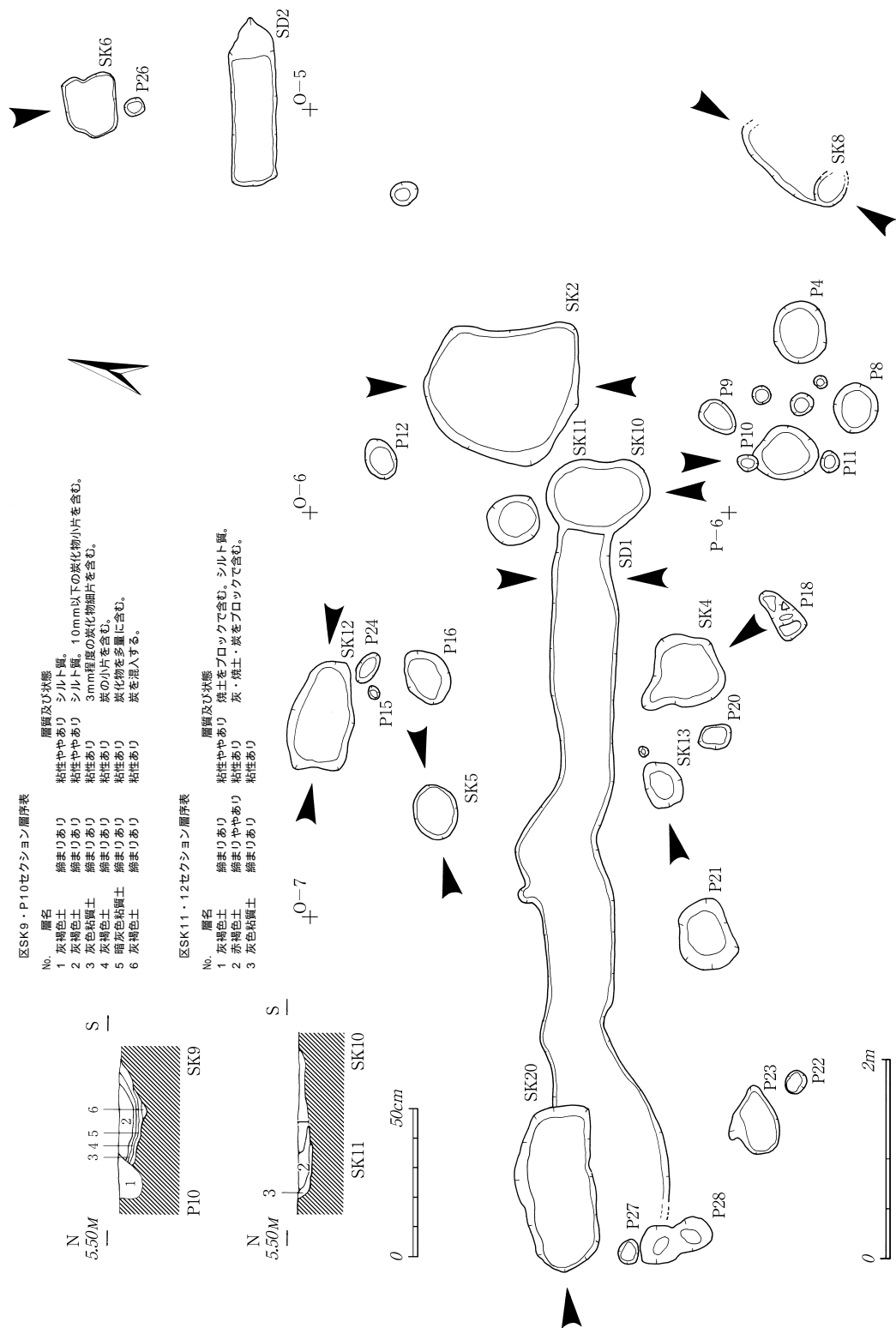
出土遺物は土器が56点で、このうち図示できたものは91の1点のみである。

SK18 (Fig.42)

調査区の西部 (P-8 グリッド) に位置し、自然堤防上に存在する。平面形は不整形を呈し、規模は長軸1.65m、短軸1.30mを測る。出土遺物は土器が199点である。

SK22・23 (Fig.44)

調査区の東部 (M・N-2 グリッド) に位置し、自然堤防の北側で後背湿地側の傾斜部に存在した。両土坑共に遺構の北東側はやや不明確である。平面形はSK22が不整形隅丸長方形、SK23が不整形楕円形を呈し、規模はSK22が直径4.80~4.90m、SK23が長径3.40m、短径1.30mを



区SK9・P10セクション層序表

No.	層名	層厚及び状態
1	灰褐色土	粘りやあり シルト質。
2	灰褐色土	粘りやあり シルト質。10mm以下の炭化物小片を含む。
3	灰色粘質土	粘りやあり 3mm程度の炭化物小片を含む。
4	灰褐色土	粘りやあり 炭の小片を含む。
5	明灰色粘質土	粘りやあり 炭化物を多量に含む。
6	灰褐色土	粘りやあり 炭を混入する。

区SK11・12セクション層序表

No.	層名	層厚及び状態
1	灰褐色土	粘りやあり 粘土をブロックで含む。シルト質。
2	赤褐色土	粘りやあり 灰・粘土・炭をブロックで含む。
3	灰色粘質土	粘りやあり 粘性あり

Fig.40 調査II区遺構平面図 1 (S : 1/60,1/20)

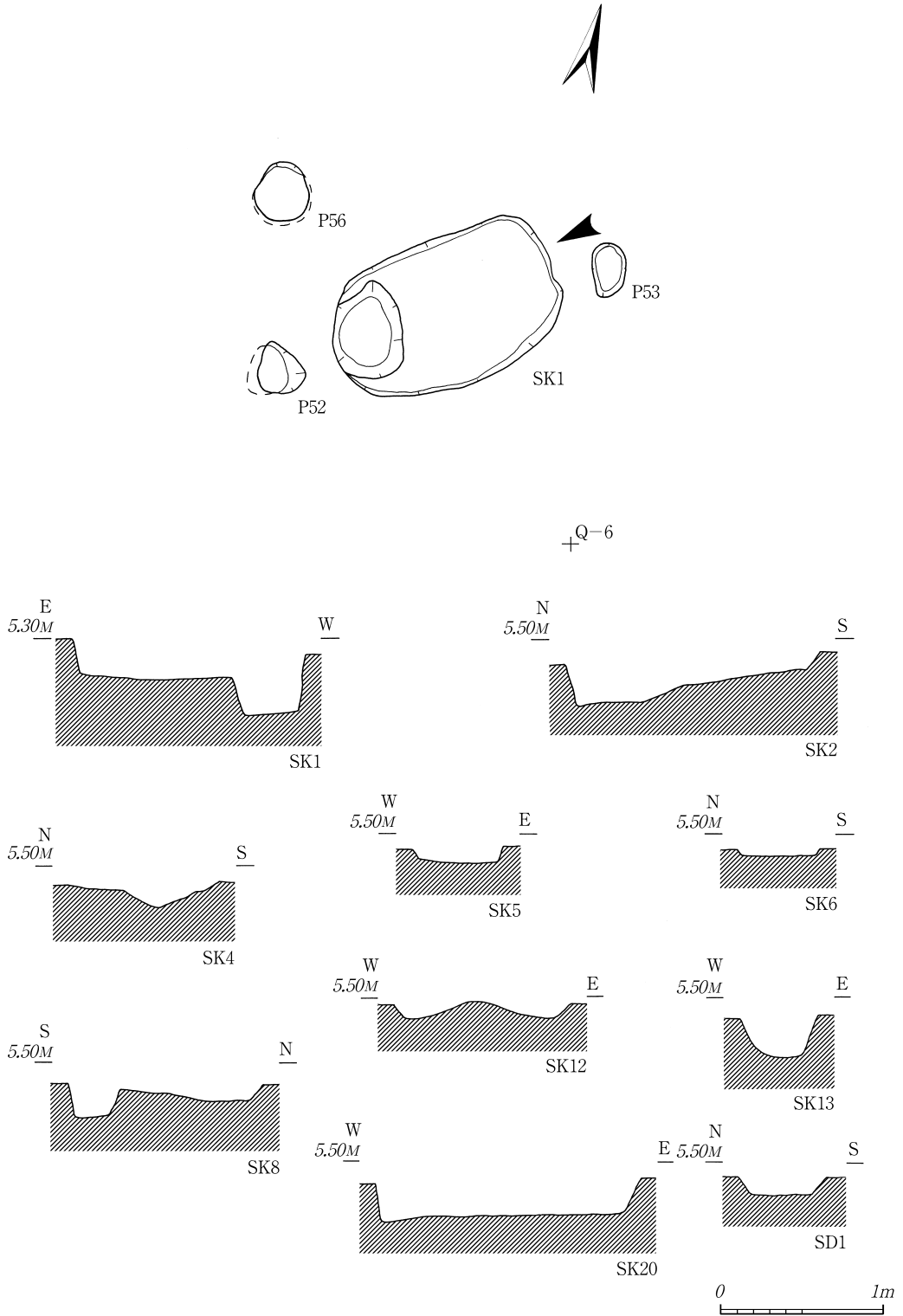


Fig.41 調査Ⅱ区遺構平面図 2 (S : 1/40)

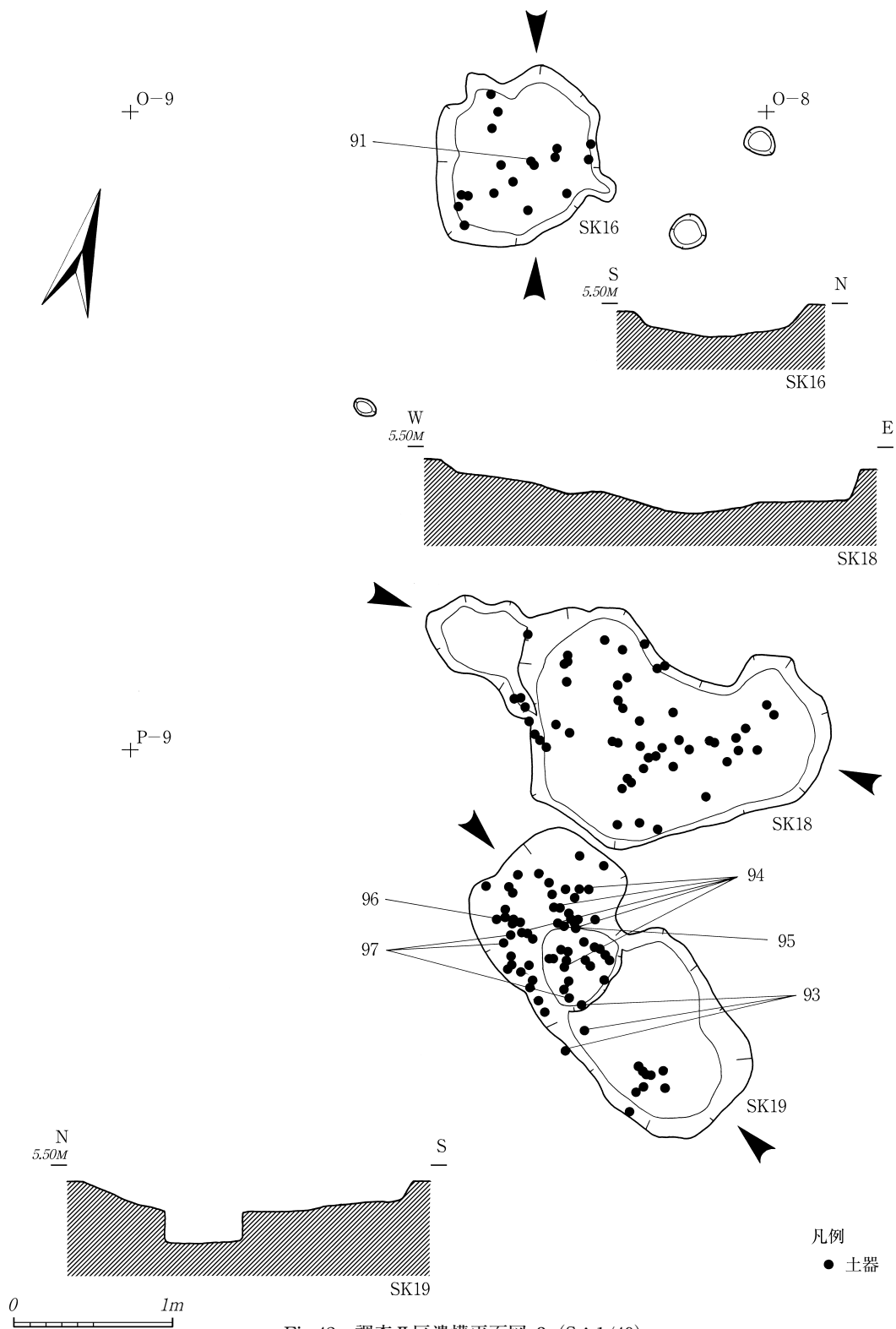


Fig.42 調査II区遺構平面図 3 (S : 1/40)

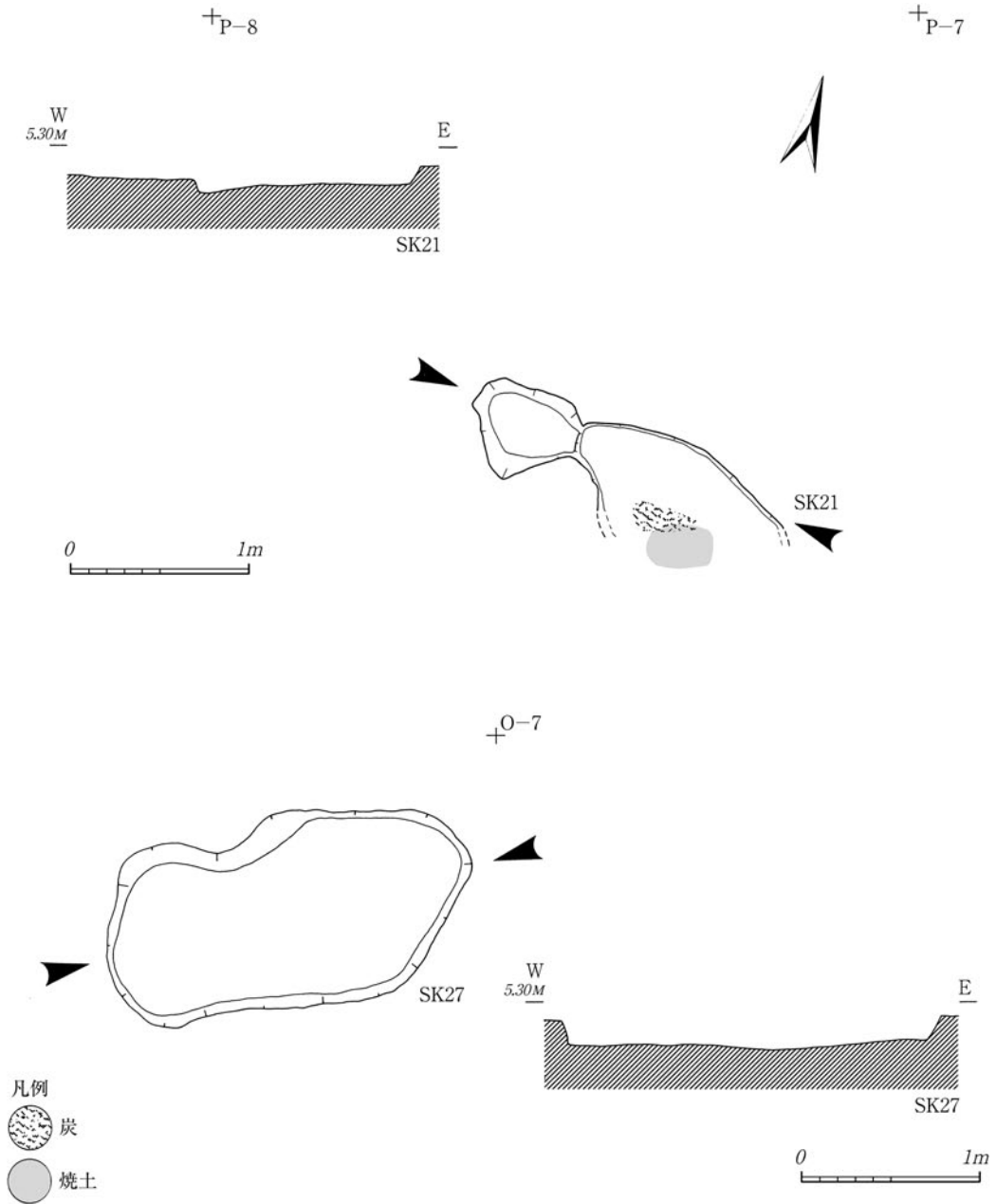


Fig.43 調査Ⅱ区遺構平面図 4 (S : 1/40)

測る。検出面からの深さはSK22が30cmであり、SK23では52cmである。

出土遺物は土器がSK22で997点、SK23では198点である。隣接するグリッド出土遺物として扱った遺物も含めれば、この付近から1,500点以上の土器が出土している。出土遺物として図示し得た遺物はSK22が101から130であり、SK23が131から138である。

SK22の101から117は壺である。101から104は広口形の壺である。口頸部に沈線帯を設け、

断面台形の刻目突帯を貼付する。105は頸部の発達が少ない、106は口頸部が直立気味に立ち上がる。107から109は口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚するもので、口唇にヘラによる斜格子紋や刻みを施す。110は口頸部が直立する。111は口縁部に粘土帯を貼付し、肥厚するもので接合部にハケ目や圧痕が見られる。112は口縁部としたが蓋または脚部の可能性がある。113は頸部。114から116は底部。117はヘラ描沈線帯に貝殻による弧紋を施し、擬流水紋を描く。118から129は甕である。118から120は口唇下に断面三角形の刻目突帯を施すもの。121は口唇下に2条の刻目突帯が付く。122は口唇下の断面三角形突帯の上下に指頭押圧痕を残す。また、118・119には頸部下に断面三角形の小突帯が貼付される。119・123から125には頸部下に沈線帯が施される。126はやや小型で器壁は薄く小砂粒が胎土中に多く含まれる。127の底面には製作時に付着した種子痕跡が残される。130は蓋である。

SK23の131から133は壺である。131・133は口縁部が開くものの頸部の発達が小さいもので、132は口頸部が短いものである。134から138は甕である。134は頸部下に沈線帯を持ち、135は口唇下の突帯上下に指頭押圧痕を残す。136は頸部下に断面三角形の突帯を3条貼付し、刺突による刻みを施す。突帯の下位に押圧痕のある浮紋列を付す。

SK25 (Fig.45)

調査区の南西部 (P-8 グリッド) に存在する。平面形は不整楕円形を呈し、主軸方向は南北である。規模は上部で長さ1.34m、幅74cmを測る。西側に袋状の張り出しが見られ最大幅は約80cmに達する。検出面からの深さは約38cmであり、中央部分に深さ13cm程のピット状の落ち込みが存在する。出土遺物のうち土器は146点であるが、この中で図示し得るものはない。

SK31 (Fig.48)

調査区の南部中央 (O・P-5 グリッド) に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向は西南西から東北東である。規模は長辺1.39m、短辺1.14mである。床は東半で深く約56cmである。出土遺物の残存度は比較的良好であり、145などの大きな破片が出土している。

出土遺物のうち土器は259点である。この中で図示し得るものは144から147である。144・145は壺の胴・底部であり、146・147は甕の口頸部と底部である。何れも土坑の北半部分から出土を見た。

SK49 (Fig.54)

調査区の東部南端 (Q-2 グリッド) に位置するが調査区南壁に画されており、土坑の全体像は不明である。調査は長さ東西2.28m、南壁までの幅1.70mについてのみ行った。北側部分に円形を呈する張り出し部分が存在し、検出面からの深さは他所よりもやや深く62cmであった。南部で検出される残存状態の良い土坑群には、埋積過程で共通して数層の焼土や炭化物層が存在する。SK49も例外に漏れず、土坑の規模が縮小される過程で炭化物層と灰色系のシルトの互層が見られた。

出土遺物のうち土器は205点である。この中で図示し得るものは153から158である。153から156は壺の胴部で同一個体のもの。器面をハケで滑らかに仕上げた後に2条の沈線で紋様を描

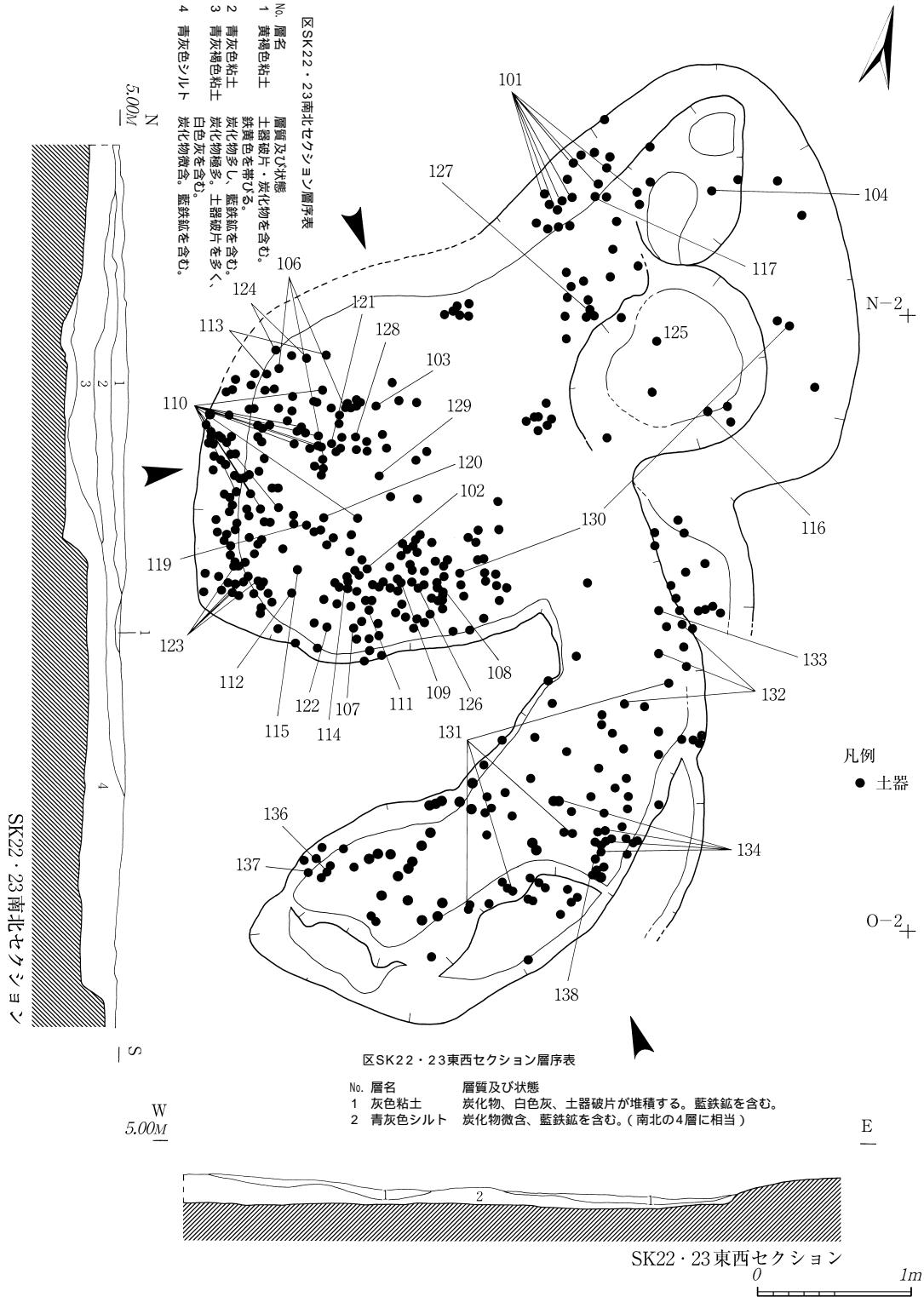


Fig.44 調査II区遺構平面図 5 (S : 1/40)

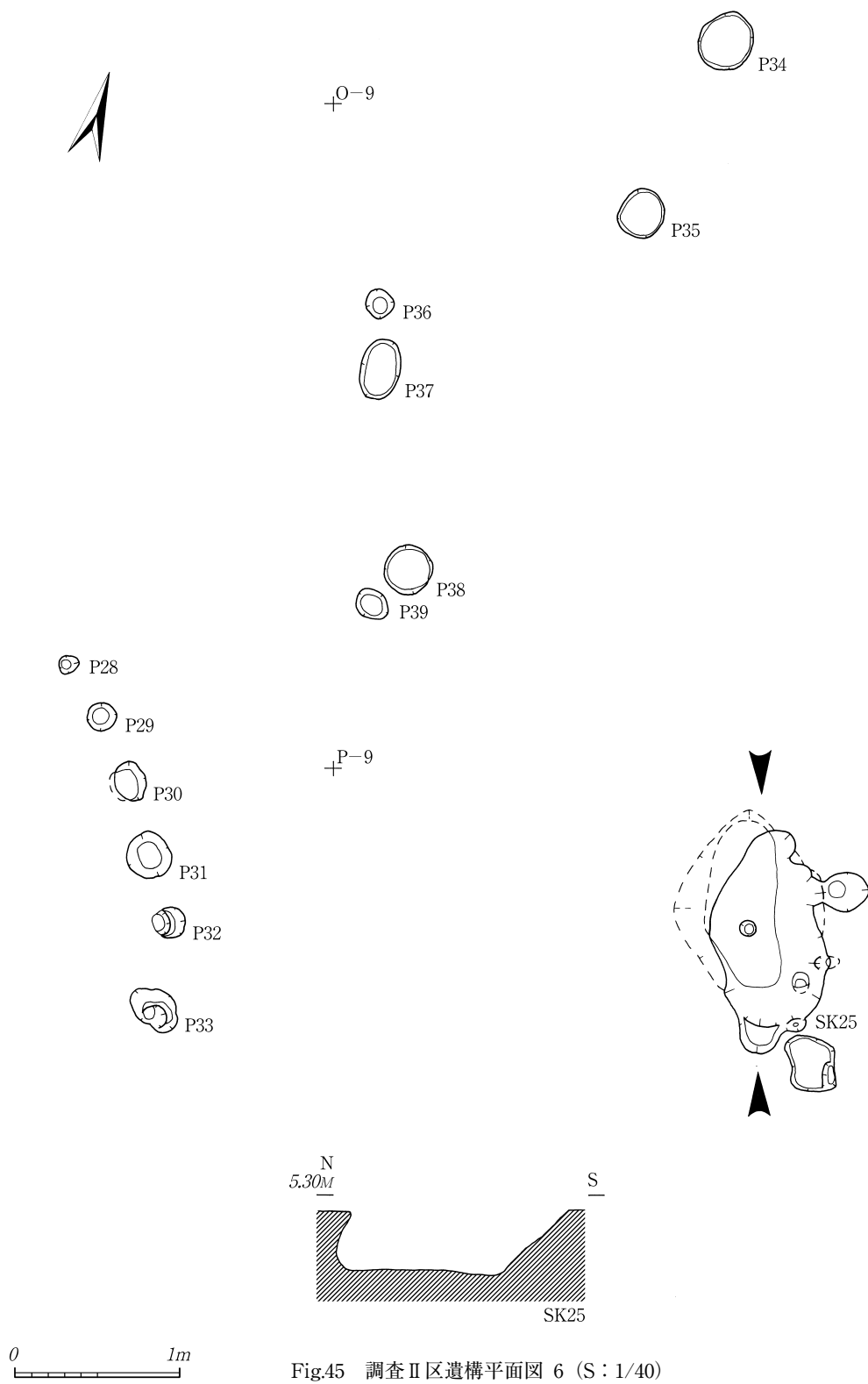


Fig.45 調査II区遺構平面図 6 (S : 1/40)

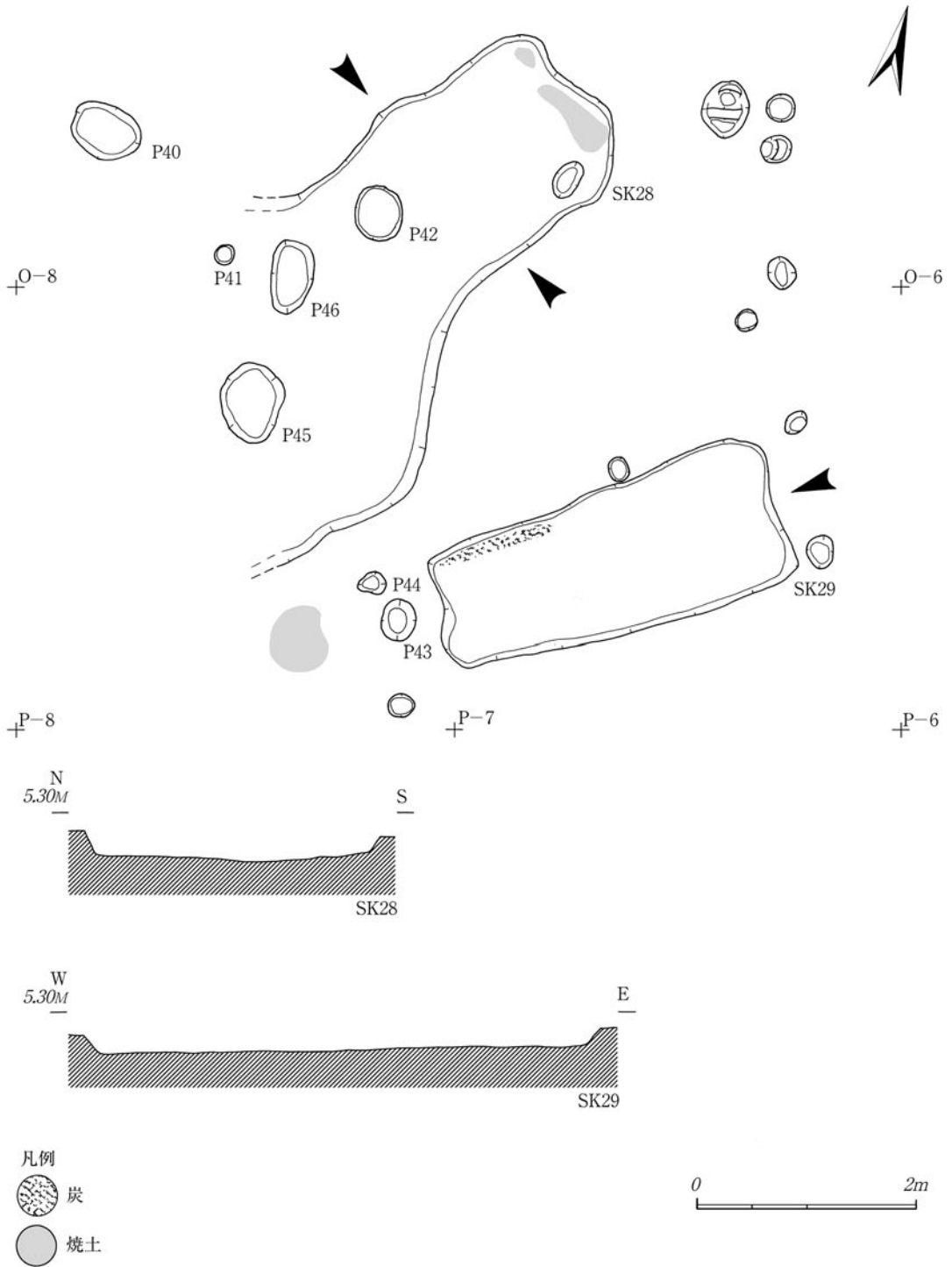


Fig.46 調査Ⅱ区遺構平面図 7 (S : 1/40)

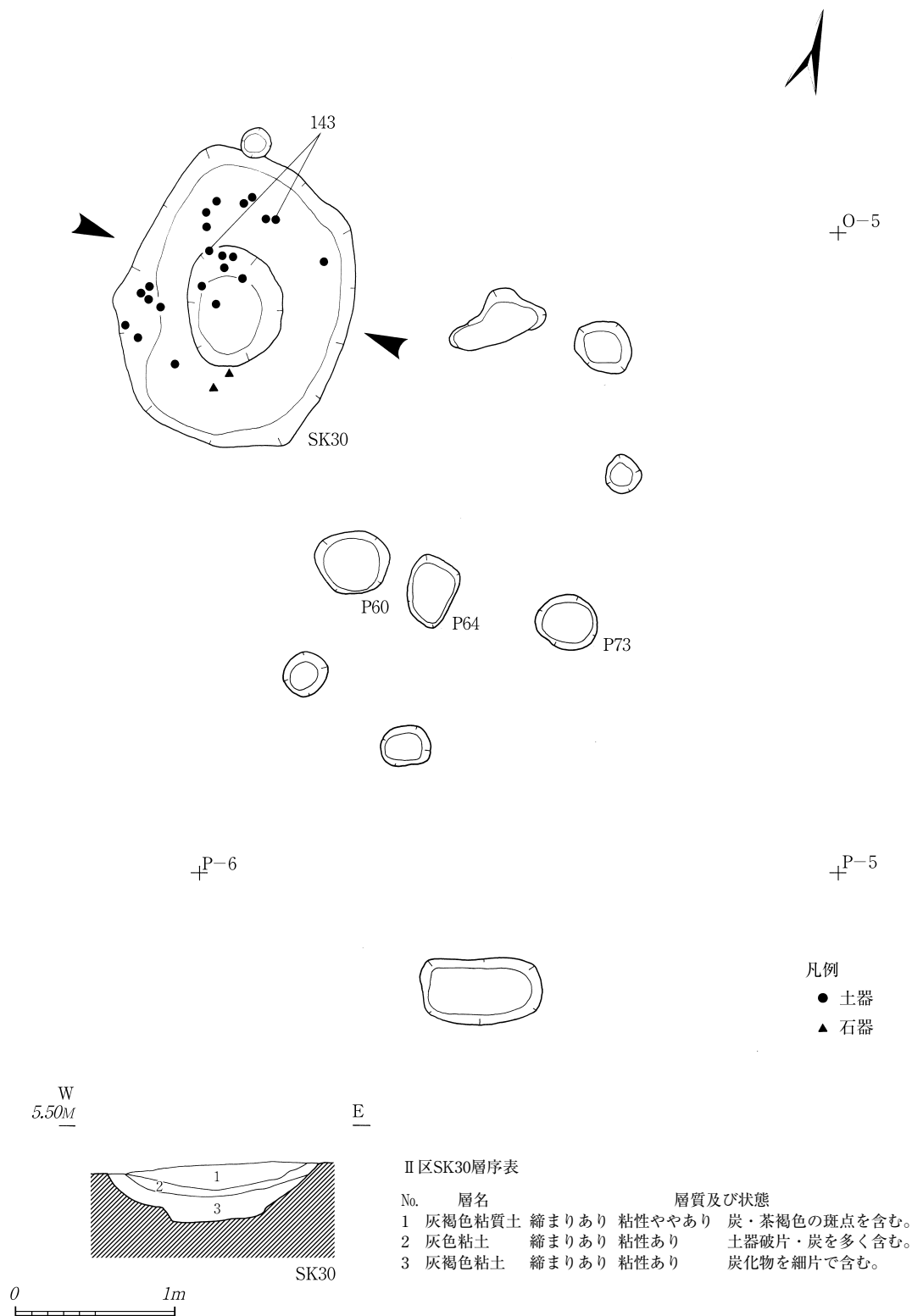


Fig.47 調査II区遺構平面図 8 (S : 1/40)

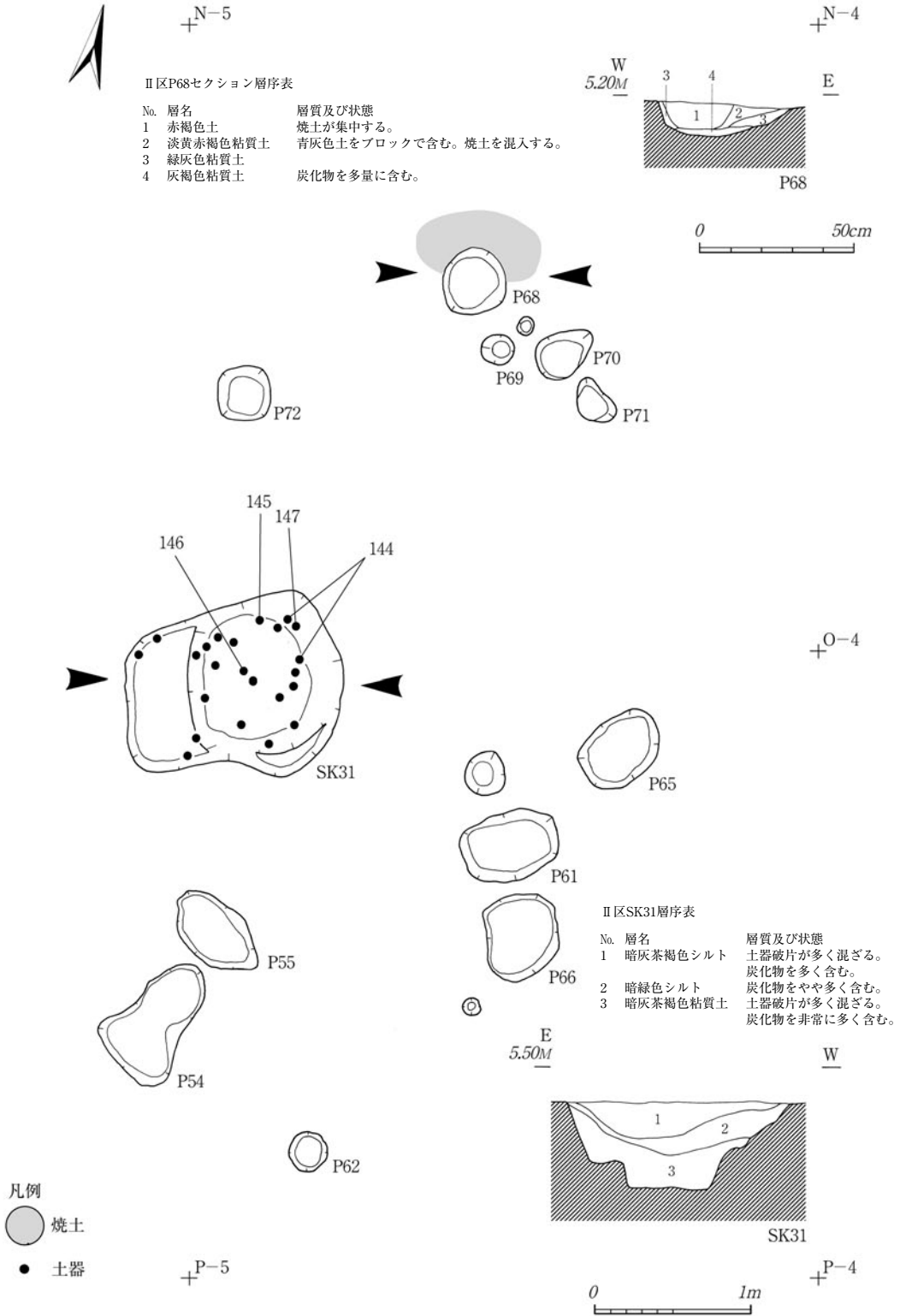


Fig.48 調査II区遺構平面図 9 (S: 1/40,1/20)

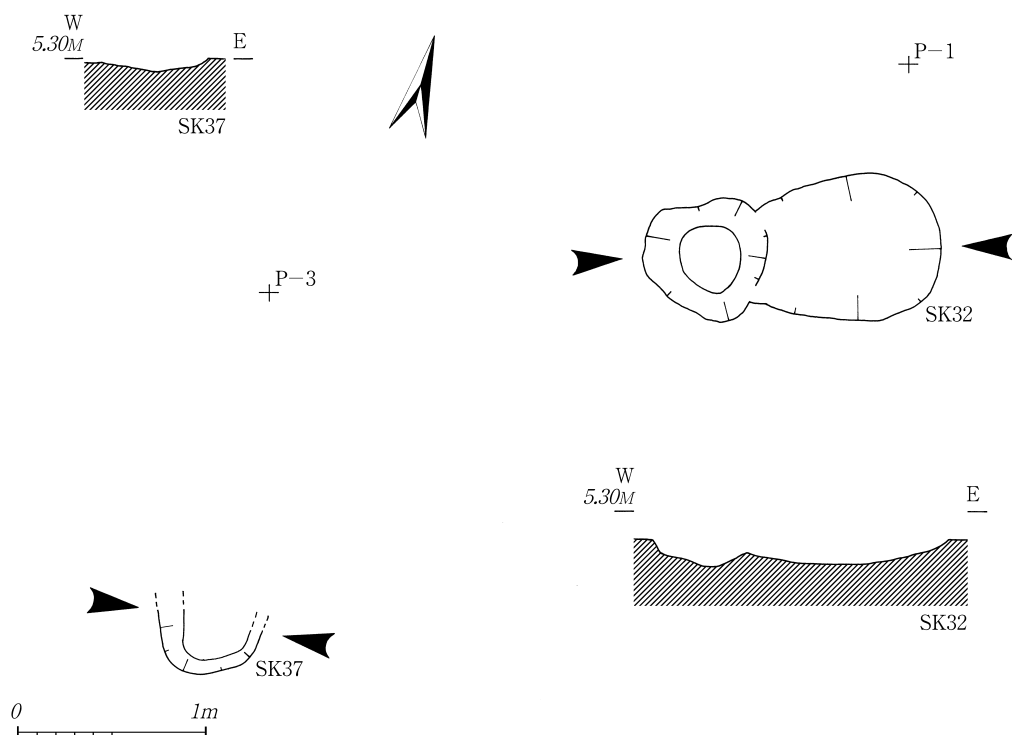


Fig.49 調査II区遺構平面図 10 (S:1/40)

いたと考えられる。157・158は甕の口頸部である。

SK54 (Fig.56)

調査区の南部 (P・Q-5 グリッド) に位置する。残存状態の良好な土坑の一つで、平面形は不整隅丸方形を呈する。規模は長辺2.62m、短辺2.35mを測り、検出面からの深さは71cmである。主軸方向はほぼ東西であり東壁がやや緩く、他壁は急な傾斜面を成す。SK67に南側は接する。埋積は炭化物層と青灰色系のシルト層の薄い堆積から成る。

出土遺物のうち土器は593点であり、この中で図示し得るものは162から172である。162から164は壺の胴部破片で、沈線帯と共に山形紋・斜格子紋が施される。165は頸部下に櫛描きによる簾状紋と波状紋を施す甕である。166から172は他の土坑から出土した土器片と遺構間で接合した資料である。166はSK64出土のものと同接合した壺の口縁部。167から169はSK66出土のものと同接合した壺と甕。170から172は隣接するSK67出土の破片と同接合している。

SK55-2 (Fig.56)

調査区の南部 (Q-5・6 グリッド) に位置する。残存状態の良好な土坑の一つで、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長径2.07m、短径1.54mを測り、検出面からの深さは59cmである。東側でSK55に接する。東壁は比較的緩やかであるが、西壁は急傾斜であり、土坑壁面は軟弱な地盤のためか、床面に被さる部分も見られた。

出土遺物のうち土器は180点であり、この中で図示し得るものは173・174の壺口縁部2点である。

SK59 (Fig.58)

調査区の南西端部 (Q-8 グリッド) に位置する。平面形は東西にやや長い不整形を呈し、規模は東西2.23m、南北1.56mを測る。検出面からの深さは75cmである。埋積は炭化物を多く含む層と褐灰色系のシルト層が薄く重なり合っていた。遺物の残存は比較的良好で、土器は規模の大きな破片で出土が見られた。181・184は土坑南部から、183は西壁際から出土している。

出土遺物のうち土器は412点であり、このうち図示し得るものは180から186である。180は壺胴部破片でヘラ描き沈線帯と削り出し風の刻目突帯、斜格子紋を施す。181から183は壺の口縁部である。184は壺の胴・底部か。185は甕。186はSK65から出土した破片と遺構間で接合した壺の胴・底部である。

SK67 (Fig.56)

調査区の南部 (Q-5 グリッド) に位置する。平面形は不整形円形を呈し、規模は東西1.56m、南北1.55mを測る。検出面からの深さは86cmである。

出土遺物のうち土器は92点であり、このうち図示し得るものは192から196である。192は壺の底部である。193は甕の口縁部。194・195は甕の底部か。196は壺の胴部破片でヘラ描き沈線と端部に貝殻による弧を施した楕円紋が見られる。

SK72 (Fig.59)

調査区の南部 (Q-6 グリッド) に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は西南

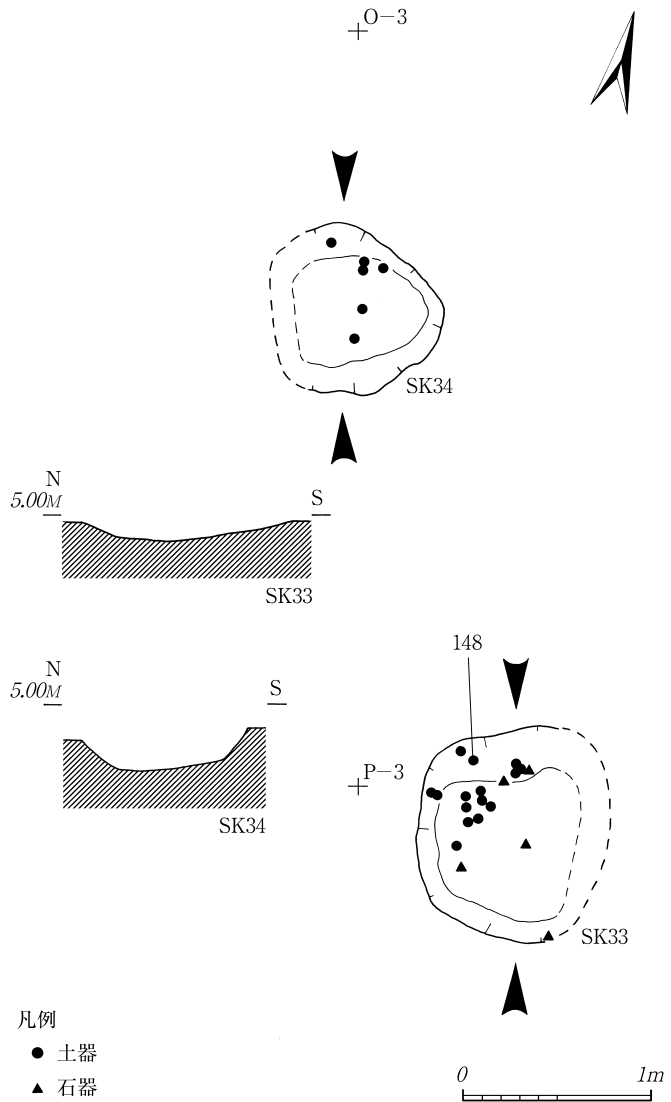
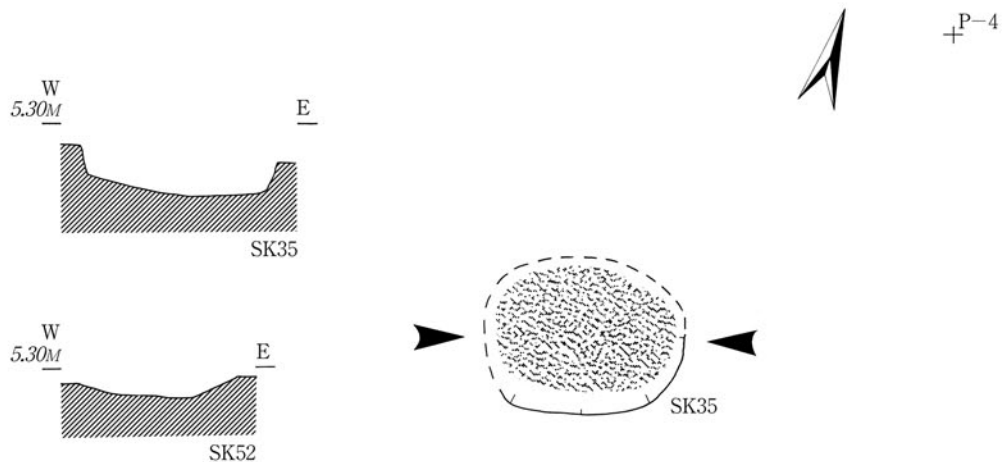


Fig.50 調査Ⅱ区遺構平面図 11 (S:1/40)



II区SK53セクション層序表

No.	層名	層質及び状態
1	黄灰色粘質土	炭化物をやや多く含む。
2	黄灰色粘質土	炭化物を少量含む。
3	暗灰褐色粘質土	炭化物を多く含む。
4	緑灰色粘質土	炭化物を少量含む。
5	暗灰褐色粘質土	炭化物を非常に多く含む。
6	暗灰褐色粘質土	炭化物を非常に多く含む。
7	暗赤褐灰色粘質土	焼土が集中する。
8	青灰色粘土	

+Q-5 +Q-4

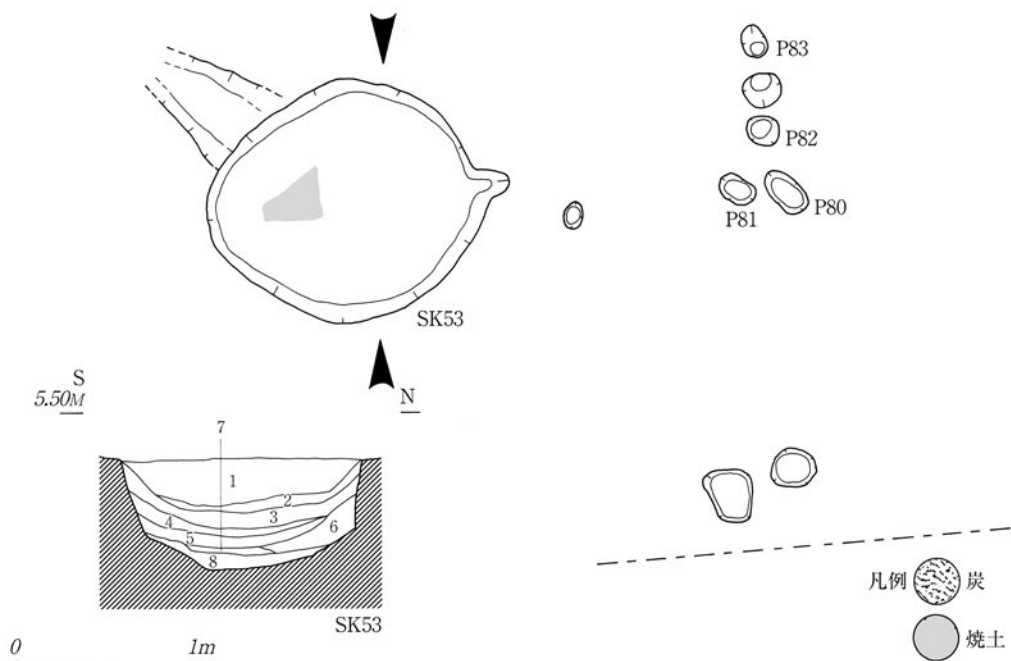
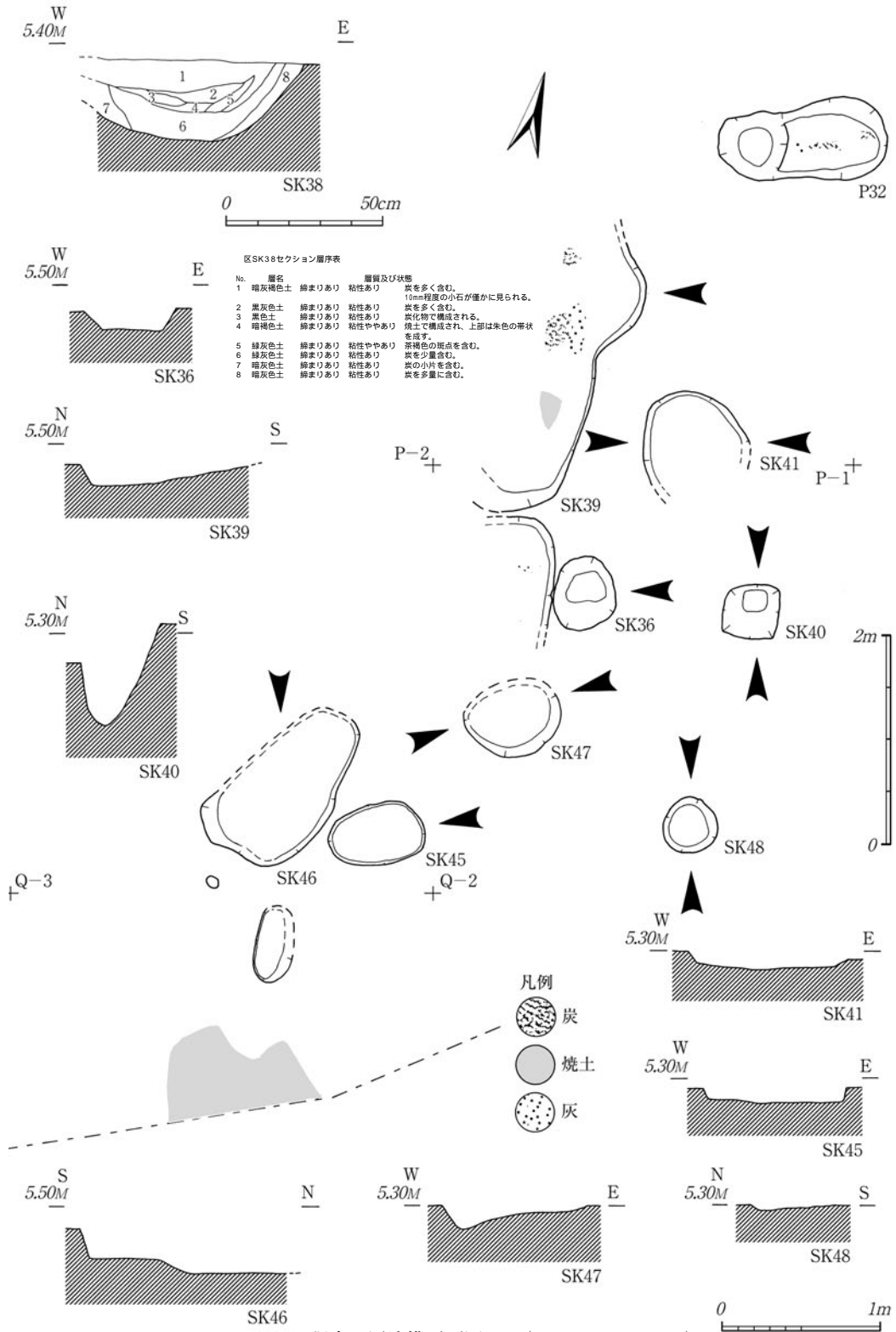


Fig.51 調査II区遺構平面図 12 (S : 1/40)



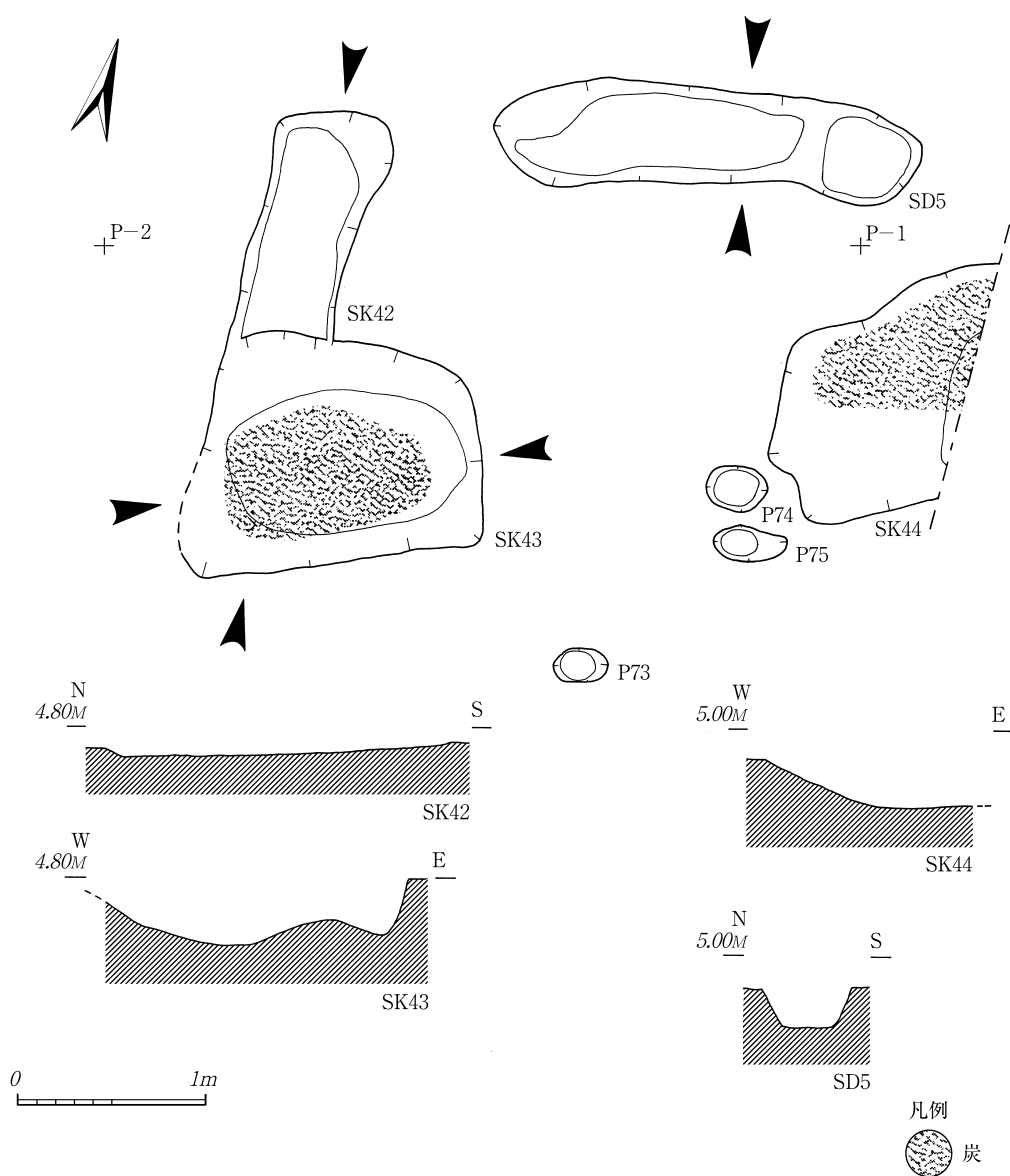


Fig.53 調査II区遺構平面図 14 (S : 1/40)

西-東北東である。規模は長辺2.11m、短辺1.38mを測り、検出面からの深さは64cmである。埋積は炭化物を多く含んだ黒褐色系のシルト層と灰色系のシルト層の薄い堆積から成り、下位には焼土の堆積も見られた。

出土遺物のうち土器は92点であり、この中で図示し得るものは199から202である。199は壺の口頸部である。200は胴部破片で沈線により突帯を削り出し、米粒状の刺突を施す。201は甕の口頸・胴部。202は甕の底部である。

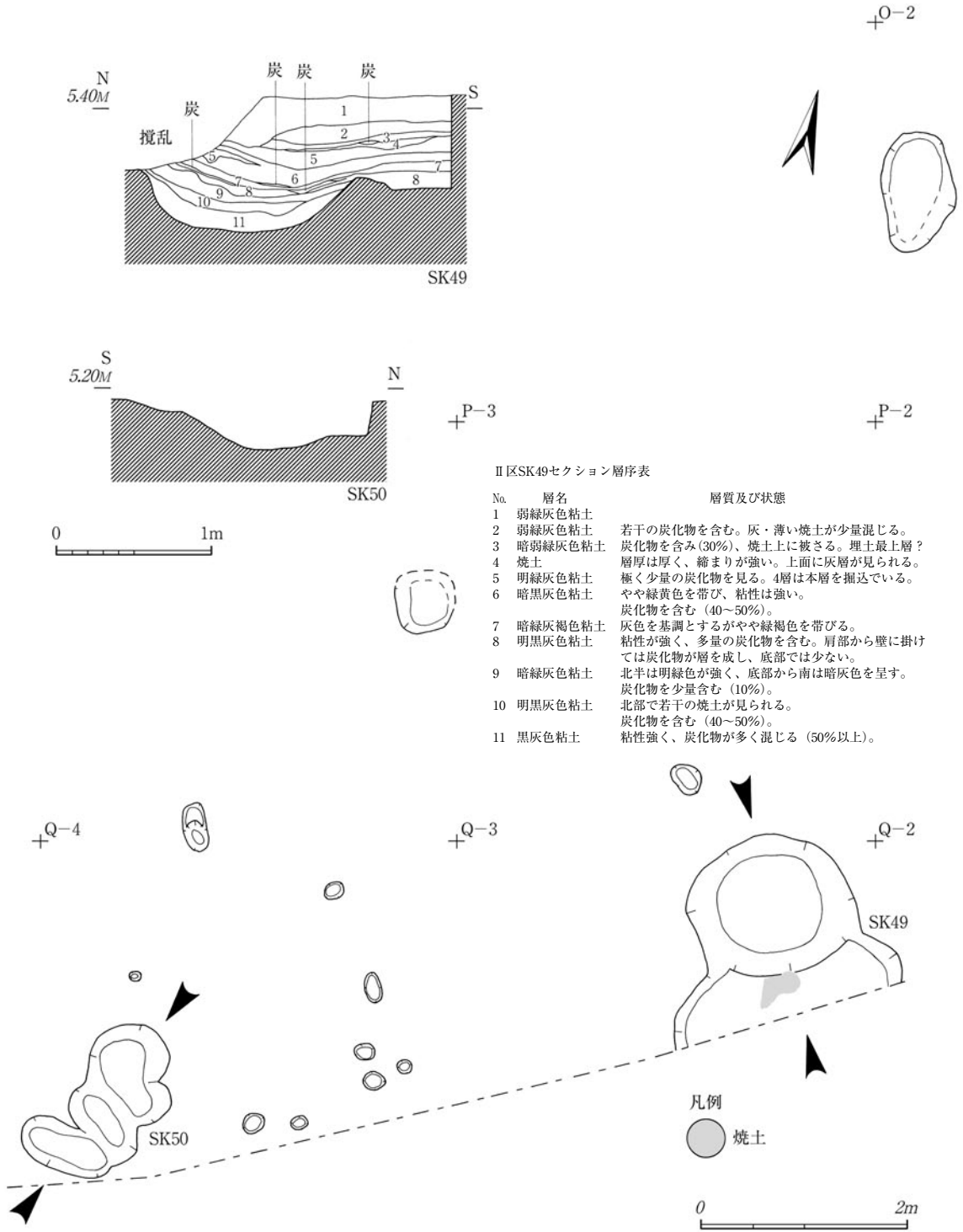


Fig.54 調査Ⅱ区遺構平面図 15 (S : 1/60,1/20)

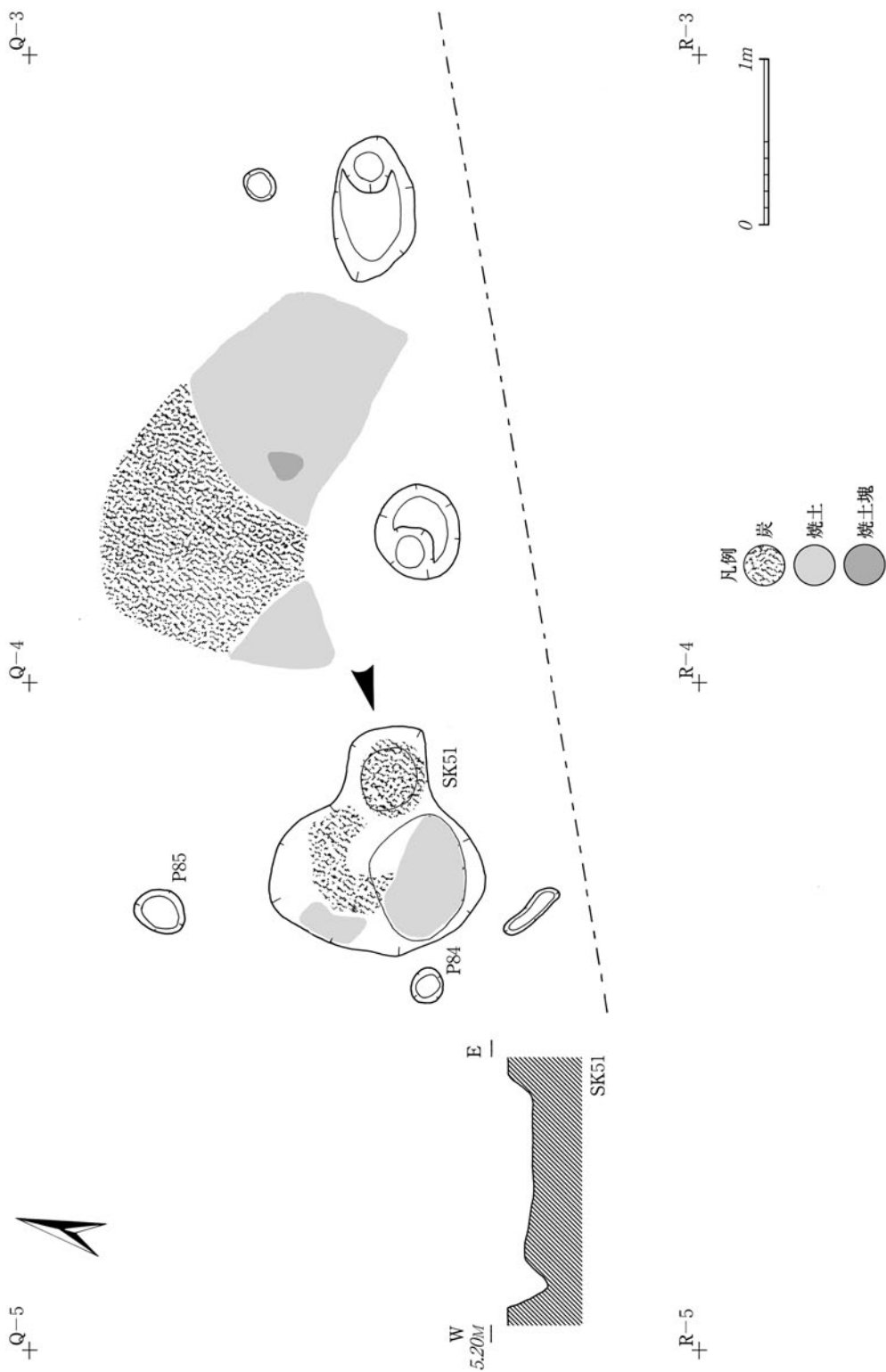


Fig.55 調査II区遺構平面図 16 (S : 1/40)

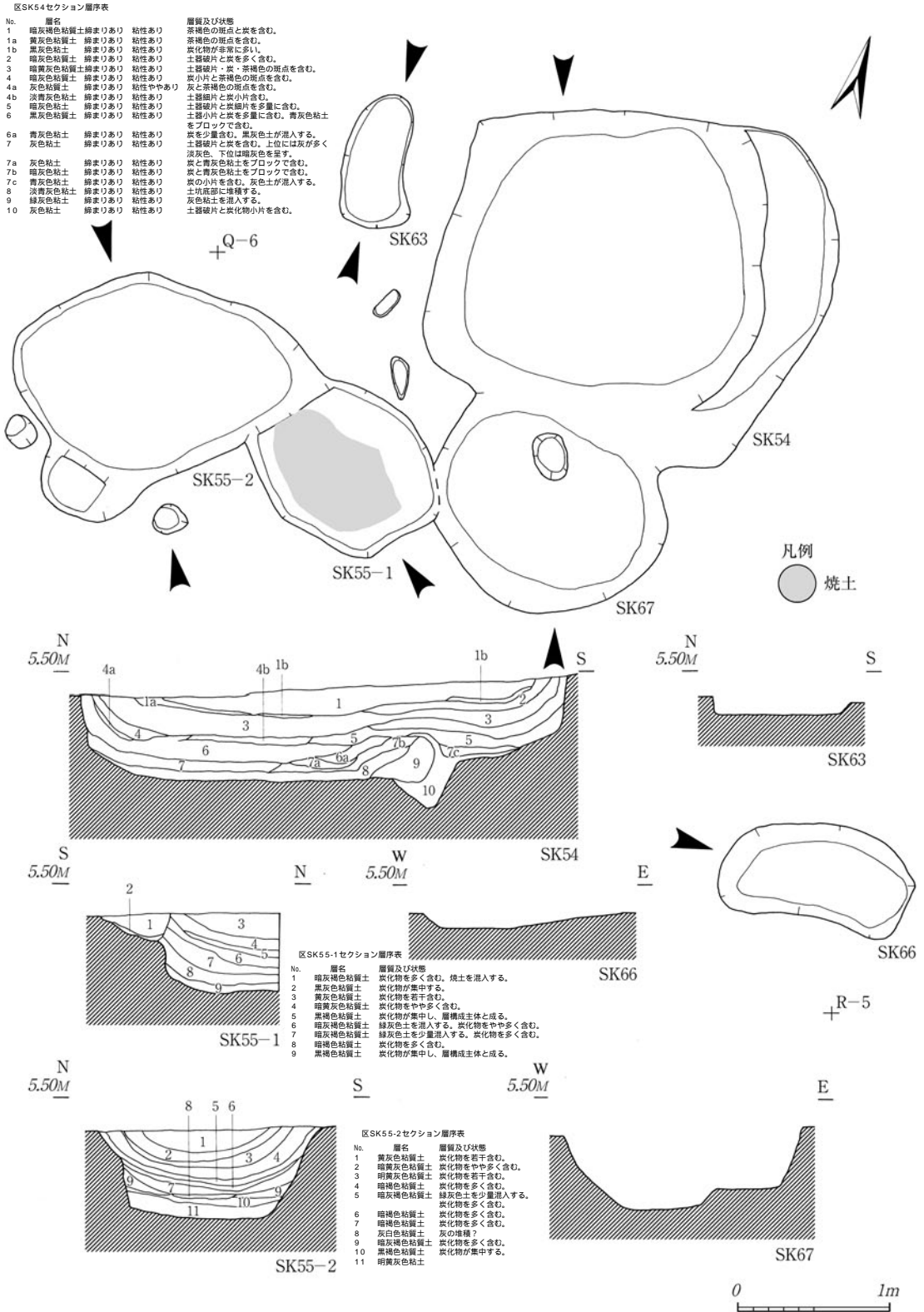


Fig.56 調査Ⅱ区遺構平面図 17 (S:1/40)

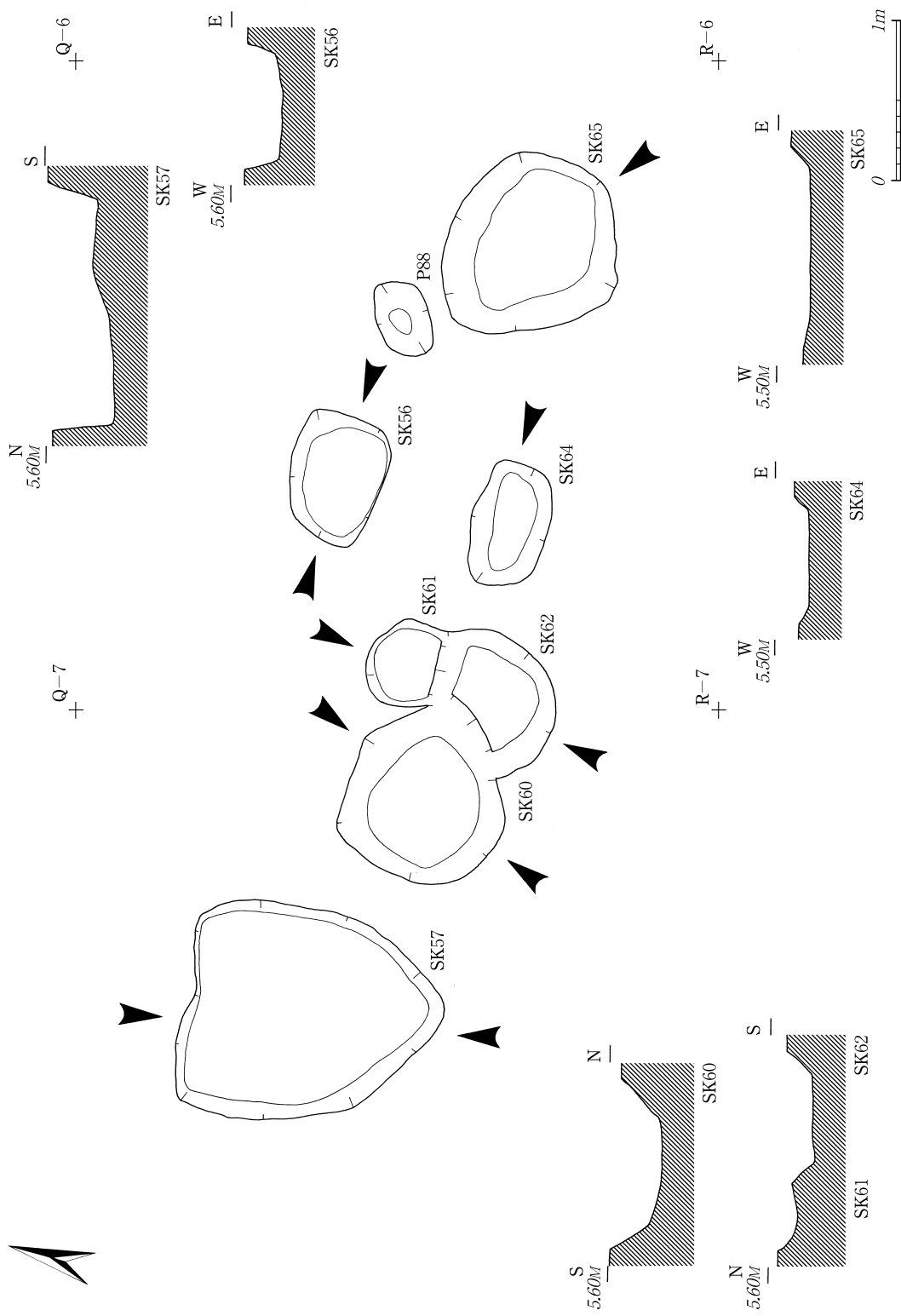


Fig.57 調査II区遺構平面図 18 (S : 1/40)

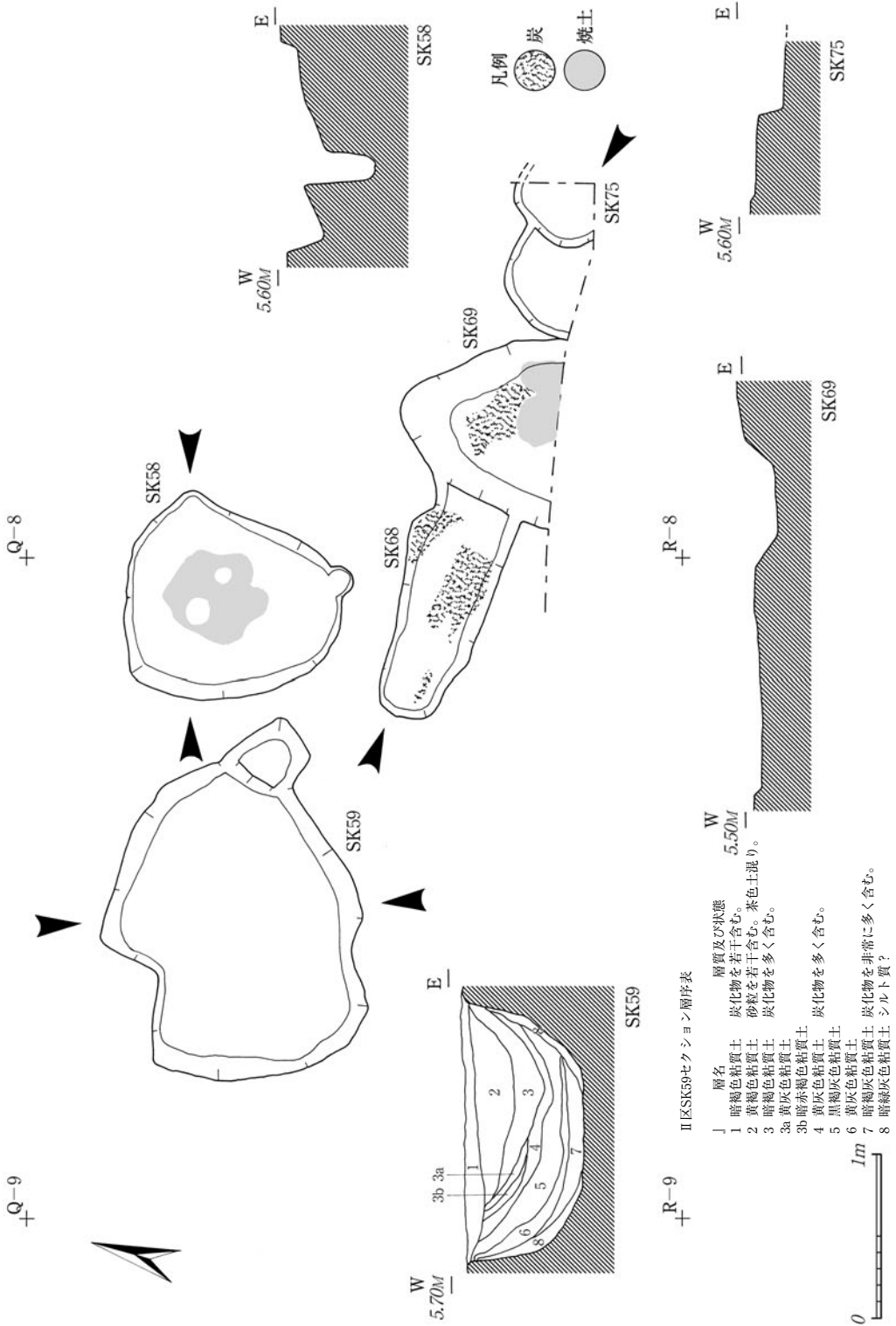


Fig.58 調査II区遺構平面図 19 (S : 1/40)

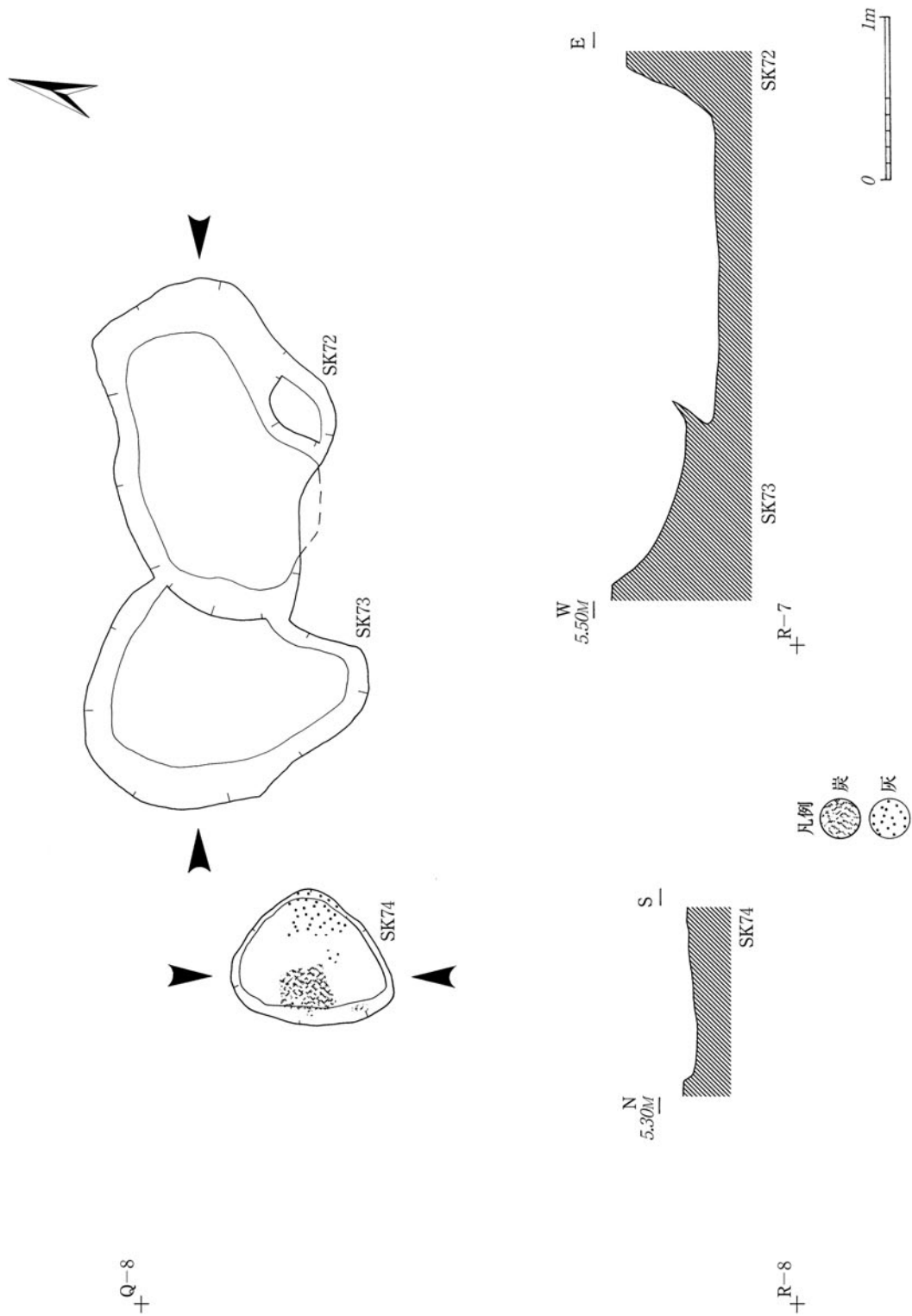


Fig.59 調査II区遺構平面図 20 (S : 1/40)

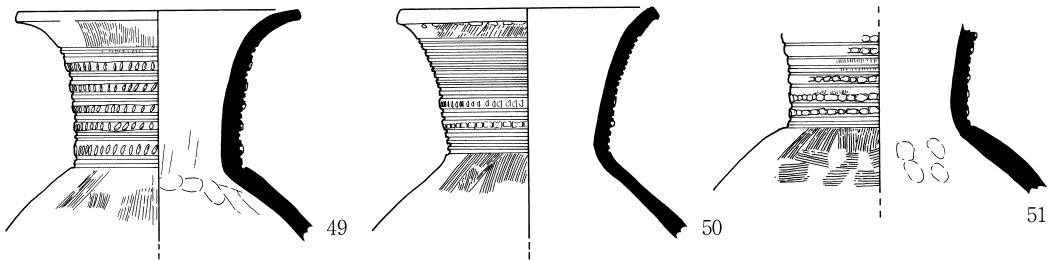
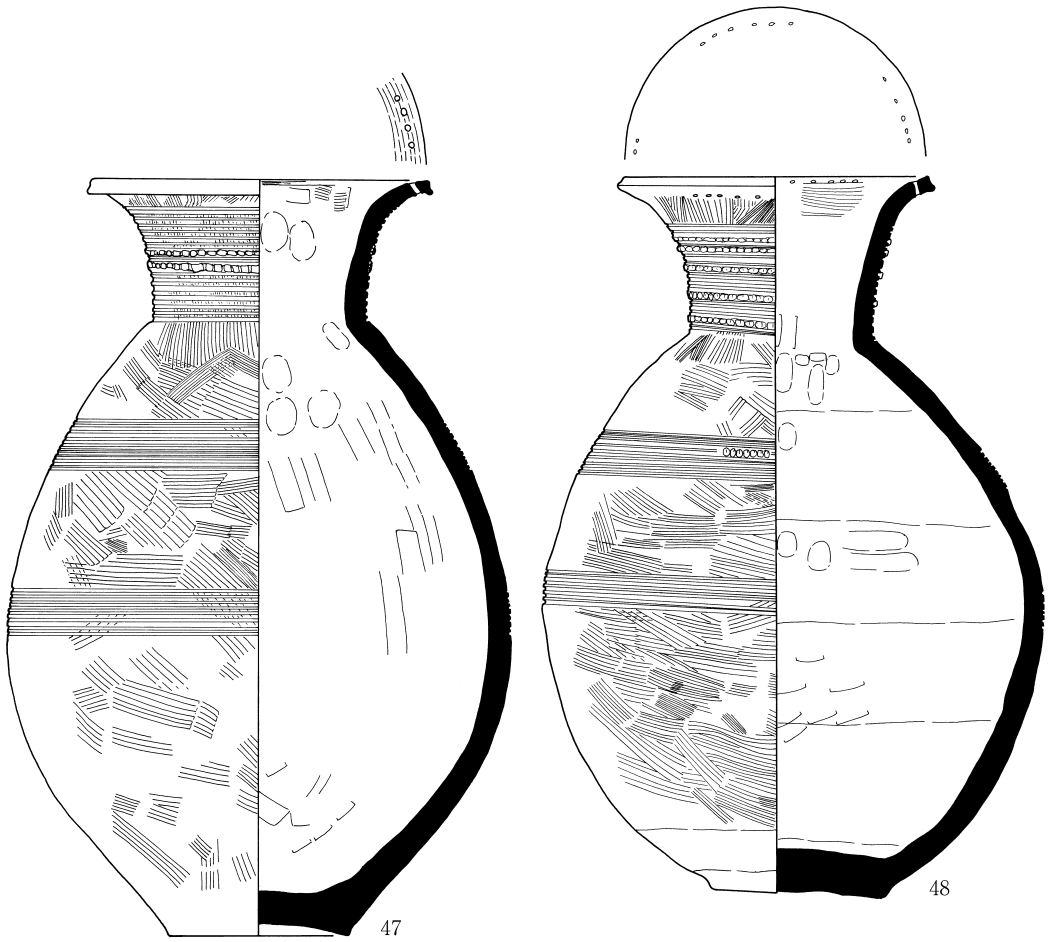


Fig.60 調査Ⅱ区出土遺物実測図 1 (S : 1/4)

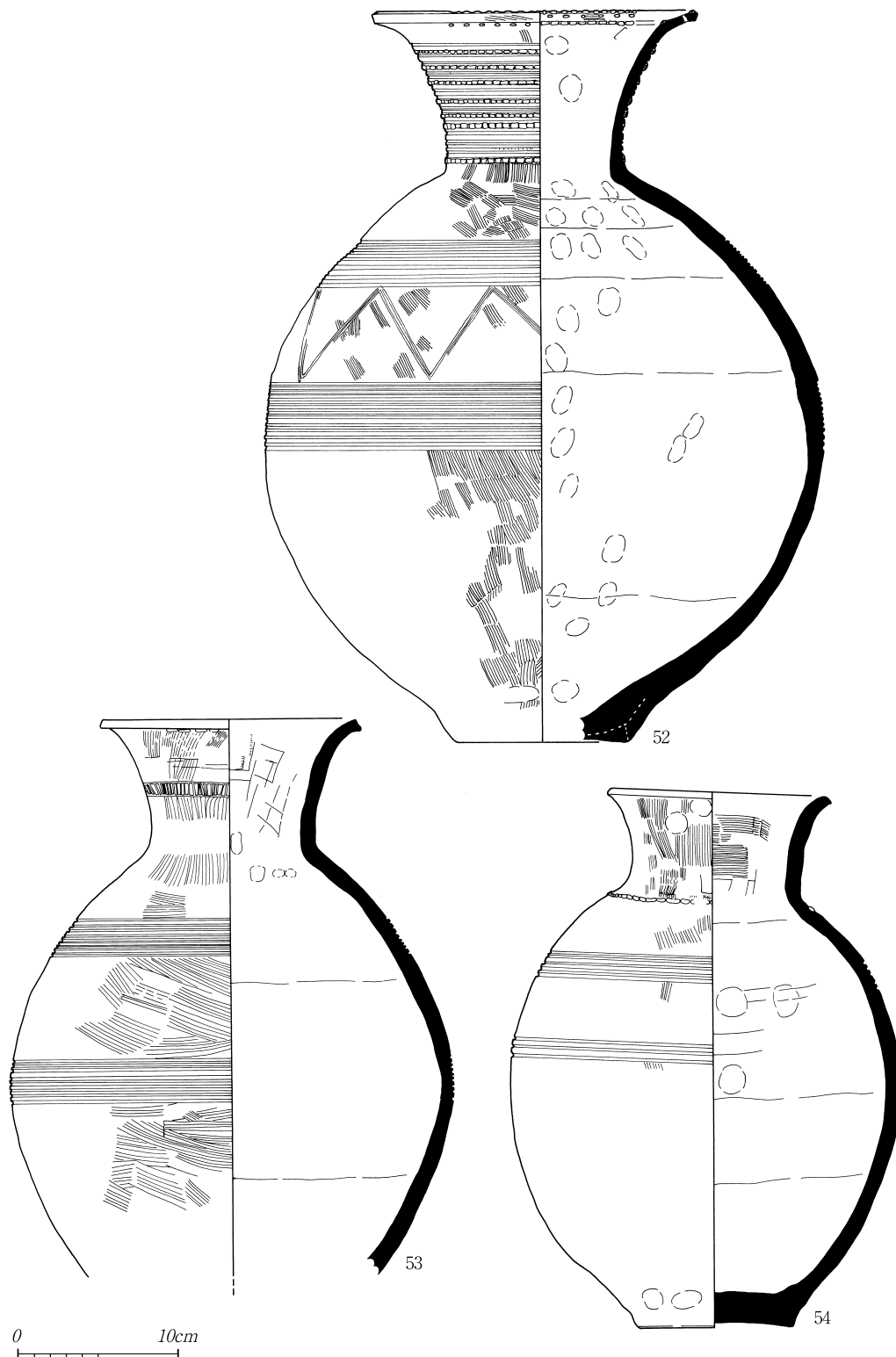


Fig.61 調査II区出土遺物実測図 2 (S : 1/4)

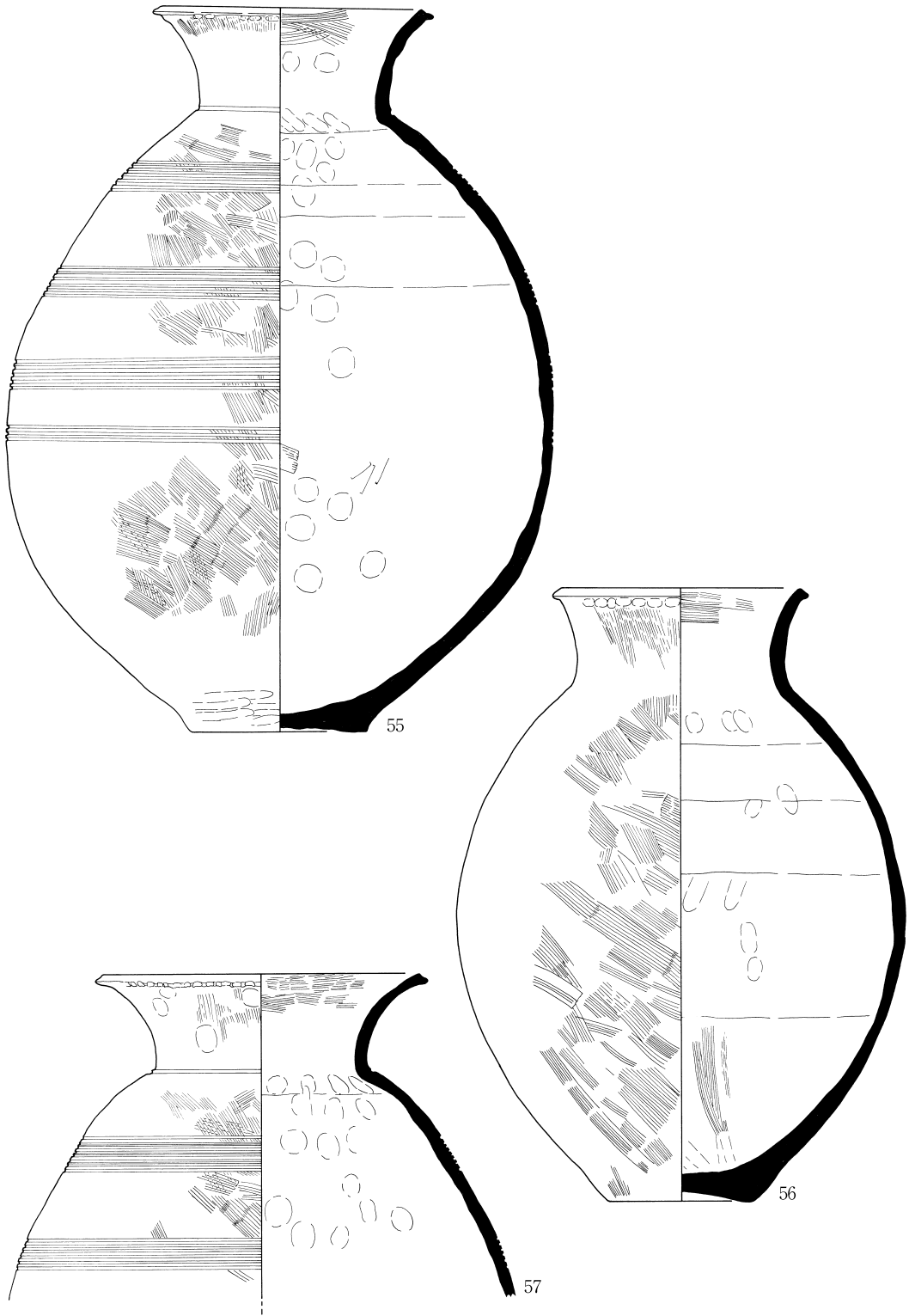


Fig.62 調査Ⅱ区出土遺物実測図 3 (S : 1/4)



Fig.63 調査II区出土遺物実測図 4 (S : 1/4)

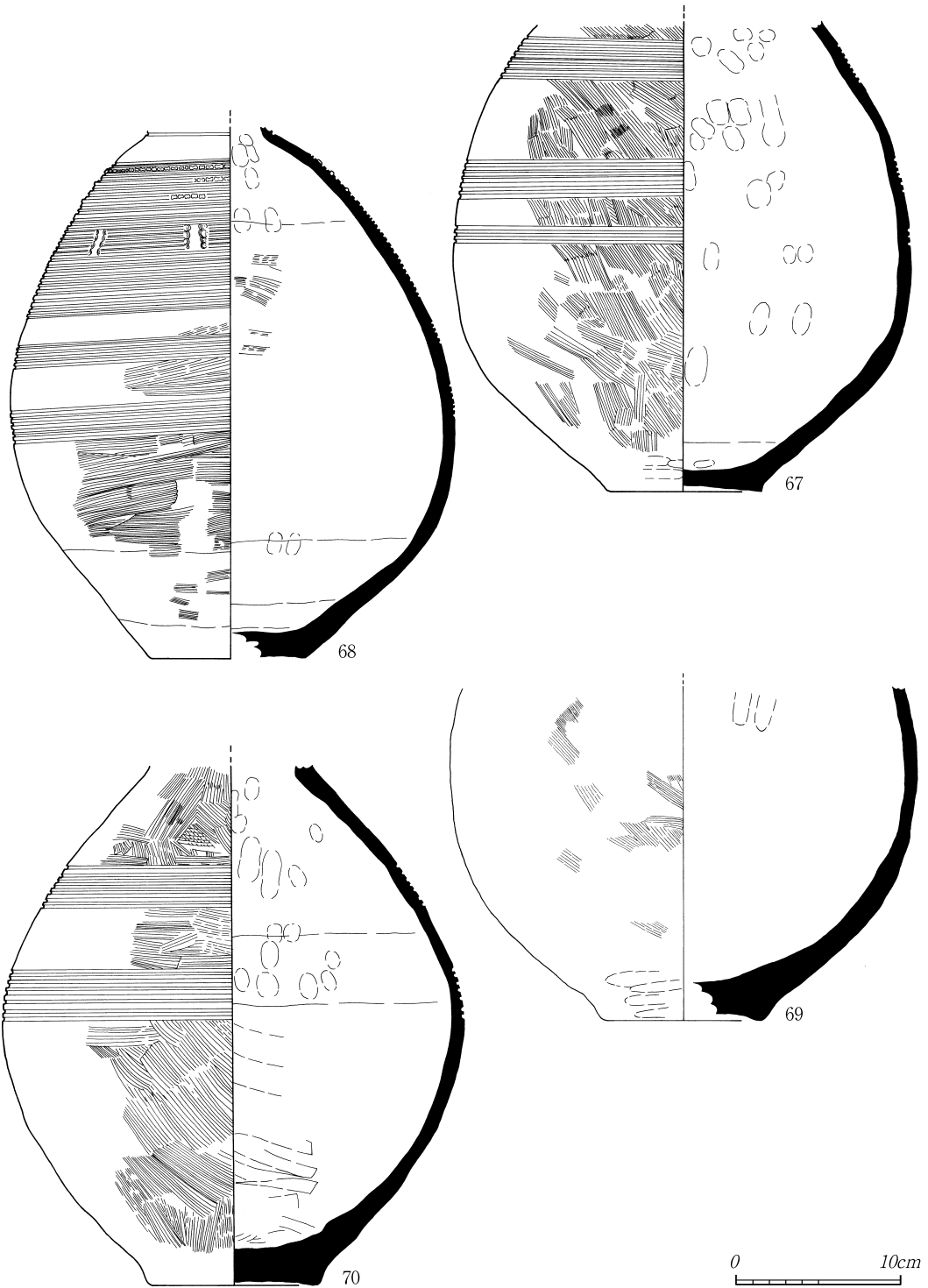


Fig.64 調査Ⅱ区出土遺物実測図 5 (S : 1/4)

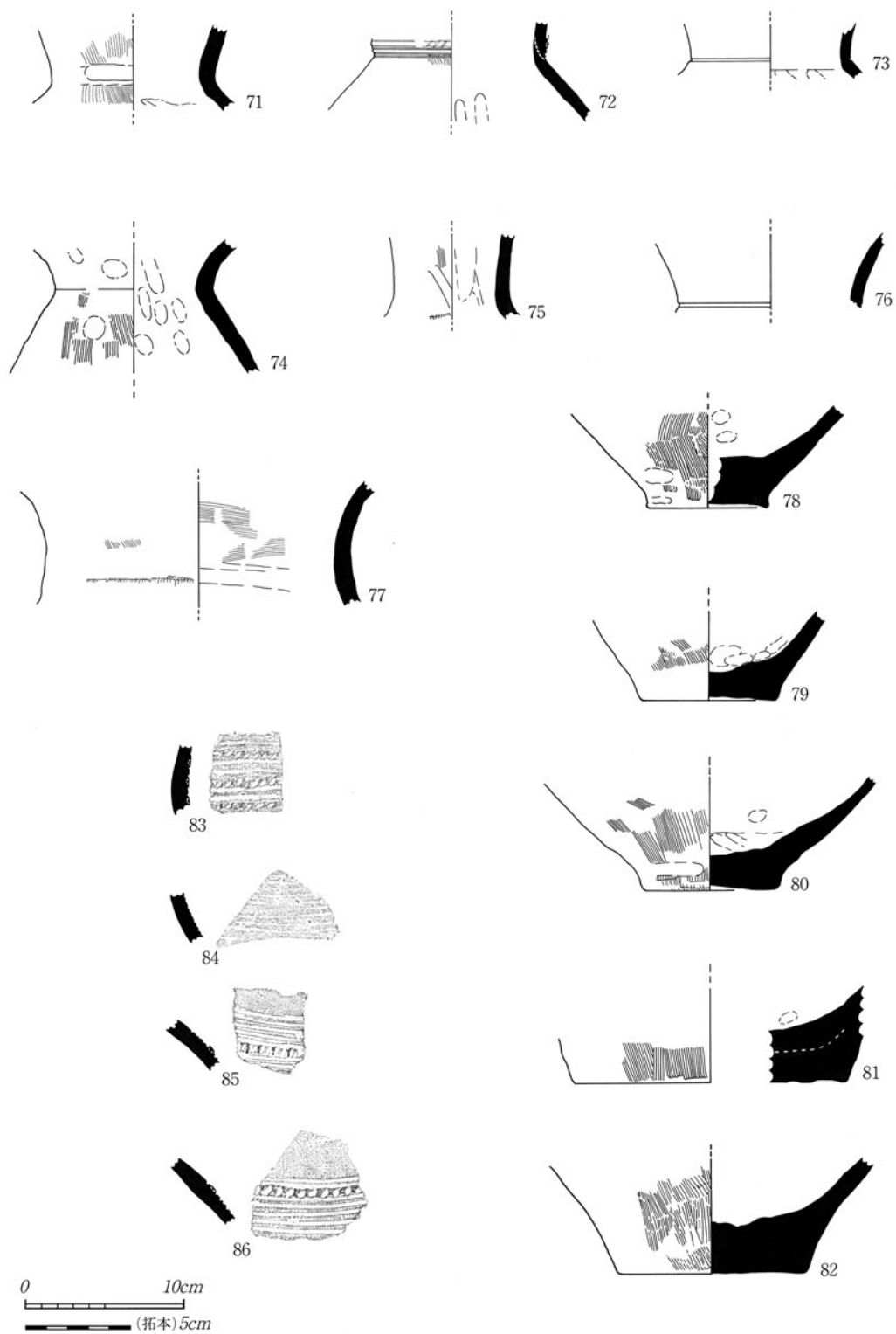


Fig.65 調査II区出土遺物実測図 6 (S: 1/4, 拓本1/3)

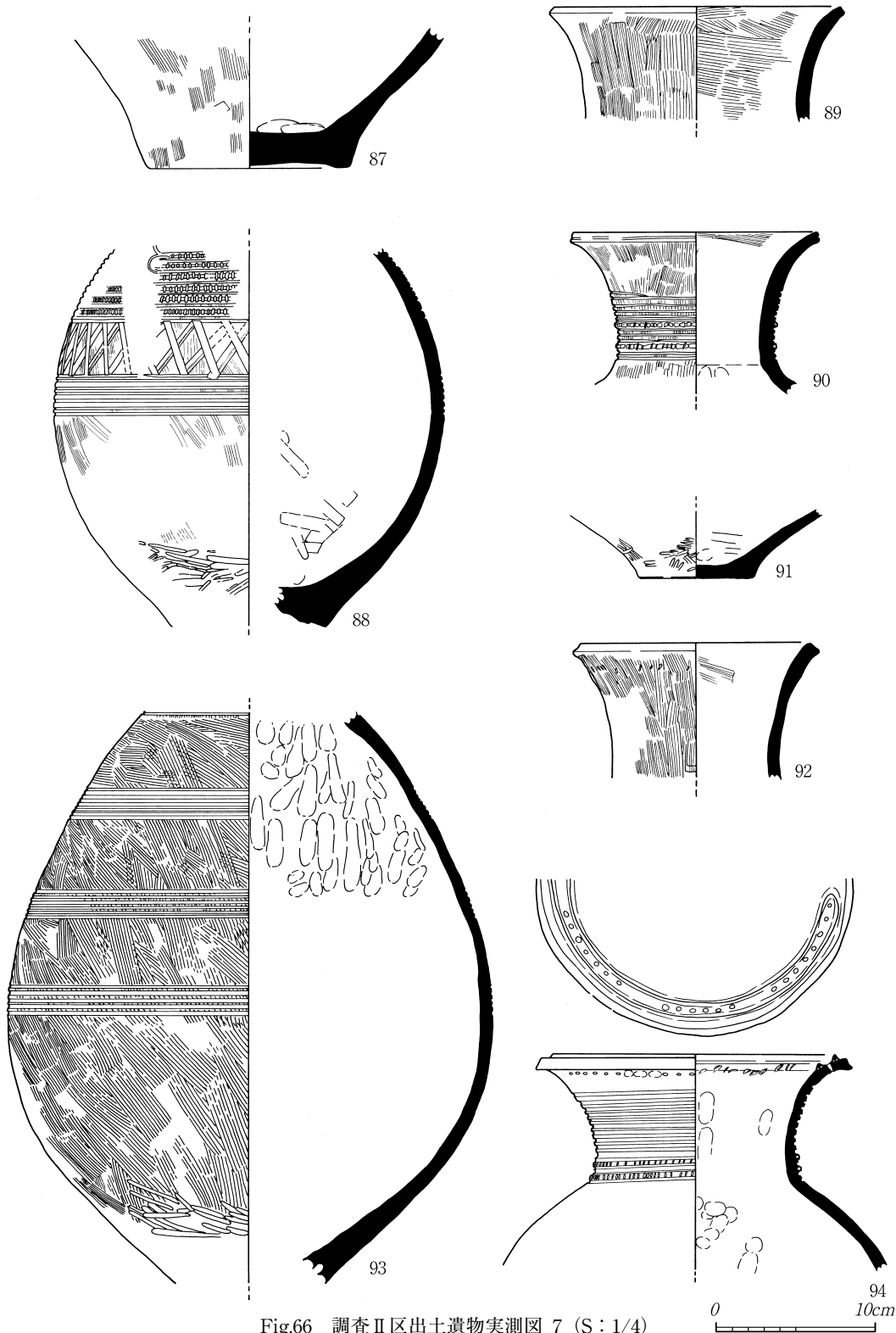
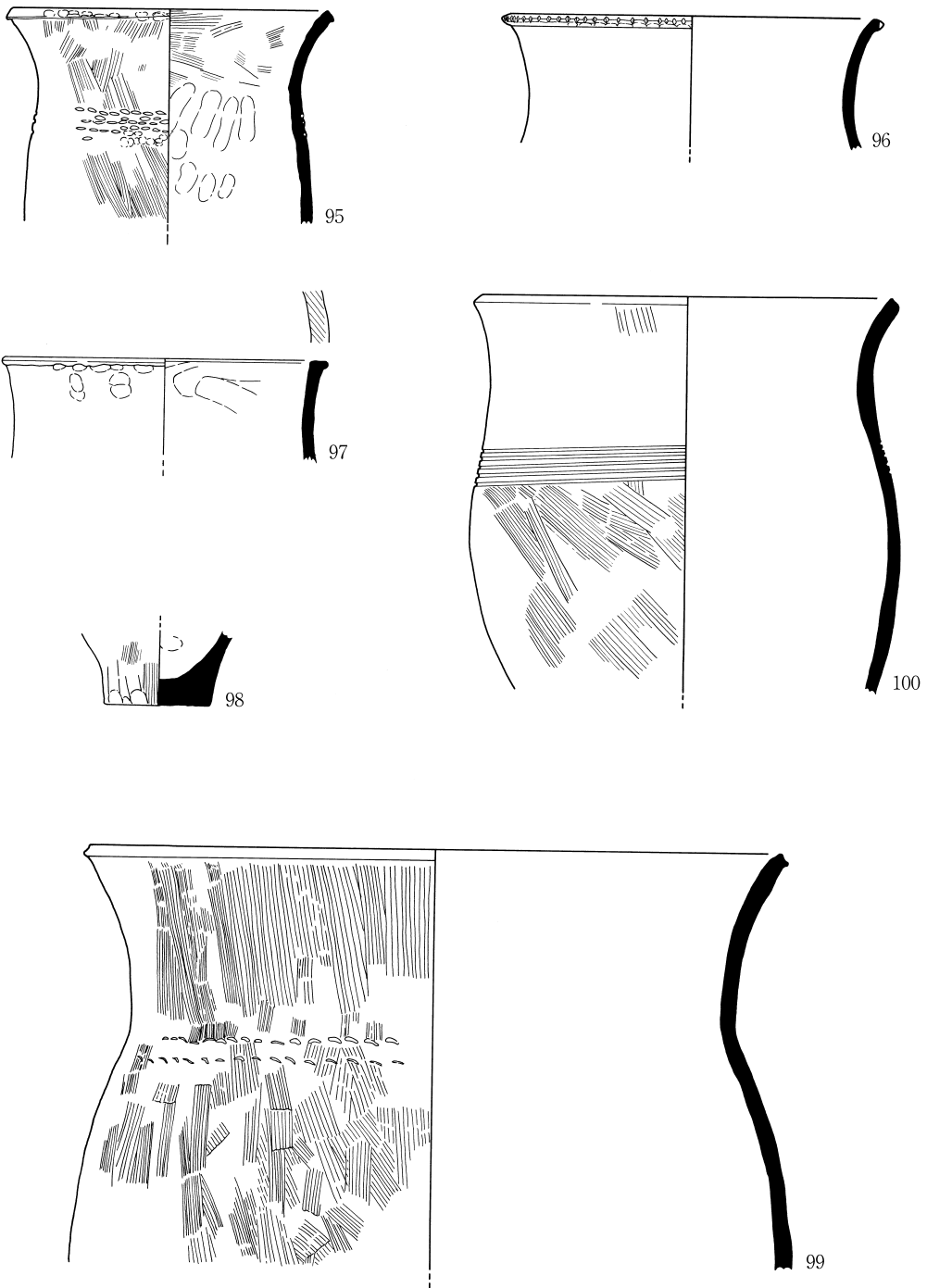


Fig.66 調査Ⅱ区出土遺物実測図 7 (S: 1/4)



0 10cm

Fig.67 調査II区出土遺物実測図 8 (S : 1/4)

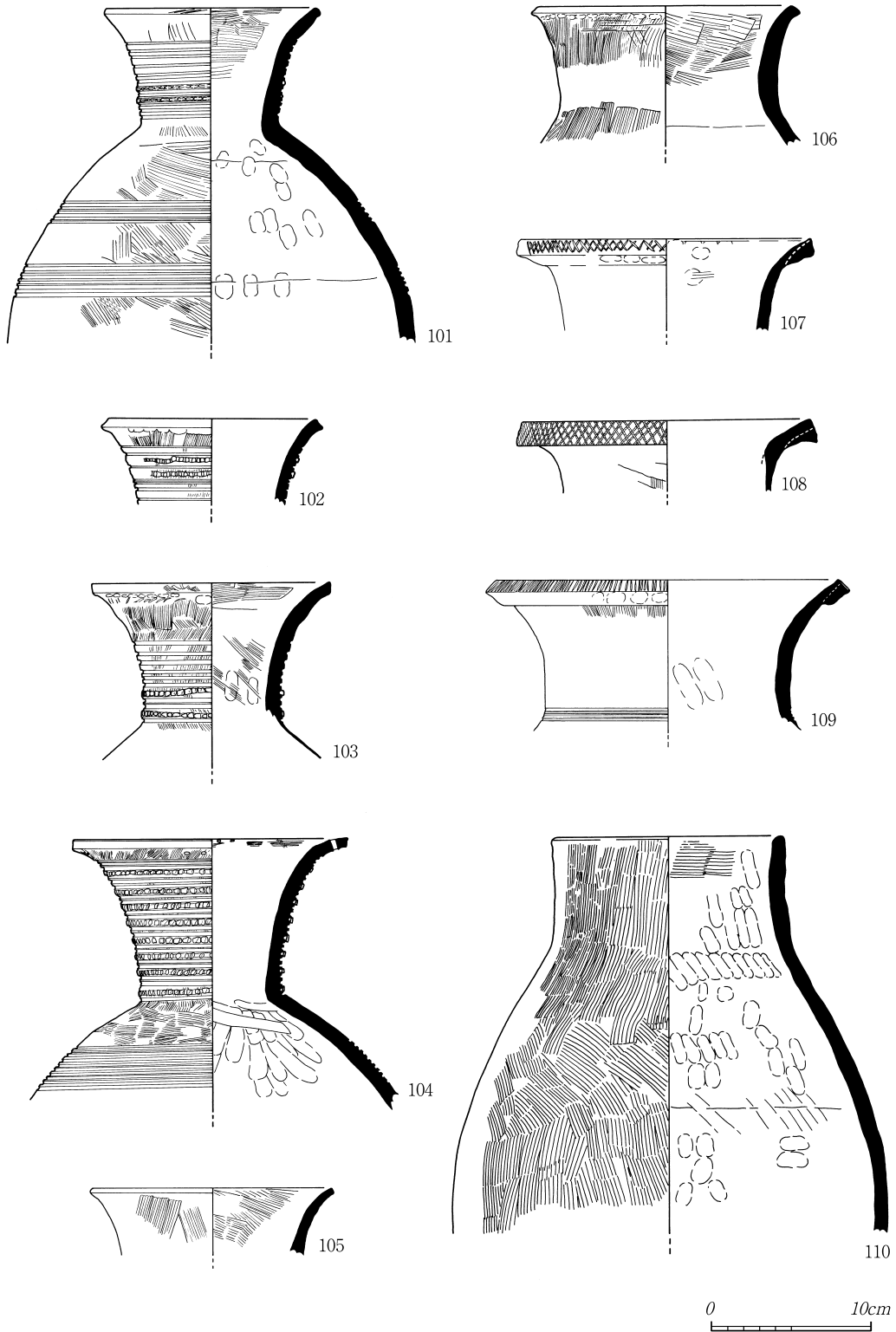


Fig.68 調査Ⅱ区出土遺物実測図 9 (S: 1/4)

第2節 [2] II区

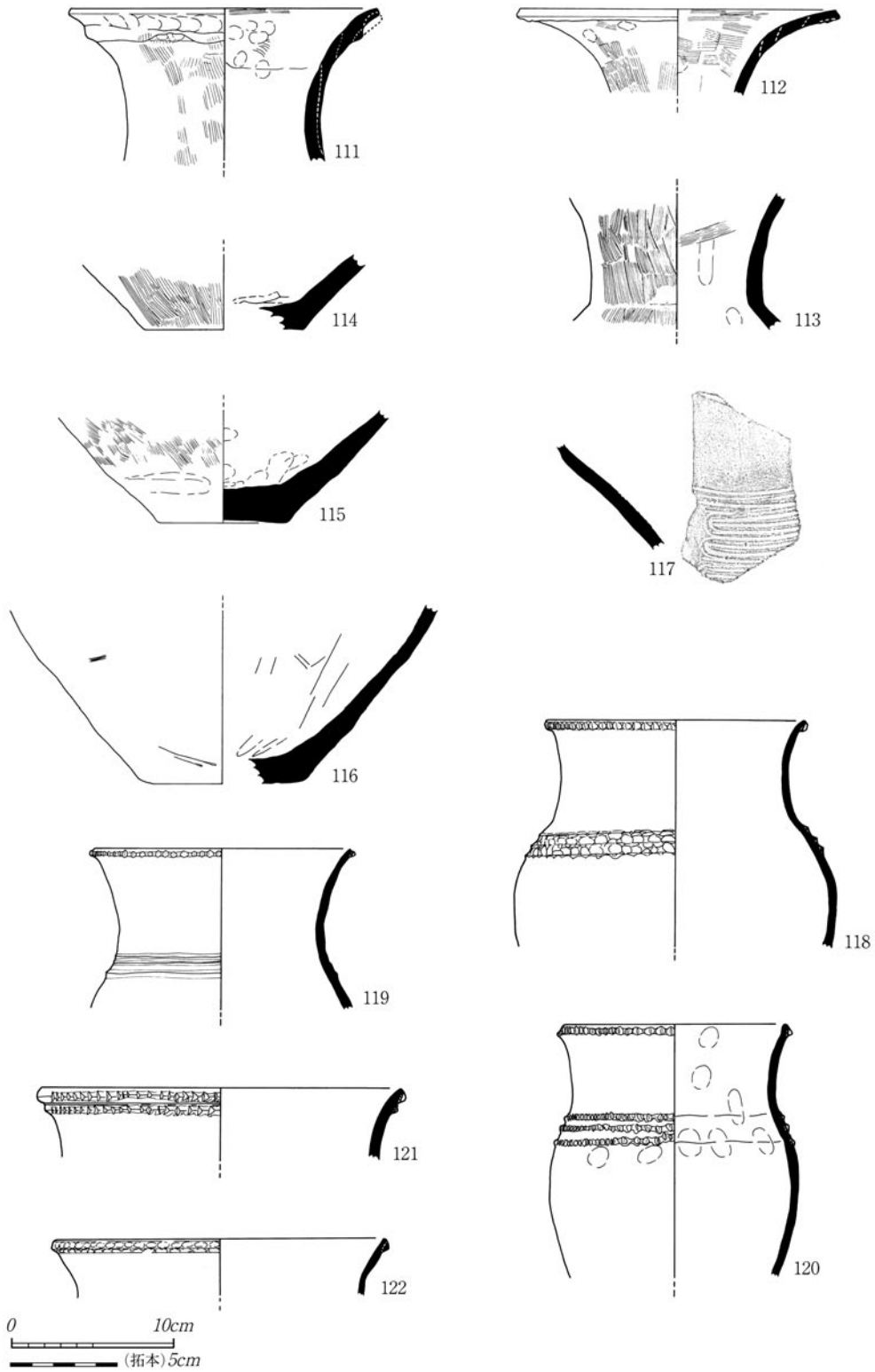


Fig.69 調査II区出土遺物実測図 10 (S : 1/4,拓本1/3)

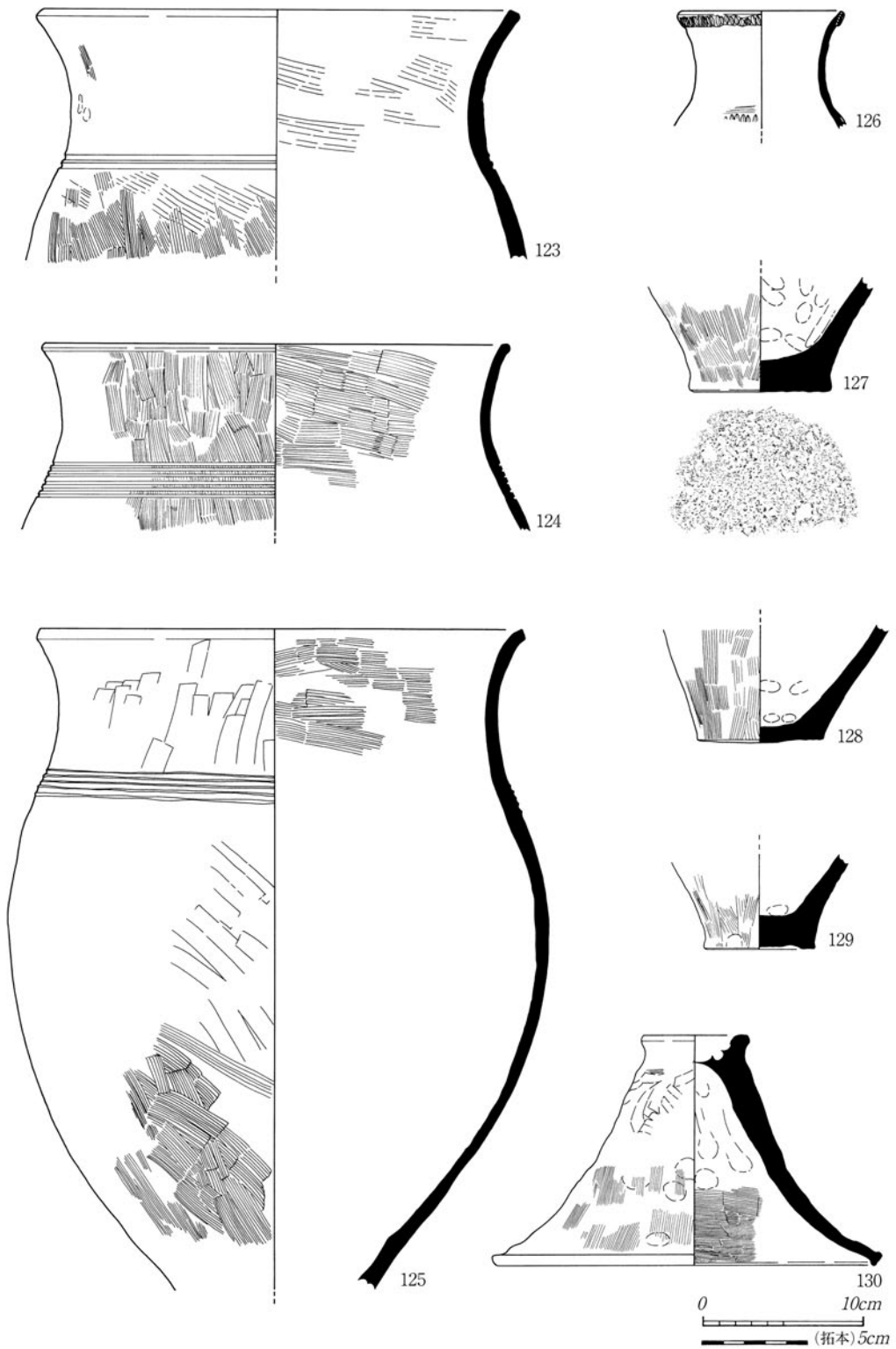


Fig.70 調査Ⅱ区出土遺物実測図 11 (S:1/4,拓本1/3)

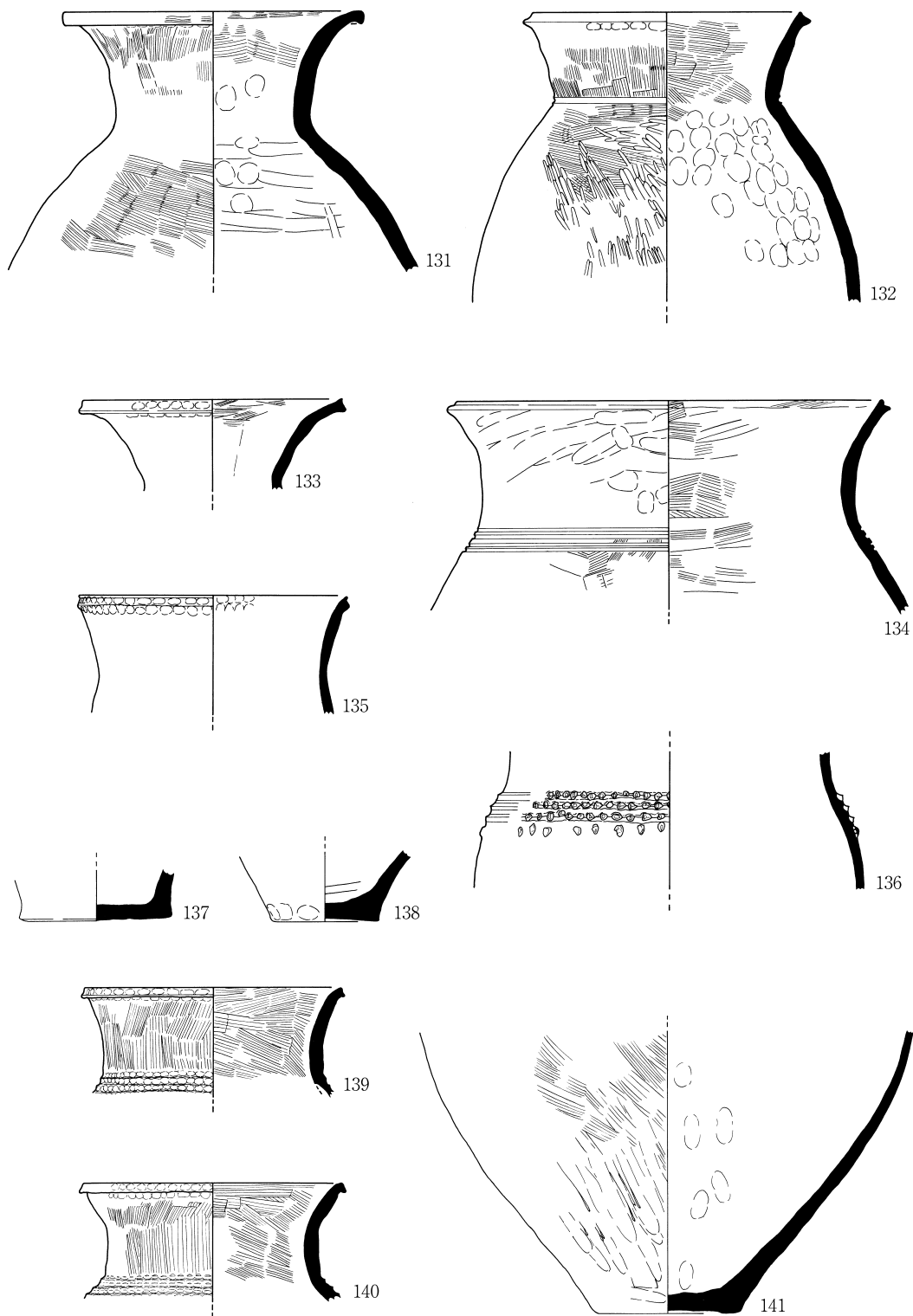


Fig.71 調査II区出土遺物実測図 12 (S:1/4)

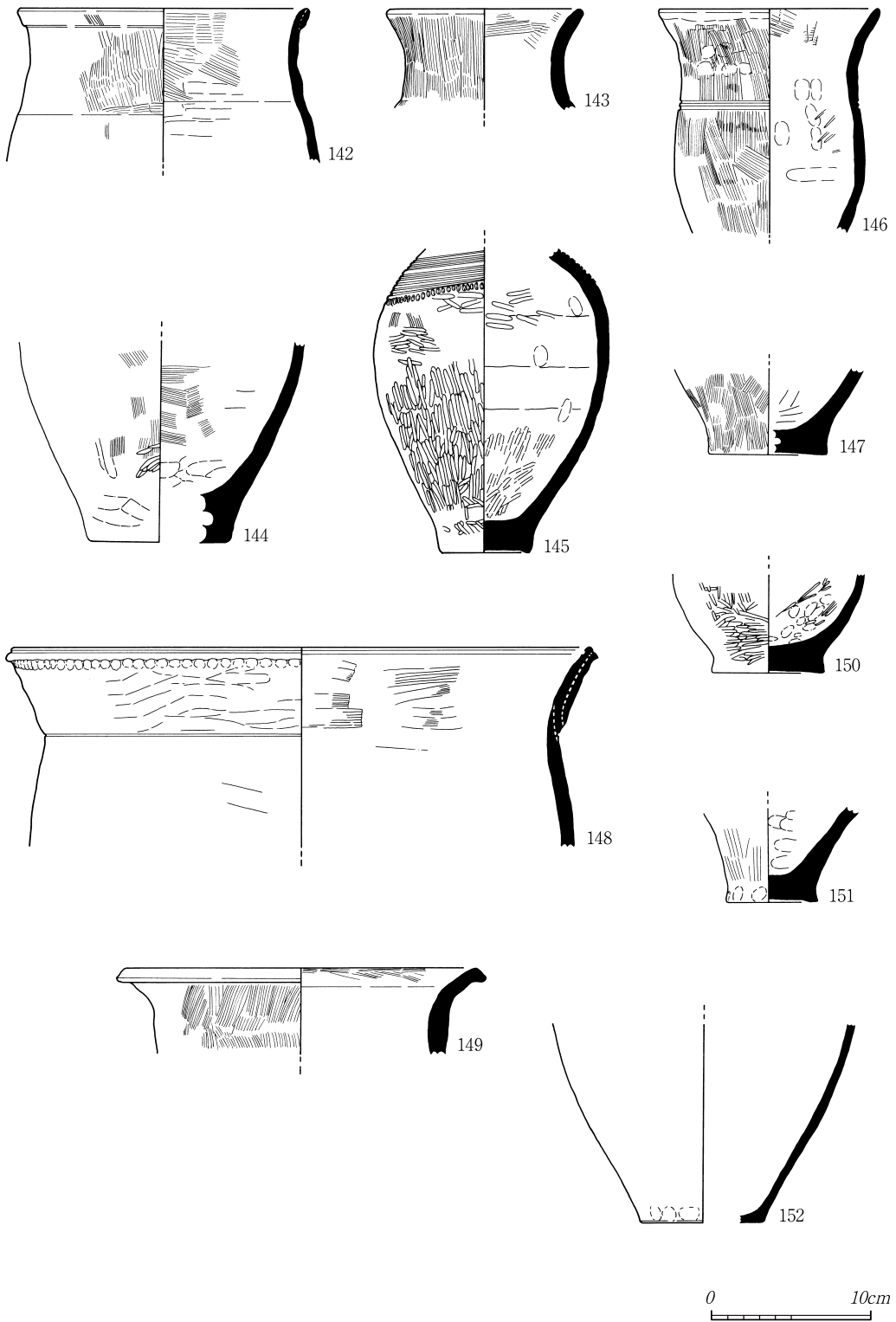


Fig.72 調査Ⅱ区出土遺物実測図 13 (S : 1/4)

第2節 [2] II区

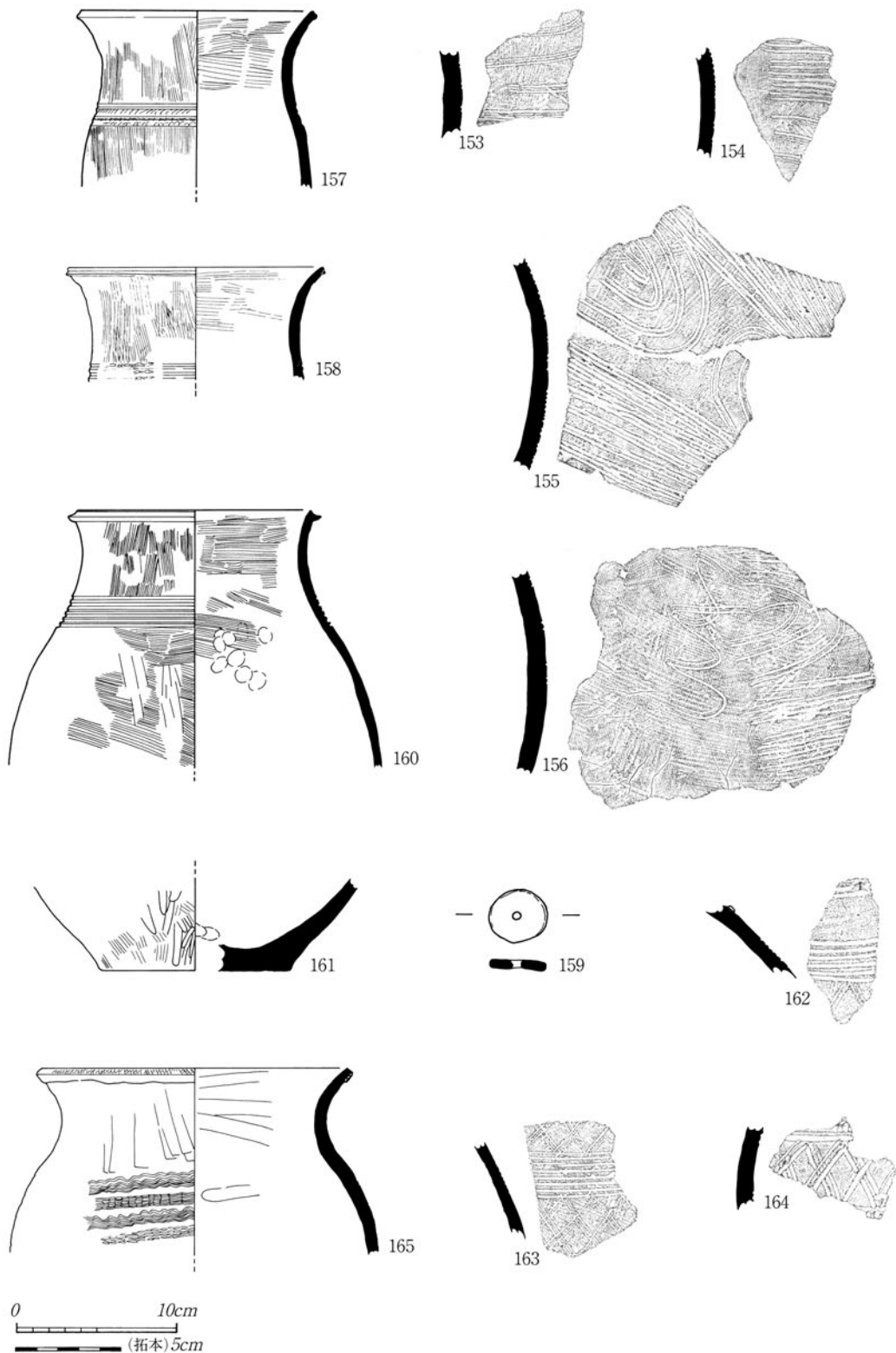


Fig.73 調査II区出土遺物実測図 14 (S:1/4,拓本1/3)

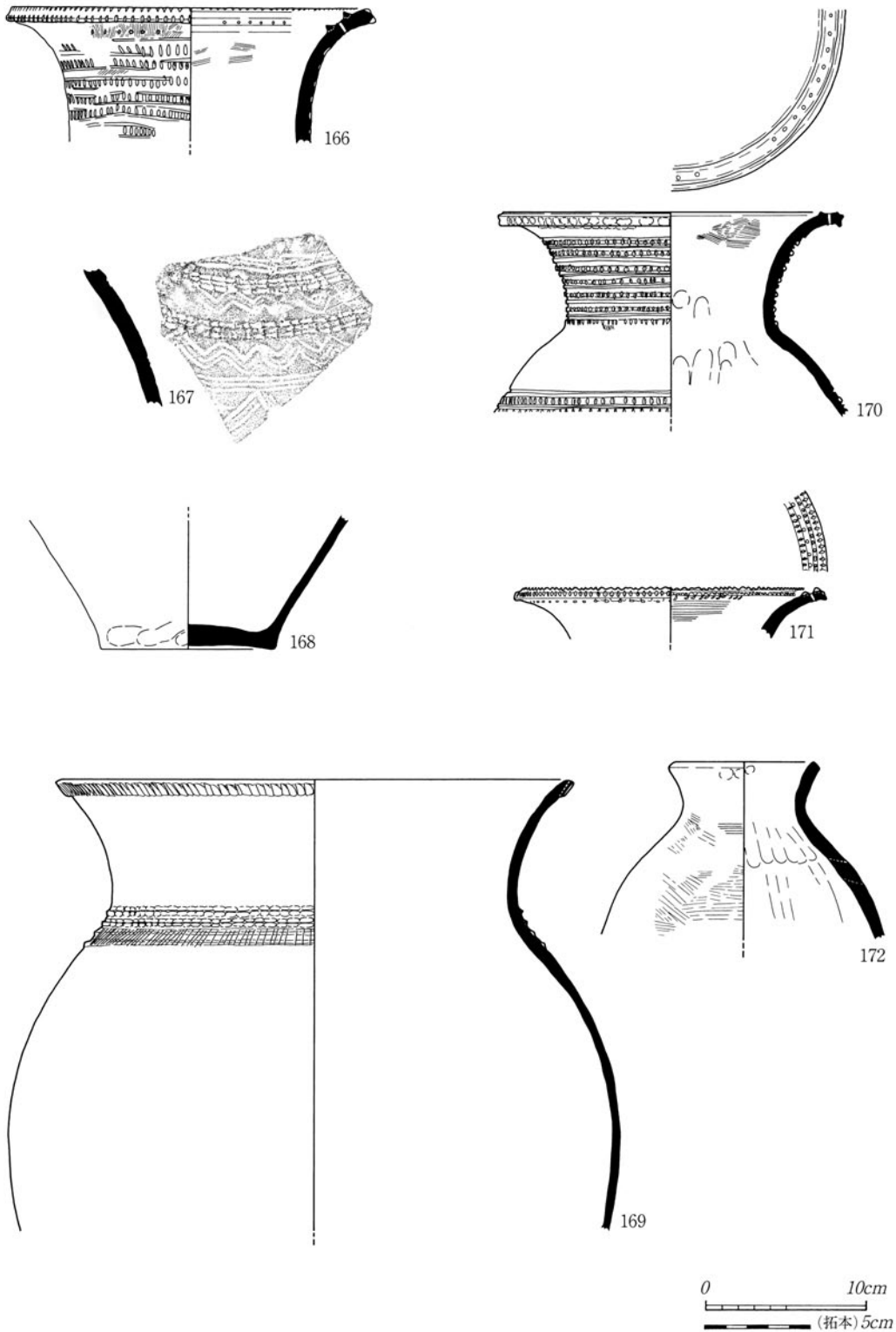


Fig.74 調査Ⅱ区出土遺物実測図 15 (S:1/4,拓本1/3)

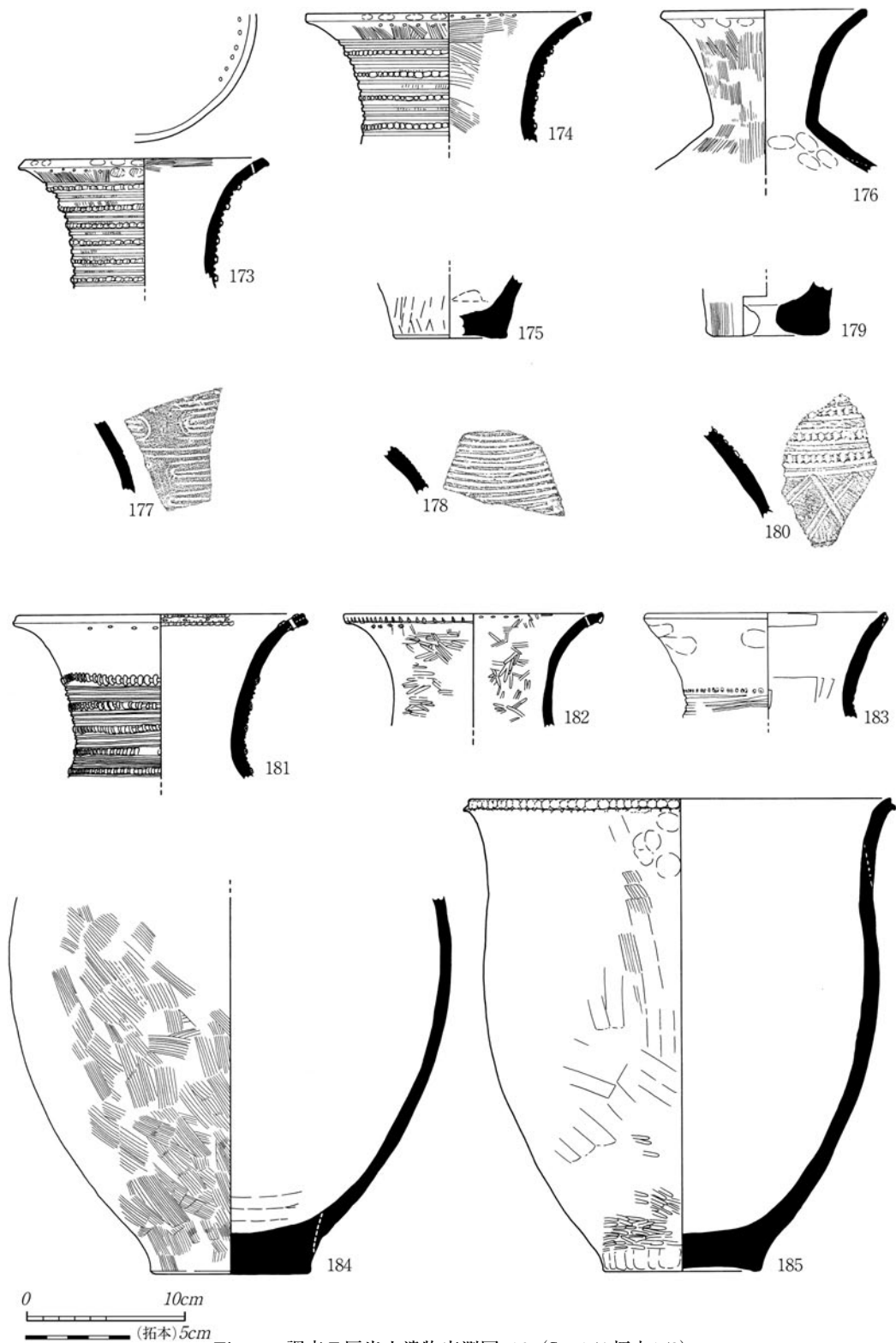


Fig.75 調査II区出土遺物実測図 16 (S:1/4,拓本1/3)

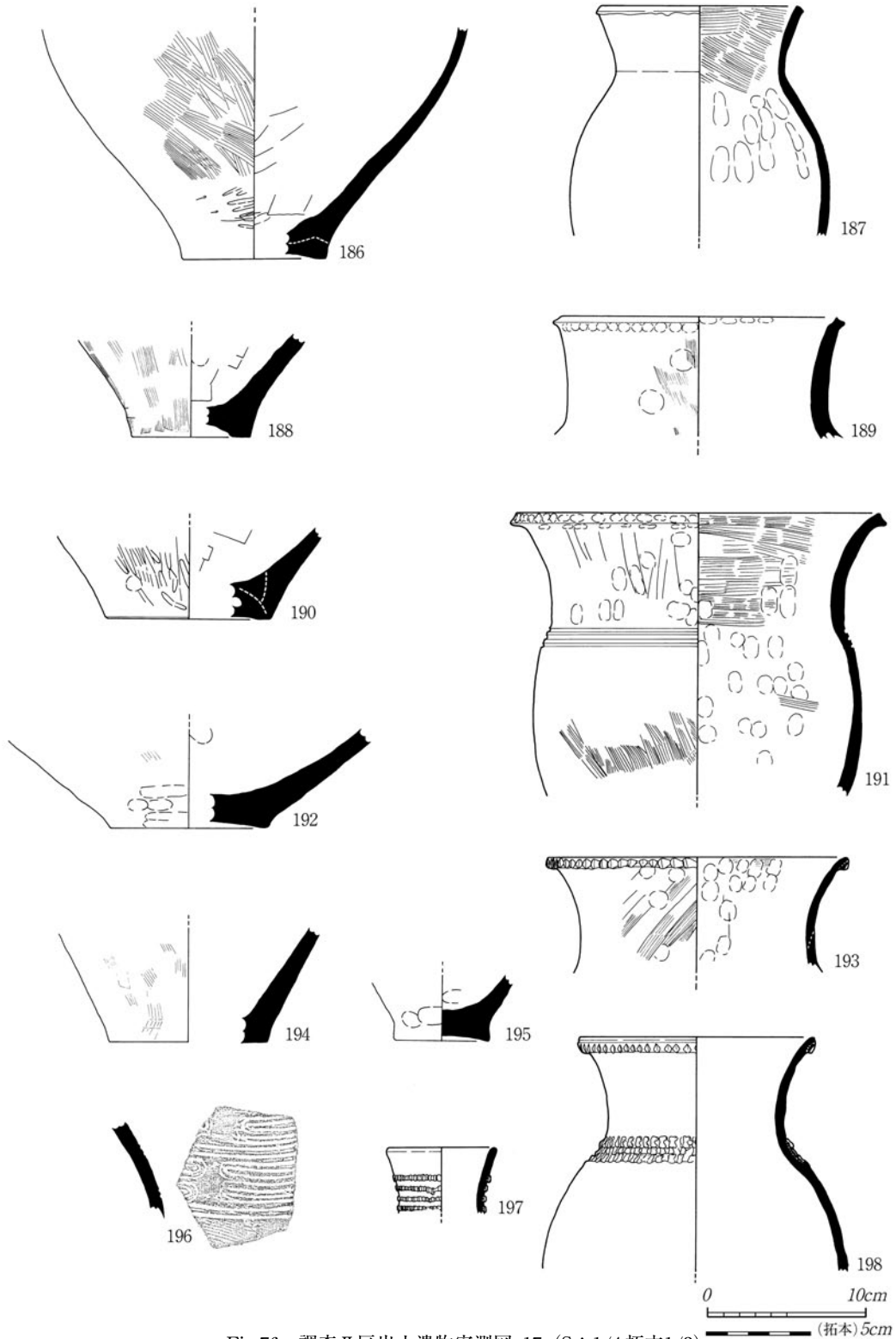


Fig.76 調査Ⅱ区出土遺物実測図 17 (S: 1/4, 拓本1/3)

第2節 [2] II区

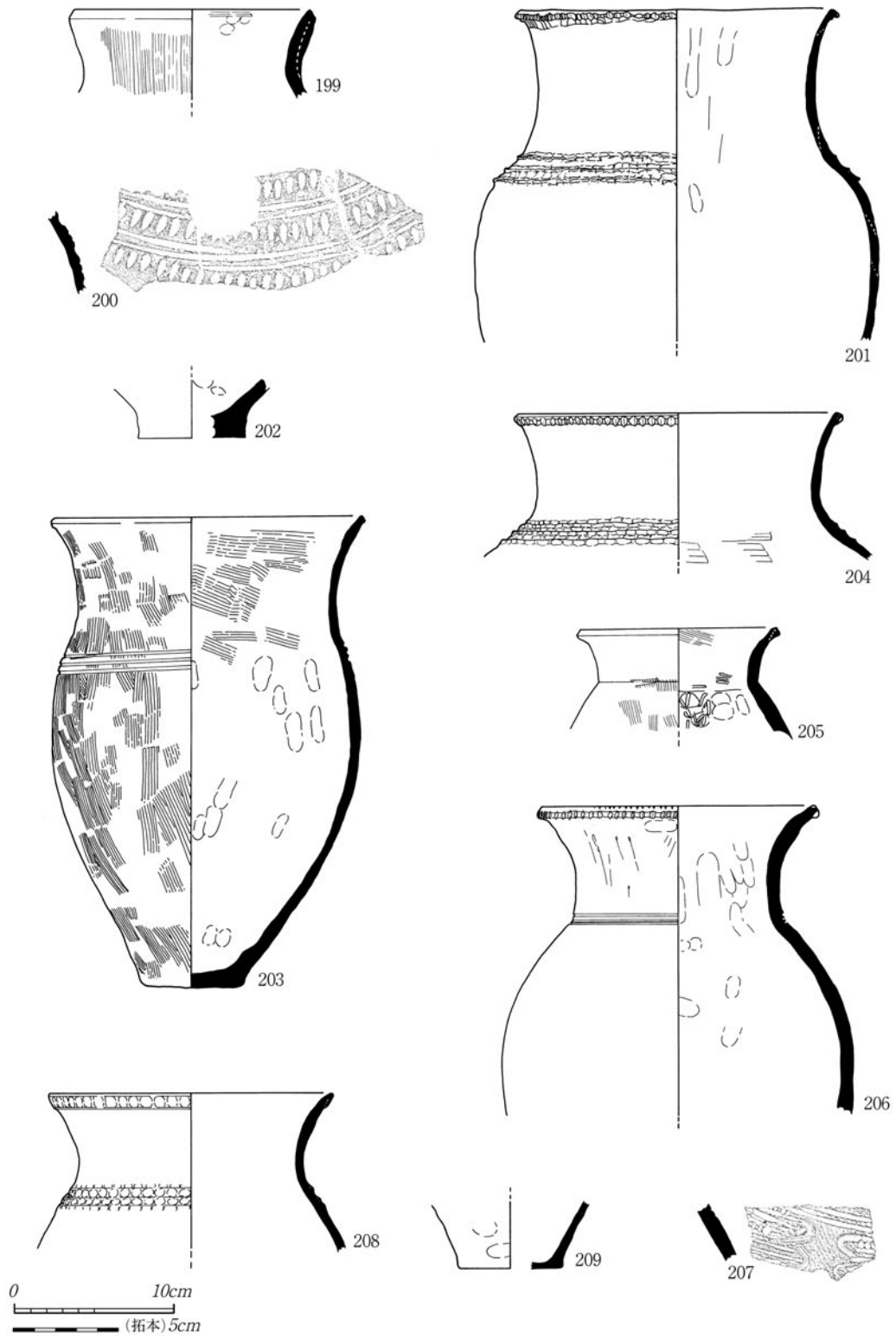


Fig.77 調査II区出土遺物実測図 18 (S:1/4,拓本1/3)

2) 包含層からの遺物 (Fig.78)

調査区の南部 (M・Nグリッド以南) には自然堤防上に堆積した遺物包含層が存在し、これらを調査時に Y1層からY3層と称して調査を行った。層序の項で述べたように西壁セクション上では明確に個々の包含層を示すことが困難であることから、ここでは弥生前期末から中期に掛けての遺物包含層を纏めてY層群として扱う。調査区の南部中央付近 (Nグリッド以南) は自然堤防上の微高地で後世の流路SR201の直接の影響からも回避されており、遺物の残存は良好であった。また、調査区の中央部は勿論、南東部や南西部では、既に自然堤防から後背湿地に係る標高の降下をY層群は示しており、これは如実に遺物の出土標高に反影されていた。遺物の残存度は良好であるが、後述する調査Ⅲ区出土例の様に氾濫等による影響を受け後背湿地側に堆積した遺物が存在するであろう。後世の流路SR201出土遺物の中に、多くのY層群出自と考えられる遺物群が存在することから、その遺物の多さが想定できる。Y層群出土遺物の多くは土器であるが、中には石鏃や石包丁、石斧、石錐、砥石などの石器・石製品、鉄片などが含まれていた。また、焼土や炭化物が50×50cmの範囲に不整形を呈して発見されることが多かった。

Y層群出土遺物のうち土器は12,000点であり、この中で図示し得たものは210から272の63点である。210から244は壺である。210と212は口縁部が開くものの頸部の発達が小さいものである。211・213は開きは小さく頸部は短いもの、214から215は直立気味に立ち上がるものである。217・218は粘土帯の貼付により肥厚した口唇に斜格子紋を施す。219は頸部下に櫛描きによる簾状紋と波状紋を施す。220は胴部上位にヘラ描き沈線と断面三角形突帯、米粒状の刻み列を施す。221から235は底部である。236から244は胴部破片である。236は縦長の鱗状浮紋に横から2穴穿孔する。237・238・240から242は重弧紋を施す。239は沈線区画内に楕円紋を施す。243・244は櫛描き波状紋と断面三角形の突帯に上位から穿孔する。

245から268は甕である。245・246は口径の広い容量大のもので、245は頸部下に沈線と刻み列風の爪痕を持つ。247は口縁部に沈線帯を持つ。249から253は器壁を薄く仕上げ、頸部下に2から3条の小突帯を持つ。257から268は底部である。267の底部外面には葉脈痕が残る。269・270は紡錘車である。

271・272はSR201に伴うものか判断し難かったが、ここでは弥生後期から古墳前期の包含層出土遺物として掲げておく。271は鉢、272は高杯の脚部である。

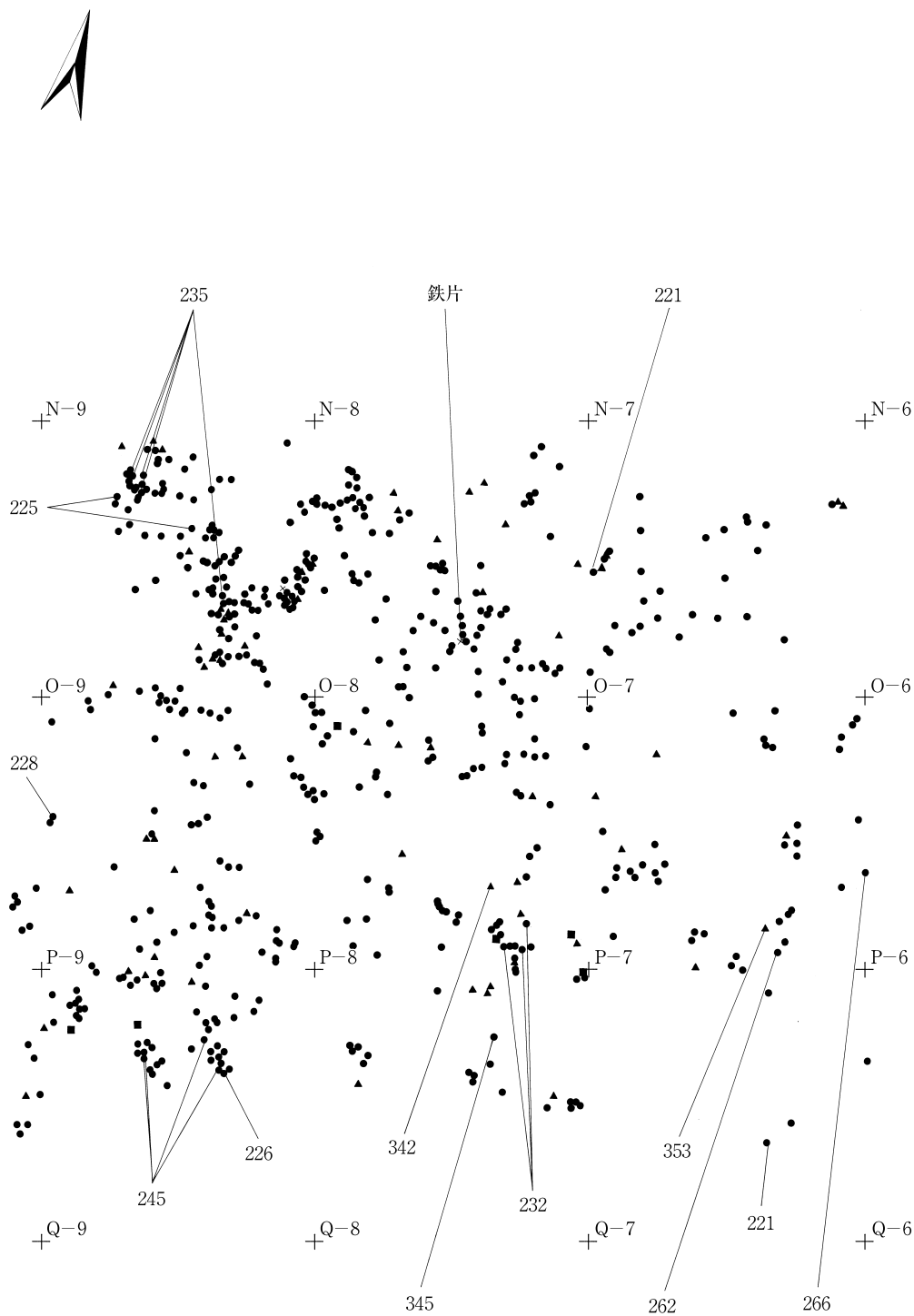
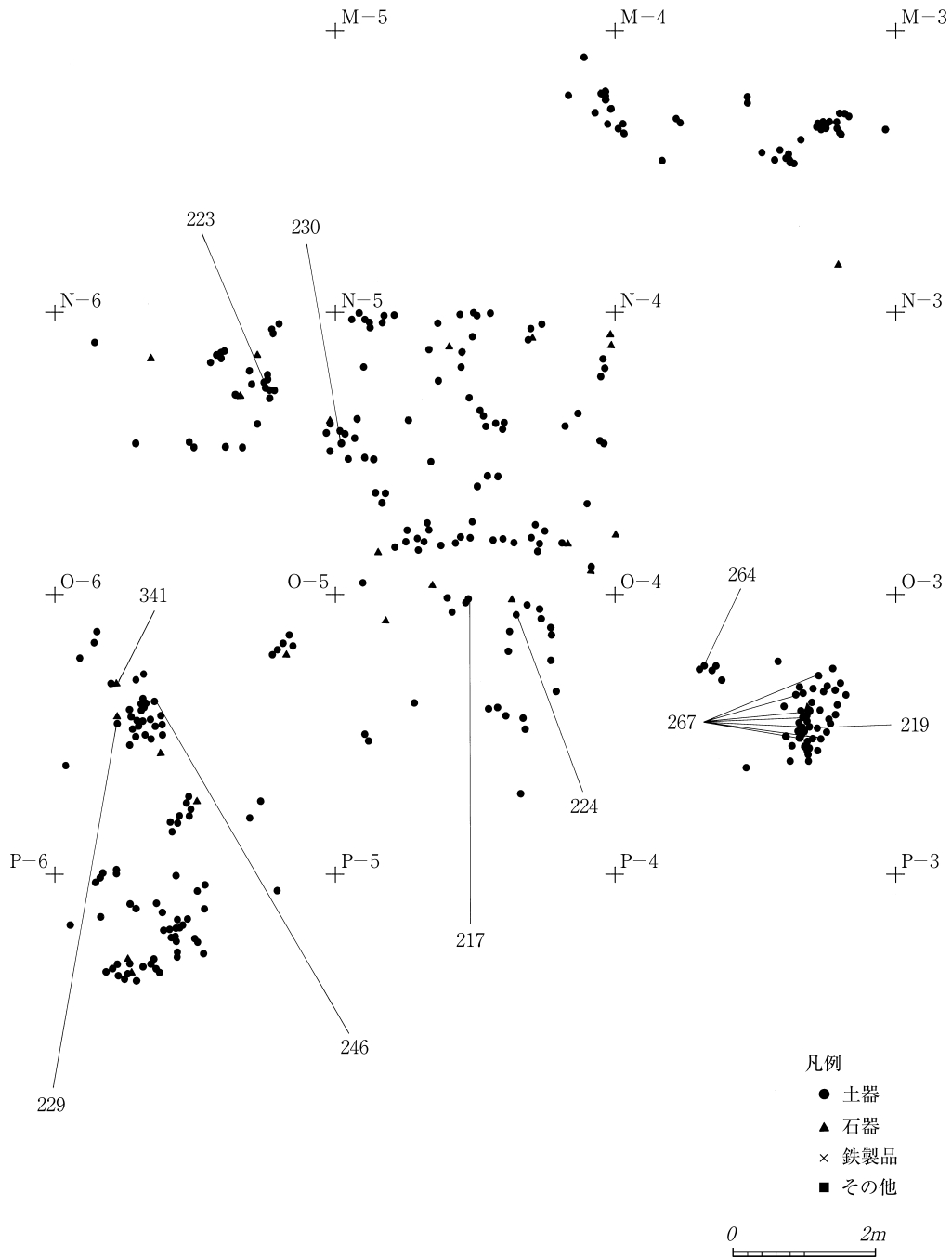


Fig.78 調査II区包含層遺物分布図 (S : 1/100)



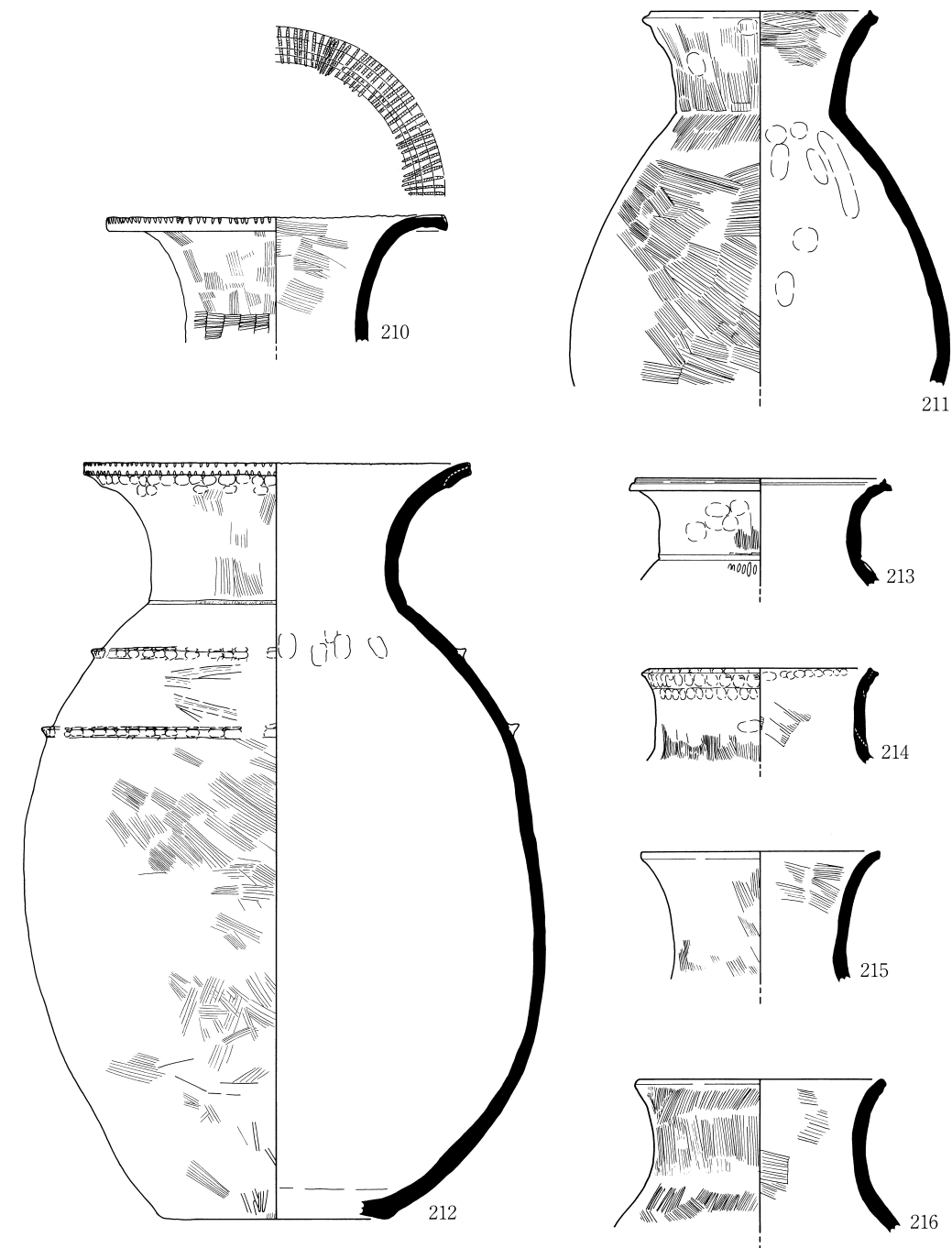


Fig.79 調査II区出土遺物実測図 19 (S:1/4)

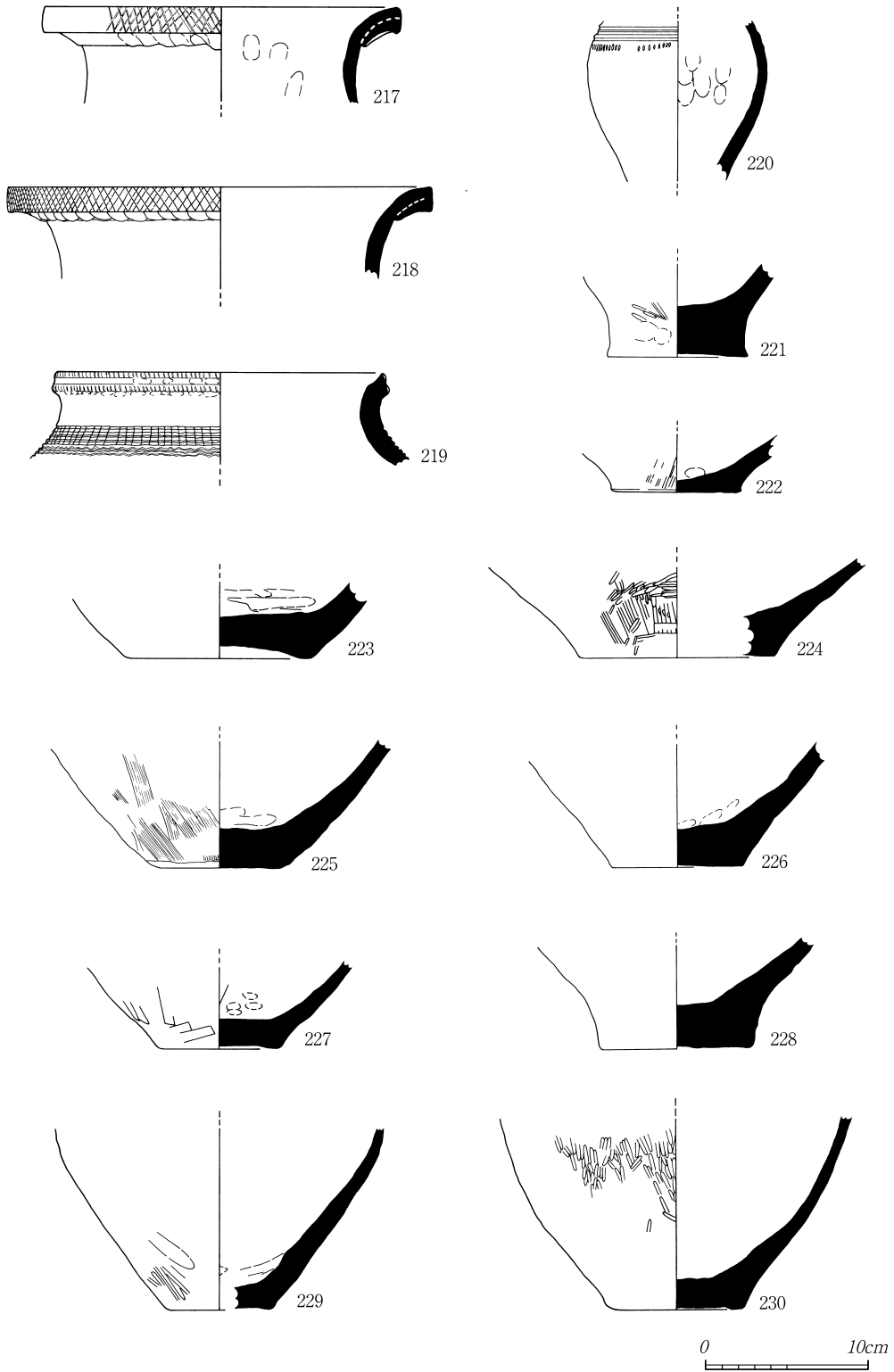


Fig.80 調査Ⅱ区出土遺物実測図 20 (S:1/4)

第2節 (2) II区

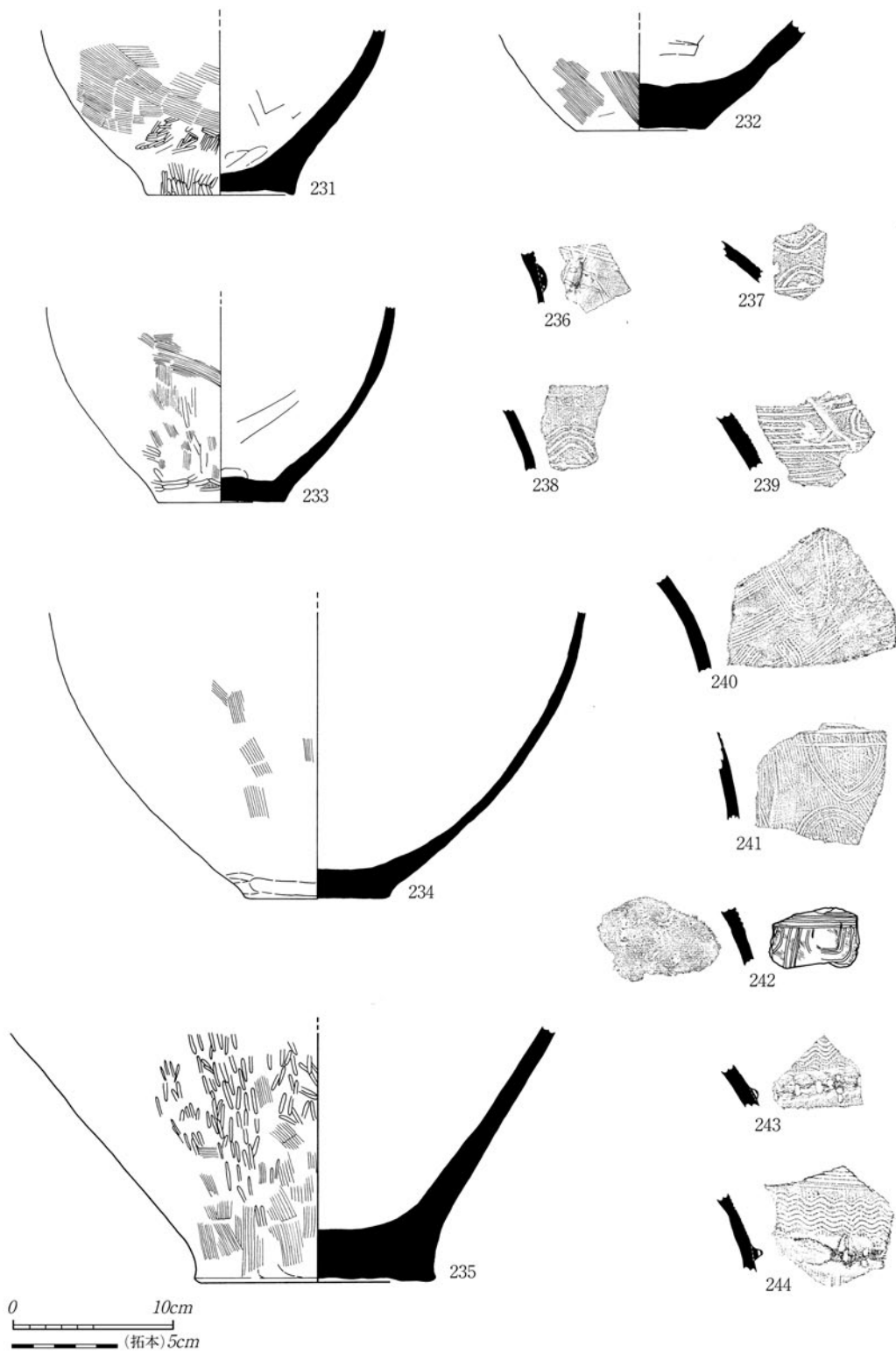


Fig.81 調査II区出土遺物実測図 21 (S:1/4,拓本1/3)

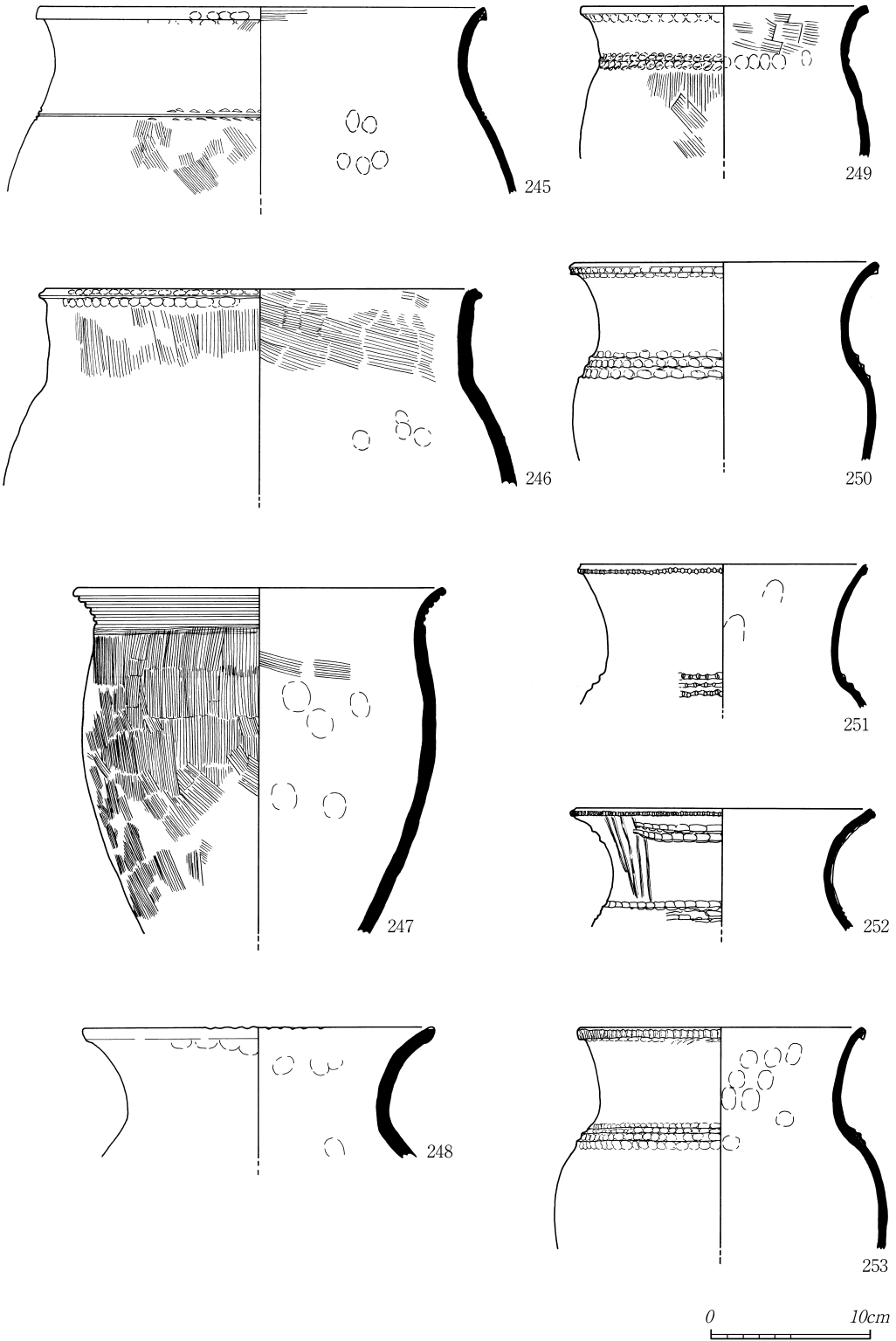


Fig.82 調査Ⅱ区出土遺物実測図 22 (S : 1/4)

第2節 (2) II区

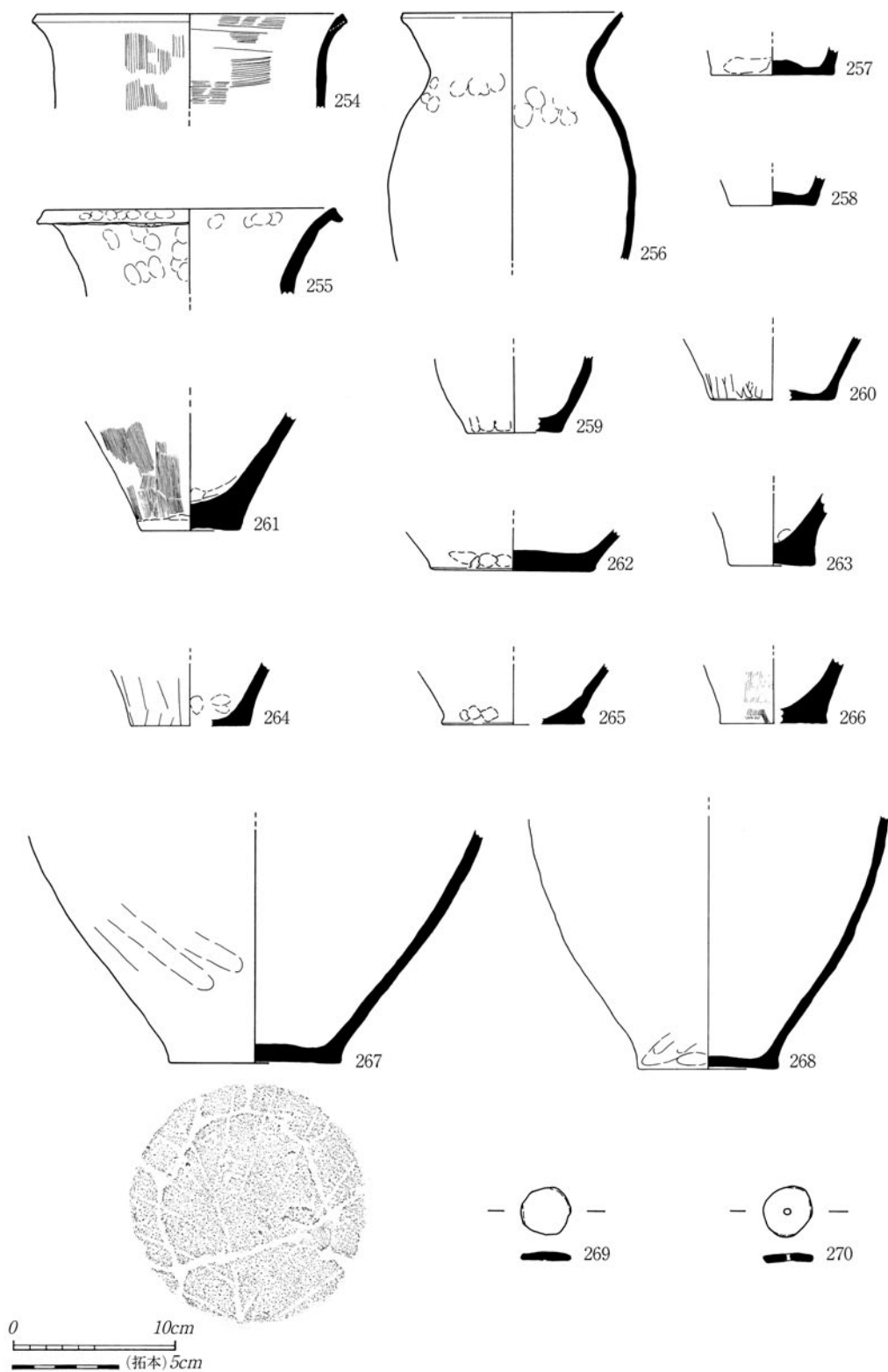


Fig.83 調査II区出土遺物実測図 23 (S: 1/4, 拓本1/3)

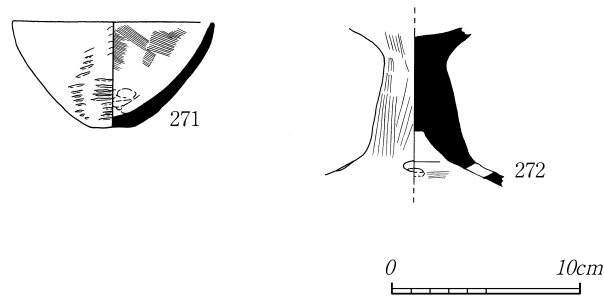


Fig.84 調査Ⅱ区出土遺物実測図 24 (S:1/4)

(4) 古墳時代

遺構と遺物

SR201

後述するがSR201の上流側である調査Ⅲ区で見える限り、数回に亘る流路変更が在り、一部ではそれに伴った古い流路堆積層が残されていた可能性が強い。ただし、ここではをSR201をY層群の北側に広がる流路の最終充填層であるP層（植物堆積層）とその下層に存在したG層（砂利層）として捉え、各々ほぼ単一の堆積層として扱った。出土遺物のうち土器は須恵器を除いて殆どがG層から出土している。遺物には弥生後期後半から古墳時代にかけての土器が多く含まれているが、隣接する包含層に出自を持つ相当量の弥生前期末から中期にかけて遺物の出土が見られ、SR201がY層の末端を取込んで流れ出たものと考えられる。P層では規模の大きな流木と共に板材や扉材、柱材などの大型、そして横槌や鋤、機具部材などの小型木器・木製品を含んでいた。また、馬骨の出土を見たのもこの層である。流路の南岸からは北にやや離れた流路中央部分に比べ大型の流木や遺物が堆積していることから、流速の弱い周辺部分から停滞、堆積が進行し始めたものであろう。

出土遺物の中で図示し得るものは273から337の65点である。273から290は壺である。273は内傾する口唇に波状紋を施す。275・276は丸底を呈し、278は小型丸底壺の胴部か。279から290は底部である。287は底部外面に溝状の圧痕が残る。また、288には編み目痕が見られる。291から314は甕である。316から324は鉢である。321は台付のものか。325から327は手捏ね土器。328は土玉。329から335は高杯脚部である。

336・337の須恵器は何れもP層の出土であり、336は坏身、337は甕胴部である。

357から361は木製品である。357は扉。358は鋤。359は横槌。361は梯子である。

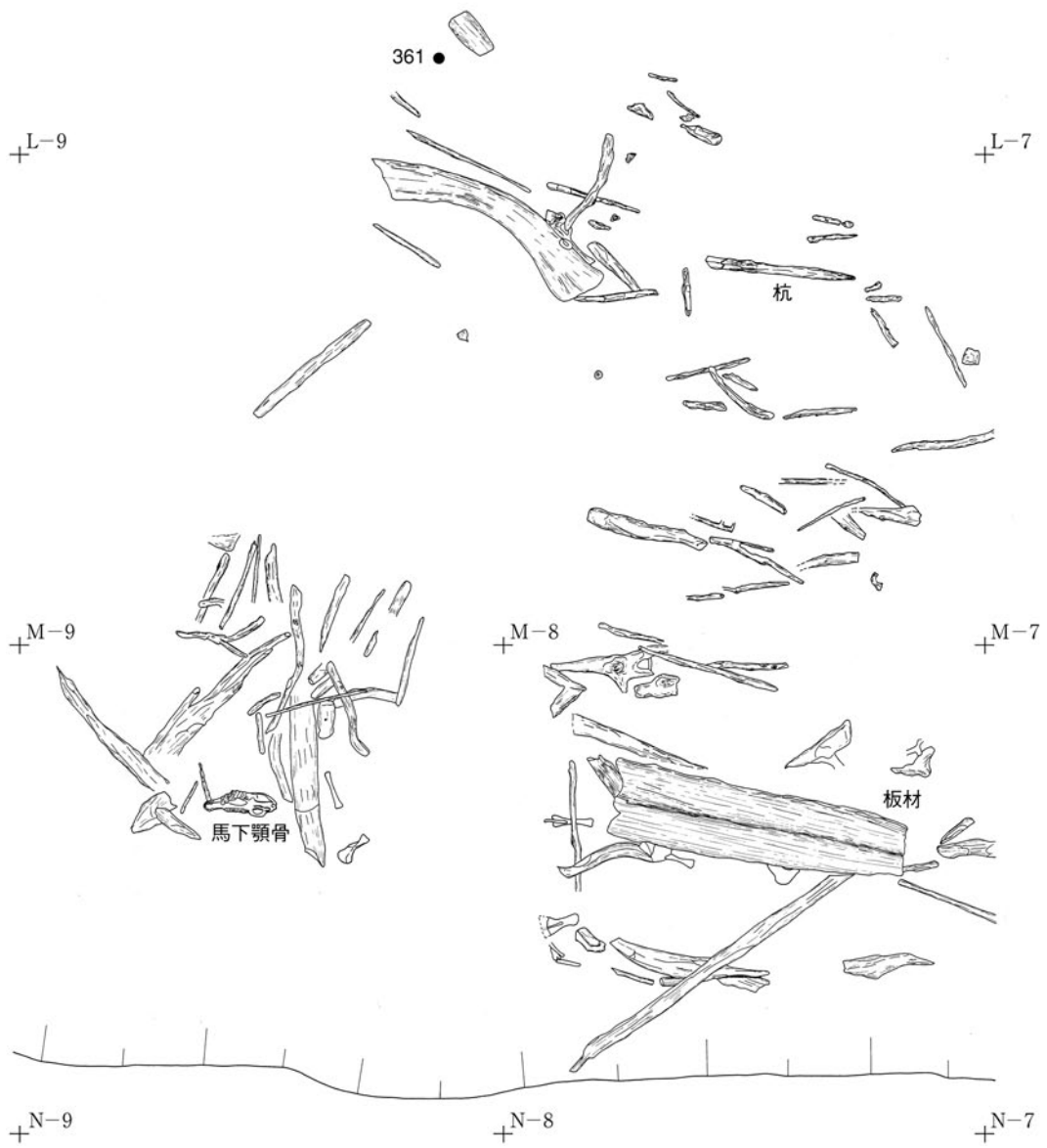
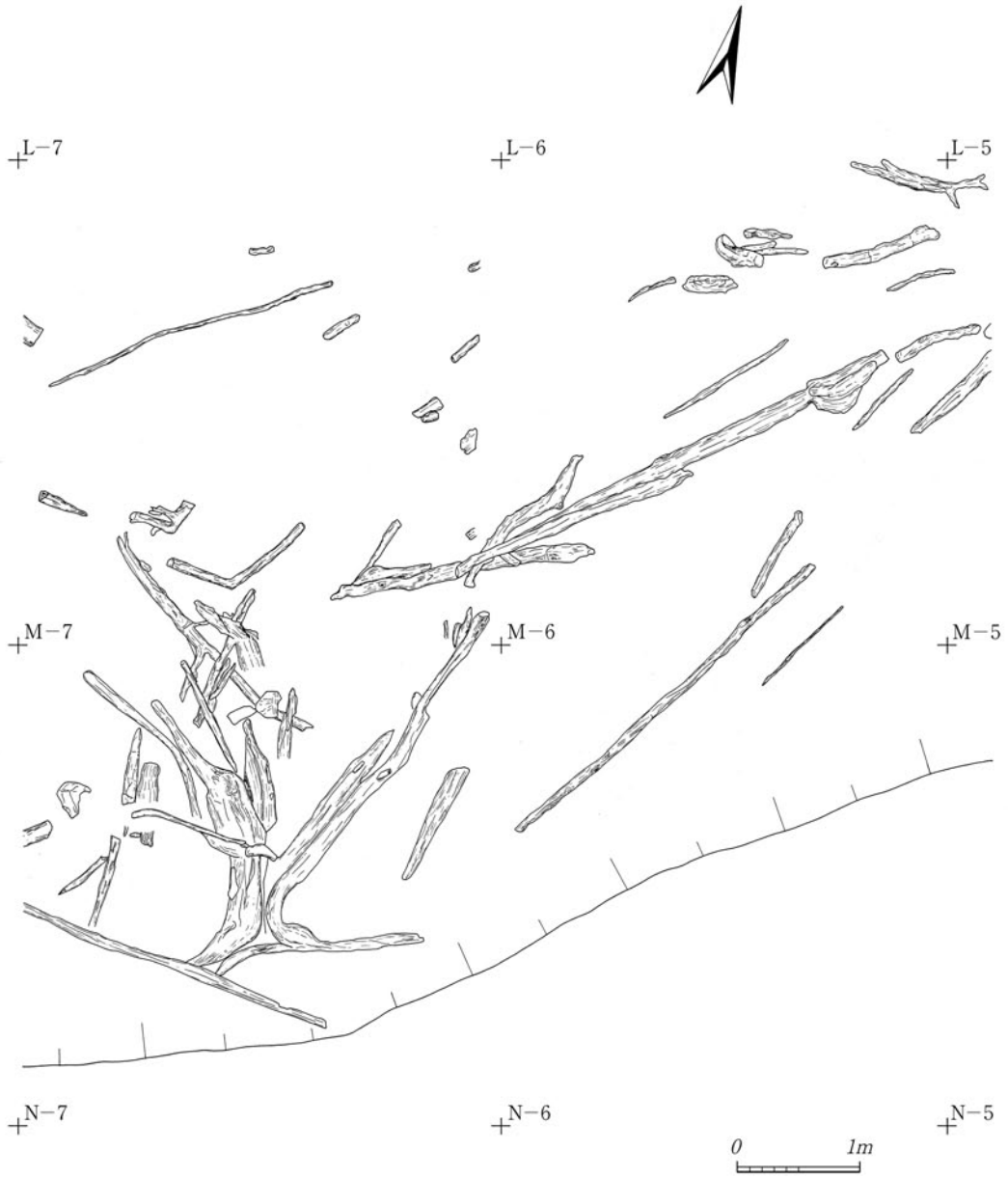


Fig.85 調査II区SR2出土状況図 1 (S:1/60)



第2節 (2) II区

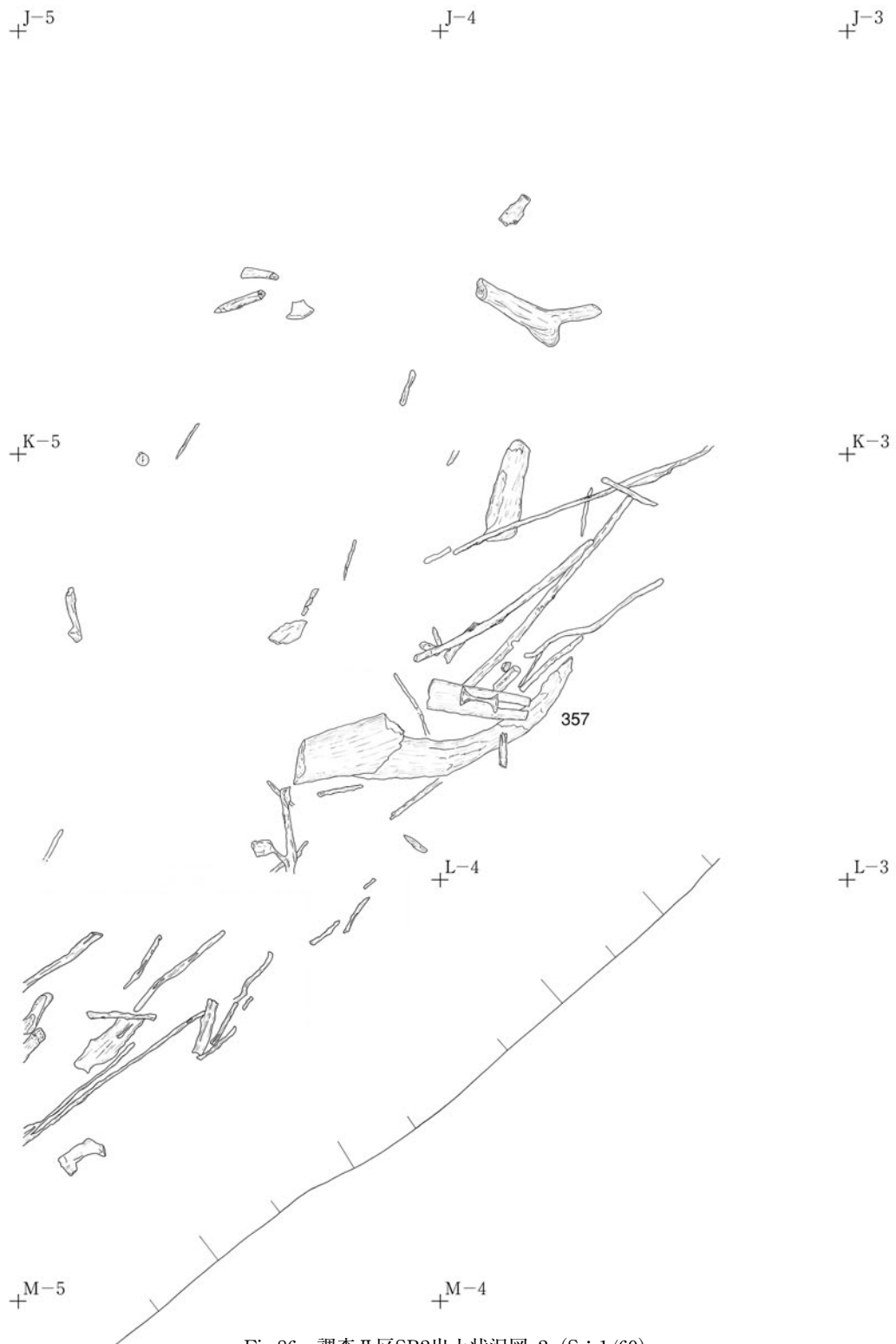
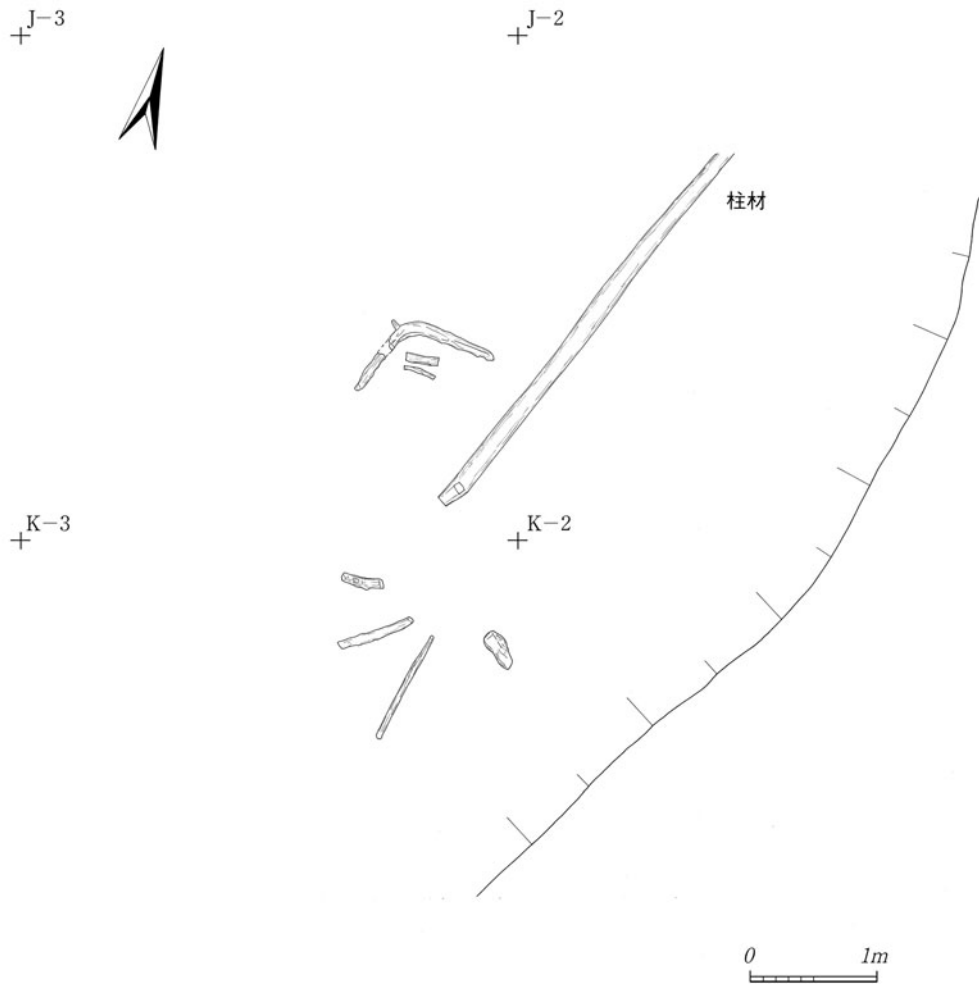


Fig.86 調査II区SR2出土状況図 2 (S : 1/60)



第2節 (2) II区

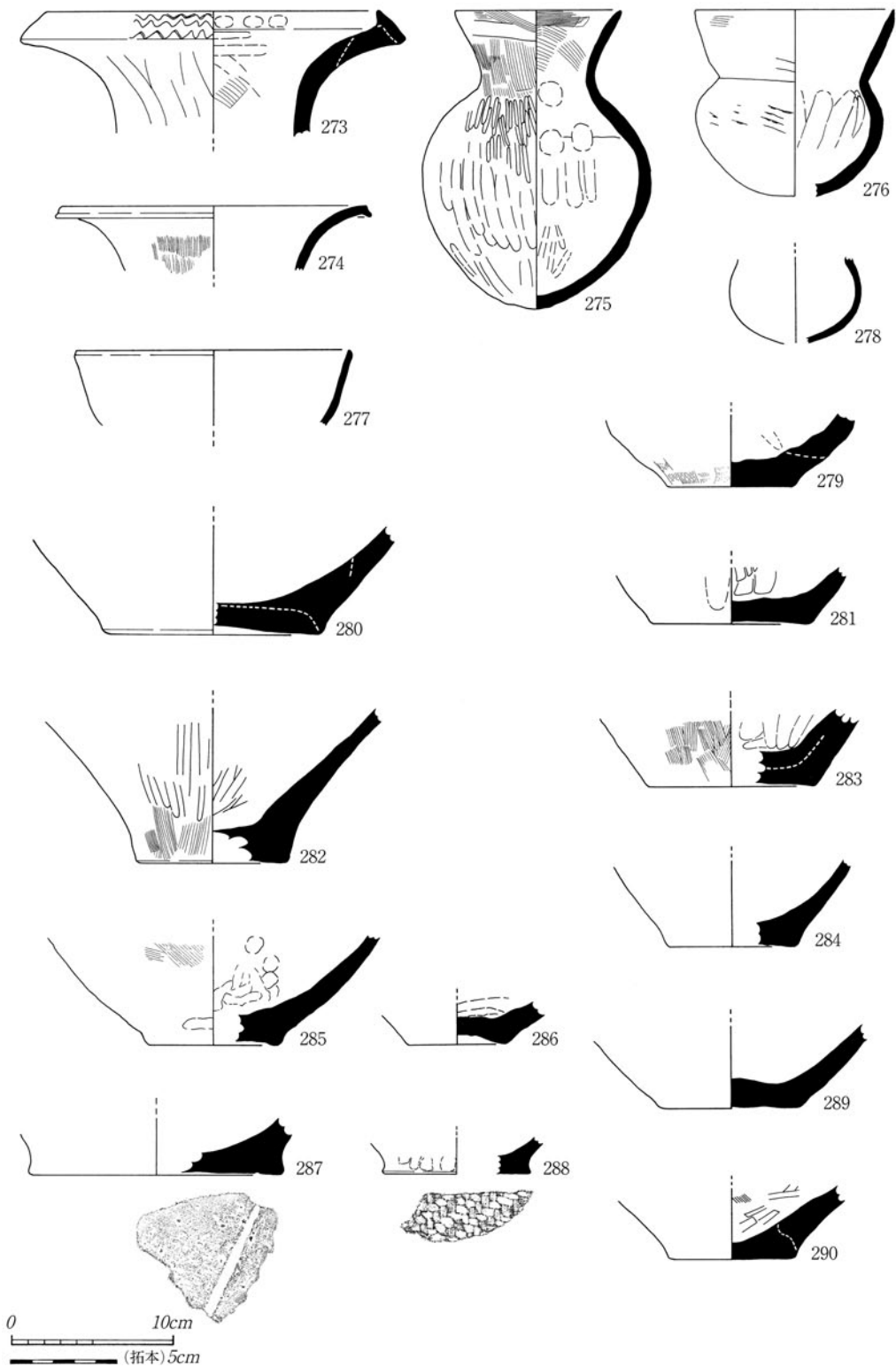


Fig.87 調査II区出土遺物実測図 25 (S:1/4,拓本1/3)

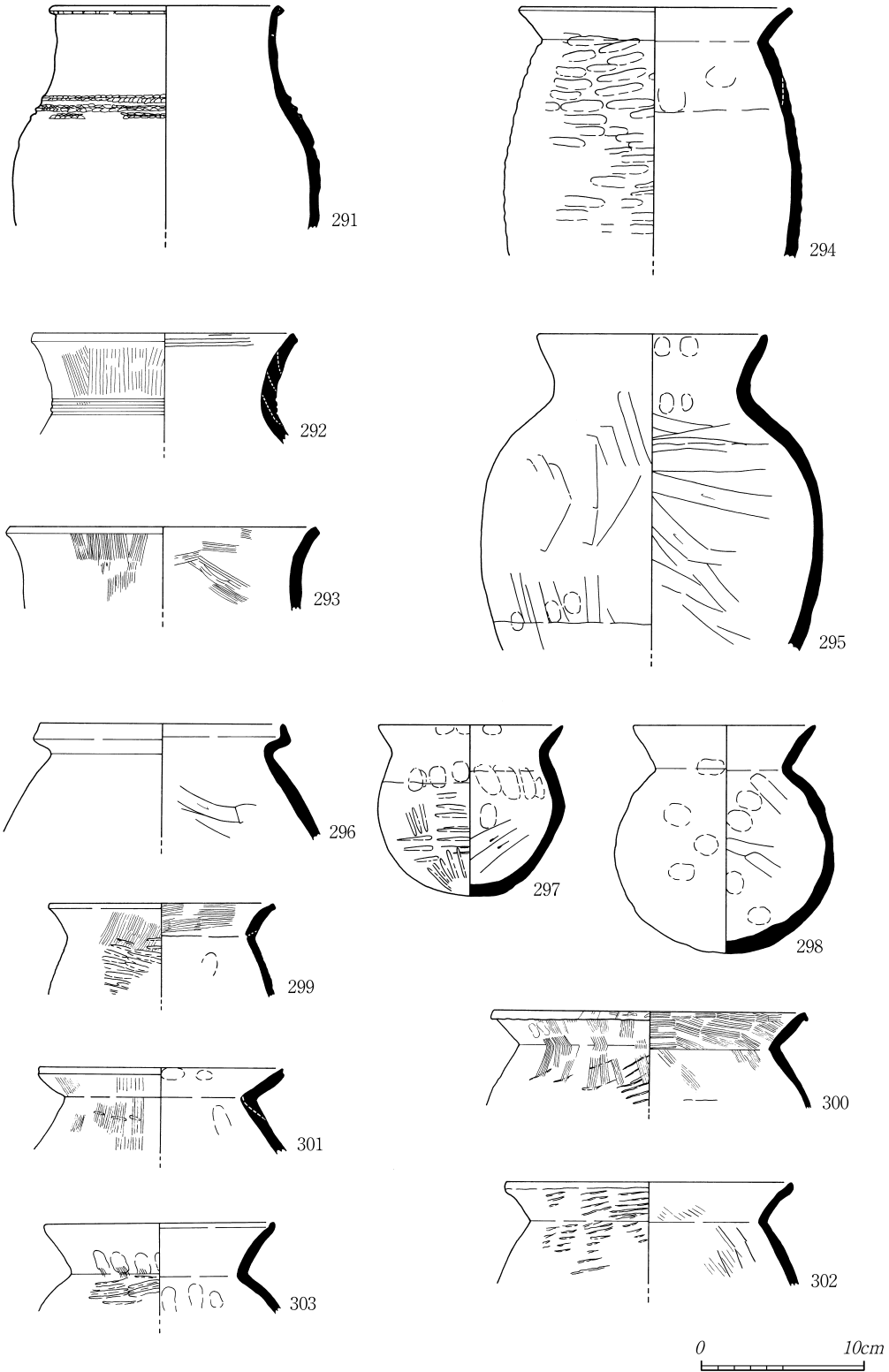


Fig.88 調査Ⅱ区出土遺物実測図 26 (S : 1/4)

第2節 [2] II区

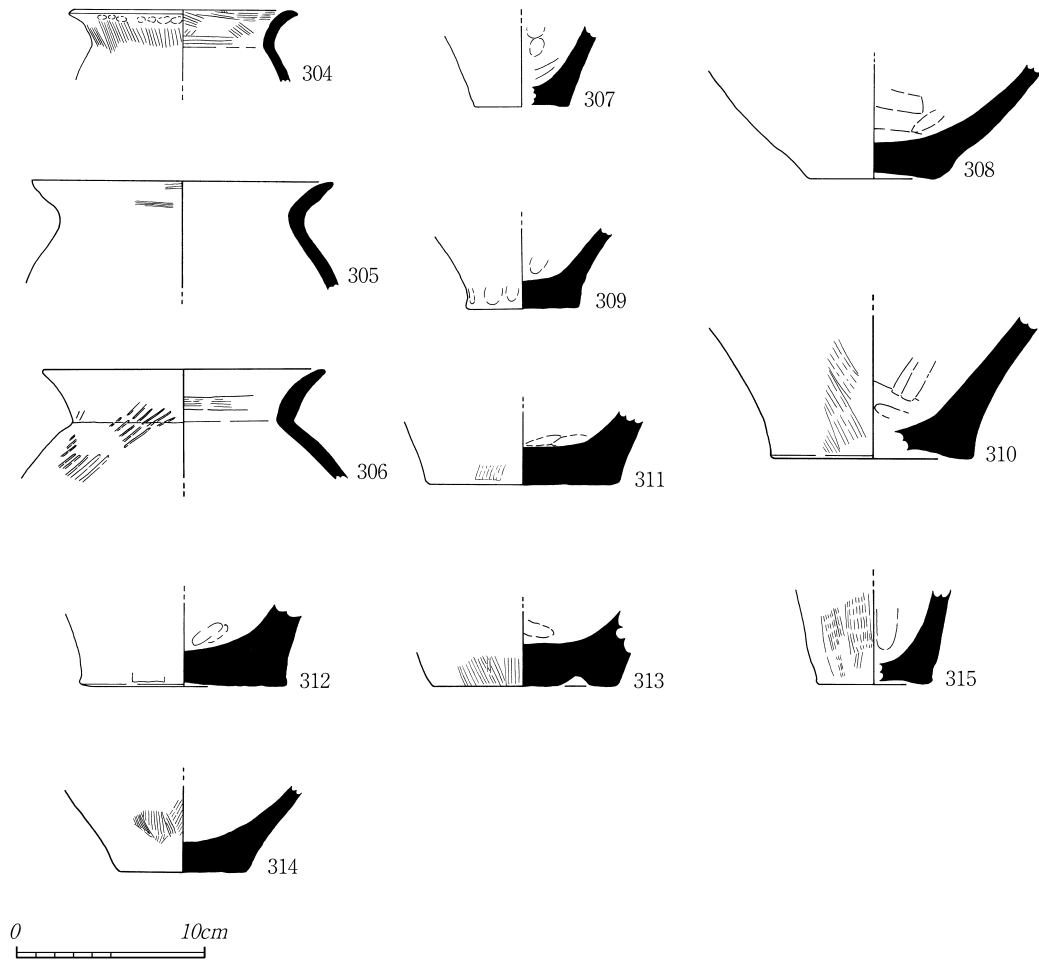


Fig.89 調査II区出土遺物実測図 27 (S: 1/4)

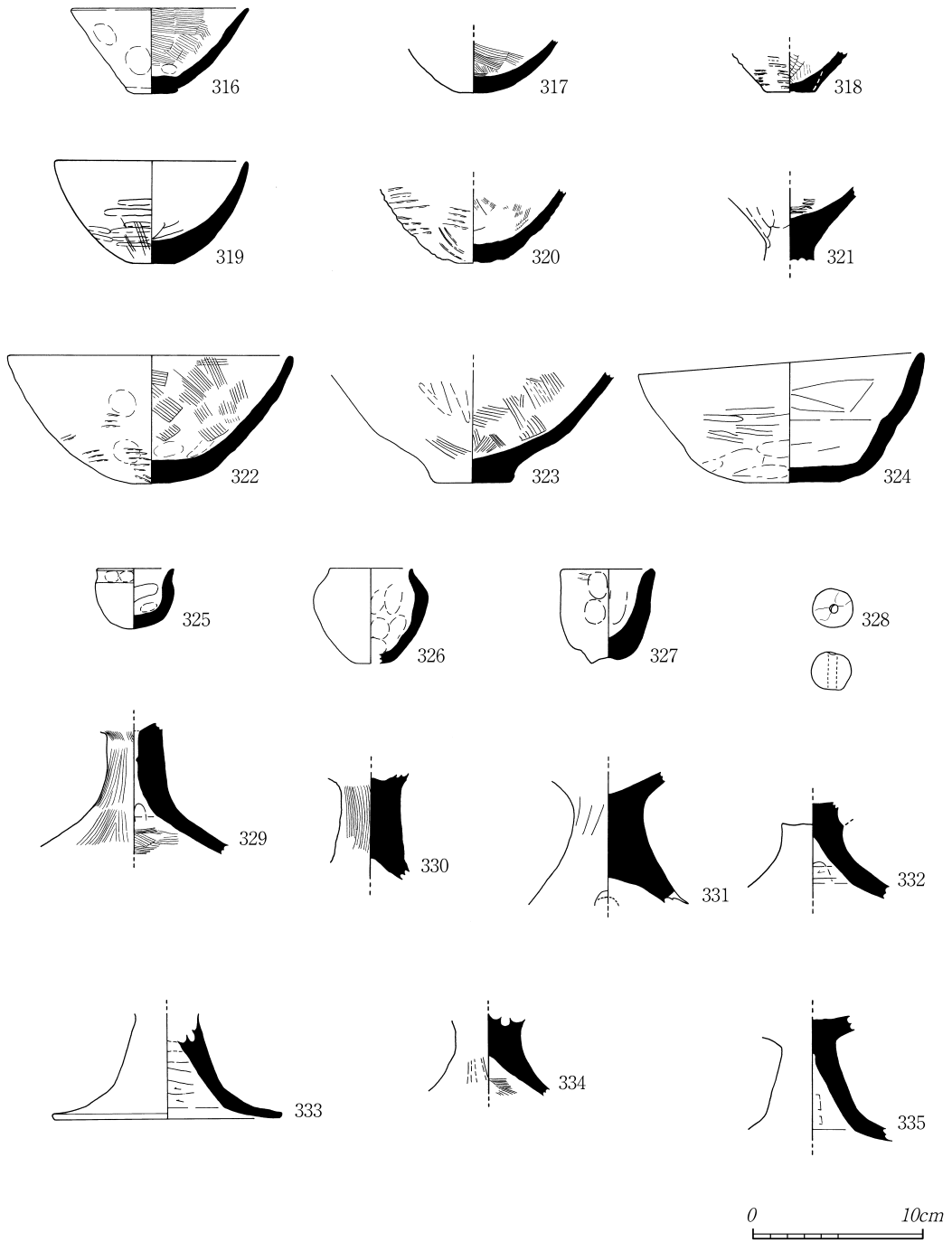


Fig.90 調査Ⅱ区出土遺物実測図 28 (S : 1/4)

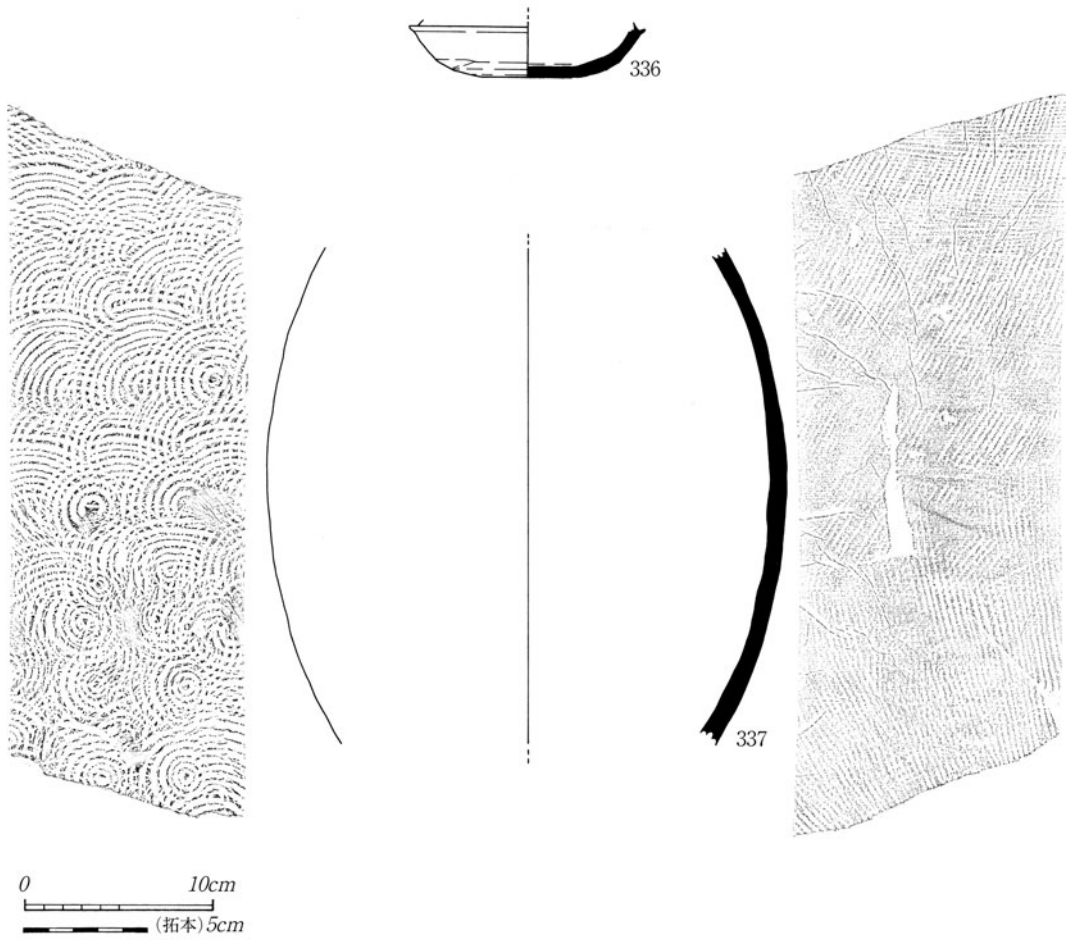


Fig.91 調査II区出土遺物実測図 29 (S:1/4,拓本1/3)

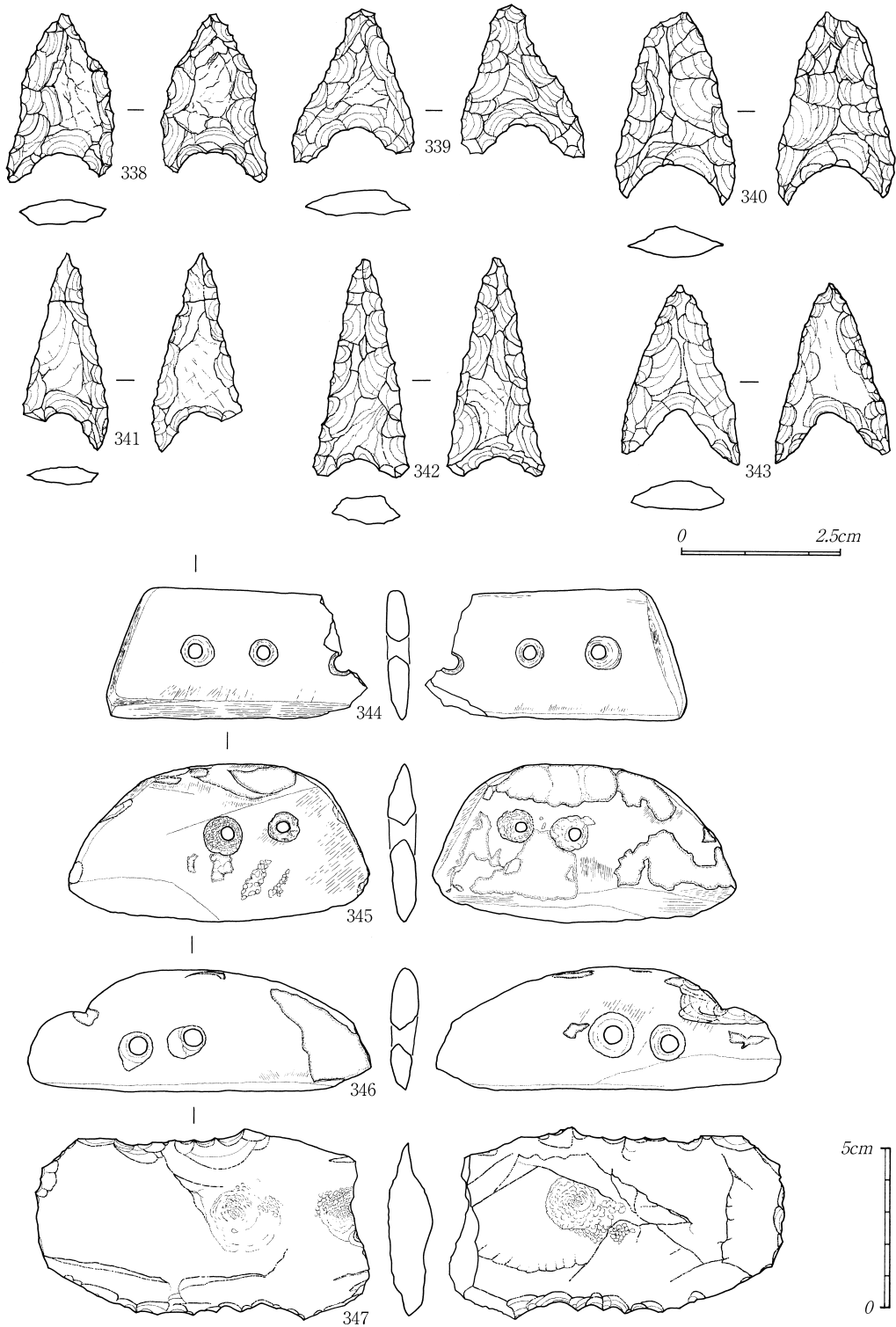


Fig.92 調査Ⅱ区出土遺物実測図 30 (S : 1/1,1/2)

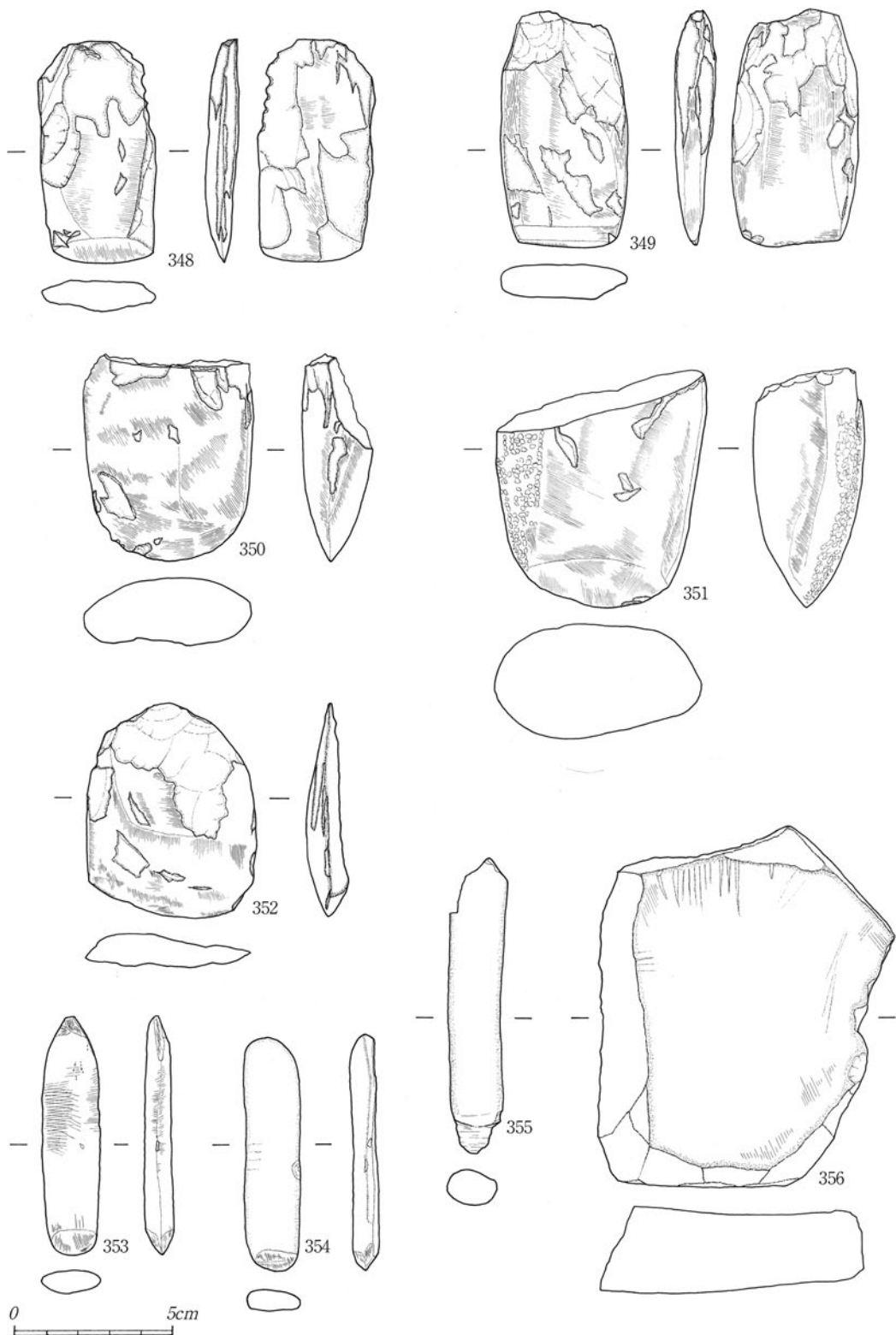


Fig.93 調査II区出土遺物実測図 31 (S:1/2)

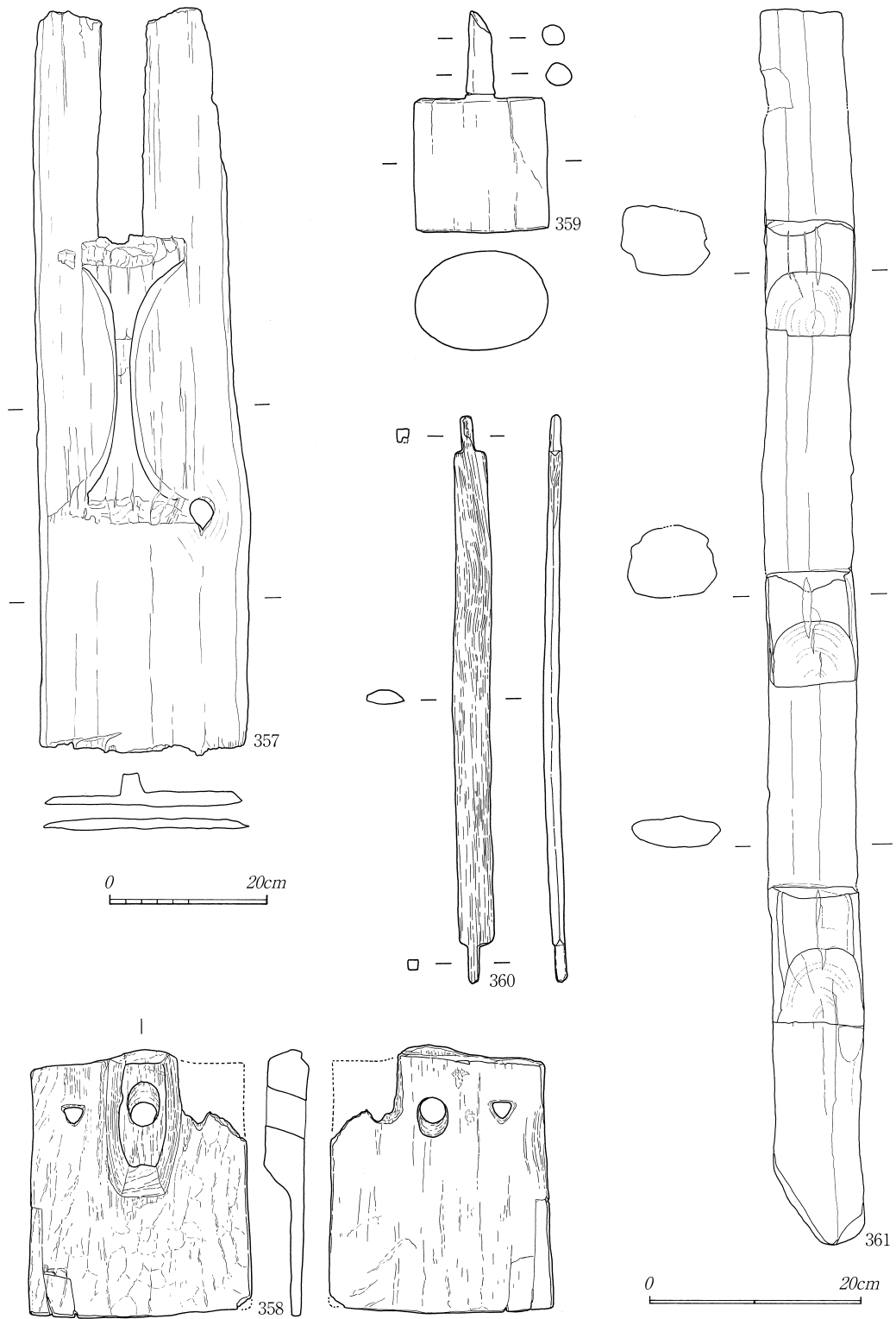


Fig.94 調査Ⅱ区出土遺物実測図 32 (S : 1/8,1/6,1/4)

Tab. 4 調査II区遺構計測表1

土坑名	グリッド	検出標高(m)	規模(m)	深さ(cm)	平面形	出土土器点数	その他	Fig.No	出土遺物Fig.-No	
SK 1	P-5・6	5.37	1.44×0.92	34	隅丸長方形	557点		41	60~65 .92	47~86・344
SK 2	O-5	5.45	1.52×1.35	30	不整円形	124点	炭化種子	40	66	87
SK 4	O・P-6	5.40	0.91×0.80	15	不整形	116点		40		
SK 5	O-6	5.44	0.55×0.45	10	楕円形	10点		40		
SK 6	N-4・5	5.41	0.64×0.52	6	不整形	31点		40		
SK 8	P-5	5.38	1.20×(0.30)	21	—	5点		40		
SK 9	P-5	5.42	0.65×0.54	26	楕円形	13点		40		
SK10・11	O-5・6	5.41	1.04×0.71	15	不整楕円形	13点	骨片	40		
SK 12	N-6	5.49	1.15×0.62	10	不整楕円形	14点	彩文土器	40		
SK 13	O-6	5.40	0.48×0.41	27	不整円形	21点	魚骨?	40	66	88
SK 14	N-7	5.41	0.80×0.56		楕円形	1点		40	66	89
SK 15	N-7	5.52	直径0.84	11	円形	38点		40	66	90
SK 16	N・O-8	5.50	直径1.1~1.2	20	不整円形	56点		42	66	91
SK 17	P-8	5.44	2.00×0.48		不整形	107点			66	92
SK 18	O・P-7・8	5.42	2.7×1.2	34	不整形	199点	魚骨(アユ・タイ?)	42	66・92	93・343
SK 19	P-8	5.44	2.1×1.0	41	隅丸長方形	229点	獣骨?	42	66・67	94~98
SK 20	O-7	5.40	1.62×0.78	27	不整楕円形	73点	彩文土器	40	67	99
SK 21	P-7	5.42	1.85×0.55	12	不整形	29点		43	67	100
SK 22	M-2・N-2・3	4.82	4.80×2.45	30	不整隅丸長方形	997点	彩文土器・獣骨?	44	68~70	101~130
SK 23	N-2・3・0-3	4.69	3.40×1.30	52	不整楕円形	198点	彩文土器・獣骨?	44	71	131~138
SK 24	O-1	4.89	1.12×0.68	4	不整楕円形	1点				
SK 25	P-8	5.24	1.34×1.34	38	不整楕円形	146点	魚骨	45		
SK 26	O・P-7	5.34	3.20×2.60	27	不整形	74点			71	139~141
SK 27	O-7	5.37	2.12×1.09	19	不整楕円形	220点	彩文土器	43	71・93	141・347
SK 28	N-6・7	5.21	2.78×1.79	23	隅丸長方形	11点	彩文土器	46	93	348
SK 29	O-6・7	5.23	3.10×1.30	15	隅丸長方形	42点	魚骨?	46	72	142
SK 30	N・O-5・6	5.27	1.88×1.52	39	楕円形	147点	魚骨?	47	72	143
SK 31	N・O-4・5	5.26	1.39×1.14	56	隅丸長方形	259点	獣骨?	48	72	144~147
SK 32	P-1	5.15	1.58×0.79	15	不整楕円形	—		49		
SK 33	O・P-2	4.99	1.15×(1.00)	12	不整円形	42点	獣骨	50	72・92	148・340
SK 34	O-2・3	4.85	0.89×(0.80)	21	不整円形	11点	獣骨?	50		
SK 35	P-4	5.19	1.05×(0.60)	25	不整楕円形	1点	魚骨?	51		
SK 36	P-1	5.36	0.69×0.58	14	不整円形	30点	炭化種子	52		
SK 37	P-3	5.28	0.57×(0.35)	7	—	—		49		
SK 38	O・P-1	5.23	2.78×(0.98)	28	—	66点	魚骨?	52		
SK 39	P-1	5.35	(1.05×0.51)	13	—	25点		52		
SK 40	P-1	5.36	0.52	64	不整方形	11点		52		
SK 41	O・P-1	5.30	0.98×(0.84)	11	—	6点		52		
SK 42	O・P-1	4.75	1.84×1.02	24	隅丸長方形	19点		53		
SK 43	P-1	4.80	1.68×1.15	34	不整楕円形	37点		53		

Tab.4 調査Ⅱ区遺構計測表2

土坑名	グリッド	検出標高(m)	規模(m)	深さ(cm)	平面形	出土土器点数	その他	Fig.No	出土遺物Fig. - No	
SK 44	P-0・1	4.87	(1.20)×1.18	29	—	20点		53		
SK 45	P-2	5.24	0.90×0.57	9	楕円形	3点		52		
SK 46	P-2	5.24	1.30×(0.97)	18	—	10点		52		
SK 47	P-1	5.37	0.90×(0.50)	17	—	38点		52	72	149～151
SK 48	P-1	5.37	0.51	9	円形	4点		52	72	152
SK 49	Q-2	5.12	2.28×(1.70)	62	不整形	205点	骨片	54	73・93	153～158・352
SK 50	Q-3	5.15	1.67×0.93	33	不整形	37点		54	73	159
SK 51	Q-4	5.11	1.41×1.19	24	不整楕円形	34点		55	73	160
SK 52	P-4	5.22	0.85×0.64	11	楕円形	12点		51		
SK 53	Q-4・5	5.27	1.62×1.28	67	不整楕円形	102点	魚骨・炭化種子	51	73	161
SK 54	P・Q-5	5.33	2.62×2.35	71	不整方形	593点	彩文土器・獣骨・魚骨?	56	73・74	162～172
SK 55—1	Q-5	5.28	1.20×1.02	13	楕円形	42点		56		
SK 55—2	Q-5・6	5.17	2.07×1.54	59	不整楕円形	180点	炭化種子・獣骨・魚骨? (被熱する)	56	75・93	173・174・350
SK 56	Q-6・7	5.55	0.78×0.59	30	楕円形	15点		57	75	175
SK 57	Q-7	5.58	1.54×1.35	40	不整楕円形	350点	魚骨(タイ科・スズキ) ・獣骨・貝殻	57	75	176～179
SK 58	Q-7・8	5.57	1.42×1.29	57	不整円形	18点	クロダイ?(左歯骨)			
SK 59	Q-8	5.61	2.23×1.56	75	不整形	412点	獣骨	58	75・76	180～186
SK 60	Q-7	5.54	1.15×1.01	31	不整円形	24点	魚骨(スズキ)・獣骨	57		
SK 61	Q-6・7	5.55	0.55×0.50	14	不整円形	9点		57		
SK 62	Q-6・7	5.39	0.92×0.73	24	不整楕円形	82点	獣骨?	57	76	187・188
SK 63	P-5	5.17	0.88×0.40	12	不整楕円形	37点		56	76	189
SK 64	Q-6	5.33	0.78×0.47	46	楕円形	113点	獣骨?	57	74・76	166・189・190
SK 65	Q-6	5.42	1.25×1.07	13	不整楕円形	134点	獣骨?	57	76	186・191
SK 66	Q-4	5.27	1.28×0.62	10	楕円形	200点	獣骨?		74	167～169
SK 67	Q-5	5.32	1.56×1.55	86	不整円形	92点	彩文土器	56	74・76	170～172・ 192～196
SK 68	Q-7・8	5.51	1.40×0.55	13	隅丸方形?	158点	獣骨・魚骨(タイ類)	58	76	197・198
SK 69	Q-7	5.53	1.14×0.95	29	—	6点		58	76	198
SK 70	Q-4・5	5.30	(0.40)×0.39			20点				
SK 72	P・Q-6	5.32	2.11×1.38	64	隅丸長方形	92点	魚骨(クロダイ左歯骨) 鳥骨(ガン・カモ科)	59	77	199～202
SK 73	P-7・Q-6・7	5.24	1.77×1.57	42	不整楕円形	9点		59		
SK 74	Q-7	5.42	0.98×0.82	11	不整円形	44点	獣骨・魚骨 (ニシン亜科・アユ)	59	77	203
SK 75	Q-7	5.60	0.95×(0.55)	27	不整形	2点		58		

遺構名	グリッド	検出標高(m)	確認延長(m)	幅(m)	深さ(cm)	断面形	出土土器点数	その他	Fig.No	出土遺物Fig. - No	
SD 1	O-6・7	5.42	7.04	0.65	13	逆台形	120点		40	77	204
SD 2	N-4・5	5.40	1.65	0.43	16	逆台形	51点		40	124	351
SD 3	P-8	5.44	1.60	0.88	6	逆台形		魚骨			
SD 5	O-0・1	4.86	2.27	0.54	24	“U”字形	67点	彩文土器 炭小片	53		

第2節 [2] II区

Tab.4 調査II区遺構計測表3

Pit No.	グリッド	検出標高(m)	規模 (cm)	深さ(cm)	平面形	出土土器点数	その他	Fig.No.	出土遺物Fig.—No.	
P 1	O-4	5.33	65×52	5	不整楕円形	40			77	205・206
P 2	P-5	5.37	28×24	14	楕円形	13	骨片	40	77	207
P 3	N-5	5.40	直径30	10	円形	1				
P 4	P-4	5.40	62×51	14	楕円形	35	魚骨?	40		
P 5	P-4	5.43	直径19	18	円形	31	魚骨?			
P 6	P-5	5.43	24×22	37	楕円形	5				
P 7	O-6・7	5.40	71×56		不整楕円形	53	骨片		92	345
P 8	P-4	5.40	50×44	12	楕円形	10		40		
P 9	P-4・5	5.42	41×28	29	楕円形	32		40		
P 10	P-4	5.42	21×17	15	不整楕円形	16		40		
P 11	P-5	5.42	22×19	20	楕円形			40		
P 12	P-5	5.40	41×30	17	楕円形			40		
P 13・14	O-6	5.43	63×39	15	不整楕円形	10				
P 15	O-6	5.48	14×10	10	楕円形	1		40		
P 16	O-6	5.46	60×44	12	不整楕円形	8		40		
P 17	O-6	5.45	17×14	12	不整楕円形					
P 18	P-6	5.40	54×29	19	不整楕円形			40		
P 19	O-6	5.39	10×9	10	不整楕円形					
P 20	O・P-6	5.38	34×25	15	不整楕円形			40		
P 21	O・P-7	5.36	65×46	20	不整形			40		
P 22	P-7	5.34	23×19	6	楕円形			40		
P 23	P-7	5.38	69×50	26	不整形	7	魚骨?	40		
P 24	O-6	5.49	33×18	7	楕円形	1		40		
P 25	P-5・6	5.44	直径50	13	円形	1				
P 26	N-4・5	5.42	21×19	4	楕円形		骨片	40		
P 27	O-7	5.35	24×19	10	楕円形			40		
P 28-1	O-7	5.37	74×40	28	不整楕円形			40		
P 28-2	O-9	5.34	直径12	17	不整円形			45		
P 29	O-9	5.35	直径17	41	円形	5		45		
P 30	P-9	5.35	25×19	33	楕円形	3		45		
P 31	P-9	5.35	36×26	16	楕円形			45		
P 32	P-9	5.33	19×18	15	不整円形			45		
P 33	P-9	5.33	23×17	52	不整楕円形	7		45		
P 34	N-8	5.33	35×33	16	不整円形			45		
P 35	O-8	5.35	30×28	16	不整円形			45		
P 36	O-8	5.37	直径17	12	円形			45		
P 37	O-8	5.38	36×24	18	楕円形			45		
P 38	O-8	5.37	直径30	18	円形			45		
P 39	O-8	5.35	21×17	9	楕円形			45		
P 40	N-7	5.39	62×47	14	不整楕円形			46		
P 41	N-7	5.36	直径18	14	円形	1		46		
P 42	N-7	5.35	50×46	12	楕円形	2		46		
P 43	O-7	5.27	38×31	11	楕円形			46		
P 44	O-7	5.27	25×19	5	不整楕円形			46		
P 45	O-7	5.25	73×59	21	不整楕円形	10		46		
P 46	O・N-7	5.35	66×37	33	不整楕円形			46		
P 47	O-9	5.04	22×17	19	楕円形					

Tab.4 調査Ⅱ区遺構計測表4

Pit No.	グリッド	検出標高(m)	規模 (cm)	深さ(cm)	平面形	出土土器点数	その他	Fig.No.	出土遺物Fig.—No.
P 48	P-9	5.13	23×17	28	楕円形	2			
P 49	P-9	5.13	26×22	26	楕円形	7			
P 50	P-9	5.13	23×20	24	楕円形	5			
P 51	P-9	5.13	直径18	30	円形				
P 52	P-6	5.32	33×29	33	不整楕円形	5		41	
P 53	P-5	5.31	33×21	25	不整楕円形	2		41	
P 54	O-5	5.27	79×55	19	不整楕円形	17		48	
P 55	O-4	5.28	66×37	14	不整楕円形	6		48	
P 56	P-6	5.32	36×32	31	不整楕円形	5		41	
P 57	N-6	5.26	52×42	23	不整楕円形	7			
P 58	N-6	5.24	直径25	17	円形	1			
P 59	N-6	5.24	28×24	20	楕円形	6			
P 60	O-5	5.23	46×42	11	楕円形	2		47	
P 61	O-4	5.27	61×44	20	隅丸長方形	7		48	
P 62	O-4	5.27	直径24	15	円形	1			
P 63	N-6	5.22	30×25	6	不整楕円形	3			
P 64	O-5	5.25	46×32	18	不整楕円形	1		47	
P 65	O-4	5.26	57×42	12	隅丸長方形	9		48	208
P 66	O-4	5.26	55×43	17	不整円形	5		48	
P 67	O-5	5.27	63×31	24	不整楕円形				
P 68	N-4	5.32	直径42	21	円形	4		48	
P 69	N-4	5.26	22×19	12	楕円形	1		48	
P 70	N-4	5.24	40×29	23	不整楕円形	5		48	
P 71	N-4	5.26	32×20	10	不整楕円形	2		48	
P 72	N-4	5.26	一辺34	7	隅丸方形	3		48	
P 73	O-5	5.28	39×34	11	不整円形	3		53	
P 73	P-1	4.85	29×18	14	楕円形			53	
P 74	P-1	4.85	34×25	11	楕円形	3		53	
P 75	P-1	4.87	40×19	14	不整楕円形				
P 76	Q-3	5.16	20×16	12	楕円形		サヌカイト剥片		
P 77	Q-3	5.17	30×16	24	楕円形				
P 78	Q-3	5.18	20×18	33	不整円形	2			
P 79	Q-3	5.17	16×12	25	不整楕円形				
P 80	Q-4	5.10	28×16	18	楕円形			51	93 354
P 81	Q-4	5.11	20×12	29	楕円形	1		51	
P 82	Q-4	5.11	直径20	28	円形	4		51	
P 83	Q-4	5.13	20×12	15	不整楕円形	1		51	
P 84	Q-4	5.15	14×10	31	楕円形			55	
P 85	Q-4	5.42	16×12	63	楕円形	1		55	
P 86	Q-4	4.99	直径18	17	楕円形	1			
P 87	P-3	4.95	46×22	23	楕円形	1			
P 88	Q-6	5.35	51×34	14	不整楕円形	1		77	209
P 89	Q-5	4.58	直径30	18	円形	1			
P 90	Q-5	4.59	25×24	20	不整円形				
P 91	P-5	4.46	直径20	14	円形				
P 92	P-5	4.41	26×21	12	楕円形				

Tab.5 調査II区遺物観察表1

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
60-47	SK1			壺		17.8	40.7	26.8	9.6	内面ハケのちナデ。外面ハケ。胴部2ヶ所へら描き沈線帯。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯。口縁部に直径2mmの円孔4個を1組として穿つ。口唇下に粘土帯貼付。平底(凹面)。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	灰色	
60-48	SK1			壺		16.1	38.7	26.6	9.2	内面ハケのちナデ。外面ハケのちナデ。胴部沈線帯・沈線帯と断面台形刻目突帯。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯。口縁部に直径2mmの円孔4個を1組として穿つ。平底(凹面)。	にぶい黄橙色	灰白色	灰色	
60-49	SK1			壺	口頸部	15.0	[12.2]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。口唇下押圧痕。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯(刻みは刺突で米粒状)。	にぶい黄橙色	にぶい橙色	灰黄色	
60-50	SK1			壺	口頸部	13.6	[12.3]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。口唇外断面三角形粘土帯・押圧痕。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。	にぶい橙色	灰黄褐色	にぶい橙色	
60-51	SK1			壺	頸部		[8.3]			内面ナデ・押圧痕。外面ハケ。頸部沈線帯・断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。	灰黄褐色	にぶい橙色	灰白色	
61-52	SK1			壺		19.9	45.7	35.4	10.8	内外面ハケのちナデ。胴部に2ヶ所のへら描き沈線帯・山形紋(貝殻原体?)。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。口縁部内面2条刻目突帯・直径3mmの円孔列。平底(凹面)。	にぶい黄色	にぶい黄色	黄灰色	
61-53	SK1			壺	口頸・胴部	15.8	35.0	28.0		内外面ハケのちナデ。胴部2ヶ所のへら描き沈線帯。頸部削出し刻目突帯(刻みは筋状)?	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	浅黄橙色	
61-54	SK1			壺		13.4	33.9	25.3	9.6	内外面ハケのちナデ。胴部2ヶ所のへら描き沈線帯。頸部下に1条断面台形刻目突帯(刻みは指頭押圧で爪痕を伴う)。平底(凹面)。	灰白色	灰白色	灰白色	
62-55	SK1			壺		16.2	45.0	34.0	11.0	内外面ハケのちナデ。胴部4ヶ所のへら描き沈線帯。頸部下に沈線帯の段部。口唇外断面三角形粘土帯・押圧痕。平底(凹面)。	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	浅黄橙色	
62-56	SK1			壺		14.6	38.2	27.8	9.0	内外面ハケのちナデ。口唇外断面三角形粘土帯・押圧痕。平底(凹面)。	橙色	にぶい黄褐色	にぶい橙色	
62-57	SK1			壺	口頸・胴部	19.8	[20.0]			内外面ハケのちナデ。胴部2ヶ所のへら描き沈線帯(断面V字)。頸部下沈線状段部。口唇外粘土帯・押圧痕。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黄灰色	
63-58	SK1			壺		13.8	39.0	28.6	10.0	内外面ハケのちナデ。口唇外断面三角形粘土帯・押圧痕。平底(凹面)。	にぶい橙色	にぶい黄褐色	褐灰色	
63-59	SK1			壺?	口縁部	22.8	[2.2]			内外面ハケ。口唇外断面三角形粘土帯・下位に接合痕と押圧痕。	灰白色	にぶい橙色	褐灰色	
63-60	SK1			壺	口頸部	15.4	[7.4]			内外面ハケ・煤付着。口唇横ナデ。口唇下断面三角形粘土帯・下位押圧痕。	灰褐色	灰褐色	黄灰色	
63-61	SK1			壺	口頸部	14.0	[5.9]			内面粗目ハケのちナデ。外面ハケ。口唇下に押圧痕・爪痕?	橙色	橙色	橙色	
63-62	SK1			壺	口頸部	15.4	[5.7]			内外面ハケのちナデ・煤付着。口唇下押圧痕。	浅黄橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	
63-63	SK1 SK22			壺	口頸部	19.1	[8.0]			内外面ハケのちナデ。口唇と口唇下押圧痕。器面に浅い凹凸。頸部下に段部。	浅黄橙色	にぶい黄褐色	にぶい褐色	
63-64	SK1			壺	口頸部	17.0	[9.7]			内外面ハケのちナデ。口唇に一部押圧痕。器面は凹凸。	灰黄色	灰黄褐色	褐灰色	
63-65	SK1			壺	口頸部	17.8	[8.2]			内面ナデ・押圧痕。外面ハケのちナデ・器面に浅い凹凸。	浅黄橙色	灰色	浅黄橙色	
63-66	SK1			壺	口頸部	17.0	[11.9]			内面ナデ。外面ハケ。口唇下断面蒲鋒形粘土帯・上位押圧痕・接合痕。	橙色	にぶい橙色	赤橙色	
64-67	SK1			壺	胴部		[28.4]	28.0	9.4	内面ナデ・押圧痕と爪痕。外面ハケ。3ヶ所へら描き沈線帯。平底(凹面)。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黄灰色	

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査Ⅱ区遺物観察表2

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
64-68	SK1			壺	胴・底部		[32.5]	27.0	9.3	内面ナデ。外面ハケのちナデ。4ヶ所の沈線帯・擬流水紋? (端部貝殻原体)・断面三角形刻目突帯 (刻みは押圧)。頸部下沈線状の段部。平底 (凹面)。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	灰色	
64-69	SK1			壺	胴・底部		[20.4]	28.2	9.8	内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底 (凹面)。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	灰白色	
64-70	SK1			壺	胴部		[32.7]	28.0	10.4	内面ナデ。外面ハケ。胴部2ヶ所へラ描き沈線帯。平底 (凹面)。	灰褐色	にぶい黄橙色	灰白色	
65-71	SK1			壺	頸部		[5.4]			内面ナデ。外面ハケ。	灰黄褐色	灰褐色	灰色	
65-72	SK1			壺	頸部		[6.2]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。頸部へラ描き沈線帯・断面台形刻目突帯。	橙色	橙色	橙色	
65-73	SK1			壺	頸部		[3.5]			内外面ナデ。頸部下沈線状の段部。	灰色	にぶい橙色	灰白色	
65-74	SK1			壺	頸部		[8.3]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	
65-75	SK1			壺			[5.3]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	にぶい橙色	
65-76	SK1			壺	頸部		[4.7]			内面ハケのちナデ。外面ナデ。頸部下沈線状の段部。	灰色	にぶい橙色	黄灰色	
65-77	SK1			壺	頸部		[7.9]			内外面ハケのちナデ。頸部下に弱い段部。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	にぶい橙色	
65-78	SK1			壺	底部		[5.9]	7.8		内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底 (凹面)。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	灰色	
65-79	SK1			壺	底部		[5.6]	8.4		内面ナデ。外面ハケのちヘラナデ。平底 (凹面)。	灰褐色	にぶい黄橙色	にぶい橙色	
65-80	SK1			壺	底部		[7.1]	8.4		内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底 (凹面)。	灰黄褐色	灰黄褐色	浅黄橙色	
65-81	SK1			壺	底部		[6.0]	17.2		内面ナデ。外面ハケ。平底。	灰色	灰色	にぶい黄橙色	
65-82	SK1			壺	胴部		[7.2]	11.6		内面ナデ・底部に砂粒 (4mm以下) を多く含む粘土が付着。外面ハケのちナデ・砂粒多含の粘土付着。平底。	黄灰色	灰黄褐色	黄灰色	
65-83	SK1			壺	頸部		[4.3]			内面ナデ。外面へラ描き沈線帯・刻目突帯 (刻みは刺突)。	橙色	にぶい橙色	橙色	
65-84	SK1			壺	胴部		[3.2]			内面ナデ。外面へラ描き沈線帯。	浅黄橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	
65-85	SK1			壺	胴部		[3.2]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。胴部へラ描き沈線帯 (断面V字)・断面台形刻目突帯 (刻みは押圧)。	灰黄褐色	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
65-86	SK1			壺	胴部		[4.1]			内面ナデ。外面ハケ。胴部へラ描き沈線帯・断面台形刻目突帯 (刻みは刺突)。	にぶい橙色	にぶい橙色	灰色	
66-87	SK1			壺	底部		[8.1]	12.6		内面ナデ。外面ハケ。底部は高台状。	淡橙色	淡橙色	浅黄橙色	
66-88	SK3 SK13 SD1			壺	胴部		[23.4]	24.4		内面ナデ。外面ハケ・ヘラミガキ・沈線帯・斜格子紋 (貝殻原体?)・削出し刻目突帯 (刻みは刺突の米粒状)・擬流水紋 (貝殻原体)。	にぶい黄橙色	にぶい橙色	橙色	
66-89	SK14			壺	口縁部	18.0	[7.0]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。	褐色	にぶい橙色	灰色	
66-90	SK15			壺	口頸部	15.8	[10.1]			内面ハケのちナデ。外面ハケ・ヘラミガキ。頸部に沈線帯・断面台形刻目突帯 (刻みは押圧)・爪痕?。	淡黄色	灰白色	浅黄橙色	
66-91	SK16			壺	底部		[5.3]	7.0		内面ナデ・ヘラ痕。外面ヘラミガキ。平底。	灰色	にぶい橙色	灰色	
66-92	SK17			壺	口頸部	14.4	[8.4]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。口唇下押圧痕・爪痕。	橙色	にぶい橙色	にぶい黄橙色	
66-93	SK18 SK19			壺	胴部		[36.0]	30.5		内面ナデ・爪痕。外面ハケ。胴部3ヶ所に沈線帯。頸部下に沈線状の段部。	黒色	にぶい褐色	灰色	

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査II区遺物観察表3

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
66 - 94	SK19			壺	口頸部	17.4	[13.5]			内面ナデ・押圧痕。外面ナデ。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯（刻みは刺突の米粒状）。口縁内面断面三角形突帯・爪痕・押圧痕・突帯間に直径4mmの円孔6~8個を1組として穿つ。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	橙色	
67 - 95	SK19			甕	口頸・ 胴部	18.2	[12.2]			内面ハケのちナデ。外面ハケのちヘラナデ・口唇下断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。頸部下4条刻み列（爪痕）？	にぶい 黄橙色	灰黄褐 色	にぶい 褐色	
67 - 96	SK19			甕	口頸部	21.0	[7.5]			内面ナデ？外面ナデ。口唇下断面三角形刻目突帯（刻みは押圧）下位接合痕。	灰色	灰黄色	灰色	器壁薄 砂粒多含
67 - 97	SK19			甕	口縁部	18.8	[5.5]			内面ナデ。外面ナデ・煤附着。口唇上面ハケ。口唇下押圧痕。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	橙色	
67 - 98	SK19			甕	底部			[4.3]	6.0	内面ナデ・煤附着。外面ハケのちヘラナデ・煤附着。平底。	灰褐色	褐灰色	明赤褐 色	
67 - 99	SK20			甕	口頸部	40.0	[24.0]			内面ナデ。外面ハケ・煤附着。口唇下断面三角形突帯・押圧痕・下位接合痕。頸部下2条の爪痕列。	灰黄色	灰黄色	灰色	
67 - 100	SK21			甕	口頸部	23.6	[22.6]	24.8		内面ナデ。外面ハケのちナデ。口唇下粘土帯・浅い押圧痕。頸部下5条ヘラ描き沈線。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	灰色	
68 - 101	SK22			壺	口頸・ 胴部	13.3	[20.9]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。胴部に2ヶ所ヘラ描き沈線帯。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯（刻みは押圧）。	黒褐色	浅黄橙 色	灰白色	
68 - 102	SK22			壺	口縁部	13.0	[5.4]			内面ナデ（浅い凹凸面）。外面ハケのちナデ。口頸部ヘラ描き沈線帯・断面台形刻目突帯（刻みは押圧）。口唇外粘土帯・押圧痕。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	灰白色	
68 - 103	SK22			壺	口頸部	15.0	[11.0]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。頸部ヘラ描き沈線帯・断面台形刻目突帯（刻みはヘラ押圧）。口唇外粘土帯・押圧痕・爪痕？	にぶい 黄橙色	浅黄橙 色	黄灰色	
68 - 104	SK22			壺	口頸部	17.1	[16.9]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。胴部ヘラ描き沈線帯。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯（刻みはヘラ押圧）。口縁部に直径4mmの円孔4個を1組として穿つ。	灰白色	灰黄色	浅黄橙 色	
68 - 105	SK22			壺	口縁部	15.0	[4.2]			内外面ハケのちナデ。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	灰白色	
68 - 106	SK22			壺	口頸部	16.0	[8.3]			内面粗目ハケのちナデ。外面ハケのちナデ。口唇下に断面三角形粘土帯・押圧痕・接合痕。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	浅黄橙 色	
68 - 107	SK22			壺	口縁部	18.1	[5.7]			内面ナデ。外面ナデ？口唇外粘土帯・押圧痕・接合痕。端面斜格子紋。	褐灰色	橙色	黄灰色	
68 - 108	SK22			壺	口縁部	18.0	[4.5]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。口唇外粘土帯・下位接合痕。端面斜格子紋。	灰白色	灰白色	褐灰色	
68 - 109	SK22			壺	口頸部	21.4	[9.4]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。頸部下櫛描き沈線。口唇外粘土帯・押圧痕・下位接合痕。端面筋状の刻み列。	灰白色	浅黄橙 色	褐灰色	
68 - 110	SK22			壺	口頸・ 胴部	14.4	[24.8]	27.3		内面ハケのちナデ。外面ハケ・煤附着。	にぶい 橙色	橙色	明褐灰 色	
69 - 111	SK22			壺	口頸部	18.8	[9.4]			内面ハケのちナデ・押圧痕。外面ハケのちナデ。口唇外粘土帯の接合面に押圧痕・ハケ目が残る。	にぶい 黄橙色	浅黄橙 色	灰色	
69 - 112	SK22			壺	口縁部	19.5	[5.3]			内外面ハケのちナデ・煤附着。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	浅黄橙 色	蓋？
69 - 113	SK22			壺	頸部		[8.4]			内面ハケのちナデ。外面細目ハケ。	橙色	橙色	橙色	
69 - 114	SK22			壺	底部		[4.7]		9.8	内面ナデ。外面ハケ。平底。	灰黄色	灰褐色	黄灰色	
69 - 115	SK22			壺	底部		[7.0]		8.0	内面ナデ。外面細目ハケ・ヘラミガキ・煤附着。平底（凹面）。	灰色	にぶい 橙色	灰色	
69 - 116	SK22			壺	底部		[11.0]		10.4	内面ナデ。外面ハケ・ケズリ？平底。	黒褐色	灰白色	褐灰色	

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査Ⅱ区遺物観察表4

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
69-117	SK22			壺	胴部		[6.5]			内外面ナデ。胴部沈線・楕円紋(擬流水紋?)。	黒褐色	浅黄橙色	にぶい 橙色	
69-118	SK22			甕	口頸・ 胴部	16.0	[14.0]	20.0		内面ナデ。外面頸部ナデ。頸部下3条断面三角形刻目小突帯・押圧痕。口唇外断面三角形刻目突帯(刻みは押圧)。	灰色	灰黄色	黄灰色	器壁薄
69-119	SK22			甕	口頸部	16.0	[9.9]			内面ナデ? 頸部下3条小突帯。口唇外断面三角形刻目突帯(刻みは押圧)。	灰白色	灰白色	灰色	器壁薄 砂粒多含
69-120	SK22			甕	口頸・ 胴部	13.6	[15.5]	15.6		内面ナデ。外面ナデ・弱いケズリ・煤付着。頸部下3条断面三角形刻目小突帯(刻みは刺突)。口唇外断面三角形刻目突帯(刻みは押圧)。	灰白色	にぶい 黄褐色	灰色	器壁薄
69-121	SK22			甕	口縁部	22.4	[4.4]			内外面ナデ。口唇下2条断面三角形刻目突帯(刻みは何れも押圧)。	灰色	灰黄色	灰色	器壁薄 砂粒多含
69-122	SK22			甕	口縁部	20.4	[3.5]			内外面ナデ。口唇下断面三角形突帯・押圧痕。	灰色	灰黄褐色	灰色	砂粒多含
70-123	SK22			甕	口頸部	29.3	[15.6]			内面ハケのちナデ。外面口頸部ナデ・胴部ハケ。頸部下2条ヘラ描き沈線。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	橙色	
70-124	SK22			甕	口頸部	29.0	[11.6]			内面ハケのちナデ・煤付着。外面ハケ・煤付着。頸部下6条ヘラ描き沈線。口唇外断面蒲鋒形突帯。	黄灰色	褐灰色	灰黄褐色	
70-125	SK22			甕		29.8	[41.5]	34.1		内面ハケのちナデ。外面口頸部ナデ・胴部ハケのちナデ・煤付着。頸部下3条断面三角形削出し小突帯。	明黄褐色	黒褐色	灰色	
70-126	SK22			甕	口頸部	10.0	[7.3]			内外面ナデ。頸部下削出し刻目突帯(刻みは押圧)。口唇外断面四角形刻目突帯(刻みは押圧)。	浅黄橙色	にぶい 橙色	浅黄褐色	器壁薄 砂粒多含
70-127	SK22			甕	底部		[7.2]	8.8		内面ナデ。外面ハケ。底部植物繊維痕。平底。	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色	緑黒色	
70-128	SK22			甕	底部		[7.3]	7.8		内面ナデ・煤付着。外面ハケ・煤付着。平底(凸面)。	黒褐色	褐灰色	褐灰色	
70-129	SK22			甕	底部		[5.9]	6.8		内面ナデ。外面ハケ・底部ヘラミガキ。底部は高台状。	浅黄色	黄灰色	にぶい 褐色	
70-130	SK22			蓋		23.6	14.3	摘み径 6.4		内面ハケのちナデ・煤付着。外面ハケのちナデ。摘み部分は粘土が張り出す。笠部分は緩く外反。	浅黄橙色	淡黄色	灰白色	
71-131	SK23			壺	口頸・ 胴部	18.4	[16.0]			内外面ハケのちナデ。口唇外断面三角形粘土帯・押圧痕・接合痕。	灰白色	灰白色	灰白色	
71-132	SK23			壺	口頸・ 胴部	16.6	[17.7]			内面ハケのちナデ。外面ハケのちミガキ。頸部下沈線状の段部。口唇外押圧痕。	浅黄橙色	浅黄褐色	灰白色	
71-133	SK23			壺	口縁部	16.0	[5.5]			内面ハケのちナデ。外面ナデ。口唇下断面三角形粘土帯・押圧痕・爪痕。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	褐灰色	
71-134	SK23			甕	口頸部	26.2	[13.1]			内面ハケのちナデ。外面口頸部ナデ・胴部ハケのちナデ。頸部下4条ヘラ描き沈線。口唇外断面三角形突帯・接合痕。	にぶい 橙色	黒褐色	褐灰色	
71-135	SK23			甕	口頸部	16.6	[7.2]			内面ナデ。外面ナデ・煤付着。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	器壁薄 砂粒多含
71-136	SK23			甕	胴部		[8.4]	23.0		内面ナデ。外面頸部ナデ・煤付着。頸部下3条断面三角形刻目突帯(刻みは刺突)・浮紋列。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	灰色	器壁薄
71-137	SK23			甕	底部		[3.1]	9.4		内外面ナデ。平底。	灰褐色	灰白色	灰白色	砂粒多含
71-138	SK23			甕	底部		[4.3]	6.4		内面ナデ。外面ナデ・押圧痕。平底(凹面)。	淡黄色	黒色	灰白色	器壁薄 砂粒多含
71-139	SK26			甕	口頸部	15.8	[6.7]			内外面ハケ。頸部下3条断面三角形小突帯・上下押圧痕。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	
71-140	SK26			甕	口頸部	16.0	[7.2]			内面ハケ・煤付着。外面粗目ハケ・煤付着。頸部下3条断面三角形小突帯・押圧痕・爪痕。口唇外断面三角形突帯・押圧痕。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	浅黄褐色	

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査II区遺物観察表5

fig-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
71-141	SK26 SK27 SD1			甕	胴・底部		[17.3]		8.8	内面ナデ。外面ケズリのちナデ又はハケ・ヘラミガキ。平底(凹面)。	にぶい 黄橙色	にぶい 褐色	橙色	
72-142	SK29		埋2	甕		18.0	[9.6]			内外面ハケのちナデ。頸部下に段部。口唇下粘土帯・接合痕。	灰色	にぶい 橙色	褐色	
72-143	SK30		埋2	壺	口頸部	12.0	[6.3]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。頸部下に段部。	黄灰色	にぶい 橙色	褐色	
72-144	SK31		埋2	壺	底部		[12.6]		9.0	内面ハケのちナデ。外面ハケのちヘラミガキ・ナデ。肉厚平底。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	にぶい 褐色	
72-145	SK31		埋2	壺	胴部		[18.9]	14.8	5.6	内外面ヘラミガキ。胴部櫛描き沈線帯・米粒状突起。平底(凹面)。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	灰白色	
72-146	SK31		埋2 埋3	甕	口頸・ 胴部	13.8	[14.0]	12.0		内面ハケのちナデ・ヘラミガキ・押圧痕。外面ハケのちナデ・煤付着。頸部下2条ヘラ描き沈線。	灰白色	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	
72-147	SK31		埋2	甕	底部		[5.4]		7.4	内面ナデ・煤付着。外面ハケのちナデ。平底(凹面)。	にぶい 褐色	褐色	にぶい 褐色	
72-148	SK33			甕	口頸部	36.4	[12.5]			内面ナデ。外面ナデ・煤付着。頸部下沈線状段部。口唇端面と内面に各々1条沈線。口唇外押圧痕。	褐色	灰褐色	浅黄橙 色	
72-149	SK47			甕	口縁部	22.0	[5.4]			内面ハケのちナデ。外面ハケ・煤付着。口唇下断面三角形突帯。	灰黄褐 色	褐色	褐色	
72-150	SK47			壺	胴・底部		[6.2]	12.0	7.2	内面ナデのちヘラミガキ。外面ハケのちヘラミガキ。平底(凹面)。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	褐色	
72-151	SK47			甕	底部		[5.9]		5.2	内面ナデ。外面ハケのちナデ・押圧痕。底部は高台状。	灰黄褐 色	にぶい 黄橙色	灰色	
72-152	SK48			甕	胴・底部		[12.4]		7.6	外面ナデ?押圧痕。平底。	灰白色	灰白色	褐色	
73-153	SK49			壺	胴部		[5.4]			内面ナデ。外面ハケ。櫛描き沈線紋(2条単位)。	にぶい 黄橙色	灰褐色	褐色	
73-154	SK49			壺	胴部		[6.8]			内面ナデ。櫛描き沈線紋(2条単位)。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	褐色	
73-155	SK49			壺	胴部		[13.2]			内面ナデ。外面ハケ。櫛描き沈線紋(2条単位)。	にぶい 黄橙色	にぶい 褐色	灰色	
73-156	SK49			壺	胴部		[12.8]			内面ナデ。外面ハケ・ヘラミガキ。櫛描き沈線紋(2条単位)。	にぶい 黄橙色	にぶい 褐色	褐色	
73-157	SK49			甕	口頸部	14.6	[11.0]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。頸部下2条摘み出し小突帯・押圧痕・爪痕?	褐色	明褐色	褐色	
73-158	SK49			甕	口頸部	15.9	[7.1]			内面ハケのちナデ・煤付着。外面ハケのちナデ。頸部下断面蒲葎形小突帯・爪痕?口唇外断面三角形突帯。	にぶい 褐色	にぶい 黄橙色	赤褐色	
73-159	SK50			紡錘車		全長 3.3	全幅 3.6	全厚 0.6		土器胴部破片利用。中央部に直径5mmの円孔を穿つ。端部研磨。	—	—	—	
73-160	SK51			甕	口頸・ 胴部	14.6	[16.0]			内外面ハケのちナデ・煤付着。頸部下6条沈線。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	にぶい 褐色	器壁薄
73-161	SK53			壺	底部		[5.8]		12.0	内面ナデ。外面ハケ?のちヘラミガキ。平底。	黄灰色	にぶい 褐色	黄灰色	
73-162	SK54			壺	胴部		[4.5]			内面ナデ。ヘラ描き沈線帯・斜格子紋(2条沈線)・断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。	黄灰色	灰白色	灰白色	
73-163	SK54			壺	胴部		[6.1]			内面ナデ。外面ハケ。ヘラ描き沈線帯・斜格子紋(2条沈線)。	灰色	にぶい 黄橙色	黄灰色	
73-164	SK54			壺	頸部		[5.1]			内外面ナデ。削出し刻目突帯(刻みは刺突の米粒状)・沈線・斜格子紋(貝殻原体?)。	灰黄褐 色	灰黄褐 色	灰黄褐 色	
73-165	SK54			甕	口頸部	19.0	[11.7]			内外面ヘラナデ。頸部下櫛描き波状紋・簾状紋。口唇端面斜格子紋。	暗灰色	灰褐色	にぶい 褐色	
74-166	SK54 SK66		埋5 他	壺	口頸部	20.0	[8.4]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。口頸部削出し刻目突帯?(刻みは刺突の米粒状)。口唇内外押圧に因る刻み。口縁内断面三角形突帯間直径2mmの円孔列。	黒色	にぶい 褐色	褐色	
74-167	SK54 SK66			壺	胴部		[8.6]			内面ナデ。胴部刻み列(米粒状の刺突)・櫛描き沈線帯・簾状紋・波状紋・斜格子紋。	浅黄橙 色	黄灰色	浅黄橙 色	

※ [] 内数字は残存値。埋は埋土の略。

Tab.5 調査Ⅱ区遺物観察表6

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
74 - 168	SK54 SK66			甕	底部		[8.0]		10.8	外面ナデ? 平底(凹面)。	浅黄橙色	褐灰色	にぶい黄橙色	器壁薄
74 - 169	SK54 SK66			甕	口頸・胴部	31.8	[28.0]	38.2		頸部下4条小突帯・押圧痕・筋状刻み・接合痕。口唇下断面長方形刻目突帯(刻みは押圧)。	浅黄橙色	浅黄橙色	灰白色	器壁薄 砂粒多含
74 - 170	SK54 SK67		埋5他	壺	口頸部	21.4	[12.8]			内面ハケのちナデ。外面ハケのちナデ。胴部削出し刻目突帯(刻みは刺突の米粒状)・ヘラ描き沈線。口頸部削出し刻目突帯(刻みは刺突の米粒状)。口縁部内断面三角形突帯間直径2mmの円孔列。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい褐色	にぶい褐色	灰白色	赤色顔料
74 - 171	SK54 SK67		埋5他	壺	口縁部	18.2	[3.2]			内面ハケ。外面ナデ。口唇端面押圧に因る刻み列。口縁部内断面三角形刻目突帯(刻みは押圧)間に直径2mmの円孔列接合痕・爪痕。	灰黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	
74 - 172	SK54 SK67			壺	口頸・胴部	8.8	[11.0]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。	黒色	にぶい黄橙色	橙色	
75 - 173	SK 55-2			壺	口頸部	15.0	[8.1]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。口頸部沈線帯・断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。口縁部に直径4mmの円孔6個を1組として穿つ。口唇外と端面に押圧痕。	灰黄色	灰黄色	褐灰色	
75 - 174	SK 55-2		埋11	壺	口頸部	18.0	[8.2]			内外面ハケのちナデ。口頸部に沈線帯・断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。口縁部直径3mmの円孔6個を1組として配置する。口唇端面押圧痕。	黒灰色	浅黄橙色	浅黄橙色	
75 - 175	SK56			甕	底部		[4.0]	7.0		内面ナデ。外面ヘラナデ。底部は高台状。	黒褐色	黒褐色	褐灰色	
75 - 176	SK57			壺	口頸部	13.0	[10.4]			内面ナデ・押圧痕。外面ハケ・押圧痕。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	浅黄橙色	
75 - 177	SK57			壺	胴部		[4.4]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。沈線・楕円紋?	灰黄色	にぶい黄褐色	にぶい橙色	
75 - 178	SK57			壺	胴部		[3.0]			内面ナデ。ヘラ描き沈線帯。	灰黄色	にぶい黄褐色	灰白色	
75 - 179	SK57			甕	底部		[3.4]	7.7		内面ナデ。外面ハケ。底部中央に直径10mmの円孔を焼成後穿つ。	にぶい黄褐色	灰黄褐色	灰色	砂粒多含
75 - 180	SK59			壺	胴部		[5.9]			内外面ハケのちナデ。削出し刻目突帯(刻みは刺突の米粒状)・区画沈線・斜格子紋。	褐灰色	褐灰色	にぶい黄褐色	
75 - 181	SK59			壺	口頸部	18.2	[10.4]			内外面ナデ。口頸部ヘラ描き沈線帯・断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。口縁部内断面蒲鉾形刻目突帯(刻みは押圧)間直径3mm円孔列。	にぶい黄色	にぶい黄褐色	灰白色	
75 - 182	SK59			壺	口縁部	16.4	[7.2]			内外面ヘラミガキ。口縁部内面直径3mm円孔4個を1組として穿つ。口唇下端押圧による刻み。	にぶい黄褐色	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
75 - 183	SK59			甕	口頸部	15.2	[6.7]			内面ヘラナデ。外面ナデ。頸部下直径2mmの竹管による刺突列・ヘラ描き沈線帯。	橙色	橙色	黄灰色	
75 - 184	SK59		埋3埋9	壺	胴・底部		[23.8]	28.0	10.2	内面ナデ。外面ハケ・底部圧痕。平底。	黄灰色	橙色	浅黄橙色	
75 - 185	SK59		埋7	甕		26.6	30.0	25.0	10.0	内面ナデ。外面ハケのちナデ・低位ヘラミガキ。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。平底(凹面)。	にぶい黄褐色	橙色	浅黄橙色	
76 - 186	SK59 SK65			壺	胴・底部		[14.6]		9.0	内面ナデ。外面ハケ・低位ケズリのちヘラミガキ。平底(凹面)。	褐色	赤褐色	浅黄橙色	
76 - 187	SK62			甕	口頸・胴部	12.2	[14.5]			内外面ハケのちナデ・煤付着。器面は凸凹。	にぶい褐色	にぶい褐色	灰黄褐色	
76 - 188	SK62			甕	底部		[6.5]	7.4		内面ナデ。外面ハケのちナデ・煤付着。平底。底部に外からの焼成後穿孔痕跡。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	褐灰色	
76 - 189	SK63 SK64			壺	口頸部	17.4	[7.5]			外面細目ハケ・押圧痕。口唇内外押圧痕。	褐色	褐色	にぶい褐色	
76 - 190	SK64			壺	底部		[5.8]	10.4		内面ヘラナデ。外面ヘラミガキ。平底(凹面)。	にぶい褐色	褐色	にぶい褐色	

※ [] 内数字は残存値。埋は埋土の略。

Tab.5 調査II区遺物観察表7

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
76-191	SK65			甕	口頸部	23.0	[17.8]	20.6		内外面ハケのちナデ・煤附着。頸部下3条ヘラ描き沈線。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	にぶい 橙色	
76-192	SK67			壺	底部		[6.3]		10.0	内外面ナデ。平底(凹面)。	灰白色	灰白色	灰色	
76-193	SK67			甕	口頸部	19.0	[7.3]			内面ハケのちナデ。外面細目ハケ?のちナデ・煤附着。口唇外断面三角形刻目突帯(刻みは押圧)。	灰白色	灰白色	灰色	器壁薄
76-194	SK67			甕	底部		[7.2]		10.0	内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	橙色	
76-195	SK67			甕	底部		[4.2]		6.0	内面ナデ・凹凸面・煤附着。外面ハケのちナデ・煤附着。平底(凹面)。	浅黄橙 色	にぶい 橙色	灰白色	
76-196	SK67			壺	胴部		[6.1]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。ヘラ描き沈線に因る楕円紋・区画沈線。	灰白色	浅黄橙 色	にぶい 橙色	
76-197	SK68			壺	口縁部	6.7	[4.1]			内面ハケのちナデ。外面ナデ。口頸部断面台形刻目突帯(刻みは押圧)。	にぶい 黄褐色	にぶい 橙色	灰色	
76-198	SK68 SK69			甕	口頸・ 胴部	14.6	[14.8]			内面ナデ。外面頸部ナデ。頸部下3条断面三角形刻目小突帯(刻みは刺突)。口唇外断面三角形刻目突帯(刻みは押圧)・接合痕。	灰色	褐灰色	灰色	器壁薄 砂粒多含
77-199	SK72			壺	口縁部	15.0	[5.5]			内面ハケのちナデ。外面ハケ?	にぶい 橙色	にぶい 橙色	橙色	
77-200	SK72			壺			[4.7]		16.5	内面ナデ。削出し刻目突帯(刻みは刺突の米粒状)。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	浅黄橙 色	
77-201	SK72			甕	口頸・ 胴部	19.7	[20.8]			内面ナデ。外面口頸部ナデ・煤附着。頸部下3条断面三角形小突帯・押圧痕・接合痕。口唇下断面三角形刻目突帯(刻みは押圧)。	にぶい 黄褐色	灰黄色	灰色	器壁薄 砂粒多含
77-202	SK72			甕	底部		[3.7]		6.8	内外面ナデ・煤附着。平底。	黒褐色	にぶい 褐色	灰褐色	砂粒多含
77-203	SK74			甕		19.7	29.8	19.4	6.6	内面ハケのちナデ・煤附着。外面ハケ・煤附着。頸部下3条ヘラ描き沈線。口唇外断面蒲鉾形突帯・接合痕。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	
77-204	SD1	O-1		甕	口頸部	20.0	[9.2]			内面ナデ。外面口頸部ナデ。頸部下3条断面三角形小突帯・押圧痕・上位接合痕。口唇外断面台形刻目突帯(刻みは押圧)・接合痕。	灰黄色	灰色	灰色	器壁薄 砂粒多含
77-205	P1			壺	口頸部	12.4	[6.2]			内外面ハケのちナデ・煤附着。口唇外断面三角形粘土帯。	にぶい 黄褐色	灰黄褐 色	灰黄褐 色	
77-206	P1			壺	口頸・ 胴部	17.0	[19.3]		21.9	内面ナデ・ヘラミガキ。外面ナデ・胴部ヘラミガキ。頸部下沈線状の段部。口唇内外端押圧による刻み。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	黄灰色	
77-207	P2			壺	胴部		[3.7]			内面ナデ。外面ハケ。胴部削出し刻目突帯を用いた楕円紋(刻みは刺突の米粒状)。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	にぶい 橙色	
77-208	P65			甕	口頸部	18.0	[10.0]			頸部下3条断面三角形小突帯・押圧痕。口唇外断面垂下三角形突帯・押圧痕・接合痕。	灰黄色	黄灰色	灰白色	
77-209	P88			甕	底部		[4.2]		6.4	内面ナデ。外面ナデ・凹凸面。平底。	褐灰色	にぶい 黄褐色	灰色	器壁薄 砂粒多含
79-210		Q-1		壺	口頸部	19.4	[7.2]			内外面ハケ。頸部飾描き簾状紋?口縁部内3条細沈線・筋状刻み。口唇内押圧刻み。	浅黄橙 色	浅黄橙 色	浅黄橙 色	
79-211		N-3	Y	壺	口頸胴	12.8	[21.6]		22.1	内面ハケのちナデ。外面ハケ。口唇外断面三角形粘土帯	浅黄橙 色	にぶい 黄褐色	灰色	
79-212		P-1	Y	壺		22.1	43.6	29.9	13.0	内面ハケのちナデ。外面ハケのちナデ・ミガキ。胴部2条の断続的な断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。口唇内外端押圧に因る刻み・外押圧痕。	灰褐色	にぶい 褐色	黄褐色	
79-213		N-3	Y	壺	口頸部	14.4	[6.2]			内面ナデ。外面ハケのちナデ・押圧痕。頸部下沈線状段部・刻み列。口唇端面と内に沈線。	橙色	にぶい 橙色	橙色	
79-214		N-3		壺	口頸部	12.8	[5.5]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。口唇端面と外に押圧痕。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査Ⅱ区遺物観察表8

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
79-215		N-3	Y3	壺	口頸部	14.0	[7.6]			内外面ハケのちナデ。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	橙色	
79-216		O-7		壺	口頸部	14.2	[8.8]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。	にぶい 褐色	橙色	浅黄橙 色	
80-217		O-4	Y	壺	口縁部	21.8	[5.9]			内面ナデ。外面ナデ。口縁部外粘土 帯・押圧痕・接合痕。口唇端面斜格子紋。	にぶい 橙色	橙色	灰色	
80-218		D-4	Y	壺	口縁部	26.0	[6.2]			内面ナデ?外面ハケのちナデ。口縁 部外粘土帯・押圧痕・接合痕。口唇 端面斜格子紋。	にぶい 黄橙色	橙色	褐灰色	
80-219		O-3		壺	口頸部	20.0	[5.6]			内外面ナデ。頸部襷描き籬状紋・波 状紋。口唇内外押圧に因る刻み・押 圧痕。	灰黄褐 色	灰黄褐 色	にぶい 橙色	
80-220		N-3	Y3	壺	胴部		[9.8]	11.0		内面ナデ。外面ハケのちナデ。胴部 沈線帯・断面三角形突帯・米粒状刻 み列。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	褐灰色	
80-221		N-7	Y	壺	底部		[5.7]	8.6		内外面ヘラミガキ。平底(凹面)。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	褐灰色	
80-222		P-1	Y	壺	底部		[3.6]	8.0		内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底。 底部は多角形を成す。	灰白色	灰白色	褐灰色	
80-223		N-5	Y	壺	底部		[4.7]	11.2		内面ナデ。外面ヘラミガキ。平底(凹 面)。	灰色	浅黄色	にぶい 黄橙色	
80-224		O-4	Y	壺	底部		[5.6]	12.0		内面ナデ。外面粗目ハケのちヘラミ ガキ。平底。	黒色	灰白色	灰色	
80-225		N-8	Y	壺	底部		[7.8]	8.2		内面ナデ。外面ハケ。平底。	黒色	灰黄色	褐灰色	
80-226		P-8		壺	底部		[7.6]	8.0		内面ナデ・粘土付着。外面ヘラミガ キ?平底(凹面)。	にぶい 赤褐色	明赤褐 色	にぶい 橙色	
80-227		P-1		壺	底部		[5.4]	7.6		内面ナデ。外面ヘラナデ・底部弱い ケズリ。平底(凹面)。	褐灰色	褐灰色	灰白色	
80-228		O-8		壺	底部		[6.7]	9.2		内面ナデ・押圧痕。外面ハケ。平底。	灰白色	灰白色	灰色	
80-229		O-5	Y	壺	胴・底部		[11.1]	6.6		内面ナデ。外面ヘラミガキ。平底。	黄褐色	にぶい 黄橙色	褐灰色	
80-230		N-4	Y	壺	胴・底部		[11.7]	8.4		内面ナデ。外面ハケのちヘラミガキ・ 煤付着。平底(凹面)。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	褐灰色	
81-231		N-3	Y	壺	胴・底部		[10.3]	9.2		内面ナデ・ヘラ圧痕。外面ハケのち ヘラミガキ。平底(凹面)。	浅黄色	浅黄色	黄灰色	
81-232		O-7	Y	壺	底部		[6.8]	8.3		内面ナデ。外面ハケ。平底。	黒褐色	にぶい 黄橙色	黄灰色	
81-233		P-1 Q-1		壺	胴・底部		[12.2]	8.0		内面ナデ。外面ハケのちヘラミガキ・ 底部ケズリ。平底。	灰白色	にぶい 黄橙色	灰白色	
81-234		N-3	Y3 Y	壺	胴・底部		[17.8]	9.0		内面ナデ・粘土付着。外面ハケのち ヘラミガキ・ナデ。平底。	浅黄橙 色	にぶい 橙色	灰色	
81-235		N-8		壺	胴・底部		[15.6]	14.4		内面ナデ。外面ハケのちヘラミガキ。 平底。	にぶい 黄橙色	にぶい 赤褐色	浅黄橙 色	
81-236		P-8	Y	壺	胴部		[3.3]			胴部沈線帯・縦位の長さ1.8cm、高さ 0.6cm断面三角形鱗状突帯(横方向に 2ヶ所直径2mmの円孔)。	浅黄橙 色	浅黄橙 色	浅黄橙 色	
81-237		L-4	Y	壺	胴部		[2.6]			内面ナデ。胴部重弧紋(2条沈線)・ 区画沈線(2条沈線)。	灰白色	灰黄褐 色	褐灰色	
81-238		K-3	Y	壺	胴部		[3.9]			内面ナデ。胴部重弧紋(4条沈線)・ 区画沈線。	灰色	灰褐色	灰色	
81-239		P-8	Y	壺	胴部		[3.6]			内面ナデ。胴部楕円紋?(半截竹 管?)・区画沈線(2条沈線)。	にぶい 黄褐色	褐灰色	褐灰色	
81-240		Q-1	Y	壺	胴部		[6.1]			内面ナデ。外面ミガキ。胴部襷描き 沈線帯。	にぶい 黄橙色	灰白色	灰白色	
81-241		L-1		壺	胴部		[5.4]			内面ナデ。外面ハケ。胴部重弧紋(貝 殻原体?)・区画沈線。	黄灰色	にぶい 黄橙色	灰白色	
81-242		P-7	Y	壺	胴部		[3.5]			内面ナデ・押圧痕・爪痕。外面ハケ。 胴部重弧紋?(貝殻原体?)・区画 沈線。	灰色	浅黄橙 色	灰白色	赤色顔料
81-243		Q-2	Y	壺	胴部		[2.6]			内面ナデ。外面ハケ。胴部襷描き波状紋。 断面蒲公英刻目突帯(縦方向に直径2mm の円孔を穿つ。)・押圧痕・爪痕・接合痕。	褐灰色	にぶい 黄橙色	褐灰色	

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査II区遺物観察表9

fig-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
81-244		Q-2	Y	壺	胴部		[4.9]			内面ナデ。外面ハケ。胴部襷描き沈線帯・波状紋・断面三角形突帯(縦方向に直径2mmの円孔を穿つ。)、接合痕。	褐灰色	灰黄褐色	にぶい黄橙色	
82-245		P-8	Y	甕	口頸・胴部	28.0	[11.7]			内面ハケのちナデ・押圧痕。外面ハケのちナデ。頸部下1条沈線・上下爪痕?列。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい赤褐色	灰褐色	にぶい橙色	
82-246		O-5	Y	甕	口頸部	27.0	[12.8]			内外面ハケのちナデ。口唇外断面三角形突帯?・押圧痕。	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	灰黄色	
82-247		L-2	Y	甕	口頸部	23.2	[21.6]	22.3		内面ハケのちナデ・煤付着。外面ハケ・煤付着。口縁部5条ヘラ描き沈線。	にぶい褐色	灰白色	黄灰色	
82-248		P-1		甕	口頸部	22.0	[8.1]			内外面ナデ?押圧痕。口唇内押圧に因る刻み。	灰褐色	灰褐色	灰白色	
82-249		N-3	Y3 Y	甕	口頸・胴部	18.0	[9.5]	18.4		内面ハケのちナデ。外面口縁部ナデ・胴部ハケ?・煤付着。頸部下断面三角形小突帯・押圧痕。口唇下断面三角形突帯・押圧痕。	橙色	橙色	にぶい橙色	器壁薄
82-250		O-0 P-1	Y2	甕	口頸・胴部	19.0	[12.4]	19.1		内面ナデ。外面口頸部ナデ。頸部下3条断面三角形小突帯・押圧痕・接合痕。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	灰赤色	器壁薄 砂粒多含
82-251		N-3	Y	甕	口頸部	18.0	[9.0]			内外面ナデ。頸部下3条断面三角形刻目突帯(刻みは刺突)・接合痕。口唇外断面台形刻目突帯(刻みは押圧)・接合痕。	灰黄色	灰黄色	褐灰色	器壁薄
82-252		P-1	Y2	甕	口頸部	18.6	[7.4]			内外面ナデ。頸部下断面三角形小突帯・押圧痕。頸部縦位の断面三角形小突帯・ナデ痕。口縁部2条断面三角形小突帯・押圧痕。口唇外端押圧に因る刻み。	黒色	黒色	黄灰色	器壁薄
82-253		N-3	Y	甕	口頸・胴部	17.8	[14.9]	21.0		内面ナデ。外面口頸部ナデ。頸部下3条断面三角形小突帯・押圧痕。口唇外断面台形刻目突帯(刻みは押圧)・押圧痕・爪痕。	にぶい褐色	にぶい褐色	灰色	器壁薄 砂粒多含
83-254		D-3	Y	甕	口頸部	19.0	[5.8]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。	オリーブ黒色	褐色	灰黄色	
83-255		N-3	Y	甕	口縁部	18.0	[5.3]			内面ナデ・押圧痕。外面ナデ。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黄灰色	
83-256		P-1	Y2	甕	口頸・胴部	13.6	[15.2]	15.4		内面ナデ・押圧痕・煤付着。外面ナデ・煤付着。口唇外断面三角形突帯・押圧痕。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	器壁薄 砂粒多含
83-257		P-6	Y	甕	底部		[1.7]	7.6		内面ナデ・粘土が突出する。外面ナデ。平底。	灰色	灰色	灰色	器壁薄 砂粒多含
83-258		P-1	Y2	甕	底部		[1.8]	5.2		内外面ナデ。平底。	浅黄橙色	にぶい黄褐色	浅黄橙色	器壁薄 砂粒多含
83-259		P-1	Y	甕	底部		[4.7]	6.0		内面ナデ。外面ナデ・煤付着・底部圧痕。平底。	灰黄褐色	灰黄褐色	にぶい橙色	器壁薄 砂粒多含
83-260		N-3	Y3	甕	底部		[4.0]	7.7		内外面ナデ。器面に亀裂が多く入る。平底。	灰白色	灰白色	灰白色	器壁薄
83-261		N-3	Y Y3	甕	底部		[7.2]	6.2		内面ナデ。外面細目ハケ・煤付着。平底(凹面)。	灰白色	にぶい黄褐色	灰白色	
83-262		O-6	Y	甕	底部		[2.6]	10.2		内面ナデ?外面ナデ・押圧痕。平底。	にぶい褐色	灰白色	灰白色	器壁薄 砂粒多含
83-263		O-1		甕	底部		[4.4]	5.2		内面ナデ。外面ハケ?底部は狭い平底。	灰白色	灰白色	褐灰色	
83-264		O-3	Y	甕	底部		[4.0]	7.4		内面ナデ・押圧痕。外面ハケ?平底。	明赤褐色	明赤褐色	暗灰色	器壁薄 砂粒多含
83-265		O-2	Y2	甕	底部		[3.7]	8.8		内面ナデ。外面ナデ・押圧痕。平底。外端へ張り出す。	灰褐色	灰褐色	灰色	器壁薄 砂粒多含
83-266		O-6		甕	底部		[4.0]	6.6		内面ナデ・煤付着。外面ハケのちナデ・煤付着。平底。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい褐色	
83-267		O-3	Y	甕	胴・底部		[14.4]	10.6		内外面ナデ。底部外木の葉圧痕。平底。	灰白色	灰白色	灰白色	器壁薄 砂粒多含

※ []内数字は残存値。

Tab. 5 調査Ⅱ区遺物観察表 10

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
83-268		Q-1	Y	甕	胴・底部		[15.6]		8.6	内面ナデ。外面ナデ・ケズリ・帯状に煤附着。平底(凹面)。	灰色	褐灰色	灰白色	器壁薄 砂粒多含
83-269				紡錘車		全長 2.9	全幅 3.1	全厚 0.5		土器体部破片使用。中央に穿孔途中?の窪み。端部調整痕。	—	—	—	砂粒多含
83-270				紡錘車		全長 3.1	全幅 3.1	全厚 0.6		土器体部破片使用。中央に直径2.5mmの円孔を穿つ。端部成形痕。	—	—	—	砂粒多含
84-271		J-6		鉢		10.6	5.6		2.2	内面細目ハケのちナデ・煤附着。外面タタキのちナデ・煤附着。底部は狭い平底。	にぶい 橙色	灰褐色	褐灰色	
84-272		N-7		高杯	脚部		[8.4]			内面ハケのちナデ。外面ハケ?中実。透かしは直径12mmの円孔を外面側より穿つ。	浅黄橙 色	浅黄橙 色	にぶい 橙色	
87-273	SR201			壺	口縁部	20.6	[7.8]			内面ハケのちナデ。外面ナデ。口縁部二重口縁状に短く内傾する・波状紋。	灰白色	にぶい 黄橙色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
87-274	SR201	J-3	G	壺	口縁部	19.0	[4.0]			内面ナデ。外面ハケのちナデ。口唇外押圧痕。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	褐灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
87-275	SR201			壺		10.2	18.5	14.0		内面ハケのちナデ・煤附着。外面ハケ・ヘラミガキ・ヘラナデ?・煤附着。丸底。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	古墳前期
87-276	SR201	K-5 L-5	G	壺		12.3	11.5	11.6		内面ナデ。外面タタキのちナデ。丸底。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	明褐灰 色	古墳前期
87-277	SR201	L-4	G	甕	口縁部	17.0	[4.7]			内外面ナデ・煤附着。	橙色	にぶい 黄橙色	浅黄橙 色	古墳前期
87-278	SR201		P	壺	胴・底部		[5.3]	8.2		内面ナデ。外面タタキのちナデ。丸底。	暗灰黄 色	にぶい 黄褐色	灰色	古墳前期
87-279	SR201	L-4	G	壺	底部		[4.5]		8.0	内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底。	黒褐色	黒褐色	褐灰色	弥生前期末 ~中期
87-280	SR201		G	壺	底部		[6.7]		13.8	内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底(凹面)。	暗灰色	灰色	暗灰色	弥生前期末 ~中期
87-281	SR201	L-4	G	壺	底部		[3.5]		10.2	内面ナデ。外面ナデ?平底(凹面)。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	暗灰色	弥生前期末 ~中期
87-282	SR201			壺	底部		[9.6]		9.2	内面ナデ。外面ハケのちヘラミガキ。平底。	灰色	浅黄橙 色	灰色	弥生前期末 ~中期
87-283	SR201	K-5	G	壺	底部		[4.7]		10.2	内面ナデ。外面細目ハケのちナデ?。平底(凹面)。	にぶい 黄橙色	褐色	明褐灰 色	弥生前期末 ~中期
87-284	SR201	K-6	G	壺	底部		[5.4]		8.2	内外面ナデ。平底(凹面)。	灰色	浅黄橙 色	灰色	弥生前期末 ~中期
87-285	SR201	K-5	G	壺	底部		[6.8]		8.0	内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底(凹面)。	にぶい 褐色	黄灰色	橙色	弥生前期末 ~中期
87-286	SR201	J-3	G	壺	底部		[2.6]		6.0	内外面ナデ。平底(凹面)。	灰色	灰白色	灰白色	弥生前期末 ~中期
87-287	SR201	N-5	G	壺	底部		[3.5]		15.4	内面ナデ。外面ナデ?平底(凹面)。底部外に幅3mm、深さ1mmの溝状圧痕が残る。	灰色	にぶい 橙色	灰色	弥生前期末 ~中期
87-288	SR201	M-4		壺?	底部		[2.3]		9.0	内外面ナデ。底部外縁目圧痕。平底。	褐灰色	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	弥生後期?
87-289	SR201		G	壺	底部		[5.1]		8.8	内面ナデ・底部は凸面をなす。外面ナデ?平底(凹面)。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生後期?
87-290	SR201	K-6	G	壺	底部		[4.5]		8.0	内外面ハケのちナデ。平底。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	灰色	弥生後期?
88-291	SR201		G	甕	口頸・胴部	13.8	[13.7]	19.0		内面ナデ・煤附着。外面口頸部ナデ・胴部弱いケズリ?頸部下3条断面三角形小突帯・押圧痕・接合痕。口唇外断面三角形突帯・押圧痕・接合痕。	灰白色	灰黄色	灰色	弥生前期末 ~中期
88-292	SR201	L-7	G	甕	口頸部	16.2	[6.7]			内外面ハケのちナデ。頸部3条ヘラ描き沈線。	灰褐色	にぶい 橙色	灰色	弥生前期末 ~中期
88-293	SR201	L-5	G	甕	口縁部	18.8	[5.0]			内外面ハケのちナデ。	橙色	橙色	橙色	弥生前期末 ~中期
88-294	SR201		G	甕	口頸・胴部	16.8	[15.3]	18.3		内面ハケのちナデ。外面タタキのちハケ・ナデ・煤附着。頸部屈曲は急。	にぶい 橙色	橙色	橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
88-295	SR201	J-4		甕	口頸・胴部	14.0	[19.4]			内面ヘラケズリのちナデ・押圧痕・煤附着。外面ヘラナデ・煤附着。	にぶい 褐色	褐色	にぶい 橙色	古墳前期

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査II区遺物観察表 11

fig-No.	地 点		層	器 種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
88-296	SR201			甕	口頸・胴部	14.8	[7.0]			内面ヘラケズリのちナデ。外面ナデ・煤付着。頸部屈曲は急。口縁部は短く内傾して立ち上がる。	にぶい 橙色	浅黄橙 色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
88-297	SR201	K-4	P	甕		11.2	[10.4]	11.4		内面ケズリのちナデ・押圧痕・煤付着。外面タタキのちナデ・煤付着。丸底。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	にぶい 橙色	古墳前期
88-298	SR201	K-5	P	甕		11.2	[14.0]	13.4		内面ナデ・底部に炭化物や煤が付着。外面ナデ・煤付着。胴部球形。丸底。	橙色	にぶい 橙色	灰色	古墳前期
88-299	SR201	K-6	G	甕	口頸部	13.8	[5.8]			内面ハケのちナデ。外面タタキのちハケ。頸部屈曲はやや緩い。	にぶい 褐色	にぶい 橙色	にぶい 褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
88-300	SR201	K-8	P	甕	口頸部	19.0	[5.8]			内面ハケのちナデ。外面タタキのちハケ・ナデ。頸部屈曲は急。	にぶい 褐色	浅黄橙 色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
88-301	SR201	L-4	G	甕	口頸部	15.0	[5.2]			内面ハケのちナデ。外面タタキのちハケ。頸部屈曲は急。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	浅黄橙 色	弥生後期末 ~古墳初頭
88-302	SR201	L-4	G	甕	口頸部	17.6	[6.3]			内面ハケのちナデ。外面タタキ。頸部屈曲は急。	灰白色	灰白色	灰白色	弥生後期末 ~古墳初頭
88-303	SR201	L-7		甕	口頸部	14.0	[5.7]			内面ハケのちナデ。外面タタキ・ハケのちナデ・煤付着。頸部屈曲はやや急。	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
89-304	SR201	L-4	G	甕	口頸部	11.6	[3.8]			内外面ハケのちナデ。口唇外押圧痕。	褐色	褐色	褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
89-305	SR201	L-4	G	甕	口頸部	16.0	[5.7]			内面ハケのちナデ。外面ハケのちナデ・煤付着。	灰黄褐 色	灰黄褐 色	褐色	古墳前期
89-306	SR201		G	甕	口頸部	15.0	[5.8]			内面ハケのちナデ。外面タタキのちナデ・煤付着。	褐色	褐色	褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
89-307	SR201	L-4	G	甕	底部		[4.3]	5.0		内面ナデ・ヘラ痕。外面ナデ。平底(凹面)。	浅黄色	浅黄色	浅黄色	弥生前期末 ~中期
89-308	SR201		G	甕	底部		[6.1]	6.6		内外面ナデ。平底(凹面)。	灰色	にぶい 褐色	灰色	弥生前期末 ~中期
89-309	SR201		G	甕	底部		[5.3]	6.0		内面ナデ。外面ナデ・押圧痕。平底。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	褐色	弥生前期末 ~中期
89-310	SR201	J-2	P	甕	底部		[7.6]	10.6		内面ナデ・押圧痕。外面ハケ。平底。	灰黄褐 色	にぶい 黄褐色	黄灰色	弥生前期末 ~中期
89-311	SR201	K-5	G	甕	底部		[3.9]	10.4		内面ナデ・押圧痕・煤付着。外面ハケのちナデ。平底。	灰色	にぶい 褐色	灰色	弥生前期末 ~中期
89-312	SR201	J-6	G	甕	底部		[4.4]	10.9		内面ナデ。外面ハケのちナデ。平底。	黄灰色	黄灰色	灰色	弥生前期末 ~中期
89-313	SR201		G	甕	底部		[4.0]	9.8		内面ナデ。外面ハケのちナデ。底部は高台状?(中央部も接地する)。	灰色	灰色	灰色	弥生前期末 ~中期
89-314	SR201	L-5	G	甕	底部		[4.6]	6.6		内面ナデ。外面ハケ・煤付着。平底。	灰色	灰黄褐 色	灰色	弥生前期末 ~中期
89-315	SR201	J-4	G	甕	底部		[5.0]	6.0		内面ナデ。外面ハケ。底部は高台状。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	灰色	弥生後期?
90-316	SR201	K-5	G	鉢		10.6	5.0	2.8		内面ハケのちナデ。外面タタキのちナデ。やや突出した狭い平底。碗形。	褐色	褐色	褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-317	SR201			鉢	底部		[3.1]			内面ハケ。外面ナデ。丸底。	褐色	褐色	にぶい 褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-318	SR201	K-6	G	鉢	底部		[2.4]	3.0		内面ハケ。外面タタキ。狭い平底。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	浅黄橙 色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-319	SR201	K-5	G	鉢		11.2	6.0	2.4		内面ナデ。外面タタキのちハケ。狭い平底。碗形。	灰黄色	にぶい 黄褐色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-320	SR201		G	鉢	底部		[4.4]			内面ハケのちナデ。外面タタキ。丸底。	褐色	にぶい 褐色	浅黄橙 色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-321	SR201	L-4	G	台付鉢	接合部		[4.3]			内面ヘラミガキ。外面ナデ・押圧痕。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-322	SR201		G	鉢		16.8	7.5			内面ハケのちナデ・押圧痕。外面タタキのちナデ・煤付着。丸底。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	にぶい 褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-323	SR201	J-6		鉢	体・底部		[6.6]	4.6		内面ハケのちナデ。外面ハケのちナデ・ヘラ痕・押圧痕。突出した平底。	褐色	褐色	褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
90-324	SR201	K-5	G	鉢		16.6	7.6	6.0		内面ナデ。外面ナデのちヘラミガキ。段部は内面で顕著。平底。	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	褐色	古墳前期
90-325	SR201			手捏ね		4.6	3.6			内外面ナデ・押圧痕。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色	古墳前期?
90-326	SR201		G	手捏ね		5.0	5.6	6.8	2.0	内面ナデ・押圧痕。外面ナデ?狭い平底。	明褐色	にぶい 黄褐色	浅黄橙 色	古墳前期?

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査Ⅱ区遺物観察表 12

fig. - No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
90 - 327	SR201		G	手捏ね		5.6	5.5			内面ナデ。外面タタキのちナデ。	にぶい 黄橙色	灰白色	灰白色	古墳前期?
90 - 328	SR201			土玉		全長 2.3	全幅 2.4	全厚 2.2	重量(g) 10.2	中央部に直径5mmの円孔を穿つ。	—	—	—	
90 - 329	SR201			高杯	脚部		[7.7]			内面ナデ・ハケ・絞り目。外面ハケのちナデ。中央に5~7mmの楕円孔を上から穿つ。	にぶい 橙色	橙色	にぶい 橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
90 - 330	SR201	K-6	G	高杯	脚部		[6.4]			内面ナデ。外面ハケ。中実。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	浅黄橙 色	弥生後期末 ~古墳初頭
90 - 331	SR201			高杯	脚部		[7.4]			内面ナデ。外面ヘラナデ。中実。円形透かし孔。	にぶい 橙色	橙色	橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
90 - 332	SR201			高杯	脚部		[5.6]			内面ヘラケズリ・ナデ。外面ナデ。中実。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	黄灰色	古墳前期?
90 - 333	SR201	M-6	G	高杯	脚部		[6.2]		13.4	内面ナデ・ヘラケズリのちナデ。外面ナデ。中実。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	にぶい 橙色	古墳前期?
90 - 334	SR201	C-7	G	高杯	脚部		[4.8]			内面ナデ・ハケ。外面ハケのちナデ。中実。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	にぶい 褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
90 - 335	SR201		P	高杯	脚部		[6.4]			内面ナデ・ヘラ圧痕。外面ナデ。中実。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	にぶい 褐色	古墳前期?
91 - 336	SR201	M-7		坏身	体部		[3.0]	受け部径 12.6		内面回転ナデ。外面上位回転ナデ・下位回転ヘラケズリ。ロクロは左回転。内面酸化気味?	にぶい 褐色	灰色	にぶい 褐色	須恵器
91 - 337	SR201	M-8	P	甕	胴部		[25.1]	27.7		内面同心円紋。外面格子状のタタキ・カキ目。	灰色	灰色	灰色	須恵器

※ [] 内数字は残存値。

Tab.5 調査II区遺物観察表 13

fig-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量				特 徴	備 考
	遺構	グリット				全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)		
92-338		N-3	Y	石鎌		2.61	1.67	0.38	1.5	凹基。両側辺は外側に膨らむ。裏面中央は凹面。サヌカイト。	
92-339		N-6	Y	石鎌		2.39	1.90	0.37	1.0	凹基。基部右端欠損。両側辺はやや抉れる。サヌカイト。	
92-340	SK33			石鎌		2.97	1.85	0.46	1.7	凹基。先端欠損。側辺は基部で内湾する。サヌカイト。	
92-341		O-5	Y	石鎌		3.09	1.20	0.25	0.8	凹基。肉薄。両側辺は直線的。サヌカイト。	
92-342		O-7	Y	石鎌		3.37	1.49	0.42	1.6	凹基で抉りは浅い。基部右側端部欠損。肉厚で縦長。両側辺は直線的。サヌカイト。	
92-343		N-3	Y	石鎌		2.80	1.85	0.45	1.2	凹基。両側辺は外側にやや膨らむ。サヌカイト。	
92-344	SK18			石包丁		7.0	4.0	0.7	44.5	扁平台形。穿孔部より破断後紐孔を新たに穿ち使用する。刃部は片刃。孔は両面より擦切る。緑色片岩。	
92-345	SK1			石包丁		9.5	4.9	0.9	48.5	紐孔2穴は円形で開口部(10~12mm)、貫通部(4mm)を測り、敲打に因る。刃部は両刃。	
92-346		P-7		石包丁		10.8	3.8	0.8	50.0	未製品。中央に2ヶ所敲打による窪み。直刃背湾形。一部自然面が残る。	
92-347	SR201	K-5		石包丁		10.0	5.5	1.4	96.5	扁平片刃。破損品の再利用。	
93-348	SK27			石斧		7.0	3.6	1.0	38.5	扁平片刃。両面共丁寧な研磨。塩基性岩。	
93-349	SK28			石斧		7.3	4.0	1.0	61.0	扁平。両刃。丁寧な研磨。蛇紋岩?	
93-350		Q-7	Y2	石斧		6.5	5.4	2.1	107.1	両刃。伐採斧。敲打痕が多く残る。緑泥片岩。	
93-351	SK 55-2			石斧		7.5	6.5	3.6	260.0	扁平片刃?破損品の再利用?塩基性岩。	
93-352	SD2			石斧		6.7	5.3	1.0	53.5	鑿状工具?両端部に加工(両刃・研磨痕)。	
93-353	SK49			石斧		7.5	1.8	0.7	20.2	中央に筋状擦過痕。自然礫。	
93-354	SK23			石斧		7.4	1.8	0.8	16.6	鑿状工具?端部に加工(両刃)。自然礫。	
93-355		O-6		石錐		9.3	1.6	1.1	30.0	両端部を使用。自然礫。	
93-356	P80			砥石		11.3	8.2	2.7	460.0	使用面は1面。裏面には敲打痕が残る。	

fig-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	備 考
	遺構	グリット				全長	全幅	全厚	重量		
94-357	SR201	K-3		扉材		95.8	26.5	3.8		削出しによる把手部。	
94-358	SR201			鋏		21.0	22.0	3.9	柄挿入孔径 3.7	平鋏。柄の装着部分は厚く削り出す。	
94-359	SR201			横鋸		21.4	12.9	9.6		柄基部は欠損。	
94-360	SR201			部材		54.3	3.3	1.5		機具部品?側辺は楔状に加工。端部(装填部)は断面方形に加工。	
94-361	SR201	K-8		梯子		119.1	8.8	3.1		足掛部の厚さは約7.0cm、上位は垂直、下位は緩く削り出される。	

第3節 III区

〔1〕 IIIJ区

(1) 調査IIIJ区の概要

IIIJ区はIII区の北側に設定された調査区であり、東西20m、南北14mの規模を持つ。本掘削前に設定したトレンチで二面の縄文土器包含層が確認されたことから、トレンチを東西方向に拡張する形で設定した調査区である。堆積状況は東壁セクション (Fig.97) 北部に示されている。調査区内は比較的整然とした堆積状況で、堆積層は主にシルトによって構成されている。調査時の下層確認によって、規模の大きな円礫で構成される礫層が検出されている。また、縄文後期遺物包含層の直下に存在した無遺物層 (淡青灰色粘土) は、南側の古墳時代の流路部分で標高を下げ始めており、上述の基底的な礫層に対応しての緩やかな降下と見ることもできる。このことから、調査区域は扇状地地形の影響下、微地形的には高位に属する部分と考えられ、後世における流路の直接的な影響を受けることが無かった可能性が高い。尚、ここでは上位に弥生期以降の遺構や遺物包含層は確認されていない。

本書では下位に存在する縄文後期の遺物包含層を“K層”と称し、上位に存在する縄文晩期の包含層を“B層”と称する。K層は旧耕作土下2.5mで検出され、後期初頭から中葉の土器と石器を包含している。また、B層は旧耕作土下1.5mに存在し、晩期土器と勾玉や磨製石斧、叩石等の石器を包含している。何れの層にも付近に遺構として明確なものを捉え得なかったが、直径約1mの範囲で、深さ10~15cm程度の皿状に炭化物や焼土の堆積した部分が数カ所存在した。

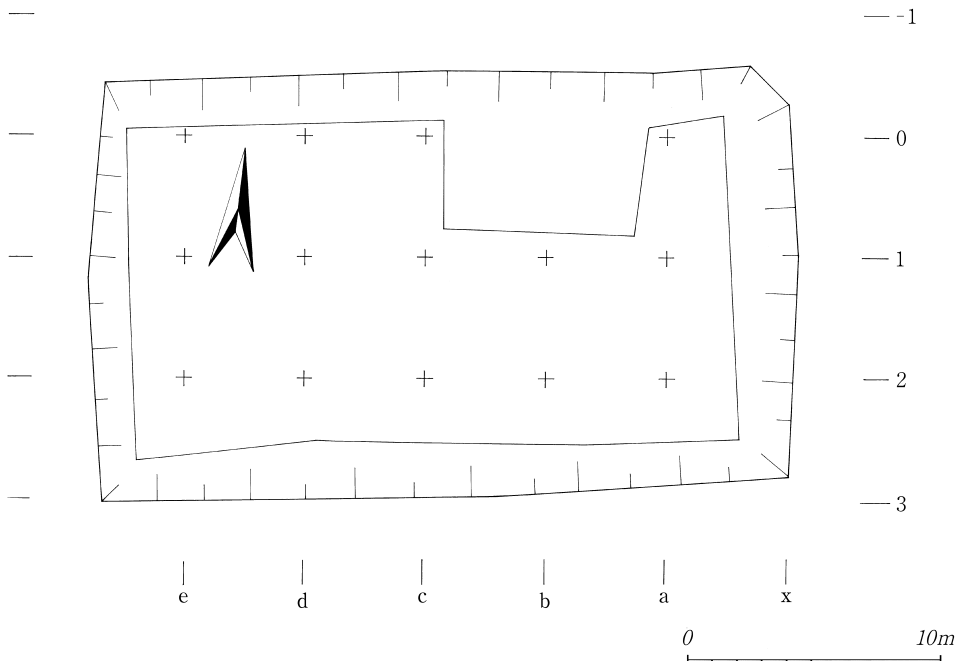


Fig.95 調査IIIJ区全体図 (S : 1/250)

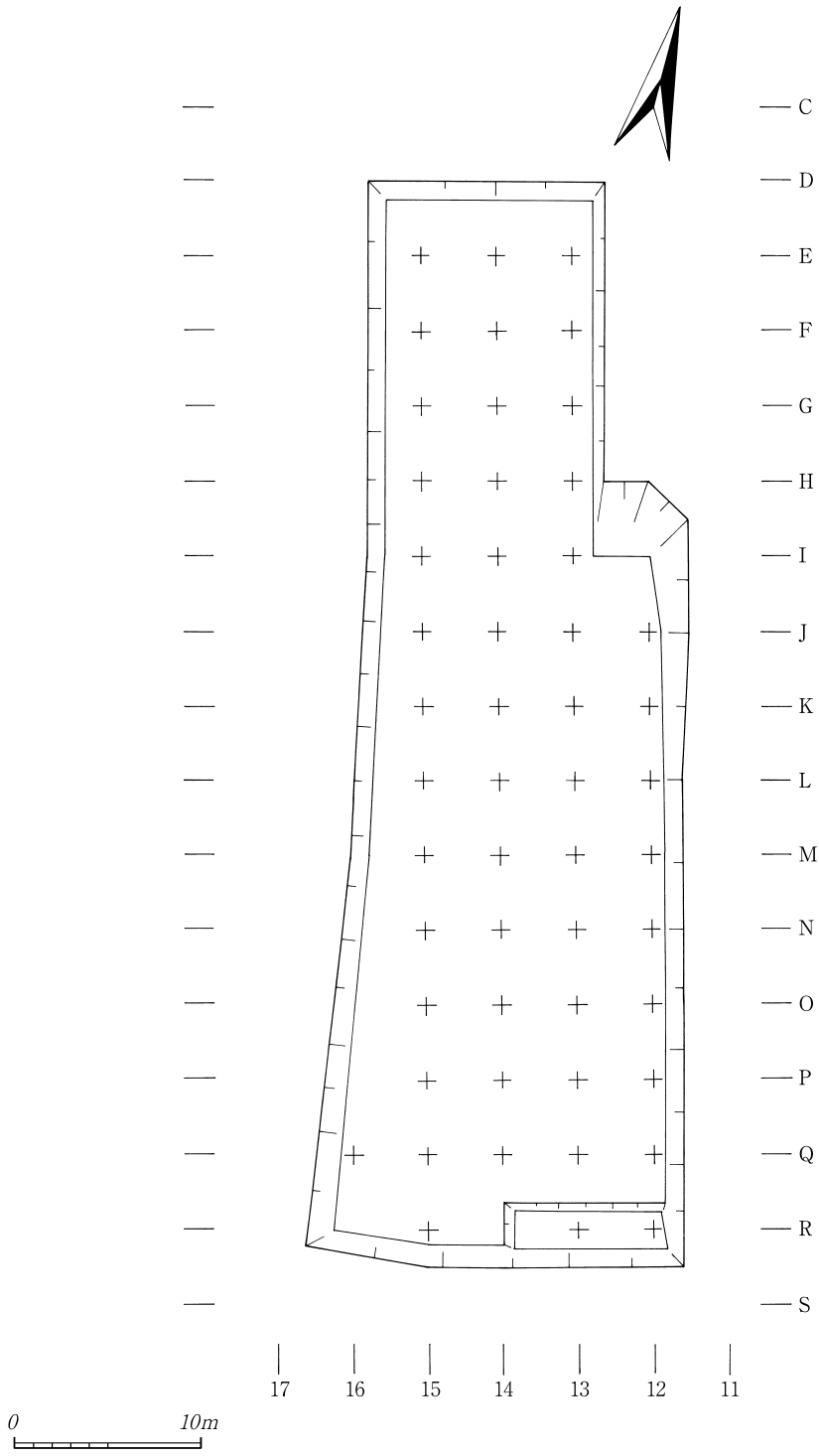


Fig.96 調査Ⅲ区全体図 (S : 1/400)

(2) 層序 (Fig.97)

調査ⅢJ区及び調査Ⅲ区の東壁セクションを用いて堆積状況を示す。ここでは調査Ⅱ区に倣い、調査時に使用した略称を用いて説明を進める。縄文後期遺物包含層を“K層”、縄文晩期包含層群を“B層群”、弥生前期末から中期包含層群を“Y層群”、SR301に係わる流路堆積物層群で砂礫層群を“G層群”、同じくSR301に係わる植物堆積層群を“P層群”と称して説明を行う。

1) 表土及び旧表土

東壁セクション北部の1・2層や南部の1・2層は耕作や耕作に伴う層である。

2) P層群

調査Ⅲ区で検出された植物堆積層、P層群は東壁セクション北部の15層・18層・25層・29層等で、調査区の中央部北側に存在した。調査Ⅱ区のSR201最終充填層は15層に対応するであろう。ただし、植物遺体や木器・木製品の出土は調査Ⅰ区やⅡ区に比べると少ない。

3) G層群

SR301の流路内堆積層として捉えることができるものは、東壁セクション北部の17層・31層から35層等である。

4) Y層群

調査Ⅱ区と同様にY層群が調査区の南端部分で検出されている。調査Ⅲ区東壁セクションに見えるY層群(4層・5層・14層)の検出面は標高約5.50mであり、先述の様に北または西に向かって標高を下げていることが分かる。Y層の下方には調査Ⅱ区と同様、不整合な砂利層が存在し、この上に厚いシルト層の堆積が見られる。調査Ⅲ区に於てはこの最下層のシルト層(7層)から縄文後期中葉縁帯紋系の土器片が単独で出土しており、これらシルト層による微高地の形成開始が縄文後期中葉に遡ることが考えられる。この上層のY層群直下(6層)からは縄文晩期深鉢の破片が出土している。Y層群内からは弥生前期末の大篠式土器、他に扁平片刃や柱状片刃などの石斧が見られた。

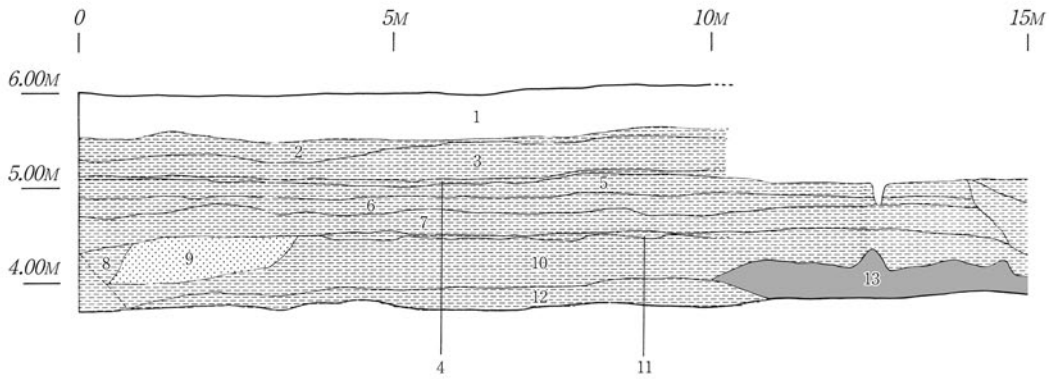
調査Ⅲ区東壁セクション南部では、古い河川堆積層(15層～19層・39層～59層・67層～69層)が中央から北側に見られ、流路の南遷によって15層の南斜面が形成される。南側の河道からもたらされる流路堆積物や氾濫堆積物によって自然堤防状の微高地が形成され、遺構検出面の6層や5層・14層などのY層群がその上に堆積すると考えられる。20層・24層・25層・26層等は、後背湿地的な環境の下、水平で乱れの少ない堆積状態を示している。この部分にある暗青灰色土層(25層)と淡灰色土層(26層)にはシルト質の更に細かい互層が見られた。

5) B層群

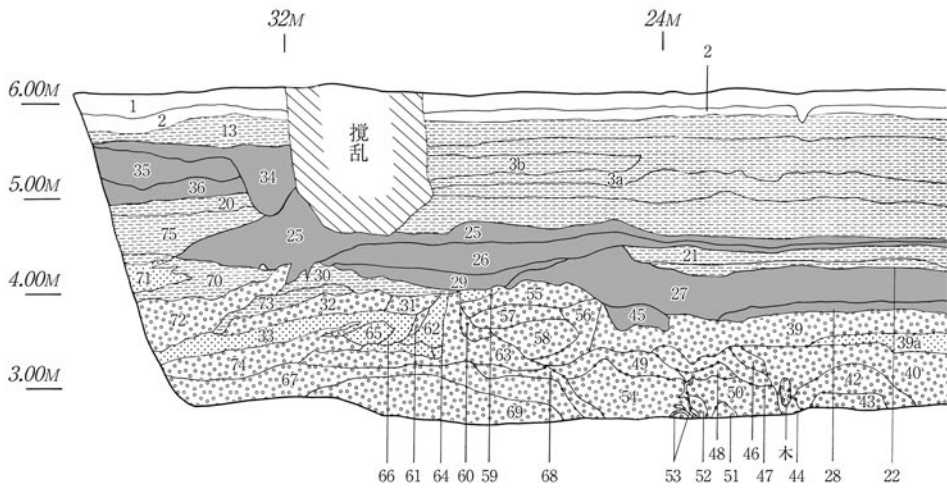
主に調査ⅢJ区で確認された縄文晩期遺物包含層であり、一部は調査Ⅲ区北端に残存する。東壁セクション北部の5層・6層に該当し、比較的穏やかな堆積環境の下で発達した層群と捉える。縄文晩期土器片と磨製石斧や勾玉などの石器・石製品が出土している。

6) K層

第3節 (1) III J区

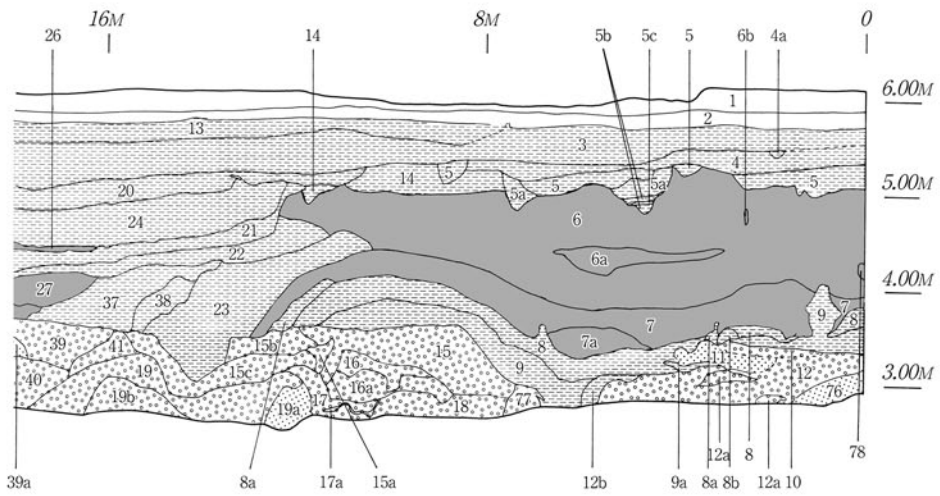
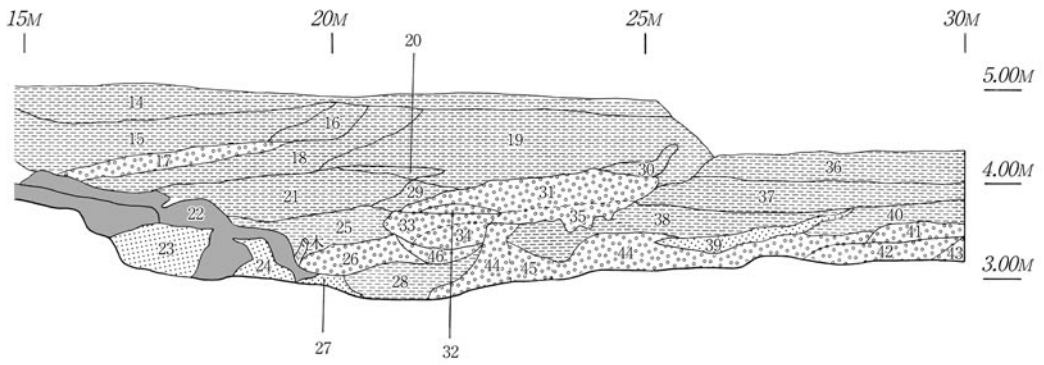


(北半部)



(南半部)

Fig.97 調査III J区・III区東壁セクション図 (S:縦1/80,横1/160)



第3節 (1) III J区

(南半部)

No.	層名	内 容	備 考
1	耕 作 土		
2	床 土		
3	茶褐色粘質土	茶褐色斑点	
3-a	茶褐色粘質土		
3-b	暗灰褐色粘質土	茶褐色斑点	
4	暗褐色粘質土		
5	黒褐色粘質土	炭化物	Y層
5-a	黒褐色粘質土		
5-b	黒褐色粘質土	炭化物多混	
5-c	黒色粘質土	炭化物	
6	緑灰色粘土	暗褐色斑点	
6-a	淡灰色粘土		
6-b	黒褐色粘土		
7	灰 色 粘 土	暗褐色斑点	K層
7-a	淡灰色粘土	炭化物小片	
8	暗緑灰色微細砂層	灰色砂のブロック	
8-a	暗緑灰色微細砂層		
8-b	暗緑灰色微細砂層	5mm以下の小石	
9	黄灰褐色微細砂層		
9-a	黄灰褐色微細砂層		
10	灰 色 砂 礫	礫粒5mm以下	
11	灰 褐色 砂	粗砂・1mm大の小石	
12	灰 褐色 砂 礫	粗砂・10mm以下の礫	
12-a	暗赤褐色砂礫		
12-b	黄灰褐色微細砂	粗砂	
13	明灰褐色粘質土	茶褐色斑点	
14	緑灰色粘質土		YⅢ層
15	灰 色 砂 礫	1cm大の小石と砂粒	
15-a	明 灰 色 砂 礫		
15-b	灰 褐色 砂 礫	1~3cm大の小石と砂粒	
15-c	灰 色 砂 礫	5cm大の小石と砂	
16	明 褐 色 砂 礫		
16-a	褐 色 砂 礫	粗砂と1~2cm大の小礫	
17	暗赤褐色砂礫	5cm大の小石と砂	
17-a	黒 色 砂 礫	Mn	
18	灰 褐色 砂 礫		
19	青 灰 色 砂 礫	細砂・1~3cm大の円礫	
19-a	青 灰 色 砂 礫	小礫・礫粒3cm未満	
19-b	赤 色 砂 礫	細砂・1~2cmの円礫	
20	暗灰色粘質土	炭小片	
21	暗灰色粘質土	淡灰色粘土ブロック	
22	暗青灰色粘質土	炭小片	
23	灰 色 粘 質 土	炭小片 1cm以下の小石	
24	青灰色粘質土	青灰色土と暗灰色土混入	
25	暗 灰 色 粘 土		
26	淡 灰 色 粘 土		
27	灰 色 粘 土	炭小片	
28	灰 色 粘 土	砂粒を含む	
29	明 灰 色 粘 土	白色を帯びる	
30	暗 灰 色 土	砂質	
31	暗 灰 色 砂 礫		
32	暗 灰 色 砂 礫	細砂・3cm以下の小石 植物遺体	
33	暗 灰 褐色 微 細 砂	植物遺体	
34	明 黄 灰 色 粘 土		
35	灰 褐色 粘 土	茶褐色の斑点	
36	暗 灰 褐色 粘 土	茶褐色の斑点	
37	暗 灰 色 シ ル ト		
38	暗 灰 色 シ ル ト	微粒炭化物多	
39	砂	礫粒1~6cm	
39-a	青 灰 色 細 砂		
40	砂	礫粒1~6cm	
41	青 灰 色 粘 土	砂礫混	
42	黄 灰 色 砂 礫	粗砂・4cm未満の円礫	
43	赤 黒 色 砂 礫	礫粒3cm以下	
44	鉄 黄 色 砂 礫	細砂・3cm以下の円礫	
45	灰 色 粘 土	砂礫混・礫粒3cm以下	
46	青 灰 色 砂 礫	細砂・礫粒2cm以下	
47	黄 灰 色 砂 礫	細砂・3cm以下の円礫	
48	鉄 黄 色 砂 礫	細砂・礫粒3cm以下	
49	鉄 黄 色 砂 礫	礫粒2cm以下	
50	鉄 黄 色 砂 礫	細砂・4cm未満の円礫	
51	赤 黒 色 砂 礫	細砂・4cm未満の円礫	
52	赤 色 砂 礫	粗砂・2cm以下の円礫	
53	黒 色 砂 礫	粗砂・3cm未満の円礫	

No.	層名	内 容	備 考
54	褐 色 砂 礫	粗砂・5cm以下の小石	
55	黄灰褐色砂礫	粗砂・5cm程度の小石	
56	黄 褐 色 砂 礫	粗砂・5cm以下の小石	
57	灰 褐 色 砂 礫	0.5~5cm以下の小石	
58	暗 灰 色 砂 礫	0.5~3cm以下の小石	
59	灰 色 砂		
60	暗 灰 色 土	砂粒・1~2cmの小石 粘土含	
61	灰 色 粘 土		
62	灰 色 砂	粗砂・5cm大の小石 灰色砂利	
63	黄 灰 色 砂 礫	5cm大の小石	
64	灰 色 粗 砂		
65	細 砂		
66	灰 色 砂		
67	褐 色 砂 礫	1~3cm程度の小石	
68	灰 色 砂 礫	5cm以下の小石	
69	黒 褐 色 砂 礫	細砂・礫粒1~4cm以下	
70	灰褐色シルト	腐植多含	
71	青 灰 色 砂 礫	礫粒1cm以下 腐植混	
72	青 灰 色 砂 礫	粗砂・2.5cm未満の円礫	
73	青 灰 褐色 シ ル ト	腐植多混	
74	灰 色 砂 礫	細砂・3cm未満の円礫	
75	青 灰 褐色 シ ル ト	炭化植物遺体含	
76	暗 赤 褐 色 砂	粗粒砂で構成される。	
77	黄 色 砂 礫		
78	黒 褐 色 粘 土	外周に鉄分が付着。	

(北半部)

No.	層名	内 容	備 考
1	表 土 ・ 床 土		
2	暗 灰 色 粘 質 土	鉄分多混	
3	青 灰 色 粘 質 土	褐色斑点	
4	淡 青 灰 色 粘 質 土		
5	灰 色 粘 質 土		縄文晩期土器
6	緑 灰 色 粘 質 土	炭化物混	縄文晩期土器
7	青 灰 色 粘 質 土	炭化物疎混	
8	灰 色 粘 質 土		
9	緑 灰 色 砂	細砂 褐色斑点	
10	緑 灰 色 粘 質 土		縄文後期土器
11	淡 青 灰 色 粘 質 土	炭化物混	
12	淡 青 灰 色 粘 質 土		
13	青 灰 色 粘 土		
14	暗 灰 褐色 シ ル ト		
15	暗 褐 色 シ ル ト	植物堆積	
16	暗 灰 色 シ ル ト		
17	・ ・ ・ 砂 礫		
18	暗 灰 褐色 シ ル ト	植物堆積	
19	暗 灰 褐色 シ ル ト		
20	黒 灰 色 シ ル ト		
21	灰 色 砂 礫		
22	灰 色 粘 土		
23	青 灰 色 砂		
24	灰 色 砂	細砂	
25	暗 灰 褐色 シ ル ト	植物堆積	
26	灰 色 砂 礫		
27	明 灰 色 砂		
28	暗 褐 色 シ ル ト		
29	暗 褐 色 シ ル ト	植物遺体	
30	灰 褐色 シ ル ト		
31	灰 色 砂 礫		
32	暗 灰 色 粘 土		
33	灰 色 砂 礫		
34	黄 褐 色 砂 礫		
35	黄 褐 色 砂 礫		
36	明 灰 色 シ ル ト		
37	灰 褐色 シ ル ト		
38	暗 灰 褐色 シ ル ト	植物堆積	
39	灰 色 細 砂		
40	暗 灰 褐色 シ ル ト	植物堆積	
41	茶 褐 色 砂 礫		
42	暗 灰 色 砂 礫	礫粒3~5cm 灰色粘土混	
43	黄 褐 色 砂 礫		
44	灰 色 砂 礫		
45	黄 褐 色 砂 礫		

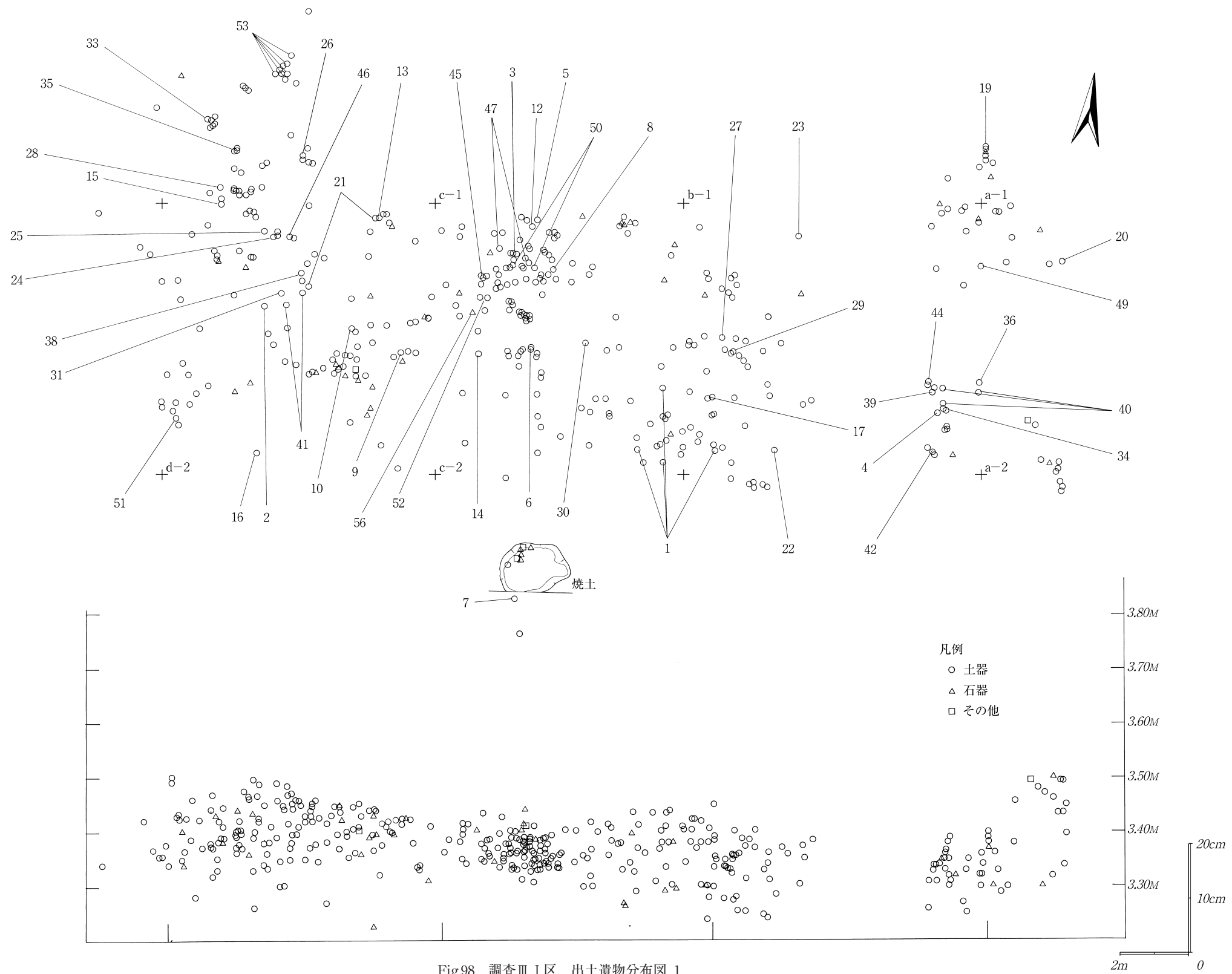


Fig.98 調査ⅢJ区 出土遺物分布図 1

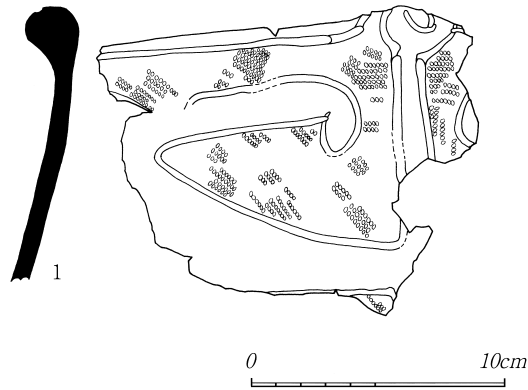


Fig.99 調査ⅢJ区出土遺物実測図 1 (S : 1/3)

B層群と同じく調査ⅢJ区を中心として検出された包含層で、一部は調査Ⅲ区にも派生している。東壁セクション北部の10層である。遺物の残りは良好で縄文後期始めから中葉の土器と石核などの石器が出土している。

(3) 縄文時代

包含層からの遺物

K層

K層は調査ⅢJ区の標高4.0mから3.2mの範囲に存在する。緑灰色を呈するシルトで構成され、北側でやや高く南側へ緩く下る。遺物の出土は平面的に偏りを認め難いが、標高は3.3mから3.4mの間に最も集中している。遺構は発見されておらず、規模が1m程度の不整形円形を呈した被熱赤変部分が幾つか存在した。

出土遺物の中で図示し得たのは土器55点と石器1点である。1から30は有文深鉢の破片と考えられる。1は口縁部で緩やかな波状を成す。外面にベンガラによる赤色顔料が塗布され一部に残存する。内面は平滑に仕上げられる。同一個体のもと思われる30が出土しており、他にも図化し得なかった破片が存在している。2は口縁部で波状を成す。磨消部は丁寧なヘラミガキで単位を残す。内面は平滑に仕上げられる。3は口縁部で波状を成す。波頂部は平坦。貝殻による擬縄文を施し、区画外は磨消す。4は口縁部で平縁か。外面に沈線3条、内面は条痕。5は口縁部で波状を成す。沈線による区画内に貝殻腹縁紋を施す。6は口縁部で波状、波頂部は筒状を成す。方形区画を持ち区画外は磨消す。7は口縁部が肥厚し、端部に刻みを施す。縁帯文系土器か。8は口縁部で波状を成す。口縁部は屈曲し内傾する。9は口縁部で波状を成す。区画内にRLによる縄文施紋、区画外は磨消す。10は口縁部で波状を成す。区画内に貝殻腹縁紋を施す。11は口縁部で波状を成す。区画内に貝殻腹縁紋を施す。12は口縁部で波状か。貝殻腹縁

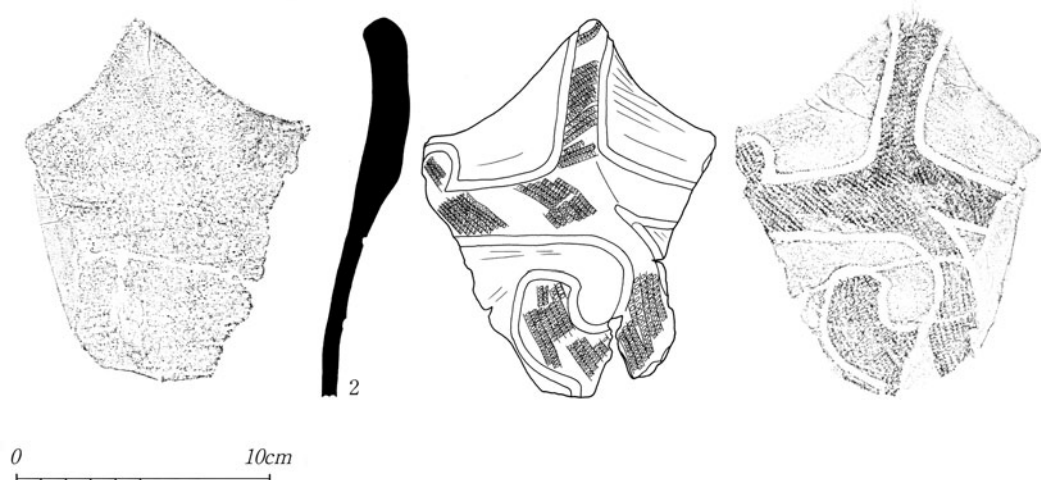


Fig.100 調査III J区出土遺物実測図 2 (S : 1/3)

による施紋。13は口縁部で波状を成す。区画内にRLによる縄文施紋、区画外は磨消す。14は口縁部で波状か。貝殻腹縁による施紋。口唇部に刺突。15は口縁部で、RLによる縄文施紋。16は口縁部で、貝殻腹縁による施紋。17は口縁部で、貝殻腹縁による施紋を施す。18は口縁部で、沈線による施紋。19は口縁部でLRによる縄文施紋。20は口縁部で2条の区画沈線。21は口縁部で波状を成す。区画内を貝殻腹縁により施紋。22は口縁部で波状を成す。端部を大きく深く刻む。23は口縁部で2条の区画沈線。24は体部破片で、貝殻腹縁による施紋。25は体部破片で、区画沈線。貝殻腹縁による施紋。26は体部破片で、区画沈線。貝殻腹縁による施紋。27は体部破片で、区画沈線。RLによる縄文施紋。28は体部破片で、区画沈線。RLによる縄文施紋。29は体部破片で、区画沈線。LRによる縄文施紋。

31から38は浅鉢と考えられる。31は口縁部で、外面に区画沈線と貝殻腹縁による施紋。32はやや浅い皿状を呈すものか。内外面ヘラミガキを施す。33は内面に粗なミガキ、口唇に刺突を施す。34は内外面ナデ。35は内面ミガキ、外面は区画内RLによる縄文施紋。36は外面に区画沈線とLRによる縄文施紋。37・38は底部であり、38は多角形（八角形）を呈するものであろう。

39から55は深鉢である。39・40は内外面に条痕を残す。41・42は内面ナデ。43は内外面に条痕。44は内外面にナデを加える。45は外面に条痕、内面には弱い削り。46は内外面に条痕。47は内外面に条痕。48は外面に条痕、内面には弱い削り。49は外面に条痕、内面はナデ。50から53は底部としたが、52は屈曲部分か。54・55は調査区設定前のトレンチ内からの出土である。

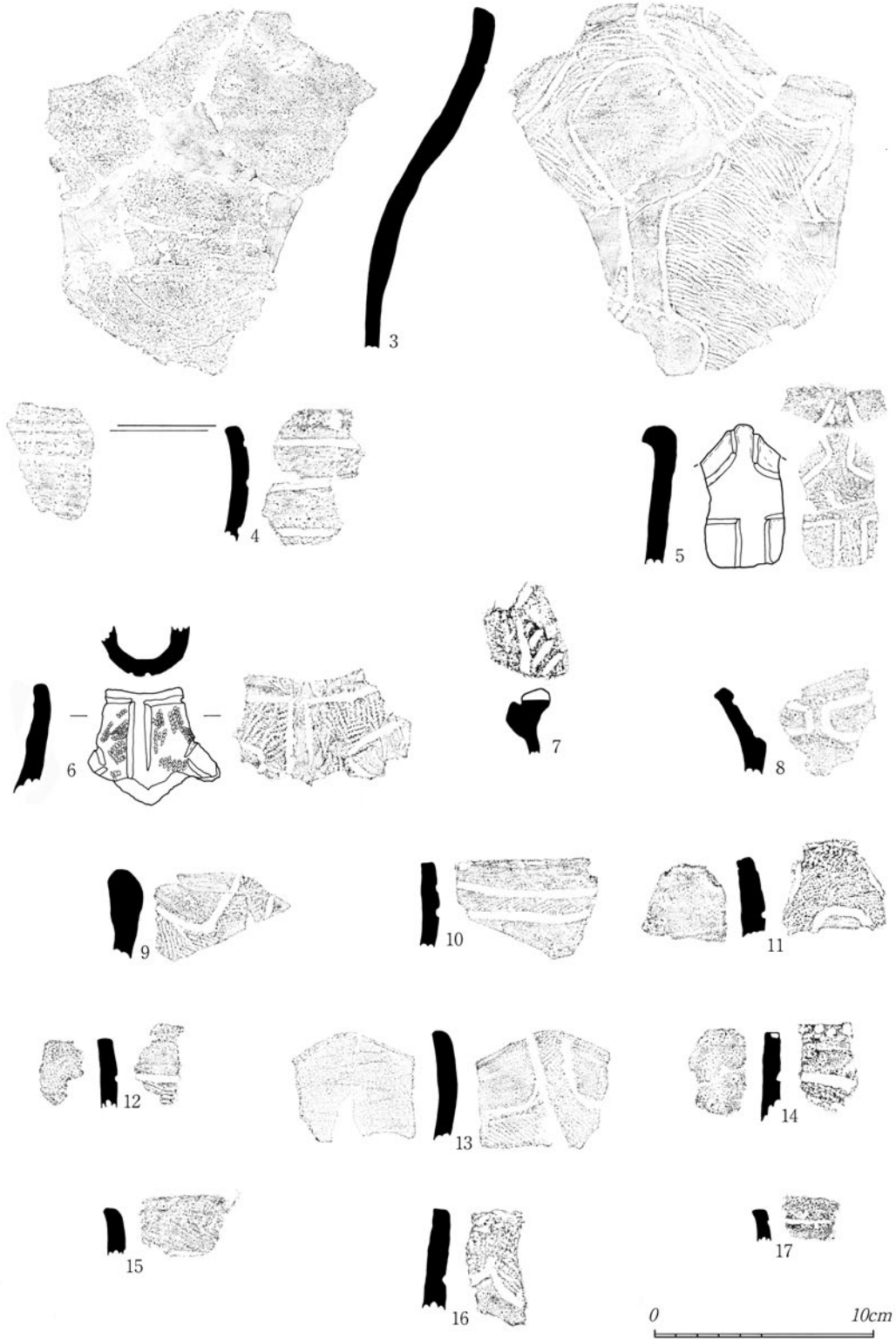


Fig.101 調査ⅢJ区出土遺物実測図 3 (S : 1/3)

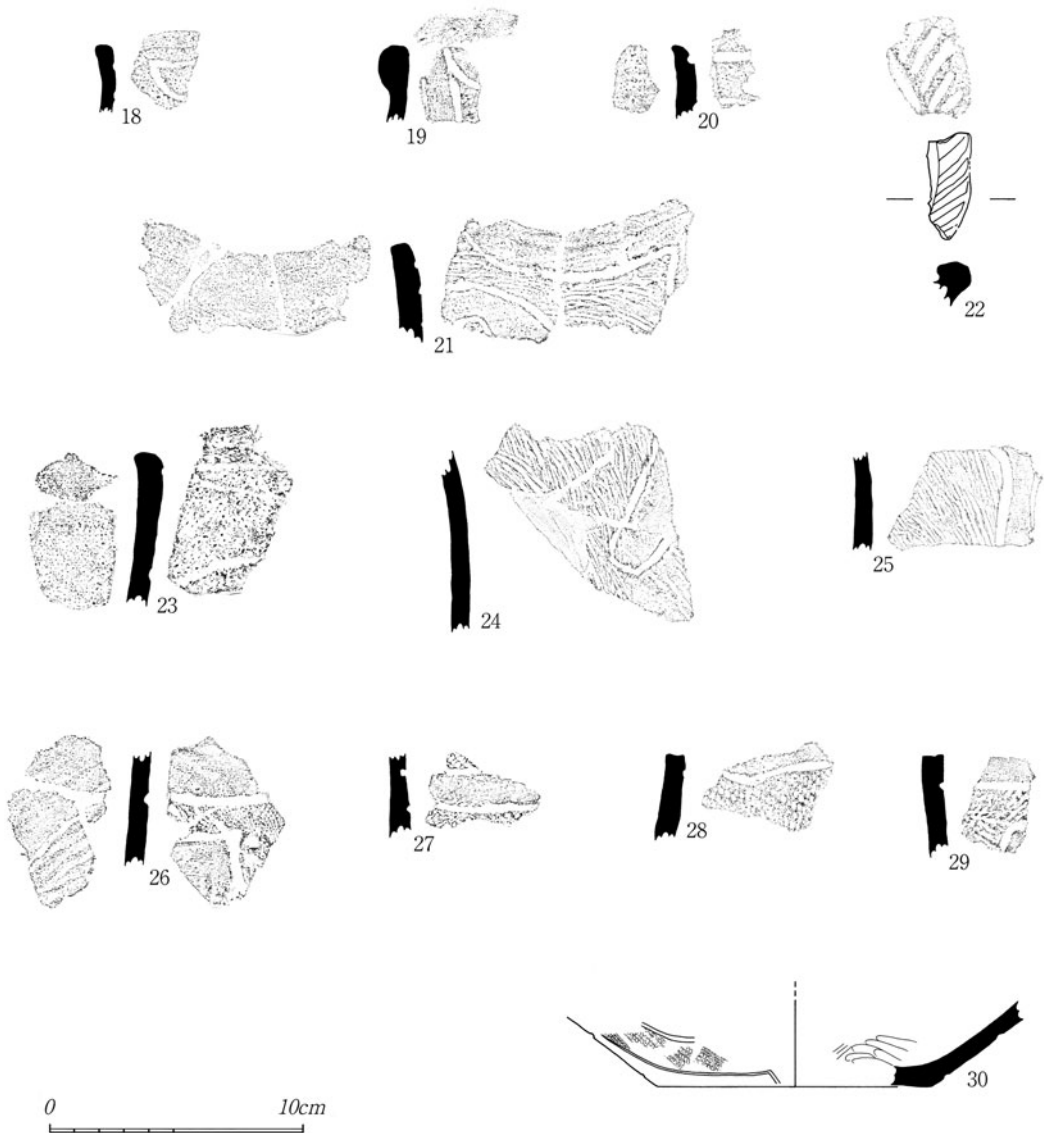


Fig.102 調査III J区出土遺物実測図 4 (S:1/3)

54は外面に区画沈線と貝殻腹縁による施紋。55はやや小型の深鉢であり、内外面はナデである。

B層群

B層群は調査III J区の標高4.2~4.6mに存在する。大きく上下2層に分かれているが、主に下層である緑灰色のシルト層から出土が見られた。K層に比較すると出土点数は少なく、分布も希薄である。出土標高は主に4.3~4.5mであり、ばらつきが認められる。土器遺物の残存状態は悪く、細片が多い。また、石器・石製品の出土がやや目立つ。

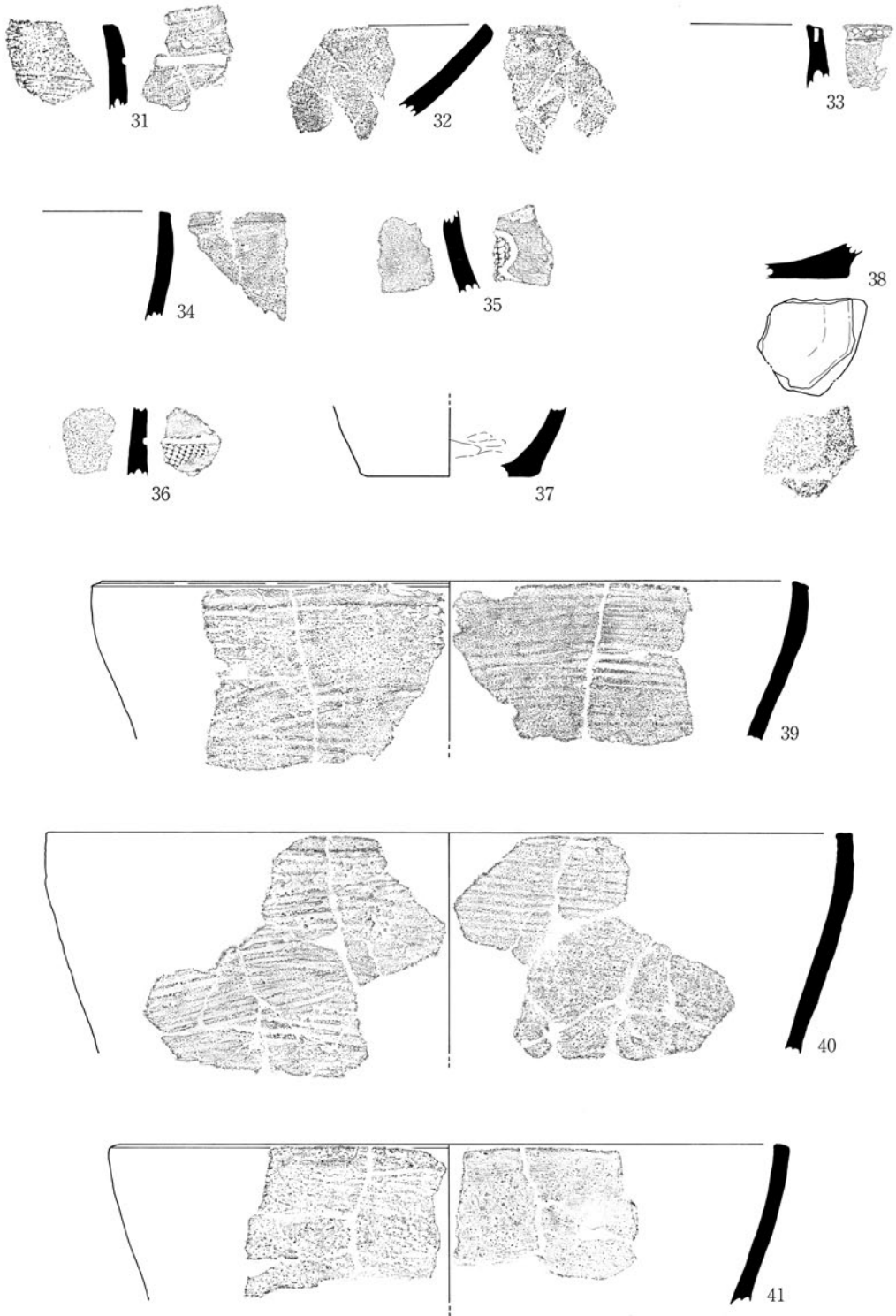


Fig.103 調査ⅢJ区出土遺物実測図 5 (S:1/3)

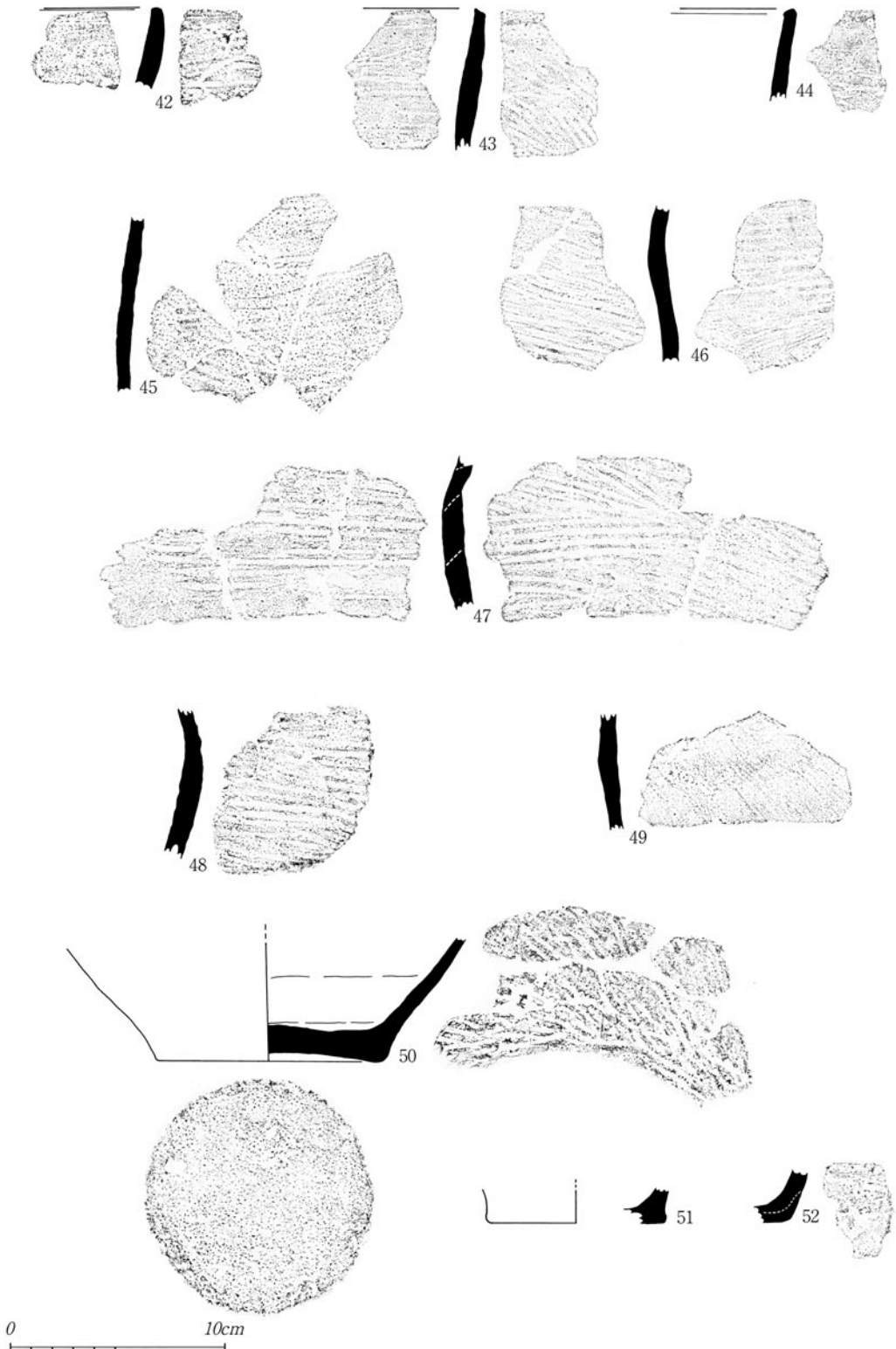


Fig.104 調査III J区出土遺物実測図 6 (S : 1/3)

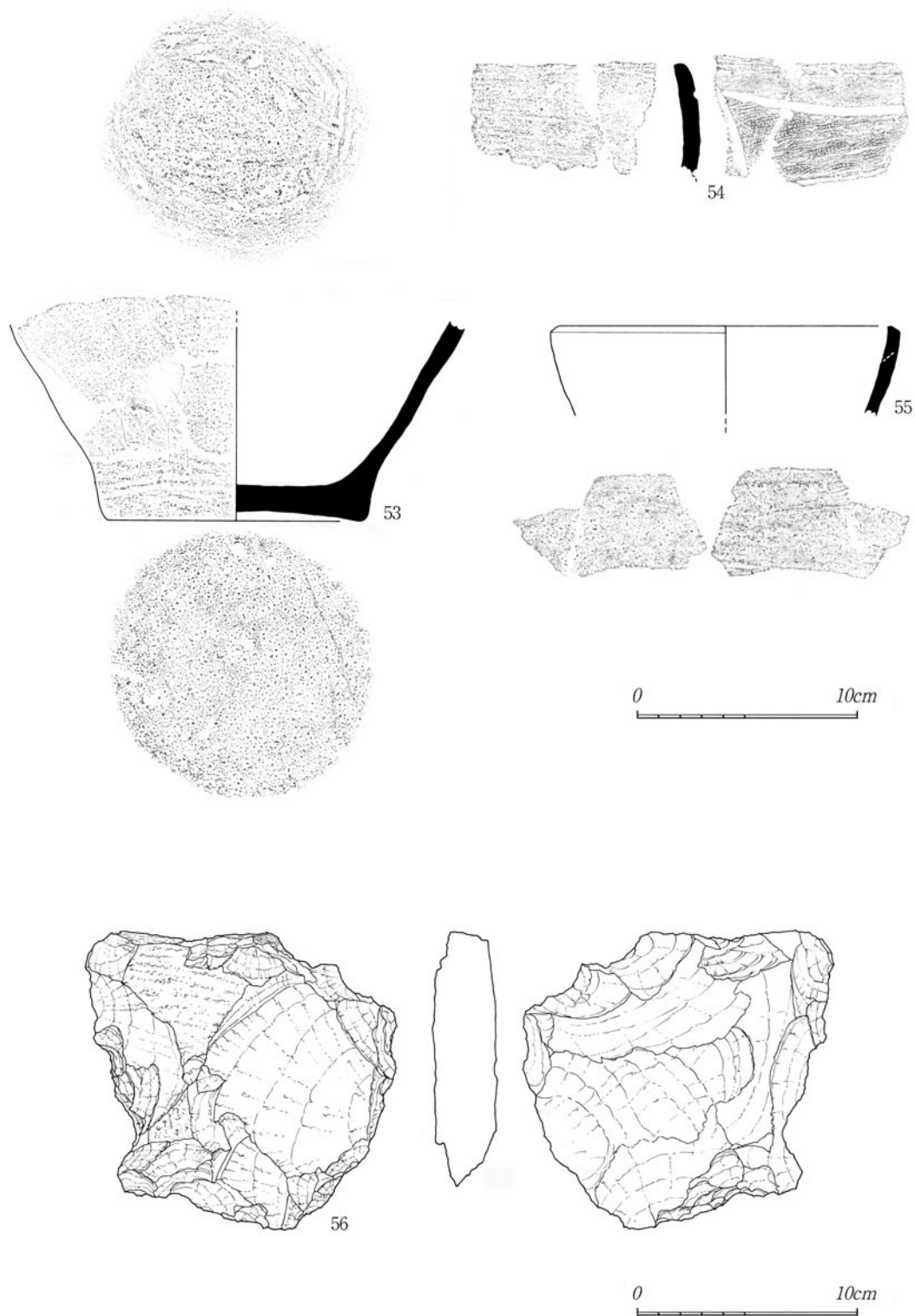


Fig.105 調査ⅢJ区出土遺物実測図 7 (S : 1/3)

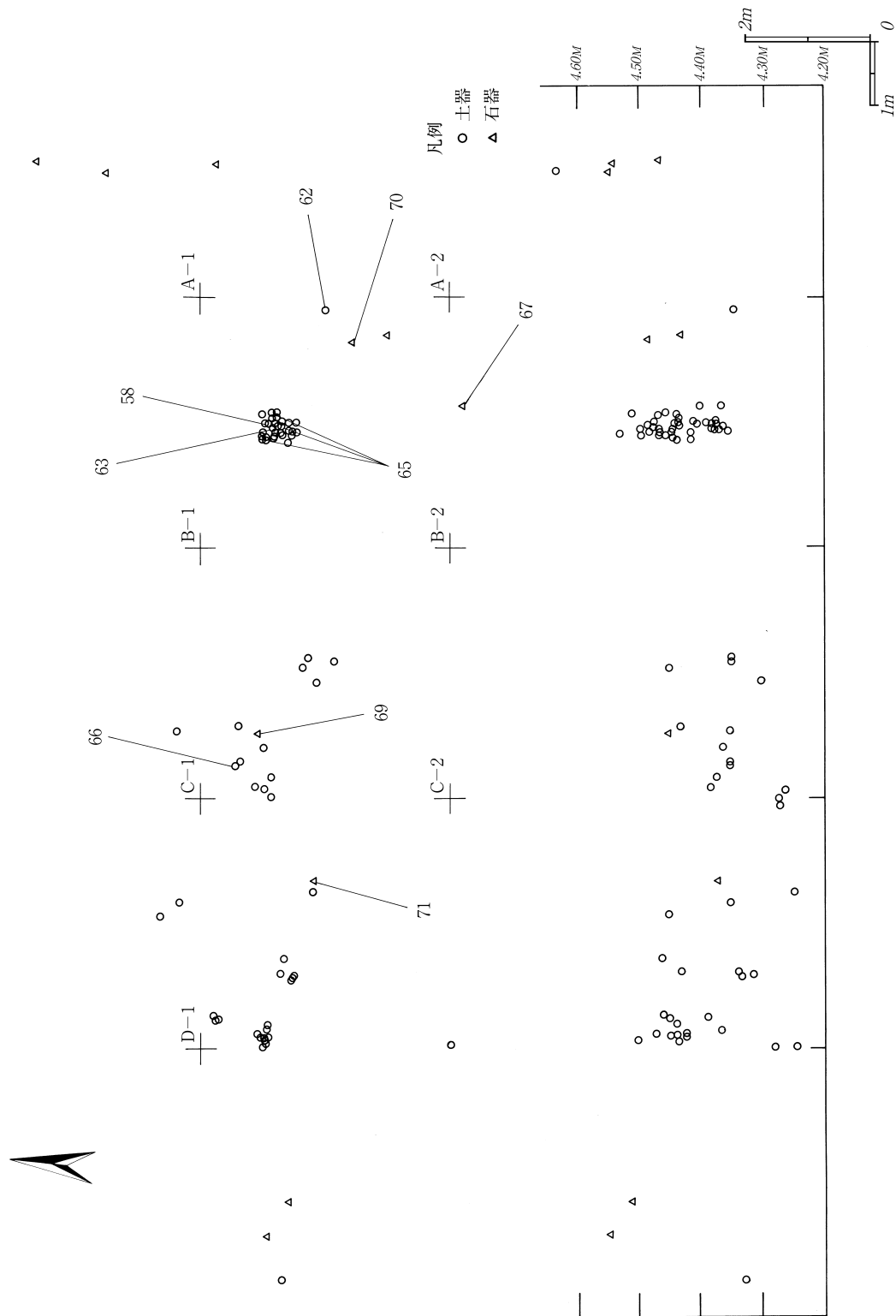


Fig.106 調査III J区出土遺物分布図 2 (S : 1/100,縦1/10,横1/100)

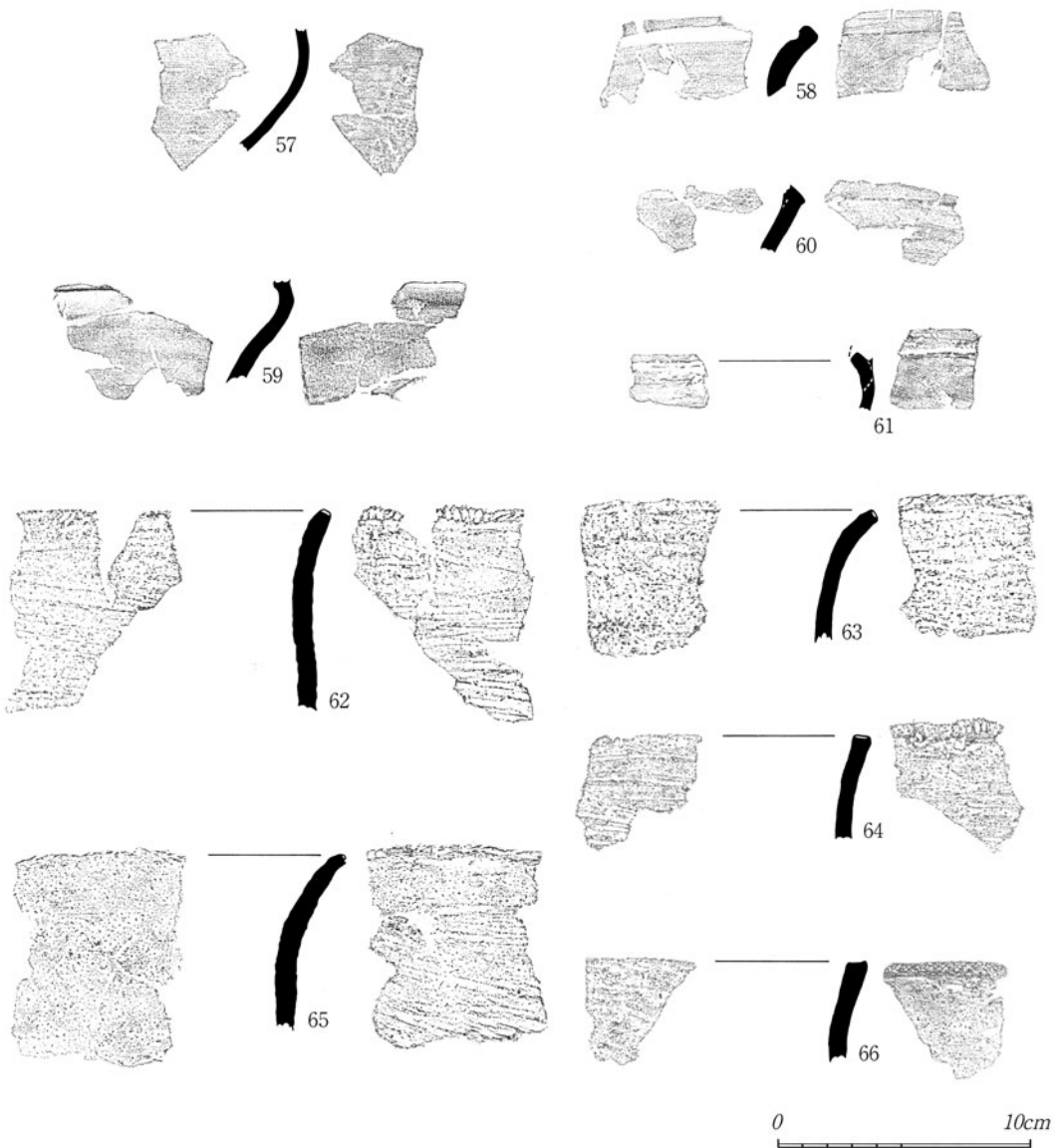


Fig.107 調査ⅢJ区出土遺物実測図 8 (S:1/3)

出土遺物の中で図示し得たのは土器10点と石器・石製品5点である。57は小型の鉢体部か。58から61は浅鉢である。58は口縁部が鐙状に開くものか。59から61は体部の破片であり、屈曲部又は接合部に当たる。

62から66は深鉢の口縁部である。62は内外面に条痕、口唇に刻みを施す。63は内外面に条痕、口唇に刻みを施す。64は内外面に条痕、口唇に刻みを施す。65は内外面に条痕、口唇の内端と上面に刻みを施す。66は口唇に擬縄文を施す。

67から71は石器・石製品である。67は勾玉であり、翡翠輝石製か。68は小型の石斧で丁寧に磨かれている。69は磨製石斧。70は石斧の未製品か。71は叩石である。

第3節 (1) III J区

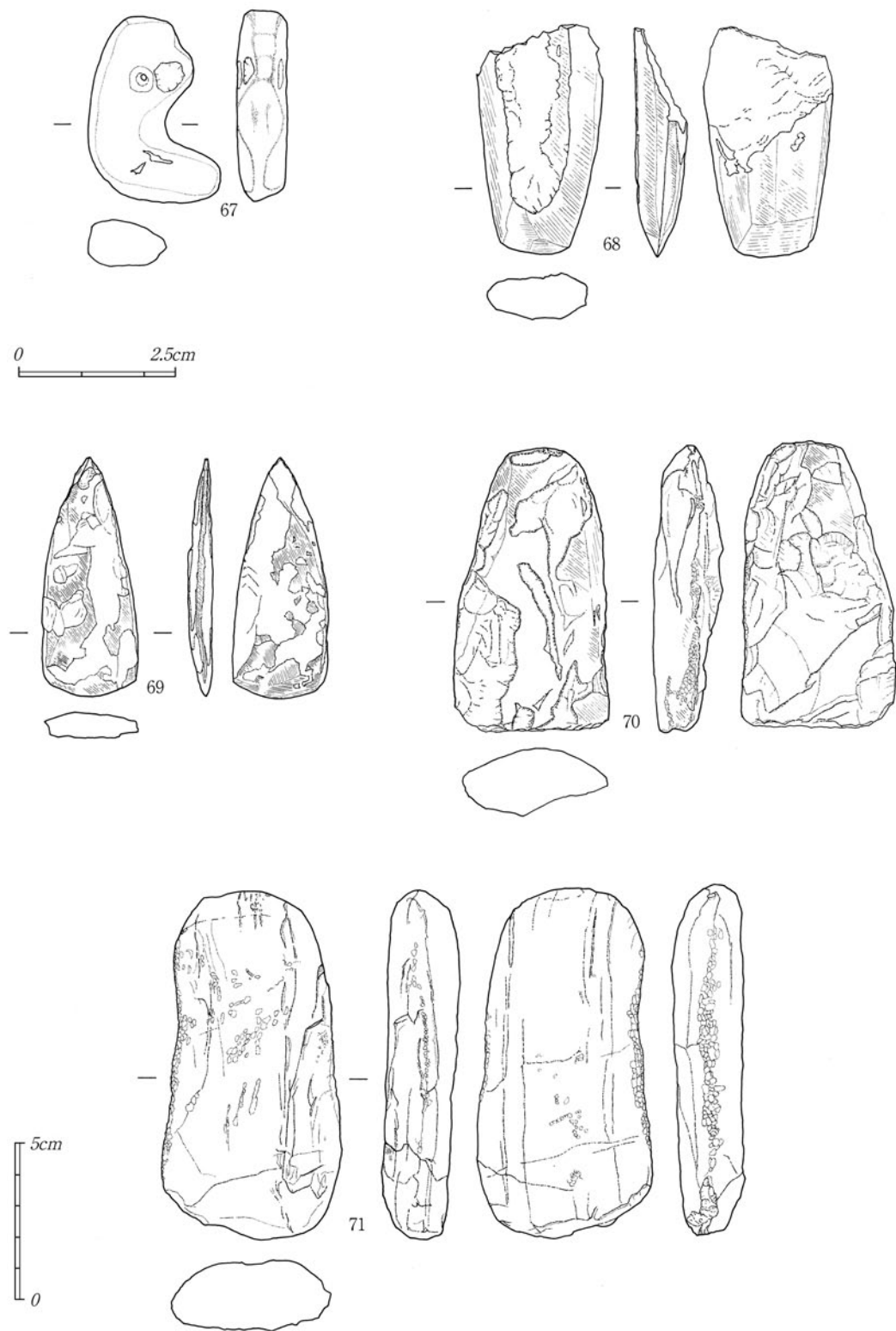


Fig.108 調査III区出土遺物実測図 9 (S : 1/1,1/2)

〔2〕 Ⅲ区

(1) 調査Ⅲ区の概要

調査Ⅲ区は調査Ⅱ区の西方に設定された調査区であり、東西方向20m、南北方向56mの規模を持つ。北部では隣接する調査ⅢJ区と同様な堆積環境が続いていたものと考えられ、概ね水平な堆積状況が見られる。ここからは縄文後期土器が僅少であるが出土している。南部は調査Ⅱ区の南半と繋がる自然堤防の一部と考えられ、遺構と遺物包含層が検出された。検出された土坑は11基である。直径1m以下の不整円形を呈するものが多く、深さは10～20cmを測るものであった。調査区域は自然堤防が後背湿地側に下り始めた部分と考えられ、Ⅱ区の土坑群と比較するとやや規模が小さく、残存状態が良くない。包含層について見ても分布は薄い。但し、ここで特徴的な遺物の分布傾向として、自然堤防上から北西方向に向かって標高を下げながら帯状に遺物が出土する傾向が見られた。堤防上に存在した土坑群が河川からの増水の影響で破壊または遺物の流出を生じ、遺物が背後に押し出され堆積した痕跡と考えられる。増水の規模や土坑の大きさ、遺物の量等、状況にもよるが、かなりの距離を後背湿地側に運ばれ堆積したものと考えられる。古墳時代の流路から出土した先行する時期の遺物の多くが、こう云った形で堆積し取込まれて行った可能性が高い。出土遺物は弥生前期末から中期初頭の土器と石鏃や石斧、砥石、叩石などの石器・石製品である。

中央部分では西の調査Ⅴ区から本調査区を経て調査Ⅱ区北西部に至る弥生後期後半から古墳時代の流路群が存在している。調査Ⅱ区の項で、SR201を複数流路の纏まりとして扱うことを述べた。ここSR301でも幾つかの洪水性堆積物“G層群”と最終的な充填層“P層群”の組み合わせが認められる。SR301で特徴的なことは、全体の流路幅、振幅がSR201に比べて広く、大きいこと。そして、出土遺物、特に流木や木製品が少ないことであろう。これは南北に存在する微高地間隔がⅡ区よりも広がったことに起因するものと考えられ、調査Ⅰ区と調査Ⅱ区で流木や木製品が多く留まった理由の一つとして、この微高地間隔が狭かったことが考えられる。

SR301は廃棄直前に最も北寄りを行っていたものと考えられる。出土遺物としてはⅡ区と同様に弥生後期後半から古墳前期の土器が下部のG層群から、また板状木製品や小形の自然木がP層群から出土している。

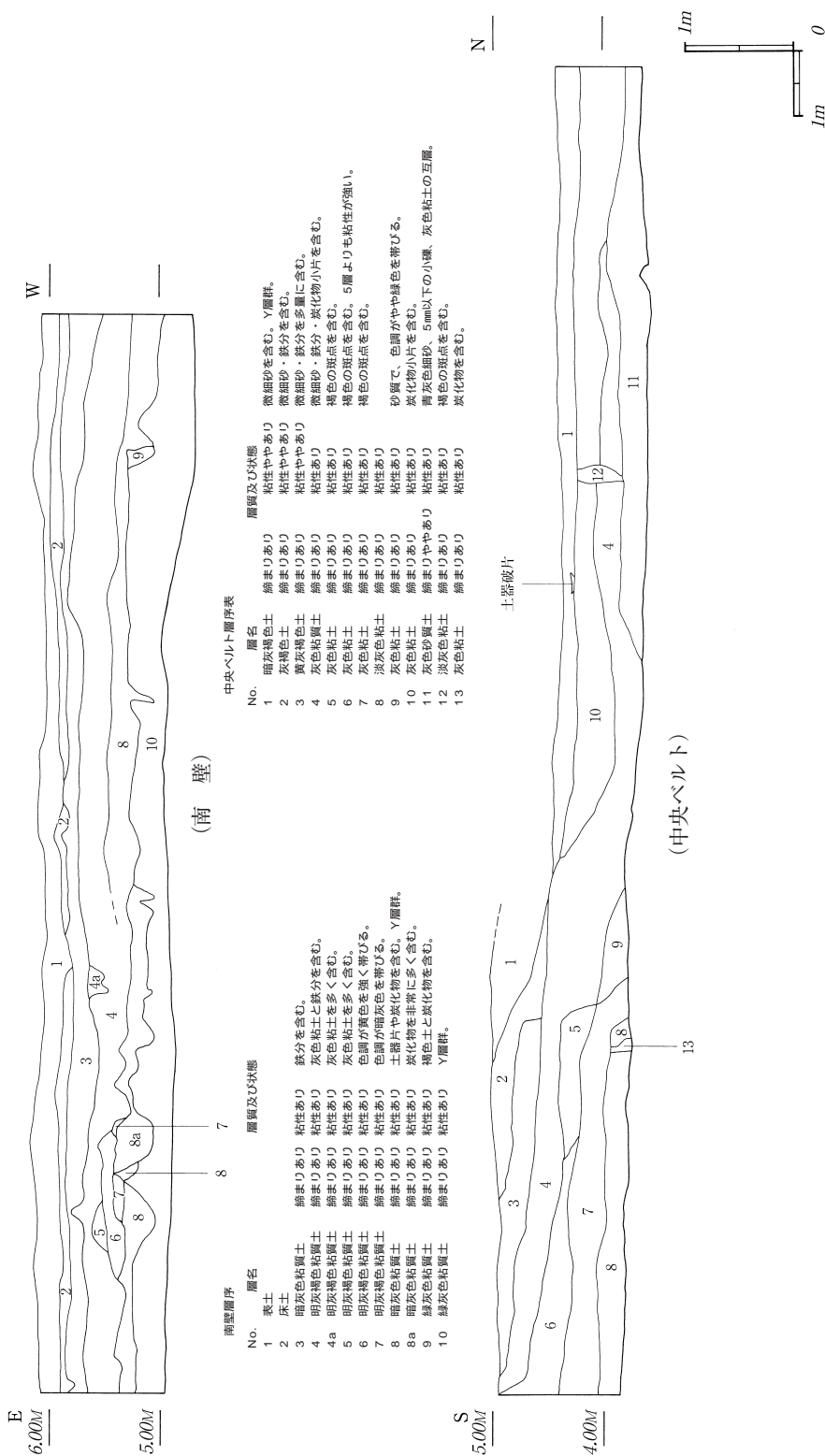


Fig.109 調査III区南壁・中央ベルトセクション図 (S:縦1/60,横1/100)

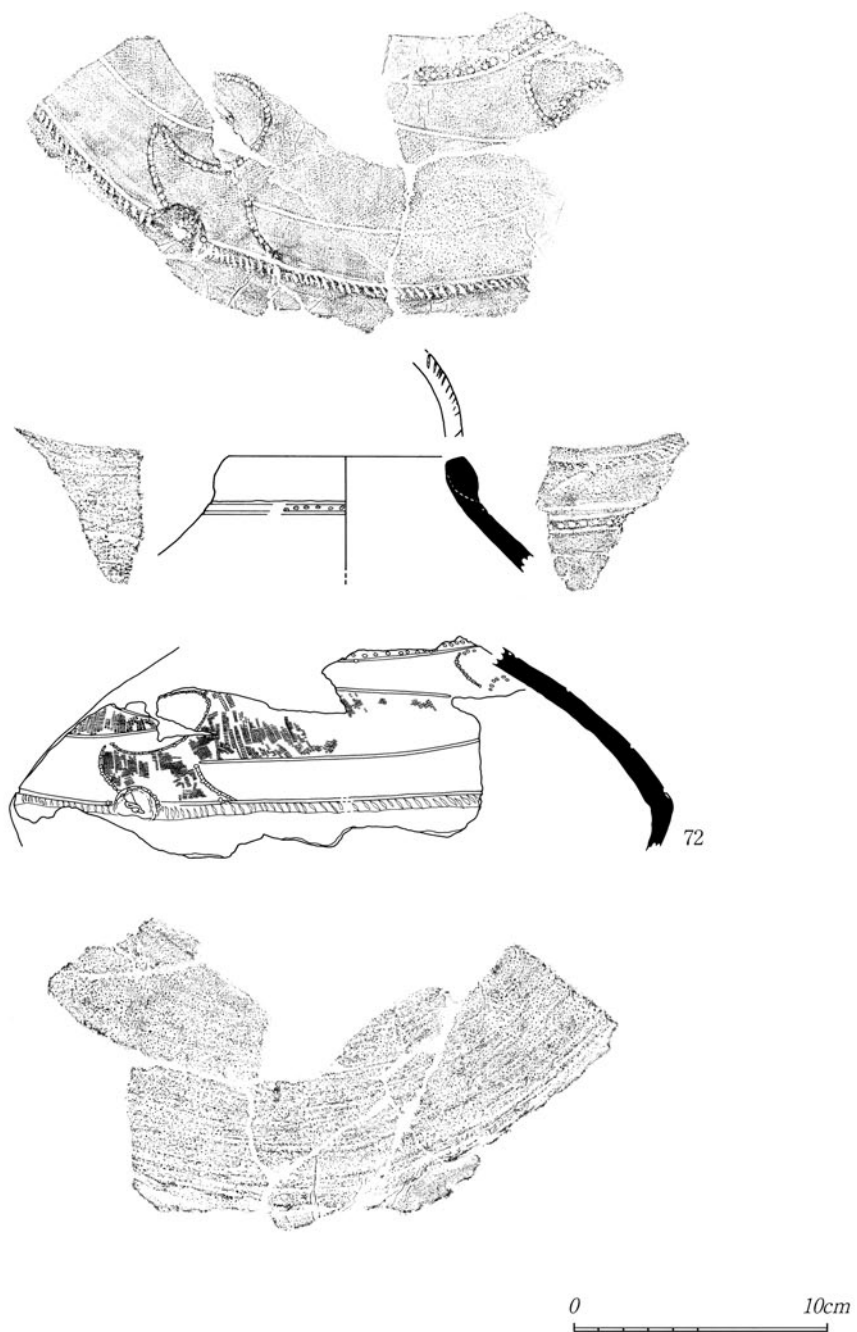


Fig.110 調査Ⅲ区出土遺物実測図 1 (S : 1/3)



Fig.111 調査III区出土遺物実測図 2 (S:1/3)

(2) 縄文時代

包含層からの遺物 (Fig.110・111)

調査III区の北端部では先述の様に調査IIIJ区で検出されたK層及びB層群に繋がる包含層が一部確認されている。また調査区の南部、Y層下のシルト層（東壁セクション南部の7層・6層）からも数点ではあるが遺物の出土を見ている。南遷した流路からもたらされた緩やかな洪水堆積物の中に含まれていたものである。

出土遺物の中で図示し得たものは7層から同一個体の破片2点と6層から3点である。72は浅鉢の破片である。体部の屈曲箇所と口唇に鋭い刻みを施す。外面には巻貝（ヘナタリ？）を用いた施紋部と磨消部、区画のやや細い沈線内に刺突列が施される。後期中葉。73から75は深鉢である。73は内外面に条痕、口唇に貝殻による擬縄文を施す。74は内外面に条痕。75は内外面に条痕でやや磨滅する。

(3) 弥生時代

1) 遺構と遺物

調査II区で検出された土坑群と同様、自然堤防上に存在したと考えられる土坑が11基発見されている。検出標高は4.9～5.0mである。ここでは主な土坑について記述し、他については計測表を参照されたい。

SK1 (Fig.112)

調査区の南端部中央に位置し、規模は1.10×0.96mを測る。平面形は不整楕円形を呈す。検出面からの深さは11cmであり、中央部分でやや深くなる。埋土は灰褐色土であり、炭化物の小片が含まれている。

出土遺物は29点存在し、この内図示し得た甕(76)は土坑の南西部分から纏まって出土した。
SK2 (Fig.112)

調査区の南端部中央に位置し、SK1に隣接する。規模は79×65cmであり、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは18cmである。埋土は灰褐色土であり、最下位に炭化物の混入する黒灰色土が見られた。

出土遺物は9点で、甕の口縁部等が存在するが図示できるものはない。

SK7 (Fig.112)

調査区の南部東端に位置し、東半を調査区東壁に画される。規模は東壁まで94cm、幅68cmを測る。検出面からの深さは31cmである。土坑内に2ヶ所焼土部分が検出されている。

出土遺物は23点あり、この内図示できるものは79・80の2点である。79は甕の口頸部。80は底部である。

SK10 (Fig.112)

調査区の南東端部で検出された土坑であり、調査区東壁の一部を画される。規模は南北1.62m、東壁まで1.48mを測る。検出面からの深さは30cmである。東壁際に2個の柱穴が存在するが、先後関係は不明である。

出土遺物は37点である。遺物の出土分布は南東から北西にやや長く方向性を持っており、図示した壺(81)の破片は一部SK10の北西肩部を越えて発見された。緩やかな氾濫による包含層遺物の堆積状況を先に述べたが、ここで見る様に土坑内出自の遺物についてもこの影響を受けた可能性が高い。他に図示したのは82の壺底部である。

SK11 (Fig.112)

調査区の南東部で発見された土坑である。規模は長径92cm、短径72cmであり、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは10cmでやや浅いが、遺物は比較的良く残存していた。

出土遺物は62点で、図示し得たものは83の甕1点のみである。83は大型の破片で纏まって土坑内から出土した。

2) 包含層からの遺物 (Fig.115)

遺物の分布として図化したものは、自然堤防上から後背湿地側への移動が特徴的に認められた箇所である。調査区の他の部分でも標高を下げながら遺物の出土を見たが、北西側への方向性が顕著で、分布密度が高かったのはこの部分である。先述のとおり緩やかな氾濫の結果生じた遺物の移動痕跡を示すもので、調査区外西方にも幾分か延びるものであろう。ここから氾濫を司った流路の流れは南西から北東方向であったことがほぼ理解できる。また、多量の遺物が帯状に堆積した原因としては、自然堤防上の人為的な改変による流水の集中や土坑の分布密度などが考えられる。1基の土坑が破壊を受けたとしては、やや遺物量が多い。

出土遺物の中で図示し得たものは85から118である。85は縄文後期の浅鉢か。鉾物質胎土を持つ。86から100は壺である。101から117は甕である。118は弥生後期末の鉢であり、後背湿地

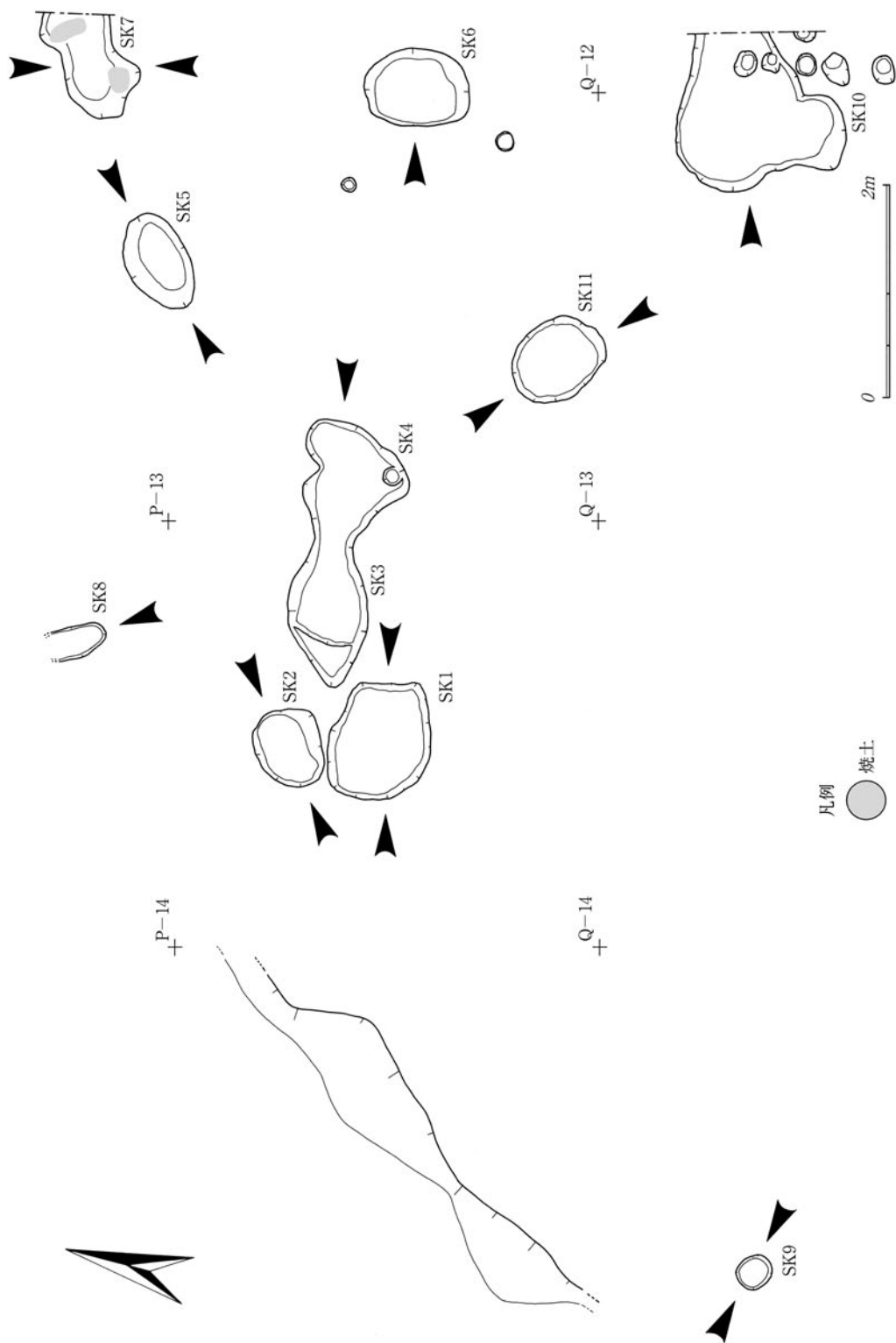


Fig.112 調査III区遺構平面図 (S : 1/60)

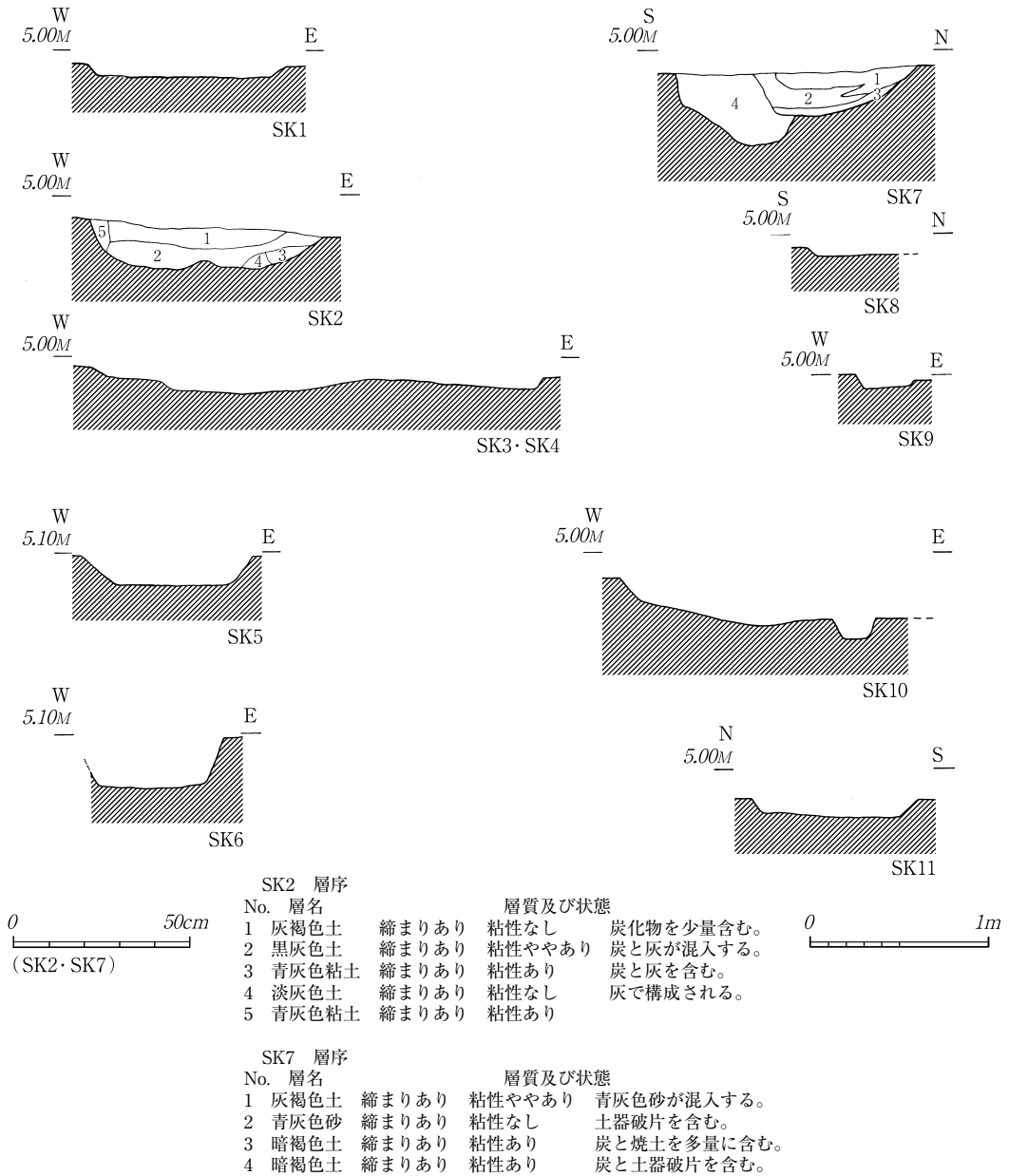
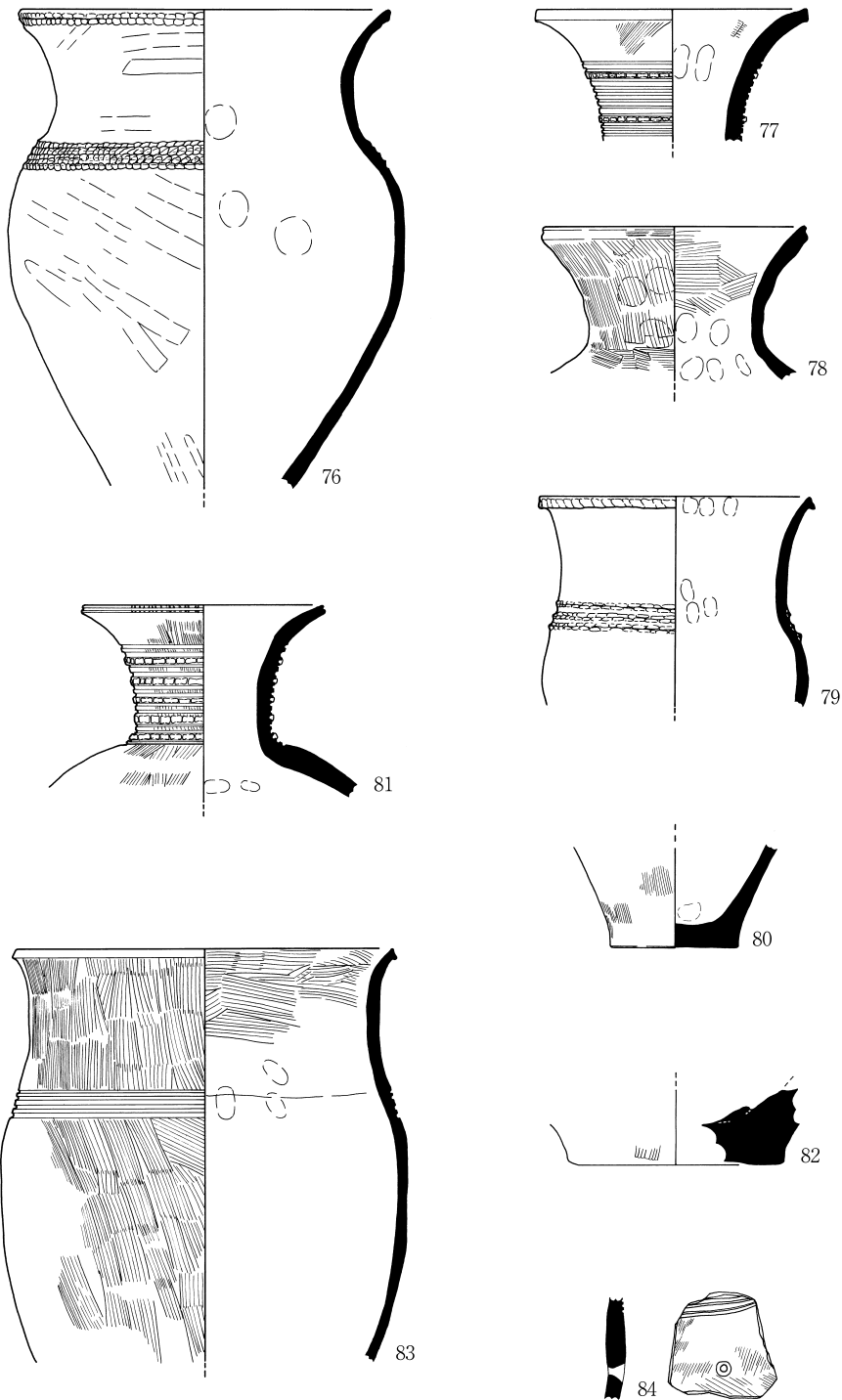


Fig.113 調査Ⅲ区遺構セクション図・エレベーション図 (S:1/40,1/20)

側に堆積層が下った部分ではこの時期の包含層が残存していた可能性が高い。119から121は調査区設定前のトレンチから出土した遺物である。119・120は弥生後期末から古墳初頭の鉢・甕である。121は弥生前期末の甕か。



0 10cm

Fig.114 調査Ⅲ区出土遺物実測図 3 (S : 1/4)

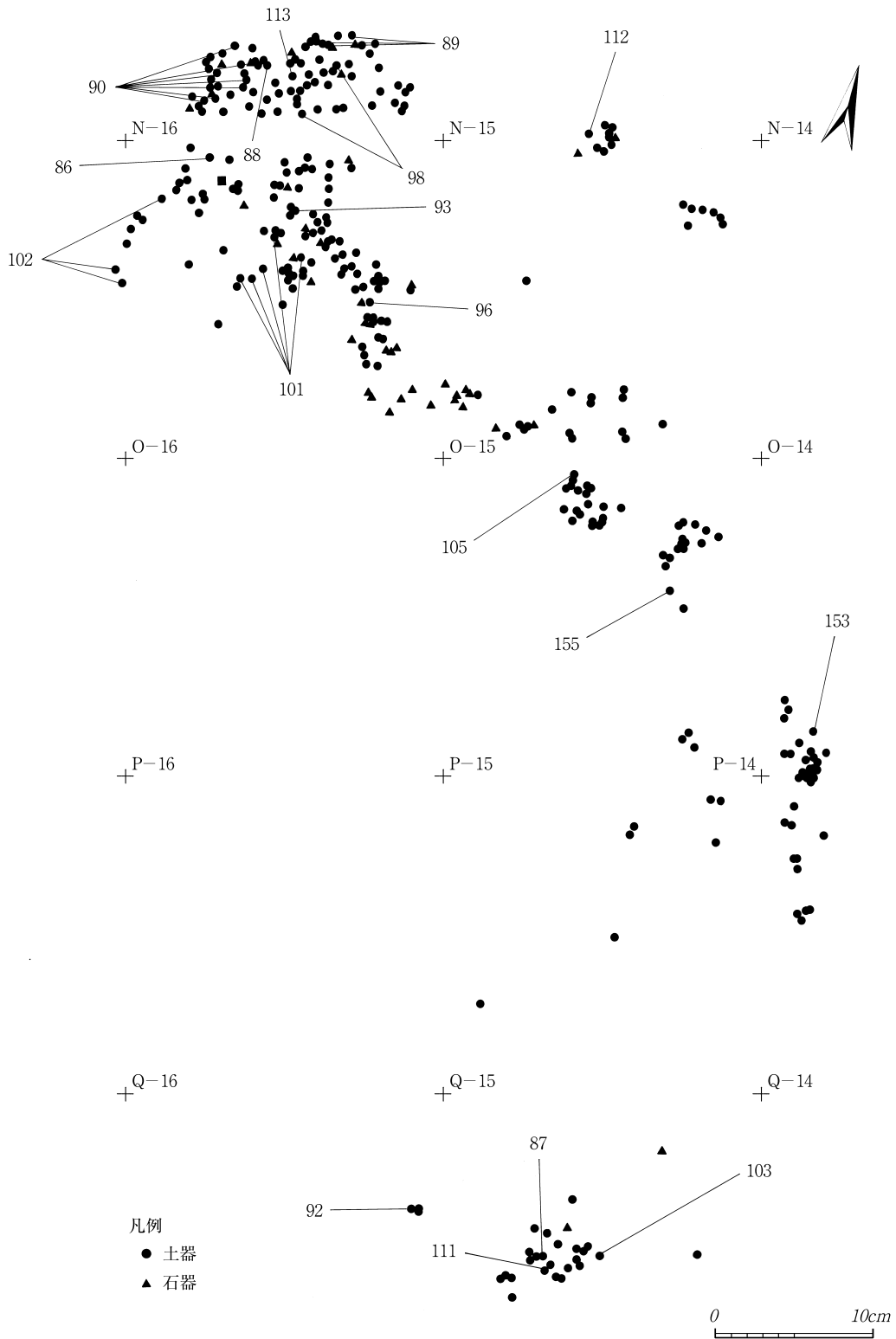


Fig.115 調査Ⅲ区包含層遺物分布図 (S : 1/40)

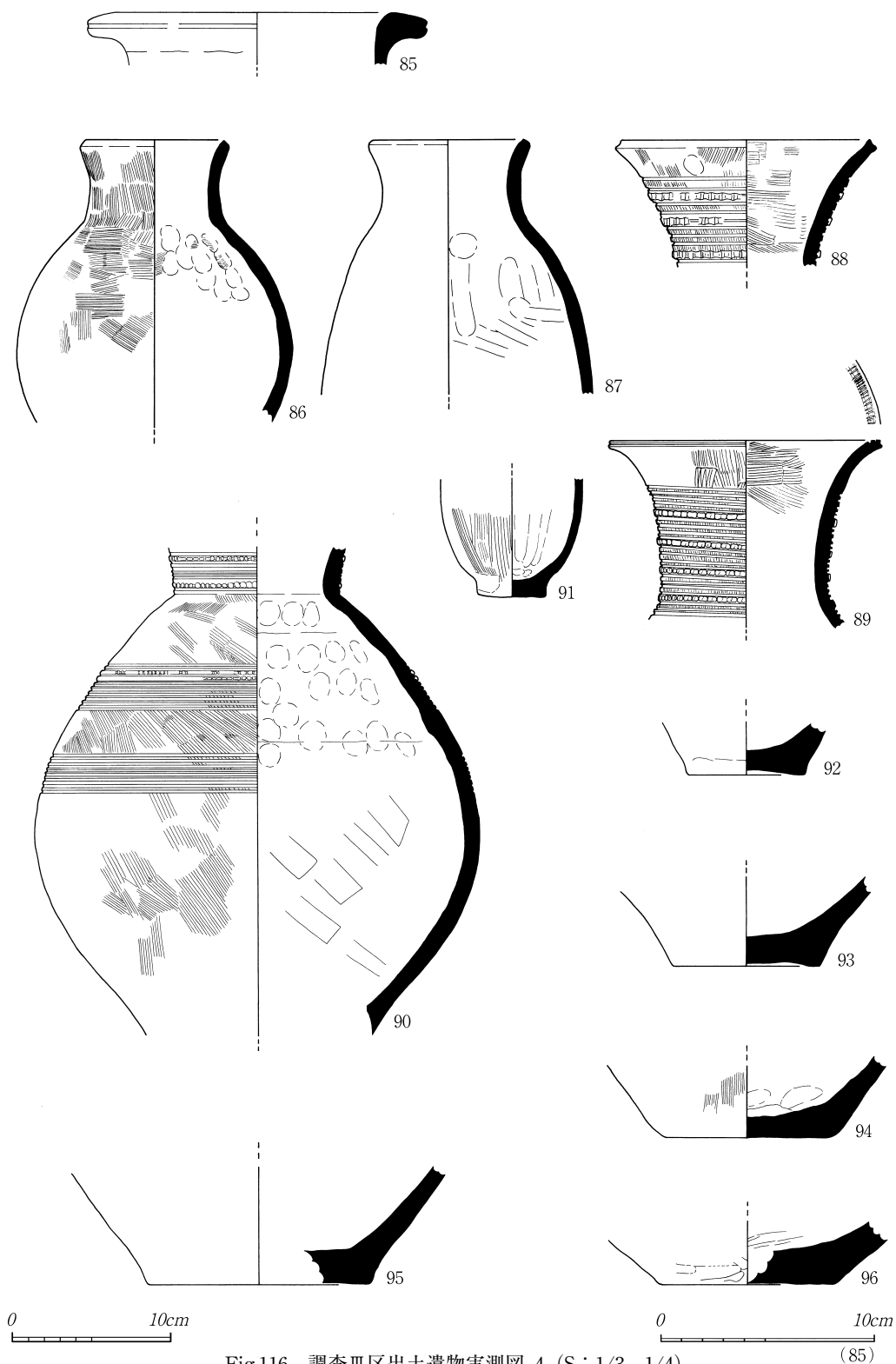


Fig.116 調査III区出土遺物実測図 4 (S : 1/3, 1/4)

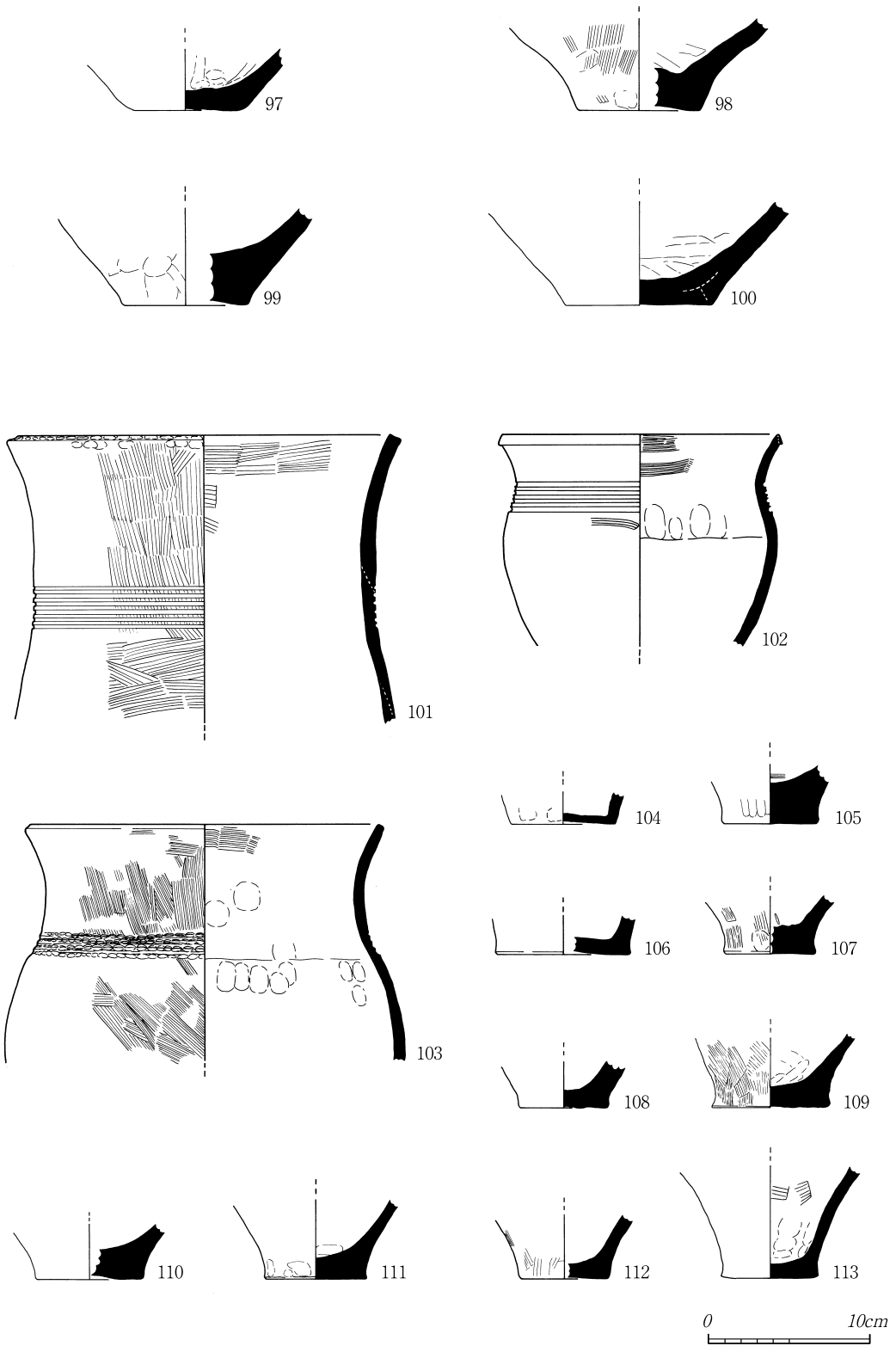


Fig.117 調査Ⅲ区出土遺物実測図 5 (S : 1/4)

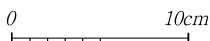
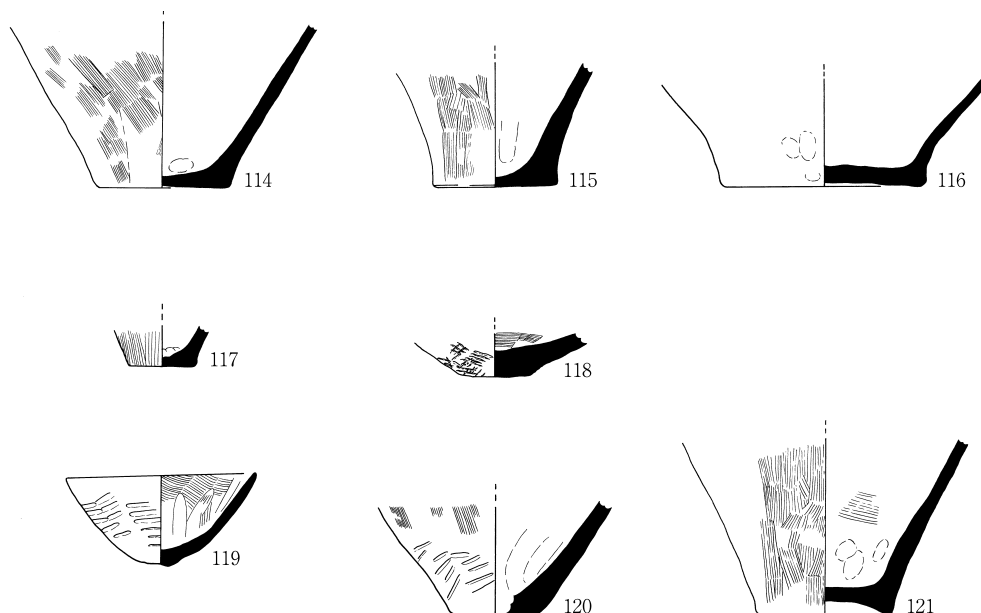


Fig.118 調査Ⅲ区出土遺物実測図 6 (S:1/4)

(4) 古墳時代

1) 遺構と遺物

SR301

層序の項で述べた様にSR301は調査区の中央部分を東西方向に流れていた流路群である。無論、東壁セクション (Fig.37) には調査区中央部を流れていたと考えられる古い流路の堆積物が認められることから、ここでSR301として扱うものはY層やその上位に繋がる自然堤防堆積層を再びこの北側を流れることで削り始めた時期以降の流路群と言える。

SR301は初期の段階には南寄りを行っていた。やがて、時期を追うごとに北側へ徐々に河道は移動し、最終的に調査Ⅰ区やⅡ区で流木や木製品を含んで廃棄流路となった時には、調査ⅢJ区の南にまで達していた。調査時にSR301として扱った平面的な流路方向が南東方向を指していたことを考え合わせると、蛇行の程度が廃棄直前に最大に達していたと考えられる。

出土遺物の多くは弥生後期後半から古墳時代の遺物であるが、幾らか先行する時期、特に前期末から中期の遺物が含まれていることは否めない。但し、その量は包含層や遺構群に近いSR201と比較すると格段に少ない。

出土遺物の中で図示できたものは122から147である。122から126は壺である。127から140は甕である。141から145は鉢である。146は器台。147は高杯の坏部である。

2) 包含層からの遺物

148は調査区の南壁セクション (Fig.109) のⅣ層から出土した須恵器の高杯坏部である。

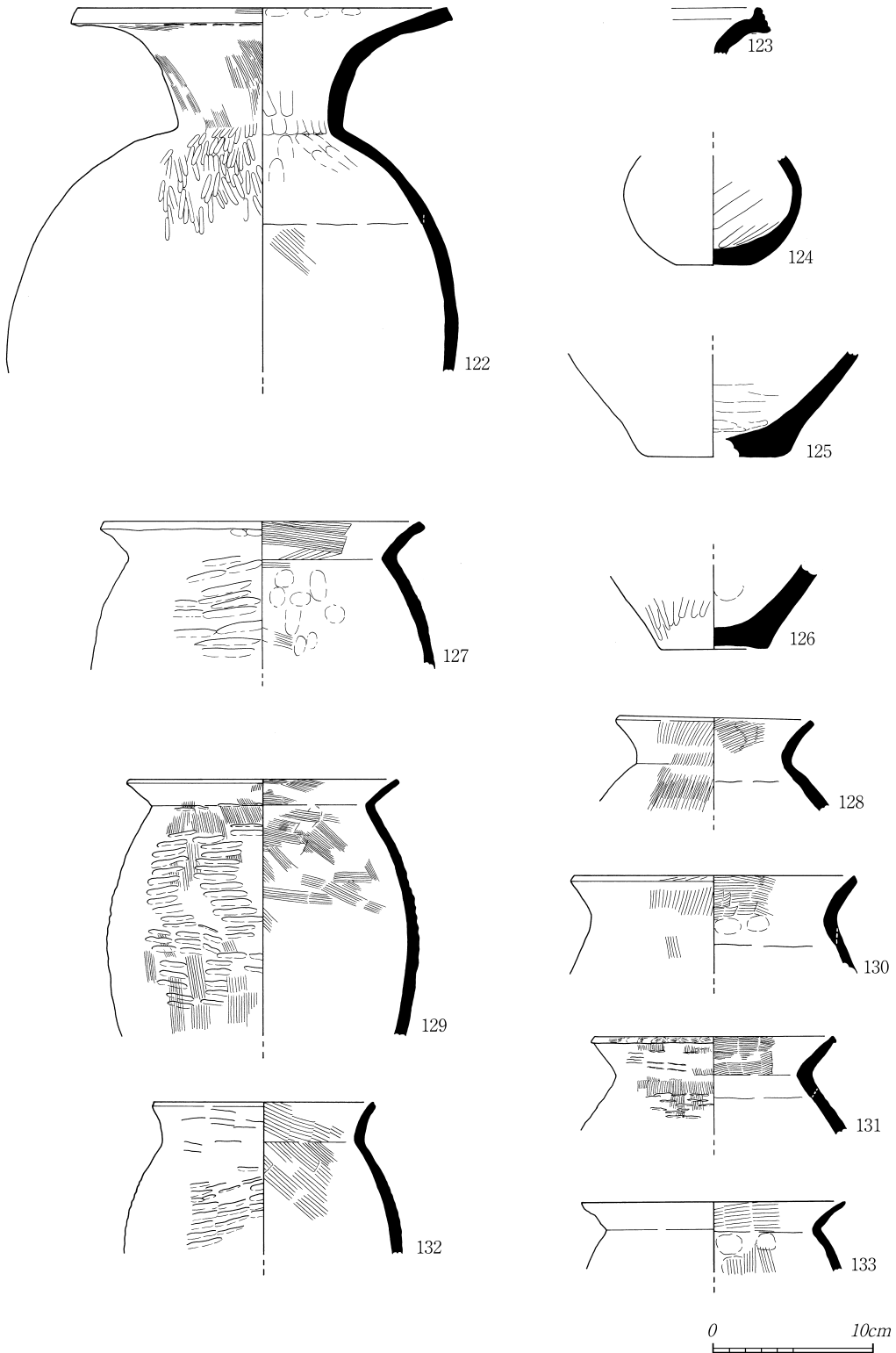


Fig.119 調査Ⅲ区出土遺物実測図 7 (S:1/4)

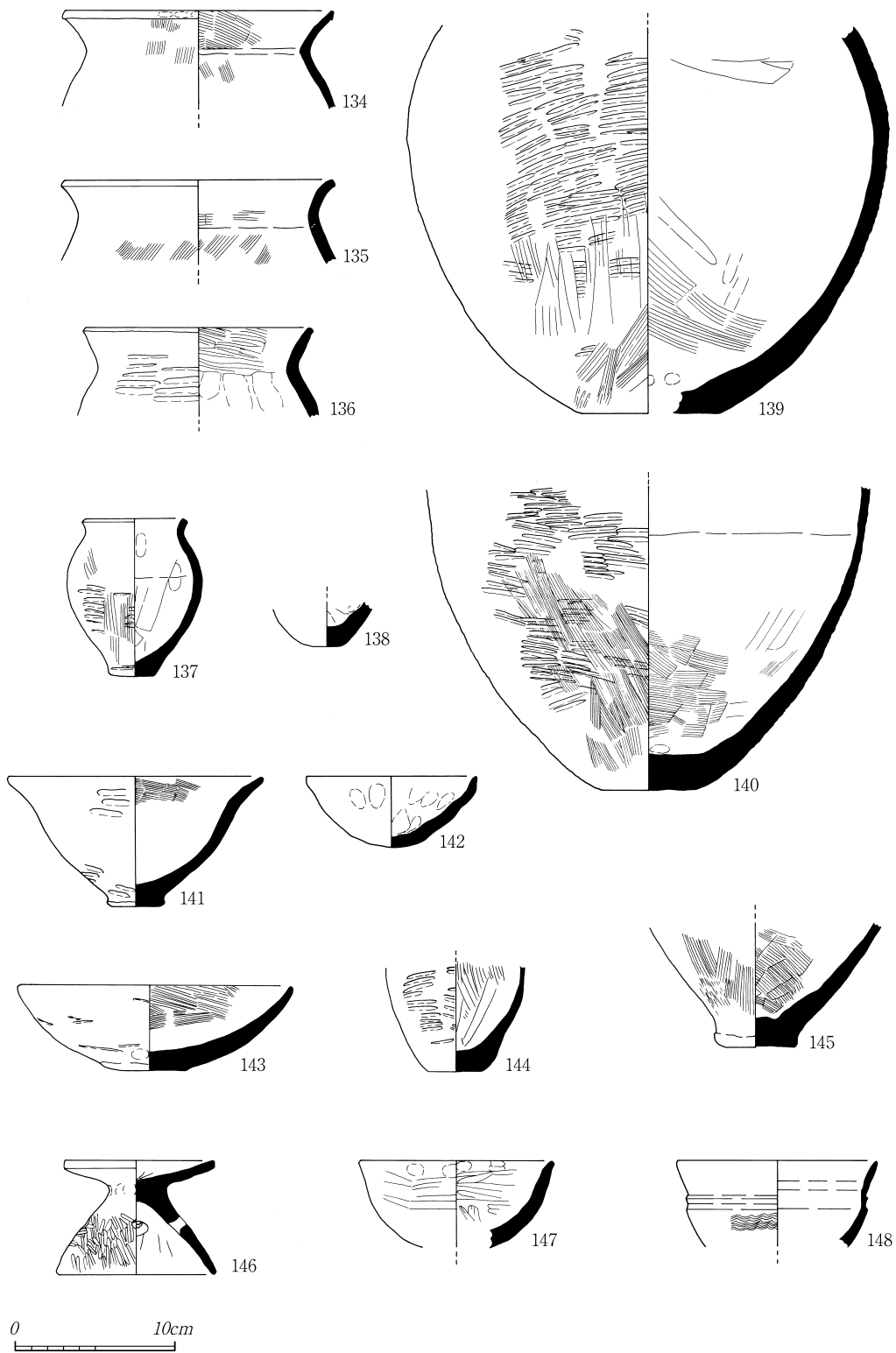


Fig.120 調査Ⅲ区出土遺物実測図 8 (S:1/4)

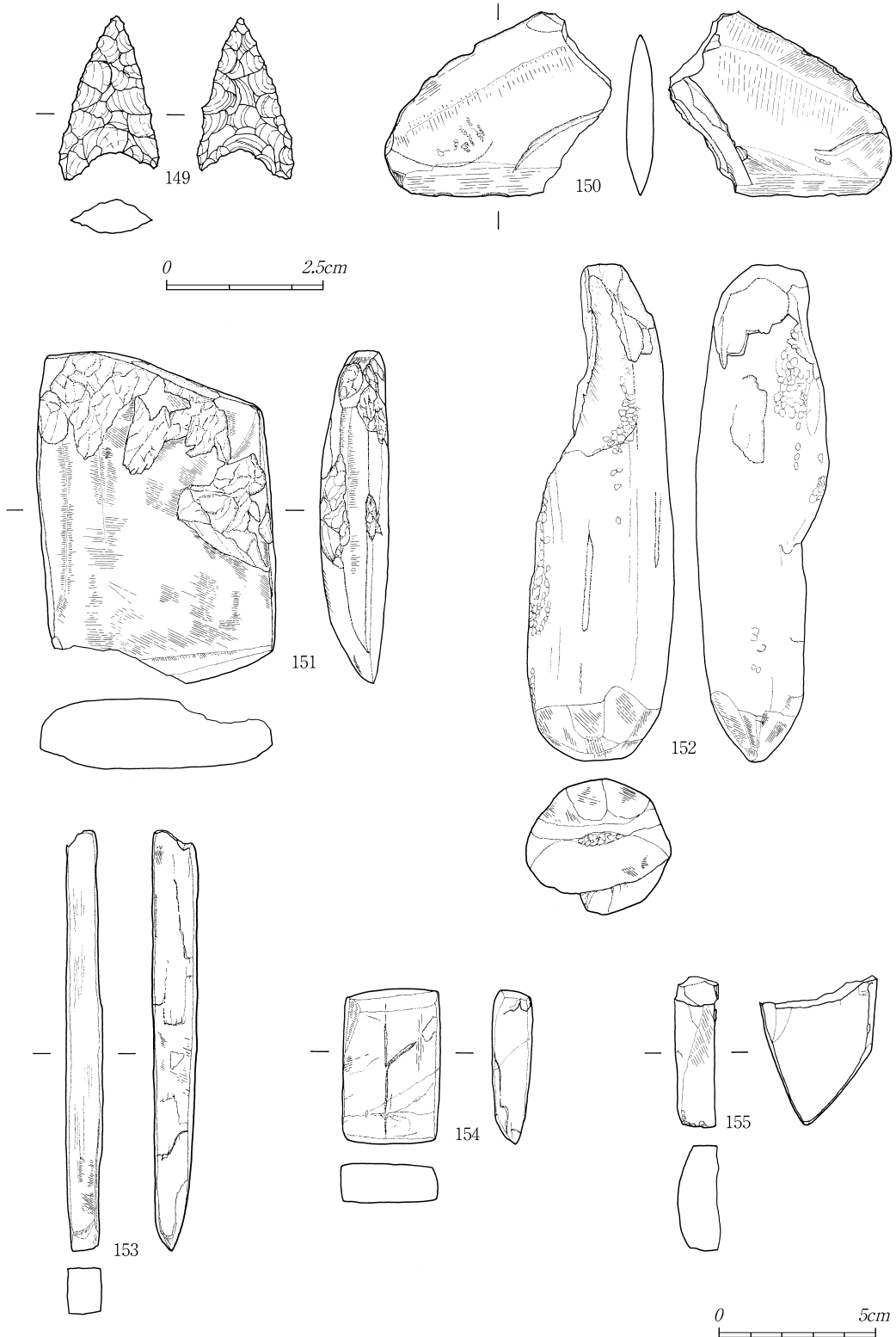


Fig.121 調査Ⅲ区出土遺物実測図 9 (S : 1/1,1/2)

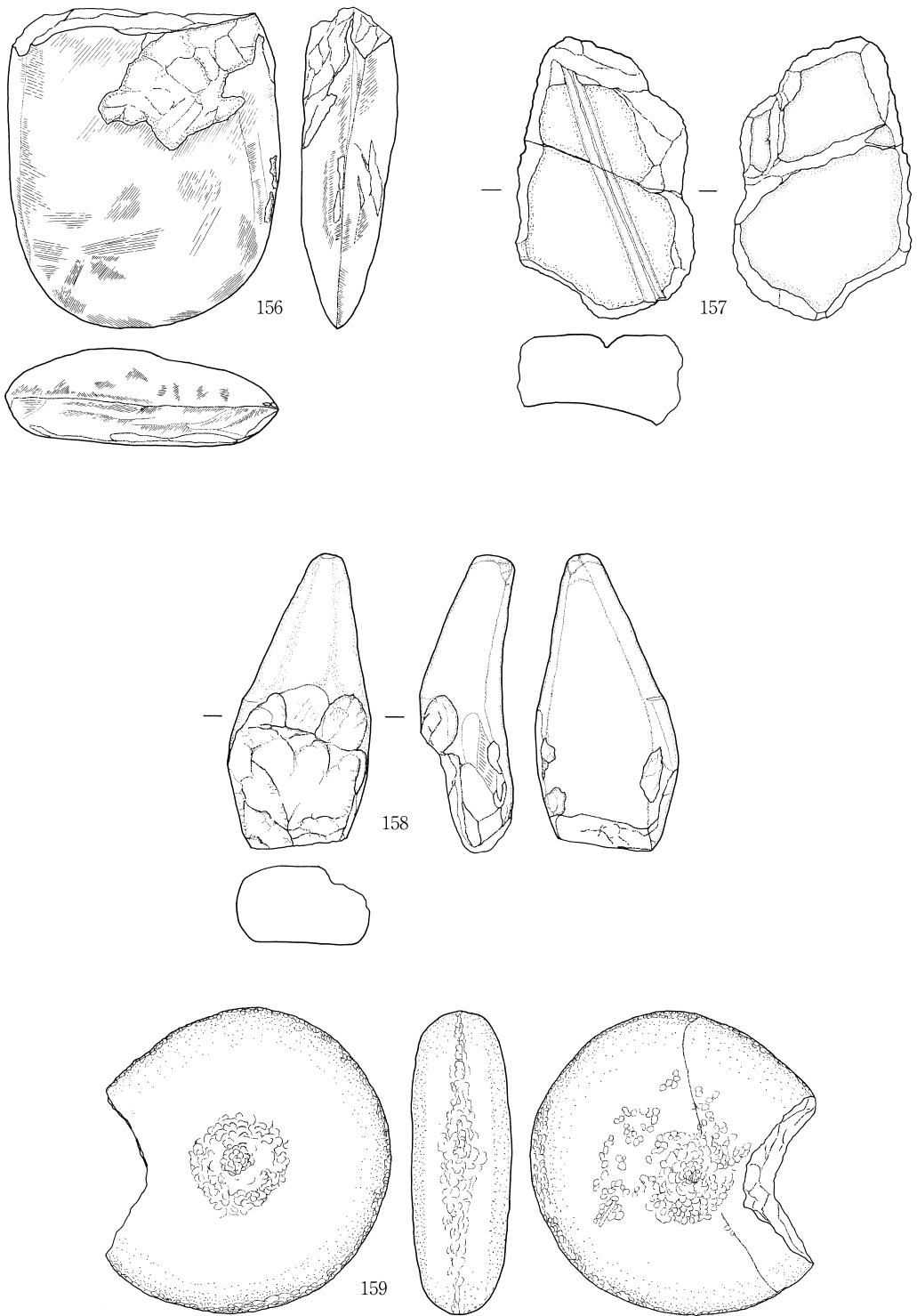


Fig.122 調査III区出土遺物実測図 10 (S : 1/2)

Tab. 6 調査Ⅲ区遺構計測表

遺構名	グリッド	検出標高(m)	規模(m)	深さ(cm)	平面形	出土土器点数	その他	Fig.No	出土遺物Fig-No	
SK 1	P-13	4.96	1.10×0.96	11	不整楕円形	29点		112・113	114	76
SK 2	P-13	5.01	0.79×0.65	18	楕円形	9点		112・113		
SK 3・4	P-12・13	5.19	2.63×1.07	39	不整形	23点		112・113	114・122	77・158
SK 5	O・P-12	5.09	0.96×0.57	35	楕円形	29点		112・113	114	78
SK 6	P-11・12	5.09	0.99×0.73	29	楕円形	6点		112・113		
SK 7	O-11	4.95	(0.94)×0.68	31	不整形	23点		112・113	114	79・80
SK 8	O-13	4.95	0.51×0.30	15	—	2点		112・113		
SK 9	Q-14	5.00	0.34×0.30	7	楕円形	—		112・113		
SK 10	Q-11・12	4.89	1.62×(1.48)	30	不整形	37点	彩文土器	112・113	114	81・82
SK 11	P・Q-12	4.85	0.92×0.72	10	楕円形	62点		112・113	114	83
P 1	Q-11	4.75	0.21×0.20	39	不整方形	—		112・113		
P 2	Q-11	4.75	0.21×(0.10)	14	—	1点		112・113		
P 3	Q-11	4.92	0.27×0.20	24	楕円形	1点		112・113	114	84

Tab.7 調査III J区・III区遺物観察表1

fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
99-1		b-1	K	有文深鉢	口縁部	[11.4]				内面ミガキ。外面縄文(RL)・区画沈線・鍵手状J字紋・赤色顔料。波状口縁。	褐灰色	灰黄褐色	灰色	磨消縄文ベンガラ
100-2		c-1	K	有文深鉢	口縁部	[14.9]				内面ヘラミガキ。外面縄文(RL)・区画沈線・J字紋。波状口縁。	灰白色	黄灰色	褐灰色	磨消縄文
101-3		b-1	K	有文深鉢	口縁部	[15.6]				内面ナデ。外面貝殻条痕・区画沈線。波状口縁。胎土中に植物繊維痕。	にぶい赤褐色	にぶい橙色	褐灰色	磨消縄文
101-4		a-1	K	有文深鉢	口縁部	[5.3]				内面条痕。外面擬縄文?太い沈線。	褐灰色	褐色	黄灰色	磨消縄文
101-5			K	有文深鉢	口縁部	[6.3]				外面貝殻腹縁紋・方形区画。波状口縁。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	灰色	磨消縄文
101-6		b-1	K	有文深鉢	口縁部	[4.9]				内面ナデ。外面縄文(RL)・区画沈線。	灰褐色	灰褐色	黒褐色	磨消縄文
101-7		b-2	K	有文深鉢	口縁部	[2.8]				口唇に沈線・斜位刻み。	灰白色	灰白色	暗灰色	磨消縄文
101-8		b-1	K	有文深鉢	口縁部	[4.8]				内面ナデ?外面沈線・方形区画。波状口縁。	褐色	にぶい褐色	灰色	屈曲部
101-9		c-1	K	有文深鉢	口縁部	[4.1]				内面ヘラミガキ。外面縄文(RL)・区画沈線。波状口縁。	橙色	橙色	褐灰色	磨消縄文
101-10		c-1	K	有文深鉢	口縁部	[3.8]				外面貝殻腹縁紋・区画沈線。波状口縁。	にぶい橙色	にぶい橙色	にぶい橙色	
101-11			K	有文深鉢	口縁部	[3.7]				内面ミガキ。外面貝殻腹縁紋・太い区画沈線。波状口縁。	にぶい褐色	灰黄褐色	灰黄褐色	磨消縄文
101-12		b-1	K	有文深鉢	口縁部	[3.2]				内面ナデ。外面貝殻腹縁紋・太い区画沈線。	灰褐色	にぶい褐色	灰黄褐色	磨消縄文
101-13		c-1	K	有文深鉢	口縁部	[5.0]				内面ヘラミガキ。外面縄文(RL)・区画沈線。波状口縁。	黒褐色	にぶい橙色	黒褐色	磨消縄文
101-14		b-1	K	有文深鉢	口縁部	[4.1]				内面ナデ。外面貝殻腹縁紋・沈線。口唇に円形刺突。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	黒褐色	磨消縄文
101-15		c-1	K	有文深鉢	口縁部	[2.1]				内面ナデ。外面は縄文(RL)・区画沈線。	灰白色	浅黄褐色	褐灰色	
101-16		c-1	K	有文深鉢	口縁部	[4.7]				内面ナデ。外面貝殻腹縁紋・太い区画沈線。	にぶい橙色	にぶい橙色	褐灰色	
102-17		b-1	K	有文深鉢	口縁部	[1.5]				内面ナデ。外面貝殻腹縁紋・細い沈線。波状口縁?	灰褐色	灰褐色	黒褐色	磨消縄文
102-18			K	有文深鉢	口縁部	[2.7]				内面ナデ・煤付着。外面太い区画沈線。波状口縁。	黒褐色	橙色	黒褐色	
102-19		a'-0	K	有文深鉢	口縁部	[3.0]				内面ヘラミガキ。外面縄文(LR?)・区画沈線。波状口縁。	浅黄褐色	にぶい褐色	褐灰色	
102-20		a'-0	K	有文深鉢	口縁部	[2.9]				内面ナデ。外面2条の区画沈線。	にぶい黄褐色	にぶい橙色	灰色	
102-21		c-1	K	有文深鉢	口縁部	[3.9]				内面ミガキ。外面貝殻腹縁紋・太い区画沈線。波状口縁。	にぶい褐色	灰褐色	にぶい褐色	
102-22		a-1	K	有文深鉢	口縁部	[1.8]				内面沈線。口唇に幅3mm深さ2mmの斜位刻み。波状口縁?	灰白色	灰白色	灰色	
102-23		a-1	K	有文深鉢	口縁部	[5.0]				内面ナデ。外面2条の区画沈線。波状口縁。	灰黄褐色	にぶい褐色	灰色	磨滅が激しい。
102-24		c-1	K	有文深鉢	胴部	[7.2]				内面擦過。外面貝殻条痕・区画沈線。	にぶい褐色	灰褐色	褐灰色	磨消縄文

Tab.7 調査ⅢJ区・Ⅲ区遺物観察表2

fig-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
102-25		c-1	K	有文 深鉢	胴部		[3.9]			内面ナデ。外面貝殻条痕・区 画沈線。	にぶい 橙色	褐灰色	褐灰色	磨消縄文
102-26		c-0	K	有文 深鉢	胴部		[4.5]			内面条痕。外面貝殻腹縁紋・ 太い区画沈線。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	褐灰色	磨消縄文
102-27		a-1	K	有文 深鉢	胴部		[3.4]			内面ヘラミガキ。外面縄文(RL) ・太い区画沈線。	褐灰色	褐灰色	黒褐色	磨消縄文
102-28		c-0	K	有文 深鉢	胴部		[3.5]			内面ミガキ。外面縄文(RL)・ 太い区画沈線。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	黄灰色	接合部
102-29		a-1	K	有文 深鉢	胴部		[4.0]			内面ナデ?外面縄文(LR)・太 い区画沈線。	にぶい 褐色	にぶい 褐色	褐灰色	磨消縄文
103-30		b-1	K	有文 深鉢	底部		[3.4]	10.8		内面ヘラミガキ。外面縄文(RL) ・区画沈線。区画内赤色顔料 塗布。	褐灰色	灰黄褐色	灰色	ベンガラ
103-31		c-1	K	浅鉢	口縁部		[3.7]			内面条痕。外面貝殻腹縁紋・ 太い区画沈線。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	褐灰色	磨消縄文
103-32			K	浅鉢	口縁部		[4.2]			内外面ヘラミガキ。外面にヘ ラ圧痕。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	にぶい 黄褐色	
103-33		c-0	K	浅鉢	口縁部		[2.9]			内面粗なミガキ。外面ナデ? 口唇上面に直径2~3mmの円形 刺突列。	にぶい 黄橙色	灰黄色	灰白色	
103-34		a-1	K	浅鉢	口縁部		[4.9]			内外面ナデ?	灰白色	にぶい 黄橙色	褐灰色	
103-35		c-0	K	浅鉢	胴部		[3.7]			内面ヘラミガキ。外面縄文(RL) ・太い区画沈線。	にぶい 黄橙色	灰褐色	褐灰色	磨消縄文
103-36		a-1	K	浅鉢	胴部		[3.0]			内面ナデ?外面縄文(LR)・区 画沈線。	褐灰色	灰褐色	にぶい 褐色	磨消縄文
103-37			K	鉢?	底部		[3.1]	8.0		内面ナデ。外面押圧痕? 平底。	褐色	橙色	褐灰色	
103-38		c-1	K	浅鉢	底部		[1.5]			底面は平底。八角形を成す?	橙色	にぶい 黄橙色	橙色	
103-39		a-1	K	深鉢	口縁部	31.0	[7.0]			内外面条痕。平縁口縁。	褐灰色	灰褐色	褐灰色	
103-40		a-1	K	深鉢	口縁部	34.8	[9.8]			内外面条痕。平縁口縁。	黄灰色	にぶい 黄橙色	褐灰色	
103-41		c-1	K	深鉢	口縁部	29.2	[7.1]			内面ナデ。外面条痕。外面に 煤付着。平縁口縁。	灰黄色	にぶい 褐色	黄灰色	
104-42		a-1	K	深鉢	口縁部		[3.8]			内面ナデ。外面条痕。	灰褐色	にぶい 黄橙色	褐灰色	
104-43			K	深鉢	口縁部		[6.6]			内外面条痕。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄褐色	黄灰色	
104-44		a-1	K	深鉢	口縁部		[4.3]			内外面条痕。	にぶい 褐色	にぶい 赤褐色	褐灰色	
104-45		b-1	K	深鉢	胴部		[8.1]			内面ナデ。外面条痕。	にぶい 赤褐色	にぶい 黄褐色	にぶい 赤褐色	
104-46		c-1	K	深鉢	胴部		[7.3]			内外面条痕。外面に煤付着。	灰白色	にぶい 黄褐色	灰白色	
104-47		b-1	K	深鉢	胴部		[7.2]			内外面条痕。外面に煤付着。	褐色	にぶい 黄褐色	褐灰色	
104-48			K	深鉢	胴部		[6.8]			内面弱いケズリ。外面条痕。	褐色	にぶい 黄褐色	褐灰色	

Tab.7 調査III J区・III区遺物観察表3

fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
104-49		a-1	K	深鉢	胴部		[5.4]			内面ナデ?外面条痕。	にぶい褐色	灰褐色	褐灰色	
104-50		b-1	K	深鉢	底部		[1.6]		10.4	内面弱いケズリのちナデ。外面条痕。平底。	橙色	黄橙色	褐灰色	
104-51		c-1	K	深鉢	底部		[5.8]		8.0	内面ナデ。外面ナデ?	褐灰色	にぶい黄橙色	褐灰色	
104-52		b-1	K	深鉢	底部		[2.0]		—	内面ナデ。外面条痕?	褐色	にぶい褐色	灰黄色	
105-53		c-0	K	深鉢	底部		[9.2]			内面ナデ。外面条痕。平底。	橙色	にぶい黄橙色	褐灰色	
105-54			K	有紋深鉢	口縁部		[4.9]			内面ナデ。外面貝殻腹縁紋・太い区画沈線。	淡黄色	淡黄色	暗灰色	磨消縄文
105-55			K	深鉢	口縁部	14.8	[4.0]			内面ナデ。外面条痕。	灰褐色	赤褐色	褐灰色	
fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
遺構	グリット	口径				器高	胴径	底径	内面		外面	断面		
105-56		b-1	K	母岩	—	14.4	13.7	2.9	635.0	自然面を残す。サスカイト。				
fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
遺構	グリット	口径				器高	胴径	底径	内面		外面	断面		
107-57		G-4	B	鉢	胴部		[4.7]			内面ミガキ。外面弱いケズリ。	にぶい黄橙色	褐灰色	褐灰色	
107-58		H-1	B	浅鉢	口縁部		[2.7]			内外面ミガキ。内面に沈線状の段部。	黒褐色	にぶい黄褐色	灰黄褐色	
107-59		B-1	B	浅鉢	胴部		[4.3]			屈曲部。内外面ミガキ。	褐灰色	灰黄褐色	灰黄褐色	
107-60		D-1	B	浅鉢	口縁部		[2.7]			内外面ミガキ。屈曲部。	褐灰色	褐灰色	褐灰色	
107-61		I-1	B	浅鉢	胴部		[2.3]			接合部。内外面ミガキ。	黒褐色	灰黄褐色	にぶい褐色	
107-62		I-2	B	深鉢	口縁部		[7.8]			内外面条痕。口唇刻み。密。	灰黄褐色	暗赤褐色	にぶい赤褐色	
107-63		H-1	B	深鉢	口縁部		[5.3]			内面ナデ。外面条痕。口唇に浅い刻み。	灰黄色	浅黄色	浅黄橙色	
107-64		C	B	深鉢	口縁部		[4.1]			内外面条痕。口唇刻み。外面に煤付が着する。	褐灰色	にぶい黄橙色	灰黄褐色	
107-65		H-1	B	深鉢	口縁部		[6.8]			内面条痕後ナデ。外面条痕。口唇の内・上面に刻み。	にぶい黄橙色	黄灰色	にぶい黄橙色	
107-66		C	B	深鉢	口縁部		[4.0]			内面条痕。外面条痕後ナデ。口唇に擬縄文を施す。	黒色	褐灰色	褐灰色	
fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
遺構	グリット	口径				器高	胴径	重量(g)	内面		外面	断面		
108-67		J-2	B	勾玉		2.9	1.2	0.7	0.7	開口部4mm、中央は1mmで貫通する。両面からの研磨による。翡翠輝石?				
108-68		C	B	石斧		3.5	1.6	0.7	0.7	磨製石斧。片刃。細部加工具または調整具。蛇紋岩。				
108-69		C-4	B	石斧		7.5	3.0	0.8	23.6	磨製石斧。両刃。刃部は弧状を成す。蛇紋岩。				
108-70		I-2	B	石斧		8.8	4.6	2.0	120.0	磨製石斧。				
108-71		C-2	B	叩石		10.9	5.1	2.1	200.0	敲打具。中央部に鼠歯状痕が顕著。結晶片岩。				

Tab.7 調査ⅢJ区・Ⅲ区遺物観察表4

fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グロット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
110-72	SK1	P-12	K	浅鉢	口頸・ 体部	9.2	口縁[4.5] 体部[8.6]	[26.6]		内面ヘラミガキ。外面ヘラミガキ・浅く細い区画沈線・沈線内刻突列・貝殻施紋。	浅黄橙色	にぶい黄橙色	浅黄橙色	縄文後期中葉?
111-73		P-14		深鉢	口縁部		[3.8]			内外面条痕。口唇に貝殻?による刻み。	灰色	にぶい黄橙色	灰色	縄文晩期?
111-74				深鉢	口縁部		[6.9]			内外面条痕。	灰黄褐色	にぶい赤褐色	褐灰色	縄文晩期?
111-75		P-13	B	深鉢	口縁部		[5.7]			内外面条痕。	にぶい褐色	にぶい黄橙色	黄灰色	縄文晩期
114-76	SK1			甕	口頸・ 胴部	20.4	[26.5]	22.2		内外面ナデ・胴部に煤付着。頸部下に3条小突帯・押圧痕。口唇外に1条突帯・押圧痕。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	黒褐色	
114-77	SK4			壺	口頸部	15.0	[7.3]			内面ナデ・押圧痕。外面ハケ・ヘラ描き沈線帯・2条の断面四角形刻目突帯。	灰褐色	浅黄橙色	黄灰色	
114-78	SK5			壺	口頸部	14.4	[8.5]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。口唇一部ハケ。	にぶい橙色	にぶい橙色	灰白色	
114-79	SK7			甕	口頸・ 胴部	15.1	[11.6]			内面ナデ・押圧痕。外面ナデ・頸部下に3条小突帯・口唇外1条突帯。	灰褐色	灰褐色	灰白色	
114-80	SK7			甕	底部		[5.5]		7.0	内面ナデ。外面ハケ。平底。	灰褐色	にぶい橙色	灰黄褐色	
114-81	SK10			壺	口頸部	13.2	[10.6]			内面ナデ・押圧痕。外面ハケ・ヘラ描き沈線帯・5条の断面四角形刻目突帯。	褐色	にぶい橙色	にぶい橙色	
114-82	SK10			壺	底部		[4.2]		12.0	内面ナデ・粘土塊付着。外面ハケのちナデ。平底。	黄灰色	灰白色	黄灰色	
114-83	SK11			甕	口頸・ 胴部	21.0	[22.9]			内面横ハケのちナデ・押圧痕。外面縦ハケ・頸部下4条ヘラ描き沈線。	灰褐色	灰褐色	浅黄橙色	
114-84	P3			壺	胴部		[5.4]			直径4mm(開口部11mm)の円孔を穿つ。	浅黄色	浅黄色	灰白色	
116-85		K-12	Y	浅鉢?	口縁部	12.8	[2.5]			内面ミガキ。外面ナデ。口唇外に浅い1条沈線。胎土中に鉾物を多く含む。	にぶい赤褐色	にぶい褐色	褐灰色	縄文後期
116-86		N-15	Y	壺	口頸・ 胴部	8.8	[17.7]			内面ハケのちナデ。外面ハケ。胴部は球形をなす。	灰色	淡黄色	褐灰色	
116-87		Q-14	Y	壺	口頸・ 胴部	9.4	[16.0]			内面ナデ。外面ナデ?	灰色	にぶい黄橙色	黄灰色	
116-88		M-15	Y	壺	口頸部	15.6	[8.0]			内外面ハケのちナデ。口頸部に沈線帯・断面四角形刻目突帯。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	灰色	
116-89		M-15	Y	壺	口頸部	17.0	[11.7]			内面ハケのちナデ。外面ハケ・沈線帯・断面四角形刻目突帯。口唇内2条沈線・刻み、端1条沈線。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	浅黄橙色	彩文土器
116-90		M-15	Y	壺	頸・胴部	30.6	[28.0]	28.0		内面ナデ・押圧痕。外面ハケのちナデ。頸部と胴部2ヶ所に沈線帯・断面四角形刻目突帯。	黒色	浅黄橙色	灰色	
116-91		N-15	Y	小型壺	胴・底部		[7.5]		4.3	内面ナデ。外面ハケ・下位は強い横ナデ。	黄灰色	褐灰色	にぶい褐色	
116-92		Q-15	Y	壺	底部		[3.3]		7.4	内面ナデ?外面ナデ。平底(浅い凹面)。	にぶい黄橙色	黒褐色	褐灰色	
116-93		N-15	Y	壺	底部		[5.6]		9.2	内面ナデ。外面ハケ。平底(浅い凹面)。	灰白色	にぶい橙色	灰白色	
116-94		J-12	Y	壺	底部		[4.5]		10.0	内面は浅い凹凸面。外面ハケ。平底。	灰色	にぶい橙色	灰色	

Tab.7 調査III J区・III区遺物観察表5

fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
116-95	SK1	K-13	Y	壺	底部		[7.4]		14.0	内外面ナデ。平底。	浅黄色	にぶい 橙色	黄灰色	
116-96		N-15	Y	壺	底部		[4.0]		11.0	内面ナデ。外面ナデ・ヘラミ ガキ?平底。	にぶい 黄橙色	黄橙色	黄灰色	
117-97		K-13	Y	壺	底部		[3.8]		6.6	内面ナデ。平底。	灰白色	灰白色	黄灰色	
117-98		M-15	Y	壺	底部		[5.7]		7.4	内面ナデ。外面ハケ。平底(浅 い凹面)。	黒色	橙色	黄灰色	
117-99	SK1	F-12 G-13	G	壺	底部		[6.0]		7.8	内面ナデ・粘土付着。外面ナデ。 平底(浅い凹面)。	黒色	にぶい 橙色	黄灰色	
117-100	SK4	K-13	Y	壺	底部		[6.4]		9.0	内外面ナデ。平底。	灰色	にぶい 黄橙色	褐灰色	
117-101	SK5	N-15	Y	甕	口頸・ 胴部	23.0	[17.7]			内面粗目ハケのちナデ。外面 ハケ・頸部下に6条ヘラ描き沈線。 口唇に押圧痕。	褐灰色	褐灰色	黄灰色	
117-102	SK7	N-15	Y	甕	口頸・ 胴部	17.2	[13.0]			内面ハケのちナデ。外面ハケ のちナデ・頸部下4条ヘラ描き 沈線。口唇外断面蒲鉾型突帯。	黒褐色	黒褐色	灰色	
117-103	SK7	Q-14	Y	甕	口頸部	21.6	[14.5]			内面ハケのちナデ・押圧痕。外 面ハケのちナデ・頸部下3条摘 み出し小突帯・指頭圧痕・爪痕。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	灰黄色	
117-104	SK10		Y	甕	底部		[2.0]		6.4	内面ナデ? (凹凸面)。外面 ナデ。平底(浅い凹面)。	灰色	灰色	灰白色	器壁薄
117-105	SK10	O-14	Y	甕	底部		[3.6]		5.6	内面ナデ。外面ナデ?平底。	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	褐灰色	
117-106	SK11	M-15	Y	甕	底部		[2.4]		8.0	内外面ナデ。平底(浅い凹面)。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	浅黄橙色	
117-107	P3	O-14	Y	甕	底部		[3.6]		5.4	内面ナデ(凹凸面)。外面ハケ。 平底。	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	黄灰色	
117-108			Y	甕	底部		[2.9]		5.4	内面ナデ。平底。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	浅黄橙色	
117-109		M-15	Y	甕	底部		[4.3]		7.0	内面ナデ。外面ハケ。平底。	褐灰色	褐灰色	褐灰色	
117-110		P-12	Y	甕	底部		[3.4]		6.6	内外面ナデ。平底(浅い凹面)。	にぶい 黄橙色	橙色	にぶい 橙色	
117-111		Q-14	Y	甕	底部		[4.9]		6.4	内面ナデ・押圧痕。外面ナ デ?・押圧痕。平底。	にぶい 黄褐色	黒褐色	褐灰色	
117-112		M-14	Y	甕	底部		[4.0]		5.4	内面ナデ。外面粗いハケ。平 底(浅い凹面)。	灰黄褐色	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	
117-113		M-15	Y	甕	底部		[7.0]		6.0	内面ハケのちナデ。平底。	浅黄色	灰白色	褐灰色	
118-114		Q-14	Y	甕	底部		[9.3]		7.2	内面ナデ。外面ハケ。平底。	灰色	灰色	褐灰色	
118-115			Y	甕	底部		[7.0]		7.0	内面ナデ・煤付着。外面細ハケ。 平底。	黄灰色	浅黄色	褐灰色	
118-116		J-12	Y	甕	底部		[6.1]		11.3	内面ナデ・押圧痕?外面ナデ・ 押圧痕。平底(浅い凹面)。	灰白色	灰白色	淡黄色	砂粒多 器壁薄
118-117		L-13	Y	鉢	底部		[2.3]		3.6	内面ヘラミガキ・赤色顔料。 外面ハケ。平底(浅い凹面)。	浅黄橙色	浅黄褐色	浅黄褐色	弥生前期末 ~中期

Tab.7 調査ⅢJ区・Ⅲ区遺物観察表6

fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
118-118		O-14	Y	鉢	底部		[2.5]		4.0	内面ハケ。外面タタキ。狭い平らな底。	橙色	にぶい 橙色	浅黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
118-119	TR-E			鉢		10.6	5.2			内面ハケのちナデ。外面タタキのちナデ?丸底。	浅黄橙色	浅黄橙色	浅黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
118-120	TR-E			甕	底部		[6.0]		5.0	内面ナデ。外面タタキのちハケ・煤付着。平底。	黄灰色	にぶい 橙色	浅黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
118-121	TR-E			甕	底部		[9.9]		7.6	内面ハケのちナデ・押圧痕。外面細目ハケ・底面ヘラミガキ。平底(浅い凹面)。	黒褐色	灰黄褐色	黄灰色	弥生前期末 ~中期
119-122	SR301	F-14	G	壺	口頸・ 胴部	23.0	[22.6]			内面ハケのちナデ・口縁部でミガキ。外面ハケのちナデ・胴部はヘラミガキ。口縁は大きく開く。	にぶい 黄橙色	浅黄橙色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
119-123	SR301	F-14	G	壺	口縁部		[2.9]			内外面ナデ。口唇端面に3条沈線。	灰白色	浅黄橙色	褐色	弥生後期
119-124	SR301	E-14	P	壺	胴・底部		[6.8]		4.6	内面ナデ。外面ナデ・煤付着。球形胴部。平らな底。	灰白色	灰白色	黄灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
119-125	SR301	F-15	G	壺	底部		[6.5]		9.0	内面ナデ。外面ナデ・ミガキ。平底。	黄灰色	黄灰色	黄灰色	弥生前期末 ~中期
119-126	SR301	F-14	G	壺	底部		[5.2]		6.6	内面ナデ。外面ヘラミガキ・煤付着。平底(浅い凹面)。	黒色	にぶい 橙色	にぶい 黄橙色	弥生前期末 ~中期
119-127	SR301	F-14	G	甕	口頸・ 胴部	19.5	[9.2]			内面ハケのちナデ・押圧痕。外面タタキのちナデ・煤付着。頸部は「く」の字に屈曲する。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	褐色	弥生後期末 ~古墳初頭
119-128	SR301	E-14	G	甕	口頸部	11.8	[5.7]			内面口縁部ハケ・胴部ナデ。外面ハケのちナデ。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	橙色	弥生後期?
119-129	SR301	G-13	G	甕	口頸・ 胴部	16.6	[16.0]			内面ハケのちナデ。外面タタキのちハケ・煤付着。頸部は「く」の字に屈曲する。	浅黄橙色	浅黄橙色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
119-130	SR301	F-14	G	甕	口頸部	17.4	[6.1]			内面ハケ・ナデ。外面ハケ。頸部は緩やかに屈曲する。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	灰白色	弥生後期末 ~古墳初頭
119-131	SR301	G-13	G	甕	口頸部	14.8	[6.1]			内面ハケ・ナデ。外面ハケ・煤付着。口唇押圧痕・ハケ。頸部は「く」の字状に屈曲する。	浅黄橙色	橙色	浅黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
119-132	SR301	G-13	G	甕	口頸・ 胴部	13.6	[9.5]			内面ハケのちナデ。外面タタキのちナデ。頸部は緩やかに屈曲する。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	浅黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
119-133	SR301	F-14	G	甕	口頸部	16.4	[4.4]			内面粗目ハケのちナデ。外面ナデ・煤付着。頸部は「く」の字状に屈曲する。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	黄灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-134	SR301	E-14	G	甕	口頸部	13.8	[5.6]			内面粗目ハケ・ナデ・押圧痕。外面タタキ・ナデ。頸部は緩やかに屈曲する。	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-135	SR301	F-14	G	甕	口頸部	16.6	[5.3]			内面ハケのちナデ。外面ハケのちナデ・煤付着。頸部は緩く屈曲する。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	にぶい 橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-136	SR301	F-14	G	甕	口頸部	16.6	[6.2]			内面ハケのちナデ。外面ハケのちナデ・煤付着。頸部は緩く屈曲する。	にぶい 褐色	にぶい 赤褐色	にぶい 橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-137	SR301	G-13	G	甕		6.0	9.8	8.4	2.8	内面ナデ。外面タタキのちハケ・ナデ。狭い平底。	浅黄橙色	浅黄橙色	浅黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-138	SR301	G-3	G	甕	底部		[2.8]		18.0	内面ナデ・圧痕。外面ナデ?狭い平底。	にぶい 橙色	にぶい 橙色	にぶい 黄橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-139	SR301	E-14	G	甕	胴・底部		[23.2]		9.0	内面ハケのちナデ・押圧痕。外面タタキのちハケ。胴部球形。平底。	褐色	浅黄橙色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-140	SR301	G-12	G	甕	胴・底部		[19.0]		6.0	内面ハケのちナデ・煤付着。外面タタキのちハケ・煤付着。狭い平底。	浅黄橙色	にぶい 橙色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭

Tab.7 III J区・III区遺物観察表7

fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	色 調			備 考
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	底径		内面	外面	断面	
120-141	SR301	G-13	G	鉢		15.8	8.1	—	3.0	内面ハケのちナデ。外面タタキのちナデ? 口縁で短く外反する。底部は突出した狭い平底。	橙色	橙色	橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-142	SR301		G	鉢		10.6	4.4	—	—	内面ナデ・押圧痕。外面ナデ?・押圧痕。丸底。椀形。	橙色	浅黄橙色	橙色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-143	SR301	G-13	G	鉢		16.8	5.3	—	5.0	内面ハケ・低位でヘラミガキ。外面タタキのちナデ。平底。皿形。	浅黄橙色	浅黄橙色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-144	SR301	G-13	G	鉢	体・底部		[6.6]		4.0	内面粗目ハケのちナデ。外面タタキ。底部煤付着・薬痕。平底。湯呑み形。	浅黄橙色	浅黄橙色	灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-145	SR301	F-14	G	鉢	底部		[7.7]		4.8	内面ハケ。外面細目ハケ。突出した狭い平底。	褐灰色	褐灰色	黄灰色	弥生後期末 ~古墳初頭
120-146	SR301	F-14	G	器台		9.4	7.1	—	9.6	内面ナデ。外面台部ナデ・脚部ヘラミガキ。脚部中位に凹形(直径6mm)の透かし孔4個?	にぶい 橙色	にぶい 橙色	浅黄橙色	古墳前期
120-147	SR301	F-15	G	高坏	坏部	11.9	[5.4]			内面ヘラミガキ。外面粗なヘラミガキ・煤付着。坏部は椀形。	橙色	橙色	にぶい 橙色	古墳前期
120-148	SR301	南壁	4	高坏	坏部	12.4	[5.4]			内面ナデ。外面ナデ・櫛描き波状紋。	灰色	灰色	褐灰色	須恵器 古墳後期
fig.-No.	地 点		層	器種	部 位	法 量 (cm)				特 徴	備 考			
	遺構	グリット				口径	器高	胴径	重量(g)					
121-149		N-14	Y	石鏃		2.5	1.4	0.5	13.0	凹基。緑色チャート。				
121-150	SR301		P	石包丁		7.3	4.9	0.9	45.0	直刃背湾形。泥岩。				
121-151		D-12	Y	石斧		10.4	7.3	2.2	294.0	扁平片刃。基部欠損後再加工し使用か。蛇紋岩。				
121-152		O-13	Y	石斧		15.6	4.7	4.3	374.0	乳棒状。自然礫の端部を加工。敲打痕を残す。泥質変成岩。				
121-153		N-15	Y	石斧		13.2	1.4	1.2	41.5	柱状石斧。扁平石斧の一部を再利用する? 泥質変成岩。				
121-154		O-14	Y	石斧		4.9	3.1	1.3	35.0	扁平片刃。側面も丁寧に研磨する。凝灰岩?				
121-155		P-14	Y	石斧		4.2	3.1	1.2	27.6	片刃石斧。肉厚で伐採斧の一部。				
122-156		P-12	Y	石斧		9.7	8.3	2.8	355.0	扁平石斧。刃部は両面から同程度研磨。				
122-157	SK3			砥石		8.1	5.2	2.2	138.1	有溝砥石。使用面は2面で溝は面はやや荒く、反面は滑らかで凹面を呈す。一部被熱。砂岩?				
122-158		N-15	Y	砥石		9.0	4.1	2.3	108.0	端部が舐先状に尖り、基部に段が残る。穿孔後の研磨具か。砂岩?				
122-159		N-13	Y	敲石		9.2	7.5	2.3	320.0	一部被熱。砂岩。				

第4節 IV区

(1) 調査IV区の概要

IV区は、調査対象地I区・II区の東側に設定された調査区であり、今回、柳田遺跡に設けられた調査区の東端にあたる。現況は畑地であり、標高8.0m前後を測る。調査区は対象地に

任意にグリッドを設定し、トレンチ調査で遺構・遺物がまとまって検出された箇所(南部)を拡張するかたちで調査を行った。グリッドの方向はN-19°-Wであり、NはIV系座標北を指す。南北ラインにアルファベット、東西ラインにアラビア数字を用い、遺物の取り上げ等にはこのグリッドNo.を使用した。

調査は、遺物包含層まで重機を使用し、包含層以下、遺構の掘削は人力による精査をおこなった。地表下1.3~1.5m、標高5.15~5.22mで遺物包含層を確認した。この層は、II区で確認されているY層群(23・28・29層)であり、弥生時代前期末~中期初頭にかけての遺物を中心に包含している。この包含層は、調査区南端部周辺で遺物の出土が多くみられ、北に向って少なくなるとともに、やや下がり気味に堆積している。この包含層直下で調査区南端部のb-2・c-2グリッドで土坑・溝を検出した。

調査区南端部から北へ18~21m(f-2ライン)で、自然流路SR401を検出した。上端幅8mで植物遺存体堆積層を検出した。この流路は、北西から南西方向に向っており、北西方向のI区で検出されたSR101の最終堆積層の流れであると考えられる。

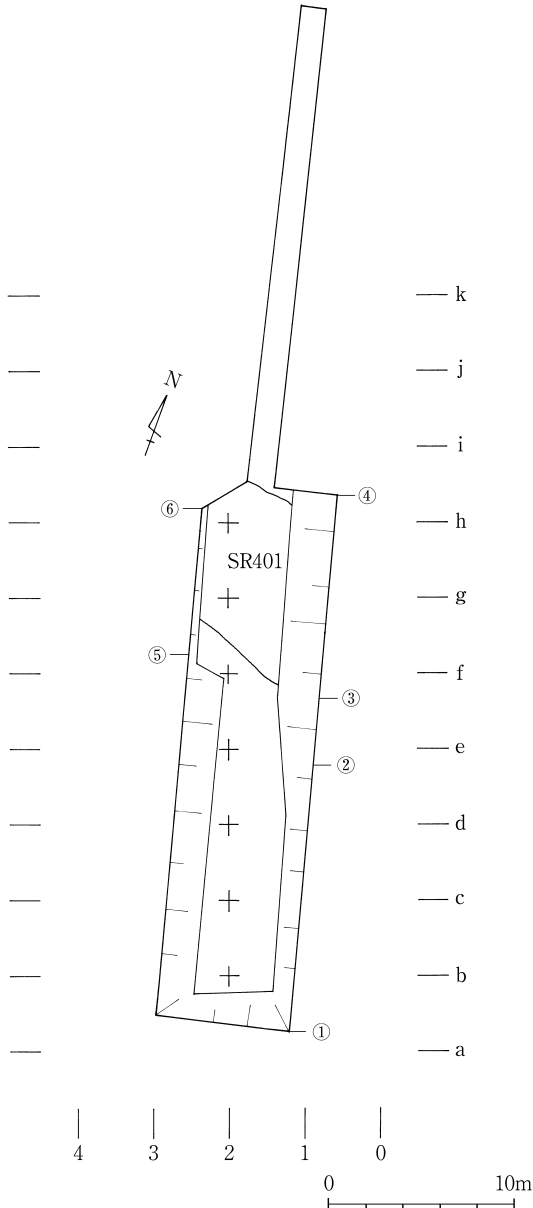


Fig.123 調査IV区全体図

第4節 IV区

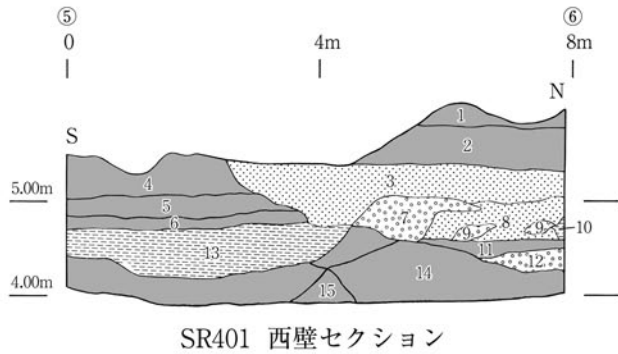
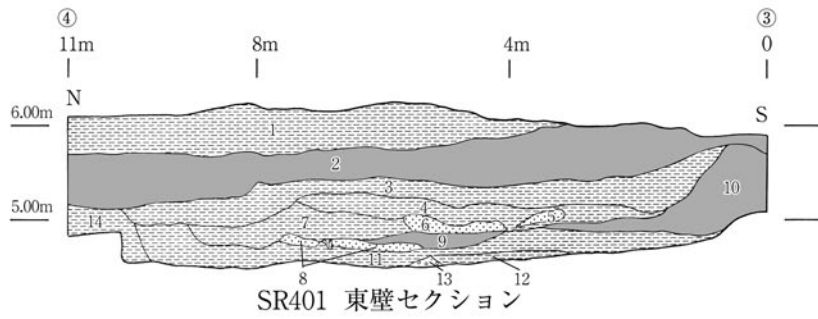
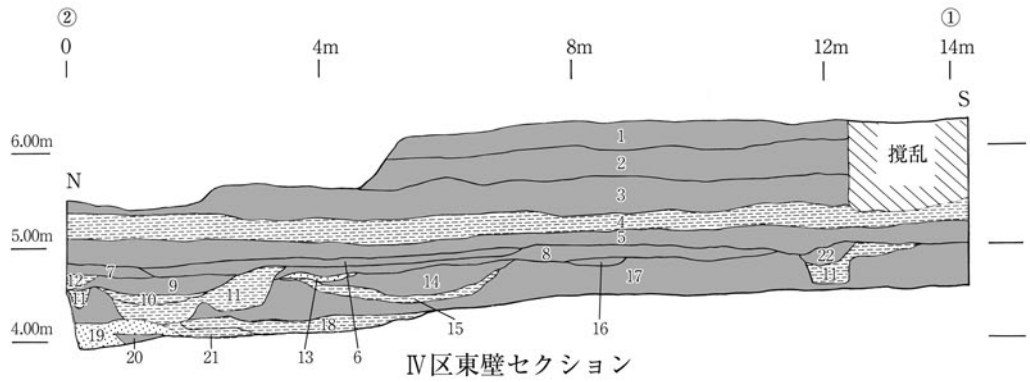


Fig.124 調査IV区東壁セクション・SR401東壁・西壁セクション図

(2) 層序

IV区の南部東壁セクション及びSR401の西壁・東壁セクションを図示する。IV区では、南部の方に遺構・遺物の集中がみられ、中央部で検出されたSR401から北側は、トレンチ調査を行ったが遺構・遺物は僅少であり、一部、洪水堆積である自然木を若干含んだ砂層が検出されたのみである。

東壁セクション (Fig.124)

まず、南部のセクションをみると、1層は灰褐色粘土の表土層（耕作土）である。2層は旧耕作土及び床土に相当する。3層は暗灰褐色粘土であり、湿地的な堆積を示す。4層は青灰色シルトであり、調査区全体を覆うように堆積している。土器細片を微量含んでおり、自然流路の氾濫堆積であると考えられる。5～8層が遺物包含層にあたる。5層は、暗青灰褐色粘土であり、弥生時代前期末～中期初頭の遺物を包含している。SR401検出の際の南側の肩部になっており、fラインを境に地形が下がるものと思われる。5～8層の遺物包含層はIV区北のトレンチでは確認されなかった。9～15層は、溝状遺構に伴う埋土であり、11層には炭化物を多く含む。14・15層中にも炭化物を多く含み、13層では土器片が多く検出された。これらの遺構埋土の中には炭化物層が多く検出されており、II区で検出されている土坑群の埋土と共通している。また、17・18層が南部での地山的堆積層であり、弥生時代前期末～中期初頭の遺構検出面である。ここでの標高は5m前後を測り、II区の遺構検出面とほぼ同一レベルである。

SR401東壁セクション (Fig.124)

SR401は、東壁では南端から16.4mの地点で南肩部を検出した。3層以下が埋積土であり、3～9までが植物遺存体堆積層のP層である。上層部である3・4層中に植物遺存体が多く含まれ、シルト・砂層の互層で構成される。9層は暗茶褐色粘土であり、弥生前期土器のみを包含する。南部包含層からの流れ込みと考えられる。11・12層からは遺物の出土は無いが、下層の砂・砂礫層から土師器・弥生時代前期土器の土器片の出土がみられた。

SR401西壁セクション (Fig.124)

西壁では、南端から21.0mの所で南肩部を検出した。3層・7～12層が埋積土であり、3・8層中は植物遺存体堆積層P層であり、シルト・砂の互層堆積である。西壁南部をみると4・5・6層がプライマリーな堆積を示すが、5・6層は弥生時代前期末～中期初頭の遺物包含層であり、特に13層直上、6層中に遺物が多く見られた。これらの層を切る形でSR401が形成されている。13・14・15層はIV区での遺構検出面であり、地山的堆積土として捉えることができる。

以上、IV区のセクションをみてきたが、南部は弥生時代前期末から中期初頭の段階には比較的安定した高まりが形成されているものと思われる。この段階では、河道はSR401から北にかけてあったものと考えられ、古墳時代前半の洪水堆積層により、SR401部分が埋没し、当遺跡内を流れる河道は廃棄されたものと考えられる。

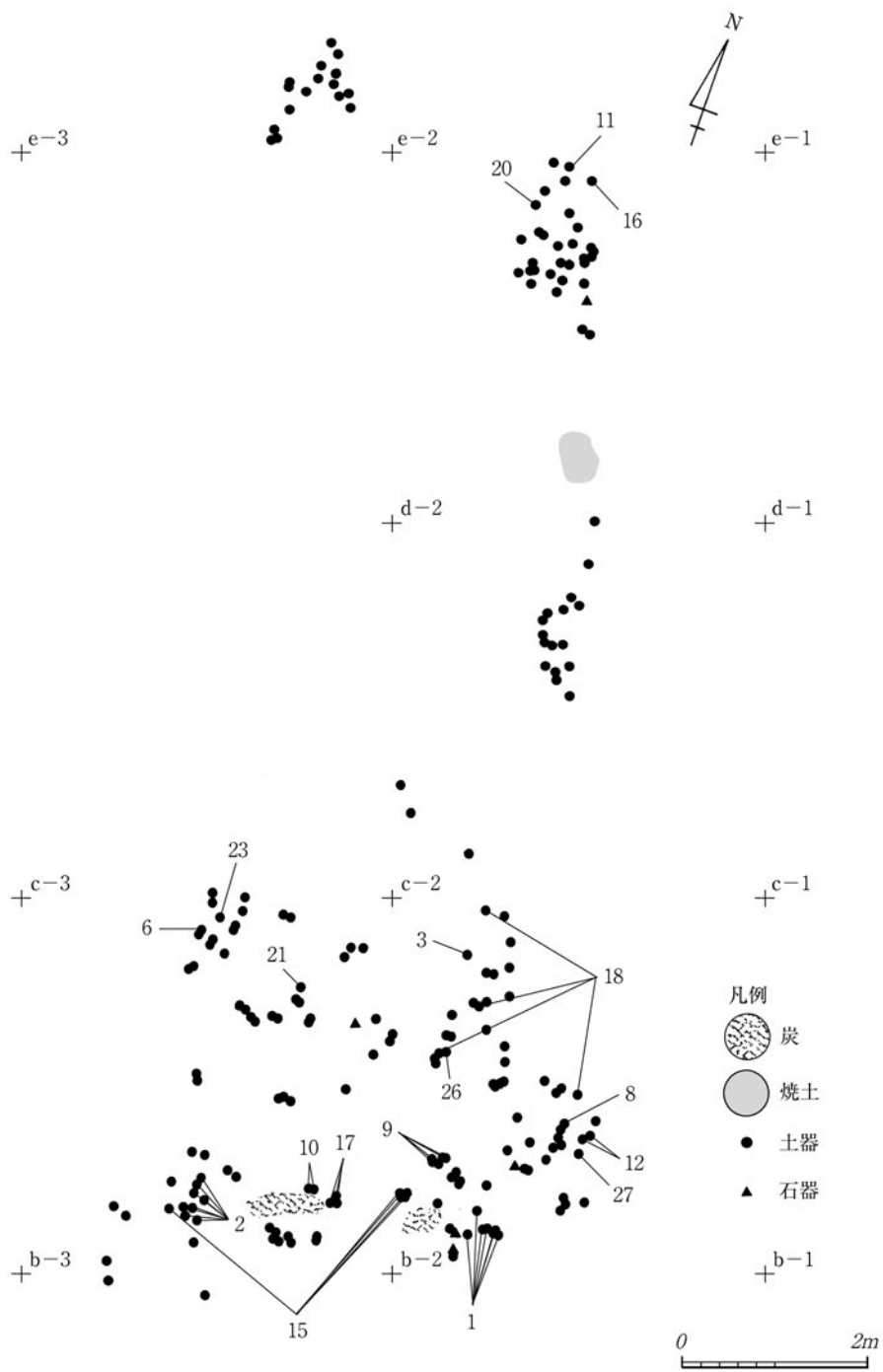


Fig.125 調查IV区南部包含層遺物出土狀況図

(3) 包含層遺物出土状況

ここでは、IV区南部の包含層の遺物出土状況について述べる。ここで扱う包含層は、前述した5・6層に該当し、II区Y層に対応する。遺物は、南部c-2・c-3グリッド、d-2グリッド、e-1グリッド、f-3グリッドに集中がみられた。

c-2・c-3グリッド

5層中より、土器片151点、石器6点が出土した。標高4.63～5.11m前後で遺物が集中する。また、b-2・b-3のグリッド杭周辺で炭化物・焼土を検出した。遺物は壺（No.1～3・6・8～10・12・24）、甕（No.15・17・18・27）、鉢（No.26）がまとまって出土しており、接合関係からみて一括性のあるものと考えられる。また、下層でSK1・SD1を検出したが、これらの遺構から出土した遺物とNo.10・12・18は接合関係が認められることから後述する遺構出土遺物との一括性があると考えられる。この面でのプランは不明瞭であり、検出はできなかったが、これらの遺構の埋没過程に伴う遺物群である。

d-2グリッド

16点の土器片がまとまって出土している。図示し得なかったが、弥生時代前期末葉～中期初頭にかけての壺・甕が出土した。これらの遺物群の北（e-2グリッド）には炭化物集中が認められる。ここでの遺物検出レベルは4.61～4.67mを測る。

e-2グリッド

土器30点、石器1点の出土がみられた。土器ではNo.11・13・16・20の甕を中心に出土している。この土器群のユニットは、東壁セクションにみられる14・15層が埋土になる溝状の落ち込み部で検出されており、13層及び14層上面で出土がみられた。遺物検出レベルは4.47m前後を測る。

f-3グリッド

調査区東壁セクションの9～11層で構成される溝状の落ち込みの延長部にあたる。ここでは16点の土器片が出土している。図示し得なかったが、弥生時代中期初頭にかけての壺・甕が出土した。遺物検出レベルは4.45m前後を測る。

以上、包含層遺物の出土状況を見てきたが、遺物が集中して出土している地点はユニットとしての一括性があると考えられる。また、この面（5層）での遺構のプラン検出は土質・色調からみても判断に困難を極めたが、ユニット周辺での炭化物・焼土といった痕跡のあり方や、ユニット下層では遺構が検出されていることなどからすれば遺構に伴う遺物群として捉えることができると考えられる。

4) SK1・SD1

次に、c-1・c-2グリッドの下層でプランが確認されたSK1・SD1の遺物出土状況を見てみたい。

SK1 (Fig.126)

c-1・c-2グリッドにまたがって検出した。プランは不整楕円形を呈する。北東側の端部にピット状の落ち込みが附属し、No.18の甕の一部が出土した。長軸1.8m、短軸1.1m、深さ25cmを測る。埋土はSD1と同じ、暗灰褐色粘土であり、東壁セクションの11層に相当する。方向は、N-74°-Eである。遺物はNo.18の甕、No.25の壺胴部片が出土した。また、上層ではNo.3の壺、No.18の甕が出土している。土坑内からは、32点の土器片が出土した。

SD1 (Fig.126)

c-1・c-2グリッドにまたがって検出した。SK1の南側に隣接する。調査区の東側及び、西側II区の方に延びる。IV区での検出長は4.28m、幅0.6~1.4mを測り、深さ20cmである。方向はN-87°-Eを指す。埋土はSK1と同じ暗灰褐色粘土であり、遺物ではNo.5・10・12・14・19・21・23が出土している。溝内からは52点の土器片が出土した。SD1上面の包含層として取上げた遺物にはNo.1・2・8・9・10・12・15・17・27があるが、炭化物層及び焼土も検出されており、これらも本来はSD1に伴うものと考えられる。

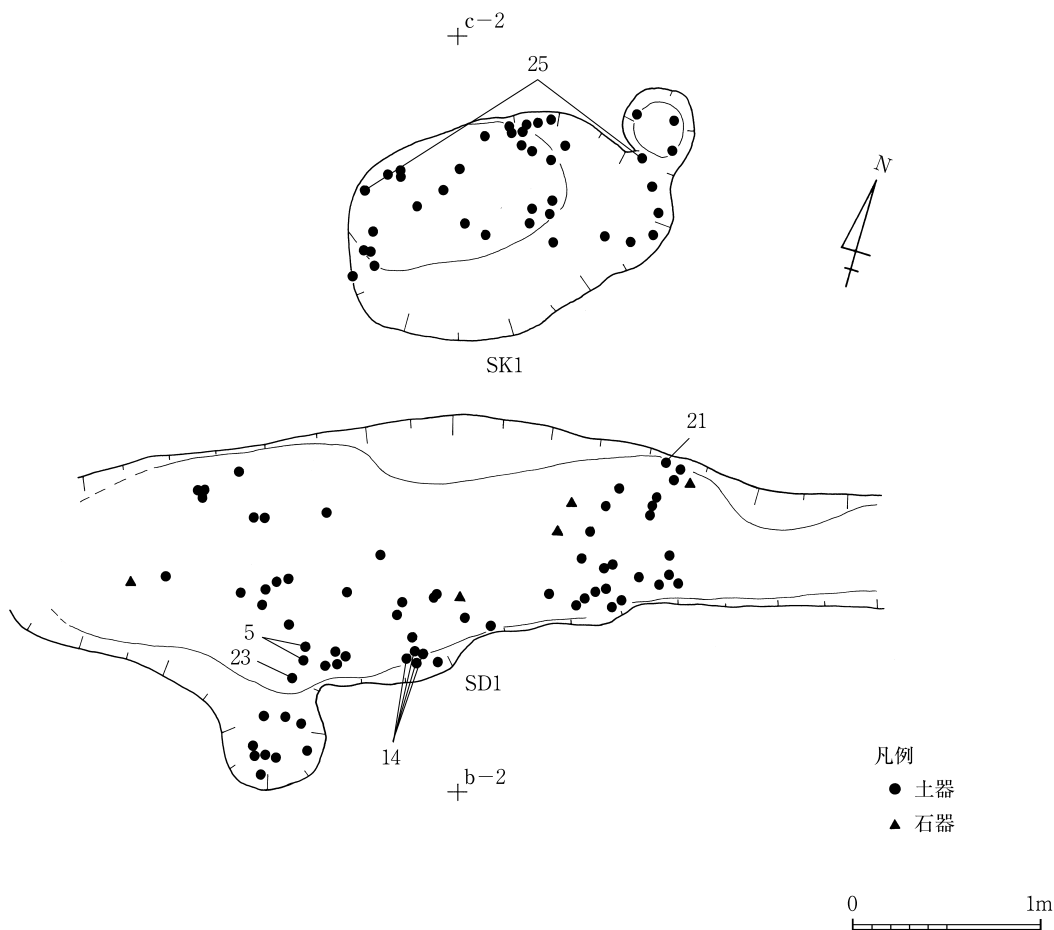


Fig.126 調査IV区SK1・SD1遺物出土状況図

(5) 出土遺物

1～13は壺である。1はc-2グリッドから出土した。口縁部は外反し、口唇部は中央の凹んだ直立する面を成し、外側へ肥厚する。口縁部内面に3条のヘラによる刻目が施された突帯が貼付される。この口唇部に近い突帯間に直径3mmの円孔が口縁周に配される。2はc-2グリッドからの出土である。口縁部は外反し、口唇部は外傾する面を成し、外側へやや肥厚する。口縁内面に櫛描による3条の沈線が施され、直径3mmの円孔が7個以上が1単位で口縁周に配される。外面ハケ調整。3はc-1グリッド出土である。頸部は上方に直線的に立ち上がり口縁部は外反する。口唇部は、外傾する面を成し、下端を指で摘み出し外側にやや肥厚する。頸部に20条のヘラ描き沈線、4条の刻目が施された粘土帯が貼付される。口縁部内面に断面三角形の粘土帯を2条貼付し、この間に直径3mmの円孔が3個が1単位で口縁周に配される。4はf-2グリッド出土である。内湾する胴部から頸部は直立気味になる。頸部外面には10条以上のヘラによる沈線が施され、間に扁平な刻目突帯が貼付される。上胴部の一部には微隆起帯状の細い粘土帯が鈎針状に貼付され、その上から17条の単位の細かい沈線がヘラにより施される。胴部中位には、瘤状の粘土帯が2個以上貼付され、上下につまみ扁平にし、上から下に向かって直径1mmの円孔を2個並べて施す。その下には3条以上の沈線が認められる。外面の上胴部の一部にハケ調整が認められる。5はSD1からの出土である。壺の胴部から底部片であり、4の壺の形態の下胴部であると考えられる。下膨れの胴部であり、中位やや下に最大径がくる。中位には3条以上の沈線がヘラにより施される。外面はハケ調整、内面はヘラケズリが認められる。6はc-1グリッド出土である。外反する口縁であり、端部は垂直に面を成す。頸部には10条以上のヘラによる沈線が施される。外面は縦位のハケ調整、内面は横位を基調としたハケ調整が全体に施され、口縁部は後にナデを施す。7の口縁部は外反し、口唇部は垂直な面を成す。口唇部内面には凹線状のやや浅い凹みが存在する。頸部外面には9条以上のヘラ描き沈線が施される。8はc-1グリッドからの出土である。口縁部は直線的に外反し、端部内面に粘土帯を貼付し、突起状を呈する。口縁部下端から頸部にかけて6条以上のヘラによる沈線が施される。9はc-1・c-2グリッドからの出土である。内湾する胴部から頸部はやや外反気味に上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は外傾する面を成し、下端に粘土帯を貼付し、ヘラによる刻みを施す。外面は胴部から頸部にかけて縦位を基調とするハケ調整。内面は口縁部はハケ調整、胴部は指頭圧痕を残す。10～21は甕である。10はSD1・f-1グリッドの破片が接合した。内湾する胴部から、頸部は間延びし口縁部にかけて緩やかに外反する。口唇部は外傾する面を成す。口頸部外面はハケ調整後、ナデが施される。内面はナデ調整である。外面に煤の付着が認められる。11はf-2グリッド出土であり、外面胴部下半にヘラミガキ、中位にかけてはハケ調整が施される。内面は下半にヘラケズリが施される。12はSD1及びc-1グリッドから出土した。外面胴部下半にヘラミガキ、中位にかけてはハケ調整が施される。内面は下半にヘラケズリが施される。13はf-2グリッド出土であり、外面胴部下半にヘラミガキ、中位にかけてはハケ調整が施される。内面は上胴部に指頭圧痕が顕著である。14はSD1からの出

土である。内湾する胴部から頸部は緩やかに外反しながら延び、口縁部に至る。口唇部は外傾する面を成し、断面四角形の粘土帯を貼付し、ヘラ状工具による刻目を施す。頸部下には3条の刻みを施した断面三角形の突帯が貼付される。外面頸部にはハケ目が一部残る。15はc-2・b-1グリッドからの出土である。内湾する胴部から頸部は外反しながら延び、口縁部に至る。口唇部には断面四角形の粘土帯を貼付し、ヘラ状工具による刻目を施す。胴部上位に4条の微隆起帯を施し、上位3条には半裁竹管状の工具による刺突痕が残る。内面胴部はヘラケズリ、頸部から口縁部はナデ調整が施される。16はf-2グリッドからの出土である。平底の底部から長胴形に立ち上がり、直立気味の頸部から口縁部にかけて外反する。口縁端部は断面四角形の粘土帯を貼付し、ヘラ状工具による刻目を施す。胴部上位には3条の貼付による微隆起帯があり、これを指頭により上下に摘まむ。内外面ともにナデを施す。17はc-1グリッドからの出土である。内湾する胴部から口頸部は緩やかに外反する。口唇部には断面四角形の粘土帯を貼付し、ヘラ状工具による刻目を施す。頸部直下に3条に微隆起帯が貼付され、指頭により上下に摘まむ。内面頸部下半に横位のハケ目が残るが全体的な調整はナデによる。18はSK1上層・SD1上層、他c-1グリッド包含層出土の接合資料である。内湾する胴部から、口頸部は緩やかに外反し、口唇部は外傾する面を成す。口縁部外面と頸部直下にそれぞれ2条、3条の微隆起帯が貼付され、上位からの指頭の押圧により波状を呈する。19はSD1上層・c-1グリッドからの出土である。内湾気味の胴部から頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は部分的に外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。頸部直下には1条の微隆起帯が貼付され、指頭により上下に摘まみ出す。20はf-2グリッドからの出土である。頸部は緩やかに外反し、口縁部は外反する。口唇部は外傾する面を成す。外面口頸部に縦位の4条を1単位とする櫛描き沈線帯が施される。頸部直下には指頭による摘まみ出し微隆起帯が2条施され、爪痕が顕著である。外面頸部は縦位のハケ調整、内面は全体的にハケ調整が施され、胴部は後にナデ調整が施される。21は甕の胴頸部片である。SD1からの出土である。頸部直下に沈線が2条施され、上位に列点文状の刺突が施される。胴部は沈線帯まで縦位のハケ調整、頸部はナデ調整が施される。22~25は壺である。22は口頸部片であり、頸部にヘラ描き沈線、刻目突帯が施される。23~25は胴部片である。23は6条の沈線帯間に双線による斜格子文が施される。24は6条の沈線帯間に山形文が施される。25は5条の沈線帯間に双線による山形文が施される。26は鉢である。内湾する体部から口縁部は外反し、口唇部は外傾する面を成す。内外面ともヘラミガキが施される。27は甕の底部片であり、焼成後に直径1.8cmの円孔が中央部にあけられ、転用品と思われる。28~33はSR401からの出土である。28・29は壺の口縁部片である。28・29は下層砂利層からの出土であり、弥生時代前期末葉の土器である。28の口縁部は外反する。頸部に7条の沈線帯が施される。口唇部内面に凹線状に沈線が施される。29の口縁部は外反し、口縁内面に粘土帯が貼付され口唇部は肥厚し、垂直な面を成す。口唇部下端に刻目が施される。頸部には13条のヘラ描き沈線、頸部下端に扁平な刻目突帯が貼付される。30は丸底の甕である。胴部は球形を呈し、内外面ともにハケ調整が施される。31は壺の底部片である。平底から斜上

方に立ち上がり、上位に向ってやや内湾する。外面はハケ調整、内面はナデ調整が施される。32は鉢である。内湾する体部から口縁部は内湾気味に外反する。口唇部は外傾する面を成す。口縁部は横位のつよいナデ。33は甌である。尖底状の底部から内湾し、口縁端部は水平な面を成し、外側にやや突出する。底部に直径5mmの円孔がみられる。

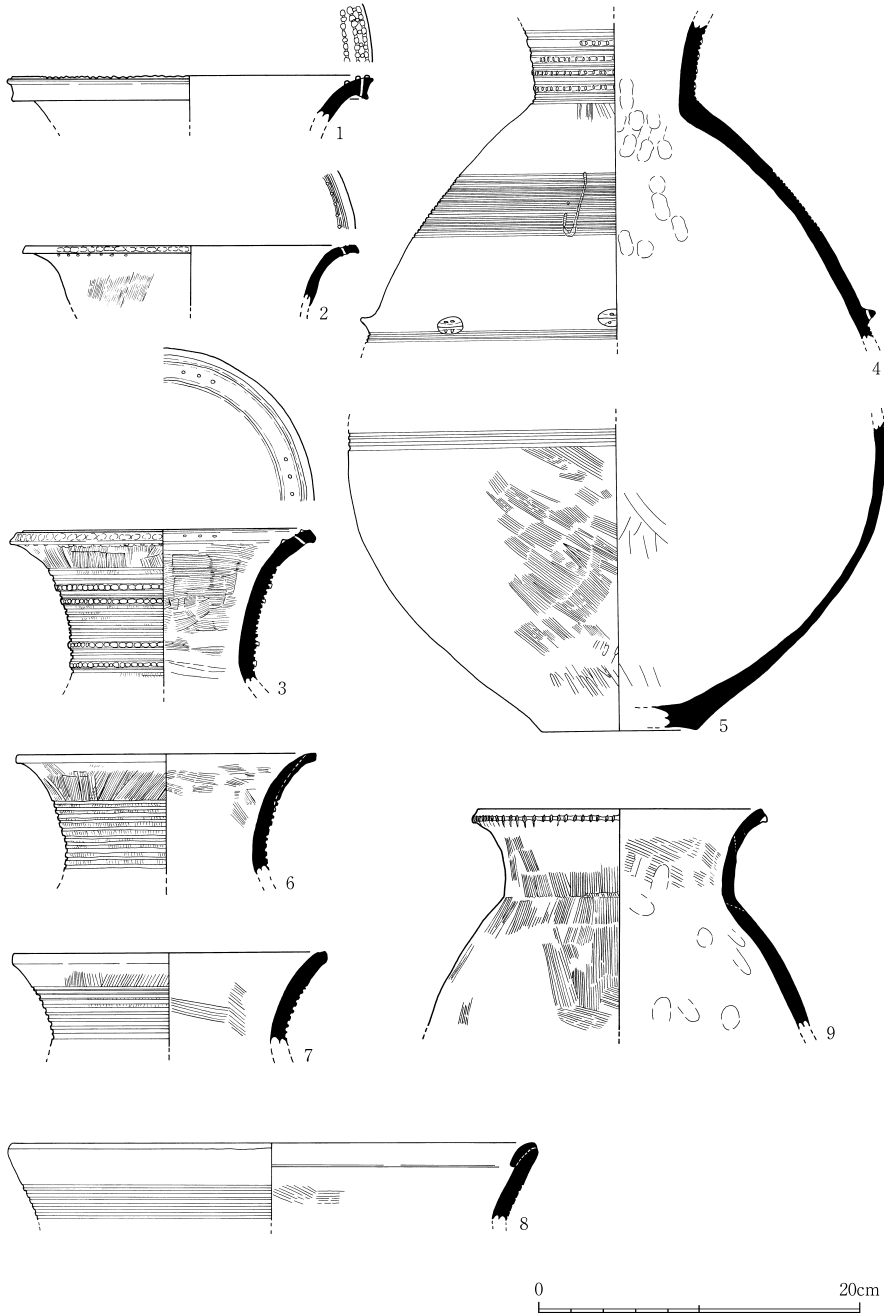


Fig.127 調査IV区 壺 (弥生時代前期末～中期初頭)

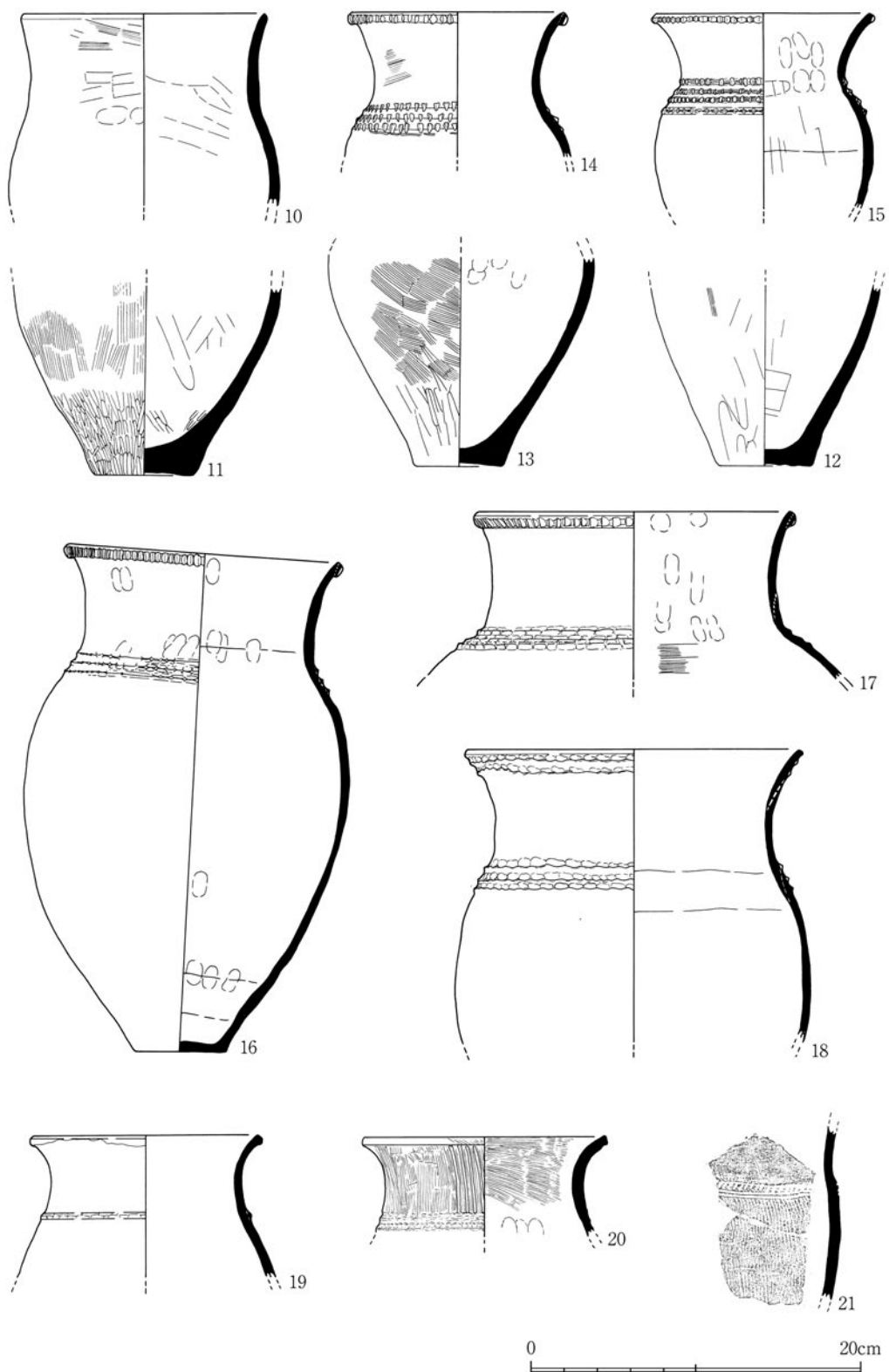


Fig.128 調査IV区 甕 (弥生時代前期末~中期初頭)

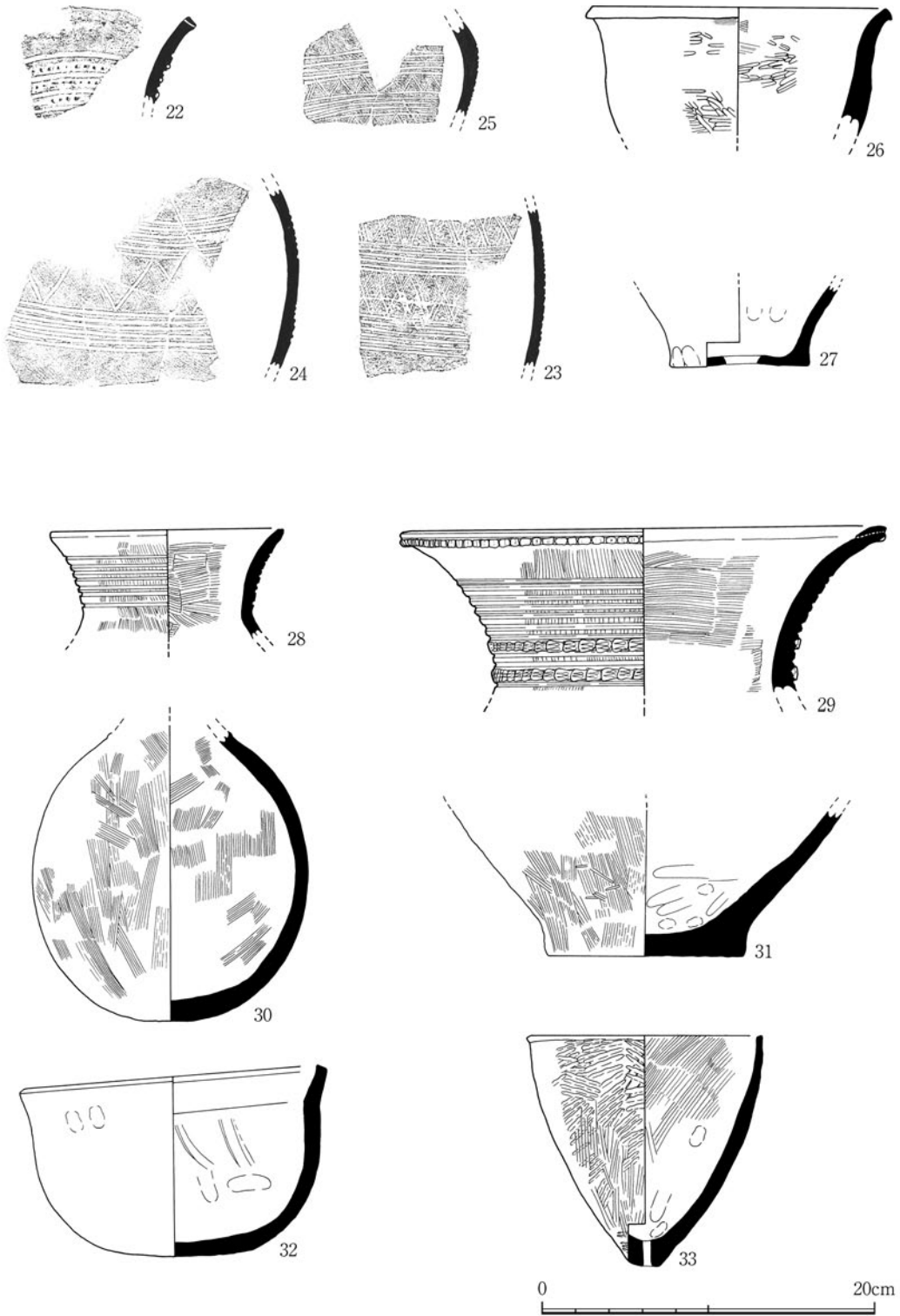


Fig.129 調査IV区 壺・鉢（弥生時代前期末～中期初頭）・SR401出土遺物

Tab.8 調査IV区遺物観察表1

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
127	1	C-2	5層	壺	23.2	(2.7)			口縁部内面にヘラによる3条の刻目突帯及び突帯間に円孔を配する。	0.5~3mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
127	2	C-1	5層	壺	21.0	(3.7)			口縁部内面に櫛描きによる沈線が3条、円孔が7個以上口縁周に配される。外面ハケ調整。	0.5~2mm大の砂粒。灰黄褐色。
127	3	C-1	5層	壺	18.5	(9.7)			口頸部に20条のヘラ描き沈線帯及び4条の刻目突帯。口縁部内面に断面三角形の粘土帯を2条貼付、間に3個一単位の円孔。内外面ハケ。	0.1~2mm大の砂粒。浅黄橙色。
127	4	F-1	6層	壺		(19.7)			頸部外面には10条以上のヘラ描き沈線及び、扁平な刻目突帯が4条貼付。上胴部の一部に細かい粘土帯が釣針状に貼付、その上から17条の単位の細かいヘラ描き沈線。胴部中位には、2個の円孔が伴う瘤状の粘土帯貼付。外面の上胴部の一部にハケ調整が認められる。	0.1~2mm代の砂粒。3~5mm大の礫含む。褐色。
127	5	SD1 C-2	5層	壺		(19.3)		9.6	下膨れの胴部であり、中位ややや下に最大径がくる。中位には3条以上のヘラ描き沈線。外面はハケ調整、内面はヘラケズリが認められる。	0.1~2mm代の砂粒。褐色。
127	6	C-1	5層	壺	19.0	(7.5)			口頸部に10条以上のヘラガキ沈線。内外面ハケ調整。口縁部はナデ。	0.5~3mm大の砂粒。浅黄橙色。
127	7	C-2	5層	壺	20.0	(5.8)			口頸部に9条以上のヘラガキ沈線。内外面ハケ調整。口縁部はナデ。	0.5~2mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
127	8	C-2	5層	壺	32.6	(4.9)			口縁部内面に粘土帯を貼付し、突起状を呈する。口頸部に6条以上のヘラ描き沈線。口縁部ナデ。頸部内面にハケ目残る。	0.5~2mm大の砂粒。にぶい橙色。
127	9	C-2	5層	壺	18.0	(13.9)			胴部以下欠損。口縁部部の粘土貼付帯にはヘラによる刻みを施す。外面ハケ。内面口縁部ハケ。胴部ナデを施し、指頭圧痕が残る。	0.5~3mm大の砂粒。浅黄褐色。
128	10	SD1	5層	甕	15.0	(11.8)			胴部以下欠損。外面煤付着。外面は口頸部においてハケの後ナデを施す。内面ナデ。	0.5~2mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
128	11	F-2	5層	甕		(11.0)		5.7	外面胴部下半にヘラミガキ、中位にかけてはハケ調整。内面は下半にヘラケズリが施される。外面煤付着。	0.1~2mm大の砂粒。褐色。
128	12	SD1 C-1	5層	甕		(11.6)		6.0	外面胴部下半にヘラミガキ、中位にかけてはハケ調整。内面は下半にヘラケズリが施される。	0.5~2mm大の砂粒。浅黄褐色。
128	13	F-2	6層	甕		(12.8)		5.4	外面胴部下半にヘラミガキ、中位にかけてはハケ調整。内面は胴部中位に指頭圧痕。	0.1~2mm大の砂粒。褐色。
128	14	C-2	5層	甕	13.7	(8.9)			胴部以下欠損。頸部下に断面三角形の3条の刻目突帯。口縁部は断面四角形の粘土帯貼付し、ヘラ状工具により刻みを施す。外面頸部はハケ後ナデ。内面と外面の一部に赤褐色を帯びた部分が存在する。	0.5mm前後の砂粒。褐色。
128	15	C-2	5層	甕	13.0	12.0			胴部以下欠損。頸部下に断面三角形の3条の刻目突帯。口縁部は断面四角形の粘土帯を貼付し、ヘラ状工具により刻みを施す。胴部内面ヘラケズリ。	0.5mm前後の砂粒。褐色。
128	16	F-2	6層	甕	16.6	30.3	19.9	5.5	口縁部は外側に断面四角形の粘土帯を貼付し、ヘラによる縦位の刻みが施される。胴部上位に微隆起帯状の粘土帯が3条貼付されそれぞれ指頭により上下につまむ。内外面ナデ。	1mm前後の砂粒。褐色。
128	17	C-1	5層	甕	19.2	10.3			胴部以下欠損。口縁部は外側に断面四角形の粘土帯を貼付し、下端にヘラによる縦位の刻みが施される。胴部上位に微隆起帯状の粘土帯が3条貼付、指頭により上下につまむ。外面口頸部はナデ。内面はハケの後ナデを施し指頭圧痕が残る。	0.1mm大の砂粒を多く含む。灰褐色。
128	18	SK1	5層	甕	20.6	18.0	21.9		胴部中位以下欠損。頸部下3条、口縁部2条の断面三角形の微隆起帯を貼付。外面ナデ。	0.1~2mm大の砂粒。灰褐色。
128	19	SD1	5層	甕	14.0	(8.7)			胴部中位以下欠損。頸部下に1条の微隆起帯。内外面ナデ。	0.5~2mm大の砂粒。浅黄色。
128	20	F-1	6層	甕	14.8	6.2			胴部以下欠損。口頸部に縦位の4条の櫛描き沈線帯。指頭による摘み出し微隆起帯2条。内外面ハケ。内面胴部はナデ。	0.1~2mm大の砂粒。褐色。

Tab. 8 調査IV区遺物観察表2

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
128	21	SD1		甕		(10.2)			頸部直下に沈線が2条施され、上位に列点文状の刺突が施される。胴部は沈線帯まで縦位のハケ調整、頸部はナデ調整。	0.5~2mm大の砂粒。灰褐色。
129	22	C-1	5層	壺		(5.4)			頸部にヘラ描き沈線、刻目突帯を沈線1条間隔に貼付。	0.5~2mm大の砂粒。浅黄橙色
129	23	SD1 C-1	5層	壺		(9.6)			6条の沈線帯間に双線による斜格子文が施される。	0.5~2mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
129	24	F-2 C-1	5層	壺		(10.8)			6条の沈線帯間に山形文が施される。外面斜位のハケ調整。	0.5~2mm大の砂粒。浅黄褐色。
129	25	SK1		壺		(5.8)			5条の沈線帯間に双線による山形文が施される。	0.5~1mm大の砂粒。灰黄色。
129	26	C-1	5層	鉢	18.0	(7.7)			口縁部は外反し、口唇部は外傾する面を成す。内外面ともにハケ調整の後ヘラミガキ。	0.5~2mm大の砂粒。淡黄色。
129	27	C-1	5層	甕 (底部) 転用		(4.8)		8.4	底部外面中央部に直径1.8cmの円孔。焼成後穿孔。転用品か？	0.5~1mm大の砂粒。灰白色。
129	28	SR401	G層	壺	14.2	(6.7)			頸部以下欠損。口縁端部上端に沈線状の浅い凹み。口頸部にヘラ描き沈線が7条施される。内外面ハケ。	0.1~2mm大の砂粒。浅黄褐色。
129	29	SR401	G層	壺	30.0	(10.0)			胴部以下欠損。口縁端部にはヘラによる沈線が1条巡り、下端には指頭による刻目を施した突帯が貼付される。口頸部に12条以上のヘラ描き沈線を施し、上下に刺突痕のある刻目突帯を2条以上貼付する。内外面ハケ。	0.1~4mm大の砂粒。にぶい橙色。
129	30	SR401	P層	甕		(17.5)	16.6		胴部は球形を呈し、内外面ともにハケ調整が施される。	0.5~2mm大の砂粒。浅黄褐色。
129	31	SR401	P層	壺		(8.9)		11.8	平底から斜上方に立ち上がり、上位に向ってやや内湾する。外面はハケ調整、内面はナデ調整が施される。	0.5~3mm大の砂粒。にぶい黄褐色。
129	32	SR401	G層	鉢	17.8	11.5		9.3	平底気味の底部から体部は内湾し、口縁部は外反する。口縁部はつよいヨコナデにより口唇部が内側に突出し端部は外傾する面を成す。内外面ナデ。	0.5~2mm大の砂粒。橙色。
129	33	SR401		甕	13.7	14.0			尖底状の底部。口縁端部は水平な面を成し、外側にやや突出する。底部に直径5mmの円孔がみられる。外面タタキ目、内面は斜位のハケ調整が施される。	0.1~3mm大の砂粒。浅黄褐色。

第5節 V区

(1) 調査V区の概要

V区は、調査対象地の西部に位置し、VI区の西側にあたる。当初、試掘トレンチ（F・E-2トレンチ）で、自然流路堆積層を検出し、中から弥生時代末～古墳時代にかけての遺物がまとまって出土していた箇所を拡張する形で調査区を設定した。試掘調査Fトレンチの出土遺物には、小型丸底壺、小型器台、土製支脚、高坏、甕などが、ほぼ完形で出土しており、祭祀が

行われた可能性が高い。また、Fトレンチ北側に設定されたE-2トレンチでは、同様に古墳時代の流路堆積層が検出され、青灰色砂利層より高坏、椀、搬入品と思われる甕が出土しており、V区では、古墳時代の流路の範囲、堆積層の把握のため面的な調査を行った。また、V区の西側の対象地には2本の南北トレンチを設定し、調査対象地西端のトレンチをBトレンチ、V区の西側に隣接するトレンチをAトレンチとし、流路の延長の確認を行った。トレンチの規模はAトレンチが2m×87.4m、Bトレンチは2m×88mである。

まず、試掘Fトレンチが設定された南部から拡張を始めた。調査には任意のグリッドを設定し、南北に小文字のアルファベット、東西にアラビア数字を使用した。遺物の取り上げ等はグリッドごとに行い、北に向って右上のNo.を使用した。グリッドの方向はN-16°-Wであり、NはIV系座標北を示す。また、V区でのグリッドの方向は、東側の調査区VI区と共通している。b-2・b-3グリッド周辺では、植物堆積層及び砂利層を検出し、北方に延びることが確認されたため、試掘E-2トレンチ部分まで拡張を行った。調査区面積は491㎡である。流路堆積層

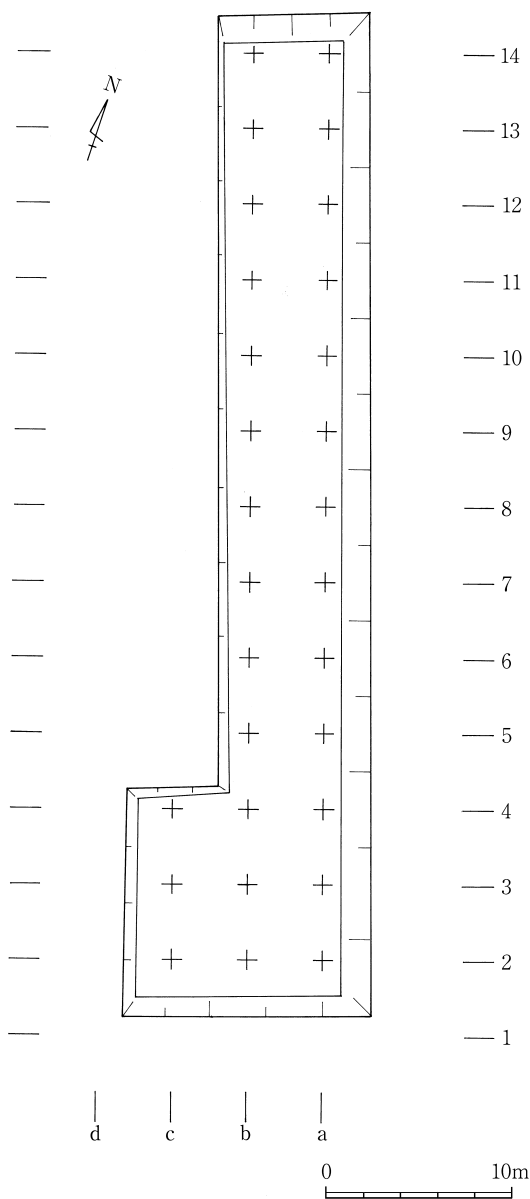


Fig.130 調査V区全体図

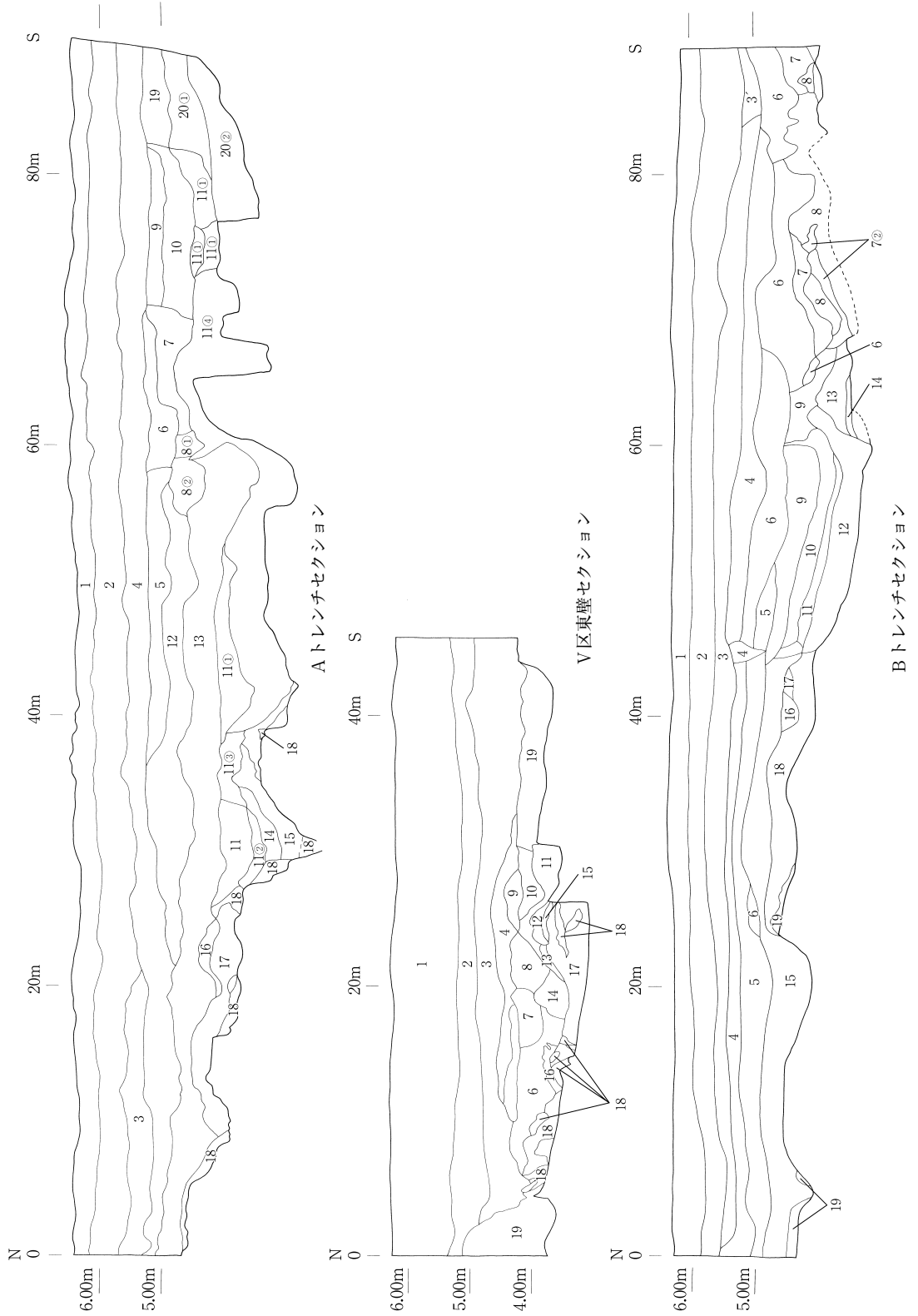


Fig.131 調査V区東壁セクション・A・Bトレンチ (東壁) セクション

は調査区南西方向から北方に流れ、V区北端で東方に曲り、VI区の方に延びる。検出レベルは上層の植物堆積層であり、地表下1.4~1.5m、標高4.6~4.7mである。流路のプランはV区では西肩部しか検出しきれなかったが、a10グリッドで馬の大腿骨と石斧の柄などが出土した。a9グリッドでは梯子の一部と用途不明であるが木器数点が出土している。また、ab10ラインにおいて杭列を検出したがSR501に沿う形で検出した。下層には砂利層が堆積しており、特に調査区南部(b-2・b-3・b-4グリッド)に古墳時代の土器が完形に近い状態でまつまって出土している。また、北部のa13グリッドで、やや北東方向に流れを変えるが、a10~a13グリッドにかけて遺物の集中がみられた。古墳時代の遺物はこうした流路の蛇行部に集中している。Bトレンチについては北から26~33m、36~70mにかけて連続した流路堆積が確認された。Aトレンチでは46~60m、61~86mにかけて連続した流路堆積が確認されており、A・Bトレンチの南部で確認された堆積層がV区に流れ込んでくるものと考えられる。調査区の中央部から南部にかけて地形的に落ち込みがあり、北から南に向って堆積が進み、最終段階では流路が北西側から南東に流れ、さらにV区の南部から北方に流れていたものと考えられる。

(2) 層序

ここでは、V区の東壁セクション及びA・Bトレンチの東壁セクションについて述べる。

V区東壁セクション

V区では自然流路SR501を検出しているが、調査区にほぼ並行していることから東壁側では明確なレンズ堆積は認められなかった。調査区北端、南から42.6mの所で青灰色粘土層(地山的堆積土)と暗灰褐色シルト(植物堆積層)の境を検出し、VI区に続く流路の北肩プランを確認した。1層は、耕作土であり、調査区全体に0.8~1.1mの厚さで堆積している。2層は灰色粘土層であり、下部に黄褐色シルト層がみられ旧耕作土及び床土と考えられる。3層は暗灰褐色シルト層であり、植物遺存体堆積層である。流木・木器を包含する。砂と粘土の互層で構成されている。3層は南部と北部の蛇行部に厚く堆積しており60~70cmの堆積が認められ、植物遺存体も多く包含している。4~6層は砂利層であり、3層及び7~9層と互層になりながら堆積している。弥生時代後期末~古墳時代を中心とする土器を多く包含する。特に古墳時代の遺物は4層中に多く出土がみられた。4層は1~2cm大の礫、5層は2~5cm大の礫、7層は1~3cm大の礫で構成される。4~6層の砂利層についてはG層と呼称した。7~9層は青灰色~暗青灰色を呈したシルト層であり、細砂を含む。10・11層もシルト層であり、間層に細砂を含み、11層中には植物遺存体を含む。12・13層は暗青灰色シルトと暗灰褐色粘土である。14層は基本的には8層と同じであるが細砂が多く、また植物遺存体も含まれる。15層は暗青灰色シルト層であり、上部に砂利を含む。16層は砂利層1~3cm大の礫層で固く絞る。17層は2~5cm大の礫と、粗砂で構成される砂利層である。間層に植物遺存体を含んだ暗褐色から暗灰褐色を呈した粘土層(18層)が混じる。19層は青灰色粘土であり、地山的堆積土である。南部では標高4.3m、北端部では標高5.1mで検出された。

Aトレンチ

東壁セクションをみる。調査区全体に1層・2層の耕作土・旧耕作土が厚さ0.8～1mみられる。3層は灰黄褐色～暗黄褐色を呈した粘土層である。調査区南部で色調がやや暗くなる。4層は明灰色粘土層である。調査区北端から44mの所でやや暗い色調になる。5層は緑青灰色粘土層である。流路堆積層は6層が暗灰色～灰色を呈したシルト層であり、若干の植物遺存体を含む。7層も植物堆積層であり、6層に比べ色調が黒く粘性がつよい。8層は砂利層であり、植物遺存体と土器片を少量含む。9層は暗灰色粘土層であり、下層10層は細砂層である。60m地点で墳砂状の隆起がみえる。11・12層は砂利と砂の互層堆積であり、植物遺存体を若干含む。13層は緑青灰色粘土層であり、ややシルト質である。9～12層の堆積が進み、流路は南部に移動し、6～8層までが流路の最終堆積層として捉えることができる。そして、V区の南部に向けてこの堆積層は続く。流路の北肩はAトレンチ北端から44mであり、このラインから北側は部分的な起伏はあるものの15～19層にかけては地山的な堆積を示す。

Bトレンチ

東壁セクションをみる。1～4層までの堆積はAトレンチと同様である。調査区北端から20mラインの所まで明茶褐色を呈した粘土層(3層)があるが旧耕作土の床土と考えられる。流路の堆積層は6層～11④層までであり、南部の6層～8層が最終段階の堆積層として考えられる。トレンチ北端から27mのラインで流路のレンズ状の堆積が認められるが、11層の洪水堆積層と考えられる砂利層が堆積してから後は、明灰色～褐灰色粘土層の12・13層が堆積していることから河道は南部に移動しているものと考えられる。

以上、A・Bトレンチのセクションをみてきたが、自然流路は調査対象地の北西側から南東方向に向けて流れがあったものと考えられ、幅60mの流路は北側から堆積が進み南部の方に河道が移動したものと考えられる。また、北部では、地山的青灰色粘土層下層に砂利層の流水堆積が認められることから流路の幅はかなり広がったものと思われる。

(3) b-2・b-3・b-4グリッド遺物出土状況

V区では流路堆積である4層の砂利層中から多量の土器が出土している。冒頭にも触れたが特に調査区南部のb-2・b-3・b-4グリッドに土器の集中が見られ、小型丸底壺や高坏、器台といった祭祀的遺物も出土している。時期的には新旧があり弥生時代後期末から古墳時代前半に至るまでのものがあり、一括性があるとは言い難いが、中にはセットとして捉えられるものもあり、ここでは、グリッド周辺の出土状況をみてみたい。

b-3グリッドでは、椀状高坏・鉢・壺・甕などが出土した。甕は胴部が球形化している。壺は複合口縁である。鉢は図示した遺物は、ほぼ完形で出土がみられた。

c-3グリッドでは、小型丸底壺、台付鉢が出土している。広口壺の口縁部片が出土しているが比較的古い様相のものである。甕内面胴部中位に横位のヘラケズリが認められる球形の胴部から外反する甕と、長胴形タタキ甕がセットで出土している。甕は畿内系甕の形態をしている

が、胎土は在地のものである。

b-4グリッドでは、平底の甕の底部が出土しているが、比較的古い様相のものである。甕では口縁部が袋状を呈するものもみられる。小型丸底壺・高坏・器台（受け部）・鉢・甕の出土がみられた。

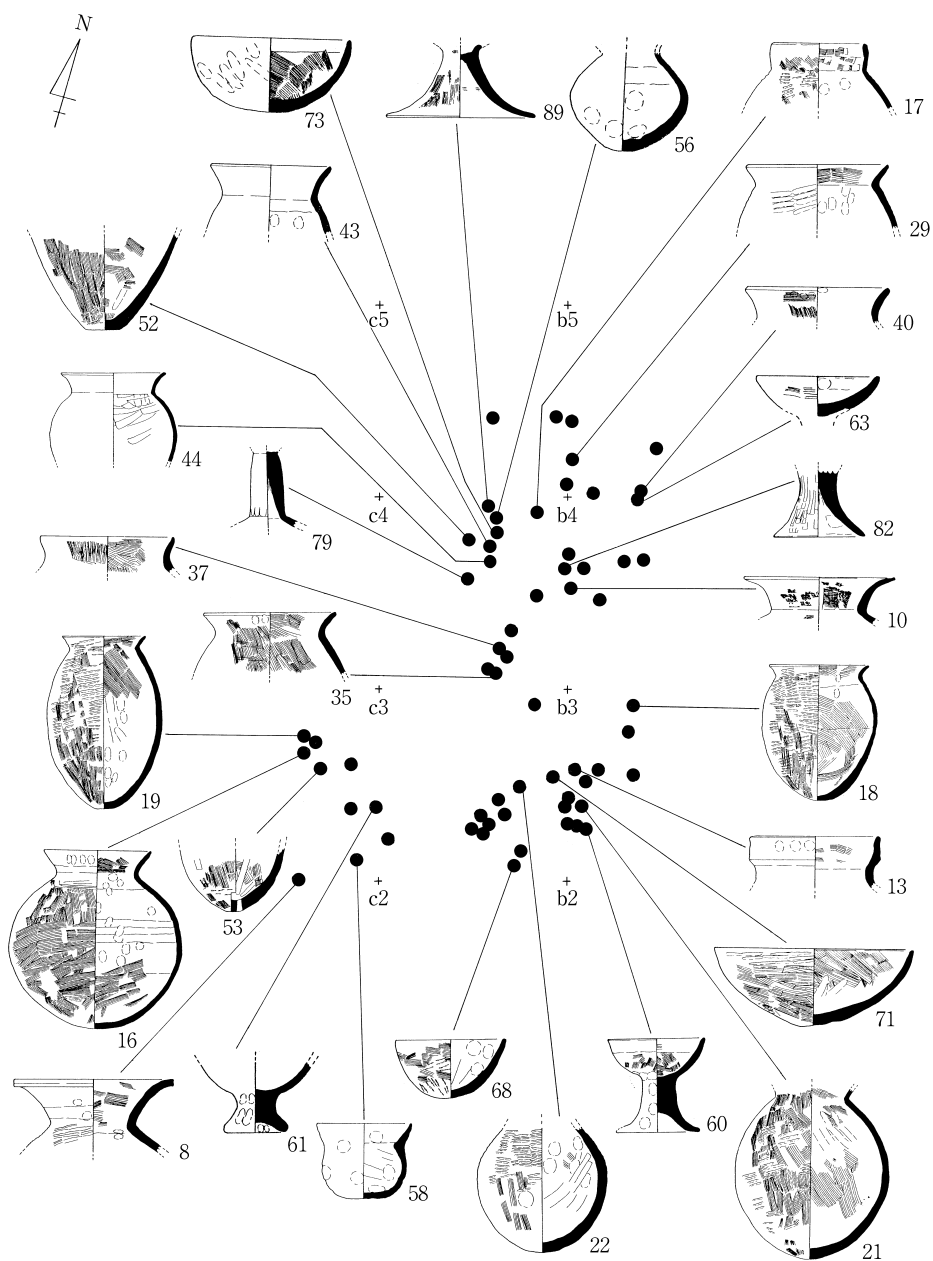


Fig.132 調査V区南部遺物出土状況図

(4) SR501出土遺物

V区では、SR501からの出土がみられた。遺物包含層は植物遺存体層P層、砂利と細砂層・シルトで構成されるG層である。遺物は蛇行部である調査区南部と北端部に集中がみられた。

木器

1・2はP層出土の斧柄である。1はb3グリッド出土である。全長12.2cmであり、石斧取付部は全長11.9cm、全幅3.9cm、全厚2.3cmを測る。握部は全幅3.2cm、全厚2.3cmである。2はa10グリッド出土である。全長71.2cmを測る。石斧取付部は全長15.5cm、全幅2.7~3.1cmを測り、握部は、3.1cmを測る。1・2とも樹種はサカキである。その他、図示し得なかったが、梯子の基部、有頭棒状の木器もみられた。

土器

全般的にG層から出土しているが層位的な細別の把握は困難であり、ここでは器種ごとに述べる。出土地点及び詳細は観察表を参照されたい。

壺

3~11は広口壺の口縁部である。3の口縁端部は上下に、4は下方に拡張がみられ、外面に波状文がみられる。5・6の口縁端部は垂直な面を成し、外面に斜格子文、波状文が施される。7はくの字に外反し、端部は外傾する面を成す。8の頸部はくの字に外反し、口縁部はさらに開き端部は垂直な面を成す。9・10は口縁端部がつよいヨコナデにより、内面が凹み、10は尖り気味に仕上げる。内外面ハケ調整。頸部内面にハケ状工具をコテアテ状に使用する。11は外反し、端部は上方に拡張がみられる。12

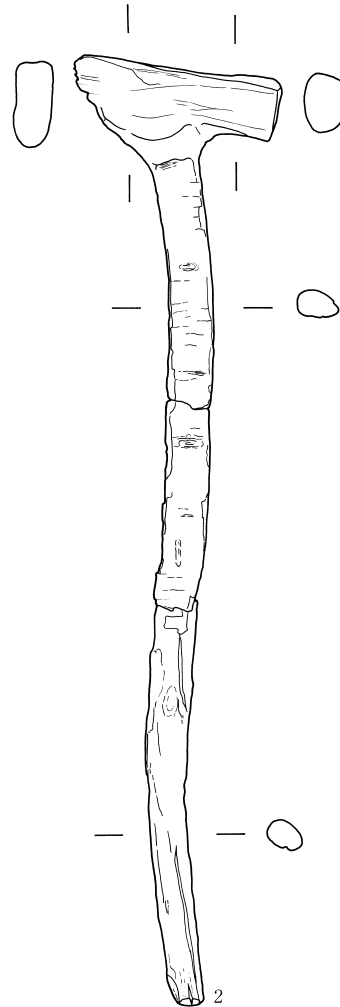
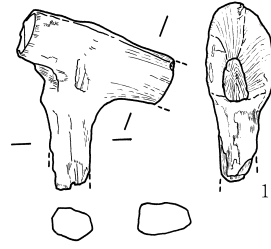


Fig.133 調査V区SR501出土木器

～14は複合口縁である。外反し、上方に屈曲する。14は外面に斜格子文が施される。15は壺の頸部である。頸部下端に粘土帯が貼付され、斜格子状の文様が施される。

甕

16は球形の胴部から口縁部は間延びしながら外反する。17は内湾する胴部から口縁部は内湾気味に直立する。端部は内側に粘土を折り曲げ、内面上位はやや肥厚する。19は丸底から内湾し、上胴部に最大径がくる。20は僅かな平底から長胴形に延びる。21は平底から内湾し、口縁部は短く外反する。22・23は丸底で胴部は球形を呈する。24～35の口縁は外反する。全て胴部外面にタタキ目を残し、調整はハケである。36も外反し、口縁端部は横位のつよいナデにより、外面は凹む。37の口縁部は内湾する。38～40は外反する。41～43は口縁部が直口気味に立ち上がり、間延びする。43は口縁部外面にタールが付着する。44は球形に膨らむ胴部から口縁部は外反し、端部は丸味を帯びる。内面横位のヘラケズリが認められる。45・46は畿内系の甕である。口縁部は横位のハケ調整の後、ナデを施し、尖り気味に仕上げる。47は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部はナデにより水平な面を成し、内側が突起状を呈す。胴部外面は細かいハケが縦位に施され、内面は横位（左→右）のヘラケズリが認められる。48の口縁部はつよく横位に外反し、端部は上方に摘み上げ、断面三角形を呈する。胴部外面は斜位の細かい単位のハケが施される。東阿波型土器。49は、形態的には48に類似するが、口縁部の屈曲が弱く、器壁も厚い。胎土は在地系である。50～53は底部片である。50は丸底の甕であり、外面は全面にタタキ目が残る。51は鉢の底部と考えられる。外底部はタタキにより、平底をつくる。52は平底の甕底部である。外面はタタキ目はなく縦位のハケ調整が施される。53は甑である。底部に直径6mmの円孔が認められる。

器台・支脚

54は、円盤状を呈し、受け部は凹む。55は支脚であり、受け部は角状の突起が付く。3/4以上欠損しており、角状突起が何個になるかは不明である。

小型器種

56～59は小型の壺・鉢である。56は小型丸底鉢である。57・58は有段鉢である。内面口縁部と体部の境に明瞭な稜を成す。57は扁平であり、底部が平底気味になる。58の底部もやや平底気味である。59は丸底鉢である。

高坏

60は椀状の高坏である。61は、低脚の高坏であり、坏部は椀状を呈する。62・63は器台である。62は器台脚部であり、中実で裾部はラッパ状に開く。内面は指頭圧痕が認められる。63は受け部であり、浅い皿状を呈する。

鉢

64～74は鉢である。64は平底から斜上方に直線的に立ち上がる。65は平底から内湾して低く立ち上がる。66・67は僅かに残る平底から内湾する。内面はハケ状工具痕が、コテアテ状に残る。68は丸底から内湾する。70は丸底から内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾する面を成す。

71は丸味を持った平底から内湾し、口縁部は内側にさらにつよく内湾する。72は丸底で椀状を呈する。口縁端部は横位のナデにより尖り気味に仕上げる。外面はナデ、内面はハケ調整。73は僅かに残る平底から斜上外方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。74は丸底から内湾し、口縁端部は外傾する面を成す。

高坏

75～88は高坏である。75～77は坏部である。75は斜上外方に直線的に立ち上がる。76は腰折れ、口縁部は外反する。77の口縁部は上方に屈曲し、外反する。78～88は脚部である。78・79は中空の脚部から裾部はラップ状に開くものと思われる。脚部内面に絞り目が認められる。78は裾部と脚部境目にヘラ状工具によるケズリが認められる。81は外面にヘラミガキ。82は脚部内面はヘラケズリが施される。83は外面にタタキ目を残す。84～87は裾部に円孔が施される。87は裾部が下位に折れ、ラップ状に開くものと思われる。88はラップ状に大きく開き、外面は縦位のハケ調整が施される。

第5節 V区

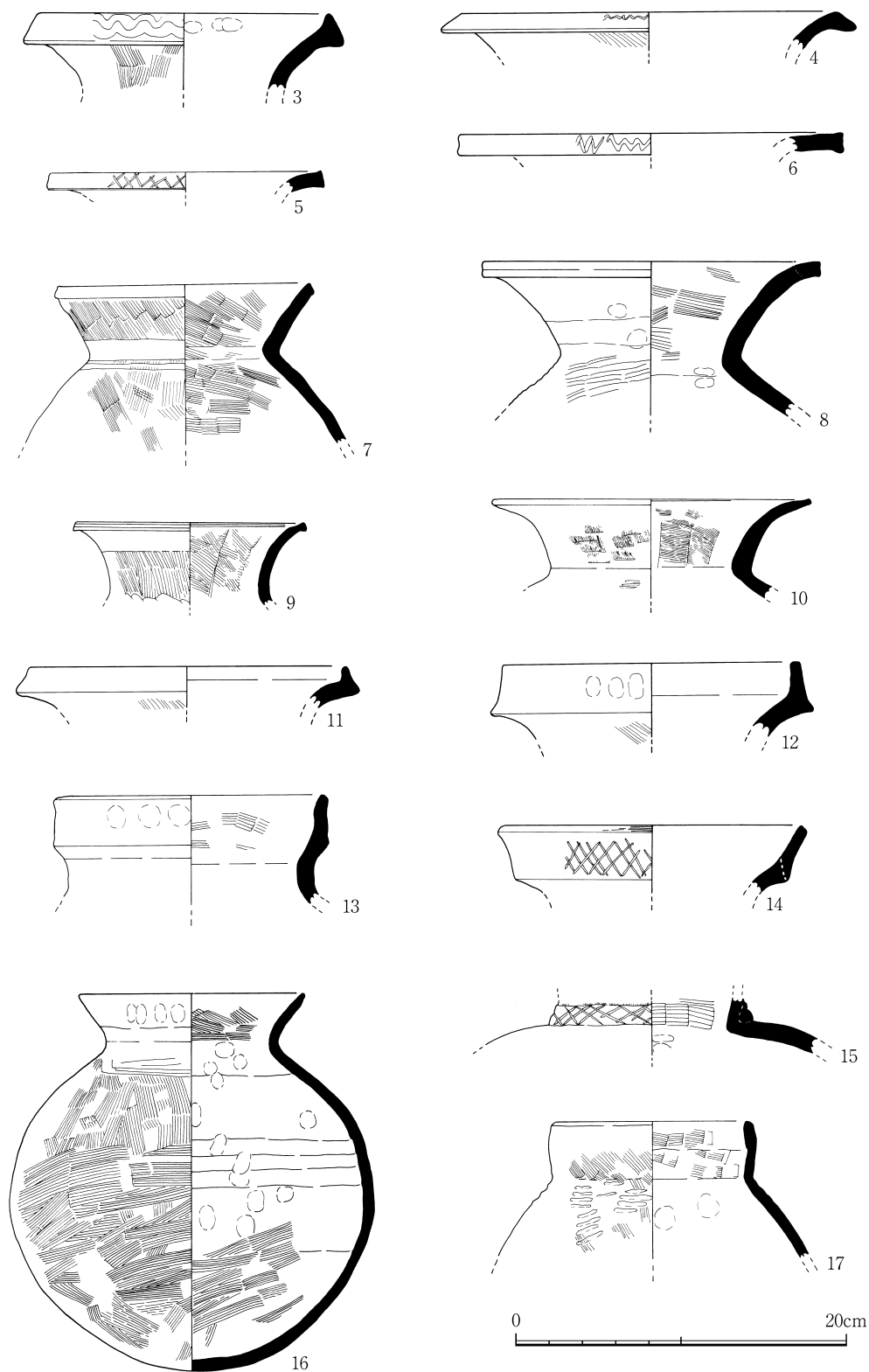


Fig.134 調査V区 壺

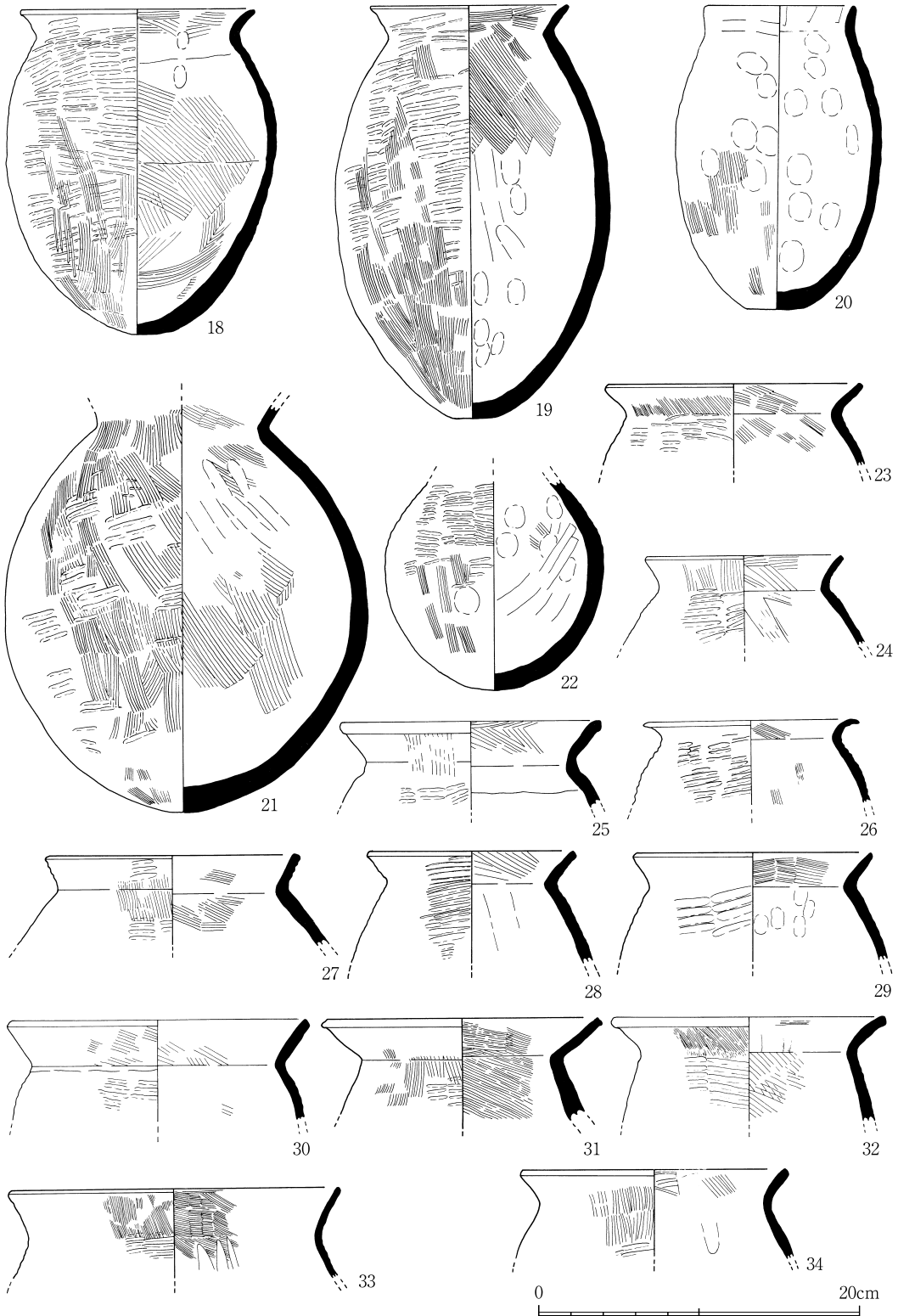


Fig.135 調査V区 甕

第5節 V区

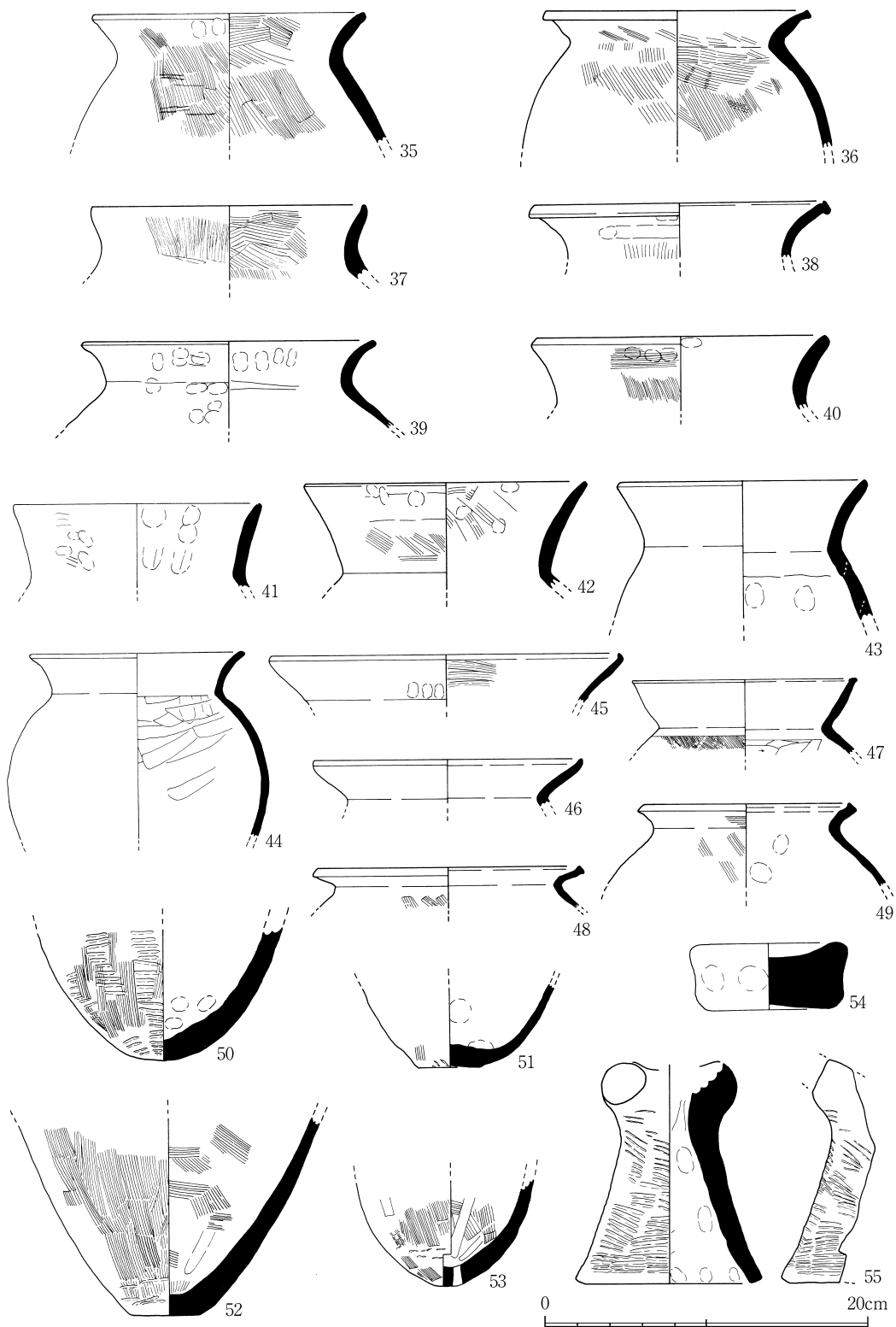


Fig.136 調査V区 甕・底部・土製支脚

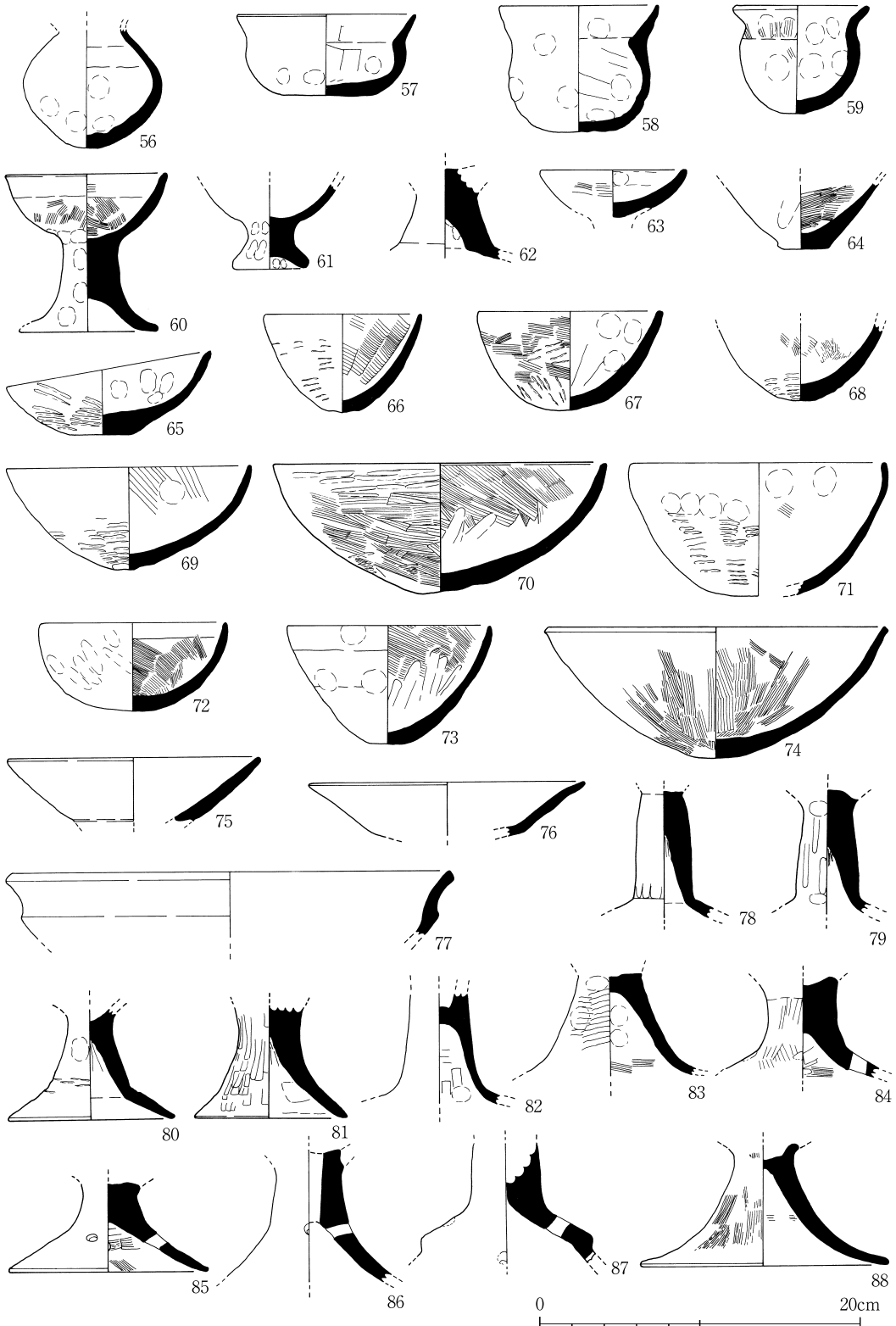


Fig.137 調査V区 小形器種・鉢・高坏

Tab.9 調査V区遺物観察表1

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
134	3	SR501 D3	G層	壺	18.1	(4.5)			口縁部は外反し、端部は上下に肥厚し、外傾する面を成す。端部外面に半裁竹管状工具により波状の文様が施される。外面頸部に縦位のハケ目。口縁部は横位のナデ	1mm大のチャート多く含む。浅黄橙色。
134	4	SR501 C3	G層	壺	23.2	(2.4)			口縁端部はやや下向きに拡張され、上面に波状文が施される。外面口縁下端から頸部にかけて縦位のハケ。口縁部及び内面はナデ。	0.2~4mm大の砂粒。浅黄橙色。
134	5	SR501 B3G層	G層	壺	16.8	(1.3)			口縁端部はやや外傾する面を成し、ヘラ状工具により斜格子状の文様が施される。ナデ。	0.1~3mm大の砂粒。浅黄橙色。
134	6	SR501 B4G層	G層	壺	23.8	(1.3)			口縁部は水平に開き、端部は垂直な面を成す。端部外面にはヘラ状工具により波状の文様が施される。	1~3mm大の砂粒。淡橙色。
134	7	SR501 C4	G層	壺	15.6	(9.8)			内湾する胴部から口縁部は外反し、端部は外傾する面を成す。内外面ハケ調整。外面頸部及び口縁部は横位のナデを施す。	0.5~3mm大の砂粒。にぶい黄橙色。
134	8	SR501 C3	G層	壺	20.7	(9.5)			胴部から口頸部はくの字に外反し、ラッパ状に開く。端部は垂直な面を成し、中央部が凹線状に1条凹む。外面胴部タタキ。口頸部は横位を基調とするナデ。内面口頸部は横位のハケ。	0.5mm大の砂粒。1~3mm大のチャート・角礫多く含む。浅黄橙色。
134	9	SR501 D4	G層	壺	14.0	(5.1)			頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部はつよい横位のナデにより外傾する面を成し、外面下方にやや突出する。外面頸部は縦位のハケ。内面頸部はハケ目がコテアテ状に入る。内面口縁部は単位の細かいハケ状工具により横位に調整し、内面は凹む。	3mm大の角礫を微量含む。にぶい橙色。
134	10	SR501 A4	G層	壺	19.6	(6.1)			頸部は外反し、口縁部にかけてラッパ状に開く。胴部外面にタタキ目残る。外面頸部は縦位のハケ。内面頸部はハケ状工具をコテアテ状に使用する。	1~2mm大の砂粒。浅黄色。
134	11	SR501 C3	G層	壺	19.6	(2.5)			口縁部は外反し、端部はナデにより上方に拡張される。外面口縁下端から頸部にかけて縦位のハケ。口縁部は横位のナデ。	0.1~2mm大の砂粒。浅黄橙色。
134	12	SR501 B3	G層	壺	18.4	(4.6)			口縁部上下に拡張し、端部は水平な面を成す。口縁部は横位のナデ。外面屈曲部は、外側に突出する。	0.5~2mm大の砂粒。橙色。
134	13	SR501 A3	G層	壺	16.2	(6.7)			頸部から外反しながら上方に屈折し、口縁部は上方に拡張され、端部はやや外反し外傾する面を成す。口縁端部は横位のナデ。内面は横位のハケ。	0.5mm大の砂粒。3mm大の角礫多く含む。橙色。
134	14	SR501 A2 A3	G層	壺	18.6				口縁部は外反し、上方に拡張され、端部は外傾する面を成す。口縁外面にヘラ状工具による斜格子状の文様が施される。ナデ。	0.5mm大の砂粒。3mm大のチャート含む。
134	15	SR501 A9	G層	壺		(3.5)			外面頸部と胴部の境に粘土帯が貼付され、ヘラ状工具により斜格子状に施文される。外面胴部ナデ。内面頸部と胴部の境目には横位のハケが非連続的に施される。	0.5mm大の砂粒。3mm大の角礫含む。灰白色。
134	17	SR501 B4	G層	甕	12.0	(8.4)			内湾する胴部から口縁部は内湾気味に上方に直立する。口縁端部は内側に粘土帯を貼付しやや肥厚する。外面胴部はタタキ後ハケ、口縁部は斜位のハケ。内面胴部は指頭によるナデ。	0.5mm大の砂粒。3mm大の角礫含む。灰色。
135	18	SR501 A3	G層	甕	15.0	20.5	17.3		丸底から胴部は内湾し、口縁部はつよく外反する。外面下胴部1/3から上位にかけて全体的に煤付着。外面タタキ後、下胴部はハケ。内面ハケ。	0.5~3mm大の砂粒。チャート目立つ。橙色。
135	19	SR501 C3	G層	甕	12.4	26.3	17.3	2.5	僅かに残る平底から長胴形に延び口縁部はくの字に外反する。外面タタキ後上胴部にかけてハケ。内面下半は指頭によるナデ。上位はハケ。	0.1~3mm大の砂粒。にぶい橙色。
135	20	SR501 C4	G層	甕	9.4	19.2	13.1	2.8	僅かに残る平底から長胴形に延び口縁部は短く外反する。外面下胴部に縦位のハケ。口縁部はナデ内面に一部横位の削り痕。内外面指頭圧痕顕著。	0.5~3mm大の砂粒。チャート目立つ。にぶい橙色。

Tab.9 調査V区遺物観察表2

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
135	21	SR501 A3	G層	甕		(26.0)	23.0		丸底から胴部はほぼ球形に膨らむ。外面タタキ成形後、縦位を基調とするハケ。内面ハケ調整。上胴部に指頭によるナデ。	0.5~5mm大の砂粒。チャート目立つ。橙色。
135	22	SR501 B3	G層	甕		(13.2)	14.0		丸底から小さく球形に膨らむ。外面タタキ後、下半部は単位の細かいハケ。内面は指頭によるナデ。	0.5~2mm大の砂粒。にぶい橙色。
135	23	SR501 A5	G層	甕	16.0	(5.2)			口縁部はくの字に外反。端部は一部面を成す。外面胴部タタキ。口縁部は縦位のハケ。内面胴部から口縁部にかけて斜位のハケ。外面口縁部にタール付着。	0.5mm大の砂粒。3~5mm大の角礫・チャート含む。橙色。
135	24	SR501 B6	G層	甕	12.4	(5.7)			口縁部はくの字に外反する。胴部外面タタキ目残る。口縁部外面縦位のハケ。内面胴部から口縁部にかけて斜位のハケ後口縁端部は横位のハケで仕上げる。	1~2mm大の砂粒。淡橙色。
135	25	SR501 A4	G層	甕	16.4	(5.5)			胴部から内側にやや屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部はやや肥厚する。胴部外面はタタキ目残る。口縁部は荒い単位のハケ。外面口縁部と胴部の境目につよい横位のナデが施される。	1~2mm大の砂粒。にぶい橙色。
135	26	SR501 A10	G層	甕	13.0	(5.5)			内湾する胴部から口縁部は外方に折れ曲がる。外面口縁部までタタキ目。内面ハケ・ナデ。	0.5~3mm大の砂粒。浅黄橙色。
135	27	SR501 B3	G層	甕	15.6	(5.7)			口縁部はくの字に短く外反し、端部は面を成す。外面全面タタキ後、胴部と口縁部境目にハケ目残る。内面ハケ	1~3mm大のチャート礫含む。灰黄色。
135	28	SR501 B5	G層	甕	13.0	(7.1)			胴部から口縁部はくの字に外反する。外面タタキ目。内面胴部は縦位のナデ。口縁部は荒いハケ状工具によるナデ。	5mm大の角礫含む。浅黄橙色。
135	29	SR501 A5	G層	甕	15.0	(6.8)			口縁部はくの字に外反。口縁部タタキ出しの後ナデ。口縁部内面は横位のハケ。	3mm大の角礫少量含む。にぶい橙色。
135	30	SR501	G層	甕	18.8	(6.4)			口縁部はくの字に外反し、やや間延びする。端部は外傾する面を成す。胴部にタタキ目を残す。口縁部は内外面ともにハケ。	0.5~2mm大の砂粒。浅黄橙色。
135	32	SR501 B7	G層	甕	17.0	(6.6)			口縁部はくの字に外反しやや間延びする。胴部外面はタタキ目。口縁部は縦位のハケ。胴部内面は荒い単位のハケ。口縁内面は横位のハケ。	1~2mm大の砂粒。にぶい橙色。
135	33	SR501 C4	G層	甕	21.0	(5.7)			口縁部は間延びしながら外反する。端部は僅かな面を成す。胴部外面はタタキ目。口縁部は内外面とも細かい単位の密なハケ調整。口縁部内面はコテアテ状にハケ目が残る。胴部内面にヘラケズリ。外面にタールが付着する。	0.5~3mm大の砂粒。にぶい橙色。
135	34	SR501	G層	甕	16.8	(5.6)			口縁部はくの字に緩やかに外反し、端部は外傾する面を成す。外面タタキ。上胴部から口縁部にかけてハケ。口縁端部はナデる。内面胴部はナデ。	1~3mm大のチャート礫多く含む。浅黄橙色。
136	35	SR501 B4	G層	甕	17.2	(8.2)			内湾する胴部から口縁部はくの字に緩やかに外反する。端部はやや面を成す。外面タタキ後、縦位のハケ。内面胴部は斜位、口縁部は横位のハケ。外面口縁部と頸部の境目の一部にタール付着。	0.1mm大の白色砂粒。1~5mm大の角礫多く含む。橙色。
136	36	SR501 B4	G層	甕	16.6	(8.5)			内湾する胴部から口縁部は横位に外反する。端部は外傾する面を成し、下方にやや拡張する。外面斜位のハケ。内面胴部は縦位のハケ。胴部上位の粘土帯接合部から口縁部にかけては横位のハケ。	0.5mm大の砂粒。1~3mm大の角礫含む。にぶい橙色。
136	37	SR501 B4	G層	甕	17.4	(4.6)			口縁部は直立気味に立ち上がり、内湾する。端部は横位のナデにより尖り気味に仕上げる。外面縦位のハケ。内面横位のハケ。外面口縁部に煤付着。	1~3mm大のチャート含む。橙色。
136	38	SR501	G層	甕	18.4	(3.5)			口縁は外反し、端部は上下に拡張され外傾する面を成す。外面頸部は荒い単位の縦位のハケ。口縁部は横位のナデ。端部はつよい横位のナデにより、内側に尖り気味に突出する。	1~5mm大チャート含む。にぶい黄橙色。

Tab.9 調査V区遺物観察表3

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
136	39	SR501 A3	G層	甕	18.4	(5.5)			口縁部はつよく外反し、端部は丸くおさめる。口縁部に指頭圧痕顕著。ナデ。	1mm前後の砂粒。灰黒色。
136	40	SR501 A5	G層	甕	18.2	(4.6)			口縁端部は外傾する面を成す。口縁部下位は縦位のハケ、上位は横位のハケ。内面はナデ。外面タール附着。	0.5~3mm大の砂粒。にぶい橙色。
136	41	SR501 C3	G層	甕	15.6	(5.3)			口縁部はやや外反する。ナデ。	0.1~2mm大の砂粒。灰黄褐色。
136	42	SR501 C3	G層	甕	17.6	(6.7)			口縁部は斜上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。口頸部に斜位のハケ。口縁端部は横位のナデ。	0.1~1mmの砂粒含む。浅黄褐色
136	43	SR501 B4	G層	甕	15.4	(8.7)			外反しながら、間延びする口縁。口縁端部はやや外傾する面を成す。外面タール附着。	8mm大の角礫含む。にぶい橙色。
136	44	SR501 B4	G層	甕	13.2	(11.6)	16.6		球形を呈する胴部から口縁部は外反する。胴部内面横位のヘラケズリ。口縁部は横位のナデ。胴部中位まで内外面ともにタール附着。口縁外面の一部にもタール附着が認められる。	1mm大の角礫を微量含む。にぶい黄褐色。
136	46	SR501 B5	G層	甕	16.8	(2.9)			口縁部は外反し、口縁部は横位のつよいナデ。口縁端部は摘まみ上げるように撫で、上向き、尖り気味に仕上げる。外面口縁部下にタール附着。	0.2mm大の均一な砂粒。角閃石含む。
136	47	SR501 B8	GV層	甕	13.4	(4.8)			くの字に外反し、口縁端部は水平な面を成し、内側に突出する。口縁部は内湾気味になる。胴部外面は細かい単位の密なハケ。胴部内面は横位のヘラケズリ。口縁部は横位のナデ。口縁部外面にタール附着。布留甕	1~2mm大の角礫若干含む。にぶい黄褐色。
136	48	SR501 D3	G層	甕	16.7	(2.6)			口縁部は、横位につよく外反し、端部は摘まみ上げ断面三角形を呈し、外傾する面を成す。外面胴部右上がりのハケ。口縁部は横位のつよいナデ。内面胴部と口縁部の境目に指頭圧痕残る。外面口縁部に煤附着。	細砂粒。結晶片岩を含む。にぶい黄褐色。
136	49	SR501 B4	G層	甕	13.0	(5.2)			内湾する胴部から口縁部はくの字に短く外反し、端部は内側に摘まみながら横位にナデを施し外傾する面を成す。外面胴部は斜位のハケ、口縁部はつよい横位のナデ。	0.1mm大の砂粒。角礫は含まれず均一な砂粒。橙色。
136	50	SR501 A4	G層	甕		(8.2)			丸底から内湾する。外底部ラセン状のタタキ。外面縦位にハケ。内面はナデを基調とし、内底部には指頭圧痕が顕著。	0.5~4mm大の砂粒。にぶい橙色。
136	51	SR501 A3	G層	鉢		(5.0)	4.0		平底から内湾する。外底部はラセン状に叫いた後、平底に成形する。調整は内外面ともナデ。	0.1~0.2mm大の均一な砂粒。にぶい橙色。
136	52	SR501 B4 B5	G層	甕		(12.4)	4.9		平底から長胴形に延びるものと思われる。外面僅かにタタキ目が残る。縦位のハケ調整。内面ハケ。	0.5mm大の砂粒。5mm大の角礫含む。浅黄褐色
136	53	SR501 C3	G層	甕		(6.6)			丸底の底部に直径6mmの円孔がみられる。外面タタキ後縦位のハケ。内面ハケ。	0.5~4mm大の砂粒。にぶい黄褐色。
136	54	SR501	G層	器台	10.0	4.1	8.0		円盤状を呈し、上面受け部は凹む。外面に指頭圧痕が残る。	0.5mm大の砂粒。3~5mm大の角礫含む。浅黄褐色。
136	55	SR501 C2	G層	土製支脚		14.0	11.8		脚部から中空であり、裾部はハの字状に開き、裾端部は水平な面を成す。受け部は角状の突起が付く。3/4以上欠損しており、角状突起が何個になるかは不明である。外面タタキ。脚部内面に絞り痕。指頭圧痕。	3~5mm以上の角礫・チャート含む。
137	56	SR501 B4	G層	小型丸底壺		(7.5)	9.0		算盤玉形の胴部。口縁部は欠損する。内外面とも丁寧なナデ。	0.5mm大の砂粒3mm大のチャート含む。にぶい橙色。
137	57	SR501 A9	GⅢ層	小型有段鉢	11.4	5.1	10.4		扁平な体部から口縁部は段を持って外反する。外面ナデ。内面体部は横位のケズリ。口縁部は横位のナデ。内底部に赤色顔料の塗彩が認められる。	0.5mm大の砂粒。3mm大の角礫を若干含む。浅黄褐色。
137	58	SR501 C3	G層	小型有段鉢	10.0	8.0	9.1		やや扁平気味な胴部から口縁部は段を持って外反する。内面体部と口縁部の境目に段が認められる。内外面とも丁寧なナデ。口縁部横位のナデ。	0.5mm大の砂粒。2mm大の角礫若干含む。にぶい橙色。

Tab.9 調査V区遺物観察表4

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
137	60	SR501 A3	G層	高坏	10.4	10.0		8.6	充実の脚部から裾部はラップ状に開く。坏部は椀状を呈する。坏部内外面ともハケ口縁部はヨコナデ。脚部はナデ指頭圧痕残る。	0.1~0.5mm大の均一な砂粒。にぶい橙色。
137	61	SR501 C3	G層	台付鉢		(5.4)		4.4	ハの字に開く台状の脚部から坏部は内湾気味に立ち上がる。脚部外面に指頭圧痕。坏部はナデ。	0.5mm大の砂粒。浅黄色。
137	62	SR501	G層	器台		(5.6)			充実の脚部から裾部はラップ状に開く。外面ナデ。脚部内面は指頭により凹み圧痕が残る。古式土師器Ⅱ・Ⅲ	0.2mm大の砂粒。橙色。
137	63	SR501 A5	G層	器台	9.2	(3.0)			器台の受け部であり、脚部は欠損、皿状を呈する。外面はハケ。内面はハケ後ナデ。	0.1~2mm大の砂粒。橙色。
137	64			鉢					平底から斜上方に直線的に立ち上がる。	
137	65	SR501 B4	G層	鉢	13.2	5.2		4.0	僅かに残る平底から斜上方に開き口縁部にかけて内湾、端部は丸まる。外底部はラセン状のタタキの後、平底に成形する。	0.5mm大の砂粒。3mm大の角礫含む。にぶい橙色。
137	66	SR501 Z10	G層	鉢	10.0	6.2			丸底から内湾し口縁端部は尖る。椀形。外面タタキ。内面は横位のハケが非連続的に施される。	0.5mm大の砂粒。5mm大の角礫含む。にぶい橙色
137	67	SR501 B3	G層	鉢	11.8	6.2			丸底から内湾する。外面底部にタタキ目残る。横位のハケ。内面ナデ。	0.5~3mm大の砂粒。5mm以上の角礫含む。にぶい橙色。
137	68			鉢					丸底から内湾する。	
137	69	SR501 C4	G層	鉢	15.8	6.5			丸底から斜上方に開き口縁部は内湾する。口縁端部は尖り気味に仕上げる。外底部から螺旋状にタタキ。内面はハケ後ナデ。	3~5mm大のチャート含む。にぶい黄橙色。
137	70	SR501 B3	G層	鉢	21.3	8.3			丸底から斜上方に開き、口縁部内湾、端部は水平な面を成す。外面タタキ後横位のハケ。内面は放射状のハケ。	1.5mm大の角礫を微量含む。にぶい黄橙色。
137	71	SR501 D3	G層	鉢	16.2	8.4			丸底から内湾し、体部上半から口縁部にかけてさらに内湾する。口縁端部は僅かに水平な面を成す。外面胴部は横位のタタキ目。口縁部はナデ。内面はナデが基調であるが一部、ハケ目が残る。	0.5mm大の砂粒。3mm大の角礫含む。橙色。
137	72	SR501 B4	G層	鉢	12.0	5.6			丸底から内湾し、口縁端部は尖る。外面ナデ。僅かにタタキ目残る。内面は細かい単位のハケ調整が放射状に施される。口縁部はヨコナデ。	0.1~3mm大の砂粒。にぶい橙色。
137	73	SR501 C4	G層	鉢	13.0	7.5		2.6	僅かに残る平底から内湾し口縁部は尖る。外面ナデ。内面体部上半~口縁部ハケ。下位はナデ。	0.5~6mm大の砂粒。橙色。
137	74	SR501 A3 B3	GⅢ層 G層	鉢	21.6	8.3			丸底から斜上方に大きく開き、口縁端部は外傾する面を成す。内外面ともに縦位のハケ。口縁部はヨコナデ。	1~5mm大の砂粒。にぶい赤橙色。
137	76	SR501 C3	G層	高坏	17.6	(3.4)			腰折れの坏部から口縁はやや外反気味に斜上外方に延びる。器表面は摩耗しており、調整等は不明であるが、腰折れ部下端にヘラミガキが施されている。	0.2mm大の砂粒。にぶい橙色。
137	77	SR501 A2 A3	G層	高坏	28.0	(4.2)			斜上方に延び口縁部は外反、端部は外傾する面を成す。口縁部は横位のナデ。	0.5mm大の砂粒。1~2mm大の角礫多く含む。浅黄橙色。
137	78	SR501 B4	G層	高坏		(8.0)			中空の脚部から裾部はラップ状に開くものと思われる。脚部内面に絞り目が認められる。外面はナデ。裾部と脚部境目にヘラ状工具によるケズリが認められる。	0.5mm大の砂粒。No.5061と同じ胎土。灰黄色。
137	79	SR501	G層	高坏		(6.5)			中空の脚部。脚内上部に絞り目残る。外面はナデ。一部、ヘラ状工具によるナデもみられる。	0.5mm大の砂粒。No.5061と同じ胎土。にぶい黄橙色。

Tab.9 調査V区遺物観察表5

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
137	80	SR501 A10	GⅢ層	高坏		(7.4)		10.4	中空の脚部から裾部はラッパ状に開く。脚部内面ケズリと絞り目が認められる。外面はナデ。	0.1~0.2mm大の均一な砂粒。浅黄橙色。
137	81	SR501 B4	G層	高坏		(7.1)		9.8	中空の脚部。脚内上部に絞り目残る。外面はナデ。一部、ヘラ状工具によるナデもみられる。	0.5~1mm大の砂粒。にぶい褐色。
137	82	SR501	G層	高坏		(7.0)			中空の脚部。脚部内面は横位のケズリ。外面はナデ。	0.5~2mm大の砂粒。浅黄橙色。
137	83	SR501 A3	G層	高坏		(6.2)			中空の脚部。外面タタキ後ナデ。裾部内面は横位のハケ。	0.5~3mm大の砂粒。白色。
137	84	SR501 A7	G層	高坏		(6.3)			充実の脚部から裾部はラッパ状に開く。裾部上位に直径1cm大の円孔が2個以上配される。外面荒いハケ目。脚部内面はケズリ込む。	1~3mm大のチャート多く含む。浅黄橙色。
137	85	SR501 B3	G層	高坏		(5.6)		12.8	充実の脚部から裾はラッパ状に開く。外面ナデ。脚部内面はハケ。	1~2mm大の砂粒。橙色。
137	86	SR501	G層	高坏		(8.5)			中実の脚部から裾部はラッパ状に開く。直径7mmの円孔が脚部下位に1個認められる。	5mm大の角礫含む。浅黄橙色。
137	87	SR501 C3	G層	高坏		(7.7)			二段に屈曲する裾部。裾部上位と下位に直径1cm以上の円孔が2個以上配される。	1mm大のチャート含む。にぶい黄橙色。
137	88	SR501 B4	G層	高坏		(7.7)		16.0	中空の脚部。裾がラッパ状に開く。外面縦位のハケ調整。	0.5~1mm大の砂粒。にぶい黄橙色

第6節 VI区

(1) 調査VI区の概要

VI区は調査対象地の西寄りに位置し、V区とⅢ区間に位置する調査区である。現況は水田で標高6.3m前後を測る。試掘調査が行われてない調査区であり、まず南北にトレンチを設定し調査を開始した。その結果、北部では自然流路の続きを確認し、南部は噴砂跡と考えられる遺構を確認し、調査区の拡張を行った。

南部では、調査区西壁セクションで、調査区南端から北へ9.7m、11.5～11.8mの地点で、噴砂が確認され、5層の灰色粘土層を切って下層の灰色細砂層(礫混じり)が隆起する。5層からは縄文晩期の土器片が出土している。

北部では、SR501の続きを検出し、調査区の拡張を行った。流路はV区の北端からVI区に向かって東流し、やや南に蛇行しながらⅢ区SR301に続く。VI区では、流木や木器が植物層から出土し、下層砂利層から弥生時代終末期～古墳時代初頭を中心とする土器の出土があった。

南部と北部の2ヶ所について拡張したがそれぞれ南部はVI A、北部はVI Bと呼称し調査区を設定した。また、調査区についてはグリッドを設定したが、方向についてはV区と同じであり、N-16°-Wを指し、NはIV系座標北を示す。東西方向に東から西に向かってV、W、X、Y...南北に南から北に向かって1、2、3、4...と番号を付し、遺物の取り上げ等には、グリッドNo.を使用した。

(2) 層序

VI A (調査区南部) 西壁セクション

調査区南部では、灰色の粘土～シルト層の堆積がみられ、一部、噴砂と考えられる堆積が認められた。1層は現耕作土であり、調査区全体に厚さ30cm前後でほぼ均等にみられる。2層は旧耕作土にあたり、耕土(灰色粘土)と鉄分を含んだ床土(黄褐色)とが互層に堆積しており、細分すると2次期が認められる。3層は灰色粘土層であり、炭化物を微量含む。調査区南端から5mの範囲で堆積が認められる。4層は明黄灰色シルト層で炭化物、鉄分を微量含む。調査区南端から6.2mの範囲で堆積が認められる。5層は灰色粘土層であり、縄文晩期土器を包含する。層厚70～80cmで均等に堆積が認められる。6層は灰色細砂層であり、小礫を含む。下層9層と類似するが砂粒が細かい。南端から8.8～10.0mの間で隆起し、9.7mの所で、5層中に切れ込む。噴砂と考えられる。7層は灰色粘土層であり、細砂を含む。液状化に伴う堆積であり、調査区南端から11.5～11.8mの地点でみると8層の細砂層が隆起し、5層中に切れ込む。8層は灰色細砂層であり、調査区南端3.8mの地点から北に層厚15～30cmで堆積する。一部、鉄分を含み赤褐色を呈する。(8②層)9層は灰色砂利層であり、粗砂と直径1～2cm大の礫で構成される。10層は灰色砂礫層である。粗砂と直径2～5cm大の礫で構成される。11層は赤褐色砂利層であり、鉄分を多く含む。直径1～2cm大の礫で構成される。12層は灰色砂礫層であり、粗砂と直径2～4cm大の礫で構成される。

第6節 VI区

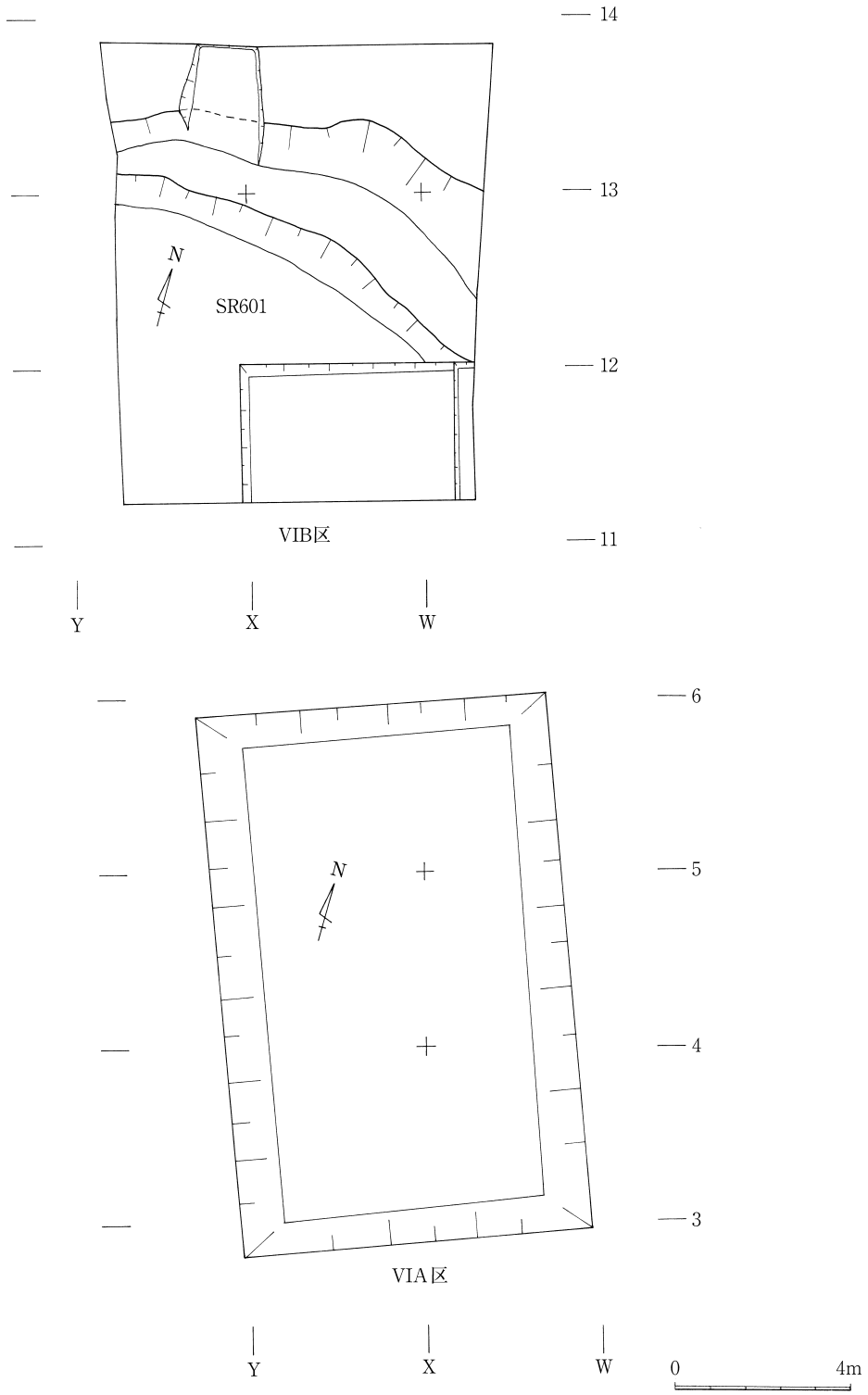


Fig.138 調査VI区全体図

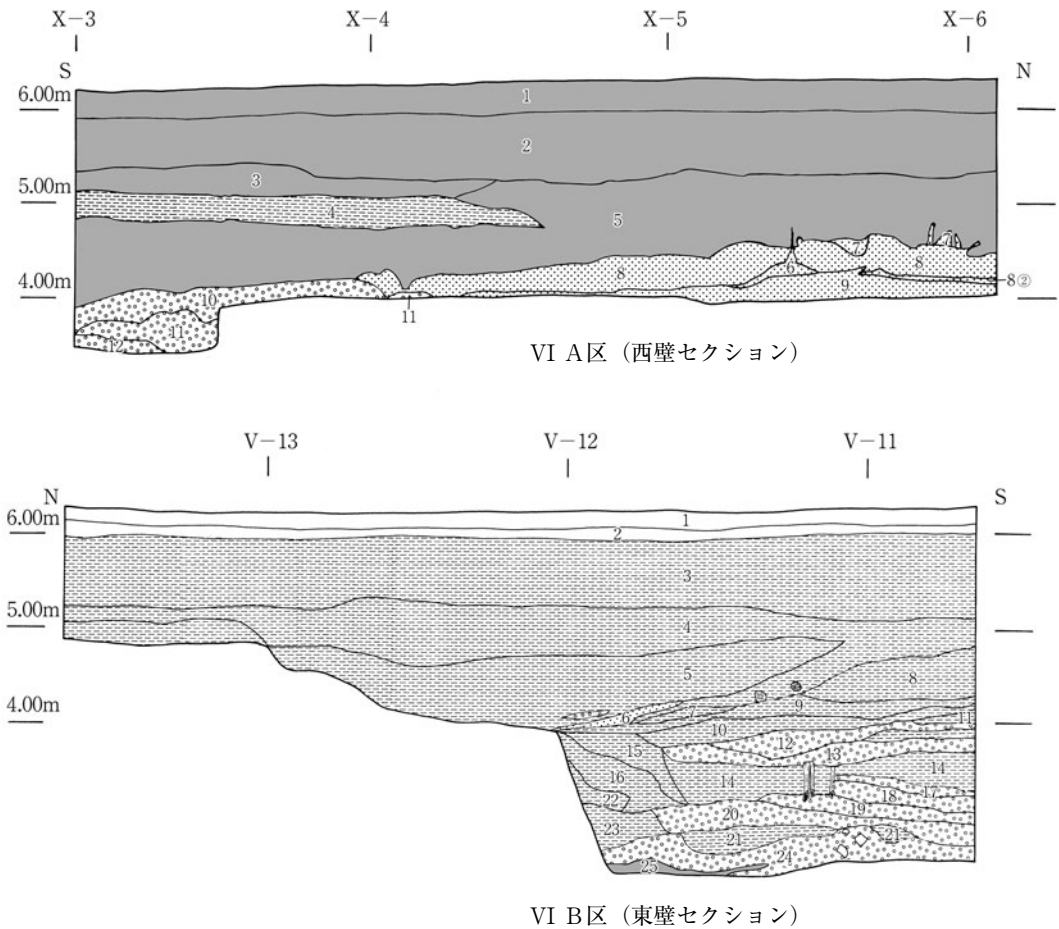


Fig.139 調査VI区セクション図

VI B (調査区北部) 東壁セクション

調査区北部V11~14グリッド地点の東壁をみる。ここでは、V区から続く自然流路を検出した。1~3層は耕作土・旧耕作土であり、VI A区の1・2層に対応し、調査区全体に堆積が認められる。4層は暗灰色シルト層であり、炭化物を含む。V12グリッド以南では藍鉄鉱が散見される。5~24層が流路堆積層である。5層は植物遺存体堆積層であり、流木、木器が包含される。P層として遺物を取上げた。6層の砂利層が間層として認められる。7層は暗灰色シルト層であり、砂礫が混入する。8層は暗褐色シルト層であり、植物遺存体を包含する。下層9層

の細砂層、10層暗灰色粘性シルト層まで植物遺存体が含まれており、5～10層までをP層として木器・土器等遺物の取り上げを行った。このP層下には、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の土器を包含する砂利層が堆積している。12・13層が砂利層であり、G I層として土器等の取り上げを行った。G I層下には、褐色粘土～シルト層の14～16層があり、植物遺存体を包含する。セクションの北から10.1～10.5mの地点、標高3.7mで13層砂利層～19層の砂利層に至るまで長さ30～38cm、直径6cm前後の杭が並んで検出された。この下層に堆積している植物遺存体を包含する14～16層をP II層として取り上げを行った。杭列ラインから南、14層下には17～20層の砂利層が堆積しており、土器を包含している。G II層として遺物の取り上げを行った。20層下には、灰褐色粘性シルト層の21層の堆積が認められ、植物遺存体等を包含する。21層は部分的な堆積であるが、下層24層の砂利層との間層として捉えることができる。24層は土器を包含している。

以上、調査区北部の東壁セクションを概観したが、大きく4～13層の段階と、14～20層の段階と、21～24層の段階大きく3時期の洪水堆積が認められ、4～13層の堆積が最終流路堆積層として捉えることができ、東側Ⅲ区SR301に続く堆積層であると考えられる。地形的にみてV 12ライン以北には、地山的堆積層である青灰色～灰色の粘土層が標高4.8mで検出されており、地形の高まりがあるものと考えられる。この地点を頂部とし、南部に向かって地形が低くなり、自然流路となる。南部であるVI A区は、5層の縄文晩期の段階に堆積が進んだものと考えられ、それ以降VI A区は南部の高まりであると考えられ、自然流路は北部の方に流れを変え、最終的にV 11～13ラインが埋積し廃棄されたものと考えられる。

3) SR601出土遺物

VI区では、南部VI A区で5層から縄文時代晩期の土器片が3片出土がみられたが図示し得るものは無かった。北部SR601では、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭にかけての時期を中心とする土器が出土している。主にG層からの出土であるが、部分的な堆積層で層位的な取り上げは困難であり、一括性があるとは言い難い。ここでは、SR601から出土した土器について器種ごとに取り上げた。出土地点・層位・特徴等は観察表を参照されたい。

壺

1～4は広口壺の口縁部片である。1・2は口縁端部は面を成し、内面が強い横位のナデにより凹む。3は口縁端部外面に櫛描による波状文が施される。4の口縁部は直線的開き、端部は尖り気味である。5は複合口縁壺であり、外反しながら上方に折れ端部は内傾する面を成す。口縁端部外面に半裁竹管状工具により波状の文様が押し引きされる。6の口縁は受け口状を呈する。

甕

7～17は甕である。7は弥生時代前期末葉の甕であり、口縁端部に刻目が施され、口頸部にヘラ描きによる沈線帯が巡る。8～13はタタキ甕である。寸胴形のタイプ(8・9)、上胴部に最大径がくるタイプ(10～13)がある。10・11は口縁内面をハケ状工具によりコテアテ状に調整を施

している。胎土には角閃石が微量含まれており、他のタタキ甕とは異なる。14・15は搬入品である。14の口縁部は横位に外反し、口縁端部を上方に摘み、断面三角形状を呈す。胎土には角閃石が微量含まれる。15の口縁部はつよい横位のナデにより、端部がやや内湾気味になる。胴部は横位のヘラケズリが施される。胎土には角閃石を微量含む。16は口縁端部が水平な面を成し、内面がやや突起状を呈する。17は球形に張る胴部で口縁部が外反する。胴部内面は斜位のヘラケズリが認められ、内面の口縁部と胴部の境目を横位にヘラケズリを施す。胎土は在地系であり、形態的には畿内系甕に類似する。

甌

18は甌である。外底部から螺旋状にタタキ丸みを持ち立ち上がり、上半は横位にタタキ口縁部は尖り気味に仕上げる。内面はヘラ状のもので撫でて調整を施す。底部に直径1.2cmの円孔が施される。

小型器種

19は小型丸底鉢である。丸底から胴部は球形を呈し、口縁部は外反する。器形は甕にも類似する。20・21は直口壺の口縁部片である。法量が小さく、小型丸底壺の範疇で捉えられる可能性がある。

鉢

22は尖底状の底部から斜上方に開き口縁端部は外傾する面を成す。

高杯

23～26は高杯である。23・24は坏部であり、やや腰折れ気味の体部から口縁部は外反する。25・26脚部であり、中空の脚部内面には横位のヘラケズリが認められる。

須恵器

SR601からは須恵器が1点のみ出土している。27は蓋であり、天井部は欠損する。口縁部と天井部の境目は沈線状に凹み、上方が明瞭な稜を成す。陶邑TK208並行と考えられる。

以上、SR601出土遺物を概観したが、グリッド12～13ラインにかけて堆積が認められるP層(4・5)から出土している遺物の傾向をみると比較的新しい様相が窺える。特にV13グリッドで出土した27の須恵器蓋は陶邑TK208並行期のものであり、SR601最終段階の層から出土しておりこの段階に流路は廃絶したものと考えられる。

第6節 VI区

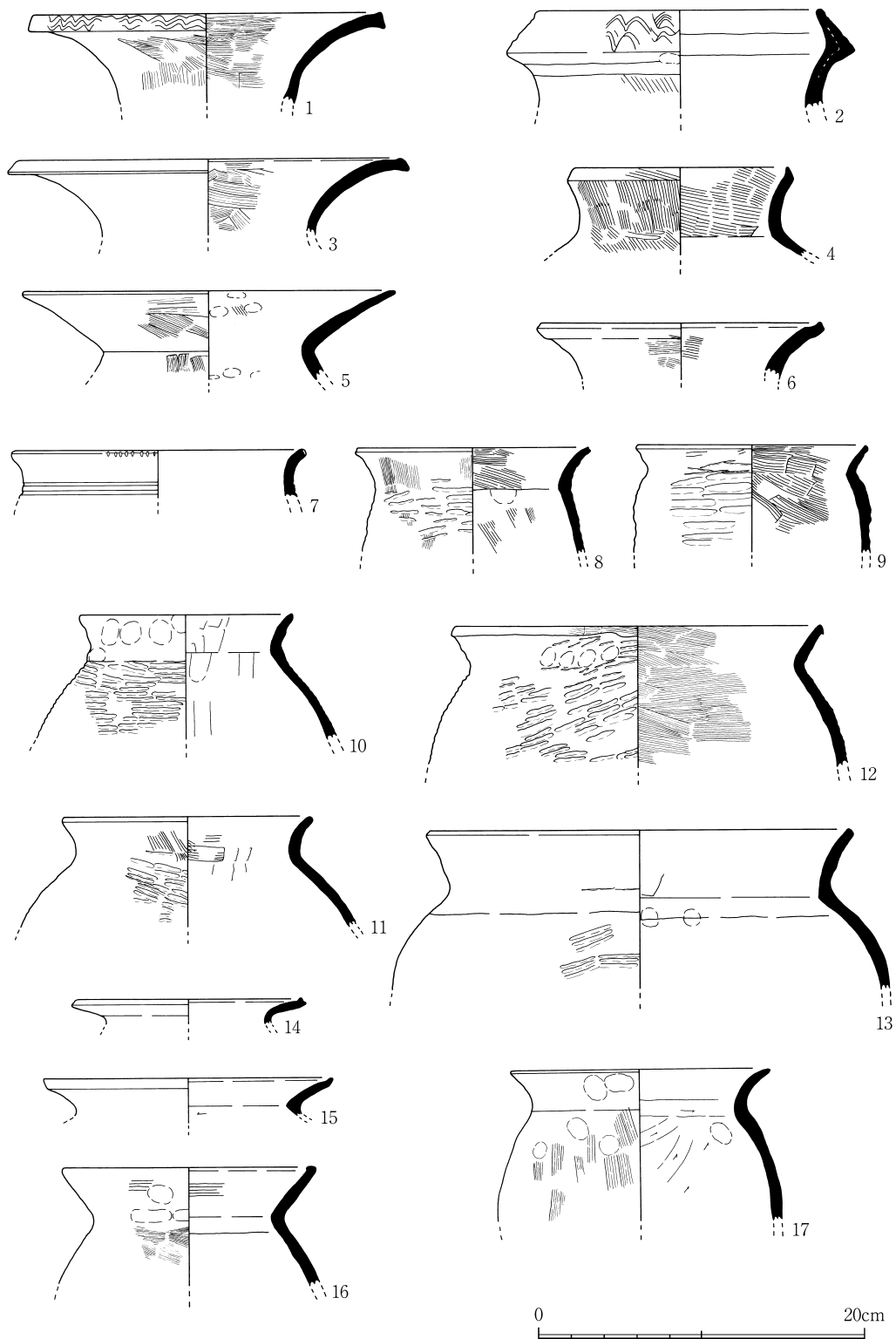


Fig.140 調査VI区SR601出土遺物1

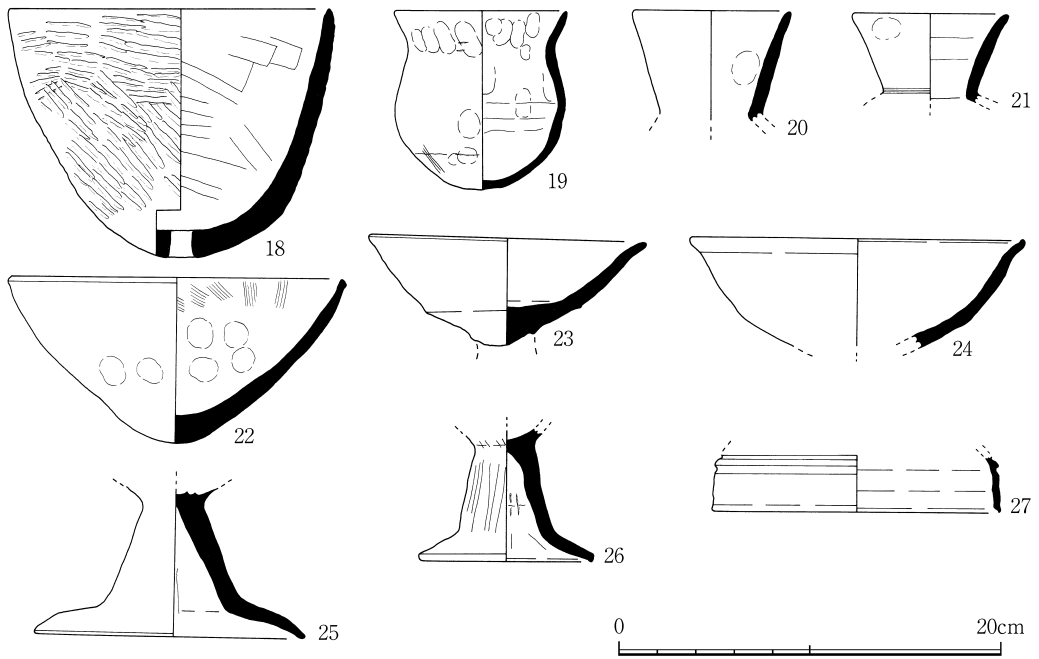


Fig.141 調査VI区SR601出土遺物2

Tab.10 調査VI区遺物観察表1

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
140	6	SR601 W12	G層	壺	17.2	(3.5)			口縁部は外反し、端部は外傾する面を成す。口縁部内面は横位のつよいナデにより凹む。内外面横位のハケ。	1～2mmの砂粒を含む。灰白色
140	3	SR601 X12	GⅢ層	広口壺	23.8	(4.7)			口縁部はラッパ状に大きく開き、口縁端部は外傾する面を成す。口縁部内面は横位のつよいナデにより凹む。内面頸部に横位のハケ。	1～3mm大の砂粒。橙色。
140	1	SR601 W13	P層	広口壺	21.6	(5.6)			口縁部はラッパ状に開き、口縁端部がやや外傾する面を成す。口縁部外面に櫛状工具により、波状文が施される。外面頸部は縦位、口縁部は斜位～横位のハケ。内面は横位のハケ、端部はナデ。	1～4mm大の角礫含む。にぶい橙色。
140	5	SR601 W12	G層	広口壺	23.0	(5.5)			口縁部はラッパ状に開き、口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面胴部は縦位、口縁部は斜位を基調とするハケ。口縁端部は横位のナデ。	0.1～1mm大の砂粒。にぶい橙色。
140	2	SR601 W12	G層	複合口縁壺	17.6	(6.1)			頸部からやや外反気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部外面に半裁竹管状工具による波状文が押し引きされる。頸部外面に荒い単位のハケ目が縦位に残る。	3～5mm大の角礫を含む。にぶい黄橙色。
140	4	SR601 W12	P層	壺	13.2	(5.5)			口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は内傾し、尖り気味に仕上げる。受け口状の口縁。口縁部外面は縦位のハケ、内面は横位のハケ。	0.5～3mm大の砂粒。にぶい橙色。
140	7	SR601 W13	P層	甕	17.8	(3.0)			口縁部は如意状に外反し、丸味を帯びる端部に刻目が施される。口頸部にヘラ描き沈線が巡る。口縁部外面に煤付着。	0.1～4mm大の砂粒。浅黄橙色。
140	8	SR601 W12	G層	甕	14.4	(6.6)			内湾する胴部からくの字に緩やかに外反する。胴部外面タタキ目残る。口縁部外面は縦位のハケ、内面は横位のハケが施される。	0.5～3mm大の砂粒。にぶい橙色。
140	9	SR601 X13	G層	甕	14.2	(6.7)			内湾する胴部から口縁部は短く外反する。胴部外面は荒い単位のタタキ目が横位に残る。内面胴部は斜位、口縁部は横位のハケが施される。	1～5mm大のチャートを含む。淡橙色。
140	10	SR601 W13	PI層	甕	13.2	(7.8)			内湾する胴部から口縁部は外反する。胴部外面タタキ。口縁内面は横位のヘラナデがコテアテ状に施される。外面胴部と口縁部の一部にタール付着。	0.5～1mm大の砂粒。角閃石を微量含む。橙色。
140	11	SR601	P層	甕	15.3	(6.9)			内湾する胴部から口縁部は外反する。胴部外面タタキ。口縁部はハケ。口縁内面は横位のハケがコテアテ状に施される。外面胴部と口縁部の一部にタール付着。	0.5～1mm大の砂粒。角閃石を微量含む。浅黄橙色。
140	12	SR601 X11	GⅢ層	甕	22.6	(8.8)			内湾する胴部から口縁部はくの字に外反する。口縁端部は外傾する面を成す。外面は全体的にタタキ目が残る。内面は横位を基調とするハケ調整が口縁部まで施される。	1～5mm大のチャート・石英を含む。橙色。
140	13	SR601 X13	G1層	甕	26.0	(10.0)			内湾する胴部から口縁部は外反する。口縁端部は外傾する面を成す。内面口縁部下に粘土帯貼付痕が認められ、この部位は横位にナデが施され外面はやや凹む。胴部外面はタタキ目が残る。口縁部は横位のナデ。	0.5～2mm大の砂粒を多く含む。褐灰色。
140	14	SR601 X13	G1層	甕	13.8	(1.6)			口縁部は横位に外反し、口縁端部は上方に摘み上げ、断面三角形を呈する。	細砂粒。角閃石を微量含む。にぶい橙色。
140	15	SR601 X13	P層	甕	18.0	(2.3)			口縁部は外反し、口縁端部は横位のつよいナデにより、上向き内面がやや凹む。胴部上半に右→左のヘラケズリが僅かに認められる。	細砂粒。角閃石を微量含む。にぶい黄橙色。
140	16	SR601 W12	P層	甕	15.6	(7.4)			内湾する胴部から口縁部はくの字に外反する。口縁端部はナデにより水平な面を成し、内側が突起状を呈す。胴部外面は単位の細かいハケが斜位に施される。口縁部は内外面ともに横位のナデ。	細砂粒。橙色。
140	17	SR601 V12	P層	甕	15.6	(9.3)			内湾する胴部から口縁部は外反する。胴部外面は縦位のハケ。内面胴部は斜位のヘラケズリ。口縁部下位は横位のヘラケズリ。口縁部は内外面とも横位のナデ。胴部から口縁部の一部にかけ煤付着。	0.5～2mm大の砂粒。石英。淡灰褐色。
141	18	SR601 X13	G1層	甕	17.0	13.2			外底部からラセン状に叩き丸底に成形し、体部は上方に立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。底部に直径1.2cmの円孔が認められる。内面はヘラ状工具によるナデ。	1～3mm大の砂粒。にぶい橙色。

Tab.10 調査VI区遺物観察表2

Fig. No.	遺物 No.	出土地点	層位	器種	法 量				特 徴	胎土・色調
					口径	器高	胴径	底径		
141	19	SR601 W13	P層	小型丸底鉢	9.0	9.5	9.0		丸底から胴部は球形を呈し、口縁部は短く外反する。口縁部及び外面胴部下半に指頭圧痕顕著。全体的にナデ調整。	0.5mm大の均等な砂粒。淡黄色。
141	20	SR601 W13	P層	直口壺	8.2	(5.8)			口縁部は斜上方に直立し、端部は尖り気味に仕上げる。	0.5~2mm大の砂粒を多く含む。にぶい橙色。
141	21	SR601 W13	P層	直口壺	8.2	(4.7)			口縁部は斜上方に直立し、端部は尖り気味に仕上げる。内外面横位のナデ。	0.5mm大の均等な砂粒。橙色。
141	22	SR601 X12	GIII層	鉢	17.6	8.8	1.4		尖底状の底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は外傾する面を成す。タタキ成形の後、タタキ目をナデ消す。口縁部内面の一部にハケ目が残る。全体的にナデ調整。	3~5mm大の角礫を多く含む。チャート・石英。浅黄橙色。
141	23	SR601	P層	高坏	14.0	(5.7)			脚部は欠損する。体部は接合部が顕著に認められ、外面が稜を成す。ナデ調整。	0.5mm大の均等な砂粒。石英。にぶい橙色。
141	24	SR601 W12	P層	高坏	17.6	(5.8)			坏部下半から脚部は欠損する。腰折れ気味の体部から口縁部は外反する。口縁端部は横位のつよいナデにより、内面は凹む。	0.5~2mm大の砂粒。石英。にぶい橙色。
141	25	SR601 W13	P層	高坏		(7.9)	14.0		坏部は欠損する。中空の脚部から裾部はラップ状に開き、端部は下向く。脚部内面は横位のヘラケズリ。裾部は横位のつよいナデ。	0.1~1mm大の砂粒。橙色。
141	26	SR601 X13	GI層	高坏		(7.0)	9.0		坏部は欠損する。裾部はラップ状に短く開く。裾端部は横位のナデにより、下方に突起状を呈す。中空の脚部内面下位には横位のケズリ、上位には絞り目が認められる。外面は縦位にヘラ状工具によるナデが認められる。	細砂粒。赤褐色。
141	27	SR601 V13	PI層	須恵器蓋	15.2	(3.0) 口縁高 2.4cm			天井部は欠損する。口縁部と天井部の境は沈線状に凹み、稜を成す。TK208	細砂粒。灰色。

第V章 まとめ

今回の柳田遺跡の発掘調査では、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期～中期、後期末から古墳時代前半の各時期の遺構、遺物が検出されており、高知市域における初めての大規模発掘であることから多くの新たな資料を得ることができた。個々の遺構、遺物については調査成果で述べられているので、ここでは各時代ごとに周辺部の状況も交えながらまとめてみたい。

1. 縄文時代後期

縄文時代後期についてはⅢJ区を中心にⅢ区の南端部にも包含層が確認されている。ⅢJ区の包含層は地表下約2.5mのシルト層であり、上層及び下層についても粘土・シルト層を中心とする堆積であることから安定した河川堆積が見受けられる。他の調査区の層序から見て、遺物の分布地点は微地形的には高位にあたり、Ⅱ・Ⅲ区に見られる流路等の影響を受けていない。遺物の出土状況は約4×12mの東西帯状の範囲に分布するが明瞭な集中地点は見られず、レベル的にもほぼ水平に約20cmの幅を持って出土している。出土遺物は土器がほとんどであり、石器としてはサヌカイトの大形の剥片が見られるのみである。土器は有文深鉢と外面条痕の深鉢が多く、浅鉢は少量である。有文深鉢は波状口縁に2本沈線による磨消縄文及び貝殻腹縁文等が主体であり、形式的には中津式並行と考えられ、後期初頭から前半の時期に位置付けられる。明確な遺構は検出されていないが焼土、炭化物の集中が見られ、後期の生活面の存在は確認される。また、Ⅲ区北端にもⅢJ区から続く包含層が一部見られ、ⅢJ区の遺物分布範囲に含まれる。さらに少量ではあるがⅢ区の南端部においても後期の土器が出土しており、後期段階ではⅢJ区を中心にその南部へかけて包含層が広がっていたと想定され、弥生時代以降の流路によりⅢ区中央部の縄文後期包含層は削られたものと考えられる。

高知市内では縄文時代の遺跡の調査は行われたことはなく、散発的な遺物の出土が知られていたのみである。出土した土器、石斧等のほとんどは山麓部で採取されたものであり、低地において出土したものとしては、高知市長浜のチドノ遺跡で地表下約4mから前期の土器片出土例が知られるのみであり、今回の柳田遺跡における縄文後期の包含層の発見は今後の高知市域における遺跡立地を考える上で重要な位置を占めるものと思われる。また、南国市においても高知空港拡張に伴う田村遺跡群の調査において縄文後期後半の包含層が発見されており、打製石斧、石錘等の出土から低地における遺跡の立地と生産域の拡大が考えられており、柳田遺跡における縄文後期の存在も県下全域における縄文後期の遺跡の増加と低地への進出に連動した動きの一環として捉えることができものと考えられる。

2. 縄文時代晩期

縄文晩期の包含層がⅡJ区とⅢJ区において確認されており、Ⅵ区においても試掘調査時に晩期の土器片数点が出土したためⅥA区として拡張したが、それ以上の遺物の出土は確認されな

かった。

ⅡJ区における縄文晩期包含層は弥生遺構面下層、標高3.7～4.5mの間において検出されている。遺物はⅡ区の南半部と中央部付近を中心とした12×10mの範囲に分布するが、特に遺物集中箇所は見られない。出土した遺物は土器のみであり、石器は確認されなかった。土器は深鉢のみであり浅鉢はなく、深鉢には1条刻目突帯、口縁刻目、無刻目の3種が存在し、体部の内外面は条痕調整が顕著である。土器の出土レベルから見ると、標高約4.3mを中心とする上層と標高約3.7mを中心とする下層に分かれ、上層には1条刻目突帯を中心に口縁刻目が散在し、下層では無刻目が中心を占めている。上層では深鉢数個体が潰れた状況で出土している。

ⅢJ区では標高4.3～4.5m前後のレベルを中心に晩期の土器と石器が出土している。分布状況では一部に土器の集中も見られるが全体的には散在しており、分布密度は低い。土器では浅鉢と深鉢が出土しており、いずれも断片的資料ではあるが浅鉢では口縁内面に沈線、深鉢は口縁部に刻目を施し内外面共に条痕調整が見られる。石器は磨製石斧、叩石、勾玉が出土しているが、やはり出土点数は少量である。

縄文晩期の資料はⅡJ区とⅢJ区の2カ所から出土しているが、全体的には出土点数も少なく遺構も確認されていない。しかし、後期と同様に高知市域における晩期の資料は初検出であり、高知平野における弥生土器出現前夜の状況を示すものと考えられる。ⅡJ区における出土状況からは無刻目の深鉢から刻目口縁と1条刻目突帯への変化が不確定ではあるが推定され、ⅢJ区では1条刻目突帯は見られないが、刻目口縁の深鉢が主体であり、ほぼ同時期の所産と考えられる。

現在のところ縄文晩期後半から弥生初頭の遺跡としては県西部の入田遺跡における入田B式土器と仁淀川支流の波介川流域に位置する土佐市高岡の倉岡遺跡が知られているが、いずれもしっかりとした2条刻目突帯を持つものであり、柳田遺跡の晩期土器とは様相を異にするものである。中央部においては晩期の資料はほとんどなく、僅かに見当及び西見当遺跡において数点の晩期土器が出土しているのみであり、晩期の状況は不明である。しかしながら田村遺跡群では弥生前期初頭の集落が検出されて、突帯文系の甕が多量に出土している。これらの甕には1条及び2条の刻目突帯及び口縁部刻目の各種のタイプが見られ、胎土は弥生土器ではあるが突帯の太さや刻目の大きさからすれば柳田遺跡の晩期土器に共有する要素を見ることができる。

3. 弥生時代

弥生時代では前期末から中期前半にかけての資料が検出されている。遺構はⅡ区の南半部及びⅢ区南端部を中心とする土坑群であり、竪穴住居跡は確認されていない。特にⅡ区の南壁部分において検出された土坑群は直径1～2mの不正円形であり、埋土は焼土、灰、炭化物層が無遺物層を間層として互層堆積するものである。焼土・灰・炭化物層中には白色化した焼骨の細片が含まれており、タイ、スズキ、ハモ、アユ、コイ、フナ類等の魚骨、カモ類と見られる鳥骨、シカ、イノシシの獣骨が確認されている。これらの土坑群の存在からすれば、漁労、狩猟活動の生活跡を示しており、集落跡の一部であると言えよう。調査前の現地の状況から見れば、

周囲一帯も含め湿田であり、粘土・シルトの堆積からすれば、河川堆積による低湿地が広がっていたと考えられ、住居跡等が立地する居住環境としては適地とは思えないが、生活環境としては土坑群の存在が示すように当時の生活圏に含まれる状況であったと考えられる。

弥生土器は土坑及び包含層出土であり、壺、甕を中心に鉢、蓋が存在するが高坏はほとんど見られず、土製品としては紡錘車が出土している。壺は卵形の胴部で中央下に最大径を持ち、口縁部は大きく外反し、頸部から胴部にかけて多条沈線と貼付突帯で装飾されるものが中心である。他に無頸壺や貼付口縁も見られ、流水文や簾状文の破片も少量であるが存在する。また赤色顔料による彩文土器も出土している。甕では緩やかに外反する口縁とやや丸みを帯びる胴部を持ち、抓みによる微隆起帯で装飾されるものが特徴的である。時期的には前期末から中期前半にまとまっているが、若干の時期差を持つものと思われる。大きく見れば香長平野の田村遺跡群等も含んだ高知県中央部の土器様相を示すが、細部では高知市西部の地域性も存在するものと考えられ、今後、仁淀川水系の遺跡群との比較が必要であろう。石器では石斧、石包丁、石鏃等が出土するが点数は少なく、石器生産を伴う状況ではなく、消費地としての出土状態を示すものと思われる。また、土坑から魚骨が出土しているが、土錘、石錘等の漁労に関する遺物は出土していない。

弥生時代の集落としては、堅穴住居跡は検出されていないが現在のところ高知市では柳田遺跡が最古の遺跡として位置付けられる。高知市域における前期前半の状況は不明であるが、前期初頭からの拠点集落として存在する南国市の田村遺跡群から派生した集落が存在する可能性は高く、次の段階においては前期末から中期前半を中心とする柳田遺跡が低湿地部分にも進出しており、生産域の拡大が行われるものと考えられる。次いで中期後半には、やはり朝倉城山遺跡等の所謂高地性集落へと展開しており、周辺の山麓部では石斧、土器片の出土などが知られている。その後の後期における状況は再び不明な点が多いが、南国市周辺の状況からすれば小単位の集落が多角的に展開すると推定され、古墳時代の集落へと発展するものであろう。

4. 古墳時代

古墳時代では各調査区で検出されている流路が主たる遺構である。流路自体は弥生時代から機能していたものであり、最終段階では古墳時代に埋没している。流路の埋土の上層部には植物堆積層が見られ、同層から下層の砂利層上面にかけては木器が出土している。木器はⅠ区及びⅡ区の流路湾曲部に流れ寄せられ堆積した状況であり、木枝等の植物遺物と混在している。また、Ⅱ区及びⅣ区では馬骨も木器と同様の状況で出土しており、Ⅱ区では頭骨がまとまって出土している。木器には鋏、鋤、縦杵、横槌、木臼、斧柄等の農具と工具類、梯子、柱材、板材、扉材と思われる建築材、舟形及び鳥形とではないかと見られる木製品の一部、さらに琴柱も1点出土しており注目される。

出土土器では土師器が大半を占めており、須恵器は数点が出土したのみである。土師器の出土状況は流路中層から下層の砂利層中に散在しており、基本的には流路による二次的堆積と考えるが、中にはほぼ完形品の壺や甕、高坏、小型器台、小型丸底壺、手づくね土器等がま

り出土している地点もあることから、流路における祭祀が行われた可能性も考えられる。土師器には壺、甕、高坏、小型鉢、土製支脚等が見られ、高坏、小型鉢が多く出土している。時期的には3世紀末から4世紀前半が中心と考えられ、搬入品として布留式の甕が数点見られ、その一部は土師器集中地点に含まれている。また、少量ではあるが須恵器も流路内から出土しており、5世紀にかけての流路堆積があったものと考えられ、I区では流路上面に須恵器の壺を埋甕状に埋設しており、やはり何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。

流路の堆積状況と土師器、須恵器及び木器の出土状況から見れば、砂利層中の土師器堆積後、木器包含層である植物層が堆積しており、I区の須恵器出土状況からすれば、木器は5世紀以降、6世紀代を中心に堆積したものであり、琴柱の存在も当該時期と考えられる。また、木器等が上流域からの流路への流入物としての堆積であることからすれば、西方の高知大学及び朝倉山周辺域までの間に古墳時代集落の存在が確実視される。

5. 流路及び微地形について

今回の調査では弥生時代の土坑群と古墳時代の流路が遺構の中心であるが、流路及び調査区の層序等から遺跡の地形と遺構、遺物の検出状況を見てみたい。時期的には縄文時代後期及び晩期の段階では、流路中からの遺物出土が無いことから流路の存在は否定的である。後期ではⅢJ区及びⅢ区南端部の堆積状況はシルト・粘土の水平堆積であり、安定した緩やかな流路堆積であったと考えられ、調査区北半部（Fig.142図D部分・以下同図）では後世に至るまで同様の堆積状況が推定される。晩期段階ではⅢJ区は後期同様に安定した堆積であるが、Ⅱ区では下層の砂利層中から晩期時が出土しており、すでに流路堆積が行われていたと考えられる（A部分を含むC部分）。弥生時代では再び安定堆積化したA部分において土坑群が形成され、同時に流路1の基底部分から弥生土器の出土を見ることから流路1も並行して流れていたことが判明する。また、A部分から東側のⅣ区（B部分）へ向けて傾斜しており、Ⅲ区では北方向への斜め堆積が見られることから、A部分を中心とする微高地は流路により削られ、流路堆積中に弥生土器が含まれるものと考えられる。古墳時代の最終段階における流路は各調査区で確認されている流路1であり、上層部の木器を含む植物堆積層により流路堆積は終了している。それ以前の流路としては西半部で検出された流路2～4が認められ、全て流路1により切られている。流路2～4の砂利層堆積中からは土師器が出土しており、弥生時代における状況は不明であるが、全面的な埋積は古墳時代と判断される。

以上のように、全体的には鏡川及び神田川の河川堆積中に立地する遺跡の状況が伺えるが、各時代によって小河川の流路による開析と堆積が順次行われ、微地形における各時代の遺跡の立地条件と自然環境及び生活環境の一端を見ることが出来る。従前、平地部における遺跡の分布状況はほとんど不明であったが、今回の柳田遺跡の調査において縄文時代から古墳時代にかけての集落の存在が確実となったことから、今後、周辺部における調査の進展が大いに期待され、同時に朝倉地域の歴史の変遷が明らかになるものと考えられる。

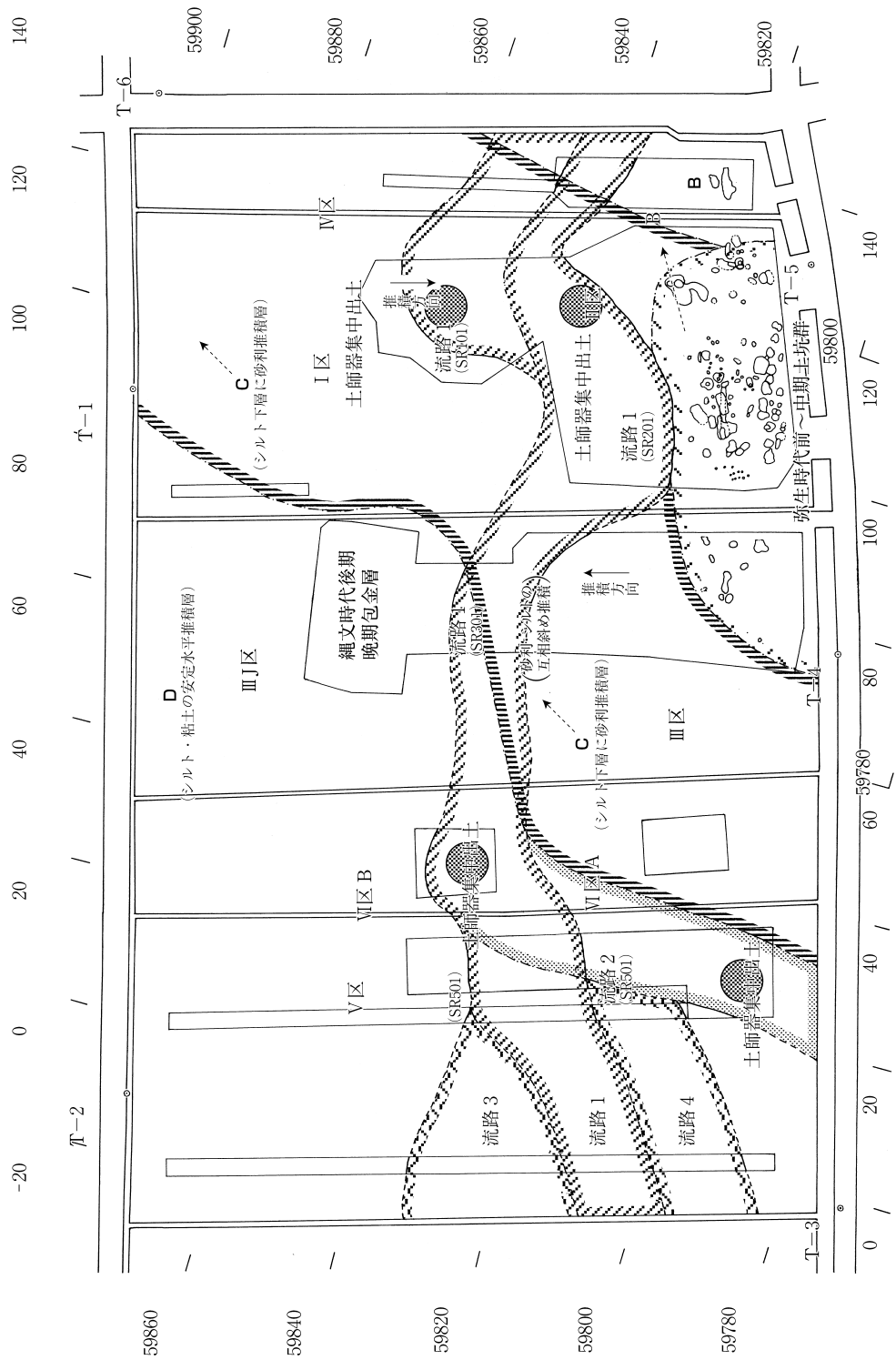


Fig.142 柳田遺跡遺構・流路全体図 (S = 1/1000)

付 編

出土馬骨について

西中川 駿・日高祥信・菊池直樹

1. はじめに

わが国の古代馬の形質を残して、今なお系統保存されている在来馬に、今治市の野間馬などを含む8集団が、全国各地で飼育されている。これら在来馬の祖先がいつ頃、どこから渡来してきたかについては幾多の説があり、未だに明らかにされていない。

筆者は、全国の遺跡出土の馬歯、馬骨の調査を行っているが、これまで475ヶ所からウマの出土が報告され、時期的には中世が127ヶ所と最も多く、次いで古墳110、平安104ヶ所であり、縄文57、弥生34ヶ所もある。しかし、最近、縄文、弥生遺跡出土の馬歯、馬骨は、ほとんどが複合遺跡からのものであり、近藤らの研究により時代が新しくなりつつある。

四国からの馬歯、馬骨の出土は、愛媛県久方町明神遺跡（縄文後期）や香川県川西北・7条I遺跡（弥生～古墳）など11ヶ所と極めて少ない。明神遺跡の出土遺体については、清水が詳細に報告し、現生の野間馬より少し大きい馬（121cm）であると述べている。

高知県内からの馬に関わる遺物は、口ミノヲ谷古墳から馬具が出土しているが、馬の遺体は発掘されていない。今回調査を依頼された馬の遺体は、高知県から初めて検出されたもので、昔飼育されていた土佐駒などの系統を知る上に貴重な資料である。馬の出土した柳田遺跡は、高知市朝倉字柳田162番地にあり、平成4年8月～12月まで、店舗建設工事のため、高知県埋文センターが発掘した古墳前期のものである。ここでは出土骨を肉眼的および計測学的に調査し、他の遺跡のものや在来馬のものと比較を行ったので、その概要を報告する。

2. 出土状況と出土量

出土状況については本報告で詳述されているので省略するが、調査区はⅠ～Ⅵ区に分けられており、馬の遺体はⅡ区とⅥ区の小河川の流路埋積堆積物の中に散乱した状態で発見されている。同定した骨片はⅡ区3596.7g、Ⅵ区378.6gで合計19個であり、Ⅱ、Ⅵ区の総重量は3975.3gである。

3. 出土骨の概要

まず、出土区別の骨を肉眼的に精査し、計測可能な馬歯についてはDrieschの方法に従ってノギスを用いて測定し、その結果は他の遺跡のものおよび日本在来馬のトカラ、御崎馬の計測値と共に表1、2に示した。以下各骨の形状を各区別に述べる。

1) II区出土の馬骨 (図版1-1~8参照)

頭蓋骨：頭骨は右側を下にして検出され、左側は土圧により壊れ、また、全体的に変形が起っており、右側はわずかに原形をとどめ、全臼歯を持つ上顎骨、両側の切歯と犬歯をもつ切歯骨や前頭骨などをみることができる。しかし、左側は切歯骨のみで、また、右第三後臼歯が左側の鼻腔に移動し埋没している。(図版1-1参照)。保存頭蓋長は50.36cmで、臼歯列長は17.47cmであり、これは御崎馬と同じ大きさである。しかし、頭骨は変形しており、正確な計測値ではない。切歯は3本共に永久歯に代っており、また、第三後臼歯も萌出しつつあることから、4才前後とみられる。歯の計測値は表2に示したが、臼歯の中心歯冠高から年齢を推定すると 48.9 ± 10.8 カ月齢となる。また、犬歯のあることから雄と同定される。

下顎骨：頭骨とは少し離れた地点から発掘されているが、歯の形状などから同一個体のものであると思われる。右側はほぼ完全な状態であるが、左側は下顎角が欠損している。右側の下顎骨の形状は、御崎馬によく似ており(図版2-1、2、3)、下顎全長(顆から)も40.89cmで、御崎馬とほとんど同じ大きさである。他の部位の計測値は表1に、歯の計測値の比較は表2に示した。

前肢骨：肩甲骨、上腕骨、前腕骨、脛骨2個が検出されている。肩甲骨は右側のもので、肩甲骨背縁、頸、遠位端の一部を欠如しており、計測は不能であるが、御崎馬より小さい。

上腕骨は左側のみが検出され、近位の結節や遠位の滑車などは欠如し、土圧によりかなり変形している。また、骨体はヒビ割れが著しく、リンが積出している。変形が著しいために計測不能であるが、保存長は25.98cmであり、トカラ馬程度の大きさである(図版2-4~6)。

前腕骨は橈骨と尺骨からなるが、尺骨は肘頭が欠如しており、橈骨は遠位端が破損している。橈骨の近位端の幅×径は 7.55×3.78 cmで、中央幅×径は、 3.98×2.33 cmであり、これらはトカラ馬より微かに大きい(図版2-7~8)。

脛骨は左右各1個の出土で、同一個体のものであると思われる。右脛骨の近位端は土圧で圧平され、骨体のヒビ割れも著しく、遠位端の外側顆など一部欠損している。保存長は30.12cmで、骨体中央幅×径は 4.21×3.42 cmであり、参考値ではあるが幾分大きい。左脛骨は、近位端が全くなく、遠位端も一部欠損している。骨体中央部の幅×径は、 3.94×3.09 cmであり、トカラ馬より大きい(図版2-10~13)。

以上、II区の出土骨について述べたが、四肢骨はトカラ馬より少し大きい程度のものであるが、頭蓋骨は御崎馬である。もしこれらの骨が同一個体のものであれば、非常に頭のみが大きな馬であったことが想像される。

2) VI区出土の馬骨 (図版2-6~18参照)

VI区の出土骨は小骨片のみであり、椎骨や四肢骨がみられ、解体痕のある骨もある。

胴骨：第七頸椎、前位腰椎および肋骨が検出されている。

第七頸椎は左側の横突起の部分で、横突起基部で椎体から鋭利なもので切断されている。また、前位腰椎2個が出土しているが、いずれも棘突起、横突起は欠如し、椎体のみのものである。

る。ほぼ完全な椎体の長さは、4.86cmである。右肋骨は後位のもので、近位端は欠如し、肋骨体のみである。

前肢骨：肩甲骨、橈骨の各1個で、肩甲骨は鋭利なもので切断された肩骨上部後縁の小骨片である。橈骨は遠位端の関節面の部位のもので骨質や保存状態はよく似ている。遠位端の幅×径は6.29×3.51cmである。

後肢骨：脛骨2個と趾骨のみで、前肢骨とは発掘地点が異なるので別個体と思われる。左脛骨（B-1）は近位1/3が欠損し、また遠位の一部も欠如した標本で、骨体に縦の亀裂が入っている。骨体中央の幅は3.11cmである。もう一つの脛骨（B-5）も左側のもので、Ⅵ区に少なくとも2個体あることがわかる。B-5のものは近位端顆の部分のみで、解体痕がみられる。

趾骨は1点の出土で、遠位端を全く欠如する左側のもので、骨体中央の径は3.40cmである。また、2個の近位種子骨もある（図版1-12）。

以上、Ⅱ、Ⅵ区から出土した馬骨についてその保存形態などについて述べたが、Ⅵ区は2つのグループに分けられ、左側の脛骨が2個あることなどから、Ⅱ区のものと同合わせ、少なくとも3個体の馬の遺体であることが推定される。また、各骨のほぼ完全な計測値から骨長を推定し、林田らの方法で体高を推定すると、Ⅱ区のもの119.3±5.2cm、Ⅵ区のものB-1～B-3は125.3±1.8cmでⅥ区B-4～B-9は112cm程度の体高を有していたものと推定される。Ⅱ区の馬は雄であり、Ⅵ区のもの性別不明である。

4. 考察

四国地方には古くから越智駒、土佐駒など小型馬が飼育されており、その末裔が野間馬であろうといわれている。清水は久万町明神遺跡出土の馬歯、馬骨を野間馬のそれらと比較し、よく似た形質をもっていることを報告している。

今回調査した柳田遺跡出土の馬骨は、3体分のもので推定された。Ⅱ区から出土した馬は雄であり、四肢骨からの推定で体高は120cm前後であった。しかし、頭蓋は異常に大きく、御崎馬と同じ大きさであり、また、若い個体（4才前後）のために各臼歯や臼歯列長も大きく、体に比べて頭が非常に大きな馬であったことが想像され、このことは野間馬を含む在来馬に受け継がれている特徴である。

わが国の在来馬の祖先がいつ頃、どこから渡来して来たかは、未だに明らかにされていない。林田はトカラ馬のような小型馬は、縄文末期に華南から黒潮にのり南から北上し、御崎馬のような中型馬は、弥生期に朝鮮半島を経由して、わが国へ入ったと論じている。しかし、野沢は血液型や血清蛋白などの検索から、わが国の馬はすべて蒙古馬が朝鮮半島を経由して渡来したとし、与那国馬やトカラ馬は日本本土を南下し、島嶼に隔離されたものであると結論している。もし林田説が正しければ南西諸島の古墳時代以前に馬骨の出土があってもよいはずであるが、筆者らのこれまでの調査では、その時代のもは検出されていない。現在、四川、雲南に野間馬やトカラ馬のような小型馬が飼育されており、この小型馬と蒙古系の中型馬が混在して、渡

来人によってわが国へ持ち込まれたものと考えられる。一方、渡来の時期については、最近、近藤らのフッ素による年代測定から、縄文遺跡である千葉県山崎貝塚や鹿児島県出水貝塚などから出土した馬歯、馬骨の年代が新しくなり、縄文時代には馬の飼育はなかったことが明らかにされつつある。

本遺跡の馬の遺体は、古墳前期の出土であり、土佐地方で飼育されていたことは事実であるが、何の目的で飼われていたかは出土骨からは明らかではない。おそらく交通の手段として、また、農耕のために飼育されていたのであろう。Ⅱ区から出土した1体分の遺物は死後河川近くに埋葬されたもので、河川の氾濫により流され、散在したものと考えられる。Ⅵ区の一部の骨に解体痕がみられ、当時の人々が食料としていたことも考えられるが、これらは時期的に新しい遺物ではなからうか。

柳田遺跡を遺した人々が、馬をどこから持ち込んで来たかは明らかではないが、おそらく弥生時代以降に朝鮮半島を経由して、九州に渡来したものが、瀬戸内海を経て四国にもたらされたものであろう。本遺跡からの馬骨の出土は、土佐駒、野間馬などの起源、系統を知る上に貴重な資料となるであろう。

5. まとめ

柳田遺跡からの出土遺物である古墳前期の馬骨について調査を行った。

1. 高知県内からの馬骨の出土は初めてであり、総骨片数19個で、総重量は3975.3gである。
2. Ⅱ区より出土した骨は頭蓋骨、下顎骨、右肩甲骨、左上腕骨、左前腕骨、および左右脛骨で同一個体のものであると思われるが、頭蓋は四肢骨に比べ非常に大きく、古代馬の特徴を呈し、雄馬のものである。
3. Ⅵ区より出土した骨は第七頸椎、腰椎(2)、肋骨、左肩甲骨、左橈骨、左脛骨(2)、左第一趾骨で一部の骨に解体痕がある。
4. 骨の形状は、トカラ馬より御崎馬に似ており、四肢骨の計測値から体高を推定すると、120cm前後であり、これは現生の野間馬などとよく似た大きさである。

参考文献

1. Driesch, A. V. : A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological sites, p1-101/ Harvard Univ., Cambridge (1976)
2. 林田重幸：日本馬の系統に関する研究, P1~180, 日本中央競馬会, 東京 (1978)
3. 林田重幸：愛媛の在来馬, 乃万馬, 地方競馬3号, P24~29 (1975)
4. 林田重幸・山内忠平：馬における骨長より体高の推定法, 鹿大農学術報告 6, P146~156 (1957)
5. 高知県教育委員会：口ミノヲ谷古墳, P1~53 (1984)
6. 直良信夫：日本馬の考古学, P1~201, 校倉書房 (東京)

7. 西中川駿他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究. 平成2年度文部省科学研究費, 一般 (B) 研究報告書, P1~197 (1991)
8. 日本馬事協会：野間馬に関する学術調査報告書, P1~28 (1985)
9. 野沢謙：東亜と日本在来馬の起源と系統, 日本ウマ科学会雑誌3 (1) , 2-18 (1992)
10. 清水栄盛：久万町明神遺跡出土の馬歯・骨と野間馬との比較研究. 松山東雲短大研究集6 (2) , P185~197 (1974)
11. 芝田清吾：日本古代家畜史の研究, P100~189, 学術出版会, 東京 (1969)

表 1. 柳田遺跡出馬骨の計測値

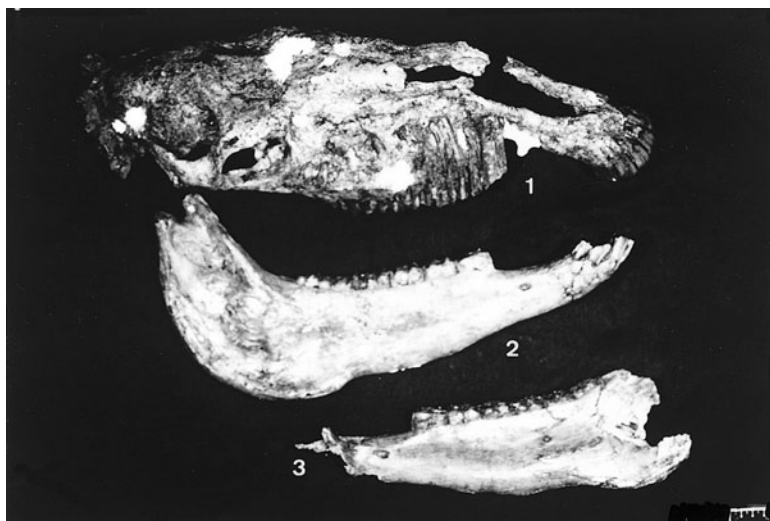
	柳田遺跡		明神遺跡	野間馬		トカラ馬		御崎馬	
	Ⅱ区	Ⅵ区		Ⅵ区	Ⅰ	Ⅱ	雄 (n=6)	雌 (n=8)	雄 (n=12)
下顎骨									
下顎全長 (Goc-ld)	39.28	—	—	—	—	36.36 ± 0.71	35.94 ± 1.08	39.08 ± 0.63	38.90 ± 1.22
(Cn -ld)	40.98	—	—	38.13	—	37.91 ± 0.73	37.57 ± 1.19	37.91 ± 1.33	40.36 ± 1.43
上腕骨									
最大長	25.8	—	—	—	23.8.	26.07 ± 0.93	25.87 ± 1.14	28.42 ± 1.01	28.61 ± 0.85
橈骨									
近位端幅	7.55	—	—	6.36	6.49	7.11 ± 0.17	6.92 ± 0.36	7.98 ± 0.31	7.89 ± 0.26
近位端径	3.82	—	—	—	—	3.98 ± 0.22	3.96 ± 0.22	4.68 ± 0.28	4.62 ± 0.24
遠位端径	—	—	—	—	—	3.88 ± 0.16	3.73 ± 0.13	4.54 ± 0.16	4.47 ± 0.22
脛骨									
骨体中央幅	—	3.70	3.00	2.96	3.08	3.36 ± 0.16	3.46 ± 0.20	4.00 ± 0.16	3.92 ± 0.19
骨体中央径	—	3.20	2.35	2.27	—	2.81 ± 0.21	2.87 ± 0.14	3.29 ± 0.22	3.27 ± 0.13
遠位端径	3.80	—	—	—	—	3.71 ± 0.18	3.68 ± 0.16	4.45 ± 0.24	4.37 ± 0.18
趾骨・基節骨									
骨体中央径	—	2.27	—	—	—	2.15 ± 0.07	2.16 ± 0.10	2.33 ± 0.09	2.31 ± 0.16

(cm)

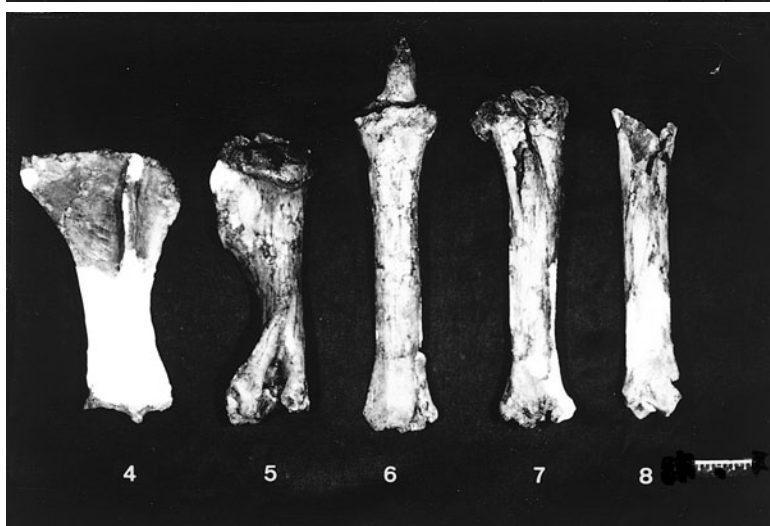
表2. 柳田遺跡出土馬歯(雄)の計測値

(mm)

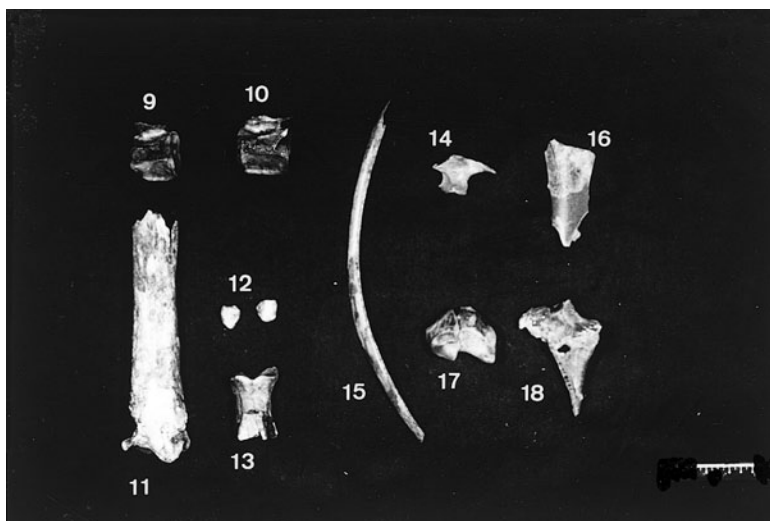
	柳田遺跡		明神遺跡(清水)		野間馬(清水)		トカラ馬(n=6)		御崎馬(n=9)	
	エナメルヒダ 歯冠長	エナメルヒダ 歯冠幅	エナメルヒダ 歯冠長	エナメルヒダ 歯冠幅	エナメルヒダ 歯冠長	エナメルヒダ 歯冠幅	エナメルヒダ 歯冠長	エナメルヒダ 歯冠幅	エナメルヒダ 歯冠長	エナメルヒダ 歯冠幅
上顎第二前臼歯	左	—	37.1	21.0	35.5	21.7	33.7 ± 1.3	22.4 ± 1.5	34.9 ± 1.1	22.3 ± 1.1
	右	38.8	—	—	—	34.9	22.1	—	—	—
上顎第三前臼歯	左	—	25.0	21.6	25.8	21.6	26.7 ± 1.6	24.8 ± 1.9	27.6 ± 1.6	24.9 ± 0.8
	右	30.2	24.4	25.1	21.0	26.6	22.1	—	—	—
上顎第四前臼歯	左	—	22.8	21.9	23.9	21.4	23.8 ± 0.8	24.4 ± 2.0	25.3 ± 1.3	23.8 ± 1.7
	右	30.0	26.4	22.8	21.6	23.6	20.1	—	—	—
上顎第一後臼歯	左	—	21.8	—	21.4	20.0	23.5 ± 2.4	24.1 ± 1.3	24.2 ± 1.8	24.2 ± 0.4
	右	25.8	29.0	22.9	20.8	21.4	19.8	—	—	—
上顎第二後臼歯	左	—	22.2	20.0	23.3	20.2	22.8 ± 1.3	22.6 ± 1.7	25.0 ± 2.3	23.5 ± 0.8
	右	27.5	23.8	22.8	20.0	22.1	20.0	—	—	—
上顎第三後臼歯	左	26.1	23.6	28.2	18.6	27.9	18.6	25.3 ± 1.3	24.2 ± 2.7	19.9 ± 1.6
	右	24.4	23.9	29.6	18.4	28.5	19.2	—	—	—
上顎第二前臼歯	左	32.1	18.5	30.3	15.6	30.2	16.0	27.0 ± 1.7	29.9 ± 1.8	13.7 ± 0.5
	右	31.0	18.1	33.0	14.9	31.8	14.9	—	—	—
上顎第三前臼歯	左	30.4	20.2	26.4	16.4	27.2	17.0	25.9 ± 1.0	26.6 ± 1.9	15.0 ± 0.6
	右	28.6	20.6	26.4	17.1	26.5	16.8	—	—	—
上顎第四前臼歯	左	28.4	20.0	26.3	16.7	26.0	15.6	23.3 ± 1.5	25.6 ± 1.9	14.3 ± 1.1
	右	27.1	19.8	24.0	16.6	25.0	15.6	—	—	—
上顎第一後臼歯	左	26.4	19.7	23.1	15.4	22.3	14.6	23.9 ± 2.9	24.0 ± 2.1	14.2 ± 2.3
	右	26.0	19.4	23.0	16.0	22.9	14.6	—	—	—
上顎第二後臼歯	左	26.6	18.4	25.2	14.3	22.3	14.5	24.4 ± 2.1	25.4 ± 2.1	14.3 ± 3.7
	右	25.6	18.2	26.0	14.9	21.8	14.9	—	—	—
上顎第三後臼歯	左	31.6	15.3	32.5	14.0	32.1	13.5	29.1 ± 3.7	27.5 ± 3.1	11.8 ± 1.5
	右	30.5	17.1	31.2	14.0	33.8	13.3	—	—	—



1 頭骨
2 右下顎骨
3 左下顎骨



4 右肩甲骨
5 左上腕骨
6 左前腕骨
7 右脛骨
8 左脛骨



9 腰椎
10 腰椎
11 左脛骨
12 近位種子骨
13 左後肢末節骨
14 第 7 頸椎
15 右肋骨
16 左肩甲骨
17 左橈骨
18 左脛骨



1~3右下顎骨の比較

- 1 柳田遺跡出土の下顎骨
- 2 トカラ馬の下顎骨
- 3 御崎馬の下顎骨



4~6左上腕骨の比較

- 4 御崎馬の上顎骨
- 5 トカラ馬の上顎骨
- 6 柳田遺跡出土の上腕骨

7~9左前腕骨の比較

- 7 柳田遺跡出土の前腕骨
- 8 トカラ馬の前腕骨
- 9 御崎馬の前腕骨



10~13左脛骨の比較

- 10 柳田遺跡出土の脛骨(右)
- 11 柳田遺跡出土の脛骨
- 12 トカラ馬の脛骨
- 13 御崎馬の脛骨

写真図版



調査 I 区 全景 (北より)



調査 I 区 SR101 H-9グリッド土器出土状況 (南より)

PL 2



調査Ⅱ区 調査状況



調査Ⅱ区 西壁



調査Ⅲ区 東壁北部



調査Ⅲ区 東壁南部



調査Ⅵ区 SR601完掘状況（西より）



調査Ⅵ区 SR601木器出土状況（西より）



調査 I 区 SR101遺物出土状況



調査ⅡJ区 北端セクション（東西方向）



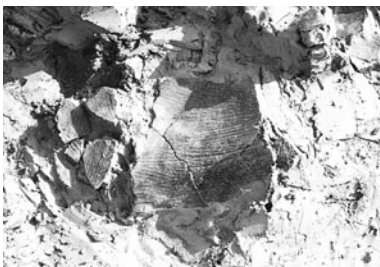
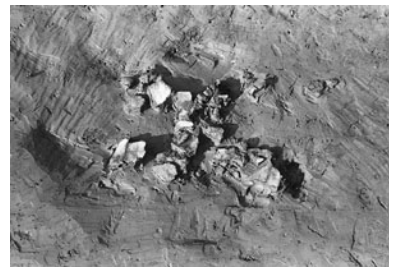
調査ⅡJ区 J-I層 遺物出土状況



調査ⅡJ区 SR208流木出土状況



調査ⅡJ区 SR208完掘状況



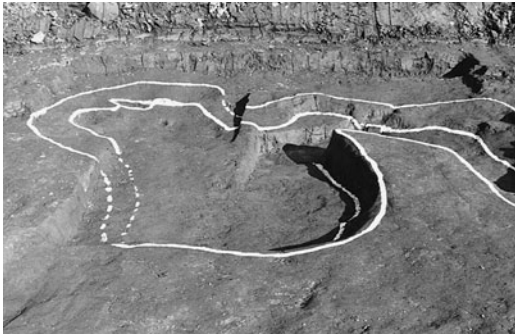
調査ⅡJ区 遺物出土状況他



SR201 P層出土状況



SK1 出土状況



SK22 完掘状況



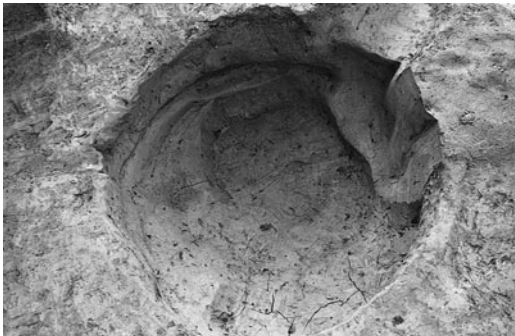
SK31 出土状況



南端部遺構検出状況



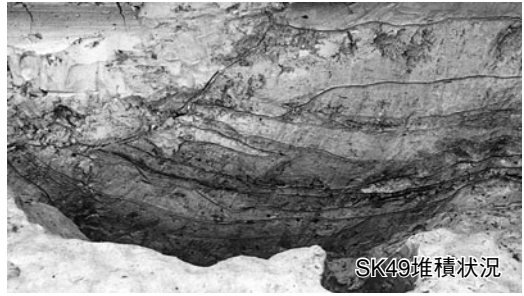
南端部遺構群

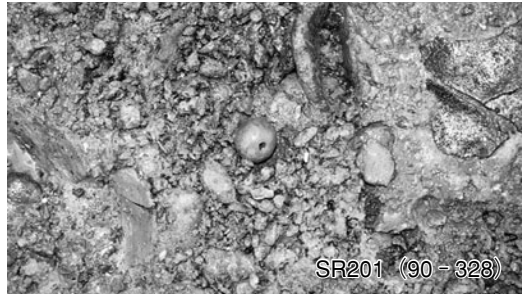


SK53 完掘状況



SK73(左)・SK72(右) 完掘状況

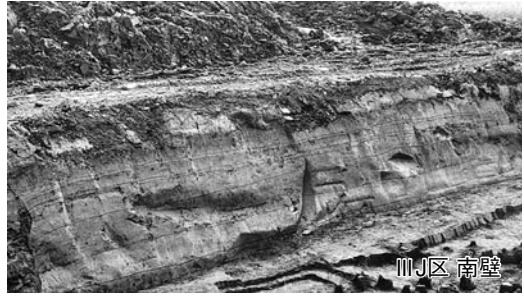




調査Ⅱ区 遺物出土状況他 3



III区 東壁



III区 南壁



99-1 体部



99-1 口縁



100-2



101-3



105-53



105-56

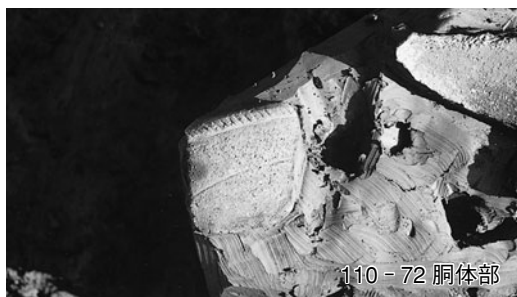
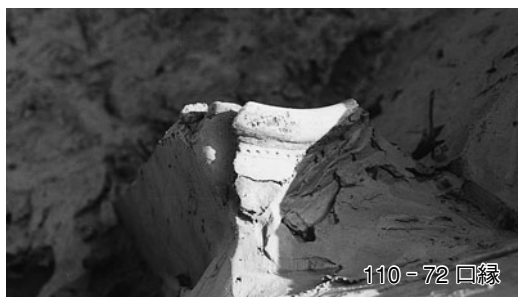


108-67



108-68

調査III区 遺物出土状況他



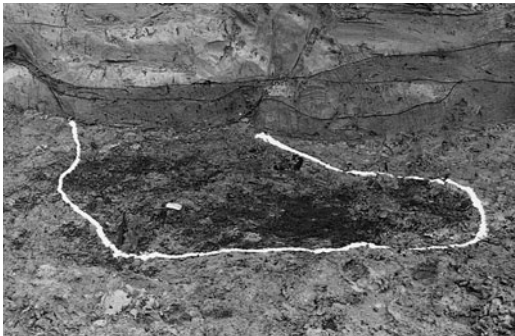
調査Ⅲ区 遺物出土状況他



IV区 SK1・SD1検出状況



IV区 東壁セクション



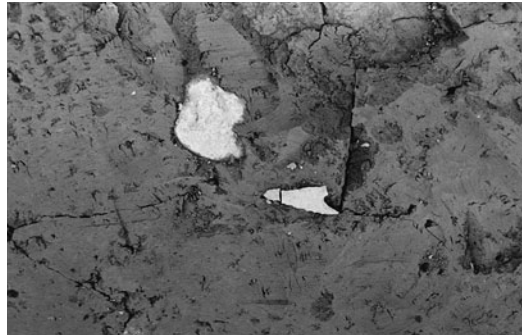
IV区 SD2検出状況



IV区 SK1・SD1遺物出土状況（上層）



129-24出土状況



石鏝出土状況



扁平片刃石斧出土状況



石包丁出土状況



V区 東壁セクション



a-9グリッド木器出土状況



a-10グリッド出土斧柄・馬大腿骨



b-2・b-3 グリッド出土状況



b-2 グリッド出土状況



135-19・135-58 出土状況 (c-3グリッド)



a-9グリッド出土梯子



a-9グリッド出土甕



VIa区 西壁セクション



VIa区 西壁セクション (噴砂)



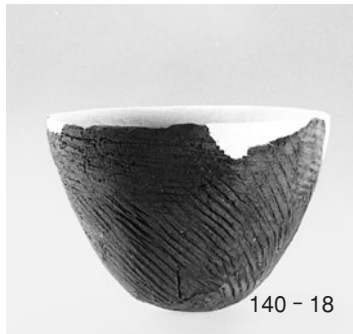
VIb区 東壁セクション (杭列)



VIb区 SR601出土横槌



140 - 1



140 - 18



140 - 22



140 - 19

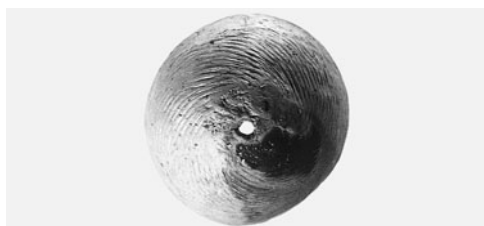


140 - 24

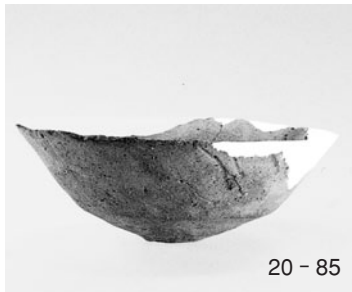
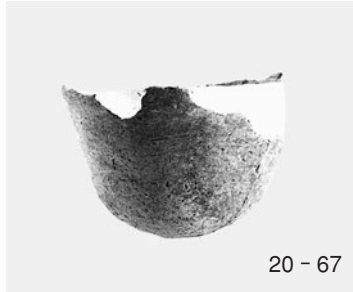
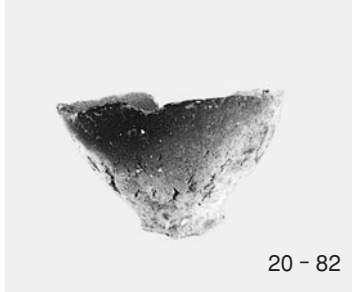
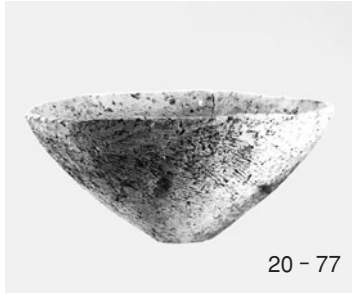


140 - 26

VIb区 SR601出土遺物 (壺・甑・鉢・小型丸底壺・高杯)



調査 I 区 SR101出土遺物 1 (壺・甕・甌・須恵器壺)



調査 I 区 SR101出土遺物 2 (鉢・小型丸底壺・高杯)



23 - 99



23 - 100



23 - 97



22 - 95



25 - 108



25 - 110



25 - 111



25 - 112



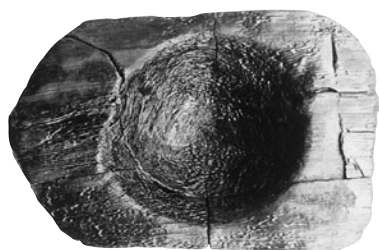
133 - 2



22 - 94



23 - 98



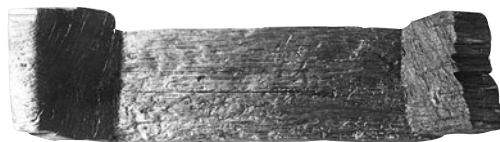
22 - 96



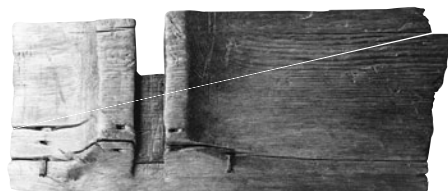
24 - 103



24 - 102

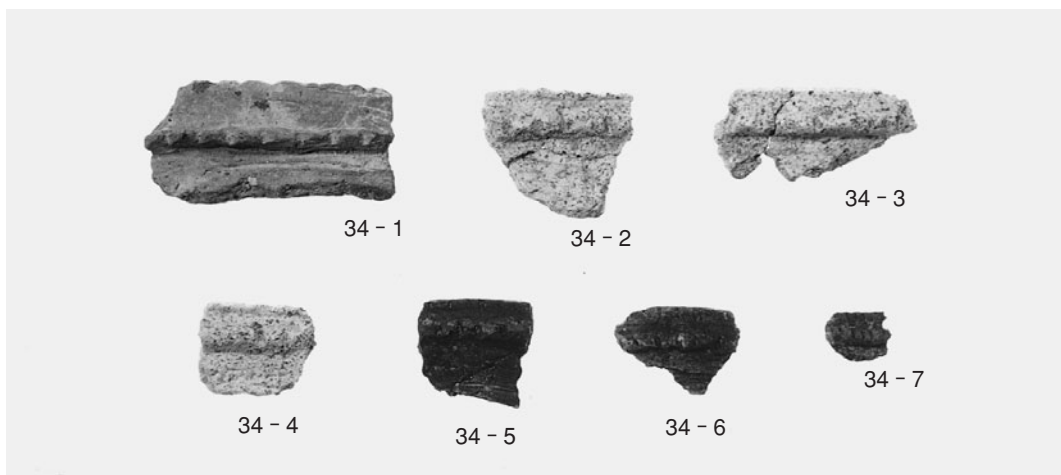


25 - 109

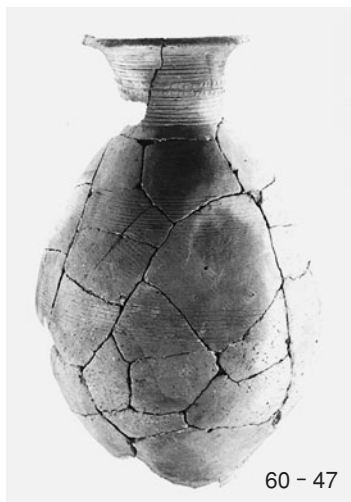


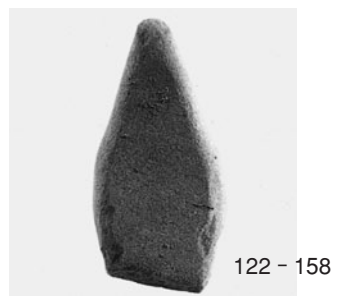
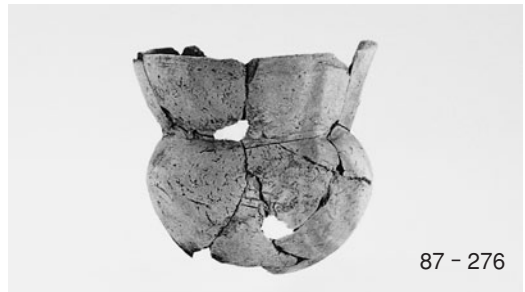
24 - 107

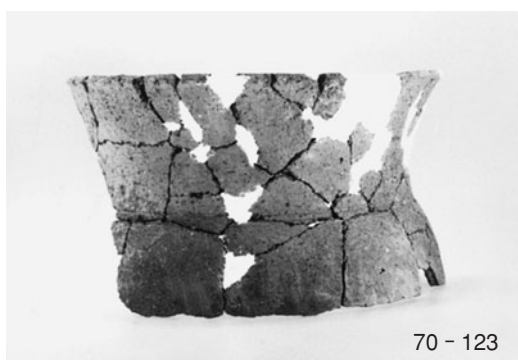
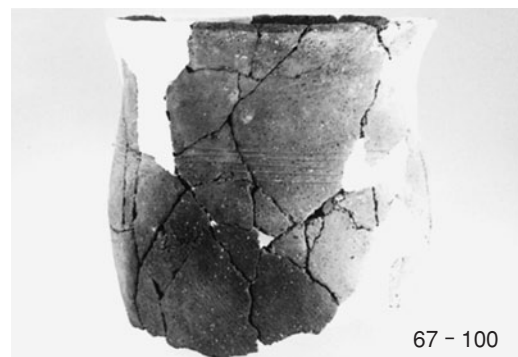
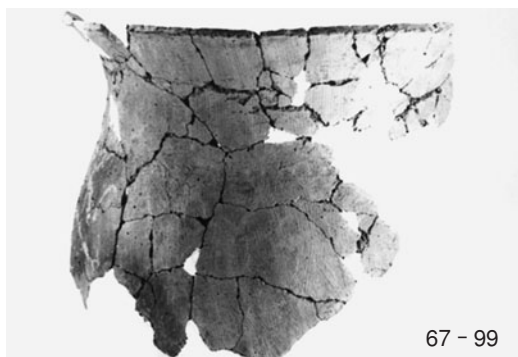
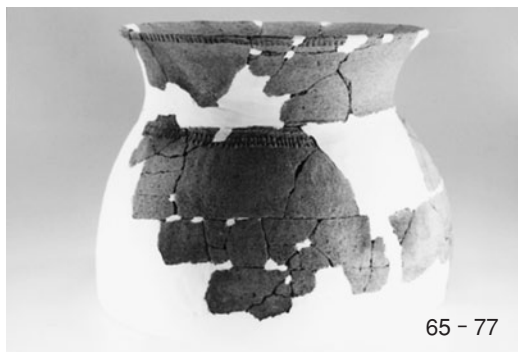
建築部村

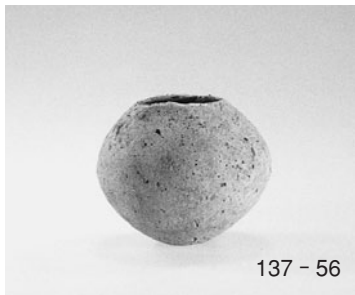
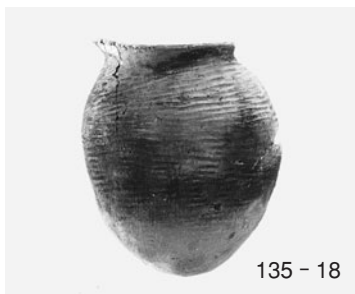


調査ⅡJ区 出土遺物（縄文晩期）









調査V区 SR501出土遺物 (甕・鉢・小型丸底壺・高杯・支脚)

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集

柳田遺跡

ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994・3

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
TEL 0888-64-0671

印刷 有限会社 飛鳥
高知市針木東町21-18
TEL 0888-44-6022